

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書
(2006)

2008. 3

大阪市教育委員会
(財)大阪市文化財協会

例 言

1. 本報告書は平成18年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. これらの調査は大阪市教育委員会の指導のもと、(財)大阪市文化財協会が、各原因者より委託を受けて実施したものである。
3. 本報告書の執筆は(財)大阪市文化財協会 南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護課において行った。

目 次

I 北 区

中之島4丁目所在遺跡発掘調査 (NX06-1) 報告書	3
中之島4丁目所在遺跡発掘調査 (NX06-2) 報告書	21

II 中央区

難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW06-1) 報告書	53
難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW06-2) 報告書	61
難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW06-3) 報告書	83
大坂城跡発掘調査 (OS06-1) 報告書	97
大坂城跡発掘調査 (OS06-2) 報告書	105
大坂城跡発掘調査 (OS06-4) 報告書	113
大坂城跡発掘調査 (OS06-5) 報告書	121
大坂城跡発掘調査 (OS06-6) 報告書	131
大坂城跡発掘調査 (OS06-8) 報告書	145
大坂城跡発掘調査 (OS06-9) 報告書	159
大坂城下町跡発掘調査 (OJ06-1) 報告書	171
大坂城下町跡発掘調査 (OJ06-2) 報告書	181
大坂城下町跡発掘調査 (OJ06-3) 報告書	199
大坂城下町跡発掘調査 (OJ06-4) 報告書	221
大坂城下町跡発掘調査 (OJ06-5) 報告書	229
大坂城下町跡発掘調査 (OJ06-6) 報告書	239

III 天王寺区

上本町南遺跡発掘調査 (US06-1) 報告書	251
上本町南遺跡発掘調査 (US06-3) 報告書	261
大道1丁目所在遺跡発掘調査 (DA06-1) 報告書	271

IV 浪速区

敷津遺跡発掘調査 (SX06-1) 報告書	283
-----------------------	-----

V 淀川区

宮原遺跡発掘調査 (MH06-2) 報告書	297
-----------------------	-----

VI 東淀川区

西淡路1丁目所在遺跡発掘調査 (WA06-1) 報告書	307
-----------------------------	-----

VII 阿倍野区

阿倍寺跡発掘調査 (AB06-1) 報告書	317
阿倍野筋北遺跡発掘調査 (AS06-3) 報告書	327

VIII 住吉区

南住吉遺跡発掘調査 (MN06-1) 報告書	347
南住吉遺跡発掘調査 (MN06-2) 報告書	355
山之内遺跡発掘調査 (YM06-1) 報告書	359

IX 東住吉区

桑津遺跡発掘調査 (KW06-1) 報告書	369
桑津遺跡発掘調査 (KW06-3) 報告書	381
難波大道跡発掘調査 (ND06-1) 報告書	391

北 区

埋藏文化財発掘調査(NX06-1)報告書

調査個所 大阪市北区中之島4丁目 1街区符号6・7
調査面積 130m²
調査期間 平成18年10月10日～11月1日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、田中清美

1) 調査に至る経緯と経過

調査箇所は江戸時代に各藩の蔵屋敷が建ち並んでいた中之島のほぼ中央部に位置しており、東方には広島藩蔵屋敷跡および久留米藩蔵屋敷跡が(図1)、西方にはなにわ筋を隔てて高松藩蔵屋敷跡などが位置している。中でも広島藩蔵屋敷跡では「船入」や主要な建物群をはじめ、江戸時代の蔵屋敷の実態を今に伝える多様な遺物が出土している[大阪市文化財協会2003・2004]。また、広島藩蔵屋敷の西隣にある久留米藩蔵屋敷の調査(HS97-2・98-2次調査)では18世紀から幕末にかけての整地層の上面で、礎石列・排水施設・廃棄土壌などが、下層でも火災に遭った礎石建物・土壌・溝が検出されている[大阪市文化財協会2003]。これらの遺構は久留米藩蔵屋敷の変遷過程のみならず、中之島に軒を並べていた各藩の大坂蔵屋敷の実態をも明らかにするための重要な資料になっている。また、大阪大学中之島センター建設に伴って大阪大学埋蔵文化財調査室による発掘調査が実施された久留米藩蔵屋敷跡でも、広島藩蔵屋敷との敷地境の溝や井戸などが検出されている[大阪大学埋蔵文化財調査室2003]。

当該地は元禄年間の絵図を基に作成された蔵屋敷の分布図では、久留米藩蔵屋敷の敷地内の一画であるが、1911(明治44)年に刊行された『大阪地籍地図』では、現在のなにわ筋に西面する常安町21～24番地に当たっている。

大阪市教育委員会による試掘調査でも地下約1～2.5mまでの間に複数の生活面が検出されたほか、

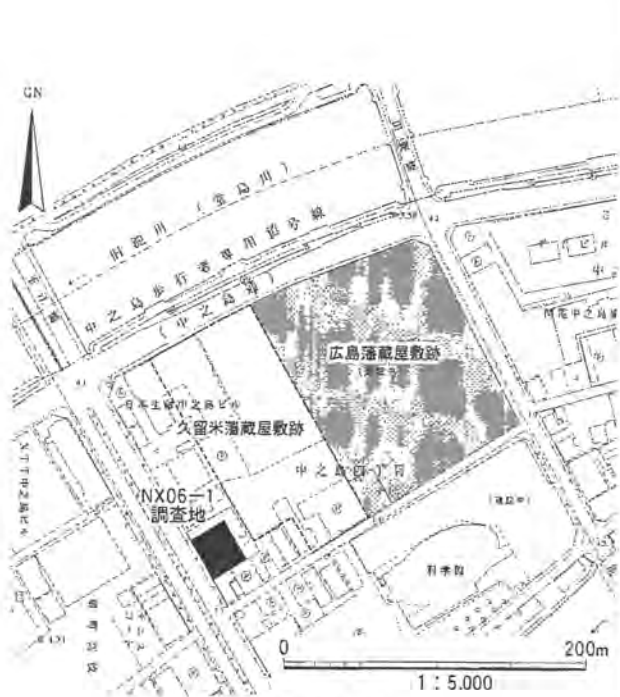


図1 調査地位置図

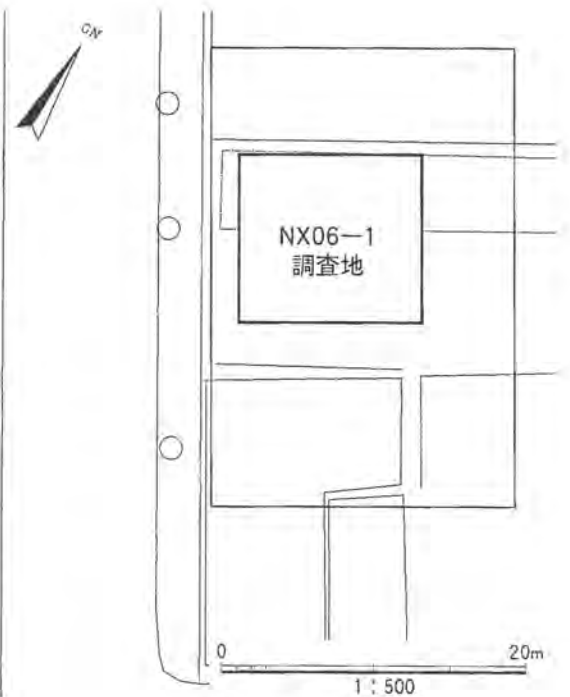


図2 調査区位置図

18世紀前葉から19世紀後葉にかけての陶磁器などの遺物が出土したことから、今回の調査が実施されることになった。

本調査は試掘調査の結果に基づいて、建設工事の影響を受ける範囲に限り、現地表面下約3.5m前後で確認されている自然堆積層の間において、3面の生活面についての記録を作成する運びとなった。なお、遺構の平面図および断面実測図をはじめ、地層断面実測図の作成については、一部を除いて株式会社文化財サービスによるオルソ写真実測システムによった。

10月10日に重機による掘削に着手し、第3層の上面まで掘下げた。10月11日から人力で第3層を掘削して、第4層の上面で礎石建物や石組溝・土塋などを検出した。10月16日に第4層上面で検出した礎石建物ほかの遺構群について、株式会社文化財サービスによる第1回目のオルソ写真撮影およびトータルステーションを使った基準点測量を実施した。10月17日に礎石建物の補足実測ののち、第4層を掘削して、10月19日には第5層の上面検出遺構群について、2回目のオルソ写真撮影を行った。10月20日から第5層の人力掘削に着手し、第6層上面で18世紀後葉頃の生活面を検出した。翌21日から遺構の調査を行った後、3回目のオルソ写真撮影ならび基準点測量を実施した。10月24日から第6層を人力掘削して、10月27日には第7層上面検出遺構群の4回目のオルソ写真撮影を行った。10月28日には第7層上面検出遺構の断面図の作成およびオルソ写真撮影の補足作業の後、現地表面下約3.5mまで重機で掘下げ、連続した層序の観察をするとともに、文化財サービスによる断面実測図用のオルソ写真を撮影した。10月30日から第8層上面まで掘削して、最終的な生活面および遺構の確認調査を行った。11月1日、北・東壁断面のオルソ写真に地層の岩相ほかを記入した後、調査箇所を埋戻して、現地におけるすべての調査を完了した。

本調査で使用した方位は座標北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、挿図中では $TP \pm 0m$ と記した。また、遺物の取り上げ、遺構実測の際の基準として、5mメッシュの地区割を行った。

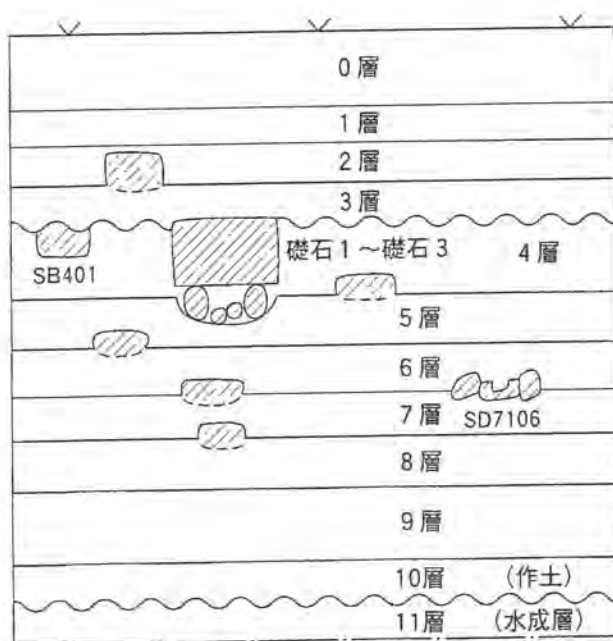


図3 地層と遺構の関係

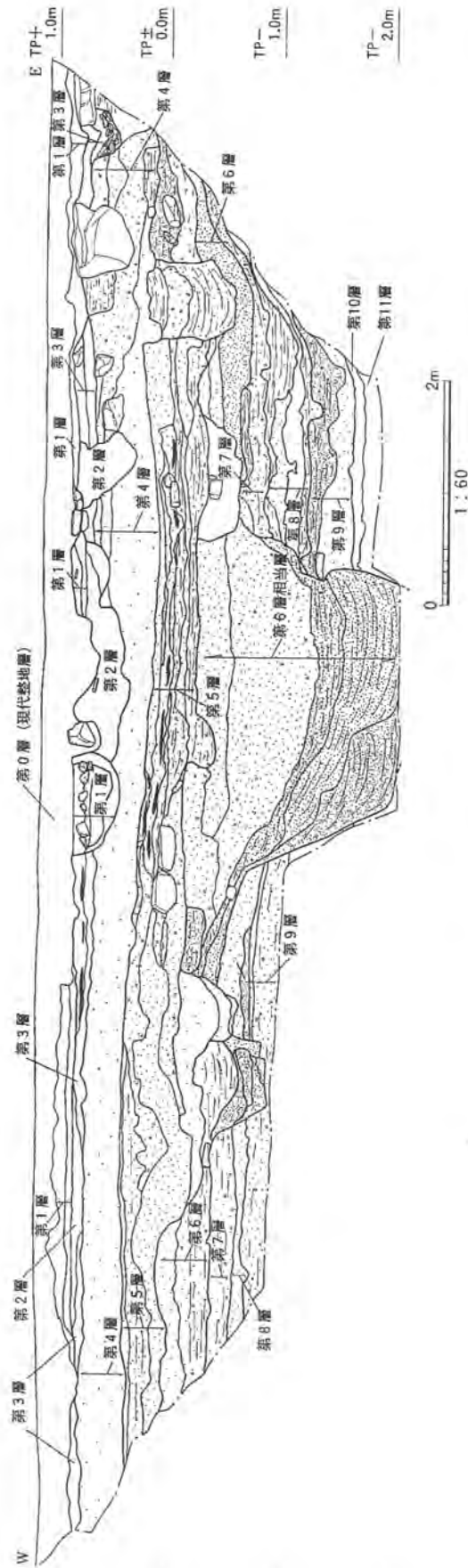
2) 調査の結果

i) 層序(図4)

本調査では東および北壁断面で層序の検討を行って、現代の整地層である第0層以下、第11層に至る各層を確認した。この内、平面的な発掘調査を実施したのは、第3～7層の上面で、これ以下についてはトレンチ調査によるものである。

第0層：コンクリート破細片を多量に含む現代の整地層で、層厚は20～50cmある。

第1層：暗オリーブ灰色砂礫混りシルトまたは褐色砂礫層で、層厚は10～20cmあり、大正から昭和の陶磁器やレンガ・タイル・焼け瓦を



- 第1層：暗オリーブ灰色砂礫混りシルト・褐色砂礫層
- 第2層：明褐色砂礫層(多量の瓦礫を含む焼土層)
- 第3層：黒褐～オリーブ黒色シルト混り細粒砂層
- 第4層：灰色砂礫・オリーブ褐色礫混り細粒砂・黄褐色細粒砂シルト(漆喰を含む)層
- 第5層：オリーブ褐色シルト・礫混り極細粒砂・黄褐～オリーブ褐色シルト混り細粒砂層
- 第6層：黄褐色シルト混り細粒砂・灰色砂礫・暗灰黄色礫混り細粒砂層
- 第7層：灰オリーブ色シルト・礫混り細粒砂層
- 第8層：灰オリーブ色礫・シルト混り細粒砂層
- 第9層：灰オリーブ色シルト混り細粒砂・オリーブ灰色シルト混り極細粒砂・オリーブ灰色砂礫層
- 第10層：黒褐色シルト・礫混り細粒砂層
- 第11層：オリーブ灰色シルト混り細粒砂層

図4 北壁断面実測図

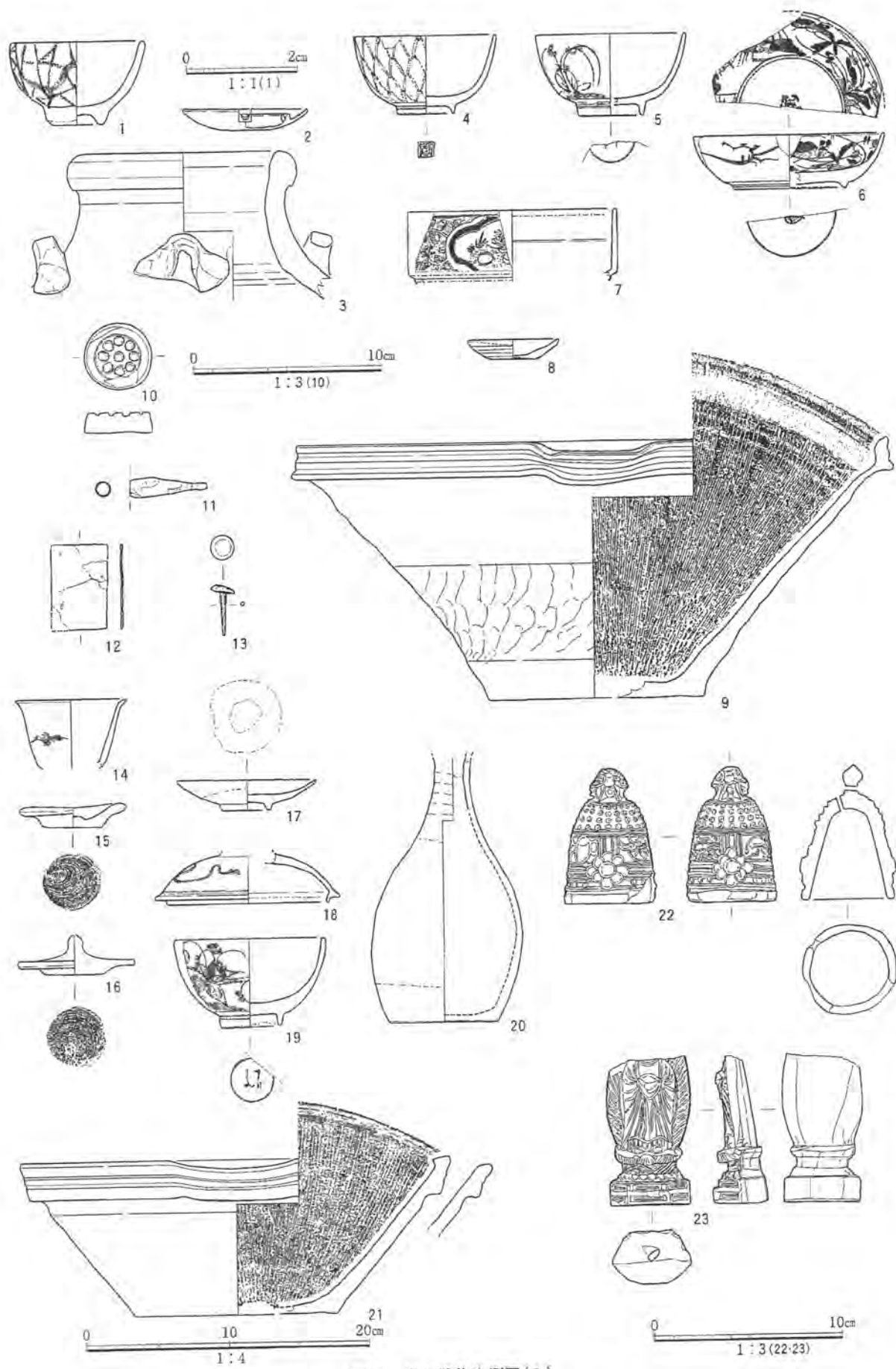


图5 出土遺物実測図(1)

第3層(1~3)、第4層(4~13)、第5層(14~16)、第6層(17~23)

多量に含む。

第2層：明褐色砂礫層および多量の瓦礫を含む焼土層で、戦災時の焼土層である。本層の層厚は10～20cmある。

第3層：黒褐～オリーブ黒色シルト混り細粒砂層で、層厚は20cm前後ある。本層は調査個所の北東部では上下2枚に分層された。

18世紀後半から19世紀前葉に属する肥前磁器碗・皿・ミニチュア染付碗1、肥前陶器碗・鉢、土師器灯明皿、丹波焼甕・播鉢、堺播鉢、軟質施釉陶器灯明皿、関西系陶器碗・皿・灯明皿2、珉平焼碗・皿・鉢、南蛮耳付壺3、瓦、寛永通宝、銅製煙管・銅製飾金具、鉄釘、骨製品などが出土した。

第4層：灰色砂礫・オリーブ褐色礫混り細粒砂・漆喰を含む黄褐色細粒砂層からなる盛土層で、礎石建物SB401の構築時に伴うものである。本層の層厚は40～60cmあり、上面の標高はTP+0.7～0.8mで、ほぼ平坦な面を成している。18世紀前半から19世紀前葉に属する肥前磁器染付碗4・5・染付皿6・色絵段重7、関西系陶器皿8、丹波焼播鉢9・甕・備前焼播鉢、泥面子10、瓦、キセル吸口11・銅製飾金具12・鋌13、寛永通宝などが出土した。

第5層：オリーブ褐色シルト・礫混り極細粒砂または黄褐～オリーブ褐色シルト混り細粒砂層で、層厚は40～60cmある。上面の標高はTP+0.1～0.4mであり、調査個所の西から東に向かって緩やかに傾斜しているが、これは下層で起こった地盤沈下の影響によるものであろう。本層の上部は暗色化しており、上面でSB401の礎石を据えた穴をはじめ、投棄土塊・礎石建物・井戸などが検出された。18世紀前葉から後葉に属する肥前磁器小杯14・染付碗・皿・青磁染付、肥前陶器碗、堺播鉢、備前焼播鉢、瀬戸美濃焼鉢、京焼碗、産地不明陶器蓋15・16、軟質施釉陶器灯明皿、土師器灯明皿・焼塩壺・焙烙、土製人形・泥面子の型・土製品型・土鈴(鳥)、瓦をはじめ、庖丁、青銅製おろし金、鉄滓、寛永通宝、アワビ・アカガイ・ハマグリなどが出土した。

第6層：黄褐色シルト混り細粒砂・灰色砂礫・暗灰黄色礫混り細粒砂から成る盛土層で、層厚は40～60cmある。本層の上面は暗色化しており、上面で18世紀前葉から後葉の肥前陶磁器を伴う多数の廃棄土塊・礎石・井戸などを検出した。上面の標高はTP±0m前後である。17世紀後葉から18世紀中葉に属する肥前陶器皿17・徳利20、肥前磁器染付蓋18・碗19、丹波焼播鉢21、ミニチュア土製品梵鐘22・仏像23、銅製煙管、寛永通宝などが出土した。

第7層：灰オリーブ色シルト・礫混り細粒砂層で、層厚は30～40cmある。本層の上面は暗色化しており、上面で表1に示したような廃棄土塊・井戸・礎石・石組溝などを検出した。17世紀後葉から18世紀前葉の肥前陶磁器をはじめ、備前焼播鉢・甕、常滑焼甕、瀬戸美濃焼筒形碗、丹波焼播鉢・甕、土師器灯明皿・焙烙、堺播鉢、瓦質土器、青銅製品、寛永通宝、骨製品、サザエなどが出土した。

第8層：灰オリーブ色礫・シルト混り細粒砂を10～20cm単位に整地した盛土層で、層厚は30～40cm前後ある。本層上面の標高は、TP-0.6～0.8mであり、調査個所の西部から東部にかけて傾斜していたが、これは下層と同様に地盤沈下によるものである。礎石列801および土塊SK802・803などは本層上面の遺構である。17世紀後葉から18世紀前葉に属する肥前磁器・肥前陶器・備前焼・堺(播鉢)・土師器・瓦質土器などが出土した。

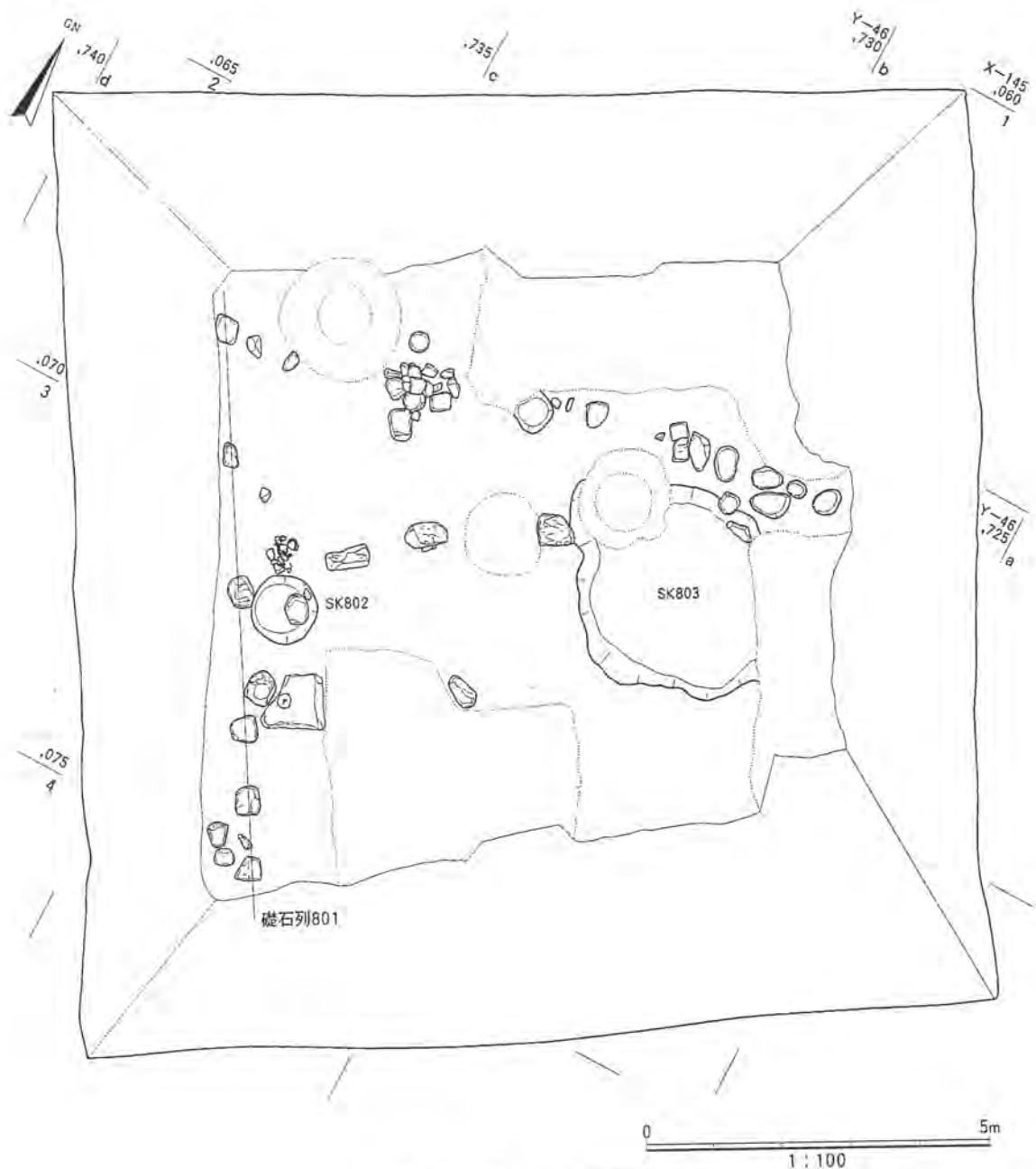


図6 第8層上面検出遺構配置図

第9層：灰オリーブ色シルト混り細粒砂・オリーブ灰色シルト混り極細粒砂・オリーブ灰色砂礫から成る盛土層で、層厚は40cm前後ある。本層の上面の標高はTP-1.2mあり、調査個所の中央部から東にかけて地盤が沈下していた。北壁の西部では本層の上面で、火災の痕跡が確認された。

第10層：本層は黒褐色シルト・礫混り細粒砂層で、層厚は約10cmある。本層は攪拌されていることから作土の可能性がある。上面の標高はTP-1.6mで、特に遺構は確認できなかったが、18世紀前葉の肥前磁器や土師器などの細片が出土した。

第11層：オリーブ灰色シルト混り細粒砂層はラミナが確認された水成層であり、本層以下が調査地域の自然堆積層と考えられる。層厚は約10cm以上ある。

ii) 遺構と遺物

a. 第8層上面の遺構と遺物(図6)

第8層の上面では礎石列や土塋をはじめ、調査区の北部から北東部にかけて本来建物の礎石ではないかと思われる扁平な石が検出されたが、礎石列801のように組み合うものは確認できなかった。また、第8層上面で検出した遺構の時期は、第7層の遺物や上下の層序を考慮すると18世紀の前半頃と考えられる。以下、性格の判明した遺構について報告する。

礎石列801 調査区の西部に位置する礎石列で、各礎石は現在のなにも筋に沿うように南北に並んでいる。礎石の間隔は南から北に向って1.0m、1.0m、2.0m、2.0m、1.9mを測ることから基準尺の最小単位は1尺(30.3cm)であったものと考えられる。礎石列の東側にはこれに組み合うような礎石が確認されないため、塋である可能性が高い。

SK802 礎石列801の中程に接するように位置する径約1.0mの円形の土塋である。深さは検出面から0.4m前後あり、埋土はオリブ褐色シルト混り細粒砂である。遺物は平瓦の破片が出土したのみである。

SK803 調査区の東部に位置する3.0m×3.0m以上の不整形な土塋で、深さは検出面から約1.4mある。埋土の主体は多量の漆喰のブロックを含む灰オリブ色礫混り細粒砂で、18世紀初頭の肥前磁器碗・青磁壺、丹波焼徳利、土師器灯明皿・焙烙などが出土した。なお、本土塋は上層のSK756と切合うことや地盤沈下の影響を受けているため、輪郭は不明瞭であった。

b. 第7層上面の遺構と遺物(図7・8)

第7層の上面では表1にまとめたような廃棄土塋や井戸をはじめ、石組溝・刻印のある石材・礎石などが検出されたが、1棟の礎石建物としてまとまるものは確認されなかった。以下主要な遺構・遺物について報告する。

SK751 2b区に位置する0.7m×0.9m以上の隅丸方形の廃棄土塋である。深さは検出面から0.5m前後あり、埋土はオリブ黒色シルト混り細粒砂で、18世紀前葉に属する土師器灯明皿99・100、鉄釉を施した肥前陶器壺101・京焼風陶器、肥前磁器染付蓋102・碗103などをはじめ、肥前青磁香炉、土師器焙烙、鉄釘などが出土した。

SK754 2b区の井戸SE7118に遺構の約半分を掘込まれた1.2m×0.9m以上の楕円形の廃棄土塋で、深さは検出面から約1.5mある。埋土はオリブ黒色シルト混り細粒砂・暗灰黄色シルト混り細粒砂で、18世紀前葉の肥前陶器刷毛目碗86・二彩唐津鉢85、18世紀前葉の肥前磁器染付香炉87・皿88・碗89・96・98・小杯95、18世紀中葉の猪口94・18世紀の肥前陶胎染付香炉93、18世紀の土師器焙烙84・91・堺搦鉢92をはじめ、華南三彩鉢90の細片が出土した。

SK759 2c区に位置する溝状の土塋で、幅0.5m前後、長さ約2.0mあり、遺構の南端部が石組溝SD7106につながることから、溝の掘形の可能性がある。埋土は暗灰黄色シルト・礫混り細粒砂で、肥前磁器、土師器灯明皿82、備前焼搦鉢83、丹波焼甕、瀬戸美濃焼天目碗、土師器焙烙など、18世紀前葉から中葉に属する遺物が出土した。

SK783 2b区に位置する土塋で、中央部以北を土塋SK7105に掘込まれている。深さは検出面から

表1 第7層上面検出主要遺構

遺構番号	地区	形態(平面形)	規模(m)	埋土
SK751	2b	隅丸方形	0.7×0.9以上	オリーブ黒色シルト混り細粒砂
SK754	2b	楕円形	1.2×0.9以上	オリーブ黒色シルト混り細粒砂・暗灰黄色シルト混り細粒砂
SK756	2a~2b	楕円形?	3.8×4.4	オリーブ褐色シルト混り砂礫(漆喰を多量に含む)
SK758	2c	楕円形	0.5以上×0.7	オリーブ褐色シルト混り細粒砂
SK759	2c	長方形	0.5×2.0	暗灰黄色シルト・礫混り細粒砂
SK761	2b	円形	0.5×0.5	灰白色礫混り細粒砂
SK762	2b~3b	小判形	0.4×0.7	灰白色礫混り細粒砂
SK766	3b	楕円形	0.6×0.9	オリーブ褐色シルト混り細粒砂
SK767	3b	楕円形?	0.4×0.4以上	にぶい黄色細粒砂
SK768	2b~3b	円形	0.5×0.5	オリーブ褐色シルト混り細粒砂
SK771	2b	楕円形	0.3×0.4	灰オリーブ色シルト混り細粒砂~にぶい黄色極細粒砂質シルト
SK776	2b	楕円形	0.6×0.8	オリーブ褐色シルト混り細粒砂
SK779	1b~2b	隅丸方形	0.7×0.7	灰色シルト礫混り細粒砂
SK781	2b	楕円形	0.6×0.7	オリーブ褐色粘土質シルト・オリーブ褐色シルト混り細粒砂
SK783	2b	円形?	0.4× α	黄灰色細粒砂
SK784	2b	楕円形	0.6×0.8	黄褐色シルト混り細粒砂・オリーブ褐色シルト混り細粒砂・にぶい黄色細粒砂
SK785	1b~2b	楕円形	0.7×0.8	暗灰黄色シルト混り細粒砂・黄灰色シルト混り細粒砂・オリーブ褐色シルト混り細粒砂
SK786	1b	円形	0.6×0.7	灰色シルト混り細粒砂(瓦を多量に含む)
SK792	3b	楕円形	0.8×1.1	オリーブ黒色シルト・礫混り細粒砂
SK793	3b	楕円形?	0.7×0.8以上	オリーブ褐色シルト混り細粒砂
SK7105	1b	楕円形?	0.8×0.9	オリーブ褐色シルト混り細粒砂
SK7112	3a	不整形	0.6×0.8	にぶい黄褐色シルト混り細粒砂
SK7115	3a	楕円形	0.5×0.4	黄灰色シルト混り細粒砂
SK7119	3a	小判形?	0.5×0.9	にぶい黄褐色シルト混り細粒砂(漆喰を多量に含む)
SK7124	1b		3.0× α	オリーブ褐色礫混り細粒砂・シルト偽礫含む灰オリーブ礫混り細粒砂・ 灰オリーブ色細粒砂混りシルト・灰オリーブ色極細粒砂混りシルト
SD7106	2b~3b		(幅0.2、深さ0.1)	オリーブ褐色シルト混り細粒砂(炭片を多く含む)
SE7118	2b	楕円形	1.2×1.8	黄褐色シルト混り細粒砂・オリーブ褐色シルト・礫混り細粒砂・ 黒褐色細粒砂(炭を多量に含む)

0.2mあり、埋土は黄灰色の細粒砂である。18世紀中葉の肥前磁器碗、土師器灯明皿81などが出土した。礎石の抜取り穴の可能性はある。

SK792 3c区に位置する0.8m×1.1mの楕円形の廃棄土壌で、深さは検出面から0.6m前後ある。埋土はオリーブ黒色シルト・礫混り細粒砂で、肥前陶器鉢・肥前磁器碗・小杯80・徳利・小型壺・青磁香炉79、備前焼播鉢、軟質施釉陶器、土師器灯明皿、土製人形、銅板、寛永通宝など、18世紀前葉から中葉に属する遺物が出土した。なお、本土壌の周囲にあるSK789・793・794なども埋土や出土遺物の様相が酷似していることから、これらの廃棄土壌は短期間に連続して掘込まれたものと考えられる。

SK7124 1b区の北壁際で検出した幅約3.0m、深さ約1.5mの大型の廃棄土壌である。埋土は上層のオリーブ褐色礫混り細粒砂、中層のシルト偽礫を含む灰オリーブ色礫混り細粒砂および灰オリーブ色細粒砂混りシルト、下層の灰オリーブ色極細粒砂混りシルトであり、中・下層は多くの炭片を含む。中層から17世紀前葉の肥前陶器徳利が、多量の有機物を含む下層から18世紀前葉から中葉に属する

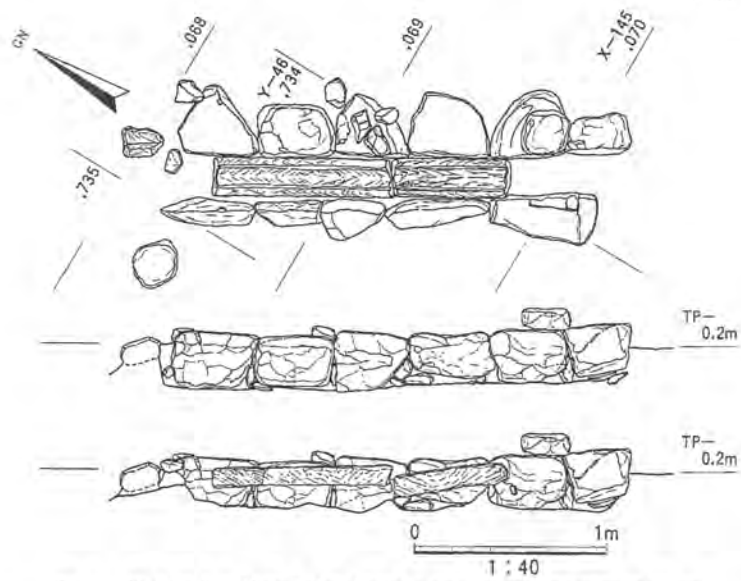
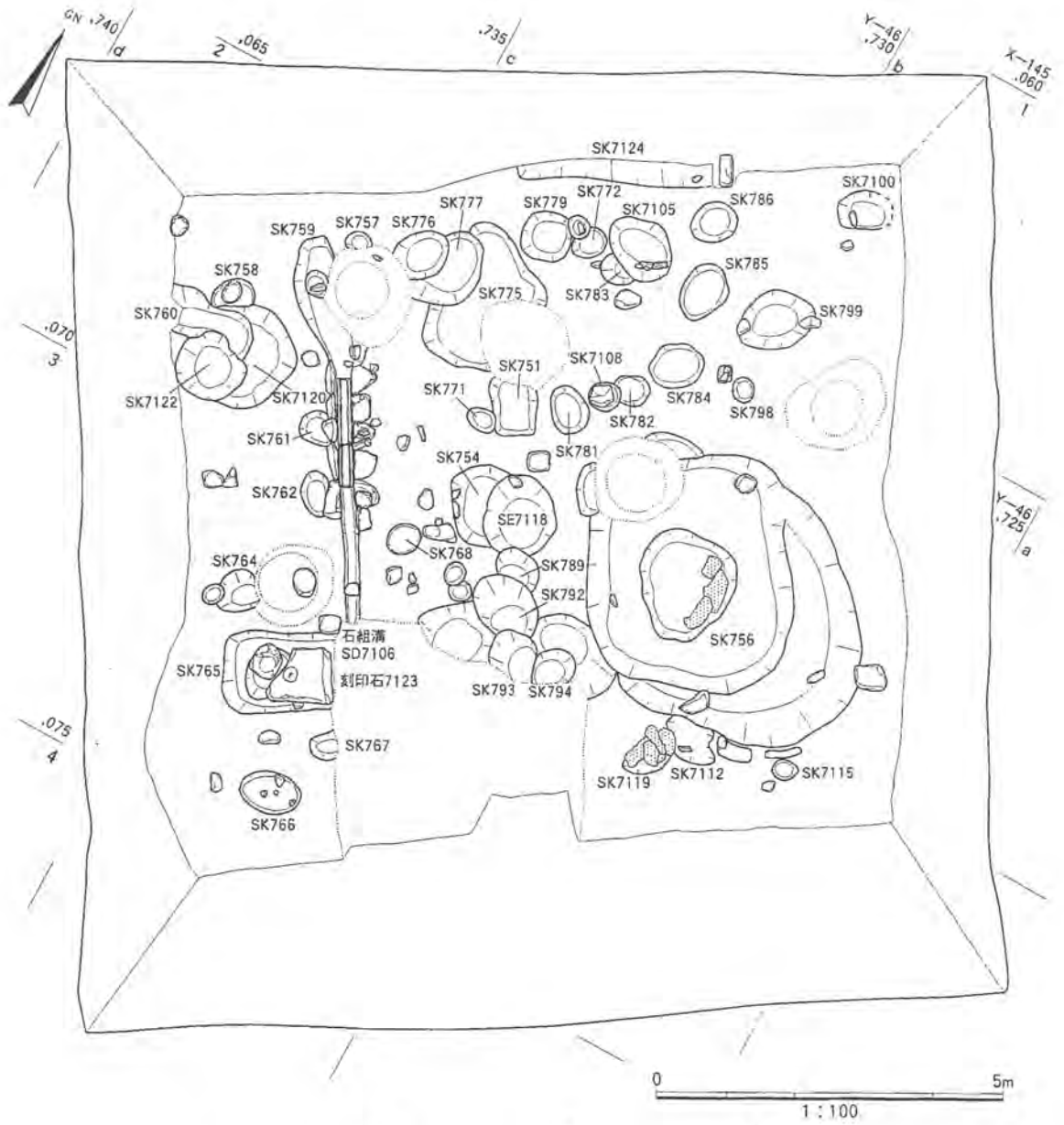


図7 第7層上面検出遺構配置図(上図)・SD7106実測図(下図)

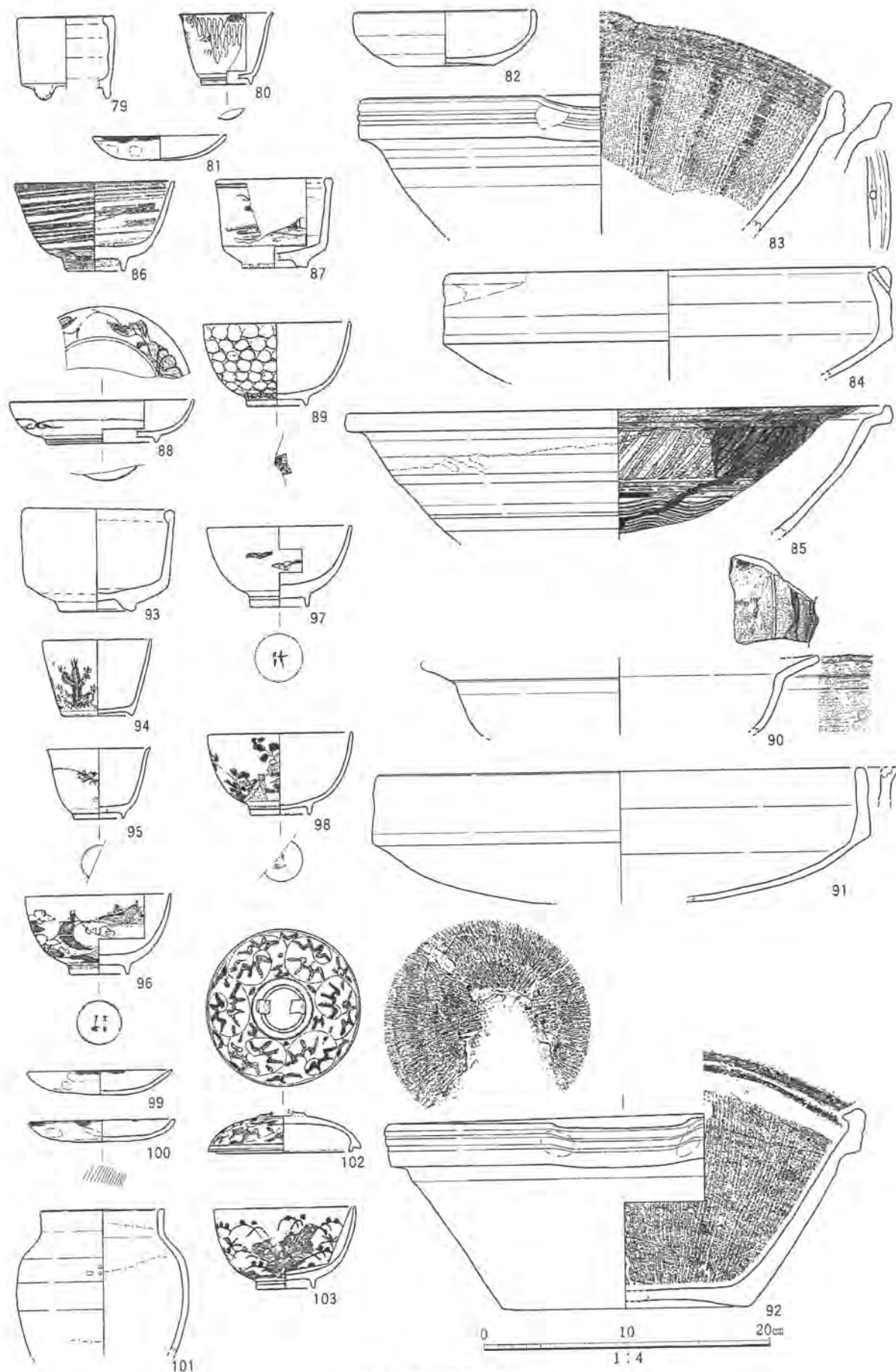


图8 出土遗物实测图(2)

SK792(79·80)、SK783(81)、SK759(82·83)、SK754(84~98)、SK751(99~103)

肥前磁器をはじめ、多数の薄板の断片が出土した。

SD7106 2b～3b区に位置する幅0.2mを測る石組溝で、方向は現在のなにわ筋に平行している。溝は第7層の上面に石材を幅0.2m幅に設置した後、U字形に中央を刳抜いた長さ約0.8mの石材を並べている。石組みの南側には長さ約2mほど、この石材を抜取った痕跡である幅約0.2mの溝があった。溝内には上層の盛土であるオリーブ褐色シルト混り細粒砂が見られた以外、溝が機能したことを示す堆積物は確認されなかった。

SE7118 2b区に位置する径約1.2mの井戸である。検出面から深さ約1.5m掘下げて井戸側の有無を確かめたが、井戸側と判断されるものは見られなかった。埋土は黄褐色シルト混り細粒砂およびオリーブ褐色シルト・礫混り細粒砂で、17世紀末葉から18世紀後葉の肥前磁器碗・皿、肥前陶器碗・内野山系皿・鉢、土製品などが出土した。井戸の出土遺物中には18世紀後葉の遺物が混っていることから第6層上面の遺構の可能性はある。

刻印石7123 3b区の土壌SK765に収まったような状態で出土した幅77cm×95cm、厚さ約40cmを測る花崗岩製の石材で、上面に㊦の刻印がある。石材の裏面には幅6～9cmの矢穴が見られる。同様な刻印のある花崗岩の石材が調査地の現代攪乱の中から出土していることから、調査地には少なくとも2個体の㊦の刻印の入った石材が運ばれたようである。刻印石7123の用途については建物の礎石と思われるが、周囲にこれと関係するような礎石は見られなかった。

以上、第7層の上面で検出した主要な遺構と遺物について記述したが、礎石建物が確認されないこと、表1に示したような多くの廃棄土壌が存在することをはじめ、石組溝も解体されたような状態で検出されたことを考慮すると、今回検出した本層上面の遺構は、建物などを移転した際に残されたものであろう。

c. 第4層上面の遺構と遺物(図9～11)

第4層上面では礎石建物SB401・礎石1～礎石3・溝SD402・土壌SK403～415ほかの遺構群が検出されたが、後世の遺構の掘込みや現代の攪乱を受けて残りが悪かったので、ここでは性格の判明した遺構についてのみ記述する。

SB401 調査個所の北部で検出した礎石建物である。12個の石列で、中に3基の礎石がある。礎石の間隔は一間(1.8m)で、礎石の上には一辺約1尺の方形の火を受けた柱の痕跡が認められた。また、礎石の構築順序であるが、柱痕跡の見られる礎石を第4層中に等間隔に据えた後、シルト混り細粒砂を礎石の設置面から約0.1m入れて面を整え、3個単位の石材を礎石間に並べて礎石を固定している。したがって、SB401の構築面は第4層内ということになる。礎石列の西端にも北側に小ぶりの礎石があることから、ここから北に向って礎石列は曲がるものと復元したが、東側については攪乱されており確定しがたいが、礎石の並びからみて礎石列はさらに東に延びるものと考えられる。

礎石1～礎石3 SB401の南約2.2m離れて東西方向の大型の礎石列である。礎石1と礎石2はともに火災に遭っており、上面に一辺約1尺の方形の柱痕跡があり、この間の距離は約4.0mを測る。また、礎石1の北側には約2.8m離れた位置に礎石の抜き取り穴とみられるものがあることから、礎石列はSB401に沿って北に曲がる可能性がある。礎石3の東側については調査範囲外のため明らかでないが、

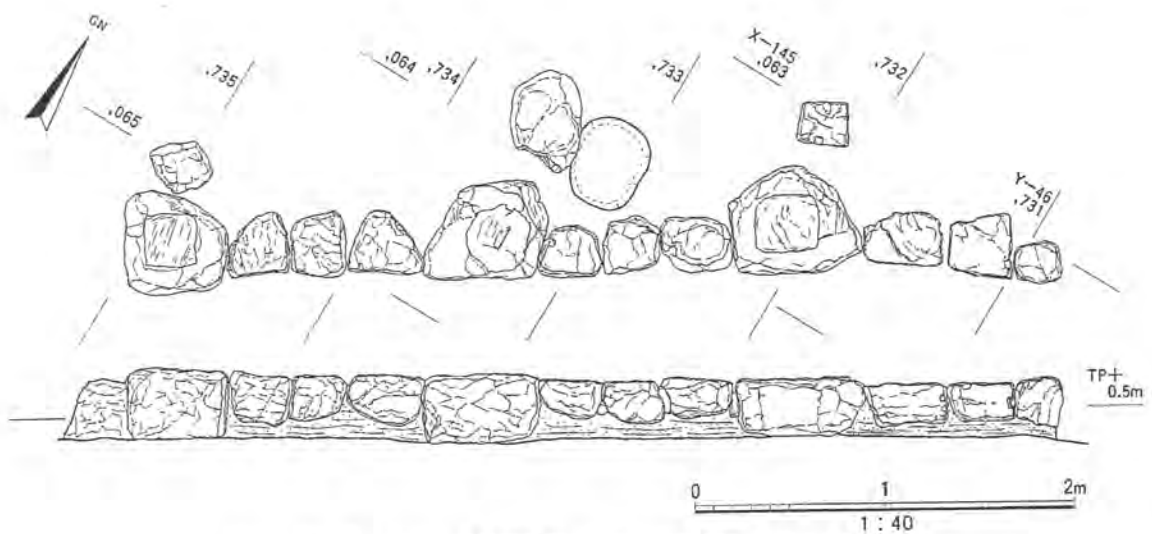
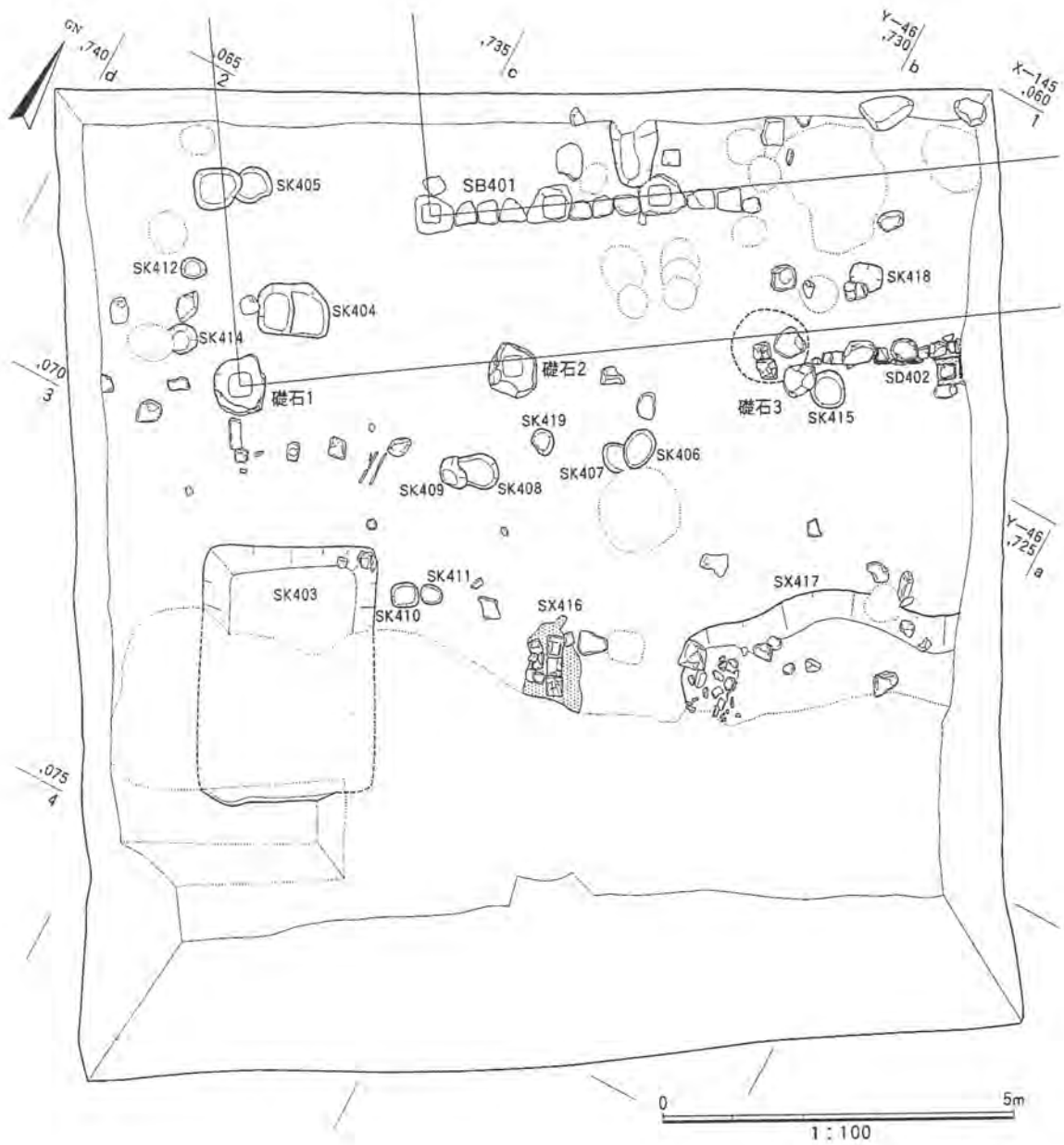


图9 第4層上面検出遺構配置図(上図)・SB401礎石列実測図(下図)

SB401と同様にさらに東に延びるものと思われる。なお、礎石1～礎石3は第5層を掘込んで根石を並べ、大型の礎石を設置した後、第4層で整地している。礎石の上面のレベルはTP+0.65～0.75mあり、SB401の礎石のレベルと変わらない。

2c区の第4層直上において「閣瓊」と墨書された幅約15cm、高さ9.0cm、厚さ2.5cmの結晶片岩の礫117が出土した。2b区の第4層中から出土した18世紀前葉に属する肥前磁器染付輪花皿115は焼継ぎされており、高台内には「淀屋」と鉛ガラスで描かれている。同文の皿116もあり、何枚かセットで19世紀まで使われていたと思われる。ほかに、肥前青磁香炉筒碗113・陶器片口鉢114などの18世紀後葉から19世紀前葉の肥前磁器や関西系陶器などが出土した。以上のことから礎石建物SB401と礎石1～礎石3は相互に関連した施設であったことは疑いないが、後者の性格については明らかでない。

SD402 礎石1～礎石3に平行して構築された石組溝である。溝の南側は後世の攪乱によって残っていなかったが、幅は約0.4mあったようである。北側の石の並びの間には水漏れを防ぐための漆喰を塗っていたほか、東壁際には竜山石を使った枅組があった。構内の一部に水漬きのオリーブ灰色のシルト混り細粒砂が堆積していたことからSB401や礎石1～礎石3の排水施設と考えられる。なお、本溝の西端は石および平瓦を埋込んで塞いでいることから、石組溝は南に折れ曲がっていた可能性がある。

SK403 礎石1の南約2.0m離れて位置する東西2.5m、南北3.5mの長方形の土壙で、深さは検出面から0.8mある。遺構の中央部は大きく攪乱されていたが、深さ約0.9mの掘形内に幅約0.1mの平瓦を漆喰で塗り重ねた後、壁の内側および底となる部分を漆喰で仕上げ塗りしており、その構造は広島藩蔵屋敷跡で検出された水溜に酷似していることが判明した。埋土はにぶい黄橙色細粒砂で、瀬戸美濃焼茶入118・瀬戸美濃焼織部筒形碗119、丹波焼徳利120・121、肥前磁器碗122・123・蓋付鉢124・青磁染付鉢125など18世紀後葉から19世紀前葉に属する陶磁器をはじめ、銅線126が出土した。この内、丹波焼徳利に白泥で「淀屋中之嶋千六百八」・「淀屋中之島二千三十一番」と描かれたものをはじめ、先述した鉛ガラスで描かれた「淀屋」名のある肥前磁器染付輪花皿115は、19世紀の前葉に調査地に後述するような屋号が「淀屋」と呼ばれた町人が居住していたことを示すものといえるだろう。

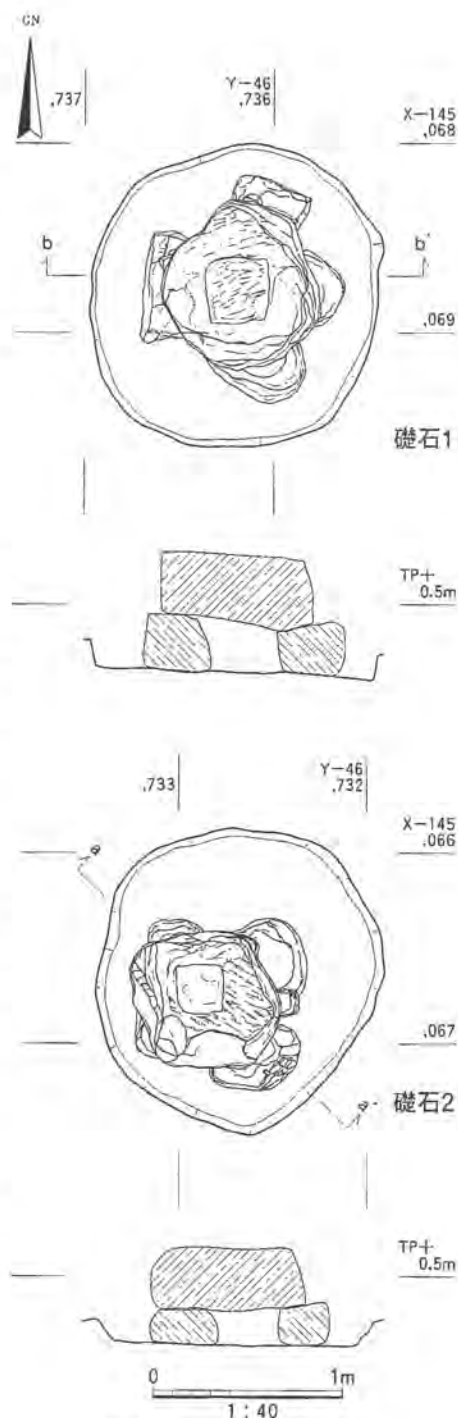


図10 礎石1・2実測図



图11 出土遺物実測図(3)
SB401(113~117)、SK403(118~126)

SX416 2b～3b区に位置する平瓦を漆喰で塗り固めた遺構であるが、南側を攪乱されており性格は明らかにできなかった。

SX417 2a区に位置する落込みで、石材や瓦片が投棄されたような状態で出土した。埋土はにぶい黄褐色シルト混り砂礫で、19世紀前葉とみられる関西系陶器や肥前陶磁器の細片をはじめ、アワビ・ハマグリが出土している。

以上のほかにも、調査区北東部や北西部において1.0m間隔に並ぶ礎石列を確認したが、建物としてはまとまらなかった。

3)まとめ

今回の発掘調査では既述したように7面の生活面を確認したが、この内、最初の人活動が認められたのは、TP-1.6mで確認された17世紀末葉から18世紀前葉の遺物を含む第10層の作土であった。本層は調査地の東方にある広島藩蔵屋敷跡の基本層序の第6層に相当するものとみられるが、第6層の年代は徳川初期(17世紀前半)との報告もあり、年代は一致していない[大阪市文化財協会2004]。また、久留米藩蔵屋敷側の最初に人の手が加わった地層として認定されている第4e層(整地層・作土層)は、年代が17世紀後半から18世紀前半代とされているので、第10層の年代と変わらない[大阪市文化財協会2003]。いずれにせよ、本調査地の第10層から上の地層はすべて人工的な盛土あるいは整地層であったが、これは広島藩蔵屋敷・久留米藩蔵屋敷側と何ら変わらない。中之島地域の開発の具体的な状況を解明するためには、自然堆積層上の最初の人間活動がどの地層から始まったか、その後の変遷を含めて、今後とも検討を加える必要がある。

次に注目されたのは第8層上面の礎石列801、第7層上面の溝SD7106、第4層上面のSB401・礎石1～礎石3の方位の問題である。いずれも現在のなにわ筋の方向に平行していることが確認されたが、これは調査地の地割に規制されている結果と考えられた。調査地域が描かれた江戸時代の絵図の中で1701(元禄14)年にまとめられた大坂三郷町絵図は著名な絵図で、これには東西の道路に挟まれた敷地の中に東から広島藩蔵屋敷・久留米藩蔵屋敷、次いで久留米藩の西側に南北方向の空地が描かれているが、上述した遺構の方位は空地の敷地境の方位と関連があるように思われる。第4層上面の遺構群が機能していた19世紀前葉の敷地は、1806(文化3)年および1863(文久3)年の絵図によれば南北通り(現在のなにわ筋)に東西通りが交わる角地に近い場所に位置していたようである[長友朋子2003]。

一方、第4層の上面で検出した礎石建物SB401および礎石1・礎石2には1尺(30.3cm)柱の痕跡があったほか、礎石の大きさや柱の太さ、構築状況を考慮すると、かなりりっぱな建物であったと思われる。また、水溜SK403から出土した丹波焼徳利に描かれた「淀屋中之島千六百八」・「淀屋中之島二千三十一番」の解釈であるが、1839(天保10)年に刊行された『天保仁風便覧』に北組常安裏町住人淀屋忠次郎という人物が天保の飢饉に寄付をしたとの記載があることから、北組常安裏町の一画に当る調査地で検出した19世紀前葉の一連の遺構は、先述した淀屋忠次郎と係わりがあるように思われる(註1)。

以上、今回の調査成果は中之島4丁目地域の歴史を明らかにする上で基礎的な資料といえるが、今

後も久留米藩蔵屋敷や広島藩蔵屋敷を含めて調査地周辺の調査成果の蓄積と総合的な検討を行って、中之島4丁目所在遺跡の実態を明らかにしていきたい。

註

- 1)「閣環」および「淀屋」については、大阪城天守閣の宮本祐次・跡部信両氏をはじめ、大阪歴史博物館の相蘇一弘氏に資料調査時に文献を含めて有益なご意見をいただいた。

引用・参考文献

- 長友朋子2003、「大坂図と絵図屏風からみた大坂蔵屋敷－久留米藩蔵屋敷を中心として－」：『久留米藩蔵屋敷跡』大阪大学埋蔵文化財調査室、pp.77－89
- 大阪大学埋蔵文化財調査室2003、『久留米藩蔵屋敷跡』
- 大阪市文化財協会2003、『広島藩大坂蔵屋敷跡』Ⅰ
2004、『広島藩大坂蔵屋敷跡』Ⅱ

東壁北端部断面
(西から)



北壁中央部断面
(南から)



SB401の検出状況
(第4層最上部)
(東から)



SB401全景
(東から)



SB401礎石および
礎石 2 設置状況
(南から)



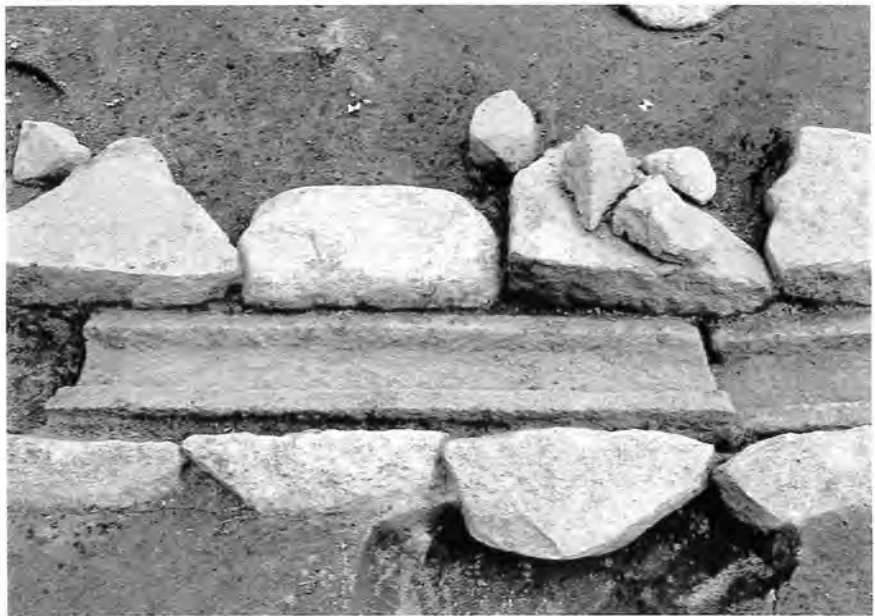
第5層上面検出遺構な
らびに礎石1～礎石3
設置状況
(東から)



第7層上面検出遺構全景
(南から)



石組溝SD7106細部
(西から)



刻印㊦のある刻印石
7123
(西から)



埋蔵文化財発掘調査(NX06-2)報告書

調査個所 大阪市北区中之島4丁目 1街区 符号8・9・10・11・
12・13・14
調査面積 760m²
調査期間 平成19年1月15日～3月20日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、田中清美

1) 調査に至る経緯と経過

調査個所は江戸時代に各藩の蔵屋敷が立ち並んでいた中之島のほぼ中央部に位置しており、東方には広島藩蔵屋敷跡や久留米藩蔵屋敷跡がある(図1)。広島藩蔵屋敷跡では船入り以外に御殿ほかの蔵屋敷の主要な建物群をはじめ、江戸時代の蔵屋敷の実態を今に伝える多様な遺物が出土している[大阪市文化財協会2003・2004]。また、広島藩蔵屋敷の西隣にある久留米藩蔵屋敷の調査(HS97-2・98-2次調査)では18世紀から幕末にかけての整地層の上面で、礎石列・排水施設・ゴミ穴などが、下層でも火災に遭った礎石建物・土壌・溝が検出されている[大阪市文化財協会2003・大阪大学埋蔵文化財調査室2003]。以上の遺構や遺物は広島藩蔵屋敷および久留米藩蔵屋敷地の変遷過程のみならず、中之島に軒を並べていた各藩の大坂蔵屋敷の実態を明らかにするための重要な資料になっている。また、調査個所の西隣には、19世紀初頭に属する「淀屋」銘入りの丹波焼徳利が出土した土壌、裏面に「淀屋」とガラス描きされた肥前磁器染付皿が出土した大型の礎石建物をはじめ、18世紀初頭を下限とする5面の遺構面が確認されたNX06-1次調査地がある。当地では大阪市教育委員会による試掘調査でも地下約1m~3.5mまでの間に複数の遺構面が確認されたことから、今回の調査が実施されることになった。

一方、元禄年間に作成された蔵屋敷の絵図では、調査地は久留米藩蔵屋敷の敷地内の南西部に当っており、その後、久留米藩の蔵屋敷の敷地が東に縮小された頃には現在のなにわ筋に延びる東西通りの北側に並ぶ区画の一画を占めている。また、調査地は1911(明治44)年に刊行された『大阪地籍図』全三編によれば、東西通りに南面する常安町36~38番地および大阪市立中之島幼稚園の敷地に当る。

本調査は建設工事の影響を受ける範囲に限り、敷地東部の360㎡(東区)と西部の400㎡(西区)とに二分し、前者は現地表下約1m前後の遺構面を、後者は同遺構面および下位にある遺構面を対象にして行った。なお、遺構の平面図の作成については一部を除き株式会社文化財サービスによるオルソ写真実測システムによった。また、掘削に際しては、現代整地層から第3層までを重機を用いて掘削し、第4層以下の各層は人力によって掘下げて、遺構・遺物の検出に努めた。

1月15日に東区の南部から重機による掘削に着手し、1月17日に第4層の上面まで掘下げて調査を行い、1月18日に第2層の基底面で確認

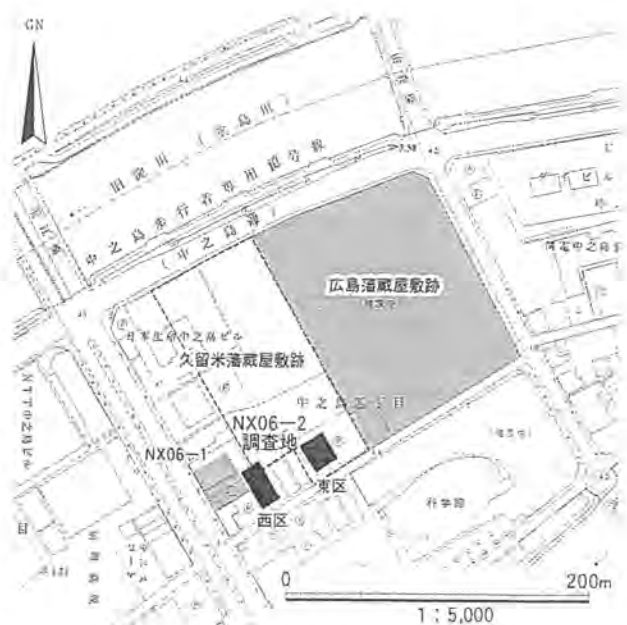


図1 調査地位置図

された布掘り溝内に人頭大の川原石を敷き詰めた建物基礎および第3層基底面の遺構などについて、文化財サービスによる第1回目のオルソ写真撮影を行った。調査地の中央部以西が現代の攪乱を受けていたため、おもな調査は調査個所の中央部以東で行い、1月19日～23日に残存する第4層を掘削した。引き続き第5層の上面で遺構検出を行い、南北方向の礎石建物や井戸、漆喰敷きの南北方向の通路などを確認した。1月24日には第5層上面の遺構の写真撮影および平面図作成用のオルソ写真の撮影と基準点測量を行った。1月25日から東・南壁地層断面実測図の作成および礎石建物下層の補足調査などをして、1月26日には東区の調査を終えた。

2月2日から西区の調査に着手して、南側から現代整地層以下第4層の上面までを重機で掘削した。2月5日まで、第3層基底面の土壌および第4層上面で確認した南北方向の石垣1・2の調査を行ったが、翌日から第4層の掘削と並行して、石垣の構築面の確認作業をした。2月9日に文化財サービスによる第5層上面の遺構および第4層準の石垣1・2のオルソ写真撮影と基準点測量を実施した。この間、2月7日には市立扇町高校の生徒・教員30名に対する現地見学会を行った。2月10日に第5層上面の遺構群および石垣1・2のオルソ写真を撮影し、第6層の上面まで掘削して、第5層の生活面に対応する石垣は、下層の第6層準の石垣の上に構築されていることが判明した。また、調査区の南部において、第5層の中ほどで被災した石垣ならびに大型の礎石建物が検出されたため、2月20日にオルソ写真撮影による図化作業を行ったほか、調査区の中央部以北の第6層を掘削して、石垣の下部および遺構面の確認をした。2月21日には調査区の北部において、第7層上面を基底とする石垣および礎石列を検出した。2月26日まで第7層上面の遺構を調査して、翌日にはオルソ写真撮影および基準点測量を実施した。3月1日から調査区の南部から第7層の掘削に着手して、3月8日までに第8層上面の遺構および石垣1の基底部の確認調査をした。この間、石垣1は第8層上面から掘込まれた布掘り溝内に最下段の石材を据えてから構築されていることを確認して、第8層上面の遺構の平面図、石垣の平面・側面・断面図作成用のオルソ写真撮影および基準点測量を行った。3月10日～3月16日まで南・東壁際に深掘トレンチを設定して、自然堆積層の確認と地層断面の記録および石垣の東西断面図の作成、構築状況の最終写真などを撮影した。

調査個所の埋戻しは3月16日から着手したが、これと併行して、石垣1の南延長部を確認した。3月20日には埋戻しおよび機材の撤収を完了した。

本調査で使用した方位は座標北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、挿図中ではTP±〇mと記した。また、調査個所を5mメッシュに地区割して、遺物の取り上げや遺構実測

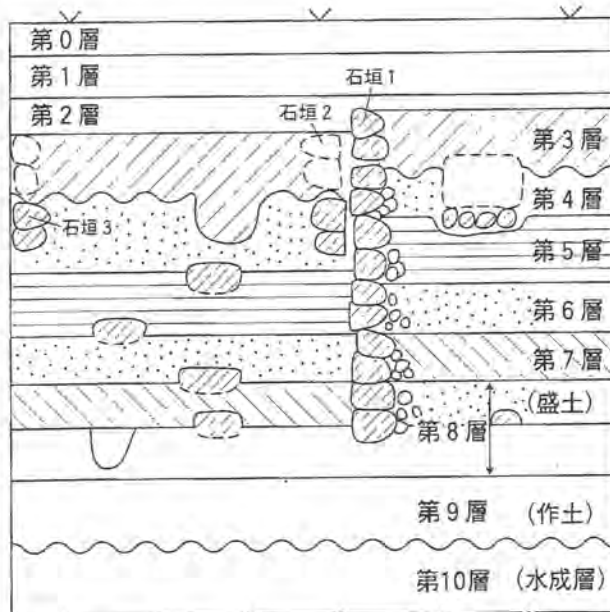


図2 地層と遺構の関係

の基準にした。

2) 調査の結果

i) 層序(図2～5)

本調査では東西両区の地層を検討して、現代の整地層である第0層以下に、第1層から第10層の基本層序を確認した。このうち、平面的な発掘調査を実施したのは、東区が第5層の上面、西区が第4～8層の上面であり、これ以下についてはトレンチ調査で確認した。本報告ではまず、東西両地区の第4層までの各層について記述した後、第5層以下については西区の東・南壁の層序について説明する。

第0層：コンクリート破片を多量に含む現代の整地層で、層厚は20～50cmある。

第1層：オリーブ褐色シルト混り砂礫層(東区)、暗灰黄～灰褐色礫混り細粒砂層、暗灰黄色礫混り細粒砂層(西区)などで、層厚は10～50cmあり、レンガ・焼け瓦を多量に含む。

第2層：オリーブ褐色砂礫混りシルト層(東区)、褐色砂礫混りシルト～明褐色シルト・礫混り極細粒砂層(西区)で、層厚は15～40cmある。本層はコンクリート片をはじめ、西区では多量のコークス滓や焼土・焼け瓦をはじめ、大正から昭和の陶磁器を含む。西区にある石垣1の頂部は本層中で確認された。

第3層：暗オリーブ褐色礫・砂混り細粒砂～にぶい黄色シルト混り砂礫層(東区)、にぶい黄褐色シルト混り極細粒砂～にぶい黄橙色シルト混り極細粒砂層(西区)で、層厚は10～35cmある。本層準の遺構は東・西両区共に第4層上面で検出されたほか、西区では石垣1が確認された。本層では18世紀後半～19世紀中葉に属する肥前陶磁器・瀬戸美濃焼陶磁器・関西系陶器・備前焼・丹波焼・萩焼・焼締陶器・青花・軟質施釉陶器・瓦質土器・土師器・土製玩具・瓦類・硯・砥石・青銅製品・寛永通宝・アワビ・アカニシ・ハマグリ・ヤマトシジミ・サザエなどが出土した。

第4層：浅黄色砂礫～黄褐色シルト・礫混り細粒砂層(東区)、黄褐色シルト混り極細粒砂～褐色砂礫層および黄褐色礫・細粒砂混りシルト～浅黄色砂礫層(西区)から成る整地層で、層厚は東区が50～80cm、西区が40～55cmである。西区では石垣1～3・礎石・埋甕・ゴミ穴などが検出された。西区の第4層は石垣1を境にして西側が東側より20～30cm高くなっている。肥前陶磁器・関西系陶器・瀬戸美濃焼磁器・丹波焼・備前焼・堺明石系播鉢・軟質施釉陶器・瓦質土器・土師器・青銅製品・鉄製品・骨製品・碁石・硯・砥石・ハマグリ・アカガイ・アワビ・イタボガキなどが出土した。

第5層：褐色砂礫混りシルト層(東区)、オリーブ褐色礫・シルト混り細粒砂層・漆喰を多く含むにぶい黄橙色礫・シルト混り細粒砂層から成る整地層で、層厚は40～60cmある。本層の標高は西区では石垣1の東側がTP±0m、西側がTP+0.3mで、石垣1を境にして西側が約30cm高い。本層の上部は暗色化しており、礎石建物や礎石の抜き穴をはじめ、ゴミ穴・井戸などが検出された。

18世紀前～後葉に属する肥前陶磁器・堺播鉢・備前焼・丹波焼・信楽焼・焼締陶器・瀬戸美濃焼陶器・京焼・関西系陶器・軟質施釉陶器・瓦質土器・土師器・土製玩具・青銅製品・鉄製品・鉄滓・土師器・瓦・寛永通宝・アワビ・ハマグリ・バイ・ヤマトシジミ・アカガイなどが出土した。

第6層：オリーブ褐～黄褐色シルト混り極細粒砂層および明黄褐色シルト混り極細粒砂～淡黄色砂礫層から成る盛土層で、層厚は45～60cmある。本層の上面は暗色化しており、ゴミ穴・礎石・井戸などを検出した。上面の標高は石垣1の東側がTP-0.5m、西側がTP+0.1mで、両者の高低差は60cm前後ある。

本層では17世紀中葉～18世紀中葉に属する肥前陶磁器・備前焼・堺播鉢・丹波焼・瀬戸美濃焼陶器・軟質施釉陶器・青花・ベトナム製陶器・土製玩具・鉄製品・寛永通宝・青銅製品・骨製品・角製品・砥石・硯・瓦・サングなどが出土した。

第7層：オリーブ褐～黄褐色シルト・礫混り極細粒砂層および褐色シルト混り極細粒砂～にぶい黄褐色砂礫層で、層厚は20～70cmある。本層の上面は暗色化しており、ゴミ穴・井戸・礎石などを検出した。上面の標高は石垣1の東側が約TP-1.0m、西側がTP-0.5m前後あり、西側が約50cm高くなっている。本層では17世紀中葉～18世紀前葉の肥前陶磁器・備前焼・瀬戸美濃焼陶器・丹波焼・堺播鉢・青花・中国製色絵・ベトナム製陶器・軟質施釉陶器・土製玩具・土製錘・土師器・瓦質土器・青銅製品・寛永通宝・骨製品・瓦などが出土した。

第8層：暗オリーブ色礫混り細粒砂～黄褐色シルト混り極細粒砂層および黄褐色シルト混り細粒砂層からなる盛土層で、層厚は50～80cmある。本層上面は暗色化しており、堀とみられる礎石列・礎石・ゴミ穴などが検出された。石垣1の最初の構築面は本層の上面であり、標高は石垣の東側がTP-1.4m前後、西側はTP-0.9m前後あり、後者は前者に比べて約50cm高い。

第8層では17世紀中葉～18世紀前葉に属する肥前陶磁器・青花・土師器・瓦質土器・寛永通宝・青銅製品・軽石・硯・瓦・木製品などが出土した。

第9層：オリーブ褐色シルト・礫混り極細粒砂を主体とする地層で、層厚は5～30cmある。本層上面の標高はTP-2m前後であり、ほぼ平坦な面を成す。下面に耕作痕跡とみられる凹凸が確認されたことから作土層と考える。17世紀中葉～18世紀前葉の肥前磁器・土師器をはじめ、瓦の細片を含む。

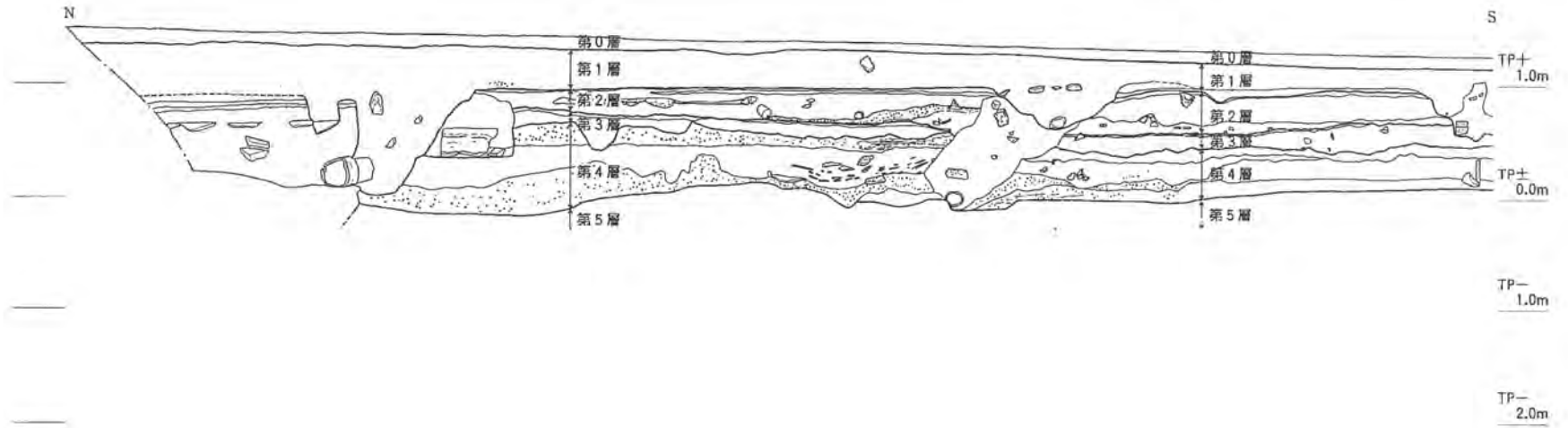
第10層：灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂層で、層厚は40cm以上ある。本層はラミナが観察された水成層であり、本層以下が調査地域の自然堆積層と考えられる。

3)遺構と遺物

本調査は東西両区に別れており、既述したように東区の平面的な調査は第5層までに限られたため、ここでは西区の調査成果から記述し、東区については西区の報告の後にする。

a. 西区第8層上面の遺構と遺物(図6・7・8・10)

西区の第8層の上面では石垣1や土壇をはじめ、建物の礎石などを検出したが、遺構の密度は上層と比較してやや少なかった。また、第8層の上部に包含された遺物の分布状況であるが、後述するように石垣1の残りがよかった3c・4b・5a・5b・6a・6b区では、肥前磁器白磁皿27・器表面に草花文が描かれた肥前磁器染付碗28・肥前陶器兵器手碗29・口縁部が水平に開く肥前陶器皿30などを含む17世紀中葉～18世紀前葉に属する肥前陶磁器や使用痕が顕著な硯31などが出土した(図8)。以下、主な遺構について報告する。



- 第0層：現代整地層
- 第1層：オリーブ褐色シルト混り砂礫層
- 第2層：オリーブ褐色砂礫混りシルト層
- 第3層：暗オリーブ褐色礫混り細粒砂～にぶい黄色シルト混り砂礫層
- 第4層：浅黄色砂礫～黄褐色シルト・礫混り細粒砂層
- 第5層：褐色砂礫混りシルト層
- 第6層：オリーブ褐色シルト混り極細粒砂層（上部10cmは暗色化している）
- 第7層：黄褐色シルト・礫混り細粒砂層
- 第8層：暗オリーブ褐色細粒砂シルト層（シルトの偽礫を含む）
- 第9層：オリーブ褐色シルト混り細粒砂層
- 第10層：灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂層

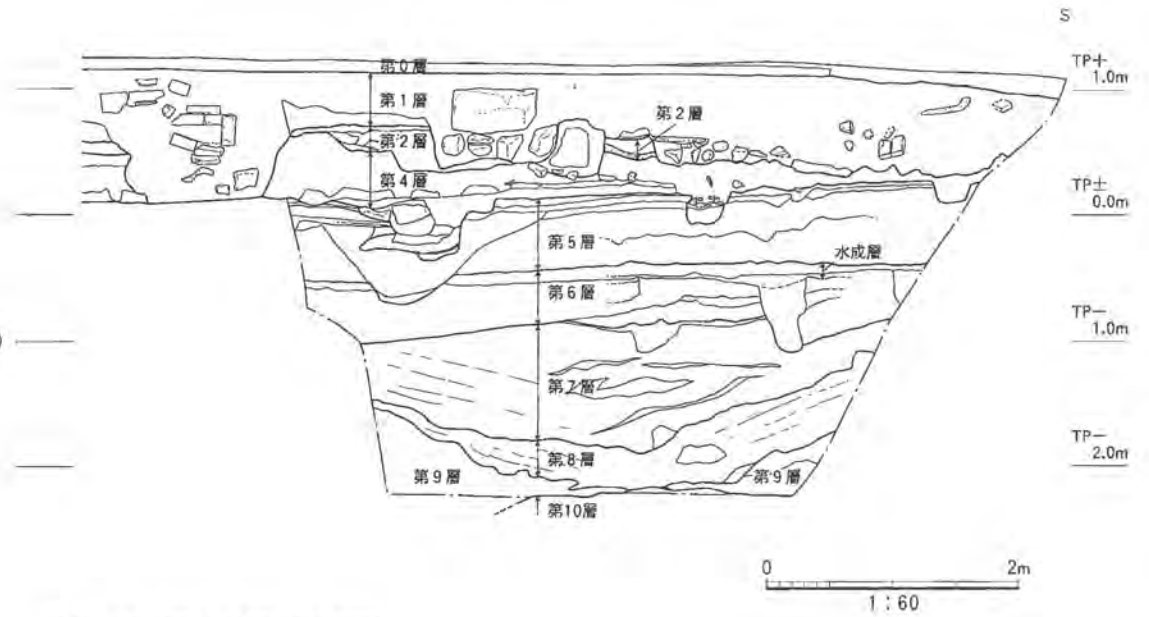
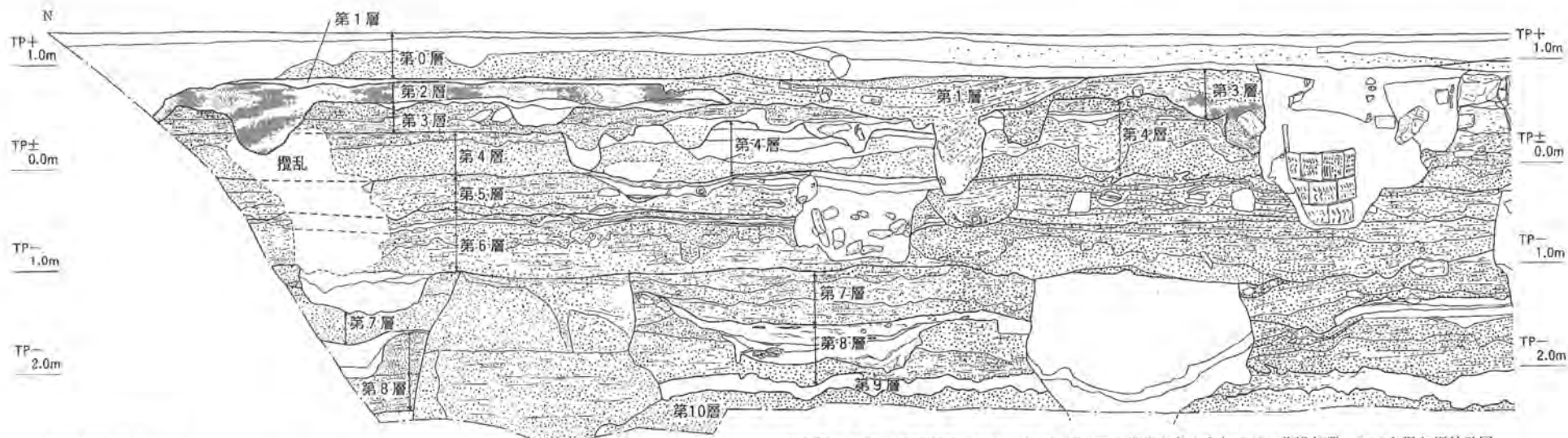


図3 東区東壁の地層断面実測図



第0層：現代整地層

第1層：暗灰黄～灰褐色礫混り細粒砂層、暗灰黄色礫混り細粒砂層

第2層：褐色砂礫混りシルト～明褐色シルト・礫混り極細粒砂層

第3層：にぶい黄褐色シルト混り極細粒砂～にぶい黄橙色シルト混り極細粒砂層

第4層：黄褐色シルト混り極細粒砂～褐色砂礫層および黄褐色礫・細粒砂混りシルト～浅黄色砂礫層

第5層：オリーブ褐色礫・シルト混り細粒砂層・漆喰を多く含むにぶい黄橙色礫・シルト混り細粒砂層

第6層：オリーブ褐～黄褐色シルト混り極細粒砂層および明黄褐色シルト混り極細粒砂～淡黄色砂礫層

第7層：オリーブ褐～黄褐色シルト・礫混り極細粒砂および褐色シルト混り極細粒砂～にぶい黄棕色砂礫層

第8層：暗オリーブ色礫混り細粒砂～黄褐色シルト混り極細粒砂層および黄褐色シルト混り細粒砂層

第9層：オリーブ褐色シルト・礫混り極細粒砂層

第10層：灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂層

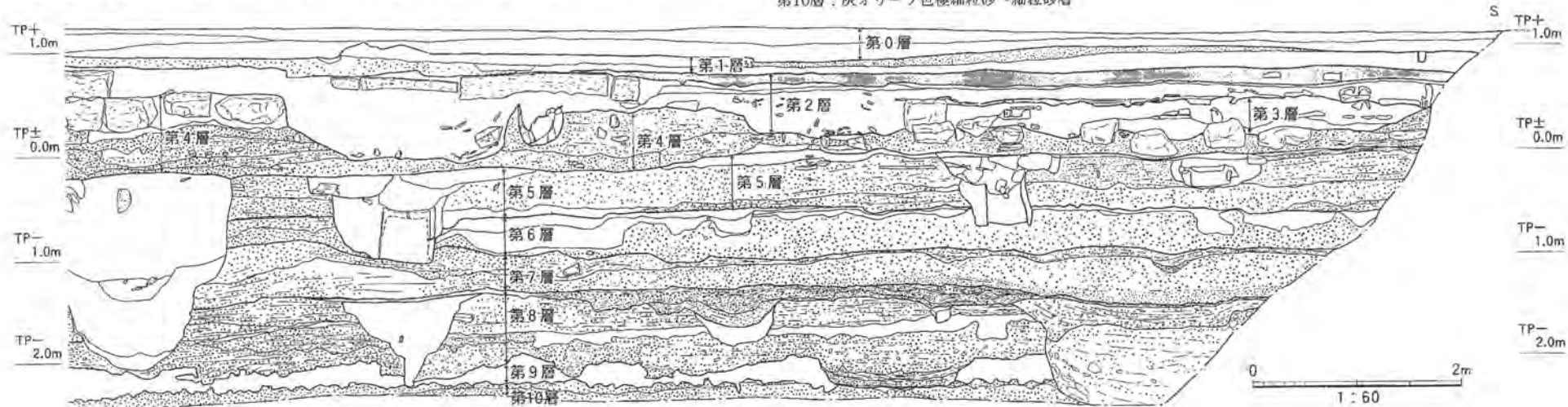
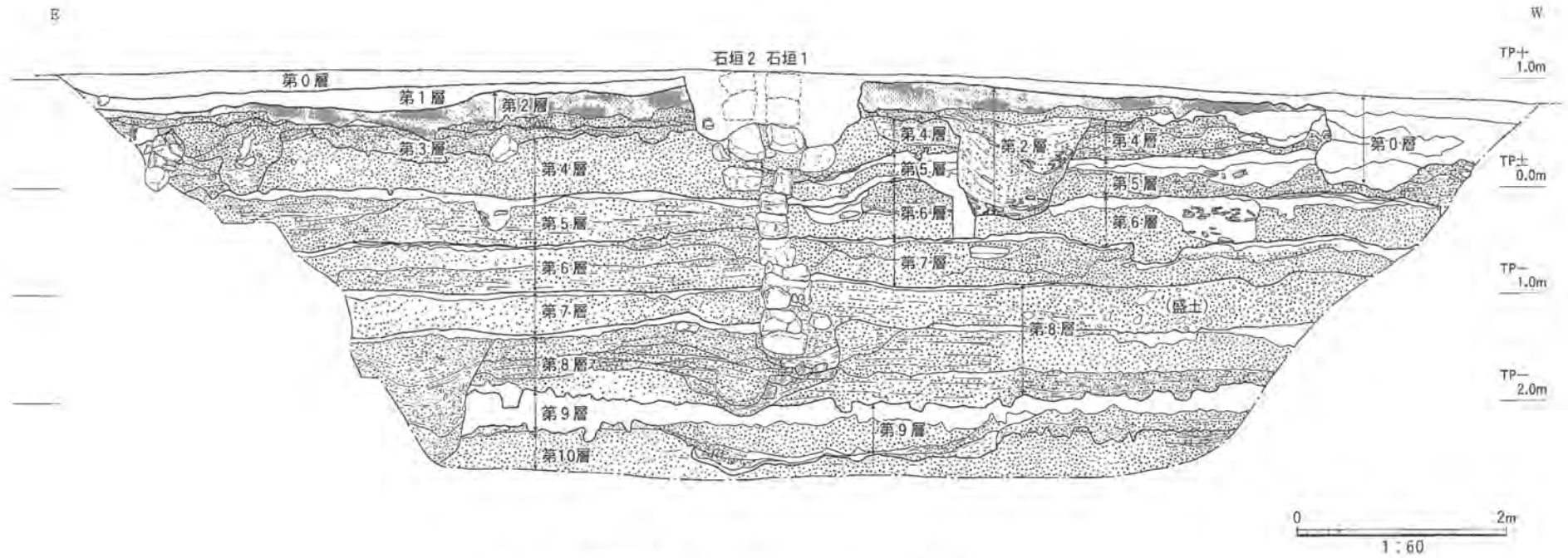


图4 西区東壁の地層断面実測図



- 第0層：現代整地層
- 第1層：暗灰黄～灰褐色礫混り細粒砂層、暗灰黄色礫混り細粒砂層
- 第2層：褐色砂礫混りシルト～明褐色シルト・礫混り極細粒砂層
- 第3層：にぶい黄褐色シルト混り極細粒砂～にぶい黄橙色シルト混り極細粒砂層
- 第4層：黄褐色シルト混り極細粒砂～褐色砂礫層および黄褐色礫・細粒砂混りシルト～浅黄色砂礫層
- 第5層：オリブ褐色礫・シルト混り細粒砂層・漆喰を多く含むにぶい黄橙色礫・シルト混り細粒砂層
- 第6層：オリブ褐～黄褐色シルト混り極細粒砂層および明黄褐色シルト混り極細粒砂～淡黄色砂礫層
- 第7層：オリブ褐～黄褐色シルト・礫混り極細粒砂層および褐色シルト混り極細粒砂～にぶい黄橙色砂礫層
- 第8層：暗オリブ色礫混り細粒砂～黄褐色シルト混り極細粒砂層および黄褐色シルト混り細粒砂層
- 第9層：オリブ褐色シルト・礫混り極細粒砂層
- 第10層：灰オリブ色極細粒砂～細粒砂層

図5 西区南壁の地層断面実測図

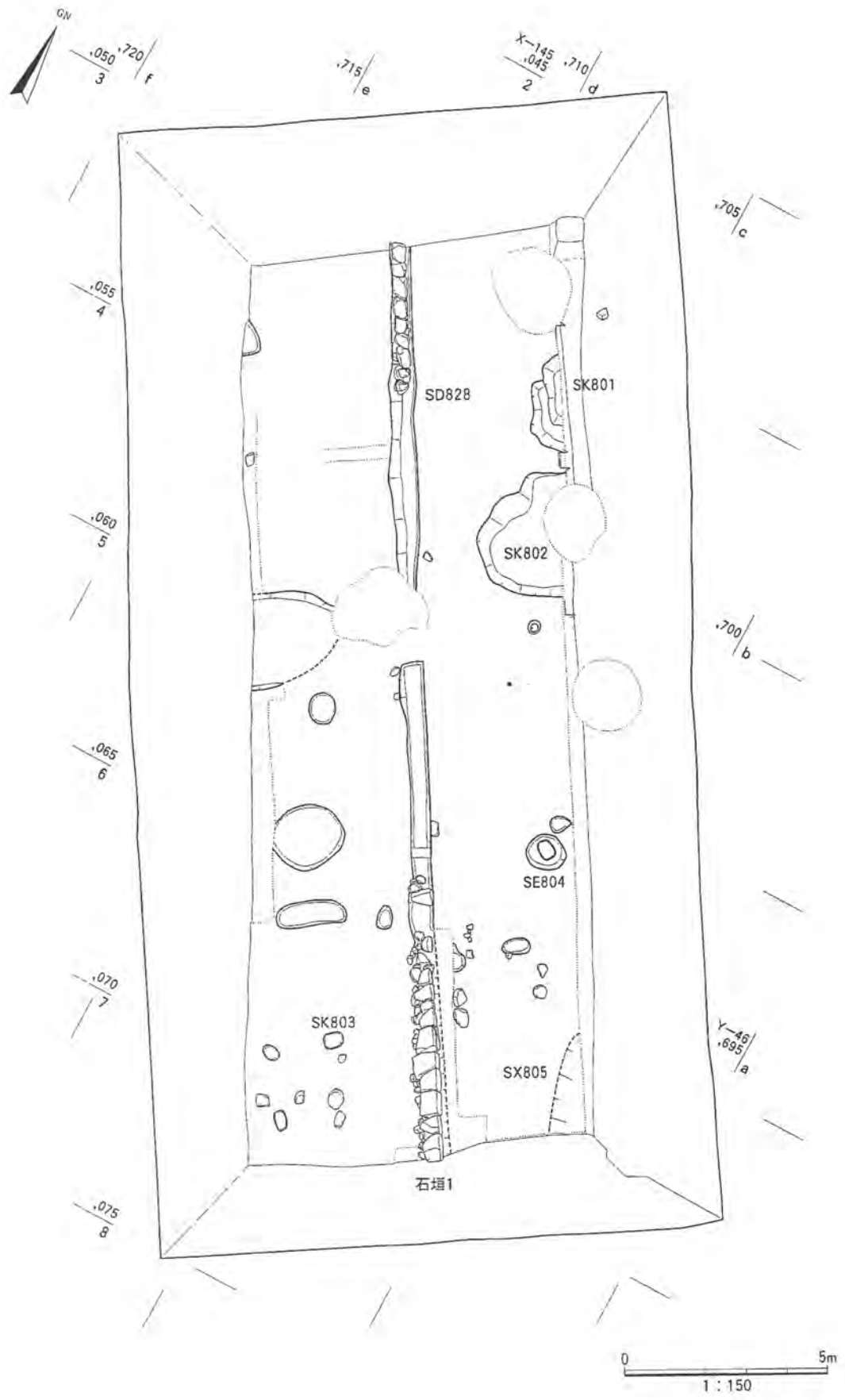


図6 西区第8層上面の遺構実測図

石垣1 3d区から6b区にかけて南北に延びる石垣で、幅0.5～1.1m、深さ0.3m前後の布掘り溝SD828内に、一辺0.5～0.6m前後の一部切り石を含む石材を3

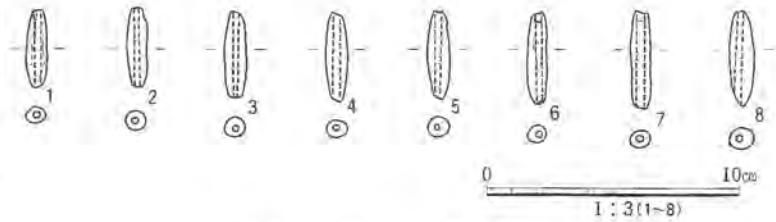


図7 SK802出土土錘実測図

段積み上げて構築していた(図6)。石垣の高さは約0.6mあり、表面は東を向く。裏込めには0.1～0.2m前後の花崗岩を使っているが、量は少なく粗雑に積まれていた。石垣の裏込めおよび砂礫を主体とする整地層から17世紀末～18世紀前葉頃の肥前陶磁器をはじめ、板状の結晶片岩、銅滓などが出土した。なお、石垣は調査個所の中央部で石材が抜かれるなどして破壊されていたがこれ以外については遺存状態はよい。

SK801 3c区に位置する平面形が不整形な土壇で、深さは約0.2m前後ある。埋土は炭・灰・木片・有機物を多く含む黒褐色シルト混り細粒砂、オリブ黒色極細粒砂混りシルト、におい黄色砂礫である(図10)。肥前磁器、内面に山水文が描かれ、高台内側に「清水」の刻印がある肥前陶器京焼風碗9・呉器手碗10、土師器皿11・灯明皿12・13・焙烙14(難波編年E類[難波洋三1992])・焼塩壺、肥前陶器碗・二彩鉢・銅緑釉皿、備前焼播鉢、丹波焼甕など、17世紀末～18世紀前葉に属するものが出土した(図8)。埋土の状況や破損した遺物が多いことからみて、ゴミ穴であろう。

SK802 SK801の南に位置する最大幅が約3.1m、深さ約0.3mの土壇で、埋土はSK801によく似た炭・灰・木片・有機物を多量に含む暗褐色シルト混り細粒砂、灰黄色砂礫、黒褐色細粒砂混りシルトである(図10)。出土遺物には土錘(重さ1.7～2.7g：図7)をはじめ、内底面に蛇の目釉ハギのある肥前磁器白磁皿15・青磁皿16・染付碗17・内底面に「梧桐一葉落ちて天下皆秋」とある染付皿18などの磁器、丸に田の字が朱描きされた漆器碗19、長さ23～23.5cmの箸20・21、全長約31cmの羽子板22、全長約21.8cmの下駄23、中央の直径約7cmの孔の両側に幅約2cmの把手が付く蓋24、直径約33cmの底板に直径28cm前後の曲物を取付けた容器25などの木製品がある(図8)。これらの時期は、肥前磁器からみて17世紀末～18世紀初頭頃に属するものである。

SK803 6b区に位置する東西0.5m、南北0.4m、深さ0.2m前後の土壇である。埋土はオリブ褐色砂礫混りシルトで、巴文軒丸瓦26(図8)や17世紀末頃の土師器灯明皿が出土した。土壇の南側に礎石が点在していることから、礎石の抜取り穴であろう。

SE804 5b区に位置する井戸で、掘形は直径約1mあり、井戸側は径0.4～0.5mを測る板を並べたやや歪んだものであった。遺物は特に出土しなかった。

SX805 6a区の東壁際に位置する深さ1m以上の大きな掘込みであるが、遺構の大半が調査範囲外であり、規模や性格は明らかでない。埋土は第10層の偽礫を多く含む黄褐色シルト混り細粒砂で、肥前磁器や土師器の細片が出土した以外さしたるものは見られなかった。

以上、第8層上面で検出された主な遺構について記述したが、このほかにも調査個所の南西部では建物の礎石やその抜取り穴を、石垣1の西側で円形や長方形、不整形な浅い土壇が検出された。このうち規模の大きな土壇については、埋土がSK801・802と似ていることから、ゴミ穴と考える。

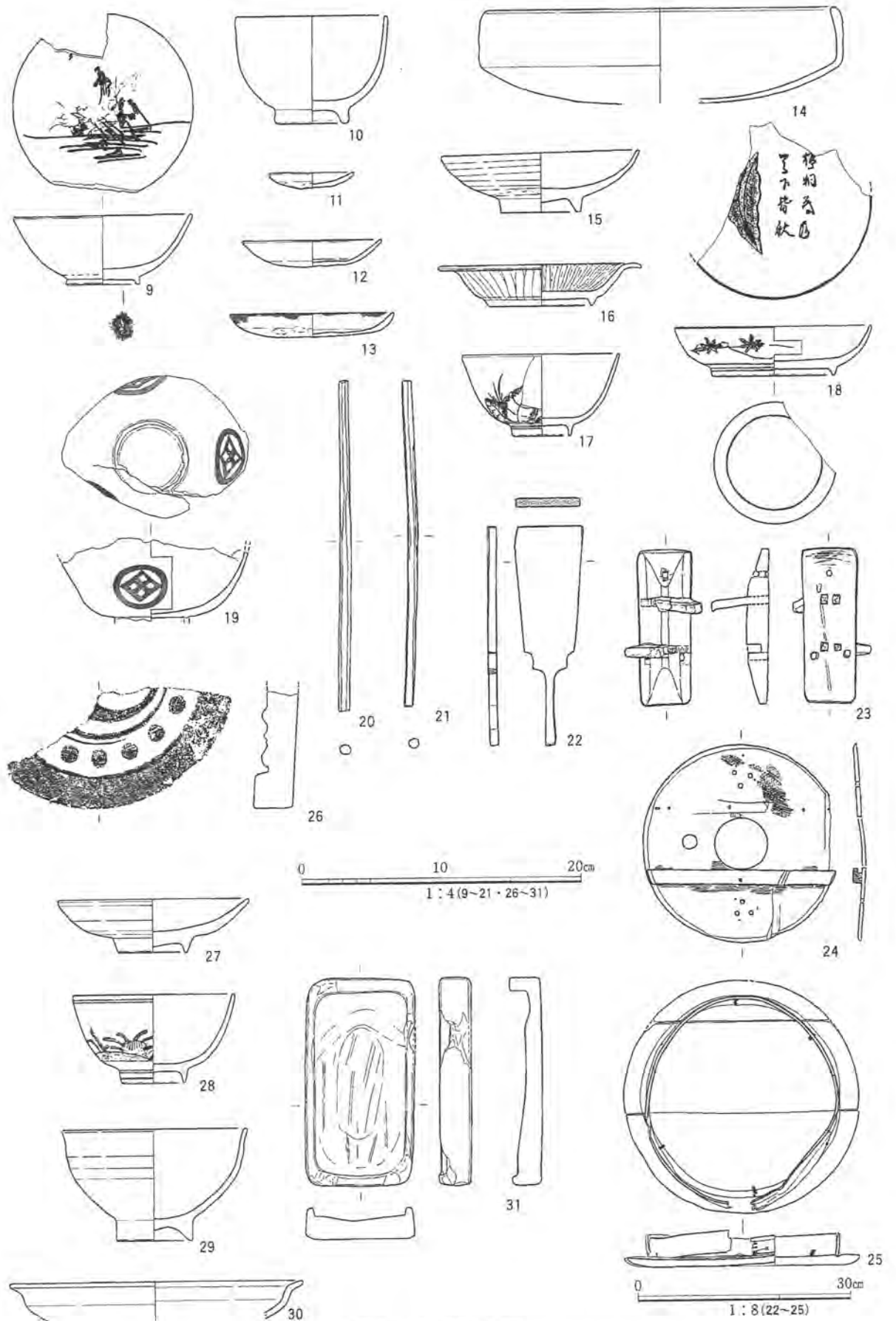


图8 出土遺物実測図

SK801(9~14)、SK802(15~25)、SK803(26)、第8層(27~31)

b. 西区第7層上面の遺構と遺物(図9・10・11・12)

第7層上面の遺構の分布状況であるが、調査個所のほぼ中央部に位置する南北方向の石垣1を境にして、地表面が一段高い石垣の西側では礎石建物や塀などが検出されたが、地表面が西側より低い石垣の東側では、4b・4c区で炉727や礎石建物の礎石が確認された以外には後世の掘込みで攪乱されており、さしたる遺構は見られなかった。また、第7層では器体の内面に草花が陽刻された肥前磁器白磁皿50、肥前陶器輪花皿51、軟質施釉陶器鬚水入52、口頸部を欠損したベトナム製陶器長胴瓶53、底が平坦で長方形の鈕がある土製鍾54・底が大きく抉れ大型の長方形の鈕が付く土製鍾55、巴文軒丸瓦56、顕著な使用痕がある砥石57、全長3.7cmを測る青銅製の釘58などが出土した(図12)。肥前陶磁器の年代は17世紀中葉～18世紀前葉に属するものであろう。

石垣1 第8層準の石垣1の上面に石材を2ないし3石積み上げて構築しているため、布掘り溝はない。下層の石垣との間には薄い花崗岩の割り石を詰めて石材を固定していたが、裏込めは0.1～0.3m大の花崗岩を主とする少量の石を使った粗雑なものであった。石垣の裏込めから17世紀末～18世紀前葉に属する肥前磁器染付碗32、器体が菊花状を呈する肥前陶器輪花皿33・緑釉を施した刷毛目皿34、丹波焼甕、堺播鉢、土師器灯明皿などが出土した。

SK701 5c区に位置する南北0.6～0.7m、東西約1.4m、深さ0.3m前後で、平面形が長方形の土壌である。埋土は炭・有機物を多く含む褐色シルト混り細粒砂で、菊と葉をコンニャク印判した肥前磁器染付碗36・染付油壺37(図11)をはじめ、小杯・瓶・仏飯器・水滴・青磁香炉・白磁蓋物、肥前陶器皿・京焼風碗・鉢、備前焼壺・甕、土師器火消し壺・皿、鉄釘などが出土した。これらは18世紀初頭～中葉に属するものであろう。

SK703 6c区の東南部隅に位置する平面形がやや不整形な径約0.8m、深さ0.2m前後の土壌で、西側をSK704に切られている。土壌の底には丹波焼播鉢39が据えてあり、埋土は貝殻や炭を多く含むオリーブ褐色シルト・礫混り細粒砂である。遺物は土師器灯明皿38・丹波焼播鉢39をはじめ、土師器焙烙、軟質施釉陶器鬚水入、肥前陶器刷毛目鉢・京焼風碗、肥前磁器蓋物など、18世紀前葉～中葉に属するものが出土した(図11)。

SK704 SK703を切る径0.6m、深さ0.2mの土壌である。埋土は褐色シルト・礫混り細粒砂で、土師器灯明皿、鉄釘が出土した。

SK705 6b区に位置する径約1.3m、深さ0.5mの不整形な土壌である。埋土は炭を含む暗褐色シルト混り極細粒砂で、肥前陶器刷毛目鉢、丹波焼甕、土師器灯明皿、鉄釘が出土した。陶磁器は18世紀中葉に属するものである。

SK706 3c区に位置する東西0.8m、南北1.5m、深さ0.4mの土壌で、平面形は隅丸長方形である。埋土は炭や有機物を多く含む暗オリーブ灰～暗灰黄色シルト・礫混り細粒砂で、多量の陶磁器や瓦を含むゴミ穴である。17世紀末～18世紀前葉に属する肥前磁器白磁小碗40・八つ橋草花文のある染付碗41・花唐草文のある陶胎染付碗42、肥前陶器刷毛目大碗43・京焼風碗(文様部分欠損)44、内底面が蛇の目釉ハギ、体部外面下端に印花文を施すベトナム製陶器皿45(図11)をはじめ、肥前磁器青磁皿・染付碗・皿・小杯・仏飯器、肥前陶器鉢・三島手鉢、丹波焼播鉢・鉢、土師器火消し壺・焼塩壺・

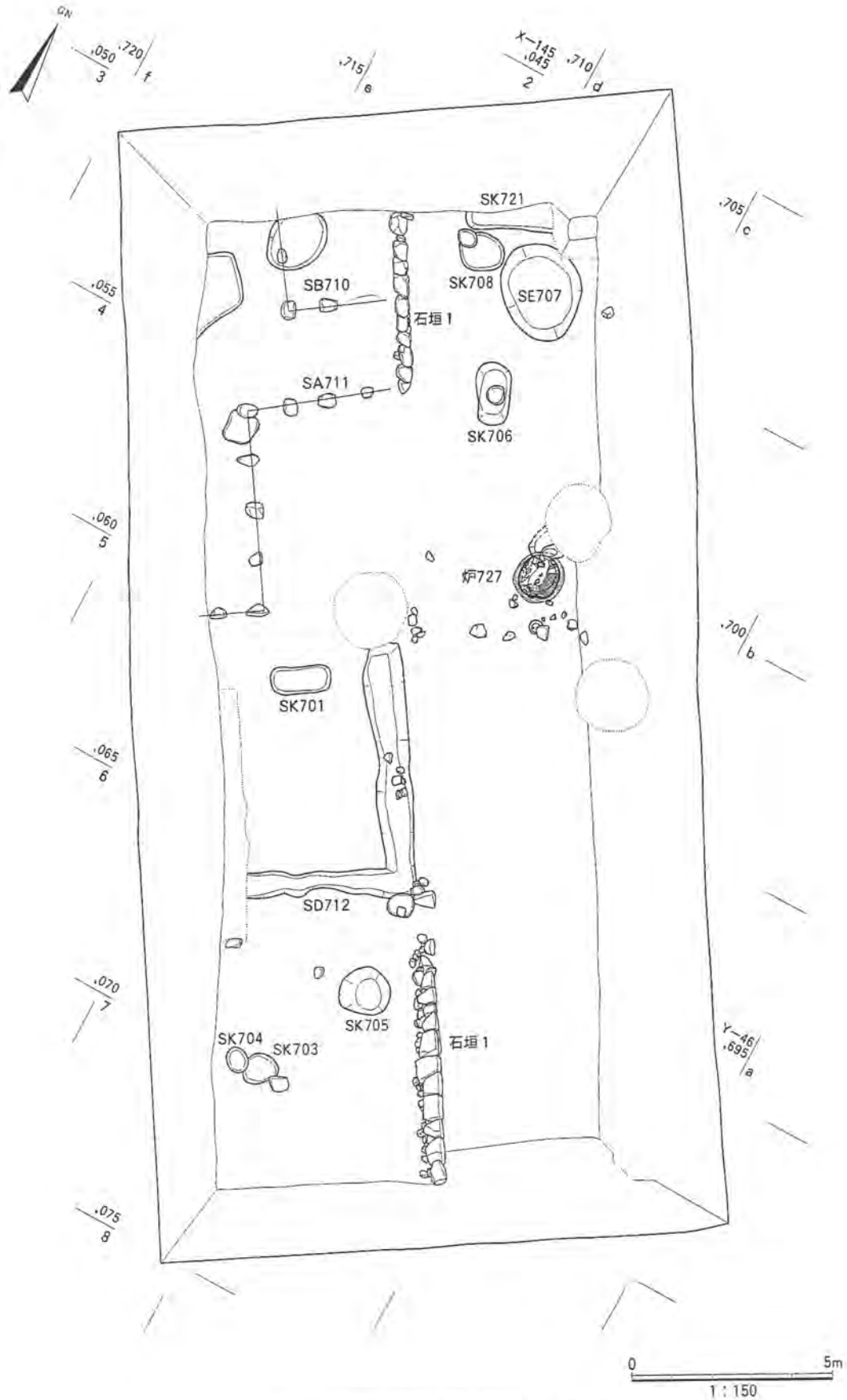
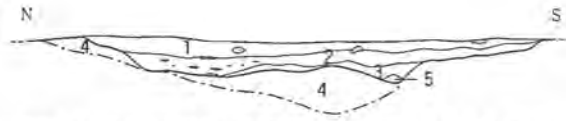


図9 西区第7層上面の遺構実測図

SK801

TP-
1.0m



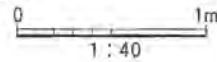
- 1: 黒褐色シルト混り細粒砂/炭化物・炭・有機物・木片を多く含む
- 2: オリーブ黒色極細粒砂混りシルト/有機物・木片を多く含む
- 3: にぶい黄色砂礫
- 4: 灰オリーブ色シルト混り細粒砂
- 5: 灰オリーブ色シルト混り細粒砂

SK802

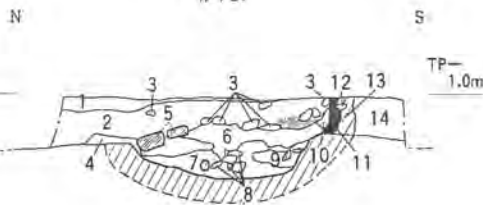
TP-
1.0m



- 1: 暗褐色シルト混り細粒砂/炭化物・炭・有機物・木片を多く含む
- 2: 灰黄色砂礫
- 3: 黒褐色細粒砂混りシルト/有機物・木片を多く含む
- 4: 暗灰黄色シルト混り細粒砂
- 5: 灰オリーブ色シルト混り細粒砂/礫・シルトブロックを含む
- 6: 黒褐色シルト混り細粒砂/シルトブロック・木片・有機物を含む



炉727



TP-
1.0m



- 1: 黄褐色シルト・礫混り極細粒砂
- 2: 浅黄色砂礫
- 3: 焼土
- 4: 黄褐色極細粒砂混りシルト
- 5: にぶい黄褐色シルト混り細粒砂
- 6: 黄褐色極細粒砂混りシルト
- 7: 黒褐色シルト混り細粒砂: 焼土
- 8: 黄褐色シルト混り極細粒砂
- 9: 焼土
- 10: 暗褐色シルト混り極細粒砂
- 11: 明赤褐色極細粒砂混りシルト; 炉壁
- 12: 褐色シルト混り極細粒砂混り粘土
- 13: 暗褐色シルト混り極細粒砂
- 14: 黄褐色極細粒砂混りシルト
- ☐: 粘土

図10 西区SK801・802および炉727実測図

焙烙、軟質施釉陶器壺、土製玩具、瓦、鉄滓、煙管などが出土した。

SK721 2c～2d区に位置する東西2m以上、深さ0.5m前後の土壙であるが、遺構の大半が調査範囲外のため、形状や規模は明らかでない。埋土は暗灰黄色シルト・礫混り極細粒砂で、内底面に草花文、高台内側に「宣徳年製」銘のある肥前磁器染付小碗47、内底面に五弁花を手描きし、高台内側に二重方形枠内に「渦福」のある染付皿48、内底面に葉文、器体外面に唐草文、高台内に「大明年製」銘のある染付皿49(図11)をはじめ、肥前陶器京焼風鉢・香炉、土師器火消し壺・火舎・焙烙、堺搦鉢、鉄釘・刀子など、SK706と相前後する時期の遺物が出土した。

SE707 2c～3c区のSK721の南側に位置する直径約2m、深さ0.8m以上の井戸である。井戸側は廃絶時に抜取られており、埋土は第10層の偽礫を多く含む褐色細粒砂、オリーブ褐色シルト・礫混り細粒砂、オリーブ褐色シルト混り細粒砂で、18世紀中葉～後葉とみられる唐草文軒平瓦35・巴文軒丸瓦46が出土した(図11)。

SB710 3d区に位置する礎石列で、おのおのの間隔は1～1.3mである。建物の礎石であろうが、遺構の大半が調査範囲外のため明らかにできなかった。

SA711 3～5d区に位置する礎石列で、各礎石の間隔は1.0mあるいは1.2mある。礎石列は鍵手状に曲がることから塀と考えた。なお、SB710とSA711の間は1.9～2.0m空くことから、この間が通路になっていた可能性がある。

SD712 4～6c区に位置する幅0.4～1m、深さ0.3m前後の溝で、石垣1の西側に接するように長さ約6m続いたのち、西側にほぼ直角に折れ曲がって調査範囲外に延びている。溝内の埋土は黒褐色シルト・礫混り細粒砂で、底に0.1～0.2m大の石が点在していた。

炉727 直径約1.2m、深さ0.4m前後の土壙内に厚さ約0.1mの粘土を貼り付けて炉床壁としている(図10)。炉の北側は幅0.4～0.7mほど抉れており、ここに竈の羽口が設置されていた可能性がある。炉内の主な埋土は焼土を含む黄褐色極細粒砂混りシルトや黒褐色シルト混り細粒砂であり、平瓦の細片が出土した。炉壁の内面はガラス状に溶解していたほか、赤褐色を呈する炉壁片や熱で変色した石が落込んでいた。また、炉の南側にはこれに付随する可能性のある礎石建物とみられる礎石列があったが、攪乱されており明らかにできなかった。遺構の時期は周辺の遺構から出土した肥前磁器などからみて、18世紀前葉～中葉であろう。

以上のほかにも不整形なゴミ処理用の土壙をはじめ、建物の礎石などが検出されたが、建物は既述したものを含めて石垣1の北西側に集中する傾向が窺われた。

c. 西区第5層の遺構と遺物(図13・14・16)

第5層上面の遺構の分布状況であるが、石垣1を境にして、東西両区画とも南にある東西通りに近い側に礎石建物があり、中央部には土壙や落込みがあった。なお、石垣1の東側にある4b・5b両区では礎石建物が最低2回建替えられていることが確認されたが、これに加えて、土壙にも切合い関係があつて複雑であつた。したがって、遺構の写真も複数回に分けて撮影したので、最終段階の遺構の全景写真には写っていない遺構もある。また、第5層から出土した遺物には、器体外面に松文のある肥前磁器染付碗71・染付蓋73、内底面に楼閣山水文を描く肥前陶器京焼風碗74(高台内に「清水」の刻印)・

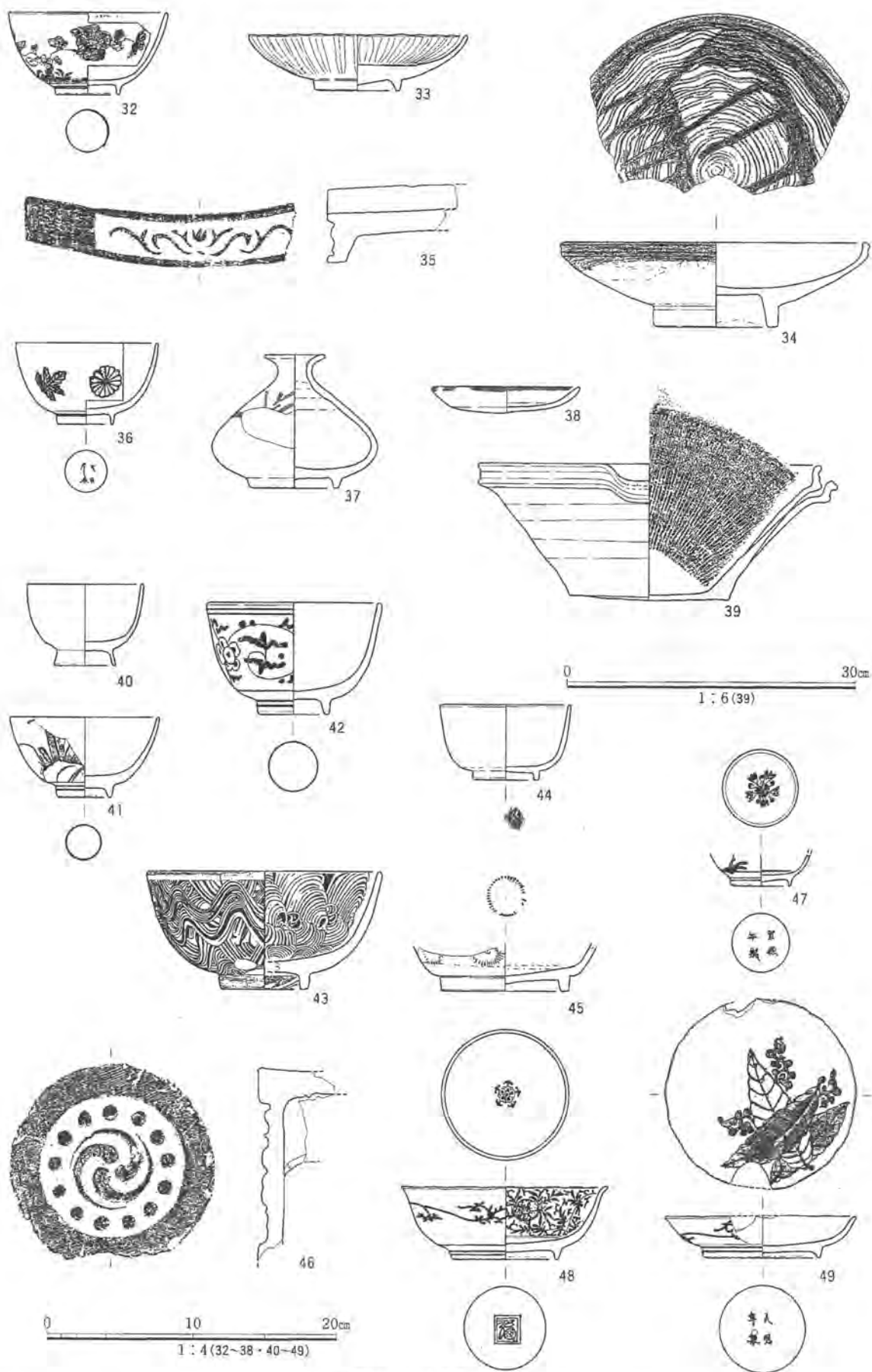


图11 出土遺物実測図

第7層石垣1裏込め(32~34)、SK701(36·37)、SK703(38·39)、SK706(40~45)、SE707(35·46)、SK721(47~49)

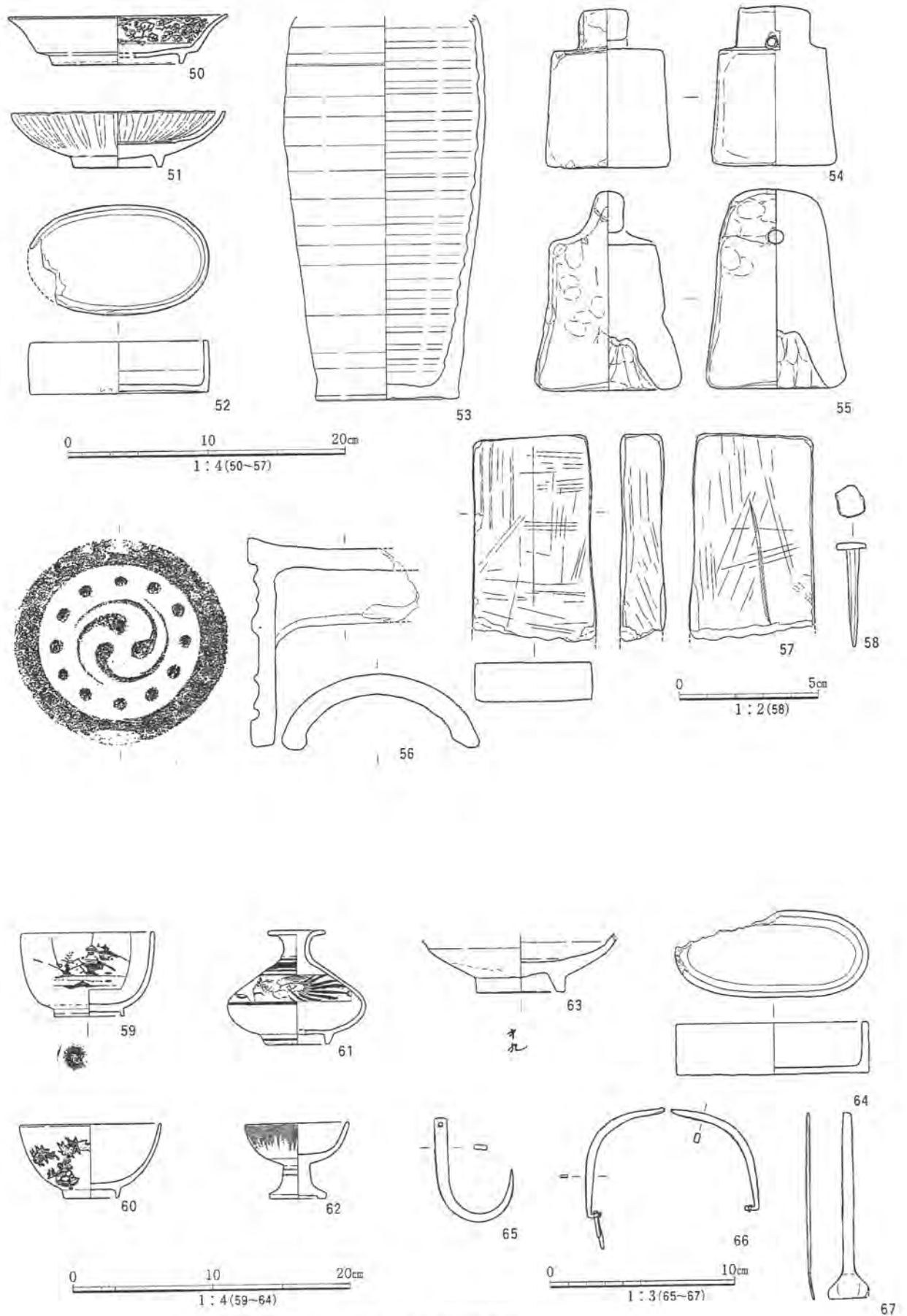


图12 出土遗物实测图

第7层(50~58)、埋甕610(59)、第6层(60~67)

器体外面に山水文を描く京焼風碗(高台内側に「木下弥」と刻印)75・刷毛目碗76、丹波焼壺77、瀬戸美濃焼陶器鉢78、軒平瓦80、頭部が細い骨製櫛払81、頭部が幅広く柄の下端がヘラ状に薄くなる骨製櫛払82、全長3.7cmを測る青銅製笠釘83、青銅製切羽84、寛永通宝85、青銅製煙管吸口86、青銅製簪87、青銅製用途不明品88、青銅製筭?89などがある(図14)。このうち、陶磁器は18世紀代のものであろう。

石垣1 下層の第6層準の石垣の上端に石材を2ないし3石積み上げて構築しているため、既述した第7層の石垣1と同様に布掘り溝はない。石垣の裏込めは0.1~0.3m大の花崗岩を主とする石を使った粗雑なものであった。なお、6b・7b両区では礎石建物が火災に遭っていたが、石垣もこの時に火を受けたことを示すように石材の表面が赤く変色していたほか、石垣の継ぎ目も煤けていた。また、6b・4c区では石垣1の表面に接するように石材を並べて境界にしていた(図5・13)。

SB503 石垣1の東側の6a・6b・5a・5b区に位置する梁行2間(3.6m)、桁行4間(5.3m)の礎石建物で、西側の桁行の礎石の間隔は1.3mを測る。この建物は東西礎石列および中ほどにある間仕切の礎石が重複していることから、同じ位置で建替えられたことが確認された。上層の礎石は二次的に火を受けていたので、建替えの要因は火災であろう。建物の方位は後述するSB508と同様に石垣1に平行している。

SB507 SB503の北側に位置する梁行3間(3.3m)、桁行5間(約4m)の礎石建物である。礎石の間隔は梁行、桁行とも約1.3mを測る。

SB508 石垣1の西側、7b・7c区に位置する梁行2間(3.0m)、桁行3間以上の礎石建物である。梁行中間の礎石は抜取られていたが、東側桁行は1.3m間隔である。

SA504 石垣1の西側、6b・6c区に位置する東西方向の礎石列で、周辺に建物として組み合う礎石がないので塀としておく。礎石の間隔は1.0mないし1.2mである。SB508の北側3.6mに建物と平行して位置している。

SD511 6b区に位置する東西方向の石組溝で、幅は約0.2mある。埋土は水つきの暗灰黄色シルト混り細粒砂で、肥前磁器染付小杯、煙管雁首などが出土した。

SK510 石垣1の西側、3d区に位置する直径約1.3m、深さ0.4mの土坑で、底は平坦になっており、0.1~0.4m前後の根石を並べている。土坑の規模や根石の状態が、調査個所の西側にあるNX06-1次調査地で検出されたSB401の南側に位置する東西方向の礎石1~3に酷似している。また、本土坑はNX06-1次調査地の礎石列と同様に第5層を掘込んで根石を並べており、この後、大型の礎石を設置して整地したものと考えられる。SK510が礎石1~3と一連の遺構であれば石垣1より西側の敷地が現在のなにもわ筋まで拡がっていたことを裏付けるものであり、当地域の絵図に記載された敷地の変遷を考証する上で重要な資料といえる。

SX501 5c・5d区に位置する東西1.3~1.5m、南北約2.5m、深さ0.5mの不整形な掘込みで、遺構の北側をSX504に掘込まれている。埋土はにぶい黄褐色シルト混り細粒砂で、巴文軒丸瓦68(図14)、完形の唐草文軒平瓦をはじめ、多量の破損した丸瓦・平瓦が出土した。

SX504 4c・4d区に位置する東西約3.6m、南北約3.5m、深さ0.5m前後の掘込みである。埋土は

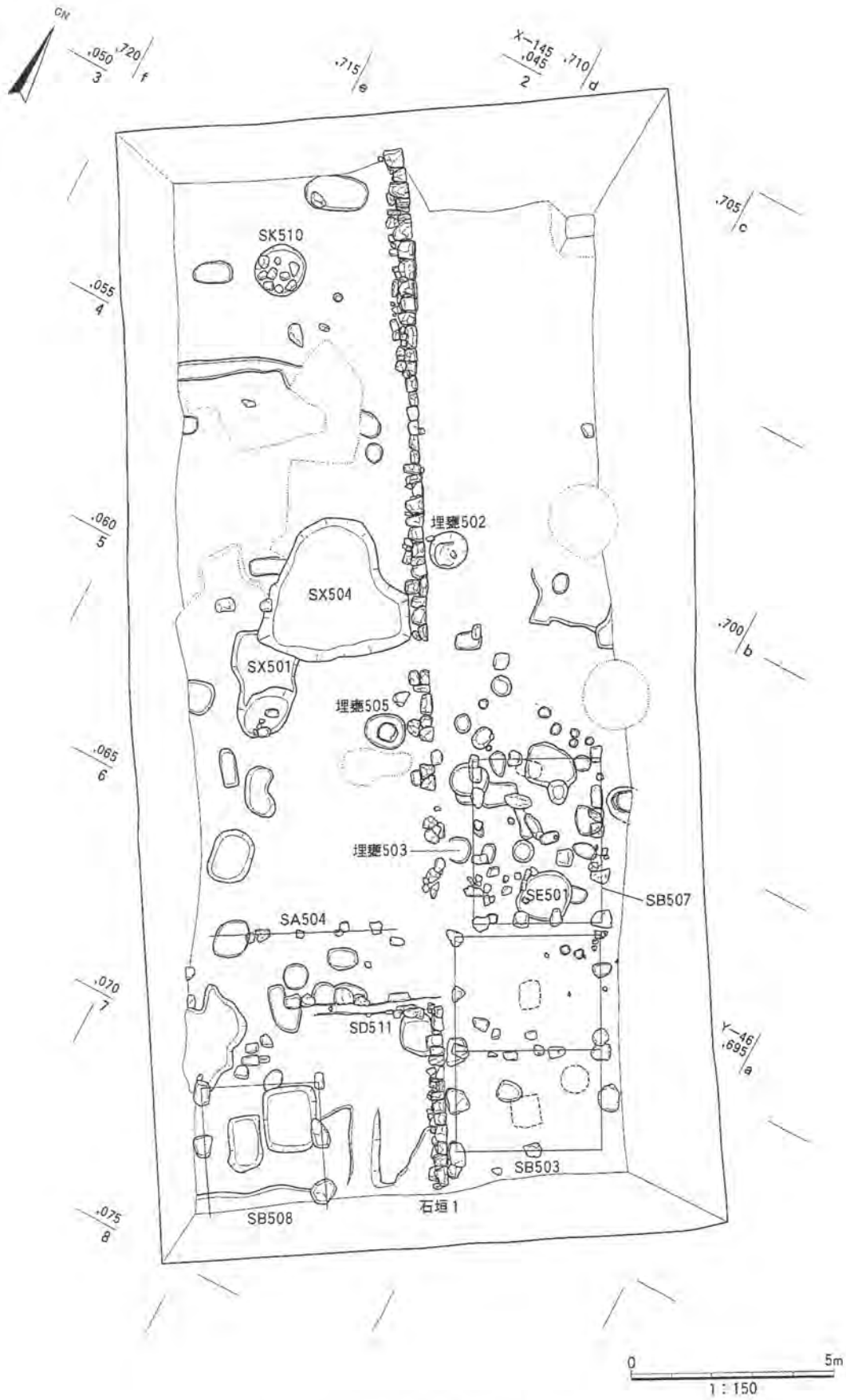


図13 西区第5層上面の遺構実測図

暗灰黄色シルト混り細粒砂で、18世紀前葉～中葉の京焼半筒碗69・70をはじめ、瀬戸美濃焼陶器鉢・播鉢、土師器焙烙・皿、丹波焼甕、砥石、瓦などが出土した。

埋甕502 4c区にある直径約1mの掘形内に口縁部を下にして埋めた甕で、底部の中央に穿孔があり、ここから地下に排水する施設である。18世紀前葉の丹波焼の甕を転用している。石垣1に東接する場所で、漆喰による叩き面に位置することから、近くに台所があるものとみられる。

埋甕505 5c区に位置する直径約1mの掘形内に18世紀後葉の丹波焼の甕を口縁部を下にして埋設した排水施設である。遺構の上半は欠損していた。

d. 西区第4層上面の遺構と遺物(図15・16・17)

本層上面の遺構の分布状況であるが、石垣1～3以外には、埋甕・土塋・井戸が検出されたのみで、礎石建物についてはまったく認められなかった。遺構の多くは上層の第3層準に属するものであり、本来あるべき建物などの遺構は後世に攪乱されて残っていなかった。

また、第4層の遺物には器体の外面に唐子を描いた肥前磁器染付碗90・染付水滴91・松竹梅文を描いた染付神酒德利92、底部を回転糸切りした瀬戸美濃焼陶器灰吹93、青銅製簪94などがある。本層出土の陶磁器類は、18世紀前葉～後葉および19世紀前葉に属するものがあるが、量的には18世紀代に属するものが多い。

石垣1 下層の石垣の上に石材を2～3段積み上げて構築している。したがって、布掘り溝はない。石垣は5b区の辺りで後世の攪乱によって破壊されていたが、これ以外の部分では遺存状況はよかった。石垣の裏込めには0.1～0.4mの石材を用いるが、量も少ないうえ、粗雑に積まれた点は、下層の石垣1と同じである。また、第5層の石垣との設置面には花崗岩の薄い破片を詰めて補強していた。

石垣2 石垣1に東面する石垣で、4c区では11個の石材の並びを確認した。4c区以外でも石垣2の延長部には石材が点在していたので、元来は石垣2も石垣1に沿って南北方向に築かれていたものと思われる。また、石垣2は第4層の盛土の途中から石材を積んでいることが南壁の断面観察でも明らかになったが、裏込めの石材については確認できなかった。

石垣3 石垣1・2の東側に位置する南北方向の石垣で、南端から約16m分を確認した。石垣3も石垣2と同様に第4層の盛土の途中から構築されていることが東壁断面の観察から確認された。石垣3は東に面を揃えており、石垣2と石垣3間の距離は約6mを測る。

埋甕300 6b区に位置する直径約1mの掘形内の北寄りに丹波焼甕を口縁部を下にして設置した排水施設である。甕の中には油分を含む黒色シルトが堆積していた。

SK301 7b・7c区に位置する東西0.8m、南北1.6m前後、深さ約0.4m、平面形が長方形の土塋である。埋土は炭・有機物を多く含む黒褐色シルト混り細粒砂で、18世紀後葉～19世紀前葉に属する肥前磁器染付碗・皿・鉢・青磁染付碗・皿、肥前陶器京焼風碗、丹波焼甕、瓦質土器火鉢が出土した。ゴミ穴である。

SK302 7b区のSK301の東側に位置する東西約1.1m、南北1.6m前後、平面形が長方形の土塋である。埋土は暗褐色シルト混り細粒砂で、18世紀後葉～19世紀前葉に属する肥前磁器染付碗・皿・蓋・鉢・青磁染付水滴、関西系陶器蓋、堺播鉢、備前焼小壺、土製玩具人物などが出土した。

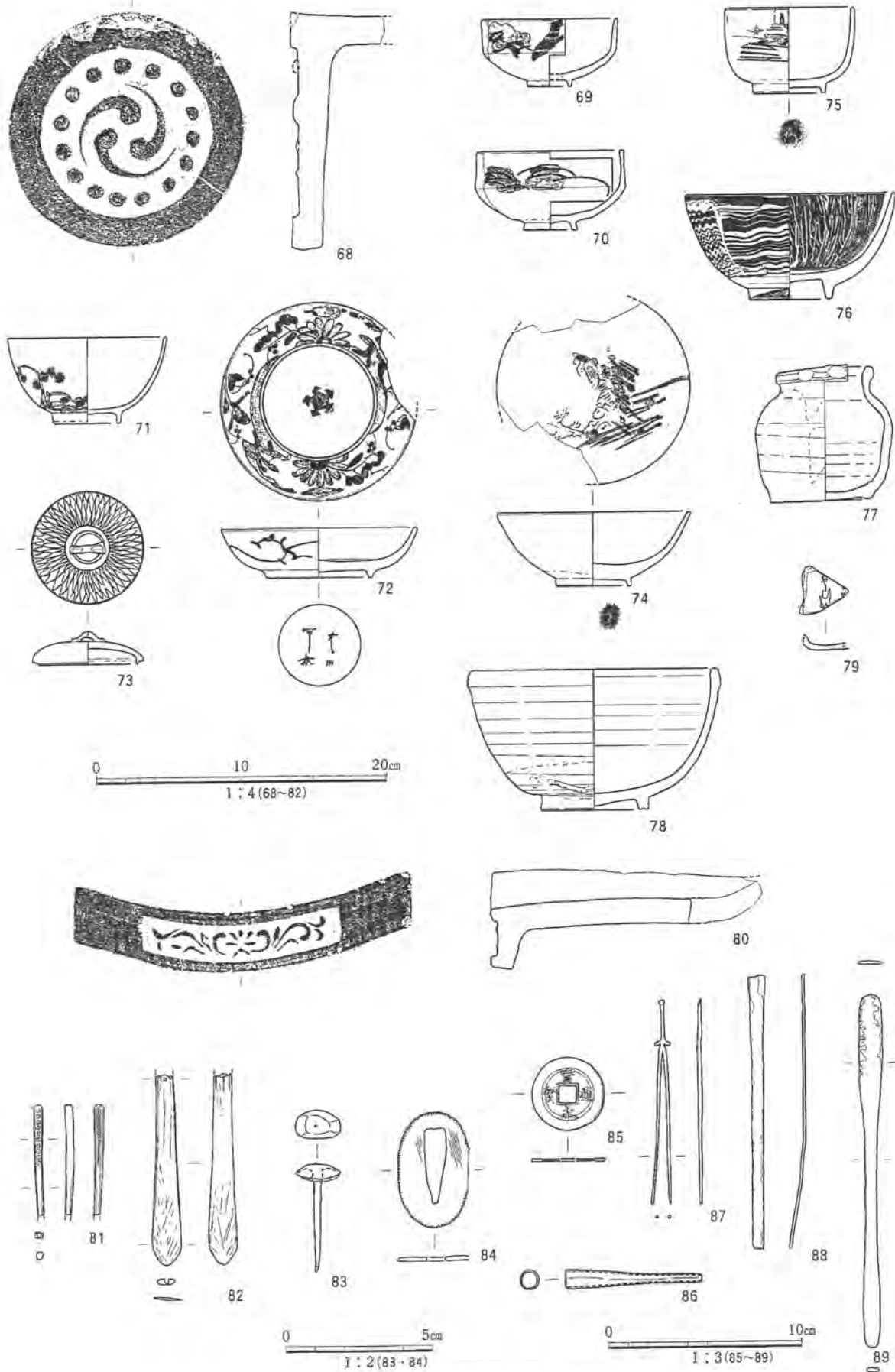


图14 出土遺物実測図

SX501(68)、SX504(69・70)、第5層(71~89)

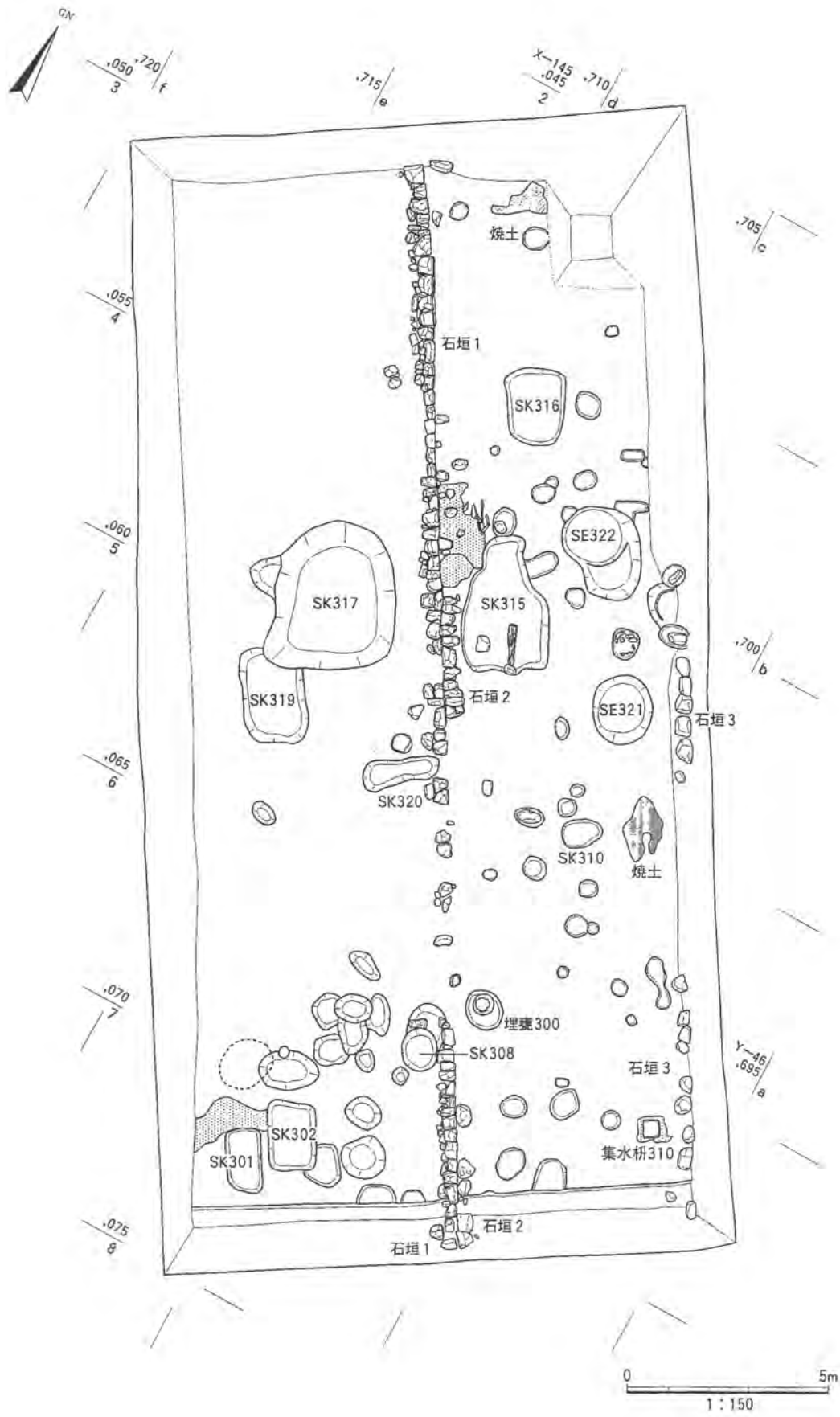


図15 西区第4層上面の遺構実測図

SK308 6b区に位置する直径約1m、深さ0.5m前後の土壌である。埋土は黄褐色シルト混り細粒砂で、青銅製傘釘101(全長4.1cm)・102(全長3.8cm)(図17)をはじめ、18世紀後葉～19世紀前葉に属する肥前磁器染付碗、肥前陶器刷毛目碗、丹波焼德利、堺播鉢、瀬戸美濃焼陶器甕、土師器焼塩壺などが出土した(図17)。

SK310 5b区に位置する東西約1m、南北0.7m、深さ約0.3m前後の土壌である。埋土は、にぶい黄褐色シルト混り細粒砂で、幕末頃の肥前磁器染付小瓶103(図17)、関西系陶器蓋・碗が出土した。

SK315 4c区に位置する東西1～2.2m、深さ約1mの土壌である。底に用途不明の角材が敷かれていた。埋土はにぶい黄褐色シルト混り細粒砂で、18世紀後葉～19世紀前葉の肥前磁器染付碗・皿・小杯・仏飯器・花瓶・赤絵蓋・青磁染付碗、肥前陶器刷毛目鉢、瀬戸美濃焼陶器甕・植木鉢、軟質施釉陶器、土製玩具馬・人物などが出土した。

SK316 3c区に位置する東西約1.5m、南北約2m、深さ0.3m前後の隅丸長方形の土壌である。埋土は、にぶい黄褐色シルト混り細粒砂で、18世紀後葉～19世紀前葉の肥前磁器染付蓋・青磁鉢、関西系陶器小碗・小杯・土瓶、瀬戸美濃焼陶器植木鉢、丹波焼甕をはじめ、唐草文に花菱文が捺された軒平瓦104が出土した。この瓦は徳川氏大坂城再建時に使用された瓦に酷似している。

SK317 4c・5d区に位置する東西3m、南北3.6m、深さ0.8mの土壌である。埋土は有機物を多く含むオリーブ褐色砂礫混りシルトで、幕末頃の肥前磁器染付碗・皿・蓋・蛸唐草文のある小瓶105・青磁染付碗・陶胎染付碗・青磁鉢、瀬戸美濃焼磁器染付碗・蓋、関西系陶器小杯・土鍋・土瓶・灯明皿、丹波焼甕・德利、備前焼壺・甕・播鉢、萩焼碗をはじめ、角製品106などが出土した。ゴミ穴であろう。

SK319 5c・5d区に位置する東西約1.5m、南北約2.3m、深さ0.5m前後の長方形の土壌である。埋土はにぶい黄褐色シルト混り細粒砂で、18世紀後葉～19世紀前葉の肥前磁器染付小碗・皿、関西系陶器碗・蓋をはじめ、骨製細棒が出土した。

SK320 5c区に位置する東西約2m、南北約0.7m、深さ0.3m前後の土壌である。埋土は炭片を多く含む黄褐色シルト混り細粒砂で、18世紀後葉～19世紀前葉の肥前磁器染付碗(くらわんか手含む)、肥前陶器刷毛目碗、瀬戸美濃焼陶器碗、土師器火消し壺・焙烙、土製玩具、産地不明陶器小壺などが出土した。

土壌群 6b・7b区に位置する直径0.4～1m前後、深さ0.3m前後の複数の土壌である。土壌は切合うものが多く、埋土も有機物を含む黒～暗褐色シルト混り細粒砂で、18世紀後葉～19世紀前葉に属する肥前磁器染付碗・皿、堺播鉢、丹波焼播鉢などが出土した。ゴミ穴群であろう。

SE321 4b区に位置する直径約1.5m、深さ1m以上の井戸で、井戸側は確認されなかった。埋土はにぶい黄褐色細粒砂混りシルトで、18世紀中葉～後葉に属する肥前磁器染付碗・皿・蓋、肥前陶器碗、丹波焼播鉢、土師器焙烙などが出土した。

SE322 3b・3c区に位置する東西約2m、南北約2.4mの井戸である。内部を1.5mほど掘下げたが、井戸側は確認できなかった。埋土はにぶい黄褐色シルト混り細粒砂で、内底面に寿字文のある瀬戸美濃焼白磁碗95、関西系磁器德利96、天井部が平坦な関西系陶器蓋97・行平蓋98・鍋99など19世紀前

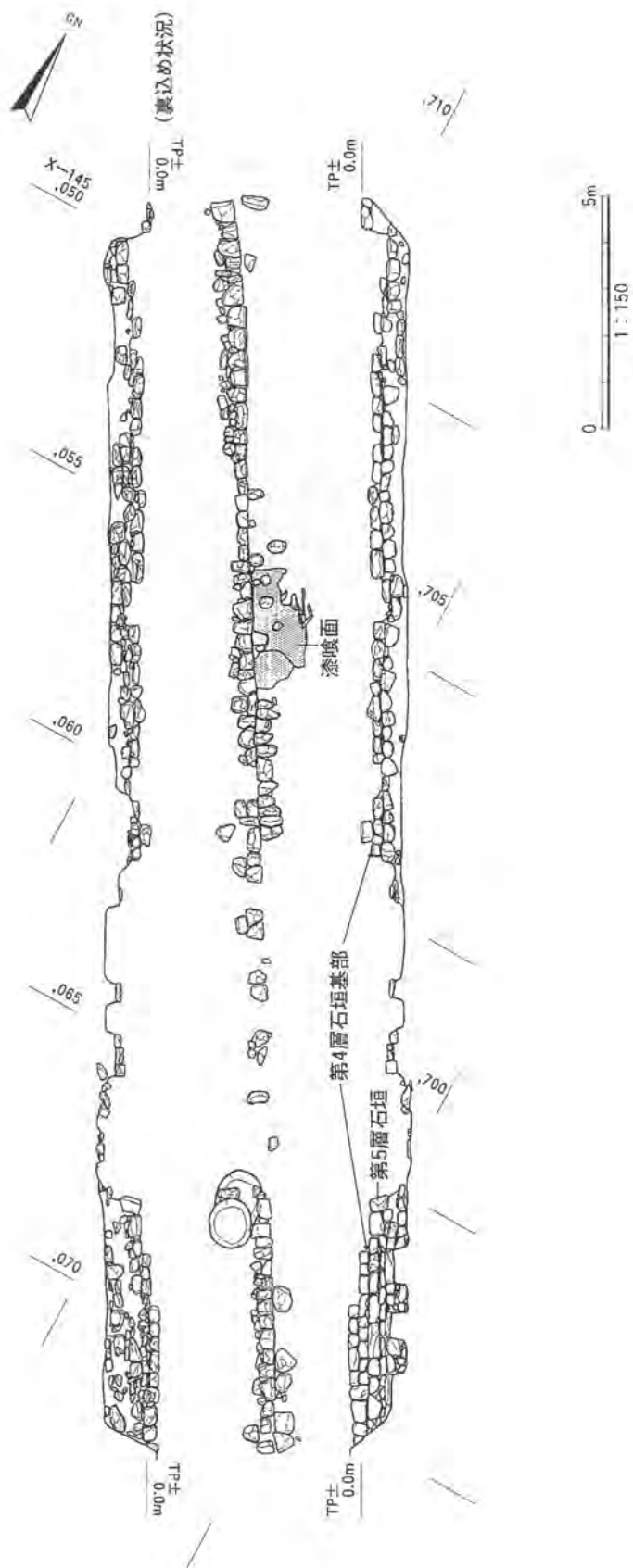


図16 西区第4層および第5層に関する石垣1実測図

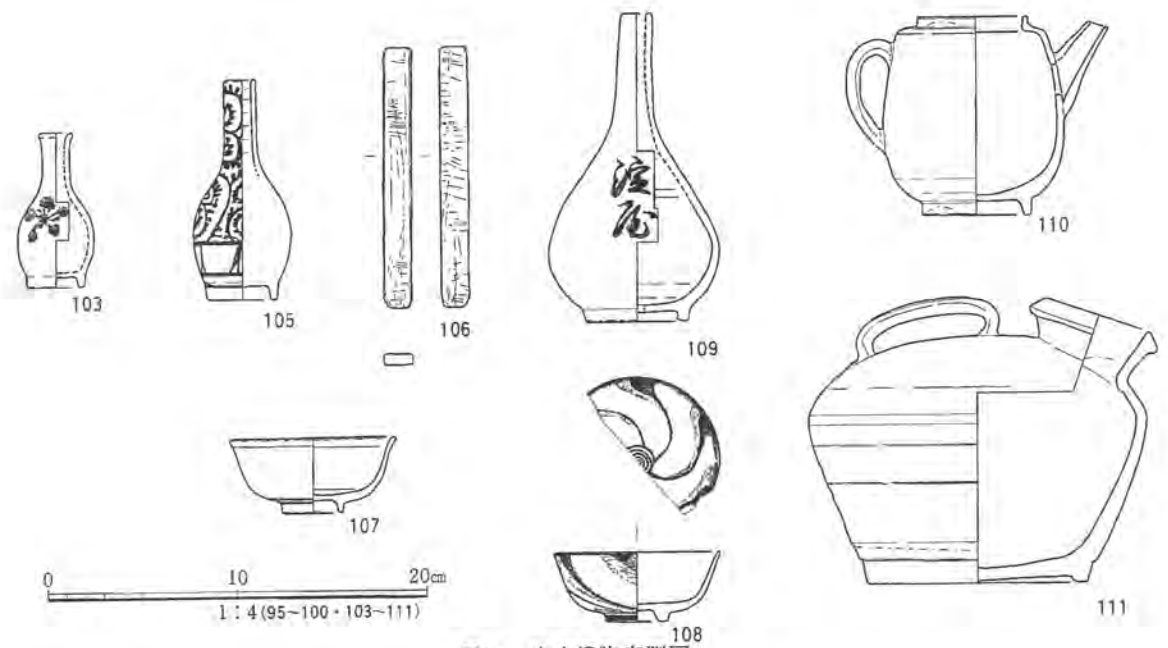
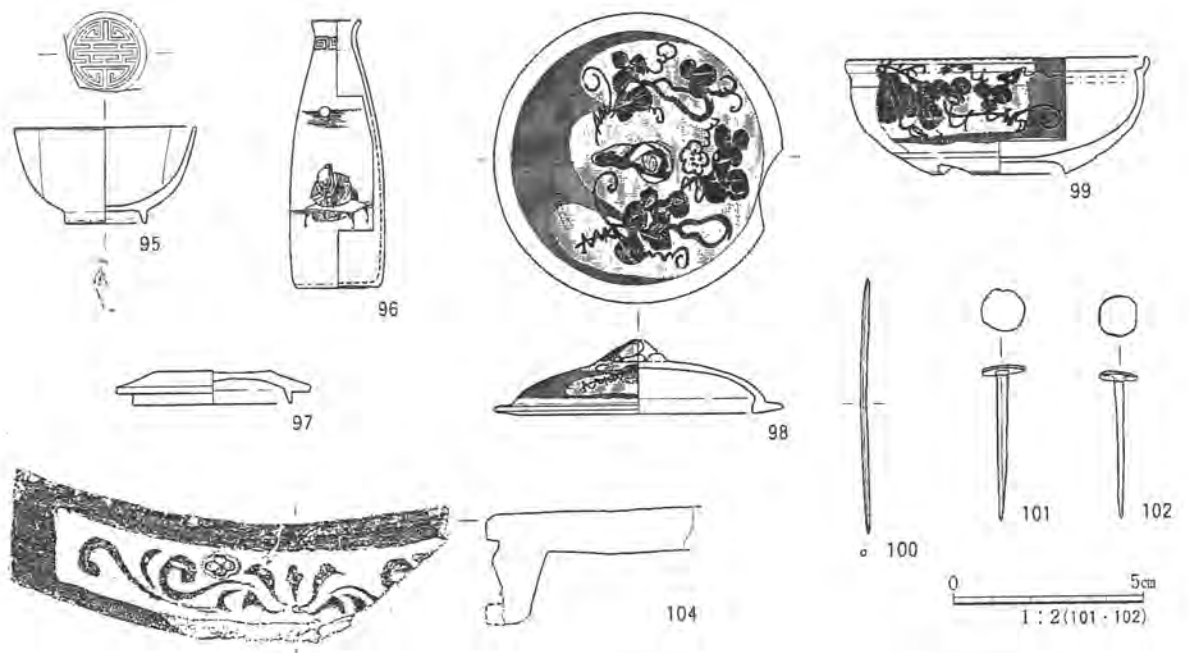
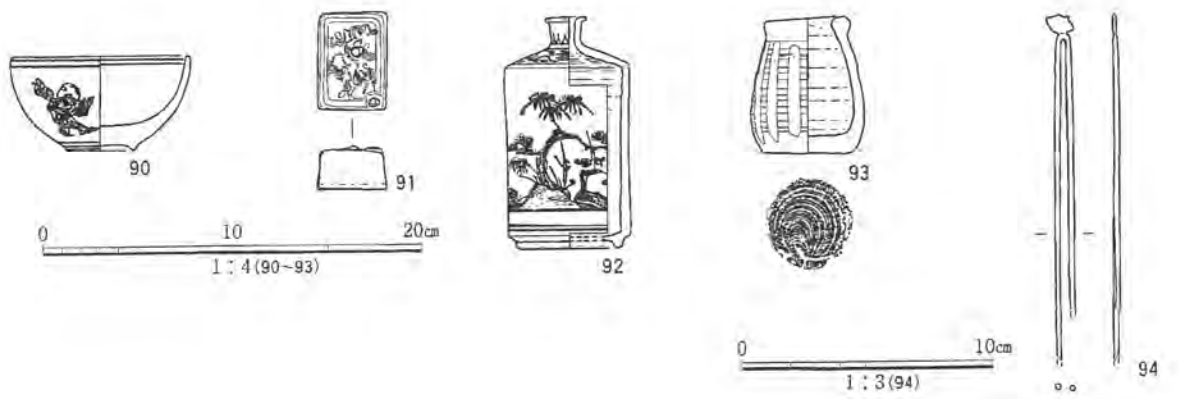


图17 出土遺物実測図

第4層(90~94)、SE322(95~100)、SK308(101·102)、SK310(103)、SK316(104)、SK317(105·106)、
第3層(107~111)

葉あるいは幕末頃に属する陶磁器をはじめ、堺播鉢、瓦、棒状青銅製品100などが出土した(図17)。

集水枡310 6a区に位置する東西0.3m、南北0.4mの集水枡で、平瓦を組み、周囲を漆喰で固めている。埋土は水つきのオリーブ褐色シルト混り細粒砂で、19世紀前葉に属する肥前磁器染付瓶が出土した。

e. 西区各層出土の遺物(図12・17)

ここでは第3層および第6層から出土した遺物の内、図化したものについて報告する。

第3層では19世紀前～中葉の瀬戸美濃焼磁器端反碗107・108をはじめ、18世紀末～19世紀前葉に属する「淀屋」と書かれた肥前磁器染付瓶109、瀬戸美濃焼陶器水注110・尿瓶111などが出土した(図17)。この内、「淀屋」銘のある肥前磁器染付瓶109は、石垣1から西側のなにわ筋まで続く敷地の所有者を考察する上で重要な資料である。

第6層では楼閣山水文を器体に描いた肥前陶器京焼風碗59(高台内側に刻印有：埋甕610から出土)・器体外面にコンニャク印判で紅葉つなぎ文を描く肥前磁器染付碗60・鳳凰文を器体に描く色絵油壺61・雨降文を杯部外面に描く染付仏飯器62、高台裏面に墨書のある口縁部を欠損した肥前陶器皿63、軟質施釉陶器鬚水入64をはじめ、青銅製の釣針状金具65・把手66・匙67などがある(図12)。これらのうち、59・64は17世紀末～18世紀前葉、60～62は18世紀前半代のものであろう。

f. 東区第5層上面の遺構と遺物(図18)

SA501 3b・3c区に位置する東西ならびに南北方向に並ぶ礎石列である。周囲に組み合う礎石が見られないことから塀の礎石と考えた。礎石の間隔は1.0m前後あり、重複する礎石が確認されたことから、建替えがあったようである。礎石列の西側には厚さ0.1m前後の漆喰による叩き面がある。

SB502 2b・3b区に位置する礎石建物で、礎石の多くを後世に抜取られている。礎石の間隔は西側で、0.9mあった。梁行が3.3m、桁行は建物の北側に同時期の井戸SE504が位置するため、5.0m以内に収まるものと推定される。

SB503 3a区に位置する建物の礎石列で、南端の礎石から北側一つ目の礎石の東にある礎石は間仕切りの可能性がある。各礎石の間隔は1mある。

SE504 SB502の北側に位置する井戸で、直径約1.9mの井戸側の周囲を幅0.2～0.3m、長さ2.6m前後の凝灰岩製の縁石で囲った中を漆喰で固めている。

SE505 1c・2c区に位置する直径約2.5m、深さ1m以上の井戸である。井戸側は検出できなかったが、漆喰が混るオリーブ褐色礫混り細粒砂で掘形内を埋め戻していた。

埋甕506 4b・5b区に位置する埋甕で、18世紀後葉の丹波焼甕を口縁部を上にして地中に埋めている。甕の周囲は漆喰による叩き面である。便器であろう。

SK507 5c区に位置する東西0.7m、南北1.5m、深さ0.6m前後で、平面形が長方形の土壇である。埋土は黒褐色礫混り細粒砂で、19世紀前葉の肥前磁器染付碗、土師器焼塩壺蓋が出土した。

SK508 SK507の南に位置する平面形が不整形な深さ約0.8mの土壇である。埋土は焼土や焼け瓦を多量に含む黒褐色砂礫混りシルトで、18～19世紀代の肥前磁器の細片が出土した。ゴミ穴である。

SK509 3c区に位置する土壇で、東側を攪乱されており、規模は明らかでない。深さは0.3m前後

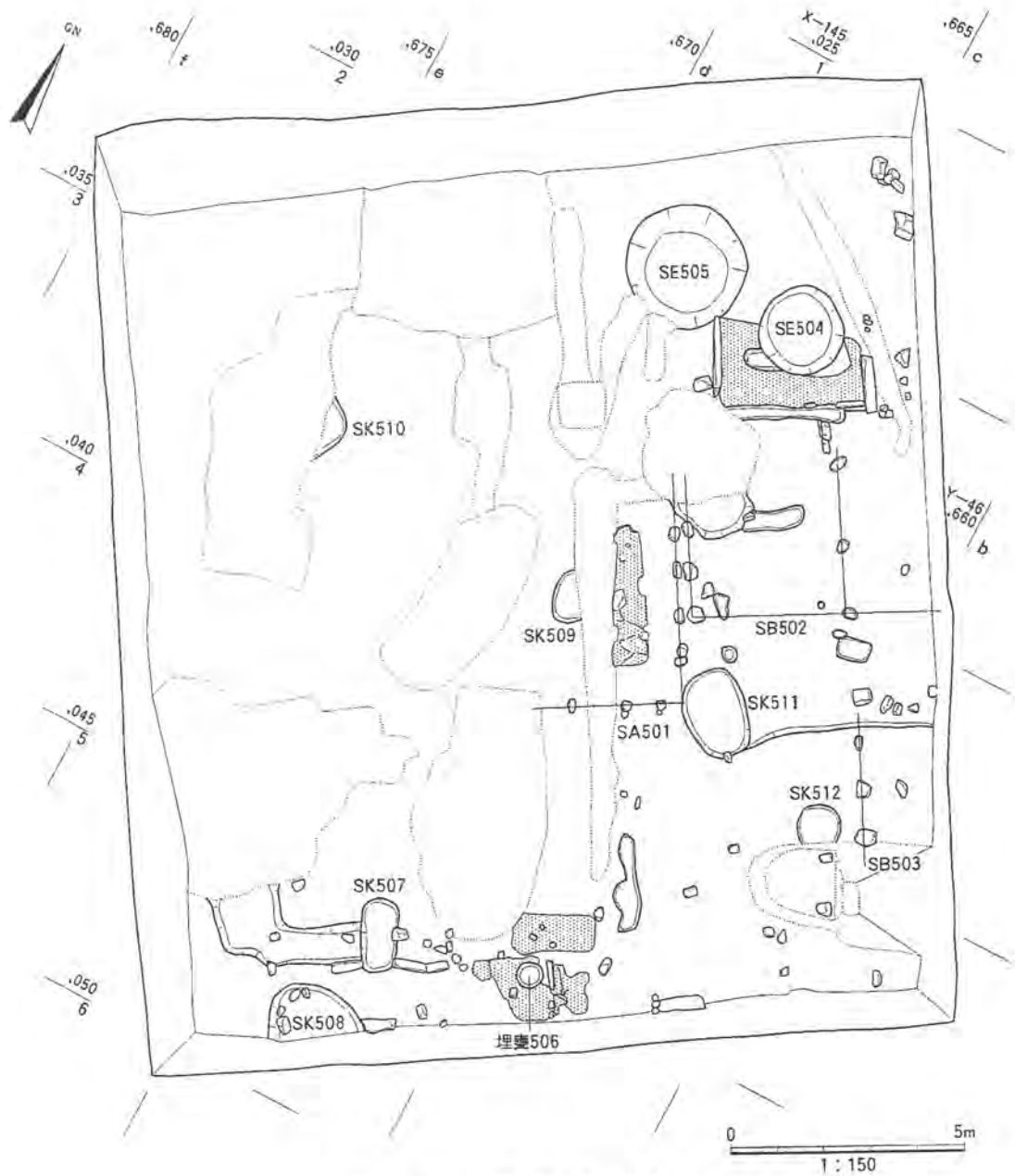


図18 東区第5層上面の遺構実測図

あり、埋土はオリブ褐色砂礫混りシルトで、遺物は出土しなかった。

SK510 3d区に位置する深さ0.3mの土壌であるが、大半を後世に攪乱されており、形状や規模は明らかでない。埋土は黒褐色シルトで、遺物は出土しなかった。底に複数の小さな穴が見られたので倒木痕の可能性がある。

SK511 3b区、SA501を切る東西1.3m、南北1.8m、深さ0.2m前後の平面形が不整形な土壌である。埋土はにぶい黄褐色砂礫混りシルトで、肥前磁器の細片や平瓦片が出土したのみである。

SK512 SB503の西側にある直径約1m、深さ約0.15mの土壌である。埋土は炭・焼土を含む赤褐～黒褐色の細粒砂混りシルトで、焼締陶器甕、瓦、鉄釘が出土した。

以上、東区第5層上面で検出した主な遺構について報告したが、調査個所のほぼ全域が旧大阪市立中之島幼稚園の建物基礎の影響を受けていたほか、中央部以西が大きく攪乱されていたこともあって、

遺構の残りはよくなかった。

4)まとめ

今回の発掘調査では既述したように7面の遺構面を確認したが、このうち、調査地で最初の人の手が加えられた形跡は、TP-2.0mで確認された17世紀中葉～18世紀前葉の遺物を含む第9層の作土であった。本層は調査地の東方にある広島藩蔵屋敷跡の基本層序の第6層に相当するものとみられるが、第6層の年代は徳川初期(17世紀前半)との報告であり、年代は一致していない[大阪市文化財協会2004]。なお、久留米藩蔵屋敷側の最初に人の手が加わった地層として認定されている第4e層(整地層・作土層)は、年代が17世紀後半～18世紀前半代とされているので、第9層の年代に近い。いずれにせよ、本調査地の第9層から上の地層は基本的には人工的な盛土あるいは整地層であったが、これは広島藩・久留米藩蔵屋敷側の調査結果と何ら変わらない。第9層は中之島4丁目地域の開発が始まった頃の実態や当時の環境を明らかにする上で重要な地層として注目される。

一方、調査地が居住地区になったことを示す第8層上面の遺構群であるが、18世紀初頭頃に構築された石垣1は、その後も同じ位置に築かれて、実に200年後の現代まで敷地の境界として踏襲されていたことが今回の調査で明らかになった。石垣1の各時期における構築状況については先述したとおりであるが、久留米藩および広島藩蔵屋敷の南にある東西通りを基点に、のちになにわ筋になる西側の南北通りに平行する石垣1のラインは、1911(明治44)年に刊行された『大阪地籍図』に見える敷地の境界にはほぼ一致している(図19)。また、石垣1で区画された南北方向の敷地であるが、1701(元禄14)年にまとめられた『大坂三郷町絵図』に描かれた久留米藩蔵屋敷の西側にある南北方向の空地に相当するものと思われる。この空地は久留米藩の貸地とみられており、1806(文化3)年および1863(文久3)年の絵図にも表現されている[長友朋子2003]。

今回の調査では西側にあるNX06-1次地区の第4層の上面で検出された大型の礎石建物などは、後世に攪乱されていたこともあって明らかにしえなかった。しかし、6c区の第3層から出土した18世紀末～19世紀前葉の「淀屋」と書かれた肥前磁器染付瓶109は、NX06-1次地区の水溜SK403から出土した丹波焼徳利に描かれた「淀屋 中之島 千六百八」・「淀屋 中之島 二千三十一番」と同様に、1839(天保10)年に刊行された『天保仁風便覧』に天保の飢饉の際に寄付をしたとの記載がある北組常安裏町の住人、淀屋忠次郎との結びつきを示す資料といえる(註1)。

以上のような調査成果は中之島4丁目地域の歴史を明らかにする上での基礎的な資料となるが、今後も久留米藩蔵屋敷や広島藩蔵屋敷の周辺地域の開発の歴史や変遷の具体的な状況について、中之島4丁目所在遺跡の調査成果の蓄積と総合的な検討を行い明らかにしていきたい。

註

1)『天保仁風便覧』および淀屋忠次郎については大阪歴史博物館の相蘇一弘氏から有益なご意見をいただいた。

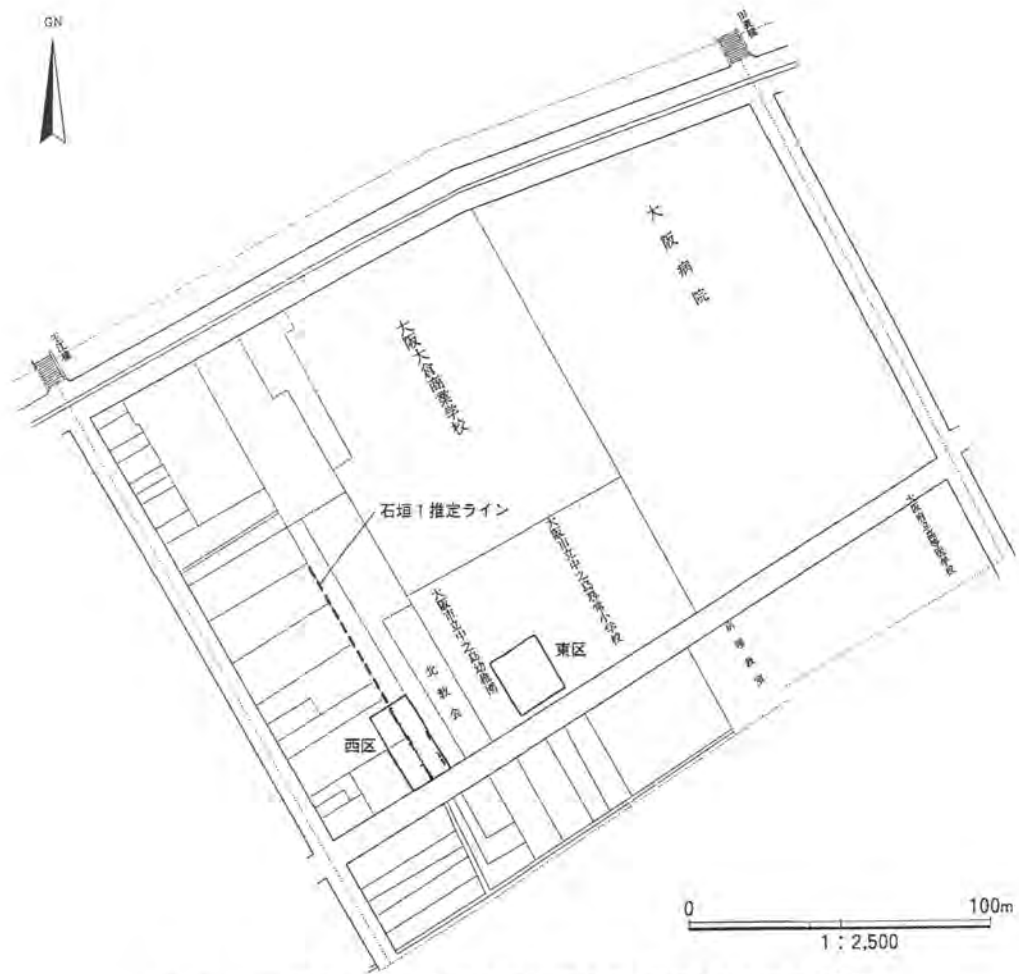


図19 1911(明治44)年『大阪地籍図』に見える敷地境界と石垣1の位置

引用・参考文献

大阪大学埋蔵文化財調査室2003、『久留米藩蔵屋敷跡』

大阪市文化財協会2003、『広島藩大坂蔵屋敷跡』I

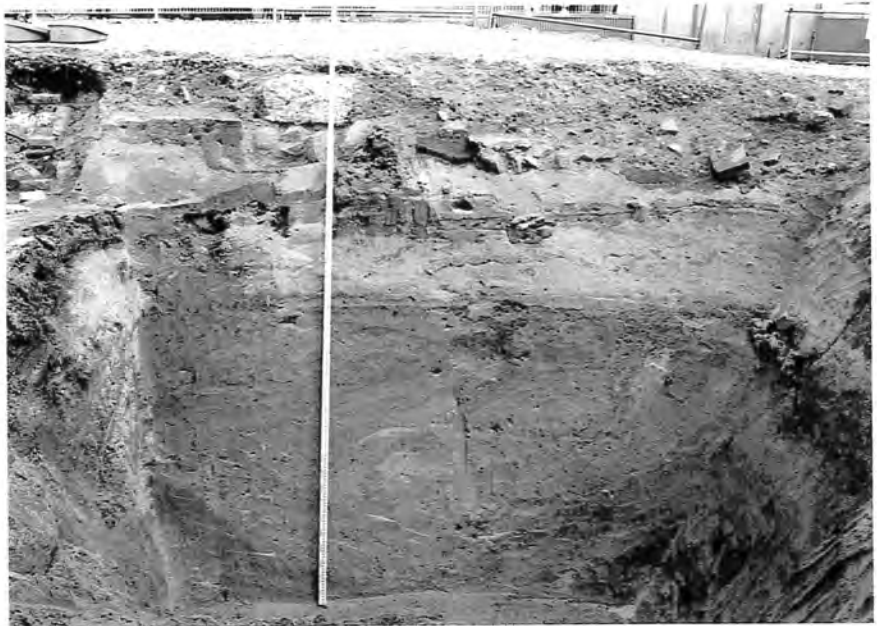
大阪市文化財協会2004、『広島藩大坂蔵屋敷跡』II

大阪市文化財協会2006、『中之島4丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(NX06-1)報告書』

長友朋子2003、「大坂図と絵図屏風からみた大坂蔵屋敷—久留米藩蔵屋敷を中心として—」：『久留米藩蔵屋敷跡』大阪
大学埋蔵文化財調査室、pp.77-89

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮烙」：『難波宮址の研究』第九、pp.373-400

東区東壁南端部の
地層断面
(北から)



西区南壁の
地層断面全景
(北から)



東区第5層上面の遺構
(北から)



東区第5層上面の
礎石建物
(南から)



東区第5層上面および層内
の礎石建物の重複状況
(南から)



西区第5層上面の遺構
(北から)



西区第4層上面の
遺構検出状況
(西から)



西区第5層上面の
礎石建物SB507
(東から)



西区第5層上面の礎石
建物SB503と石垣1
(南から)



西区第8層上面の遺構
(北から)



西区第8層上面から構築された石垣1(東から)

II 中 央 区

難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW06-1)報告書

調査個所 大阪市中央区上町1丁目23-20、16
調査面積 20m²
調査期間 平成18年4月3日～平成18年4月5日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、小田木富慈美

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は難波宮跡公園の南方約250m、前期難波宮「朱雀門」跡の南方約100mに位置する(図1)。現在設定している難波宮の中軸線は調査区内を通っている。ゆえに、難波京朱雀大路が存在すれば、本調査区内を通ることになる。付近では、東および西の敷地でNW118・124次調査がそれぞれ行われているほか、南東でNW148次調査、南西でNW96-15次調査が行われるなど、数多くの調査が実施され、多大な成果が得られている。これらの調査では、前期難波宮造営に伴うと考えられる整地層が認められ、NW96-15次調査で確認された難波宮期の整地層は、最大で厚さ1.3mに及んでいた[大阪市文化財協会1999]。このほかにも、周辺では縄文時代の遺物のほか、豊臣～徳川期の建物跡などの遺構が検出されている。

調査地では、平成18年3月に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、段丘構成層上面で柱穴または土壌と思われる遺構が確認されたため、本調査を行うことになった(図2)。調査では、周辺の調査で確認されたような古代～中世、豊臣～徳川期の遺構の拡がりを確認することが期待された。

調査は平成18年4月3日に開始した。現代および近世の盛土層を重機によって除去し、それ以下の段丘構成層上面までを人力で掘削した。段丘構成層上面では古代～近世にかけての遺構を検出し、適宜写真撮影と記録作業を行った。4月5日に埋戻しを行い、発掘調査に関する基本的な作業をすべて終了した。本報告で使用した方位は磁北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文および挿図中ではTP+〇mと略記する。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

調査では段丘構成層の上面に中世～近世の地層が良好な状態で残存していた。各層の上面および下面では遺構が検出された。以下で各層の



図1 調査地の位置



図2 調査区周辺図



図3 地層断面模式図

特徴について述べる。

現代盛土層：厚さ40cm未満で、下部は焼土を多く含み、第二次世界大戦にともなう可能性がある。

第1層：層厚60cm未満の暗褐色粗粒砂質シルト～中粒砂質シルト層である。本層は第1a～1c層の3枚に細分される。出土遺物は江戸時代の国産陶磁器・土器類および瓦類である。

第2層：含礫褐色粘土質シルト～中粒砂層で、層厚は20cm未満である。本層は調査区の西半に分布する。出土遺物は土師器・

須恵器の破片のみであり、時期の特定は困難だが、難波宮廃絶後に堆積した地層の可能性がある。本層の上面では豊臣期以降と考えられる柱穴、下面では東西方向の溝が検出された。

第3層：褐色中粒砂～粘土質シルト層で、段丘構成層の偽礫をわずかに含む。南西で検出した落込み内の下部でのみ認められた。層厚は10cm未満である。出土遺物は土師器細片のみであるため断定はできないが、NW96-15次調査で確認された古代の整地層に当る可能性がある。

第4層：明褐色砂礫層で、段丘構成層である。上面の標高

はTP+17.0m前後である。本層上位の第1層基底面では豊臣期以降と考えられる柱穴・土壌を検出した。

(i) 遺構と遺物(図4・5)

a. 中世以前の遺構

第2層下面では調査区の北西で東西方向のSD201が検出された。調査区の中ほどで北へ屈曲している。幅は0.7m、深さは0.1m未満であった。埋土は第2層の含礫褐色粘土質シルト層で、土師器細片が出土した。

第4層上面では落込みが検出された。SX201は調査区の南西で検出された南へ傾斜する落込みである。南側はSX101に切られている。埋土の上部は第2層、下部は第3層である。深さは南端で0.2m未満であった。土師器・須恵器の細片が出土している。

b. 近世の遺構

第2層上面および第4層の上位の第1層基底面では、東西方向に並ぶ柱列を2条検出した。これらは建物の一部の可能性があるが、調査範囲が狭いため、組合せを詳細に検討することができなかった。

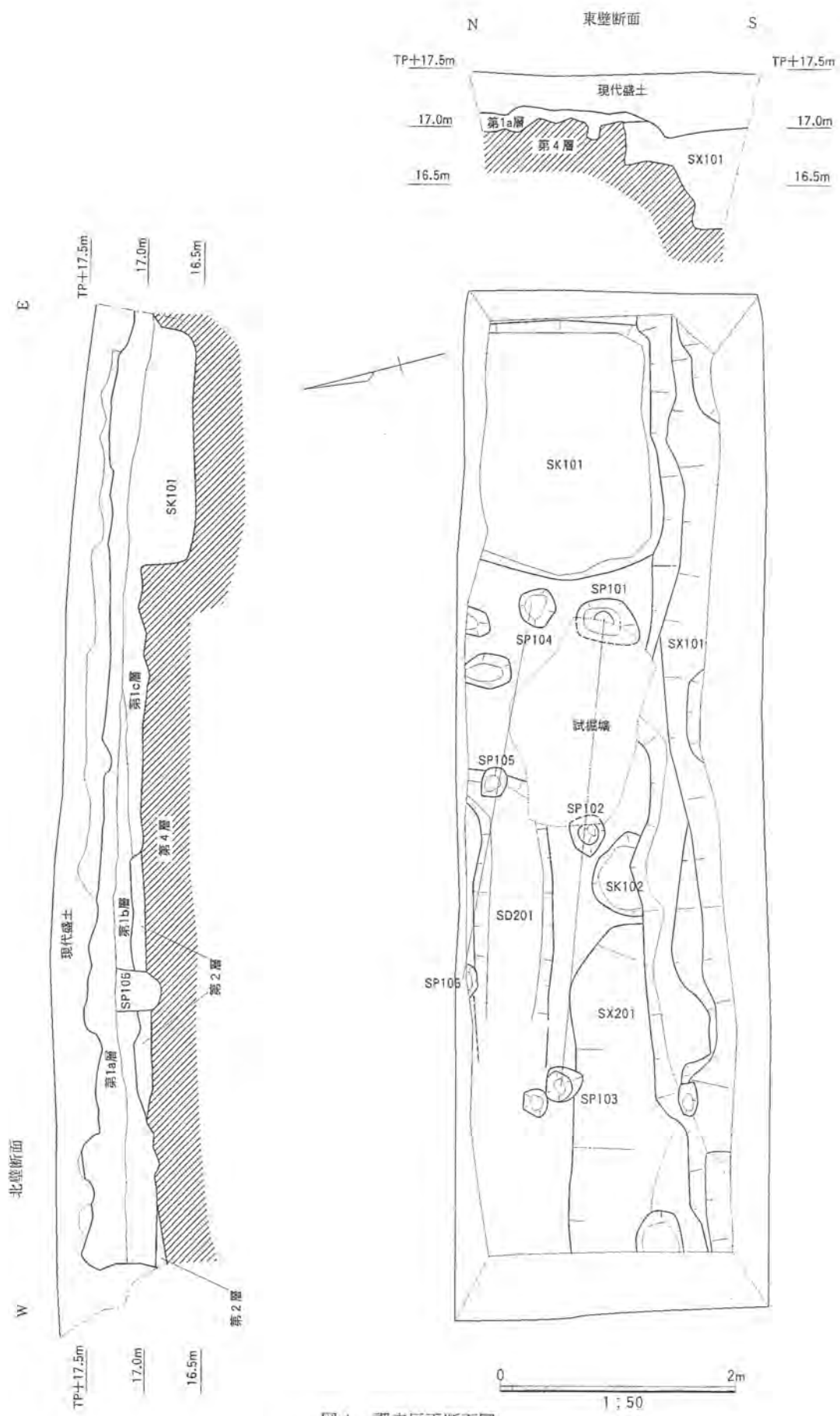


图4 調査区平断面图

SP101～103、SP104～106がそれぞれ東西に並んで検出されている。SP101～103は直径0.3～0.6m、検出面からの深さが0.5mで、直径0.2mの柱痕跡が明瞭であった。SP104～106は直径0.3m、深さが0.3mで、柱痕跡は確認されなかった。出土遺物は土師器と瀬戸美濃焼陶器の細片のみであり、時期については特定できない。NW96-15次調査でもこれと類似した江戸時代後半の建物が検出されている。このことから、今回の調査で検出された建物も、同時期になる可能性がある。

第1層中および下面、第4層上位の第1層基底面では、土壇2基および廃棄土壇、多数のピットが確認された。

調査区の東端では、第1c層の下面で土壇SK101を検出した。SK101は平面形が長方形で、東西2.2m、南北1.5mで、深さは0.4mであった。埋土は黒褐色粘土質シルトで、出土遺物は肥前磁器碗・皿、関西系陶器、丹波焼で、18世紀前半のものが中心となる。1は肥前磁器染付蓋付鉢の蓋で、18世紀前葉のものであろう。2は関西系陶器土瓶の蓋で、鉄釉を施している。

SK102は調査区の中央で検出された円形の土壇で、直径0.7m、深さは0.2mであった。埋土は炭を含む黒褐色粘土質シルトで、肥前磁器・肥前京焼風陶器・関西系陶器が出土した。3は肥前磁器染付鉢で、18世紀後葉のものであろう。

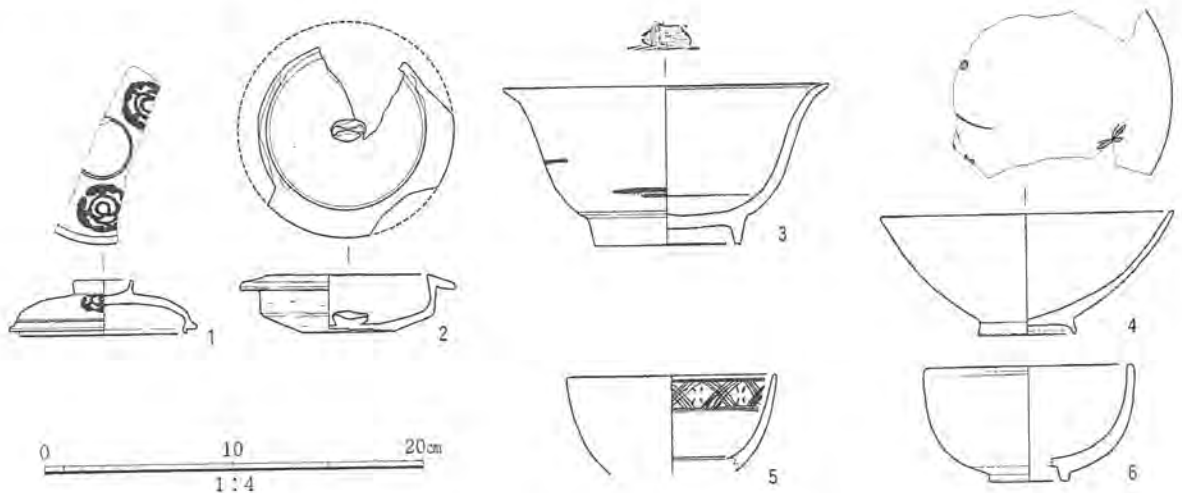


図5 出土遺物実測図

SK101(1・2)、SK102(3)、SX101(4～6)

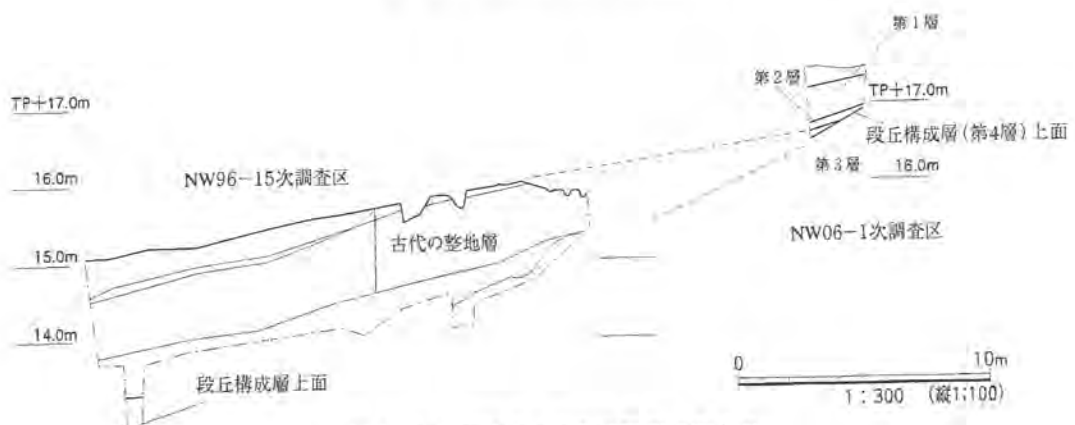


図6 調査区周辺の南北地層断面模式図

SX101は調査区の南壁沿いで検出された複数の廃棄土壌が重なりあった遺構である。埋土は黒褐色砂～粘土質シルトで、18世紀～19世紀初頭までの国産陶磁器・土器類、瓦が出土している。4～6はSX101から出土した。4は肥前磁器染付碗である。内面には蝶の文様を描く。5は肥前青磁染付碗で、口縁部内面に四方禰文が巡る。6は関西系陶器の丸碗である。これらは18世紀後葉から19世紀初頭のものであろう。

以上のほかにもピットが数基確認されたが、詳細については不明である。

3)まとめ

今回の調査では古代にさかのぼる可能性のある遺構として、難波宮廃絶後と考えられる地層で埋まる東西方向の溝SD201を確認することができた。この溝が条坊に関連するものであるかについては、周辺の調査成果を併せて検討する必要があるだろう。ただし、後述するように調査区の南は、当時も一段低い地形となっており、標高の高い部分になんらかの区画のための溝が存在した可能性は否定できないだろう。

ここで、南西のNW96-15次調査で確認された段丘構成層上面の標高をみると、調査区の南端ではTP+14m前後であり、今回の調査地からは約3m下がっている(図6)。この上を覆う古代の整地層上面の高さは、TP+16～15mであり、現状でも約1mの段差が残っている。江戸時代の廃棄土壌はこの段差を意識して掘削されたものであろう。

なお、確実に豊臣期に属すると考えられる整地層および遺構は、今回の調査では検出できなかった。また、縄文時代の遺構・遺物も確認されなかった。

参考文献

大阪市文化財協会1999、「NW96-15次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1996年度-』、pp.134-136

調査区北壁地層断面
(南西から)



第4層上面遺構
検出状況
(西から)



SX201断面
(東から)



難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW06-2)報告書

調査個所 大阪市中央区内久宝寺町2丁目9-1他
調査面積 408m²
調査期間 平成18年7月10日～平成18年9月29日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査担当課長 南秀雄・藤田幸夫

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は飛鳥～奈良時代の宮殿であった難波宮朝堂院の南西部に当る(図1)。今回の調査区周辺ではこれまで数度の調査が実施されており、前期難波宮造営前には谷が存在したことが明らかになっていた(図2・3)[寺井誠2004]。特に西側で実施したNW90-7次調査においては谷の埋土から多量の古代の土器とともに、ウシ・ウマの骨が出土しており本調査でも同様な成果が予想される場所であった。

今回、表記の建設計画に基づき、大阪市教育委員会が実施した試掘調査の結果、地表下5m前後で古代遺物包含層が検出されたが、地山面は検出されなかった。この試掘結果に基づき、近世から古代までの調査を実施することとなった。

調査は敷地内に残土を仮置きする関係から、東西に2分割して実施することとした。また、谷の埋土および地山面を検出するためには多量の残土が発生することから、調査期間等も鑑み、以下の方法で調査を実施した。

先ず、東区の調査では層序の確認を主とし、各遺構面について調査を実施した。西区では、東区の知見をもとに、後述する第1層上面、第3層上面、さらに第6層以下の調査に重点をおいて実施した。なお、安全上の関係から掘削は地表下5.6mまでにとどめた。

掘削の方法は、近・現代層を重機で掘削し、それ以下については人力で掘削した。

なお、本報告で用いた方位は磁北で、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序

本調査地は[寺井2004](図2)の龍造寺谷の谷頭に近く、谷の北西斜面に当る。現地表下には、層厚100cm内外の現代盛土層・整地層(第0層)と、上町台地を構成する更新統との間に、10層以上からなる古代～近世の主として人為層からなる地層が厚く分布した(図4・5)。

第1層：黄褐色の砂礫および粘土質シルト偽礫を主体とする盛土層および整地層である。層厚は最大で150cmあり、調査地の北東側から南西側へ順次盛土されていた。本層の上面は近代以降の攪乱に



図1 調査地位置図

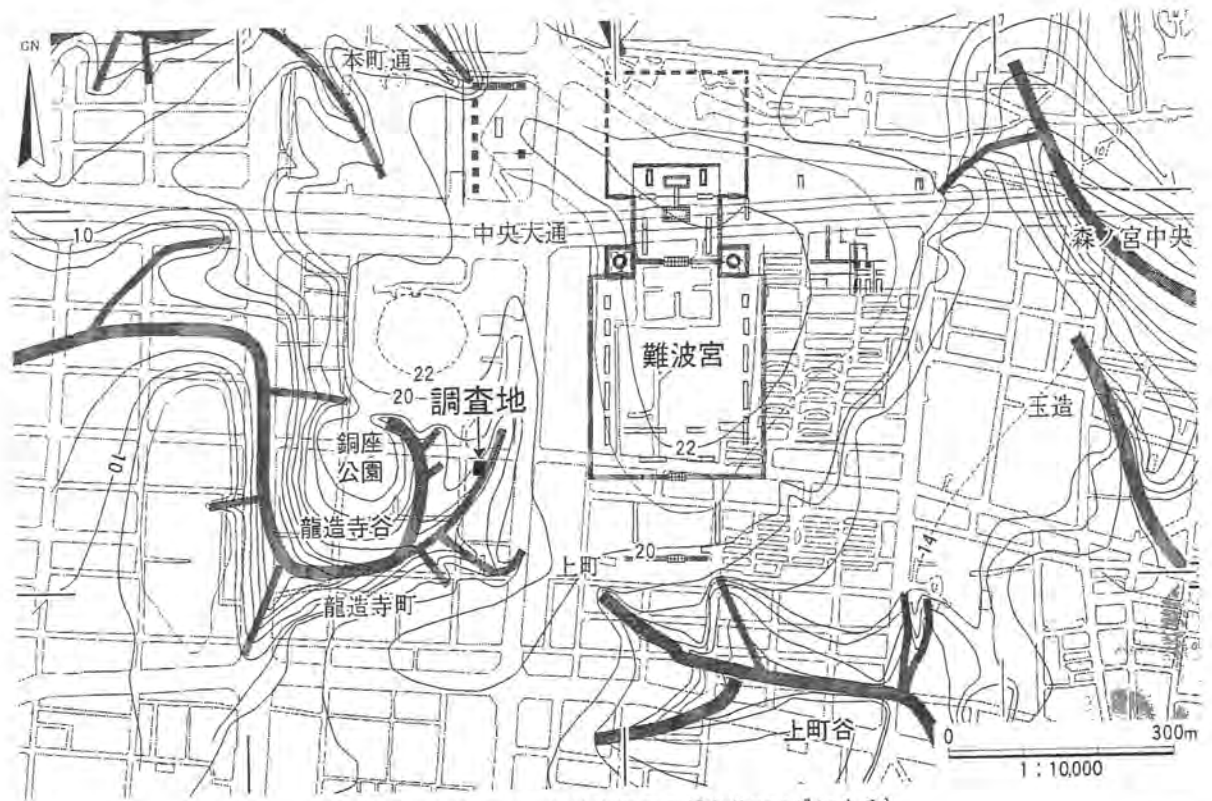


図2 難波宮跡周辺の旧地形復原図([寺井2004]による)

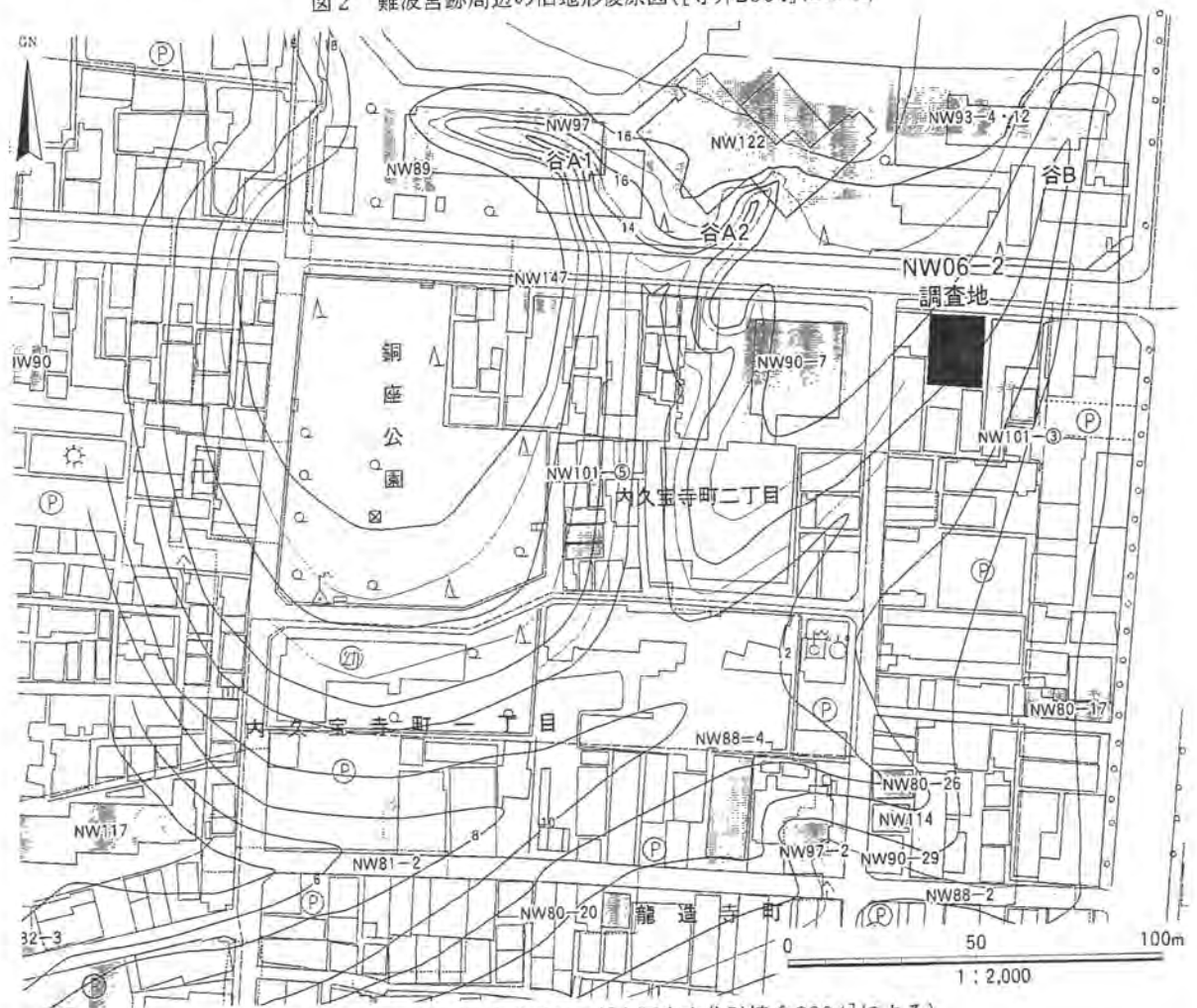


図3 調査地周辺旧地形復原図([大阪市文化財協会2004]による)

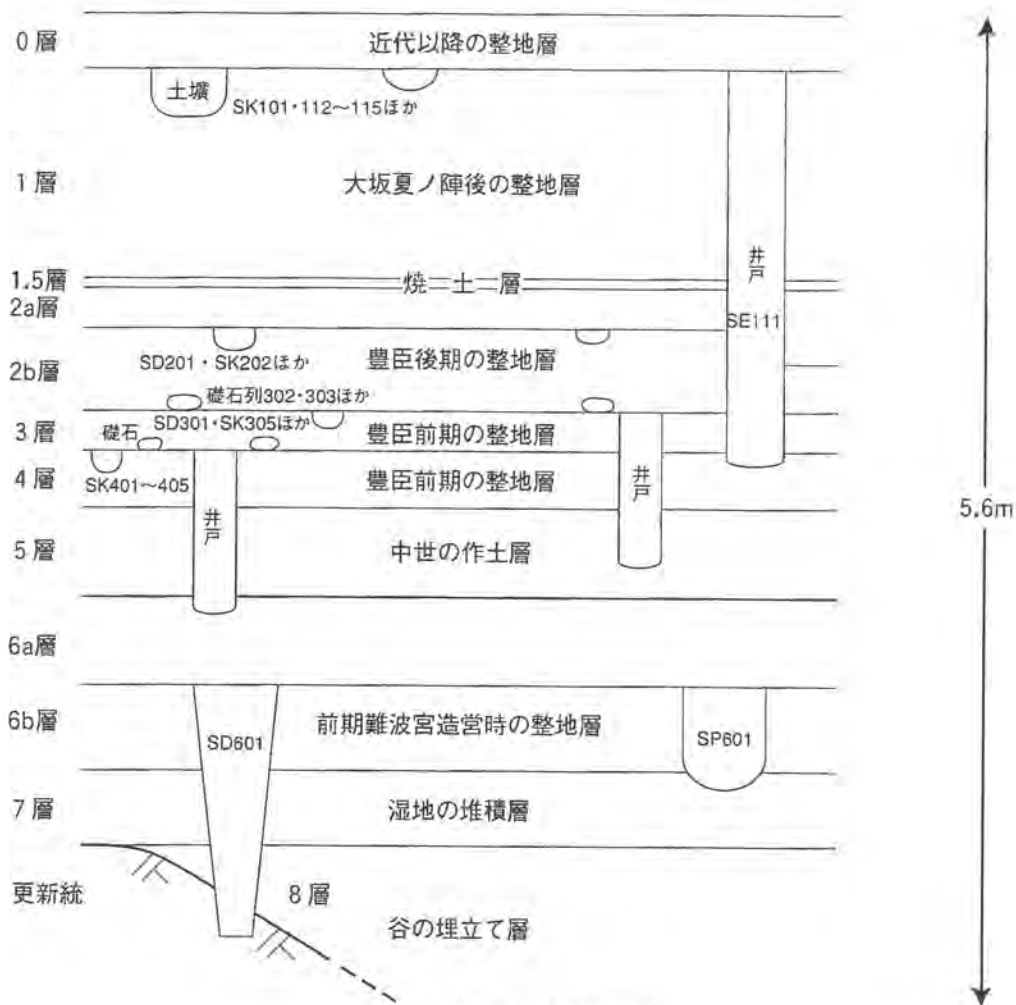


図4 地層と遺構の関係図

より削平されているが、本層は出土遺物から大坂夏ノ陣後の整地層とみられる。上面ではSK101・112をはじめとして、18～19世紀代の遺物を含む土壌や井戸を多数検出した。

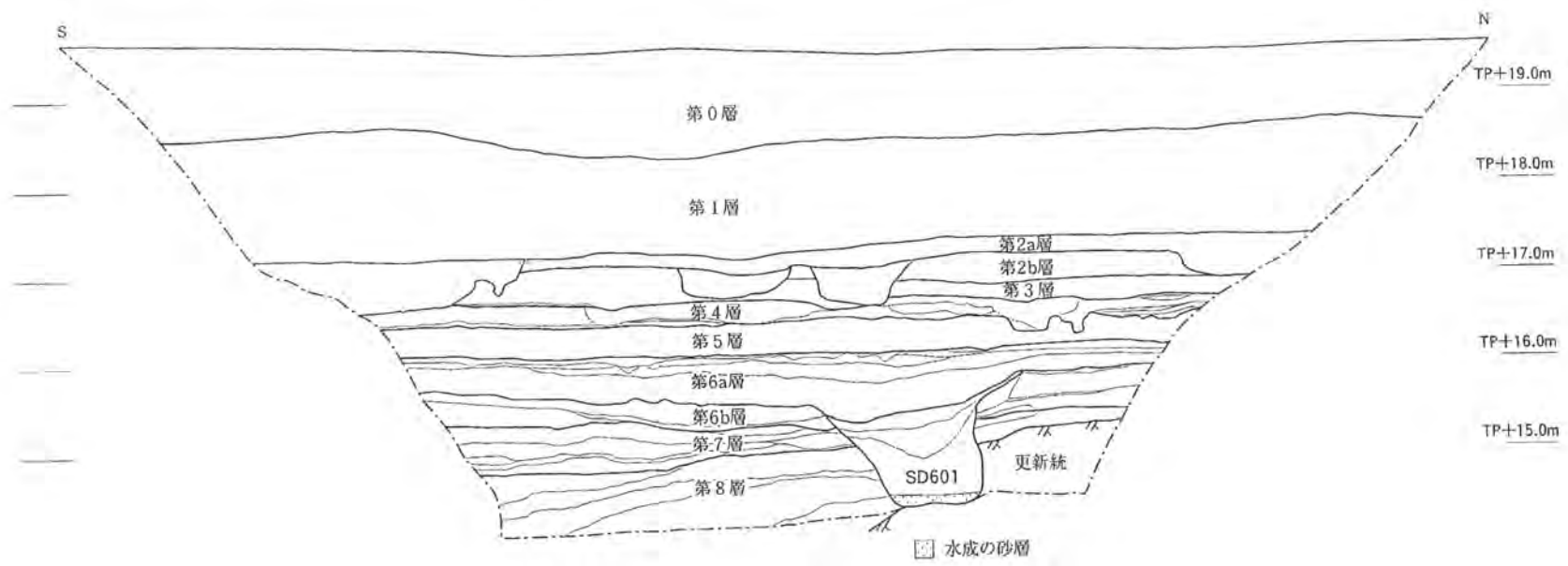
第1.5層：東区で第1層と第2層の間に挟まれる薄い焼土層であり、層厚は数cmであった。層序関係と岩相から、大坂夏ノ陣の焼土層とみられる。

第2a層：暗褐色礫混り砂質シルト層で、層厚は15～20cmであった。作土層であった可能性があり、上部数cmは暗灰色を呈した。

第2b層：灰色の礫混り砂質シルトを主体とする整地層であり、層厚は約30cmであった。本層からは瀬戸美濃焼などが出土し、豊臣後期の整地層とみられる。また、本層の上面でSD201・SK202などの溝や土壌が見つかった。

第3層：オリーブ褐色細粒砂質シルトを主体とする整地層で、層厚は20～50cmであった。土師器のほか豊臣前期の遺物が出土した。また、本層の上面ではSD301や礎石列302・303、水溜304ほかの遺構が見つかった。

第4層：黒褐色シルト薄層や明黄褐色砂質シルト薄層の互層からなる整地層で、層厚は20～30cmであった。上面にSK401～405などの土壌や井戸が見つかった。肥前陶器のほか豊臣前期の遺物を含む。



第0層：近代以降の整地層
 第1層：大坂夏ノ陣後の整地層
 第2a・b層：豊臣後期の整地層
 第3層：豊臣前期の整地層
 第4層：豊臣前期の整地層

第5層：中世の作土層
 第6a層：難波宮の整地層
 第6b層：前期難波宮の整地層
 第7層：前期難波宮以前の谷の埋立て層（木簡出土層）
 第8層：谷の埋立て層

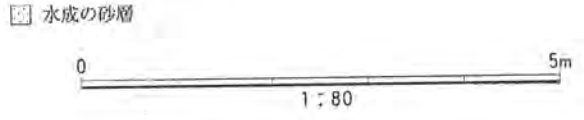


図5 西区西壁断面図

第5層：暗オリーブ灰色の砂質粘土を主体とし、上部数cmは黒褐色シルト質粘土の薄層が覆う水田の作土層である。層厚は40cm前後であった。下半部20cmはやや淡色で粗粒砂が多く混り、上半部と区分できる。層序関係から、豊臣前期の城下町造成直前の中世作土層とみられる。

第6層は後述するSD601の遺構面を境にして上下に二分される。本層には7世紀中頃の須恵器・土師器などの遺物が含まれ、難波宮造営時の整地層とみられる。

第6a層：灰黄褐色～黄灰色の砂質シルト・シルト質砂、および更新統の黄褐色シルトの偽礫などからなる整地層であり、層厚はSD601の北西側では30cm前後、同南東側では40～60cmで、SD601の上では窪みを埋立てて最大70cmであった。

第6b層：にぶい黄褐色を主たる色調とする砂質粘土の偽礫および砂質シルトからなる整地層であり、層厚は20～50cmであった。本層の上面でSD601・SP601を検出した。

第7層：上半部20～40cmの黒褐色粗粒砂質シルトを主体とし、下部に最大層厚12cmの植物遺体層を挟む水つきの堆積層と、下半部5～20cmの褐灰色砂質シルトの不定形な偽礫と同質の基質を主体とし、下底に炭層を伴う偽礫層からなる。谷の埋立て時の小休止期にできたらしい湿地の堆積層である。本層からは7世紀中頃の須恵器・土師器のほか、炭・土器・木製品・木簡など多くの遺物が出土した。

第8層：灰・黒・褐色などの細粒砂質シルト層が積み重なる締まりの良い谷の埋立て層であり、層厚は80cm以上あった。下位の更新統の斜面に沿って、北西側から南東側へ順次盛土されていた。7世紀中頃の土師器・須恵器が出土した。

更新統：灰黄色砂質粘土層で、調査地の西区北西部で検出した。分布高度は最高点でTP+15.6mであった。

ii) 遺構とその遺物

前期難波宮の遺構(図6)

SD601 西区の第6b層上面で検出した溝である。幅約1.3m、深さ約1.3mの溝で、その方向は北東～南西で谷の落ち際に沿って構築されていたと推定される。溝内堆積状況は底から10～15cmに機能時堆積の細粒砂が堆積し、その上位はシルト質粘土の偽礫で埋められていた。この溝はその位置から考えて前期難波宮内からの排水を目的として構築されたことが推測される。

SP601 西区の北西部で検出した柱穴である。調査では第7層上面で識別したが、本来は第6b層上面から掘り込まれたものと思われる。一辺約0.9mの隅丸方形で、深さは約0.9mあるものと考えられる。中央部に柱痕跡と推定する個所があったため、その部分で柱穴を断ち割って断面観察を行ったが、柱痕跡の推定部は柱穴の底までは達していなかった。また、今回の調査で検出した柱穴は1基だけであり、その上部構造については明らかにできなかった。

豊臣前期の遺構と遺物(図7・8・11)

当該期の遺構は東区の第4層ならびに東西両区の第3層上面で検出した。先に東区第4層上面の遺構を述べる。第4層上面の遺構は400番台で示し、第3層上面の遺構は300番台で示す。

SK401 南部で検出した南北1.2m、東西0.9mの長方形を呈する土壇で、深さは約0.2mである。

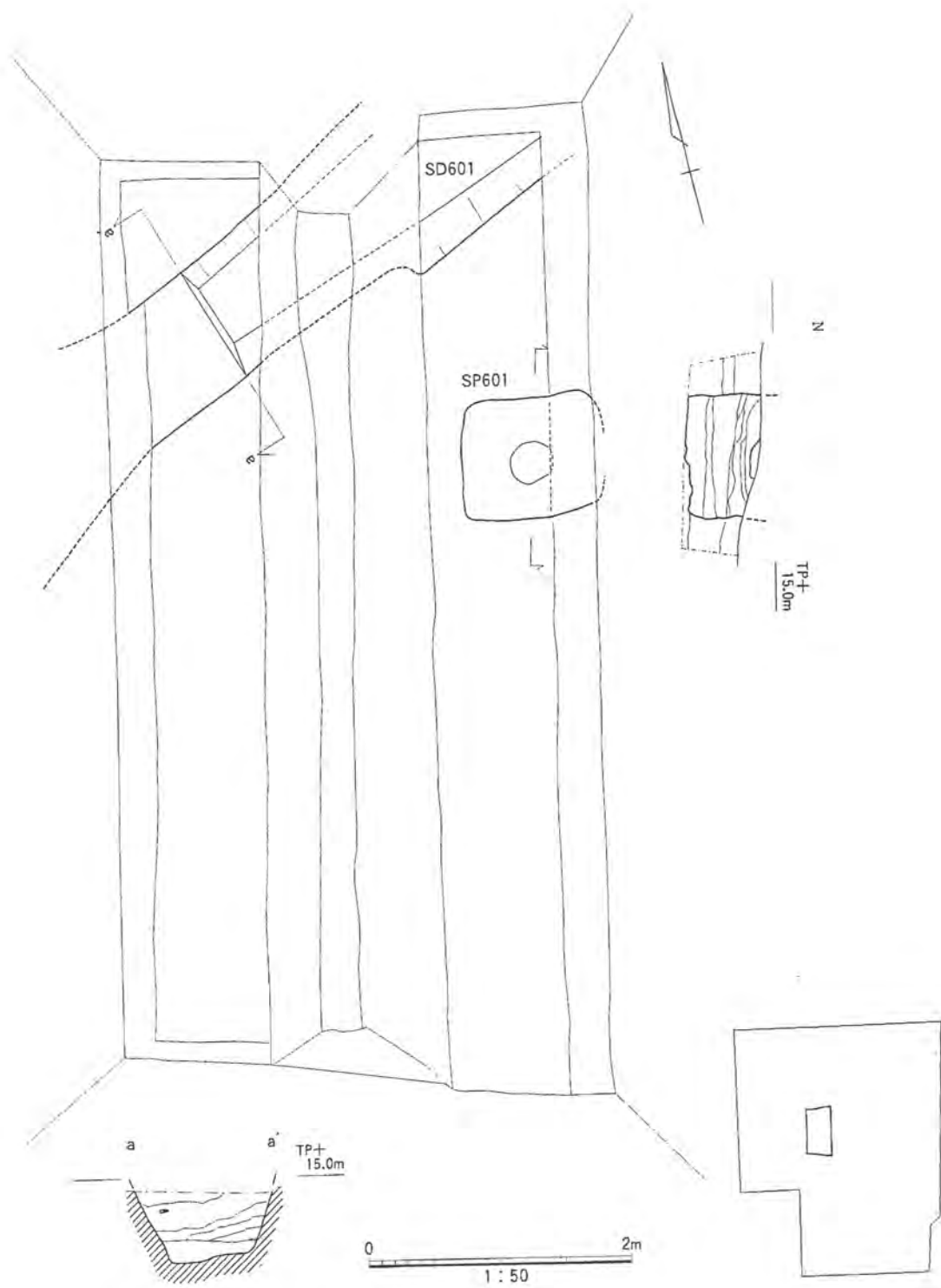


图 6 SP601 · SD601平断面图

SK402 東西1.6m、南北0.6mの長方形を呈する土壌である。深さは約0.2mである。この遺構からは瀬戸美濃焼鉄釉小碗7が出土した。口縁部が外反して体部と高台との境が段をなすなど、小型の天目碗の形態である。

SK403 東西2.3m以上、南北3.4m以上の土壌である。深さは最深部で約0.2mである。

SK404 東西2.7m以上、南北5.5m以上の不定形を呈した土壌である。深さは約0.2mであるが、中央部に一段深くなる個所があり、最深部は約0.4mである。

SK405 東西3.7m以上、南北1.3m以上の不定形を呈した土壌で、最深部は約0.2mである。

以上の土壌の埋土はいずれも暗褐色の細粒砂質シルトである。

SD301(図8) 第3層上面で検出した溝で幅約1.2mの東西方向の溝である。深さ約0.4mで南側の一部に石列をもつものである。対応する北側には石が数個散在するだけであり、本来両側に石列を持つものであるかは不明である。埋土は上位は黒褐色シルトで有機物を多く含み、下位は暗灰色の細粒砂質シルトである。

礎石列302 東区の西端で検出した。0.2m前後の石が南北方向に5個並ぶ。その間隔は0.9~1.3mとばらつきがあるが、直線上に並ぶ。

礎石列303 礎石列302の北側で直交するように東西に並ぶ3個の石を検出した。間隔は0.9m前後である。礎石列302とともに建物を構成する可能性がある。

水溜304 東区の東端で検出した遺構である。横板を組み合わせて構築された水溜で、東西0.5m、南北0.4mの長方形を呈する。横板を最大3段重ねており、深さは約0.3mを測る。板の長さは各面の幅に対応し、その幅は約0.1mである。内部に横板を固定するための杭が打ち込んである。埋土は黒褐色のシルトである。

SK305 東区の北端で検出した土壌である。東西0.9m、南北0.6m以上の方形を呈する。深さは最深部で約0.6mである。

SP306 東区の北端で検出した東西0.2m、南北0.3mの長円形を呈する柱穴で、内部には最大長0.2mの石が置かれていた。柱の根石と考えられる。

SK307 西区の北側で検出した不定形の土壌で、東西1.0m、南北0.7m、深さは約2.0mである。埋土は暗灰黄色の細粒砂質シルトである。

SK308 西区で検出した東西0.6m、南北0.9mの長円形を呈する土壌である。深さは約0.5mで、埋土はオリーブ褐色細粒砂質シルトである。

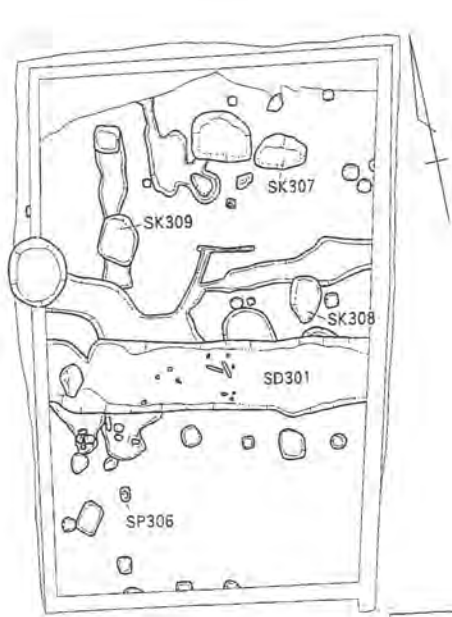
SK309 西区で検出した東西0.8m、南北1.0mの不定形を呈する土壌である。深さは約0.3mと浅く、埋土は明黄褐色細粒砂質シルトである。

豊臣後期の遺構(図7)

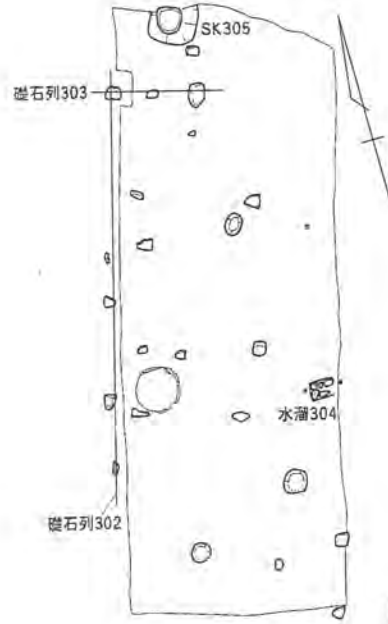
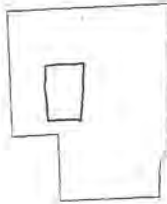
当該期の遺構は東区の第2b層上面で検出した。

SD201 北側で検出した東西方向の溝である。東西1.0m前後で、深さは約0.1~0.2mと浅い。内部には5~10cmの扁平な石が散在していた。

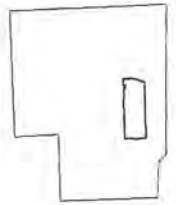
SK202 中央部で検出した東西0.9m、南北0.9mの円形を呈する土壌で、深さは約0.1mである。



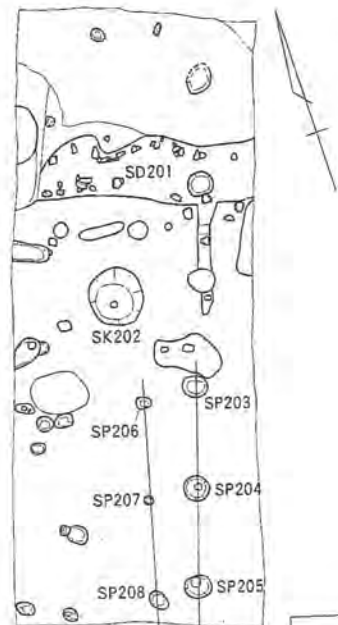
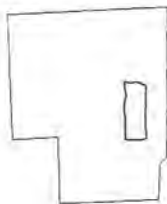
(西区第3層上面遺構)



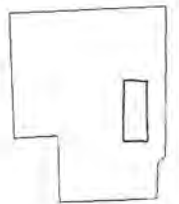
(東区第3層上面遺構)



(東区第4層上面遺構)



(東区第2b層上面遺構)



0 5m
1 : 150

図7 東・西両区第2b～第4層上面遺構実測図

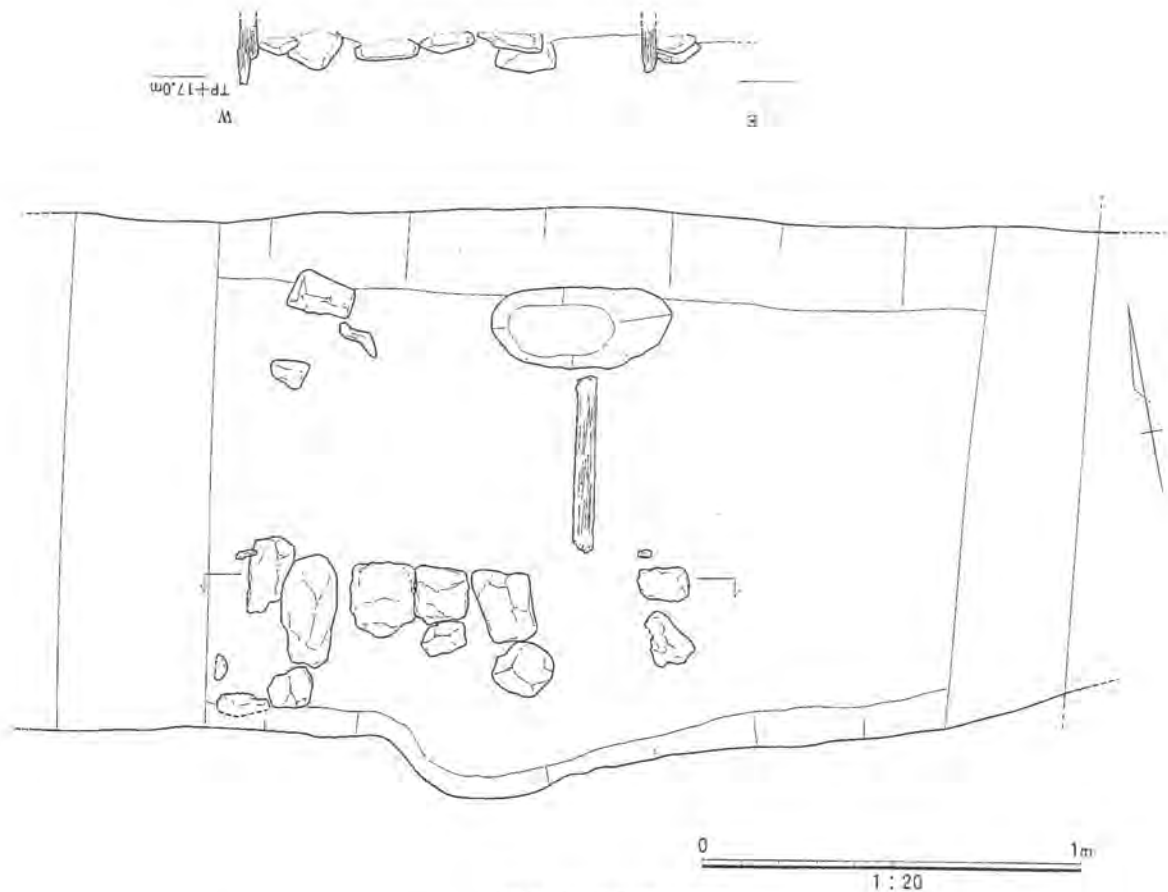


図8 SD301平立面図

SP203 東側で検出した柱穴である。東西0.5m、南北0.4mの楕円形で、深さは約0.2mである。

SP204 SP203の南で検出した直径約0.5mの円形の柱穴で、深さは約0.3mである。

SP205 SP204の南で検出した東西0.6m、南北0.4mの楕円形の柱穴で、深さは約0.3mである。

以上のSP203～205の3基は南北に並び、柱間も約2.0mと等しく建物の柱列と考えられる。

SP206～208 SP203～205の西側に南北に並ぶ3基の柱穴である。SP206は0.2～0.3mの楕円形、SP207は直径約0.2mの円形、SP208は0.3～0.4mの楕円形で、SP203～205に比べると小規模ではあるが、柱間は約2.0mと等しいものである。

江戸時代後期の遺構と遺物(図9・10・11)

東西両地区の第1層上面には18～19世紀代に属する遺構・遺物が検出されたが、東区は現代の建物基礎で攪乱されており、残りは悪かった。以下に東区から主な遺構・遺物について記述する。

SE111 東区から西区にかけて位置する井戸であるが、西側半分は攪乱されていた。掘形は直径約1.5mあり、井戸側は素材が木質であったためか残っていなかった。井戸側内の埋土から堺搦鉢8のほか、陶磁器片が出土した。8は片口部に「長上(読みは右から)」の刻印がある。底部内面の搦目は放射状で、堺搦鉢の中では最古の型式に位置づけられる。

SK112 東区の南部に位置する不整形な土壇で、南北2.2m、東西1.5～2.0m、深さ0.2m前後ある。埋土は黒褐色砂礫混りシルトで、陶磁器片が出土した。

SK113 SK112の南に位置する不整形な土壇で、深さは検出面から約0.1mある。遺構の南側は調

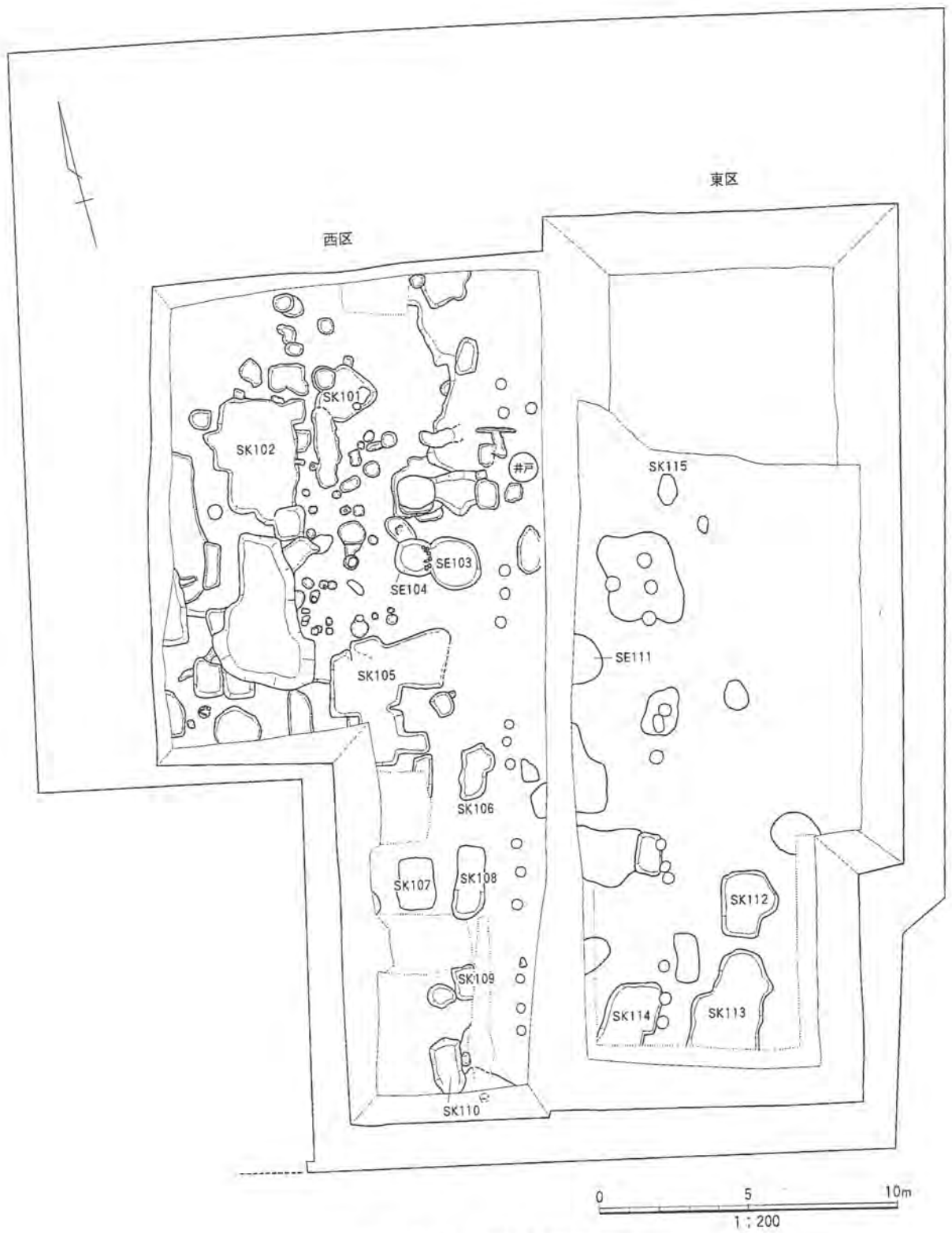


图9 第1層上面検出遺構平面図

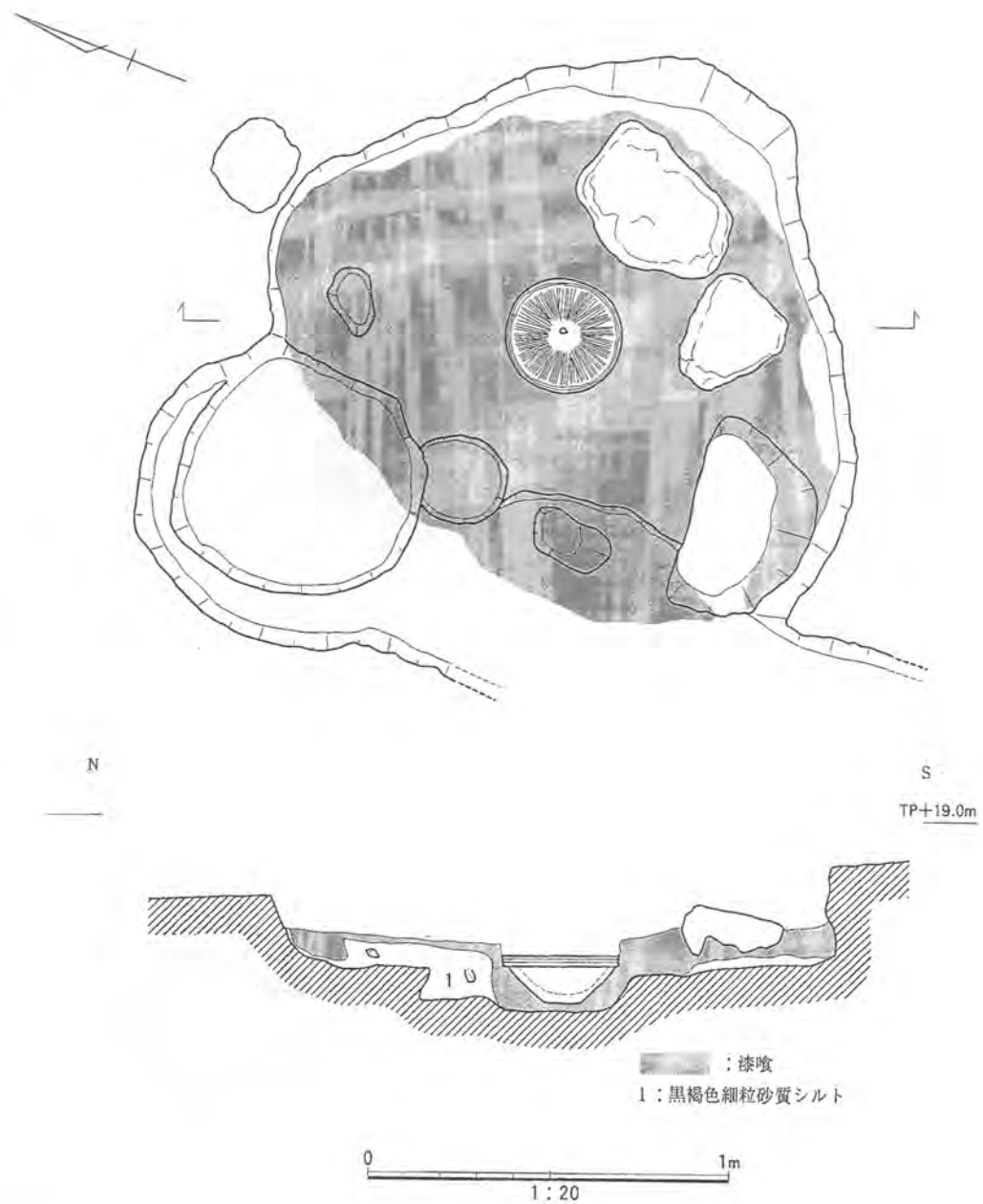


図10 SK101平立面図

査範囲外である。埋土は黒褐色砂礫混りシルトで、播鉢・肥前系陶磁器などが出土した。1・2は肥前磁器染付碗で、1は雨降り文を描き、2は草花文のコンニャク印判を施す。

SK114 東区の南西隅に位置する不整形な土壇で、深さは検出面から約0.3mある。遺構の南側は調査範囲外で、埋土は黒褐色砂礫混りシルトである。肥前磁器碗・土師質土器焙烙・柿釉灯明皿・平瓦などが出土した。3は肥前磁器染付碗で、外面に寿字の丸文と雲のような文様を描く。

SK115 東区の北西部に位置する南北約1m、東西0.6~0.7m、深さ約0.1mの不整形な土壇である。埋土は黒色砂礫混りシルトで、関西系陶器・肥前陶磁器・瀬戸美濃焼・信楽焼・堺播鉢・鞆羽口・

軒平瓦・鉄製品などが出土した。

4・5は関西系陶器で、4の外面は帯状にカンナ削りを施し、鉄釉を掛けたのち白泥で文様を描く。5は鉄釉と白泥とで梅樹文を描いた上から透明釉を掛けている。6は肥前磁器染付八角鉢で、底部外面にガラスで文字が書かれているが、残りが悪くて判読しがたい。

SK101(図10) 地面を掘り窪めて漆喰を貼り(図10の網かけ部分)、その中央部に播鉢を据えている。周囲には石が数個置かれていた。播鉢・石ともに漆喰で固定されており、特に中央部の播鉢は口

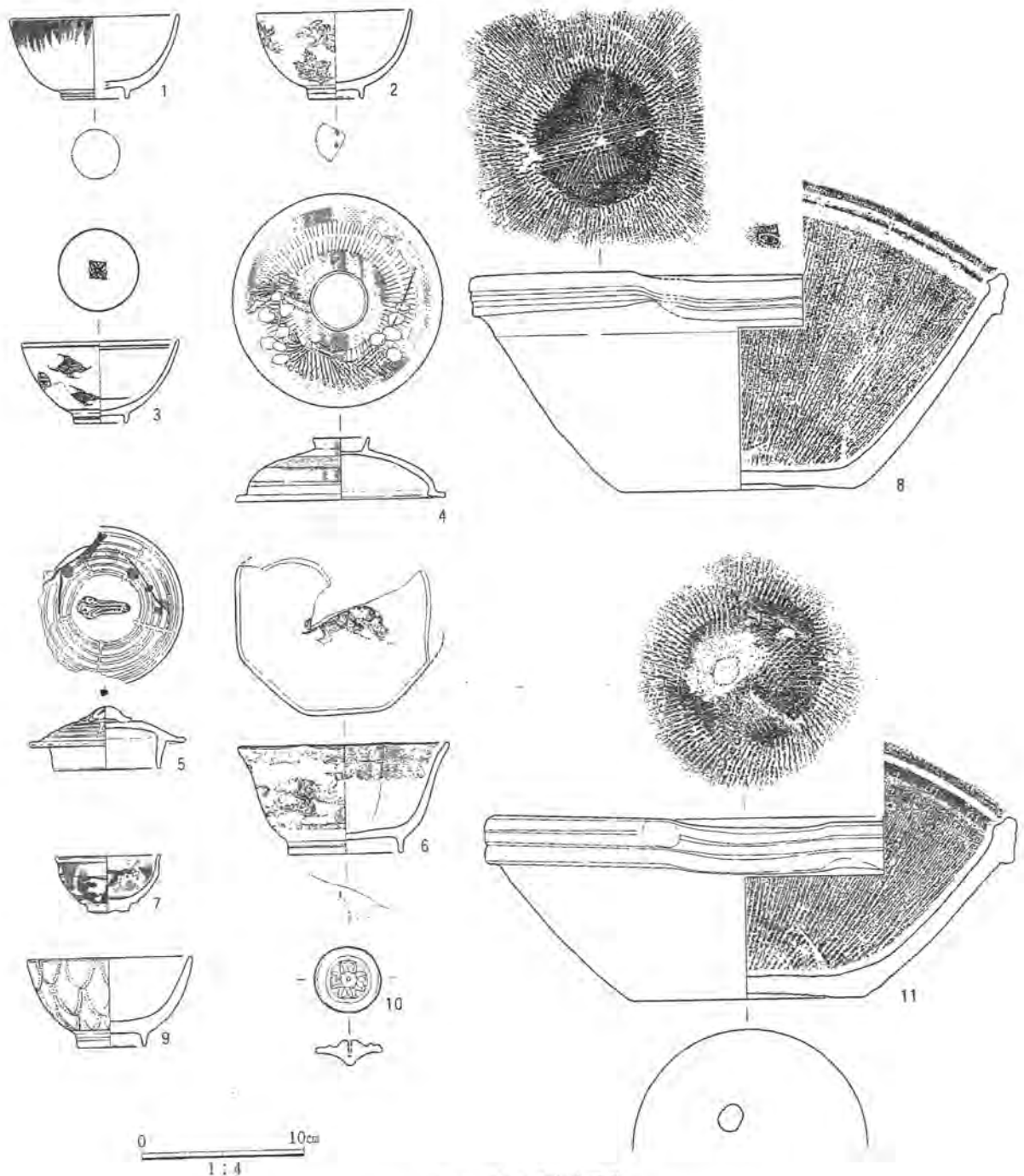


図11 各遺構出土遺物

第4層上面検出遺構(7)、その他は第1層上面検出遺構

縁部までしっかりと固めてあった。播鉢11の底部には小孔が穿たれていた。規模は約1.5mの方形に近い形状を示すもので、一部は後世の遺構により壊されていた。深さは漆喰上面までが0.2mである。この遺構の性格については水溜のようなもので、周囲の石はその踏み石であろう。

SK106 西区の南部、SK108の北側に位置する南北約1.8m、東西0.7～1.2m、深さ約0.2mの不整形な土壌である。埋土は黒褐色細粒砂質シルトで、肥前陶磁器が出土した。

SK107 西区の南部、SK108の西側に位置する南北1.6m、東西1.4m前後、深さ0.2m前後の土壌である。埋土は黒褐色細粒砂質シルトで、焼瓦が多量に出土した。

SK108 西区の南部に位置する南北2.5m、東西1.1m前後、深さ約0.1mの隅丸長方形の土壌である。埋土は黒褐色細粒砂質シルトで、肥前陶磁器・土製品が出土した。9は肥前磁器染付碗で、外面に二重網目文を描く。10は土製の独楽で、型造りである。上面に車輪様の文様がある。

以上のほかにも土壌SK102・105、井戸SE103・104などをはじめ、不整形な土壌や小穴などを検出したが、重複関係が多くあり、性格の判明した遺構は少ない。また、各遺構から出土した遺物の時期であるが、既述したものを含めて18世紀前半から19世紀にかけての範疇におさまるものである。

iii) 各層出土遺物

第8層出土遺物(図12)

第8層からは土師器甕12、須恵器杯H13・14、須恵器高杯15が出土した。12は外面に接合痕が残り、内面にヨコハケが施される。13・14は口縁部の立上がりが短い。いずれも細片であるが、後述する第7層出土の須恵器杯H28～31よりは口径が大きい感がある。15は杯部の破片で、外面に凹線が2条引かれ、その間に櫛描き列点文が施される。

第7層出土遺物(図12～14)

第7層からは土師器杯C16～20、高杯21、ミニチュア高杯22、甕23・24、移動式竈25、須恵器杯H28～31、同蓋26・27、杯G33、同蓋32、壺34、甕35、鞆羽口36が出土した。16～20は内面に放射状の暗文が施され、底部外面については17・19がヘラケズリ、その他はユビオサエで仕上げられる。また、19・20にはヘラミガキが施される。口径から見て10cm前後の16・17、約14cmの18、19cm前後の19・20というまとまりが見られる。21は口径16.0cm、器高10.5cmあり、杯部内面には放射状の暗文が施される。22は手捏ねで作られている。23は外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケののちナデ、体部内面は不定方向のハケで仕上げられ、24は内面ヘラケズリで仕上げられる。25は釜孔と庇が付く焚口の部分が残っている。外面には牛角形把手が付く。内外面ともユビナデによって仕上げられる。

26・27は天井部がヘラ切り後不調整で、口径は11cmである。28～31は底部がヘラ切り後不調整で、口径は9cm前後である。32はやや焼け歪んで、外面には自然釉が付着している。33は底部がヘラ切り後不調整である。34は肩が張り、体部は円筒状で、底部はレンズ状である。体部から底部にかけてはヘラケズリで仕上げられている。内面に黒漆が付着している(図12の網かけ部分)。34については近隣で見られる器形でないことから、漆を入れて搬入されたと思われる。35は口縁部がまっすぐ斜めに延び、外面には櫛描き波状文が施される。36は先端に鉾滓が付着しており、帯状の部分以外は被熱し

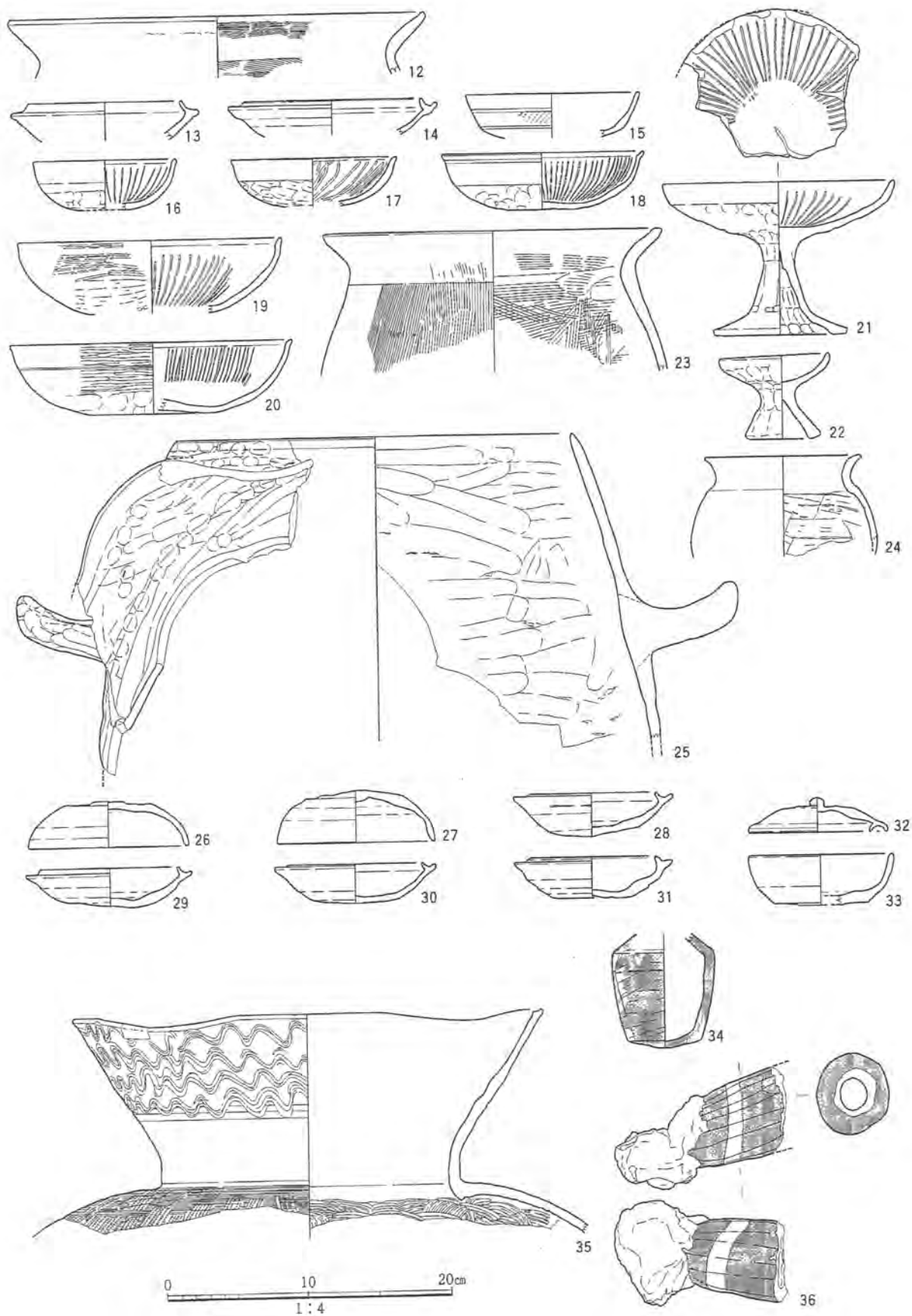


図12 第7・8層出土遺物
第8層(12~15)、その他は第7層

て、におい橙色に変色している(図12の網かけ部分)。なお、鉍滓については分析は行っていない。

以上の土師器・須恵器については難波Ⅲ中段階に位置づけられるものである。また、鞆羽口と漆壺が共伴していることから、当地での鉄器生産を想定させるものである。

37は斎串である。残存長16.4cm、最大幅2.6cm、厚さは0.2cmで、下部は欠損している。頭部は尖らせており、両側面には切り込み1個所が認められる。表裏面ともに丁寧に調整を行っている。表面には変色した個所があり、紐等で何かに固定した痕跡と思われ、使用方法を示唆している。

38・39は板状の木製品である。残存長58.9cm、最大幅2.0cm、厚さ0.5cmと長いものである。下端は尖らせており、上端は欠損している。38は表裏面ともに丁寧に調整しており、後述する木筒と厚さが等しく、木筒の

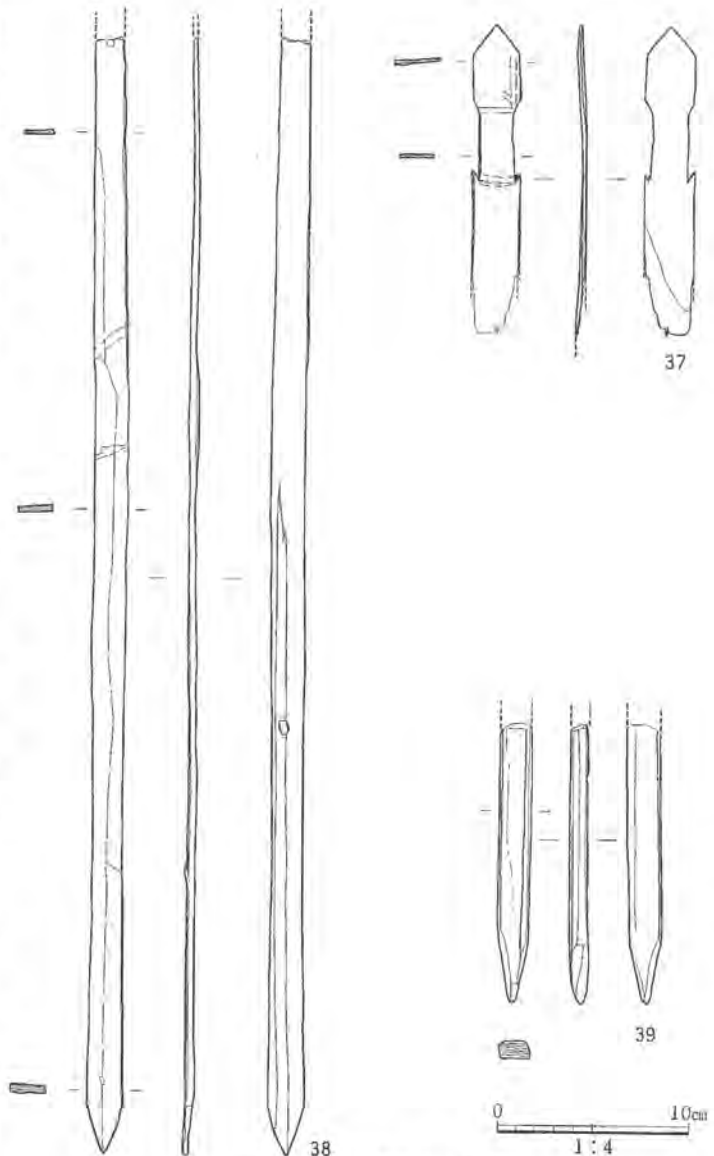


図13 第7層出土木製品

可能性もあるかと考えたが、墨書は認められなかった。用途については確定し難いが、斎串の可能性も考えられよう。39は現存長14.6cm、幅1.2cmで厚さは0.9cmを測る。端部は尖らせているが、頭部は欠損しているため形状については明らかでない。木筒の可能性も考えられたが、墨書は認められなかった。

木筒40(図14)

木筒は長さ18.5cm以上、幅2.65cm、厚さ0.50~0.65cmあり、片面に「皮留久佐乃皮斯米之刀斯□」と11字が完全に残り、12字目をわずかに残して下が欠損している。

まず形状については、幅は均等で、厚さは残っている下端部がもっとも薄い。文字のある面(表)は丁寧に削られているが、文字のない面(裏)は表に比べて粗く削られており、当初から片面のみに書くことを意図したと考えられる。また、表面は図の位置で下から上へ削っている。上端部は表面側を面取りし、丸みを持たせている。側面部も裏面の一方の角を除く三つの角に面取りが見られる。8字目の「米」の左側に欠失部があるが、木の節が取れた痕の可能性はある。

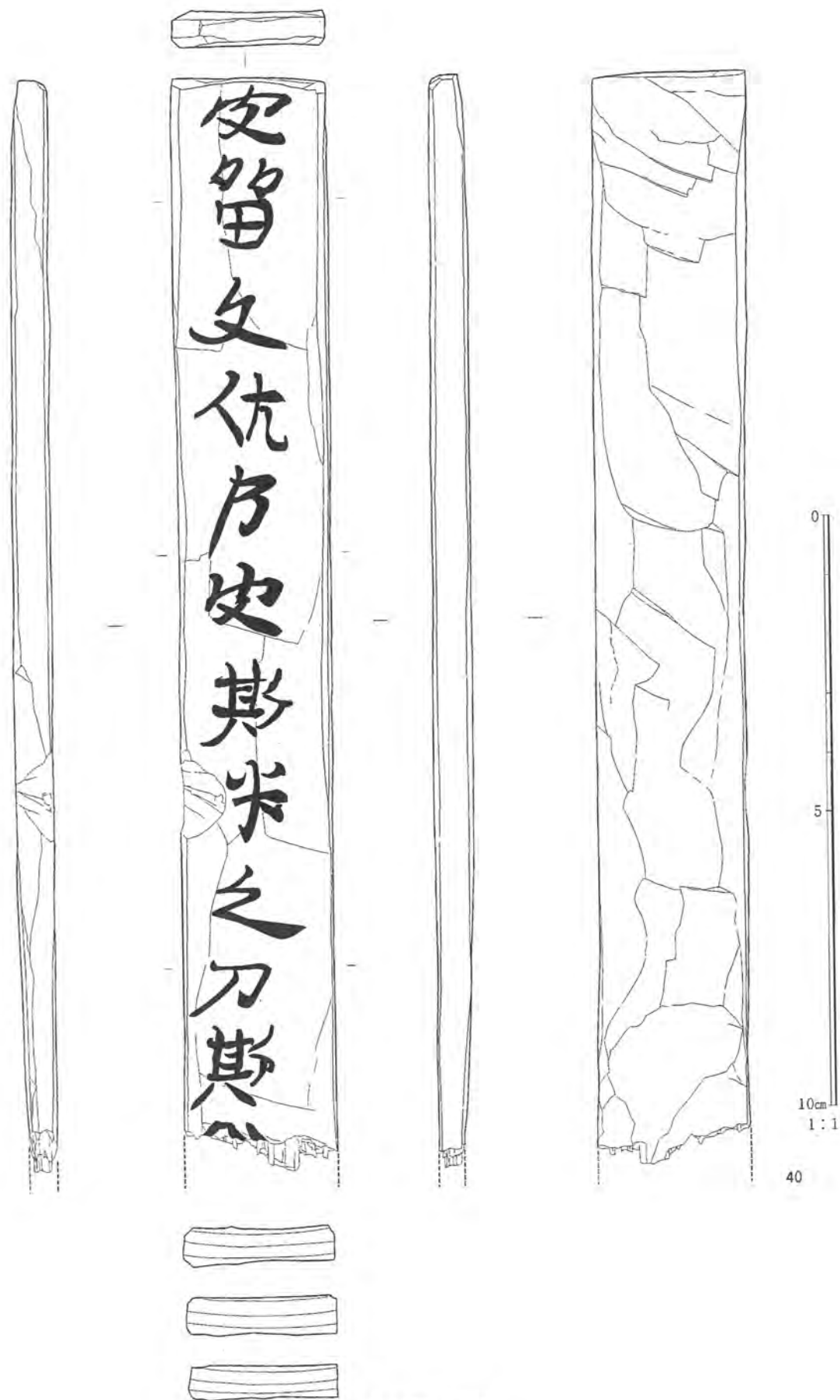


图14 第7层出土木简

文字は赤外線写真のように明瞭に残っており、1字ごとの比定はまちがいないと考えられる。六朝風のしっかりした書体であるという(註1)。1字目を上端ぎりぎりまで詰めて書き始めているのは、全文を木簡の大きさに収めようとしたためと考えられる。文字の書き方や配置からみて、単なる落書や習書とは考え難い。また興味深いのは、先端の尖ったもので文字をそのままなぞった傷がある点である。この痕跡は、前後関係では明らかに文字を書いた後である。それは「佐」「乃」「皮」(6字目の方)「之」「刀」「斯」(11字目の方)の6字にある。また、「刀斯」の右側には同様の先端の尖ったものでつけられた傷があり、この傷は筆を使うように屈曲していたが、文字とは判断できなかった。

読みは、漢字1字を1音に当てて、A:「はるくさのはじめのとし(春草の 初めのとし)」、あるいはB:「はるくさのはじめしとし(春草の 初めしとし)」の可能性が高いと考えられる。「春草の」は「はじめ」を導き出す言葉と考えられ、『万葉集』では「春草の 繁き我が恋 大海の 辺に行く波の 千重に積もりぬ」(巻10・1920)のように枕詞としての用例がある。書かれていたのは散文ではなく、五・七音を重ねた韻文の可能性が高く、和歌ではないかと考えられる。

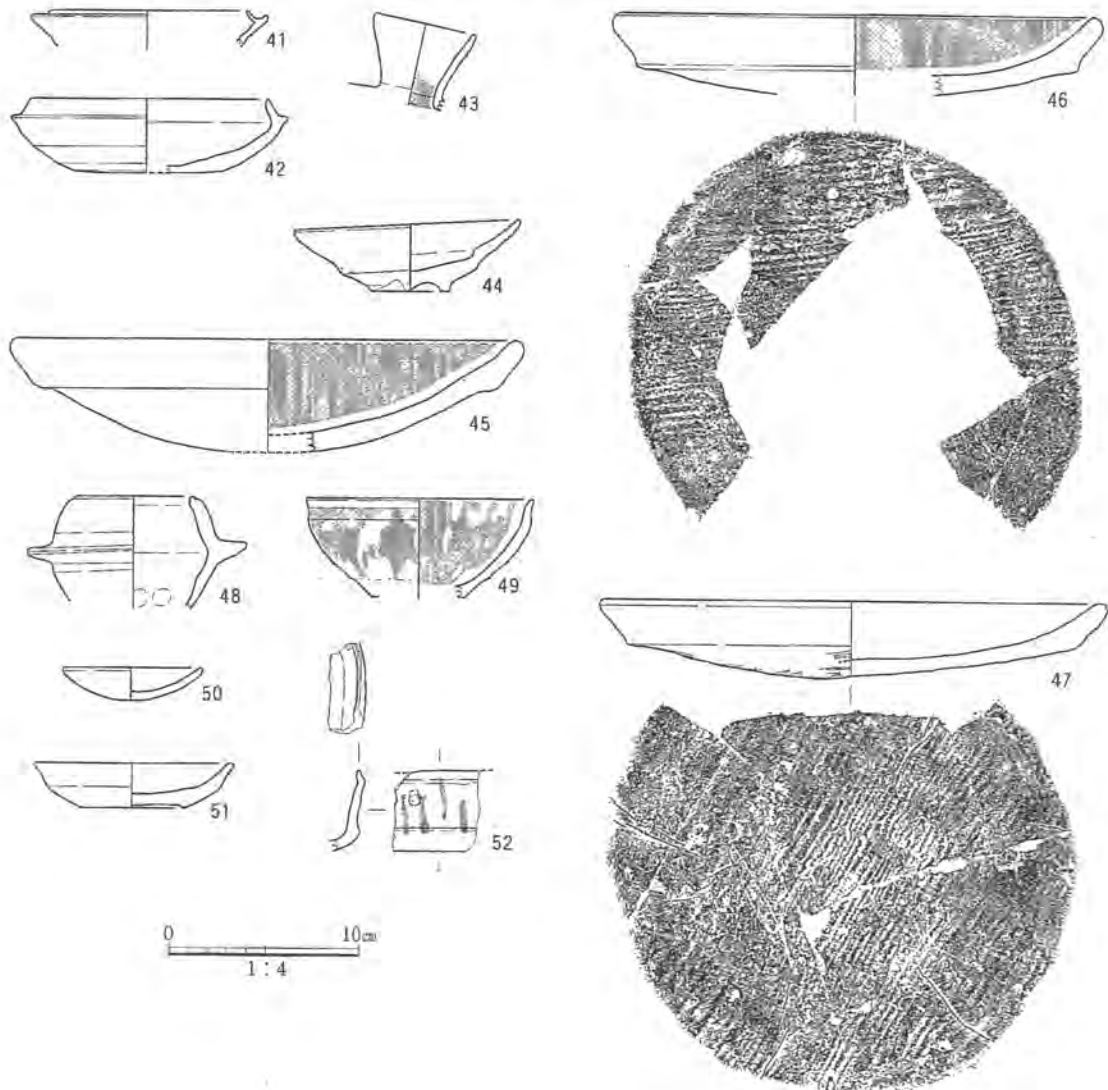


図15 各層出土遺物
第6層(41~43)、第4層(44)、第3層(45~49)、第2b層(50~52)

意味はAの場合、「(春草のように)初めの稔り」「(春草のように)初めの年・初年・元年」、Bの場合、「とし」を「迅し」「鋭し」と見て、「(春草のように)初め勢いがある・はげしい」「春草の初めは勢いがある・はげしい」のような解釈がある[毛利正守2006]。これは「之」を「の」と訓読みするのか、「し」と音読みするのか、また上代特殊仮名遣いに関して、「刀」(甲類)に対し「年」の「と」(乙類)の仮名違いを認めるのか、それとも認めずに「迅し」「鋭し」(以上の「と」は甲類で合う)と読むのかなどの違いに起因するもので、読みと解釈についてはこの他にもなお検討の余地が多い。

第6層出土遺物(図15)

41・42はともに須恵器杯身であるが、口径や立上がりに差がある。43は平瓶で、内外面および破断面に黒漆が付着する。

第4層出土遺物(図15)

44は肥前陶器皿で灰オリーブ色の釉が掛かる。体部下半から底部は無釉となっている。

第3層出土遺物(図15)

45~47は土師器の大皿または焙烙で、口縁と体部の境に段をもつ。45・46は内面全体が赤く塗られており、46・47は体部から底部に成型時に付いたと見られる木型の木目痕がある。48は瓦質のミニチュア羽釜で、口径6.0cmである。

第2b層出土遺物(図15)

50は完形の土師器皿で、口径7.3cmである。底が丸みをもつ。51は瀬戸美濃焼灰釉禿皿で、底部が碁笥底となっている。52は瀬戸美濃焼志野向付の体部側面の破片である。

3)まとめ

今回の調査での第1の成果は、前期難波宮造営時と考えられる整地層(第6b層)下の第7層における木簡40の発見である。第6b層と同様の整地は、難波宮周辺の非常に広い範囲(南北1.5km、東西1km)の谷や低いところで点々と行われており、その主体は孝徳朝(645~654年)の段階に当る[寺井2004]。また、第7層出土土器は難波皿中段階に当り、7世紀中頃(640~660年頃)に比定される[佐藤隆2003]。以上の2点から、木簡の時期は前期難波宮が完成する652年前後より古い7世紀中頃と推定できる。

木簡40は漢字1字を1音に当てた、いわゆる万葉仮名で書かれており、全文が万葉仮名から成る資料としては、年代が確実に押さえられる最古の例となる。同様の古い資料としては、持統天皇の己丑年(689年)以前である徳島県観音寺遺跡出土の「奈尔波ツ尔作久矢己乃波奈(なにわづにさくやこのはな)」と書かれた木簡[徳島県埋蔵文化財センター2002]や、天武朝(672~686年)頃である飛鳥池遺跡出土の「(表)止求止佐田目手□(和カ)□ (裏)□久於母閉皮(とくとさだめて・・・くおもへば)」と書かれた木簡[寺崎保広1999]があるが、木簡40はそれらより20~30年遡ることになる。

万葉仮名文の完成に当っては柿本人麻呂の功績を重視し、その成立を天武朝から持統朝とする考えがあったが、木簡40は、それ以前より様々な書き方が目的に合わせて同時併存していたという考えに対する一つの証拠となり、日本語表記の発達史にとって画期的な発見と言える。

2番目の成果は前期難波宮の溝SD601である。SD601は幅約1.3m、深さ約1.3mと規模が大きく、

底には水成の砂層が堆積し、前期難波宮の時期にまちがいなく機能していた。先述したように、調査地は北東から南西へ延びる深い谷に当たっており、SD601は谷の方向と合っている。この谷の谷頭は現在の上町筋近くにあったと推定され、SD601は前期難波宮造営時にある程度埋めた谷を利用した、朝堂院西南部の宮域の排水のための基幹的な溝と推定される。

難波宮跡中心部の周辺には多くの谷があったが、谷を利用した大規模な溝には、前期難波宮西方官衙の北西角にあるNW97-3次調査の泉施設SG301から北西に続く石組み溝SD301がある[大阪市文化財協会2000]。SD301は石組みでおそらく給水に重点が置かれており、SD601は素掘りであるが、規模は匹敵し立地が似ている。排水などのため、この他にもいくつかの谷を利用し、台地の高所を占めた宮殿から周辺へ延びる大型の溝が設けられていたと予測される。

さらに、平面的に調査した豊臣前期2面、豊臣後期1面の遺構面のように、古代から近世に至る地層が良好な状態で堆積し、それに対応する各時期の遺構や遺物が検出できた点で多くの成果を得ることができた。

註)

(1)木簡の積読と評価については、毛利正守氏(大阪市立大学教授・国文学)、東野治之氏(奈良大学教授)、栄原永遠男氏(大阪市立大学教授)、古市晃氏(花園大学専任講師)、水野正好氏((財)大阪府文化財センター)にお世話になった。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2000、『難波宮址の研究』第十一

大阪市文化財協会2004、『難波宮址の研究』第十二

佐藤隆2003、「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年-陶器窯跡編年の再構築に向けて-」：大阪市文化財協会編『大阪歴史博物館研究紀要』2号、pp.3-29

寺崎保広1999、「奈良・飛鳥池遺跡」：『木簡研究』21号、pp.14-28

寺井誠2004、「難波宮成立期における土地開発」：『難波宮址の研究』第十二、pp.161-170

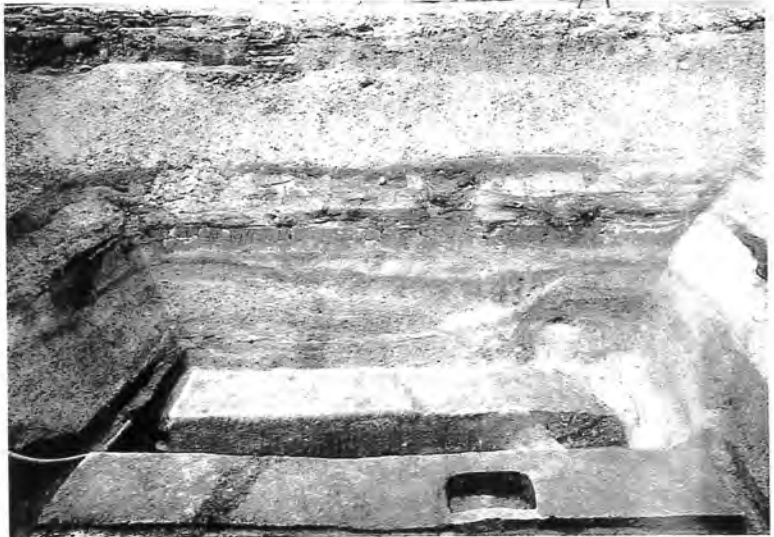
徳島県埋蔵文化財センター2002、『観音寺遺跡Ⅰ(観音寺遺跡木簡篇)』

毛利正守2006、「古代日本語表記と歌木簡」：奈良女子大学21世紀COEプログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」特別シンポジウム「難波宮出土の歌木簡について」発表資料(2006年11月19日)

西区全景
(南西から)



西区西壁地層堆積状況



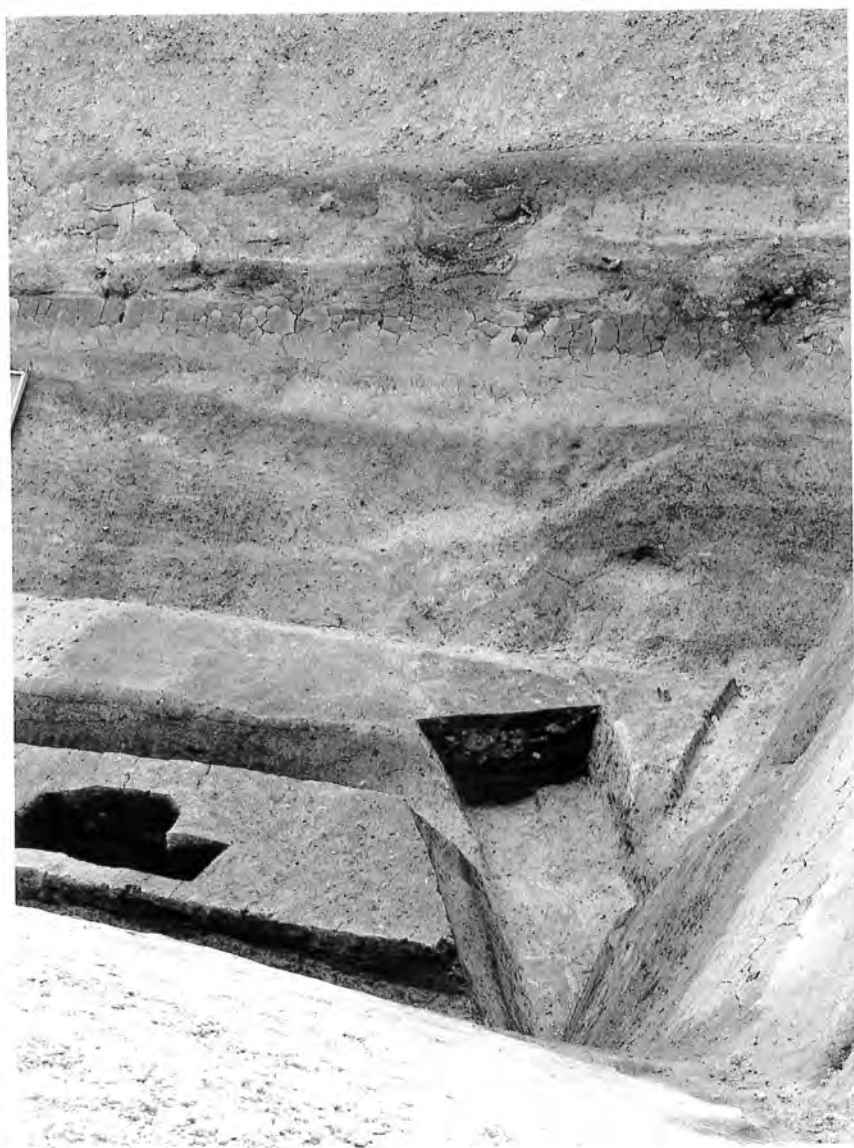
西区東壁堆積状況

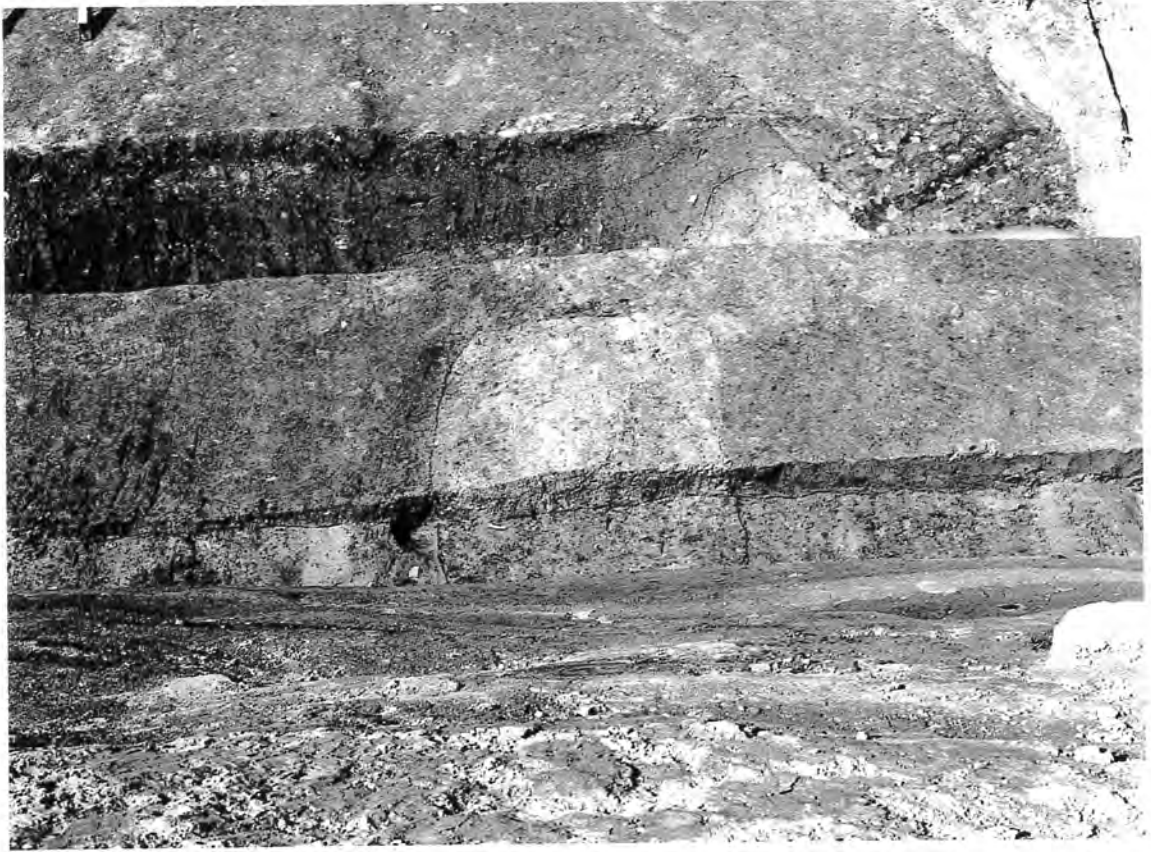


西区SD601堆積状況(東から)



西区SP601, SD601(東から)



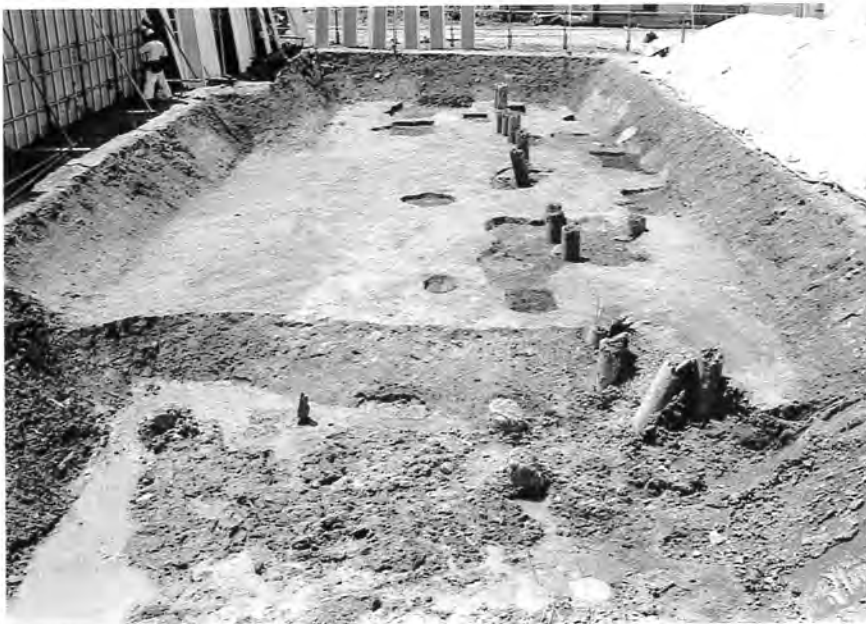


西区SP601検出状況



西区SP601断ち割り後(西から)

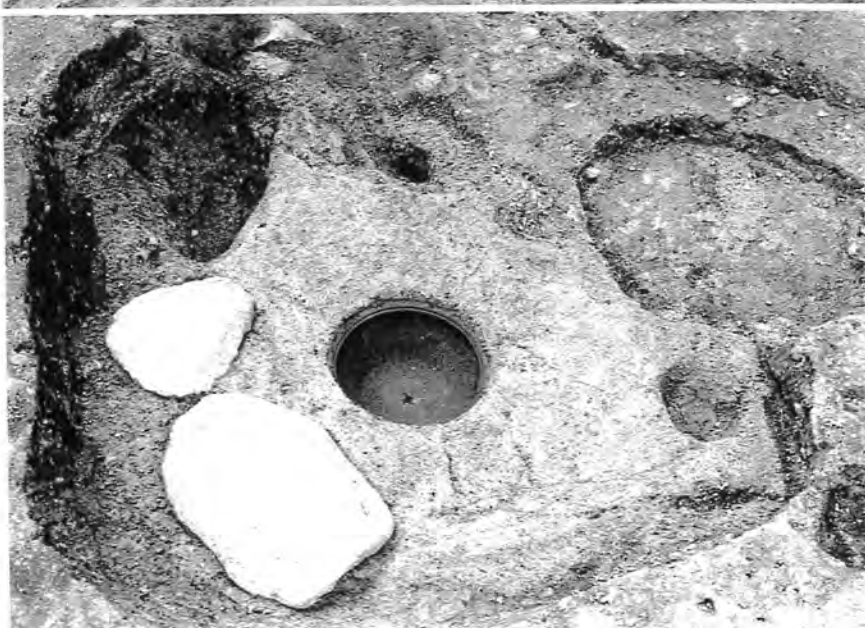
東区第1層上面遺構
(北から)



西区第1層上面遺構
(北から)



西区第1層上面遺構SK101
(北から)





出土木簡(左：写真、右：赤外線写真)

難波宮跡発掘調査(NW06-3)報告書

- ・調査箇所 大阪府中央区法円坂1丁目 難波宮史跡公園内
- ・調査面積 約220㎡
- ・調査期間 平成18年10月24日～12月28日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、藤田幸夫、宮本佐知子

〈調査に至る経緯と経過〉

難波宮公園を中心とする一帯では、1954年から始まった発掘調査によって大きく分けて前・後2時期の宮殿跡が見つかっている。今回の調査地は公園の南西部に当り(図1)、大手前整肢学園の跡地で、朝堂院の西側に当る。北側には後期難波宮の五間門をもつ区画(以下、五間門区画)があり、五間門区画の東面一本柱塀の南延長部では、以前の調査で柱穴が確認されている(図2)。今回の調査は、別の区画の存在の有無を確認することを主目的として実施した。

調査の方法は、近・現代層を機械で掘削し、それ以下については人力で掘削した。

また、12月23日には現地説明会を開催し、多くの方々の参加を得た。保護砂による遺構の保護および埋戻しを含むすべての作業は12月28日に終了した。

なお、本報告で使用した座標は、既往の調査成果との関係上、旧来の日本測地系(国土平面直角座標第Ⅵ系)を用い、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)を使用し、本文・挿図ではTP+〇mと記す。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

第0層：近代以降の整地層である。

第1層：暗褐色(10YR3/4)細粒砂質シルト層で、層厚は10cm前後で、中央部南端近くに小面積で見られるものである。この層は難波宮中心部で検出されるもので、今回は出土遺物がなかったが、中世に比定される地層である。

第2層：調査地の西部に見られるにぶい黄褐色(10YR4/5)細粒砂質シルト層で、後期難波宮の瓦を多く含む。近世以後の攪乱により良好に遺存する個所は少ないが、西に厚く堆積する。層厚は

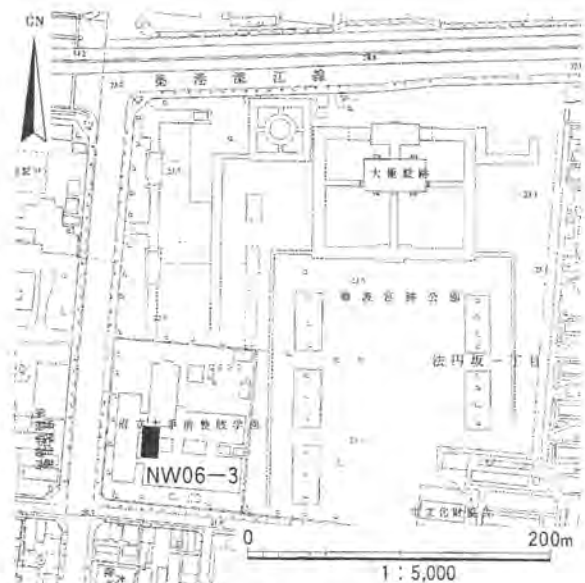


図1 調査地位置図

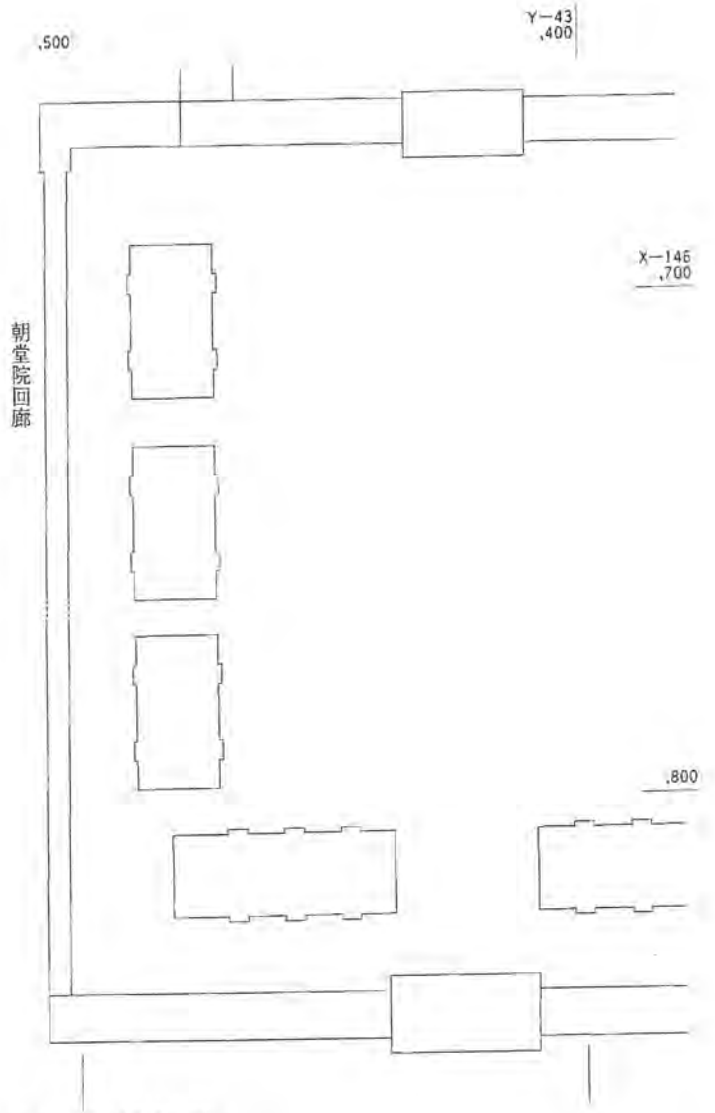


図2 調査区配置図

20~40cmである。

第3層：黄褐色(10YR5/6)シルト層で、第2層の分布する個所の下位に存在する。遺物はほとんど出土しなかった。第2層とともに後述の基壇の造成に伴う整地層であろう。

第4層：明褐色(7.5YR5/6)シルト~細粒砂質シルト層で地山である。

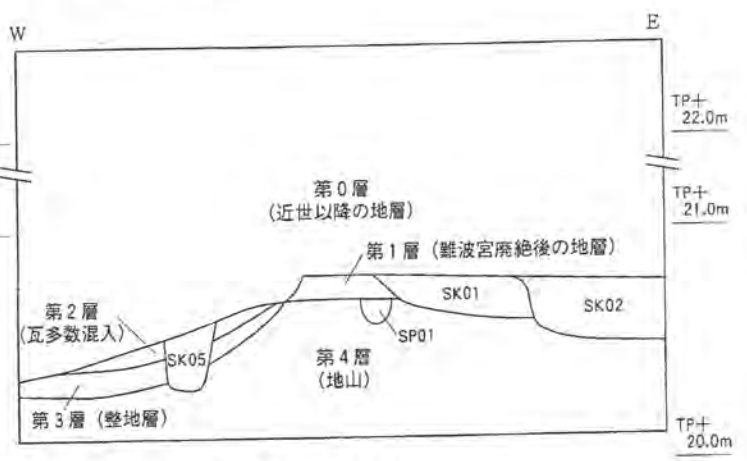


図3 地層と遺構の関係図

2. 遺構と遺物

難波宮以前の遺構(図5)

地山上面から難波宮造営以前の柱穴などのいわゆる難波宮下層遺構を検出した。組み合わせ関係については判然とするものは少ないが、南西部で検出した3基の柱穴(SP01～03)は組み合せて建物を構成するものであろう。時期については、掘削していないので確定できない。

後期難波宮築地塀基壇と遺物(図6・10・11)

調査区の中央から西へ地山面が下がるのを確認した。落ち際が、ほぼ南北に直線状になることから、人為的に地山面が掘下げられたものである。掘下げられた幅が3.5m以上であることから、溝とは考え難い。この落込み内には上下2層が堆積していた。上層の第2層からは多くの後期難波宮の瓦と凝灰岩の破片が出土した。瓦は層中の上位から下位まで出土し、一部は重なって出土した。その出土状況から見て屋根から転落したり、あるいは屋根が倒壊した状況を示すとは考えられない。一方、下位の第3層はほとんど遺物を含んでいなかった。

地山を削り出して基壇を構築する例は後期難波宮朝堂などで確認されていることから、この落込みは基壇を造成するため基壇周囲の地山を削り出したもので、基壇は落込みの東側に存在したと想定される。

この基壇の性格については、五間門区画の東面一本柱塀の南延長上付近に位置し、西外郭築地に近いことなどから建物基壇というより築地塀基壇の可能性が高いと考えられる。とすれば、五間門区画の南に別の区画が存在し、その区画の東面築地塀を今回検出したものと思われる。

地山を削り出して築地塀基壇を構築したとすると、落込み内の地層は以下のように理解される。

第3層は一旦地山を削り出した所を、基壇構築時に埋戻して形状を整えた際の整地層であろう。また第2層は、築地塀廃絶時に基壇周囲の低くなっているところを埋立てた層で、その際に不用となった瓦や溝などに使用されたと思われる凝灰岩の破片を一緒に埋めたのであろう。ただ、後述する鬼瓦2とそれに隣接して出土した丸瓦3点(1ほか)は投棄されたとするより意識的に置かれたようにみられる。

また、基壇に伴う雨落ち溝等の付属施設は基壇構築時の地表面が削平されていることもあってか検出されなかった。

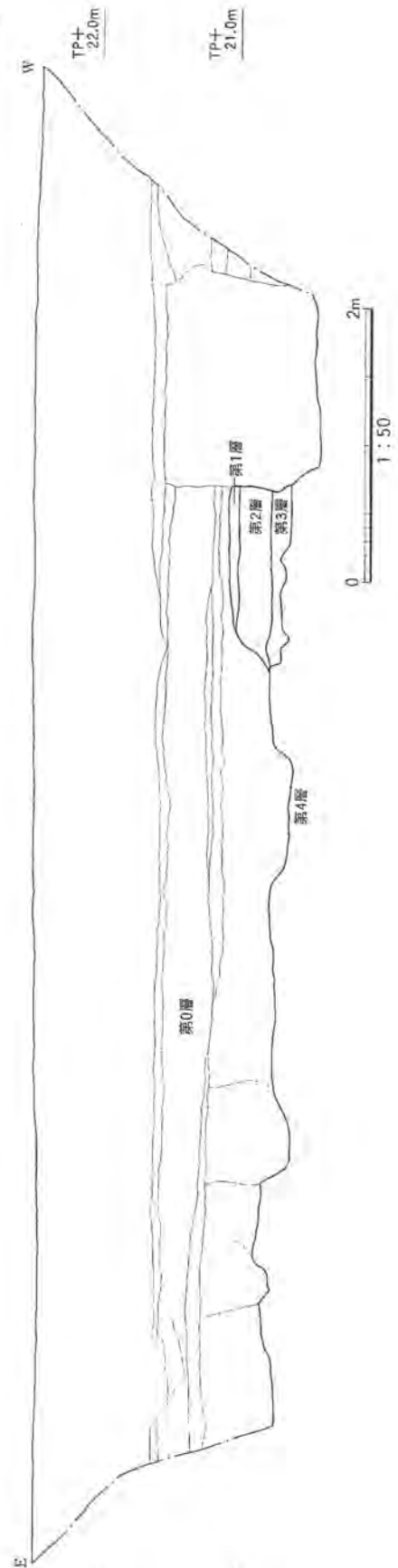


図4 南壁断面図

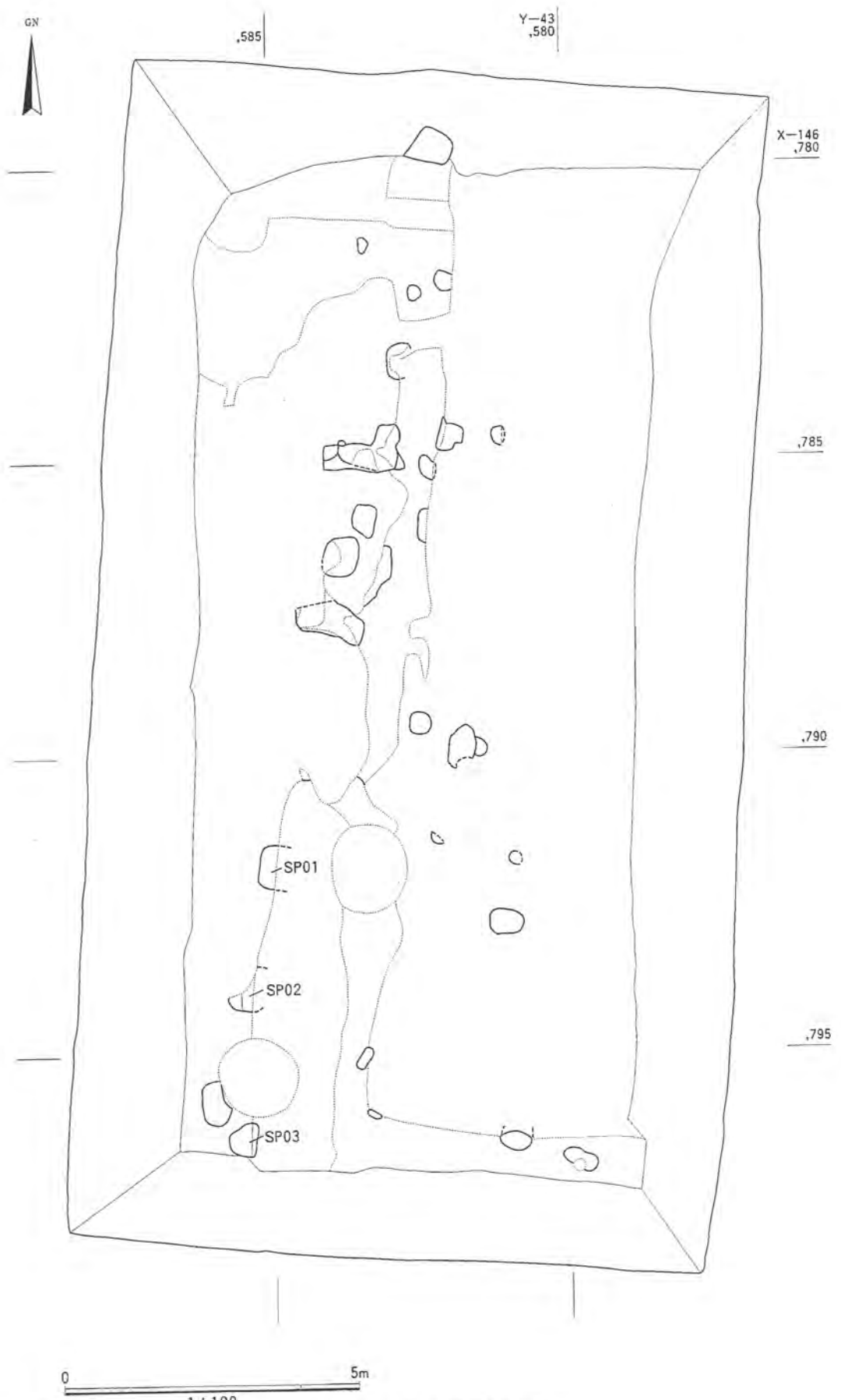


图5 難波宮下層遺構平面図



図6 後期難波宮築地塀基壇平面図

この基壇の幅については、東側が攪乱されているため不明であるが、調査区南端部を東に拡張し調査したところ、西側の落ちから約5mの地点で、溝状の遺構SD01を確認した。この遺構が基壇の東を画する溝の可能性はあるが、小面積での確認であるので即断はできない。

重圏文鬼瓦2は裏面を上にして出土した。2片に割れていたが、ほぼ完形に接合した。左下端部の割れは、近代の攪乱によって生じたものであろう。北側には接するように丸瓦3個体が並ぶような形で出土した。周囲に3条の凸線を巡らし、中央に同じく3条の凸線を縦に配置し、釘穴は見られない。裏面および側面はナデでいいに仕上げられている。焼成はやや甘い。高さ25.8cm、幅32.6cm、最大厚5.5cmで、挟り部は高さ9.6cm、幅17.3cmを測る。挟り部周囲には、粘土の高まりが認められる個所がある。また、下端部より1.4cm前後の個所に横方向の浅い凸線が認められる。この浅い凸線は、周囲を巡る3条の凸線間にあり、范型に浅く彫込まれたものである。浅い凸線は左右の脚部に認められ、左右を結ぶと直線となることから、下端部を切り取る際の目印であったと想定される。

丸瓦1は、鬼瓦の北側に3個並んで出土した丸瓦の内、中央のものである。ほぼ完形品で内面を下に、玉縁を南に向けた状態で出土した。全長38.8cmで、幅16.8cm、高さ8.5cmで、玉縁部は長さ5.2cm、高さ6.8cmである。厚さは中央部で1.8cmで、焼成は軟質である。外面には縄タタキ痕が残り、内面には糸切痕と布目圧痕が認められる。

唐草文軒平瓦9は北西部から出土したもので、6664A型式である。

江戸時代の遺構と遺物(図8・9・11)

江戸時代の遺構については、主たるものを記述する。

石列とSK01 調査区中央に南北方向の石列を検出した。石は1段で、東側に面をもち、東は西より1段低くなる。低くなったところにSK02の埋土である黒色シルト層が堆積する。石列は調査区北側では検出されなかったが、黒色シルト層は北端部まで堆積することから、本来は北端部にまで続いていたものと考えられる。この石列は屋敷地を画し、ゴミ穴であるSK02の西をも画するものと考えられる。SK01内からの出土遺物は10~14である。10は肥前青磁染付鉢である。口縁部は輪花で、蛇の目凹型高台である。外面には唐草文と如意雲くずれ文を描き、見込部に岩、竹等の文様を描く。11は肥前陶器の刷毛目碗である。12は肥前磁器碗である。外面は暦文、高台部には圏線を描き、内面は



図7 瓦出土状況平面図

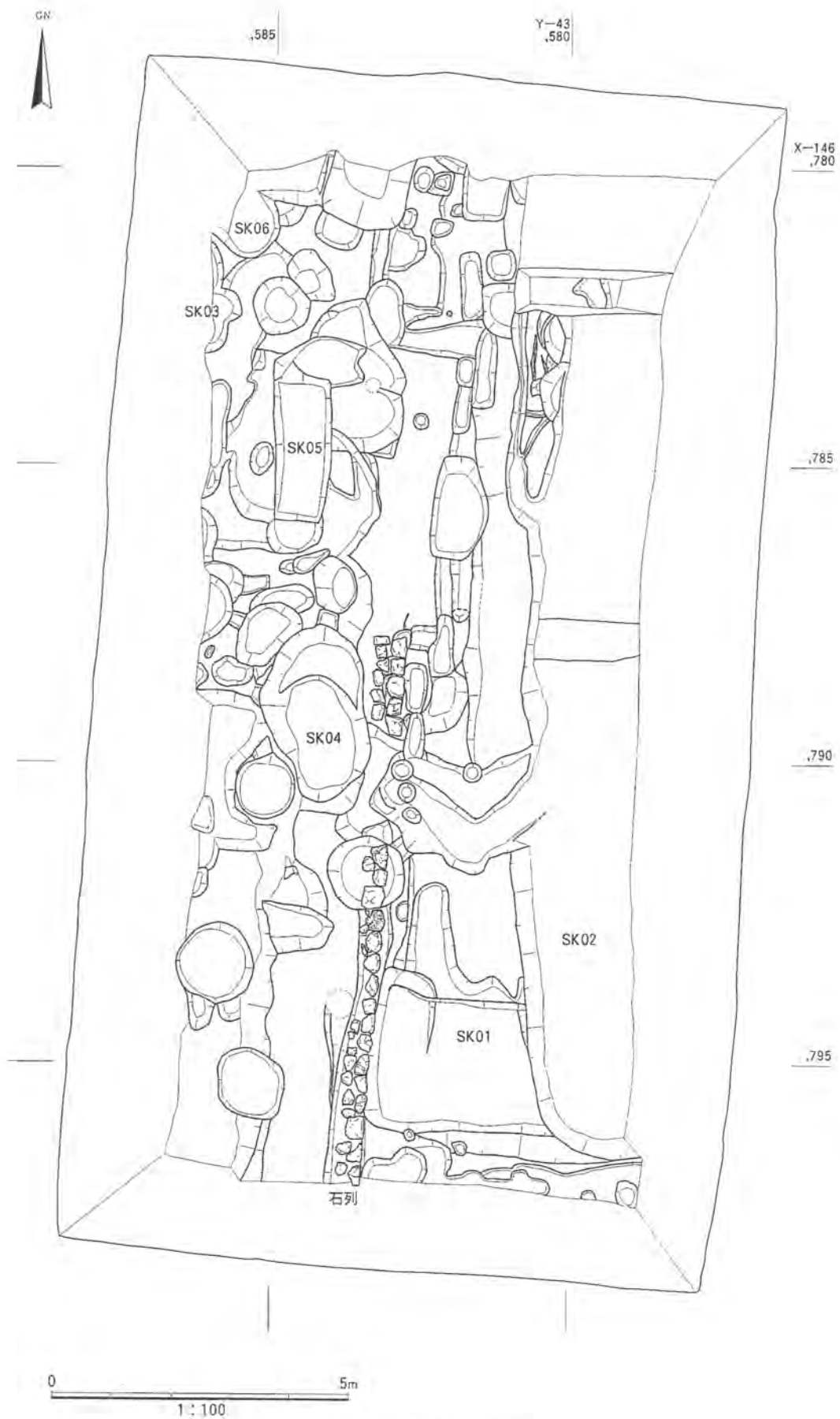


図8 江戸時代の遺構平面図

口縁部付近に圈線、見込部は圈線内に「寿」を描く。13は肥前青磁染付の蓋である。高台内には二重角の内に「草」の銘款をもつ。見込には花文、口縁部付近には四方禳文を描く。14は瀬戸焼の水注である。鉛色の釉が高台・口縁部を除いて施される。

土壌SK02 調査区東部で検出した土壌で、SK01を切って構築されている。南北15m以上、東西2m以上で今回の調査では一部を検出ただけである。2箇所にはトレンチを設定して掘削したが、深さは約2mを測る。西側は垂直に掘込まれており、壁面が内側に崩落しているようすが観察された。埋土には多量の陶磁器・瓦などが含まれており、ゴミ捨て場として利用されていたと考えられる。

15～19は肥前磁器である。15は色絵皿で、釉は畳付部を除いて施す。内面に金魚などを描き、見込には花を描く。16は小振り非常に浅い皿である。外面に唐草文を、見込には花文などを描く。17は広東碗で、外面に大柄な文様を描くものである。18も広東碗で、外面に岩、松などを描き、内面に波文を描き、見込にも文様を描く。19は肥前磁器鉢で蛇の目凹形高台である。外面に唐草文・幾何学文、内面には草花を描く。全体を鉛ガラスで焼継ぎし、高台中央に鉛ガラスで文字または数字を書いているが判読できない。20は三田青磁小鉢である。内面に樹木、牛に乗る人物等を陽刻する。

出土瓦(図10)

ここでは、調査区西側の江戸時代の土壌や近代の攪乱中から出土した後期難波宮の軒瓦を記述する。これらの軒瓦は本来築地塀に伴っていたものであろう。3は重圈文軒丸瓦で機械掘削中に出土したもので6021型式である。4は重圈文軒丸瓦でSK03から出土した。瓦当のみで丸瓦部を欠損するが、6014型式である。5は重圈文軒平瓦でSK04から出土したもので6572型式である。6は重圈文軒平瓦でSK05から出土し、6574型式の可能性が高い。7は重圈文軒丸瓦でSK05から出土した瓦当部表面のみの破片で、6014型式である。8は重圈文軒丸瓦でSK01から出土した瓦当部表面のみの破片である。6014型式である。

〈遺物の検討〉

重圈文鬼瓦について(図10・12・13)

ここでは、今回出土の鬼瓦と既出の鬼瓦について検討する(註1)。文様は全て重圈文系で、周囲に3条の凸線を巡らし、中央に同じく3条の凸線を縦に配置するものである。21・24は下端にも凸線を

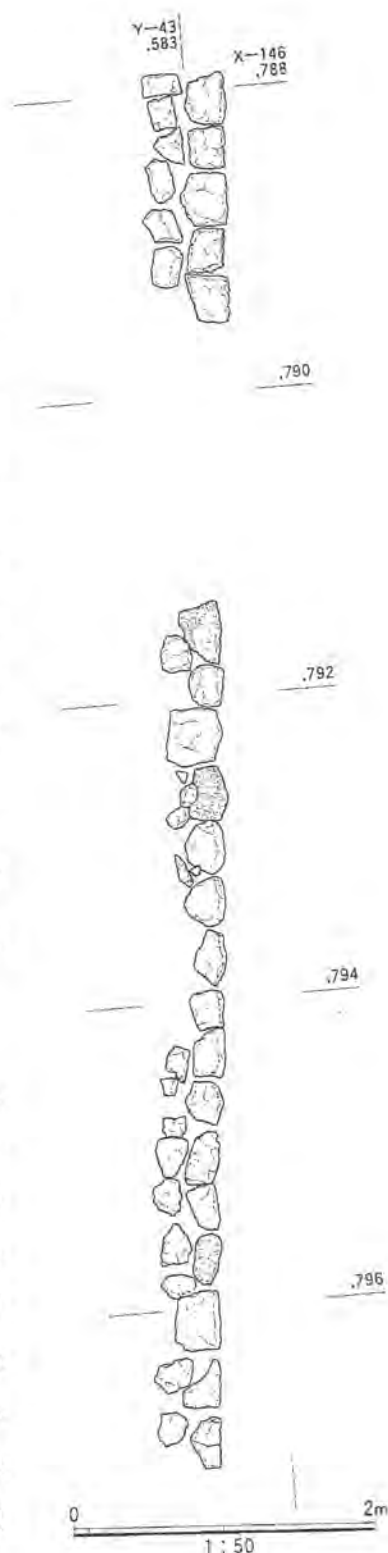


図9 石列平面図

もつ。また、21・24は下端部が水平という点が共通する。釘穴は、24が不明であるが、その他は2個有する。挟り部は、22・23・24の3点が打欠きで調整している。挟りの形状は、21・24が縦長半円形、2・25が半円形、22・23が横長半円形である。下端部については21・24を除き内側に斜行している(註2)。

2は釘穴はなく、打欠きも見られない。下端部はやや内側に斜行する。下端部の凸線は認められないが、挟りの周囲にはやや盛り上がっている箇所があり、これは、[岩戸2001]の挟りの規定凸型Aを示すものであろう。また、下端部付近には低い凸線がある。この低い凸線については、従来の出土例にはないが、范型から取出して焼成前に下端部を切り取る際の目印と考えられる。

以上をまとめると、21・24のように縦長半

円形の挟りを持ち、下端部が水平な鬼瓦は、下端部に凸線が残存することから、下端部を切取っていない。また、本体部の形状も縦長である。一方、挟り部については、打欠きや、焼成前に削ることによって調整している。22については、横長半円形の挟りをもつが、下端部まで打欠きがあるため、下

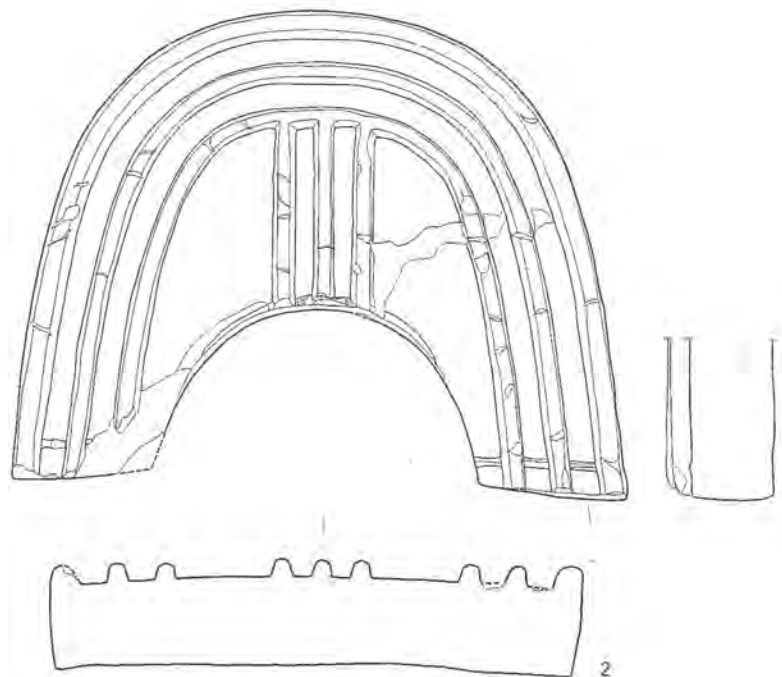
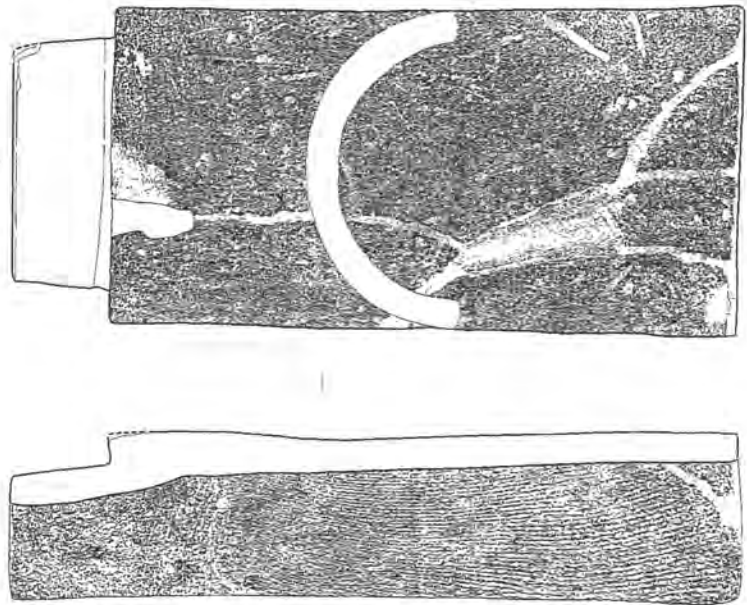


図10 第2層出土瓦実測図

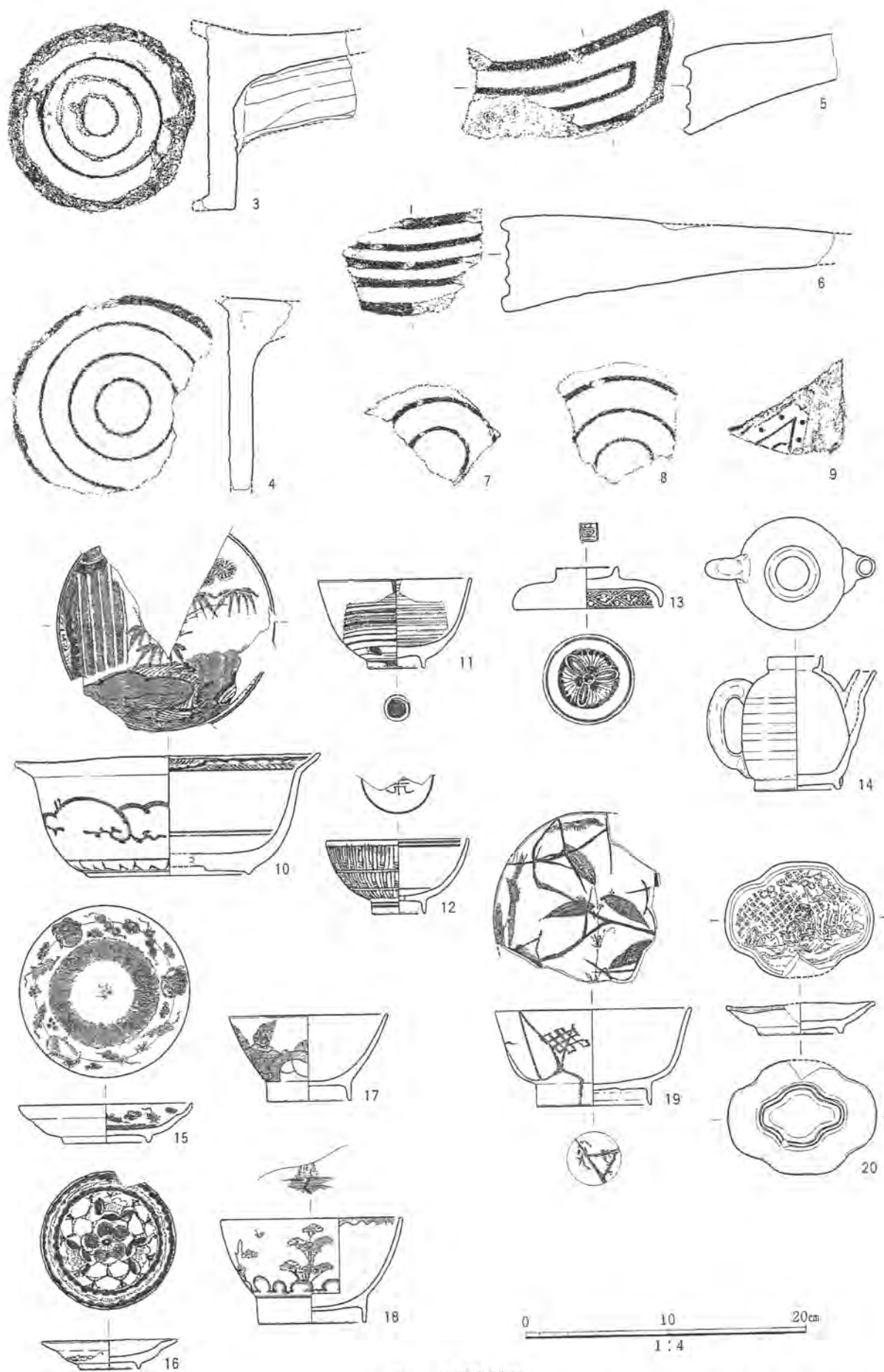


图11 遺物実測図

SK01(8・10~14)、SK02(15~20)、SK03(4)、SK04(5)、SK05(6・7)、機械掘削中(3)、第2層(9)

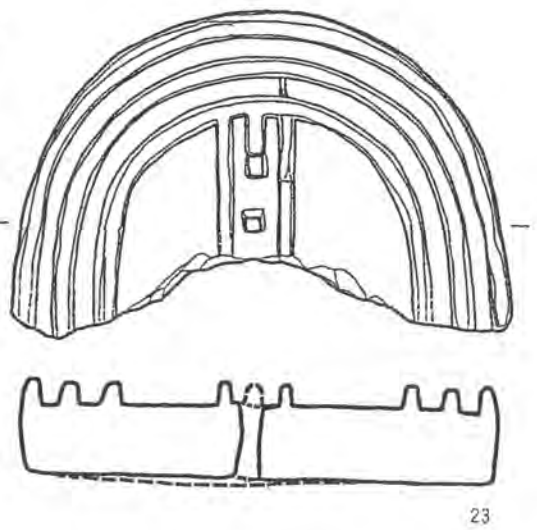
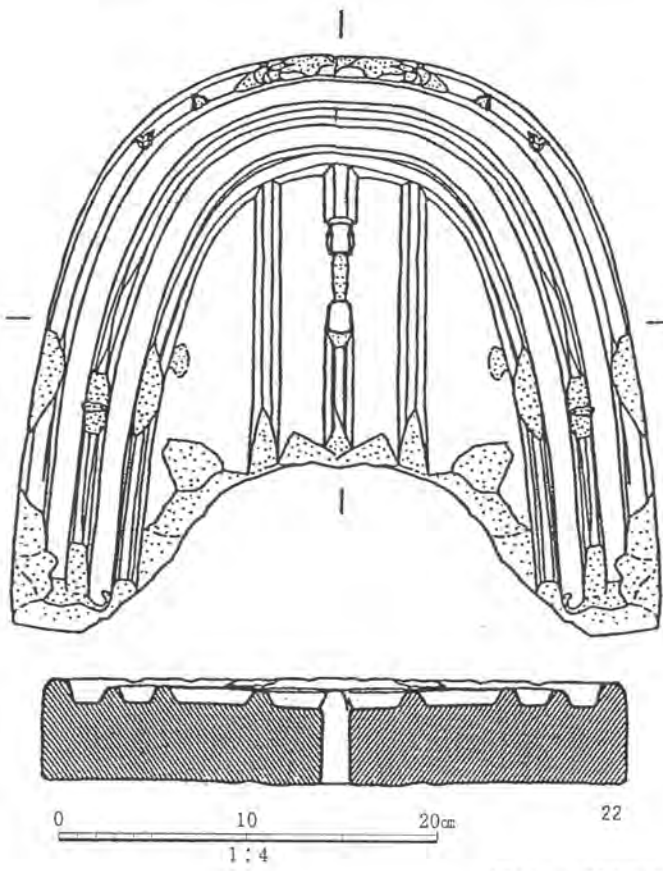
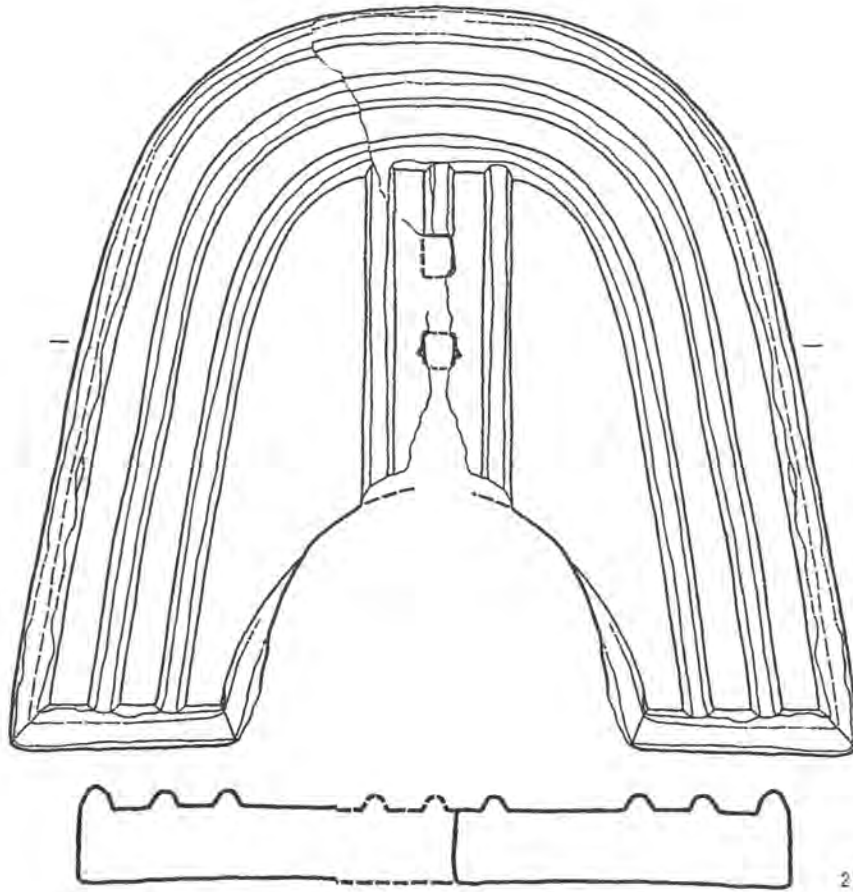


图12 鬼瓦実測図(1)
NW37次調査(21)、NW82-5次調査(22)、NW33次調査(23)

端部の凸線の存在については不明であるが、全体の形状が縦長を呈するなど21・24に似ており、同様な范型を用いた可能性がある。

一方、半円形の袂をもつ2・25は、21・24・22より小型で本体は横長である。下端部には凸線がなく内面に傾斜するという特徴を有する。2は下端付近に見られる浅い凸線で切取るより、現状の方がさらに半円形に近い。逆に浅い凸線の上約1.4cmで切取ると横長半円形となる。したがってこれらの鬼瓦は半円形の袂の規定をもつ范型で造られ、半円形または横長半円形の袂をもつ鬼瓦を製作したものであろう。脚部に浅い凸線をもつ個体の出土例がないのは、凸線上で切取られていることに起因するのであろう。また、これらは下端部には凸線をもたない范型で製作されていると考えられる。23は打欠きによる横長半円形の袂をもつが、2・25同様に小型品でその形状からも同様な范型が想定される。

このように難波宮出土の鬼瓦には、2つのグループの存在が明らかになった。出土地点からみると、前者は大極殿、大極殿後殿などで、後者は軒廊、大極殿回廊および今回の調査地である。

岩戸論文によると、平城宮瓦編年第Ⅱ期(721~745年)には「…中枢部で使用された大型の鬼瓦は、本体長と脚部長の延長、もしくは脚部長のみの延長による縦長半円形の袂をもち、官衙地区で使用された小型の鬼瓦は、打欠きによる横長半円形の袂をもつ。…」とある。難波宮の場合、中心部から出土する大型品の場合、本体長または脚部長の延長は認められないが、縦長半円形の袂を有する。また、回廊・築地塀から出土した小型品は、半円形または横長半円形の袂を打欠きや切取りで調整する。このように調整方法で異なるものの、大型品は縦長半円形の袂をもち、中心部で使用され、

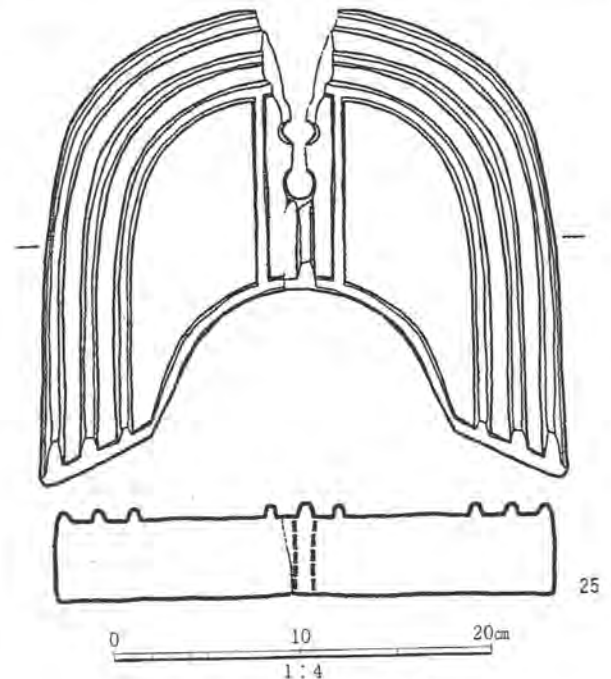
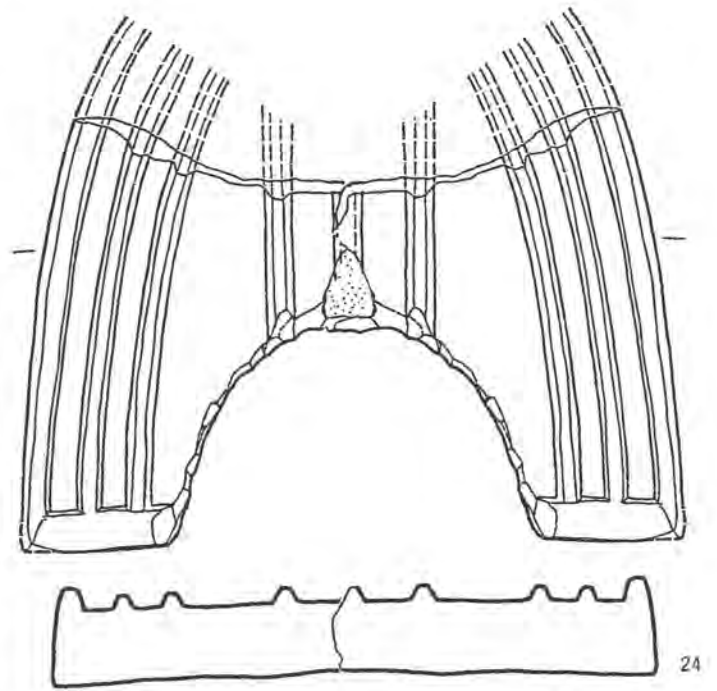


図13 鬼瓦実測図(2)
NW33次調査(24)、NW15次調査(25)

小型品は円形または横長半円形の抉りをもち、回廊や周辺部で使用された点は共通するものである。今回は形状が判明する数点での分類であったが、抉りの規定や本体長の切取りの目安である浅い凸線は、破片でも確認することが可能であることから今後出土例が増加することによってさらに明らかになるであろう。

〈まとめ〉

本調査で、後期難波宮の築地塀をもつ区画の存在が推定された。外郭築地の西方には五間門区画の存在が明らかになってきたが、五間門区画の南側の状況が明らかでなかった。それは、今回の調査でも見られたように、本調査地周辺には近世以降の攪乱が多く、難波宮期の遺構が削平されていることが一つの要因として挙げられよう。本調査でも築地塀基壇そのものでなく、基壇構築の際の地山削り出しと築地塀に葺かれていたと推定される瓦の出土を見ただけである。今後の周辺部の調査においても、近世以降の攪乱が多いことが予測されるが、瓦の集積状況などによって築地塀の幅や区画の規模、また区画内の建物配置等が明らかになれば、後期難波宮の研究史上大きい意義をもつであろう。

註)

- (1)この項については、岩戸晶子「奈良時代の鬼面文鬼瓦」を参照して記述する。岩戸論文の対象とするのは鬼面文鬼瓦であり、難波宮出土の重圈文鬼瓦とは異なるものであるが、同時代の鬼瓦であり製作技法については共通するものがあると思われる。また、「抉りの形状」、「抉りの規定」は岩戸論文に依拠する。
- (2)図12・13の鬼瓦は、23を除き反転復元である。

引用・参考文献

- 岩戸晶子2001、「奈良時代の鬼面文鬼瓦」；『史林』184-3、pp.1-40
- 大阪市文化財協会1984、「難波宮跡(NW82-5)発掘調査略報」；大阪市文化財協会編『昭和57年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.38-47
- 大阪市文化財協会1995、『難波宮址の研究』第十
- 大阪市文化財協会2005、『難波宮址の研究』第十三

築地塀基壇検出状況
(北から)



瓦出土状況
(西から)



鬼瓦・丸瓦出土状況
(東から)



鬼瓦出土状況
(東から)



出土鬼瓦



石列検出状況
(東から)



大坂城跡発掘調査(OS06-1)報告書

調査個所 大阪市中央区安堂寺町西2丁目30他
調査面積 176m²
調査期間 平成18年5月8日～平成18年5月19日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、高橋工

1) 調査にいたる経緯と経過

大坂城跡は上町台地の北端部に位置し、豊臣氏大坂城の惣構の内側に当る地域と、京橋口の定番下屋敷地であった部分からなっている。その範囲内には、縄文～弥生時代の貝塚が発見されている森の宮遺跡や、古代の宮都跡である難波宮跡も包摂されており、これらを含めて複合遺跡を形成している。本調査地は大坂城跡の南西隅部に当る。近隣における既往の調査件数はあまり多くないが、主要な調査としては、東約150mで近世の盛土層が検出されたOS99-59次調査、北約300mで瓦を焼成した豊臣期の達磨窯が発見されたOS02-8次調査などが行われている(図1)。

大阪市教育委員会による試掘調査では、現地表下1.8～2.0mで地山層と遺構が確認されたため、教育委員会と事業主とが協議を行い、本調査を行うことになった。調査区は敷地東半部に設定した(図2)。現代の盛土と近世の地層の一部を重機で除去し、それ以下を人力で掘削した。必要に応じて、実測図・写真による記録を作成し、調査終了後は埋戻しを行った。調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、挿図中では「TP+〇m」と記した。本報告では磁北と座標北、2種類の指北記号を用いている。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第0層：現代の盛土層である。層厚は120cm前後で、下面は凹凸が著しいことから、下位層上面が削剥された後に本層が形成されたとみられる。

第1層：明褐色粗粒砂や黒褐色中～細粒砂など、多種の堆積物によって構成される盛土である。大



図1 調査地位位置図

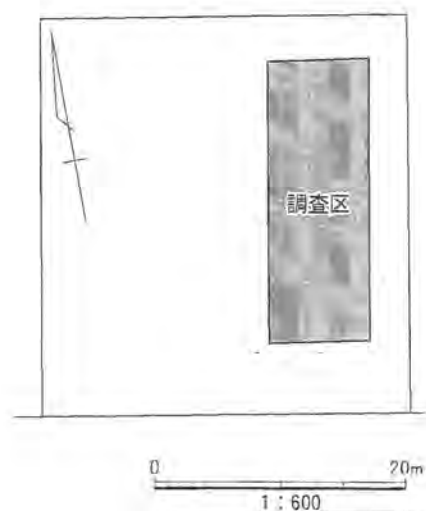


図2 調査区配置図

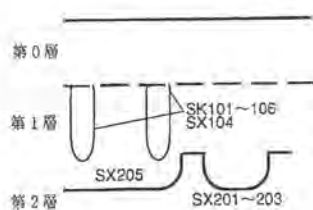


図3 地層・検出遺構模式図

小の地山の偽礫や炭なども含まれている。層厚は80cmから180cm以上で、北部では下面を確認できていない。本層は、下位の第2層(地山)上面に掘込まれた土取り穴を埋積するばかりでなく、それらを大きく卓越している。本層の上からは17世紀後半～19世紀の遺構が掘込まれており、後述するようにSX205中の本層に17世紀前半の遺物が含まれていたことから、年代は17世紀前半と考えられる。

第2層：上部は現存層厚5cmほどの灰色粗粒砂、下部は灰オリーブ色シルト質粘土～浅黄色粘土質シルトからなる地山である。下部については、上方は粘土質であるが、下方ほど砂質が強まる。上面の標高は南から北北東に向かって下がり、本層の上面で土取り穴が検出された。

ii) 遺構と遺物(図4～6)

a. 第2層上面検出遺構

4基の土取り穴が検出された。いずれも埋土は第1層である。

SX201～203 SX201は深さ約40cmで、南東では遺構の側壁がオーバーハングしていた。北東部で円筒埴輪1(図5)が出土した。1は5段からなり、高さ52.0cmを測る。外面2次調整にB種ヨコハケを

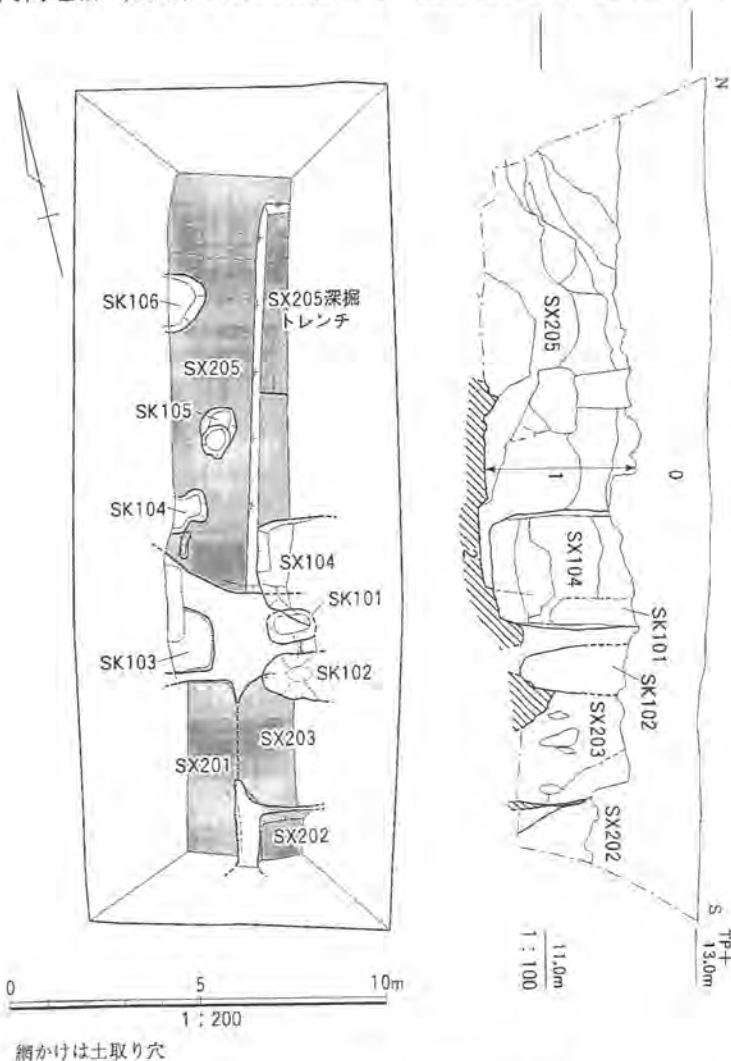


図4 検出遺構平面図・地層断面図

施し、無黒斑焼成で、川西宏幸による円筒埴輪編年[川西宏幸1978]のIV期に当る。この埴輪は、もちろん本遺構の年代を示すものではなく、第1層の盛土を行うための土取りによって破壊された古墳が近隣にあったことを示している。SX202・203はともに底を検出していないが、80cm以上の深さがある。これらの遺構はごく狭い間隙を残しながら掘られており、いずれも側壁がオーバーハングする特徴をもっている。

SX205は北半部で検出され、南北11m以上、深さ1.1m以上を測る。北に向かって深さを増しているが、地山の傾斜を追って土取りを行った結果と考えられる。部分的に掘削を行ったのみであるが、本遺構中からは、肥前陶磁器は出土せず、豊臣後期とみられる瀬戸

美濃焼志野皿2(図6)や内面朱塗りの土師器大皿などが出土した。これらの遺物から、本遺構の年代は17世紀前半におさまるとみてよく、その年代観は第1層についても共通する。

以上の遺構は、近接した分布状況や、第2層下部の砂質部分に至って掘削を中止していることから土取り穴と判断した。

b. 第1層上面検出遺構

第2層上面で検出した遺構であるが、地層断面の検討から第1層の上から掘込まれていたことが確認された。第1層上面は削平されているとみられたので、厳密には第0層基底面検出遺構とすべきである。土壇6基(SK101~106)とその他の遺構1基(SX104)がある。これらの遺構は、埋土の差から2大別することができた。一つは暗灰~灰黄褐色細~中粒砂を埋土とするSK101・102とSX104である(A類)。もう一つは黒~灰色粗粒砂混り粘土を埋土とするSK103~106である(B類)。

A類の遺構は、SX104から底部内面に松竹梅を描いた肥前磁器碗6が出土し、SK101からは

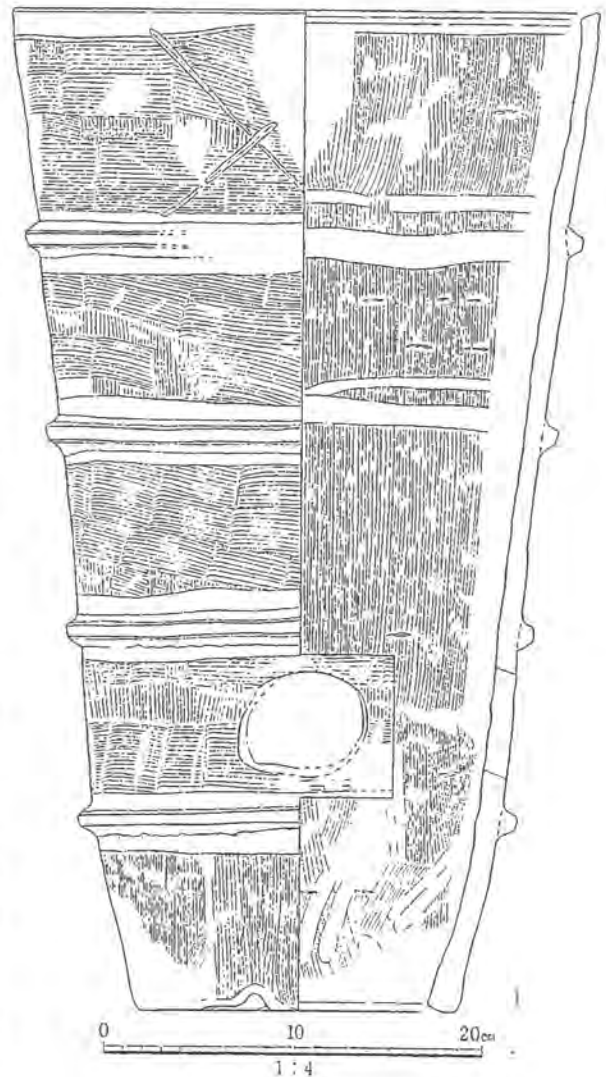


図5 SX201出土地輪実測図

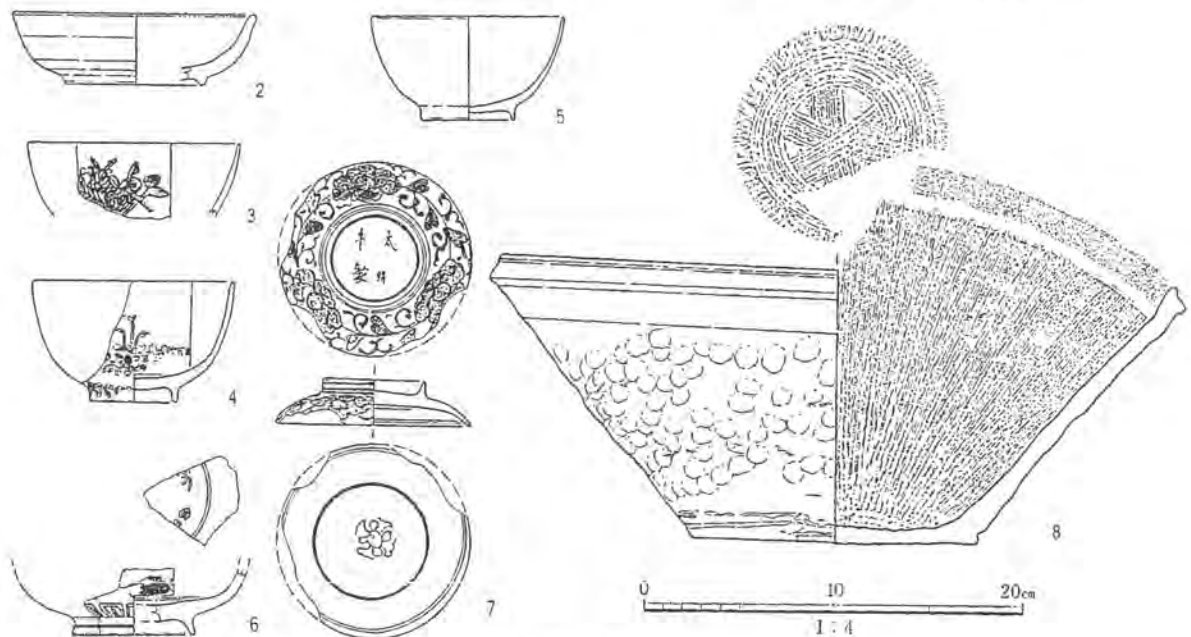


図6 出土遺物実測図
SX205(2)、SK106(3~5)、SX104(6)、SK102(7)、SK103(8)

肥前磁器の広東碗が出土するなど、18世紀でも新しい時期に属するものとみられた。

B類の遺構は、コンニャク印判による絵付けをした3を含む肥前磁器3~5などが出土したSK106が18世紀に下がるものの、丹波焼播鉢8が出土したSK103などをはじめ、17世紀代におさまるものと考えられた。

これらの遺構のうち、土壌については、多くの陶磁器片や瓦片・動物骨・炭片などが出土したことからごみ捨て穴とみられた。SX104には木の板を井桁状に組んで鉄釘で固定した造作があったが、埋土の状況からは井戸とは見なしがたく、穴蔵のような施設であった可能性が考えられた。いずれにせよ、このようなゴミ穴などの遺構の存在は、17世紀後半以後、この地が町屋として利用されていたことの証左とみられる。

3)まとめ

今回の調査結果により、第1層の盛土をはさんで、17世紀の前半(第2層上面)と後半(第1層上面)の間で、土地の利用形態に大きな変化が認められた。17世紀前半には土取りが行われ、盛土施工後の17世紀後半には町屋になっていたと考えられるのである。安堂寺通を挟んだ当地の南側では、江戸時代を通じて造瓦用の土取りが行われていたことが複数の古絵図から看取される。17世紀前半のようすを表した絵図は伝えられていないが、この時期に、安堂寺通の北側の本調査地付近でもおそらく造瓦用の土取りが行われ、粘土層を追って、後に南側に用地が展開していったのではなかろうか。

17世紀後半に町屋となったことは、1657(明暦3)年の『新板大坂之図』([佐古慶三1970]所収)の表現(図7)とも符合している。土取り場を町屋として造成するのに大規模な盛土工事が必要であったとすれば、本調査地の第1層こそはその産物とみてよいであろう。一連のものとみられる盛土はOS99-59次調査地でも確認されており、盛土工事は当地にとどまらず、周辺一帯でも行われたと考えられるのである。

では、盛土工事はどのような地形条件のもとに施工されたのであろうか。図8は周辺の地山層上面での地形復元図である。調査地の東には、標高8~11mの等高線が北から南南東に向かって入込む谷があったことがわかる。この谷は、国立大阪病院付近に発し、蛇行するように延びて西へ開く龍造寺谷

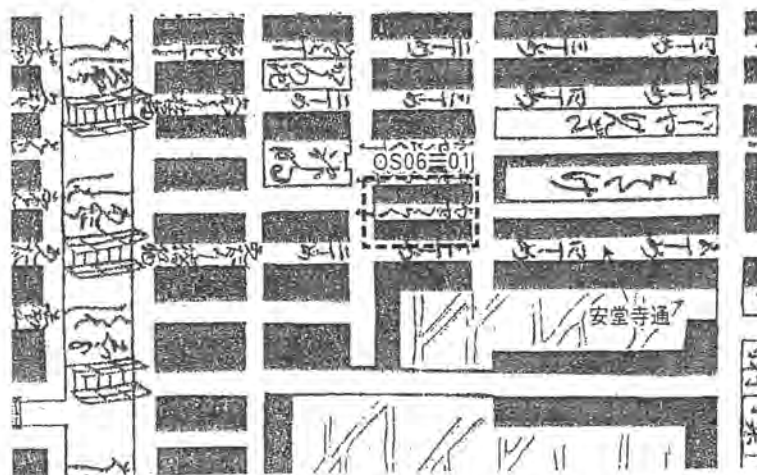


図7 明暦3年『新板大坂之図』の調査地付近

[寺井誠2004]の支谷である。この支谷の中には中世以前や豊臣期の遺物を含む地層が残されており、古くからの地形であることがわかる。一方、やせ尾根状の高所では埴輪が出土している。こうしたことから、本来この周辺の地形は、起伏が激しく、居住域が広く展開しにくい条件下にあり、造瓦用の達磨窯や土取り場が営まれるな

ど、主として工業生産の場として利用されていたのではないだろうか。そして、このような起伏の多い地形、土取りによって凹凸になった地形を盛土によって克服し、町屋として再開発したものと考えられるのである。

次に盛土工事のより詳しい年代について考えてみたい。明暦3年図によれば、調査地は当時の南聚楽町・安堂寺町三丁目に当る(図7)。^[内田九州男1982]によれば、南聚楽町は將軍徳川秀忠による伏見町人の大坂への移



図8 調査地周辺の古地形復元図

住先の一つである。松平忠明は大坂城主在任期間(1615~1619年)中に大坂城下町の復興と整備を進め、続く秀忠の代に大坂が直轄地化されるとさらに都市再開発が進められた。直轄地となって以後の開発事業に大規模な盛土工事が伴っていたことは既往の発掘調査結果により明らかである。今回の調査で第1層から出土した数少ない遺物からは詳細な年代を決定することはできないが、以上のような事情から、当地における盛土層は、直轄地化以後の大坂城および城下町の再開発、その政策の一つである伏見町人将来の準備に関連するものと捉えられるのではないだろうか。

参考文献

川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64号第2巻 日本考古学会

寺井誠2004、「難波宮成立期における土地開発」『難波宮址の研究』第十二 大阪市文化財協会

佐古慶三1970、『古板大坂地図集成に就いて』清文堂

内田九州男1982、「大坂三郷の成立 一市街地の形成を中心として」『大阪の歴史』7号 大阪市史編纂所

纂所

調査区全景
(南から)



層序
(西から)



SX205
(北東から)



大坂城跡発掘調査(OS06-2)報告書

調査個所 大阪市天王寺区清水谷町3丁目5
調査面積 約112m²
調査期間 平成18年7月11日～平成18年7月28日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、宮本佐知子、寺井誠

1) 調査にいたる経緯と経過

調査地は豊臣期大坂城惣構の中に位置し、難波京朱雀大路推定ラインから東に約80mの位置に当る(図1)。現状での周辺の地形は南西から北東に向かって低くなっている。当調査地を含めた天王寺区清水谷一带の古地形の復元によると、「清水谷」や「上町谷」に挟まれた舌状の小さな台地となっている[寺井誠2004]。

本調査地は平成18年5月16日に大阪市教育委員会が敷地内西側で行った試掘調査の結果、南側でGL-0.8mで地山層が検出され、北側はGL-1.4mと低くなっているため、本調査を実施することとなった。調査区は敷地の中央よりやや西寄りに設定し(図2)、平成18年7月11日から調査を開始した。表土層と第1層は重機で掘削し、それ以下は人力により掘削した。7月28日には機材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を終了した。標高はT.P.値(東京湾の平均海面値)で、本文・挿図中ではTP+○mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序

本調査地では調査区のほぼ全体が埋没した谷の中に当る。南西部で地山が高く残っており、北東部は約3m低くなっている。谷の埋土層は現代盛土層・第1層のほか、以下の2層に分層された。また、地山の高いところには、古代の遺物を多く含む近世初頭の堆積層が残存していた(図3・4)。

現代盛土層：層厚110cm未満である。

第1層：近世後半の盛土層で、層厚85cm未満である。

第2層：層厚150cm未満の黄褐色シルト質粗粒砂層などからなる盛土層である。第2層は谷が窪地



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

になって残っていたところを埋積し、南西の地山の高い部分まで埋めて整地している。本層から須恵器や土師器が数多く出土しているが、近世初頭の遺物(図7-18~20)も含まれており、整地されたのは豊臣期である。

第3層：灰褐色シルト～中粒砂層からなる盛土層で、層厚は120cm未満である。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器である。

第4層：黄色細粒砂からなる地山である。

ii) 遺構と遺物

a. 第4層(地山)上面検出遺構(図5)

南西から北東へ延びる谷とピットを1基検出した。地山は南西が一番高く、TP+11.5mである。次に高い南東部はTP+10.4mとやや高い。その間の幅約9mが低くなっていて、北東が一番低い。おそらく調査地の北東にある大きな「上町谷」につながる小さな谷と思われる。

SP101 直径0.40m、残存する深さは約0.20mである。埋土は黄褐色シルト質粗粒砂で、土師器が出土した。

b. 第2層上面遺構(図6)

豊臣期の整地層と考えられる。第2層上面で土塹とピット・地下蔵を検出した。ピットの配置にはまとまりはなく、3基の板囲いの地下蔵からは煉瓦が出土した。近代以降のものである。

SK01 長辺0.75m、短辺0.50m、深さは0.14mで、埋土は明橙褐色シルト質砂である。土師器・須恵器と近世初頭の軒平瓦や瓦片が出土した。



図3 地層断面模式図

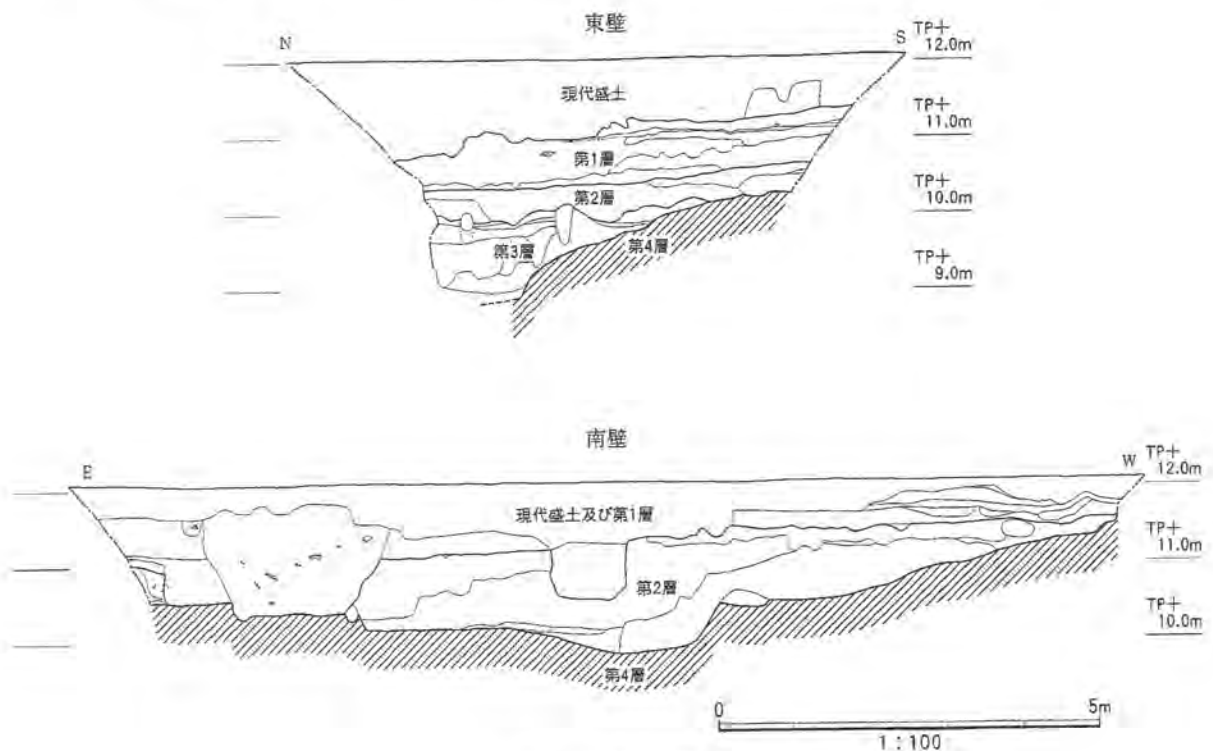


図4 地層断面図

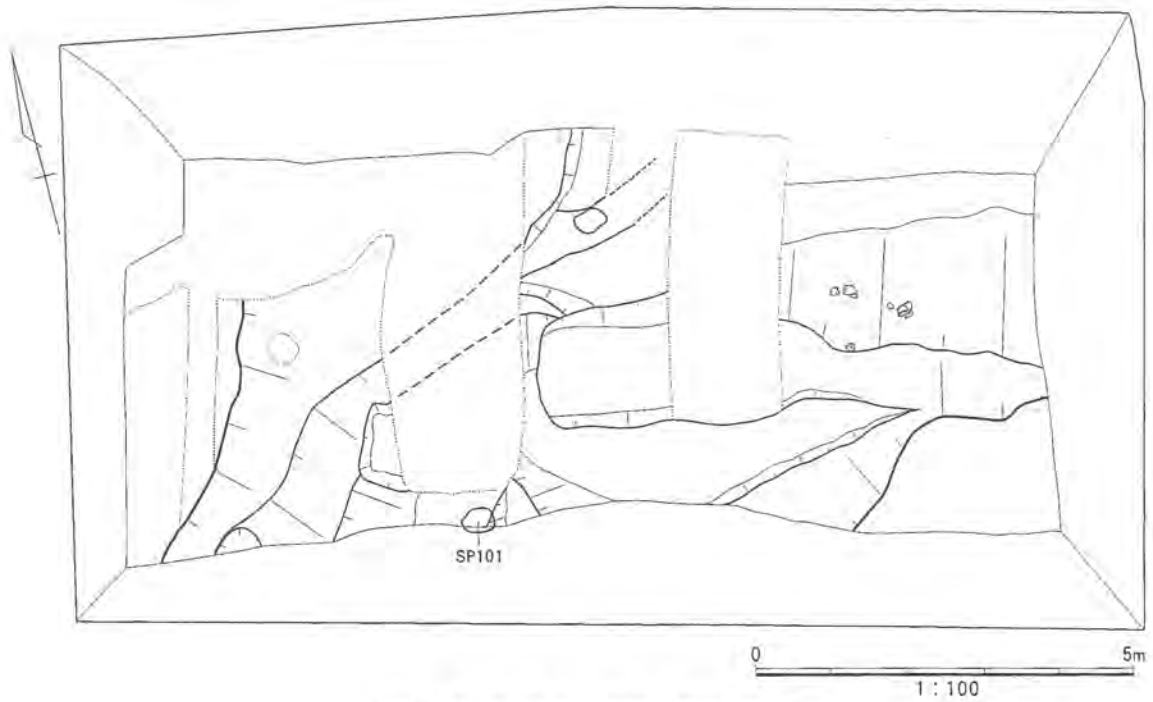


図5 第4層(地山)上面検出遺構平面図

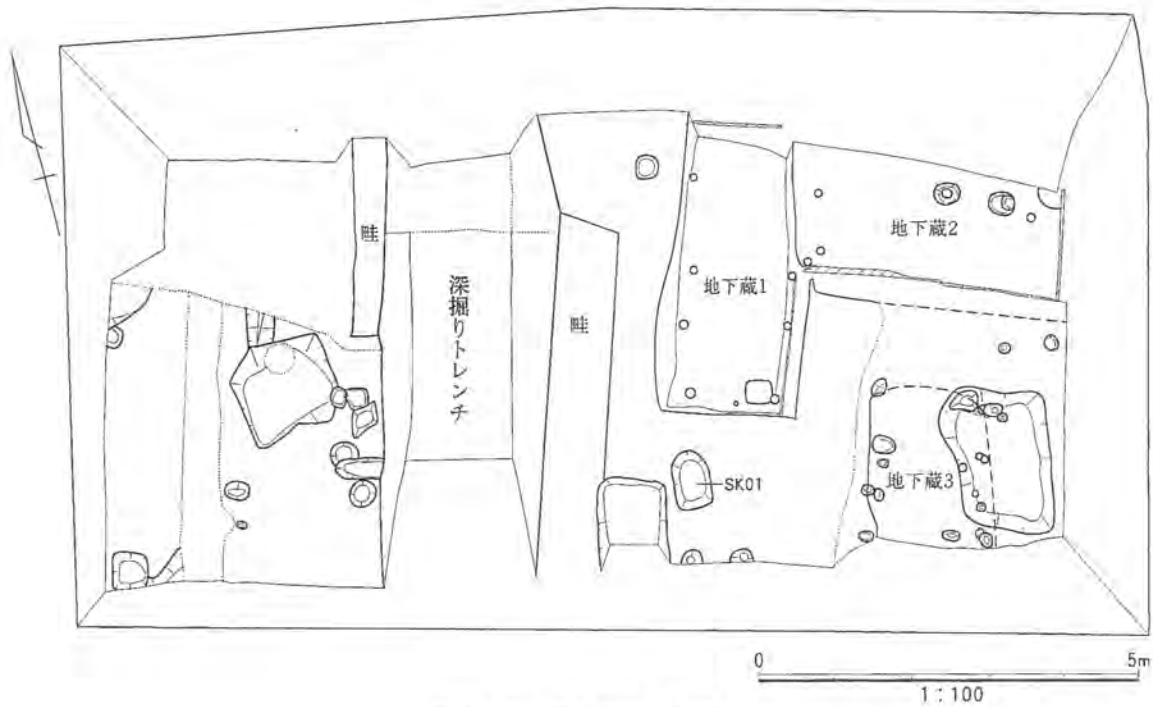


図6 第2層上面遺構平面図

c. 各層出土の遺物(図7)

第3層から出土したのは弥生時代中期の壺1、土師器杯2・高杯3・甕4、須恵器杯身5・甕6・器台9、韓式系土器の甕7・8などである。5は口径8.6cm、器高2.8cmあり、底部はヘラ切り後、調整が施されていない。7は頸部がなく、口縁部がまっすぐ伸びる形態で、口縁端部は上端に面をもつ。外面はナデ、内面は横方向の板ナデで仕上げられている。把手は残っていないが、把手を付ける際に巡らされる沈線が1条引かれている。胎土には大きな砂粒は含まれず、きめが細かい。色調は外面がにぶい黄

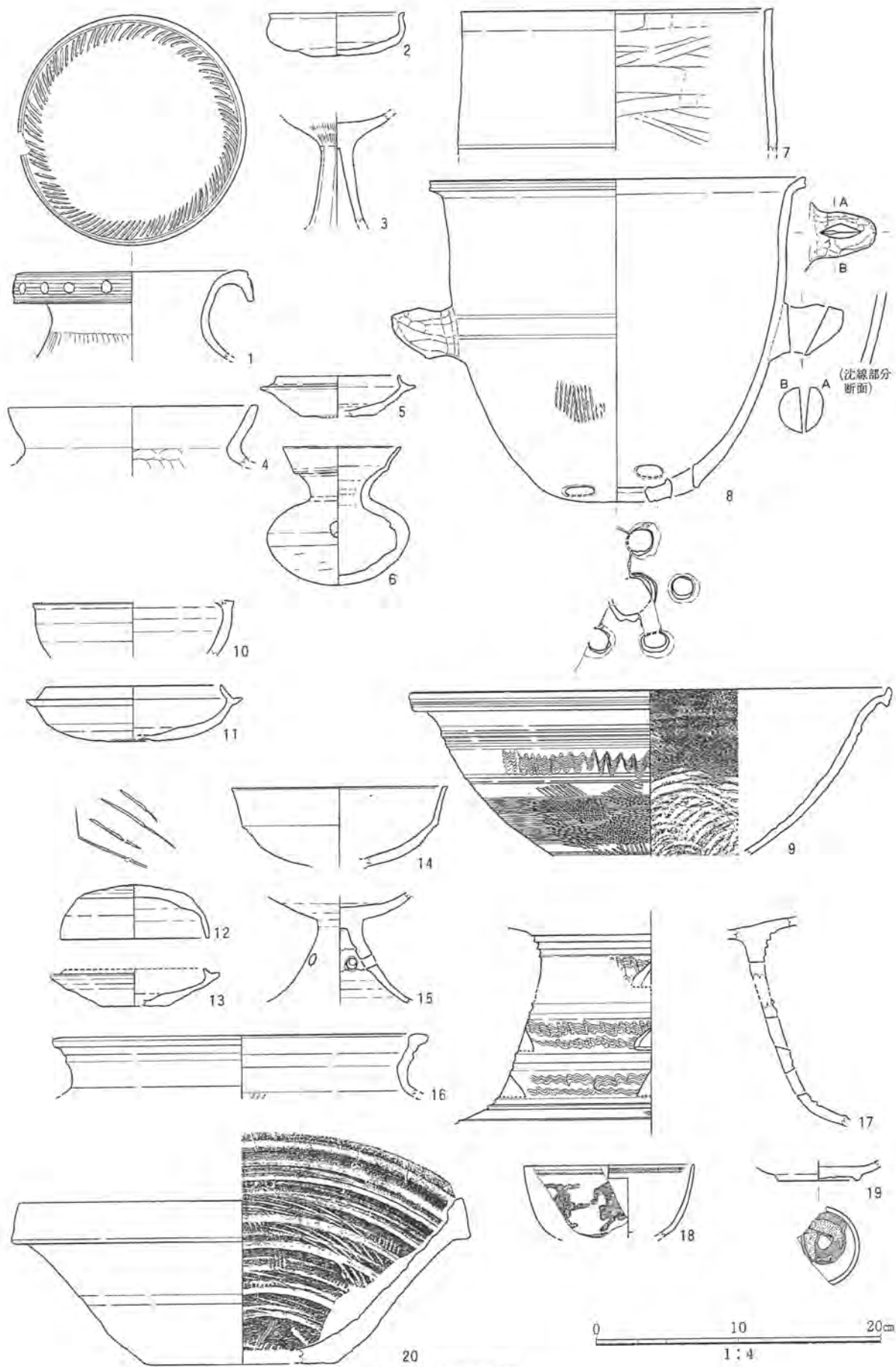


图7 遺物実測図

第3層(1~9)、第2層(10~20)

褐色、内面がやや灰色がかった黄灰色で、焼成は通常の土師器に比べ、堅緻である。8は完形に復元できる甑である。口縁部は短く外反し、球形の体部となる。底部は丸底で、蒸気孔が穿たれている。接点がないため、沈線の位置に把手がくるように図上復元した。把手は端部の丸い牛角状で、上方からヘラによって溝が穿たれ、貫通している。胎土には長石などの1～2mm大の砂粒が多く含まれ、色調は灰黄色で、通常の土師器に比べて焼成は堅緻である。以上の甑について、器形や製作技法、焼成などから考えて、古墳時代中期に朝鮮半島から搬入された可能性が高い。7については口縁部が直立気味に伸びるといふ点から、慶尚南道西部から全羅・忠清道に、8については丸底で蒸気孔が円形である点、口縁部が短く外反するといふ点から慶尚南道に系譜が求められると考える。以上、第3層出土遺物について、5がもっとも新しく7世紀中頃に位置づけられることから、第3層は前期難波宮の造営に伴う整地層と考えられる。

第2層出土遺物は須恵器杯身10・11・13・杯蓋12・高杯14・15・甕16・器台17である。近世初頭の遺物としては青花碗18、瀬戸美濃焼皿19、備前焼播鉢20と瓦がある。

3)まとめ

今回の調査で未知の谷が見つかったことは上町台地北端の地形復元に新たな資料を提供することとなった。その谷を埋める整地層に朝鮮半島からの搬入品を含む飛鳥時代から古墳時代中期の土器が混じっていることは、その時代の包含層を削って埋めていることを示すものであり、前期難波宮造営時のものであることは、これまでの研究成果を追認するものである。

中央区上町一帯から当該地を含む前期難波宮南方については、谷を埋める整地が多く見つかっている。特に[寺井誠2004]で地形復元を行って以後も未知の谷がいくつか見つかっており、地形復元図を一部加筆する必要が生じている。こういった点は今後の課題としておきたい。

また、本調査地から南東方向300mの位置にあるOS99-16次調査でも、同じ前期難波宮造営段階の整地層から、平底で格子タタキが施された甑や、陶質で格子タタキが施された平底浅鉢が出土している。これらはいずれも朝鮮半島の全羅道に系譜が求められる[大阪市文化財協会2002]。今回の調査やOS99-16次調査で見つかった搬入の可能性が高い甑の存在は、朝鮮半島からの渡来人の存在を予測させるものであり、当地周辺にそのような渡来人と関係の深い集落があったことが十分考えられる。今後の調査に期待したい。

近世初頭に整地が行われたのは豊臣期である。地山の高いところのさらに上まで整地をしているのは、平坦地を造成しようとした表れである。調査地の中では土壌を1基検出したのみで、土地利用の形態は不明であるが、この平坦地の性格は周辺の調査を待って明らかにしたい。

参考文献

大阪市文化財協会2002、『大坂城跡』V、pp.51-56

寺井誠2004、「難波宮成立期における土地開発」：『難波宮址の研究』第十二、pp.161-170

調査地全景
(西から)



第3層上面
(西から)



地山上面
(東から)



大坂城跡発掘調査(OS06-4)報告書

調査個所	大阪市中央区大手 3 丁目35
調査面積	約20m ²
調査期間	平成18年 9 月 7 日～ 9 月11日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当	文化財研究部次長 南 秀雄・櫻井久之

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城惣構の西外郭である東横堀川にほど近い場所にあり、大手橋から東へ90mに位置している(図1)。周辺のこれまでの調査では、豊臣期の屋敷や大坂本願寺期以前の遺構・遺物が良好に確認されており、当時の屋敷割復元に係わる多くの成果が得られている。

今回の調査地において大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下約240cmで大坂夏ノ陣によると思われる焼土層が確認された。また、その下層にも整地層が存在し、豊臣前期の生活面の存在が推測された。こうした状況から、豊臣氏大坂城期の屋敷割等確かめる上で重要な資料が得られると考えられ、本調査を実施することとなった。

本調査では、調査対象面までを事業者側によって重機掘削されることになり、9月5日に掘削深度を確認するための立会を行った。同月7日から調査を開始し、調査対象とした生活面の検出作業、遺構・遺物の記録作成、調査区断面図の作成等を11日までの実働3日間で行った。調査区は敷地の形状に合わせ南北に長い長方形で(図2)、調査対象面では南

北12m、東西2mある。狭い調査面積ではあったが、礎石建物の一部や屋敷境等が検出され、調査目的を果たすことができた。

なお、この調査での水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いている。本文・挿図中ではTP+○mとしている。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4・7)

先に述べたように、調査開始前に地表下約240cmまで重機掘削されており、東壁側は横矢板で土留

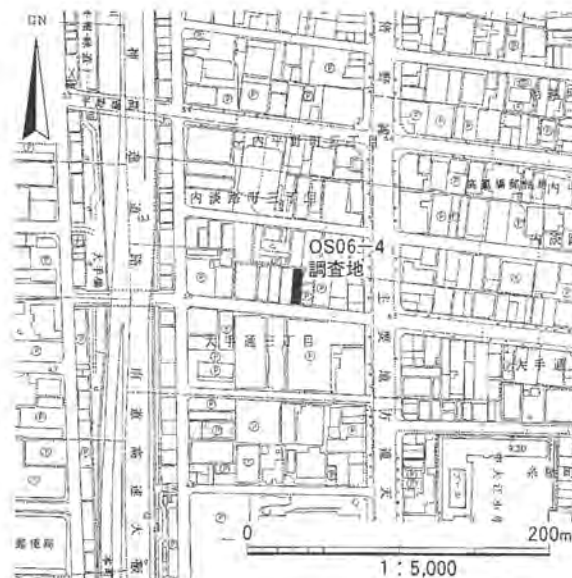


図1 調査地位置図

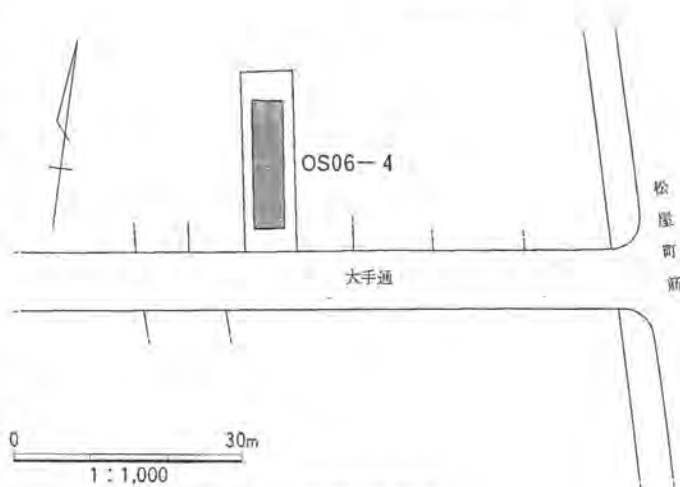


図2 調査区位置図

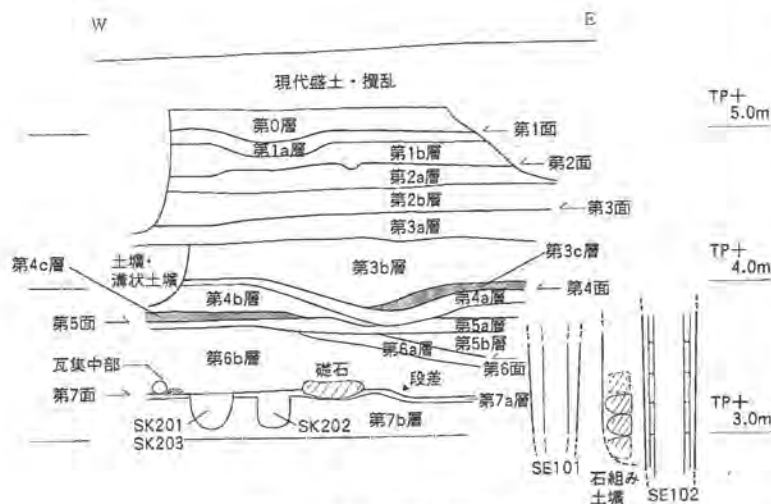


図3 地層と遺構の関係図

め養生され、南壁側は通路としたことから、残る北・西壁において地層の断面観察を行った。攪乱されていた個所も多いが、両断面では地層の連続状況をよく捉えることができた。その結果、第1～7面の遺構面を確認した。以下に各層の概略を述べる。

第0層：第1a層の上面を覆う整地層である。オリブ褐色細粒砂層で、層厚は約20cmある。

第1a層：褐色砂・礫混り粘土質シルト層で、層厚は12cmある。5cm大前後のシルト偽礫を若干含む。細～中粒砂を筋状に含む部分もある。本層上面が第1面で、幕末頃の遺構面と思われる。

第1b層：黄褐色細粒砂層で、層厚20cm前後の整地層である。

第2a層：にぶい黄褐色砂・礫混り砂質シルト層で、層厚は10～15cmである。1～2cm大のシルト偽礫を含む。下半部には客土した際の単位とみられる縞模様を残す。本層の上面が第2面となる。

第2b層：褐色礫混り細粒砂層で、層厚15～30cmと若干の開きがある。整地層である。

第3a層：褐色砂・礫混り粘土質シルト層で、層厚は15cm前後である。上面が第3面となる。西壁断面では本層の基底面に土壌・溝状土壌が確認された。

第3b層：褐色砂・礫混りシルト層で、30～40cmの層厚がある。1～3cm大のシルト偽礫が主体となった整地層である。

第3c層：暗褐色砂礫混り粘土質シルト層で、5～10cmの厚さがある。炭を多く含む。

第4a層：にぶい黄褐色粘土質シルト層で、層厚は10cm前後である。炭を多く含む部分がある。上面が第4面となる。北壁断面では中央部を境に、東側が10cmほど低くなっている。

第4b層：褐色細粒砂層で、10～20cmの層厚がある。整地層である。

第4c層：暗褐色粘土質シルト層で、層厚は8cmほどである。炭・焼土を多く含んでおり、大坂夏ノ陣に伴う焼土層である可能性が高い。

第5a層：にぶい黄褐色シルト層で、10cm前後の層厚をもつ。西壁断面では本層の上面に杭痕、下面に土壌になると思われる窪みが見られた。本層上面が第5面で、第6b層の遺物から考えて夏ノ陣被災面と考えられる。

第5b層：黄褐色砂・礫混り細粒砂層。北壁断面側にも確認され、調査区の東半にだけ分布する整地層である。

第6a層：にぶい黄褐色砂礫混りシルト層で、層厚は10cm弱である。北壁断面の東側に見られ、東に向けて緩やかに下がっている。上面はよく締まっており、第6面となっている。下半部には整地した時の盛土の単位も一部に残している。

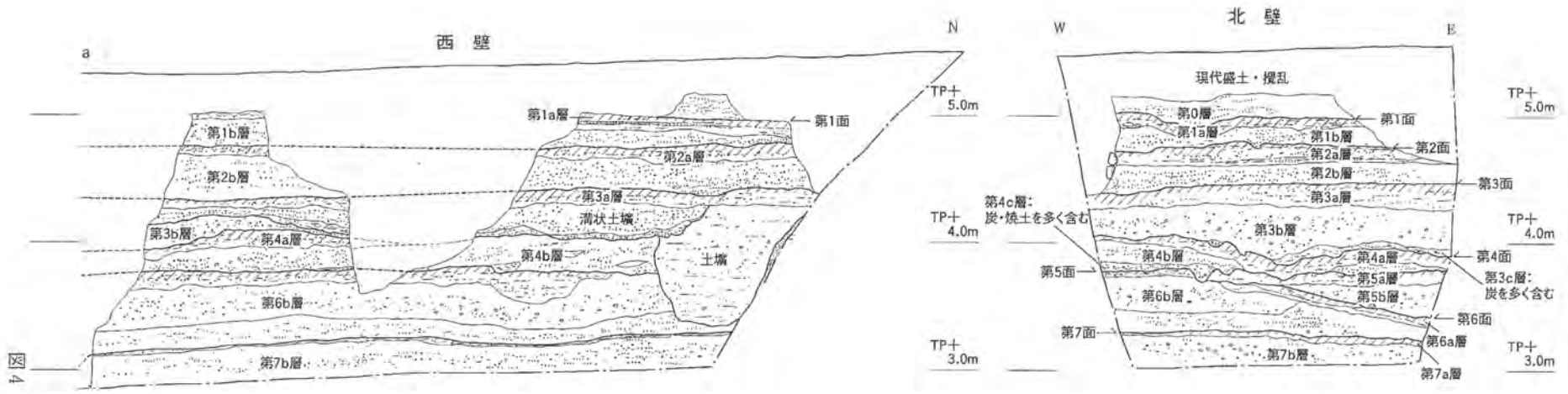
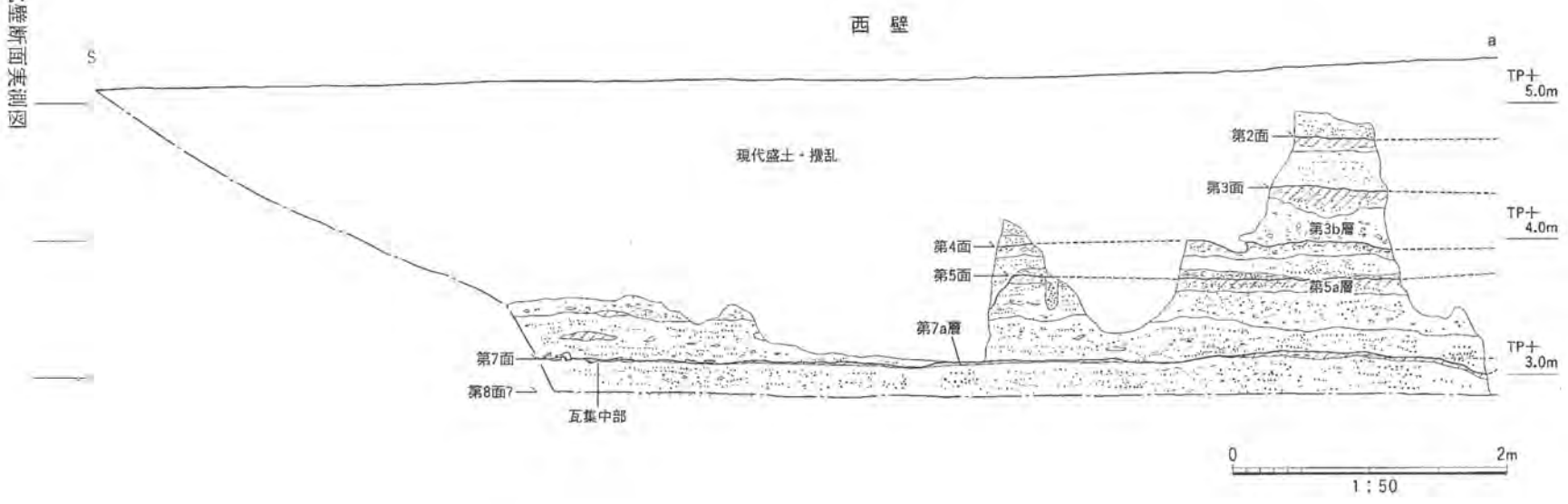


図4 西壁・北壁断面実測図



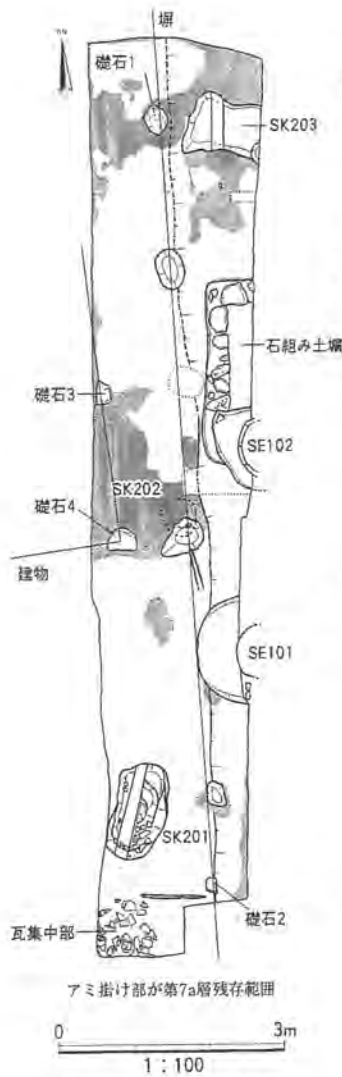


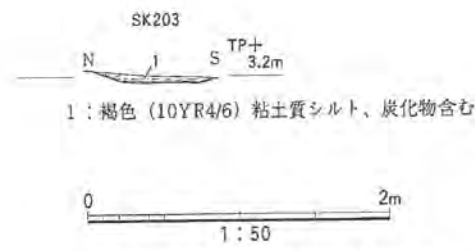
図5 遺構平面実測図



- 1: 焼土
- 2: 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂~粗粒砂、平瓦片を多く含む
- 3: 明褐色 (7.5YR5/6) 中粒砂~粗粒砂
- 4: にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗粒砂混り粘土質シルト



- 1: 褐色 (10YR4/6) 粗粒砂混り粘土質シルト



- 1: 褐色 (10YR4/6) 粘土質シルト、炭化物含む

図6 SK201~SK203断面実測図

第6b層：上半部は黄褐色礫・小石混り細粒砂、下半部は黄褐色細粒砂で、ともに整地層である。上半部中には偽礫も多く存在する。本層より図7の土師器皿2・3、肥前陶器碗5・瀬戸美濃焼志野鉢6などが出土しており、地層の年代を推定することができる。

第7a層：褐色粘土質シルト層で、層厚2~8cmある。薄い部分もあるが、調査区のほぼ全域に分布し、第7面を形成する。調査区の中央を境にして、その東半側が5cm程度低くなっている。本層の上面に礎石・瓦集中部・土壇があり、下面に

も土壇があった。豊臣前期の生活面と推測する。

第7b層：黄褐色細~中粒砂層で、1~3cm大のシルト偽礫を多く含む整地層である。層厚は30cm以上ある。土師器灯明皿1が出土している。西壁に沿って入れたトレンチの南端で、本層の下方に第8面を形成すると思われる固く締った地層が見られた。

ii) 遺構と遺物(図5~7)

今回の調査では第7a層上面および下面において遺構検出作業を行った。また、上層から掘込まれた井戸や土壇も同時に確認しており、これらを区別して報告する。

a. 第7a層上面および下面遺構

この上面が第7面となっている。本層を覆う整地層から出土した図7の肥前陶器碗5・瀬戸美濃焼志野鉢6から、この遺構面の時期が豊臣前期であると考えられる。

礎石 第7面に計4個の礎石が検出され、その抜取り穴とみられるものもあった。礎石1は調査区北端にあり、礎石2は調査区の南端にある。両者を結ぶ線を境にして、東側が緩やかに低くなっており、その線上の3個所に抜取り穴と考えられる窪みがあった。各々の間隔は、北から2.0m、3.6m、

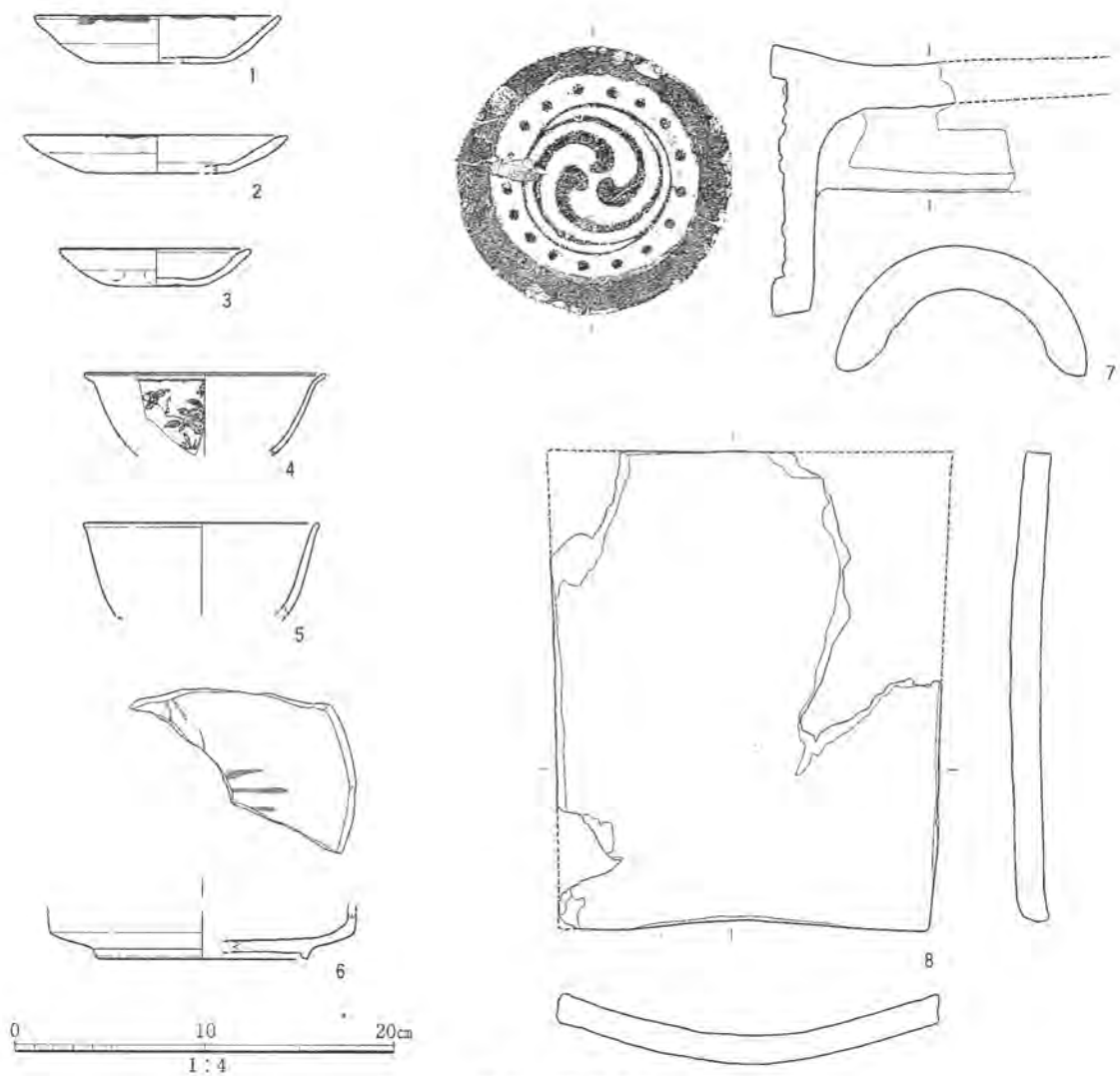


図7 遺物実測図

第7b層(1)、第6b層(2・3・5・6)、SK201(4)、瓦集中部(7・8)

3.5m、1.2mである。こうした状況から、礎石1・2などは屋敷地境となる塀に伴うものであったと推測される。すると、礎石3・4は西側の屋敷地内に存在した建物のもので、屋敷境の塀に沿って1棟の礎石建物があったものと考えられる。これらの方位は現在の敷地方位と異なり、正方位方向であることが注意される。なお、礎石2の上面には焼け焦げた痕が明瞭に残っていた。

SK201 調査区南部にある長軸長1.28m、短軸長0.68mの楕円形の土坑で、第7a層の上面から掘込まれる。深さは0.65mある。埋土の上方には焼土や瓦片が含まれる。中国製青花碗4が出土している。

SK202 調査区中央部にある第7a層下面の土坑で、直径0.46m、深さ0.28mある。屋敷地の境界線上に位置している。

SK203 調査区北部にある深さ0.06mの浅い土坑で、第7a層上面から掘られている。底に炭化物が薄く拡がっていた。

瓦集中部 調査区南西隅において、第7a層上面の南北0.81m、東西0.83mの範囲に、瓦が面的に拡がって検出された。さらに、西壁や南壁内にも連続する状況が確認された。平面的に検出することのできた範囲では、丸瓦片が大半を占め、数個の平瓦片を含むのみであった。また、接合作業の結果、

丸瓦片の殆どは完形に近い状況に復元され、軒丸瓦1点(図7-7)と丸瓦6点以上のあることがわかった。これらの丸瓦を取り上げたのち、西壁に露出した瓦を掘り出したところ、みな平瓦の破片で、ほぼ元の形に復元された。出土した丸瓦群は寸法がほぼ同じで、製作技法も同じであることから同時に用いられていたとみて問題なく、西壁内にあった平瓦とも胎土や焼成状態が類似する。このような状況から、この瓦集中部は1つの建物に葺かれていた瓦が、屋根の傾斜方向、すなわち南から北側に向って落下したものではないかと推測される。そうすると、検出作業時に丸瓦の一部に、第7a層が覆い被さっていたことも、落下の衝撃が地面に加えられた時に、地面の土が巻き上がったためと考えることができる。

b. 上位層の遺構

調査区内に確認された東側の屋敷地内に設けられた井戸・土塋がある。これらは第7a層より上位から掘込まれたものであるが、調査区の東壁側を横矢板で土留め養生していたため、どの地層に関連付けられる遺構であるかが明らかでない。

SE101 直径1.42mの掘形の内部に推定直径0.65mの井戸側をもつ。井戸側は有機質素材であったとみられ、幅1cmほどの暗褐色シルトの筋が断面に認められた。

SE102 後述の石組み土塋を壊して作られた井戸で、井戸瓦を推定直径0.80mに組んで井戸側としている。

石組み土塋 南北2.42m、東西0.62mの掘形をもち、その壁面に沿って殆ど加工の加えられていない人頭大の花崗岩を3段以上に積み上げている。深さは0.7m以上ある。掘形の西側ラインが現在の敷地方向に近いことが注意される。

3) まとめ

今回の調査成果としては、狭小な調査地でありながらも第7a層上面において豊臣前期の生活面が良好に検出され、屋敷地境や礎石建物などが確認できたことが挙げられる。これにより、当時の屋敷地の方位が正方位方向を採っていたことがわかる。調査地の南にある大手通は、現在、西で北側へ振る方位となっており、この調査で確認できた屋敷地の方位とは斜交することになる。周辺での調査例[松尾信裕2003]を見ると、当現場の北側の街区では、正方位方向の例とともに大手通と平行する内淡路通と合致した方位を向くものがみられる。東西の大手通や内淡路通に合わせたり、正南北方向を採っている松屋町筋に沿わせたりと、敷地方位はまだ確定されていなかったのであろう。

また、同じ生活面では調査区の南端に瓦集中部が検出され、その状況から屋根に葺かれていたものが転落したことが推測された。この瓦集中部の東側に近接して見つかった礎石2の上面に焼け焦げた痕があったことから、火災により倒壊した建物に伴うものであった可能性が考えられる。この点も今回の調査成果であるといえよう。

参考文献

松尾信裕2003、「豊臣氏大坂城惣構内の町割」：大阪市文化財協会編『大坂城跡』Ⅶ、pp.325-338

調査区北壁断面



第7a層上面
(豊臣前期生活面)
(北東から)



第7a層上面
(豊臣前期生活面)
(南東から)



第7a層上面
瓦集中部
(北東から)



瓦集中部出土瓦①



瓦集中部出土瓦②



大坂城跡発掘調査(OS06-5)報告書

調査個所 大阪市中央区内平野町2丁目59・60
調査面積 104m²
調査期間 平成18年10月10日～10月21日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄・櫻井久之

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城の西側惣構の北部に位置している(図1)。谷町筋から西に向かって緩やかに降ってきた内平野通が、この地点から松屋町筋にかけて急激に下降しており、本調査地が上町台地の西縁辺部にあることがうかがえる。これまでに行われた周辺の調査では、豊臣～徳川期大坂城の遺構群とともに奈良時代の遺構・遺物が確認されている(OS90-51次調査ほか)。調査地に南接する敷地でもOS91-16次調査が行われ、東西方向をとる古代の柱列などが見つかった[大阪市文化財協会2003]。

今回の調査地において大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下約80～85cmで地山層が検出され、遺構の存在が確認された。こうした状況から、豊臣～徳川期における屋敷割等を確認する上で重要な資料が得られると考えられ、本調査を実施することとなった。

敷地の北半に旧建物の基礎があったことから、調査区は南東寄りの場所に、南北8m、東西13mの長方形に設定された(図2)。本調査では、地山層までの地層を重機掘削することになっており、10月10日からまずその作業に入った。その後、人力による遺構の検出・掘削を行い、遺構・遺物の記録作成等を20日までに行った。21日に埋戻し作業を行い、実働9日間で現場作業を終了した。

17～18世紀の掘立柱建物や溝・土塀のほか、奈良時代の柱穴、古墳時代の溝等が検出され、調査目的を果たすことができた。

なお、この調査での水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いている。本文・挿図中ではTP+○mとしている。

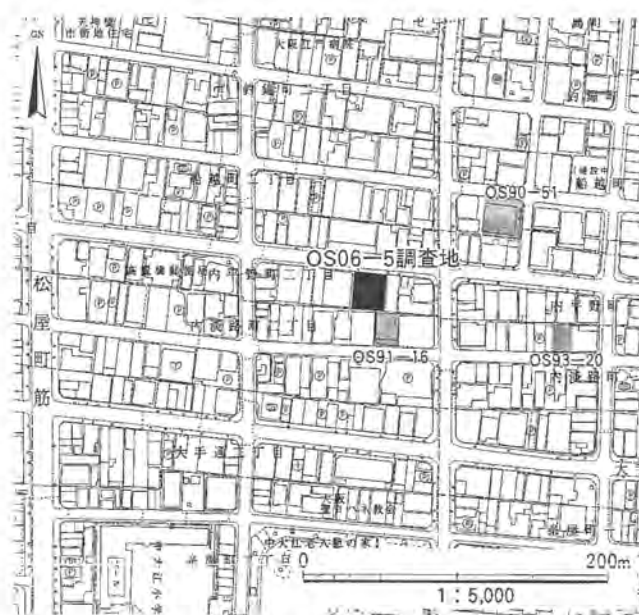


図1 調査地位置図

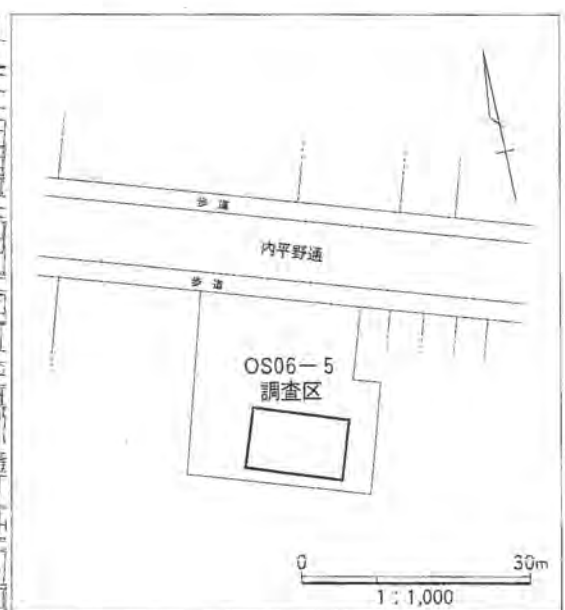


図2 調査区配置図

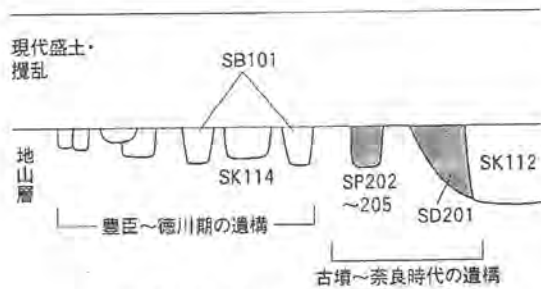


図3 地層と遺構の関係模式図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

この調査地の現地表は、ほぼ平坦に整地されているが、わずかに西に向かって低くなっている。現代の盛土や攪乱を除去すると、地山層の上面に各時代の遺構が検出される状況であった。現代の盛土は東壁側で約100cmの厚さがあったが、西壁側では約30cmと薄い。

そのため地山直上の標高は西部が30cm高く、調査区東部でTP+13.9m、同西部でTP+14.2mで、現地表の傾きとは逆向きとなっている。

豊臣～徳川期大坂城に関係する遺構の埋土は主として灰～にぶい黄褐色砂質シルト、古墳・奈良時代の遺構に係るものの多くは暗褐色粘土質シルトである。地山層の層相にも地点ごとの違いが認められ、東から西に向かってにぶい褐色粘土質シルト、明黄褐色砂質シルト、明黄褐色シルト混り礫、浅黄色細粒砂に変化している。

ii) 遺構と遺物

今回の調査では地山層の上面において遺構検出作業を行った。遺構群は古墳～奈良時代のもの、豊臣～徳川期大坂城のものに大別することができ、前者に200番代の遺構番号、後者に100番代の遺構番号を付している。以下、両者を分けて報告する。

a. 古墳～奈良時代(図5・6・10)

SD201 調査区南東部にある幅1.9～3.4m、深さ0.4mの溝で、調査区南壁中央部からやや蛇行ぎみに東壁北半部に続く(図5)。出土遺物から古墳時代中期の遺構と考えられる。埋土の状況は、上方から①灰黄褐色粘土質シルトの古土壤層、②地山層起源の偽礫を多く含んだ暗灰黄色粗粒砂混りシルト層、③褐灰色砂質シルト層、④地山層起源の偽礫を多く含む褐灰色粗粒砂混りシルト層、となっている(図6)。④は加工時形成層、③は機能時堆積層である。こうした状況から、この溝が掘削後すぐに埋められたのではなく、一定期間機能したのち放棄された過程をうかがうことができる。

出土遺物には土師器高杯1、須恵器杯蓋2、壺3、甕4、円筒埴輪5がある(図10)。いずれも小片であるが、須恵器類はTK208型式に相当し、古墳時代中期中葉に属す。

SP202～205 SD201に近接する位置に4基の柱穴が確認された。柱痕跡は明瞭でない。このうちのSP203・205はSD201埋土の最上部から掘られており、確実にこの溝より後である。他の2基については確証が得られないが、同規模で、大差ない平面形であることから近接する時期の遺構と思われる。各遺構からは土師器細片が出土しているのみで、時期を決めがたいが、これらの遺構の西側に掘られた後世の溝(SD133)から、土師器甕8、凹面に布目痕のある丸瓦10、平瓦11が出土している(図10)。また、調査地南側の敷地で行われたOS91-16次調査でも古代の柱穴列が見つかっており、これらと関連する可能性が考えられることから、奈良時代の遺構と推測する。

その他の遺物 後世の遺構からこの時期の遺物が出土している。6は円筒埴輪で遺構検出作業中に

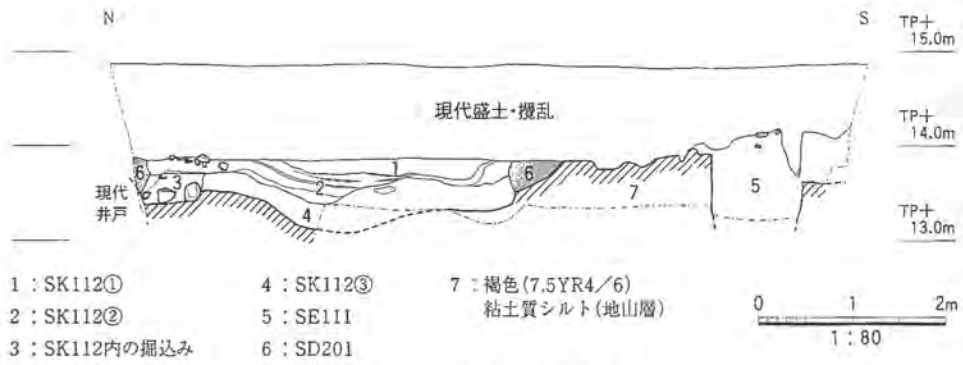


図4 調査区 東壁断面

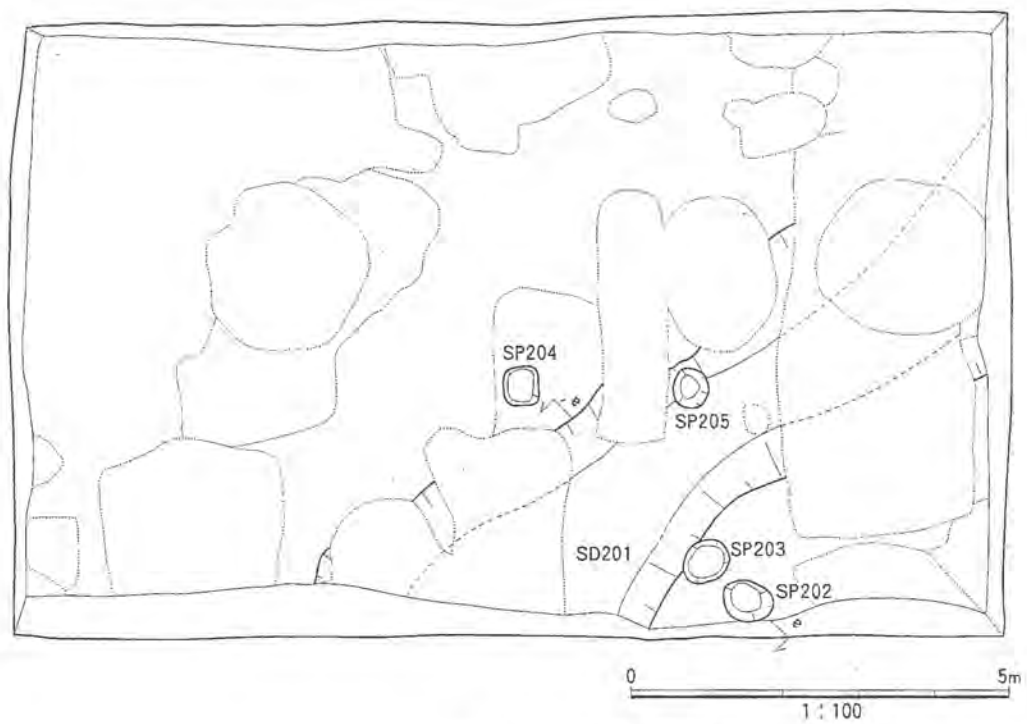
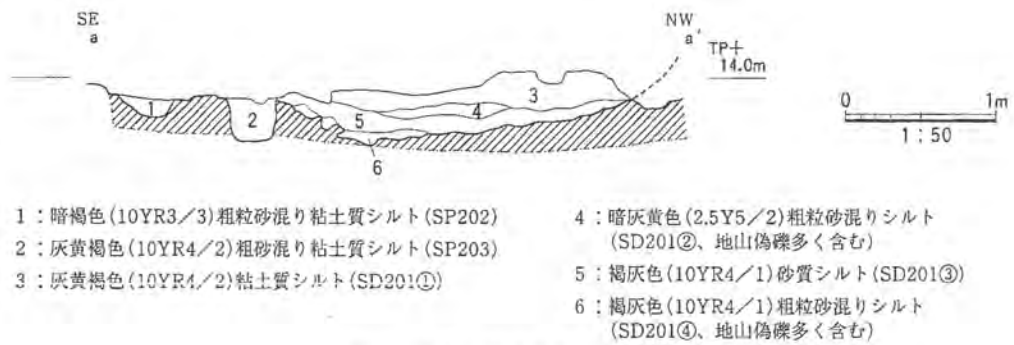


図5 古墳～奈良時代の遺構平面



- | | |
|------------------------------------|--|
| 1 : 暗褐色(10YR3/3)粗粒砂混り粘土質シルト(SP202) | 4 : 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂混りシルト
(SD201②、地山偽礫多く含む) |
| 2 : 灰黄褐色(10YR4/2)粗粒混り粘土質シルト(SP203) | 5 : 褐灰色(10YR4/1)砂質シルト(SD201③) |
| 3 : 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト(SD201①) | 6 : 褐灰色(10YR4/1)粗粒砂混りシルト
(SD201④、地山偽礫多く含む) |

図6 古墳～奈良時代の遺構断面

地山層の直上で見つかった。7は割り込みのある板状部に、裏面から別の粘土帯が継ぎ足されており、形象埴輪ではないかと思われる。SD133から出土した。9は飛鳥時代の須恵器杯身で、SD103から出土したものである。

b. 豊臣～徳川期(図7～10)

当該期の遺構については、番号を付したものに建物1棟、井戸1基、溝5条、土塋10基、柱穴22基がある。ここでは主要なものを建物・溝・井戸・土塋の順に述べる。

SB101 調査区中央部に見つかった東西2間(3.2m)、南北3間以上(5.9m以上)の掘立柱建物で、棟方位をほぼ正南北にとっている。東側柱としてSP121・123・124、西側柱としてSP137・136・135、南棟持柱としてSP125を検出したが、北棟持柱は調査区内にない。掘形の埋土は灰～黄灰色粗粒砂混りシルトで、SP123～125に確認された柱痕跡は暗灰黄色粗粒砂混り砂質シルトであった。遺物には土師器の小片しかなかったが、埋土は明らかに古代のものとは異なり、豊臣～徳川期のものである。SP121が17世紀後半の土塋SK113に切られており、それ以前といえる。また、この建物のちょうど中央にSK114という溝状の土塋があり、建物方向とも揃っている。これを建物と関連する遺構と捉えることができるならば、土塋の遺物から17世紀中頃という時期を与えることができる。

SD101・102・132・133 調査区中央部の南側に重複して存在する溝群である。SD133はさらに3時期に分かれる。いずれも南北方向をとっており、敷地南辺を東西に走る基幹排水路へと繋がる下水施設であったと考えられる。この溝群の最終的な姿がSD101と思われるが、この溝では底面を整えたのち漆喰を敷き、その上に陶製管を連ねて設置していた。共伴する遺物から幕末頃のものといえる。これに先行するSD102・132についても陶製管が敷設されていた可能性があるが、最も古いSD133については埋土中に水成層の挟在が認められ、埋設管はなかったことがわかる。SD133からは17世紀前半の丹波焼播鉢が出土しているうえ、17世紀中頃と推測されたSB101の柱穴を壊していることから、それ以降に掘削された溝といえる。

SD103 調査区中央部北辺にあってSD201に沿うような方向に掘られている。遺物は飛鳥時代の須恵器杯身9のみであるが、SB101の柱穴SP121を切っており、それ以後のものである。幅0.15m、深さ0.06mの小溝である。

SE111 調査区南東隅に検出した直径1.15mの素掘り井戸で、暗灰黄色礫混り砂質シルトで埋められる。検出面から1mほど掘下げたが、底は確認できていない。埋土に肥前陶磁器・軟質施釉陶器が含まれ、それらの特徴から17世紀後半に埋戻されたとみられる。

SK110 調査区中央部付近にある直径0.8mの土塋で、後述のSK114の埋土上から掘込まれ、内部に漆喰作りの桶を据えている。桶は直径60cm、残存高42cm、体部厚5cm、底部厚10cmある。幅10cm前後の板材を20枚程度巡らせて外枠としたのち、内部に漆喰を厚く塗り込んで作られている。桶内の埋土は黒褐色シルト混り極細粒砂で、水漬きの特徴は認められない。土師器灯明皿19、堺播鉢20が出土しており、18世紀前半の遺構である。

SK112 調査区北東隅にある平面長方形を呈する土塋である。攪乱を大きく受けているが、東西2.0m、南北3.9m、深さ0.7mある。図4の東壁断面中に示すように、埋土は3層に大きく分かれ、上か

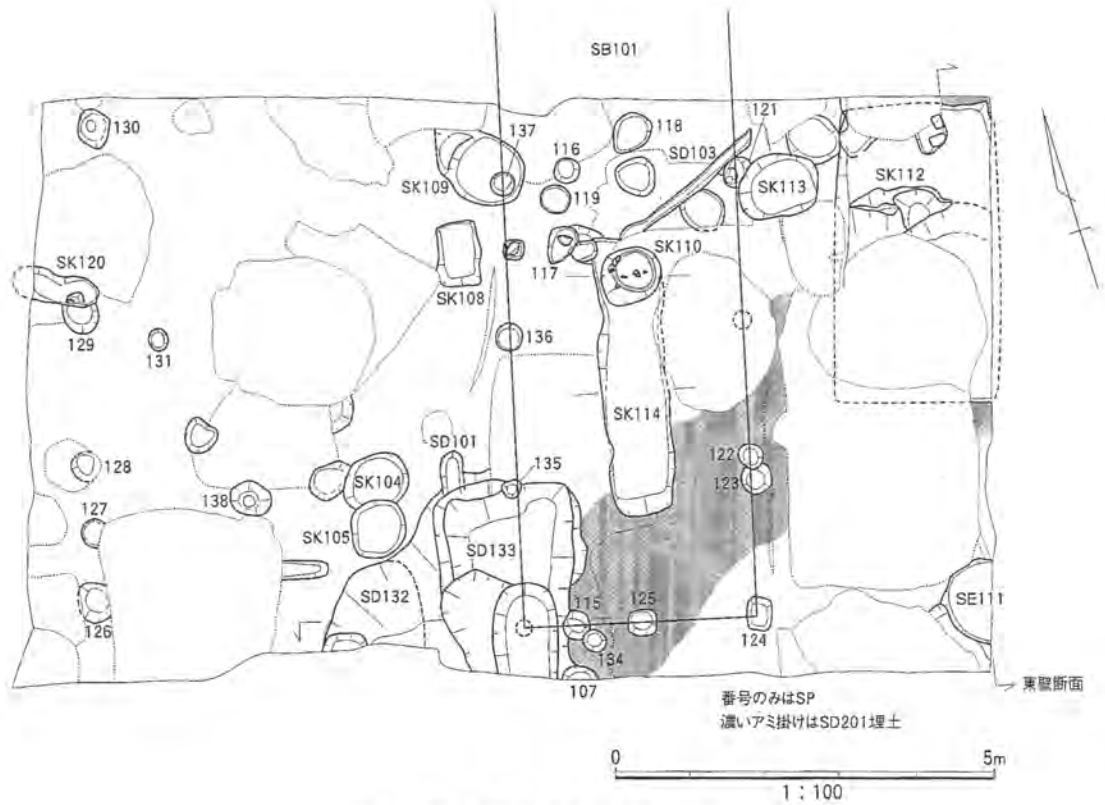
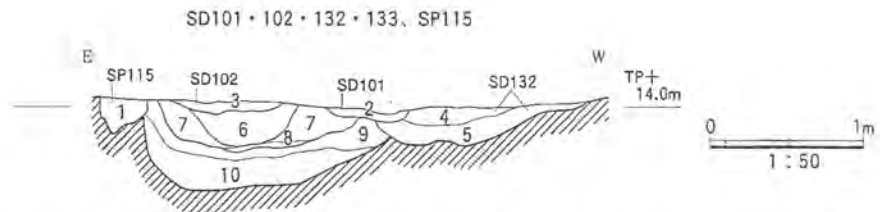
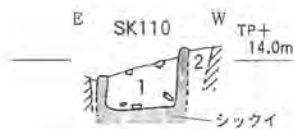


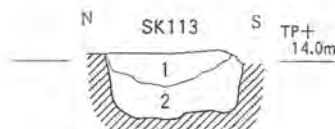
図7 豊臣～徳川期大坂城の遺構平面



- | | |
|-------------------------------|---|
| 1 : 灰色 (5Y4/1) 粗粒砂混り粘土質シルト | 6 : オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト混り細～中粒砂 (SD133新) |
| 2 : 灰色 (5Y5/1) シルト | 7 : 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粗粒砂混り砂質シルト (SD133中) |
| 3 : 灰色 (7.5Y4/1) 粗粒砂混り砂質シルト | 8 : 灰色 (5Y5/1) シルト質粘土 (SD133中) |
| 4 : 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細粒砂混り砂質シルト | 9 : 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗粒砂混りシルト (SD133古) |
| 5 : 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗粒砂混り砂質シルト | 10 : 黄灰色 (2.5Y5/1) 粗粒砂混り砂質シルト (SD133古) |



- | |
|-----------------------------|
| 1 : 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト混り極細粒砂 |
| 2 : 黄灰色 (2.5Y4/1) 粗粒砂混りシルト |



- | |
|-------------------------------|
| 1 : 灰黄褐色 (10YR4/2) 炭・粗粒砂混りシルト |
| 2 : 灰色 (5Y4/1) 炭・シルト混り細粒砂 |



- | |
|----------------------------------|
| 1 : にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗粒砂混り粘土質シルト |
|----------------------------------|

図8 豊臣～徳川期大坂城の遺構断面

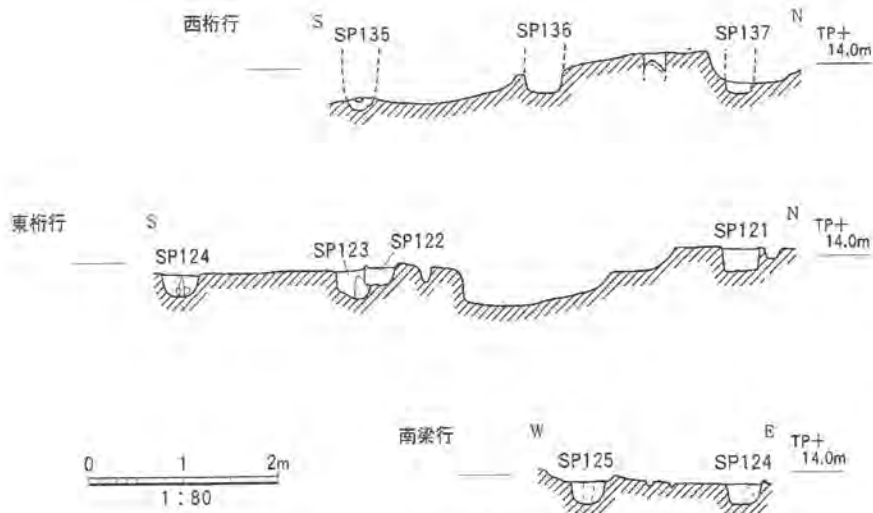


図9 SB101柱穴断面

ら①黒褐色粗粒砂混り粘土質シルト層、②黒褐色砂質シルト層、③にぶい黄褐色粗粒砂混り粘土質シルト層である。②は炭を多量に含み、にぶい黄色細粒砂を筋状に挟在している。③はこの土壌以前にあったSD201の埋土を起源とするもので、土壌の底が掘削後あまり時

間を開けずに埋戻されたことを示す。③層上面からの掘込みが北辺にあり、また本層の上面を水漬きの褐色粘土が薄く堆積していたことから、これが機能面であったと考えられる。ただし、③層の上面は平坦ではなく中央部が窪んだ状態で、この遺構がどのように利用されていたのかは不明である。これらの地層からは、土師器皿12・13、肥前陶器小杯14・同碗15・同皿16、瀬戸美濃焼志野皿17・18といった豊臣後期に属する遺物が出土している。土師器13は灯明皿として使用されている。

SK113 SB101とSK112に挟まれた場所にある直径0.9m、深さ0.4mの土壌である。埋土の上層が灰黄褐色炭・粗粒砂混りシルト層、下層が灰色炭・シルト混り細粒砂層と明瞭に分かれる。土師器灯明皿21、肥前染付碗22、丹波焼播鉢23(下相野窯址G1類：[兵庫県教育委員会1992])が出土しており、17世紀後半の時期が与えられる。そのほかに籾の羽口や鉾滓も数点出土している。

SK114 SB101のほぼ中央にあり、棟方向に沿って南北に長い溝状の土壌である。長さ3.7m、幅0.9mあり、北から南に向かって深くなり、南端付近で0.4mの深さがある。中央部辺りでは厚さ1cmほどの炭層の下ににぶい黄褐色粗粒砂混り粘土質シルト層があるが、南端では炭層が約10cmに達する。土師器皿24～27、肥前白磁輪花皿28が出土した。白磁皿から17世紀前半の遺構と考えられる。

SK120 調査区西壁沿いにある幅0.35m、深さ0.15mの土壌であるが、西壁内に続くため、長さは確かめられていない。SP129を切っている。埋土はオリーブ黒色粗粒砂混り粘土質シルトで炭を多く含んでいる。肥前染付碗29・30、堺播鉢31などが出土している。染付碗はコンニャク印判を外面の主文様としており、手描きを組み合わせたりもしていることから、18世紀前半のものといえる。

3) まとめ

今回の調査成果としては、とくに古墳時代の溝SD201と豊臣～徳川期大坂城に係るSB101の検出が挙げられる。

SD201の性格としては、まずこの溝の時期が古墳時代中期であること、そして大阪湾側への見晴らしのよい上町台地西辺の高所にあり、幅1.9～3.4m、深さ0.4mの規模をもち、一定期間開放され滞水状態にあったこと、出土遺物に少量ながら埴輪を含んでいることから古墳の周溝である可能性が考

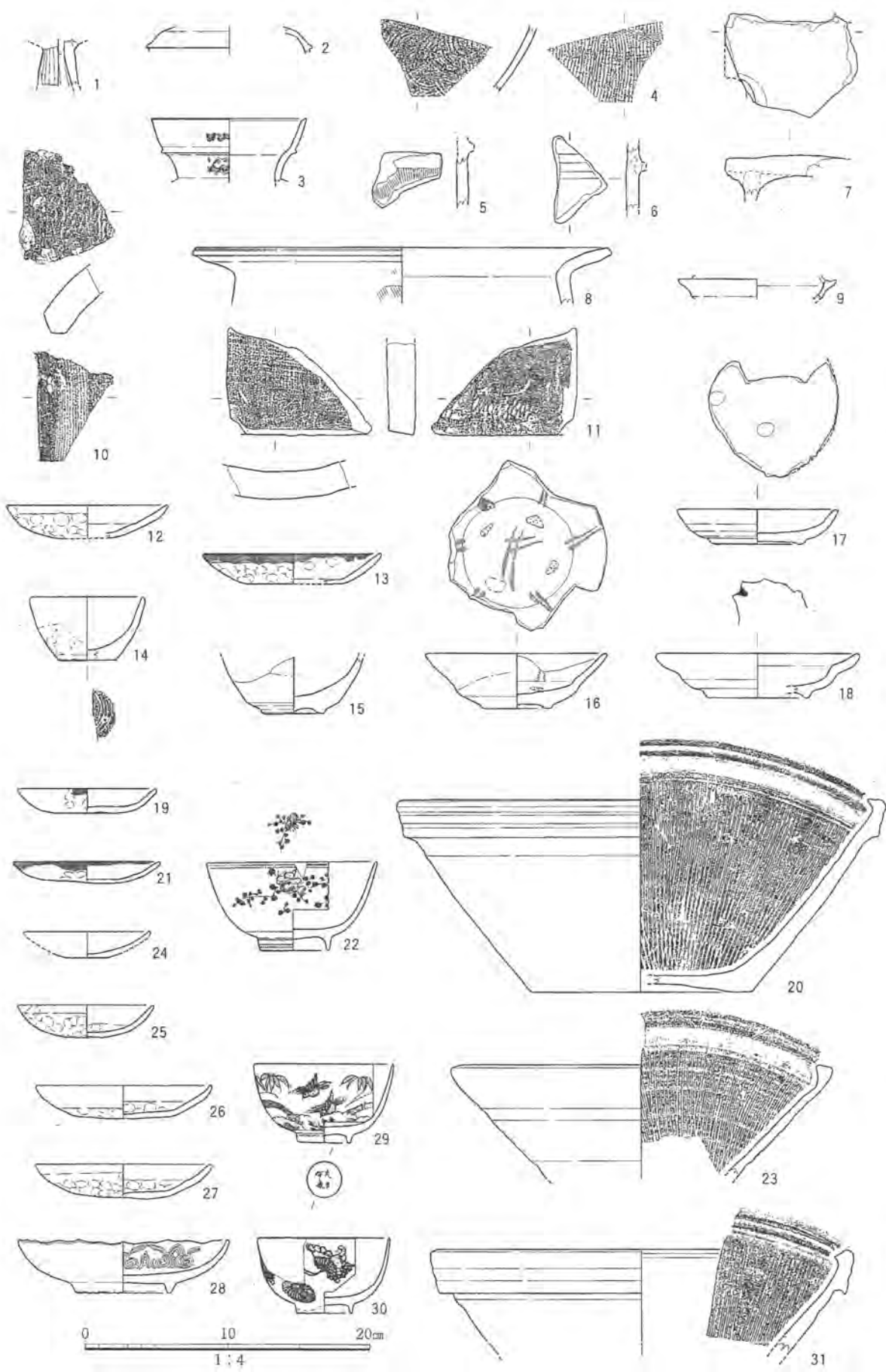


图10 遺物実測図

SD201(1~5)、地山層直上(6)、SD133(7·8·10·11)、SD103(9)、SK112(12~18)、SK110(19·20)、SK113(21~23)、SK114(24~28)、SK120(29~31)

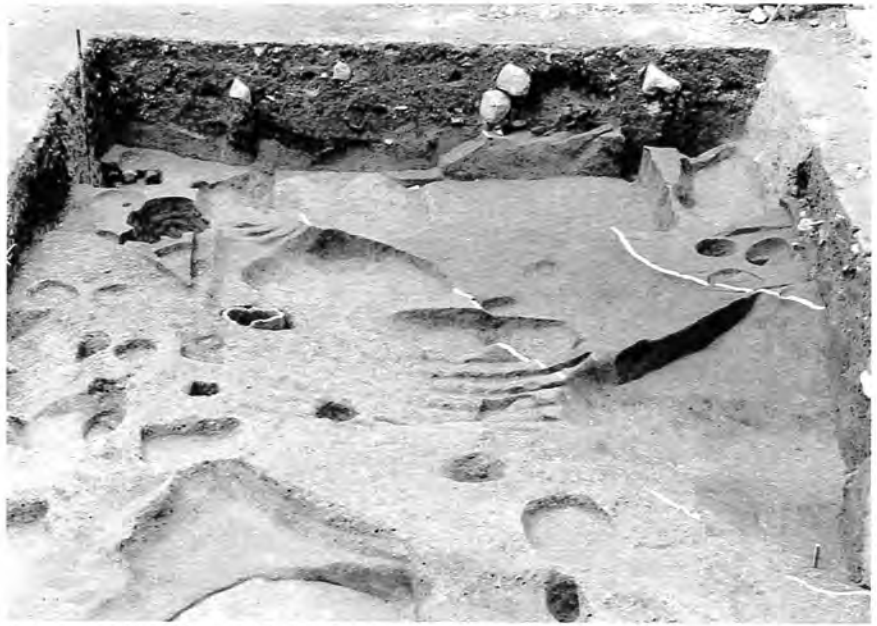
えられる。また、本調査地から台地斜面を西に降りた場所にあるOS93-47次調査地で、室町時代後半の整地層などから多量の円筒埴輪・形象埴輪が見つかったこともこの可能性を補強する[大阪市文化財協会2003]。ならば、断面セクションの位置付近がクビレ部、その北側に後円部を設けた南向きの前方後円墳を推定できないだろうか、と考える。ただし、この溝の連続部分が南接するOS91-16次調査地側にかかっておらず、まだ周囲の情報が不十分である点が課題として残る。

一方、SB101については遺構の切り合い関係から、17世紀後半以前の掘立柱建物であることがいえた。正方位方向を意識した配置をとっており、町割復元に役立つ資料を得ることができた。また、この遺構についてはその内部に位置する溝状の土壙SK114との関係が注意された。同様な例が本調査地の東120mにあるOS93-20次調査地にあり、そこでは南北2間、東西4間の掘立柱建物の内部にやはり溝状の土壙が存在する。時期もほぼ共通しており、豊臣後期あるいは徳川初期とされている[大阪市文化財協会2003]。こうした建物・土壙の機能については、まだはっきりとしたことは述べられないが、今後着目していきたい点であることを述べておきたい。

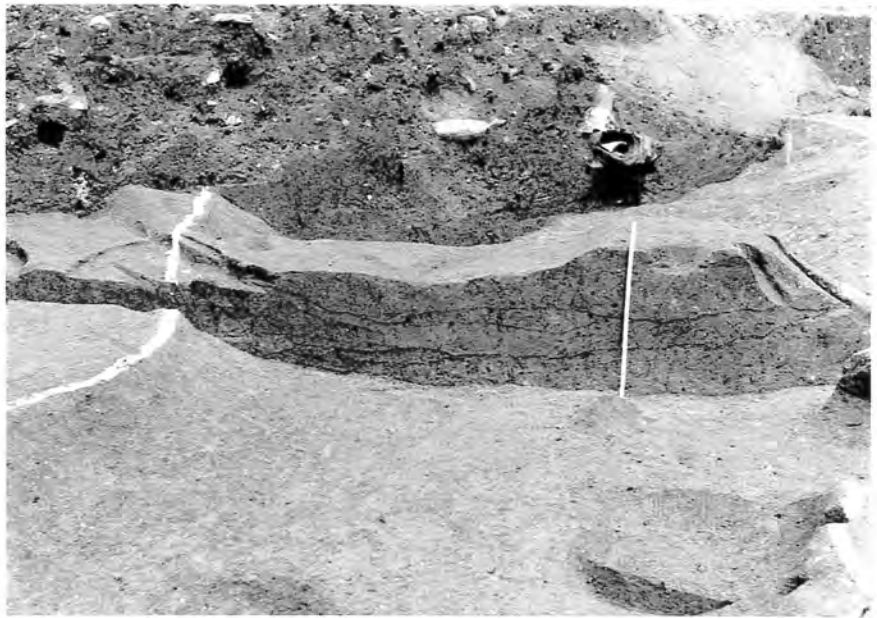
参考文献

- 大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ
- 兵庫県教育委員会1992、『下相野窯址』

調査区東壁と
SD201完掘状況
(西から)



SD201断面
(北東から)



豊臣～徳川期
大坂城の遺構
(西から)



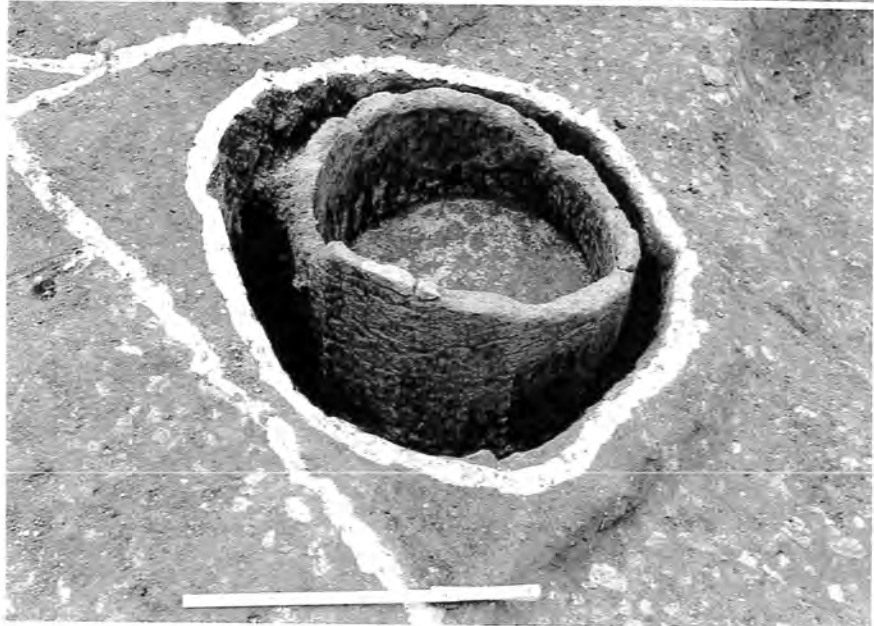
SD101・102・
132・133断面
(北から)



SK114
(南から)



SK110
(南西から)



大坂城跡発掘調査(OS06-6)報告書

調査個所 大阪市中央区玉造2丁目1-10
調査面積 約234m²
調査期間 平成18年10月23日～11月14日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、趙哲済、宮本佐知子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の東側の緩斜面に当り、周辺の調査地からは近世の遺構はもとより、縄文や弥生土器も出土している。また、南側の大阪市立玉造小学校の調査(NW88-14次ほか)では、奈良時代に埋められた谷が検出されている[大阪市文化財協会2002]。また東のNW84-55次調査地からは後期難波宮の建物に用いられた重圈文の焼け歪んだ瓦が出土し、難波宮の瓦窯が周辺地に存在した可能性が推測されていた(図1)。

平成18年8月11日と9月21日に大阪市教育委員会が敷地内で試掘調査を実施したところ、現地盤-1.5mで近世の遺構面があり、同-3.1mでも上町台地の地山が検出されないことから、南側の玉造小学校の谷の続きが検出されることが推測されるに至った。そこで本調査を実施することとなった。調査区は敷地の中央に設定し(図2)、平成18年10月23日から調査を開始した。表土層および現代の盛土層は重機で掘削し、それ以下は人力により掘下げ、遺構の検出と遺物の採集に努めた。11月14日には現地におけるすべての作業を終了した。本報告で用いる標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP+○mと記した。

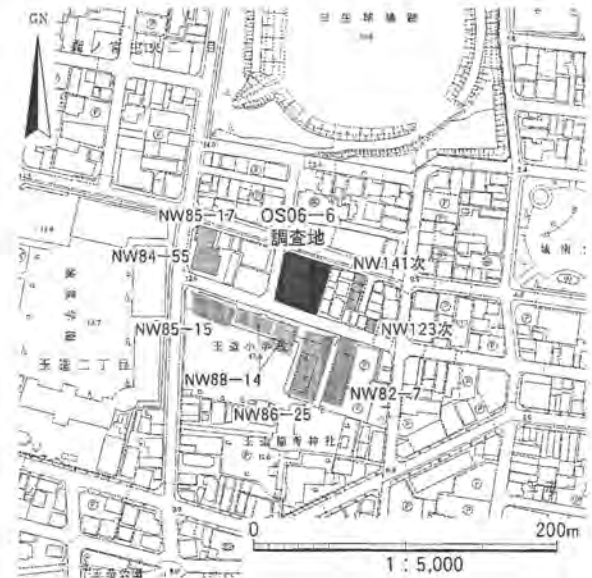


図1 調査地位置図

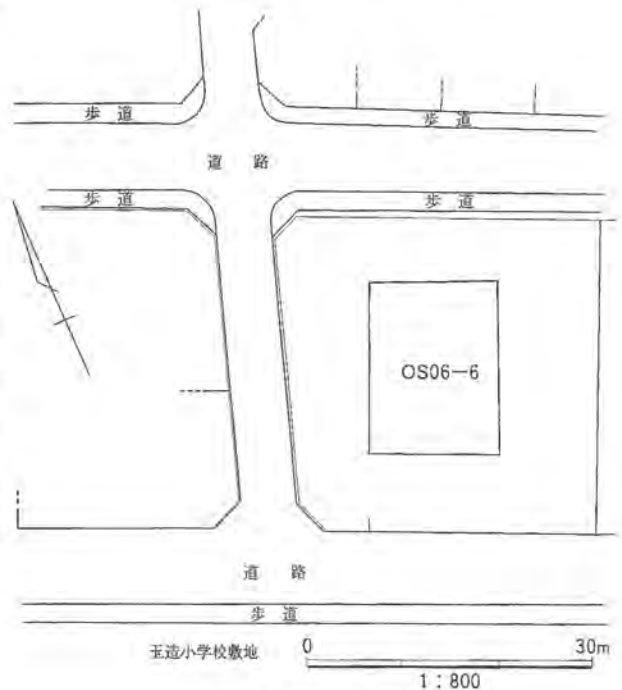


図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序

本調査地周辺の地形は西から東に傾斜している。この斜面は上町台地の地形を反映しているであろうが、本調査地では明確な谷の形状は明らかにならなかった。調査地には層厚110cm以下の現代盛土層の下位に、近世～弥生時代に至る地層が分布した(図3～6)。

第1a層：東壁北部でわずかに残存した層厚約10cmの黒褐色砂質シルト層であり、現代盛土直前ま

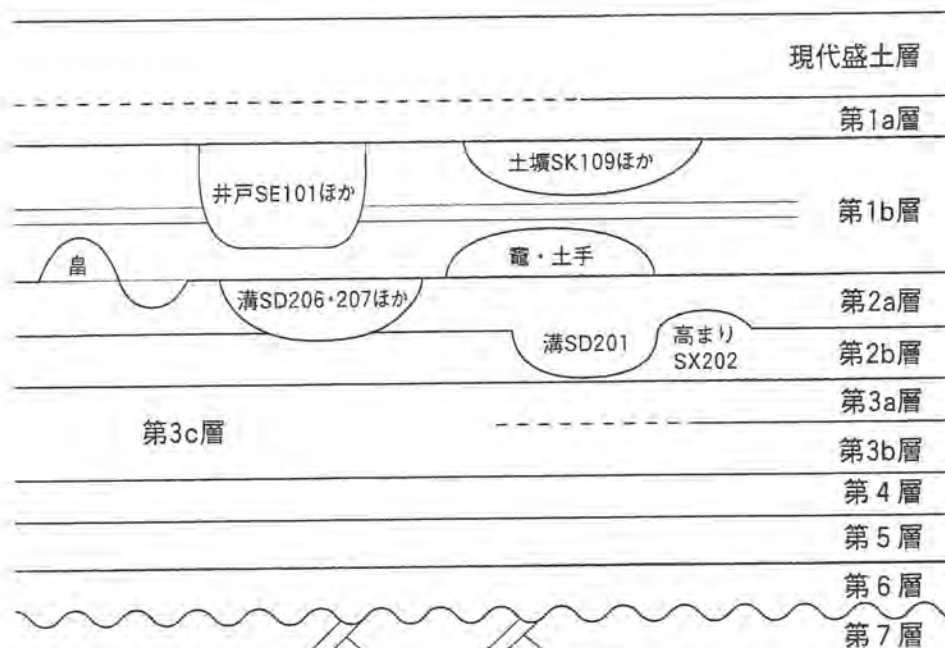


図3 地層と遺構の関係図

で耕されていた作土層である。上面の分布高度はTP+12.8mであった。

第1b層：黄褐色で一部シルト質の粗粒～細粒砂を主体とし、第7層堆積物の偽礫を多量に含む盛土層である。層厚は最大150cmで、中に黄褐色シルトの薄層(層厚10cm前後)を挟む。本層上面で井戸や土塙などの近世遺構を検出した。また、本層からは近世の瓦・陶磁器が出土した。

第2a層：黒褐色植物遺体薄層と灰色砂質シルト薄層・砂薄層が互層する水漬き堆積層であり、層厚は10～30cmであった。本層上面には竈や溝・土塙・礎石などが分布した。本層からは奈良時代の焼け歪んだ瓦が出土した。

第2b層：灰～暗灰色を基本の色調とするシルト質砂～砂質シルト層であり、層厚は最大100cmであった。調査区東部では下部から上部へ、シルト質中粒砂層・シルト質細粒砂層・粗粒～中粒砂質シルト層・細粒砂質粘土層・砂質シルト層がそれぞれ層厚10～30cmで重なっていた。本層上面でも溝や高まりが分布した。本層からは中国製青花や瓦が出土した。

第3a層：第3b層とともに調査区西北部の限られた範囲に分布する偽礫客土層であり、層厚は最大90cmであった。下半部は第3層堆積物からなる偽礫が主体で、上半部は第4層堆積物が主体であり、偽礫は中礫サイズが多かった。

第3b層：黒褐色砂質シルトからなる暗色帯で、第3a層に覆われた南北3m、東西1mの範囲にのみ分布した。層厚は北側で約10cm、南側で下底面が深くなって60cm余りとなった。溝か土塙の埋土の可能性はあるが、遺構の形状や堆積構造は判別できていない。

第3c層：淡黄褐色礫混り砂質シルトからなる盛土であり、層厚は約20cmであった。第3a層や第3層との直接の関係は分からないが、西壁から東へ3m付近から東に第2層と第4層とに挟まれて分布した。

第4層：灰黄褐色砂質シルト～シルト質砂からなる盛土層であり、西壁側で厚く、層厚は最大70cmであった。本層からは土師器が出土した。

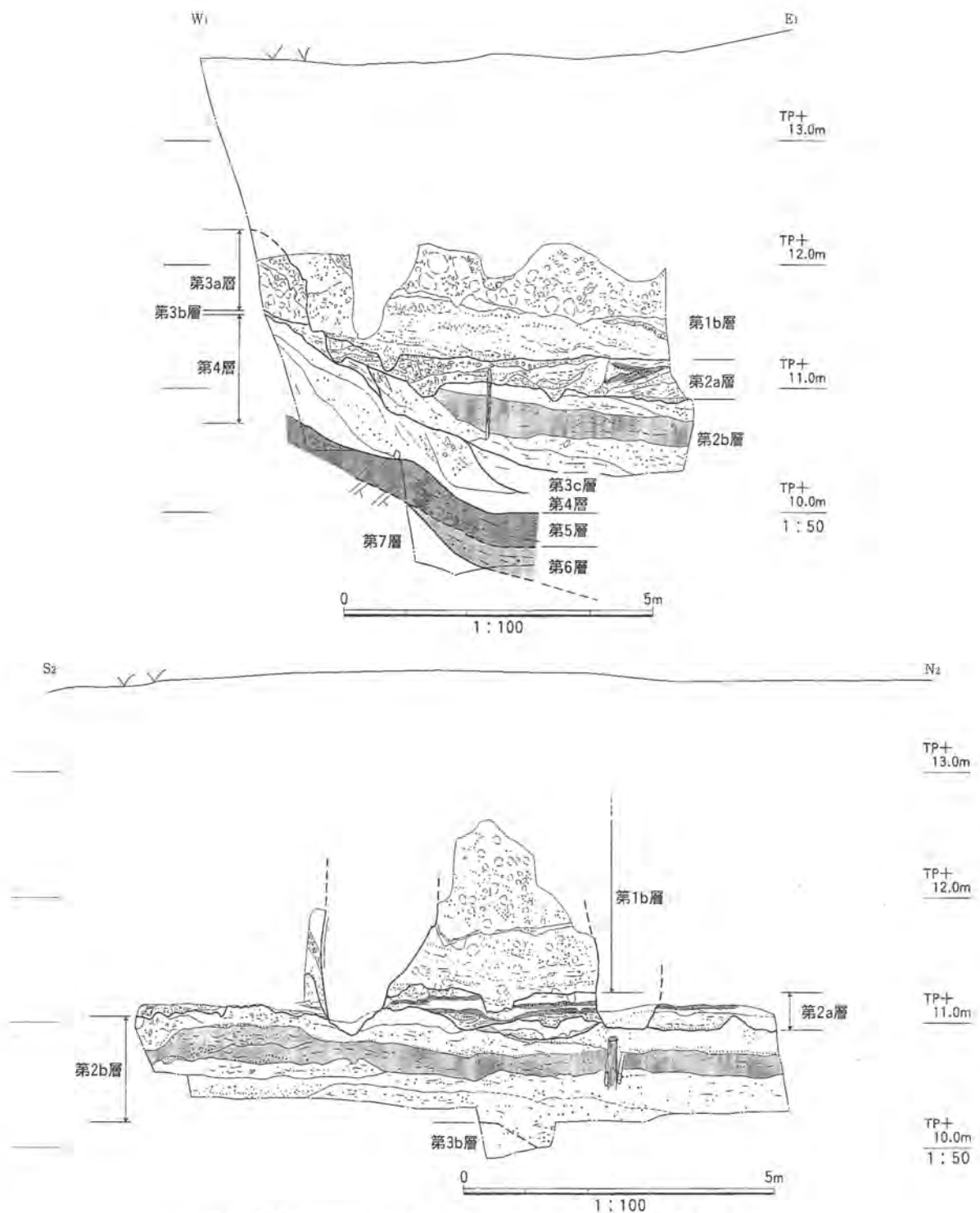


図4 東西トレンチ・南北トレンチ断面図(断面の位置は図7を参照)

第5層：にぶい赤褐色砂質シルトからなる盛土層であり、層厚は40cm前後であった。鉄・マンガンの沈殿により上位層より固く締まっている。本層から弥生土器の破片が出土した。

第6層：灰褐色砂質シルトからなる盛土層であり、基盤層の斜面を不整合で覆って東側に厚くなる。最大層厚は20cmであった。本層から弥生土器の破片が出土した。

第7層：灰黄色シルト質粘土層であり、当地の基盤である上町層である。上限の不整合面は北西から南東へ35～40度傾斜していた。

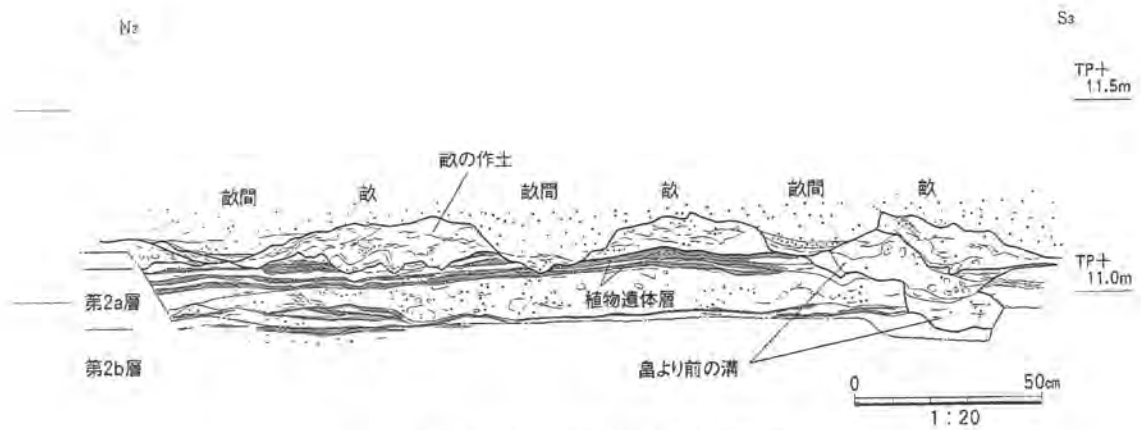


図5 島断面図(断面の位置は図8を参照)

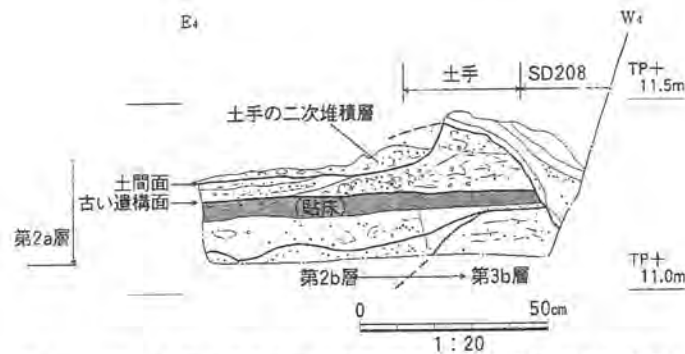


図6 土手と土間の関係を示す断面図(断面の位置は図8を参照)

ii) 遺構と遺物

平面的に調査を行ったのは近世後半の第1b層上面と、近世初頭の第2a層上面、および第2b層上面の3面である。

a. 近世初期の遺構とその出土遺物

a-1. 第2層上面の遺構(図7)

第2層の上面で、溝と高まりを検出した。

溝SD201 北東—南西方向に9mの長さがあり、南・北両端で西北に方向を転換する溝である。区画の溝である可能性が高い。溝幅は最大1.3mで、深さは0.1m前後である。この溝には幅0.3mに満たない細く浅い溝が取り付いている。

高まりSX202 溝SD201に並行する低い高まりである。幅は0.4m前後、高さは数cmで、約2mを検出した。機能は不明である。

a-2. 第2a層上面の遺構(図8・11)

この面で検出した遺構は、竈、およびこれと関連して配置する土手と溝、瓦と礫の集積、島である。

竈203 焚口が2つある竈で、西側の焚口の幅は約58cm、奥行き25cmで、残存高さは約30cmである。両側に自然石の側石を立てている。向って左側の石は内側に倒れていた。焚口の正面には漆塗りの椀が正置していた。また、焚口の左手前には平瓦が2点あった。そのうち完形のもは唐草文軒平瓦1である。この瓦の中心飾りは笹で、唐草を上下2段に配する特徴のある文様である。金箔を押した同

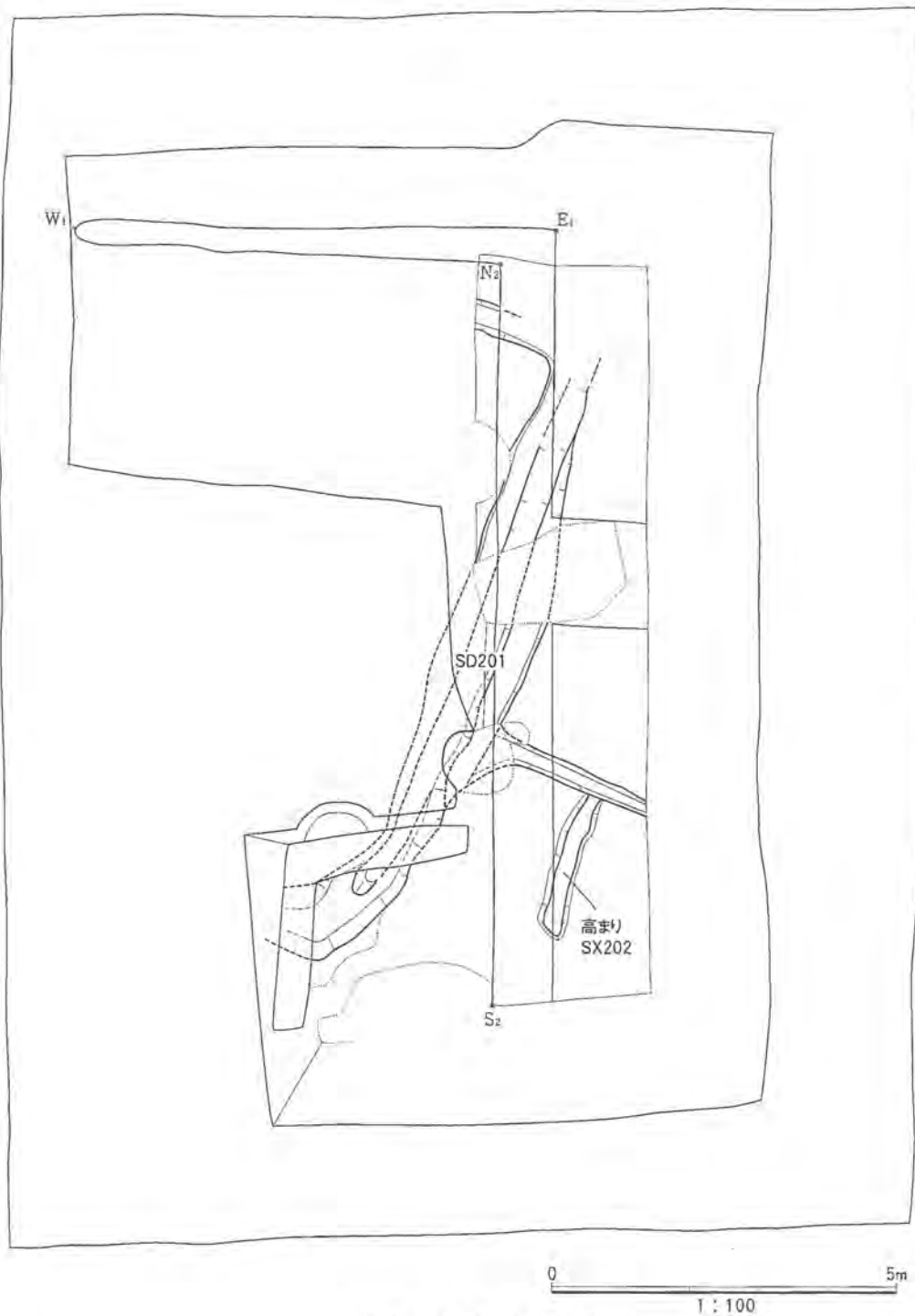


図7 第2b層上面遺構平面図

文の瓦が豊臣期三ノ丸内の武家屋敷跡で出土している[大阪市文化財協会1992]。

東側の焚口は、幅約45cm、奥行き約30cm、高さは約20cm残存していた。両竈とも内壁面はよく焼けており、ある程度の期間、使用されたものと考えられる。両竈の焚口の手前には、藁かと思われる繊維質の植物が平らに丸く曲げて置かれており、いわゆる鍋敷きに相当するものかと思われる。

瓦と礫の集積SX204 竈から約2m東側の後述する土手の中に、平瓦4点と小判状の角礫2点が幅0.6m、奥行き0.7mの範囲に無造作に積み重ねられていた。検出時は瓦も礫も土手の堆積物に覆われ

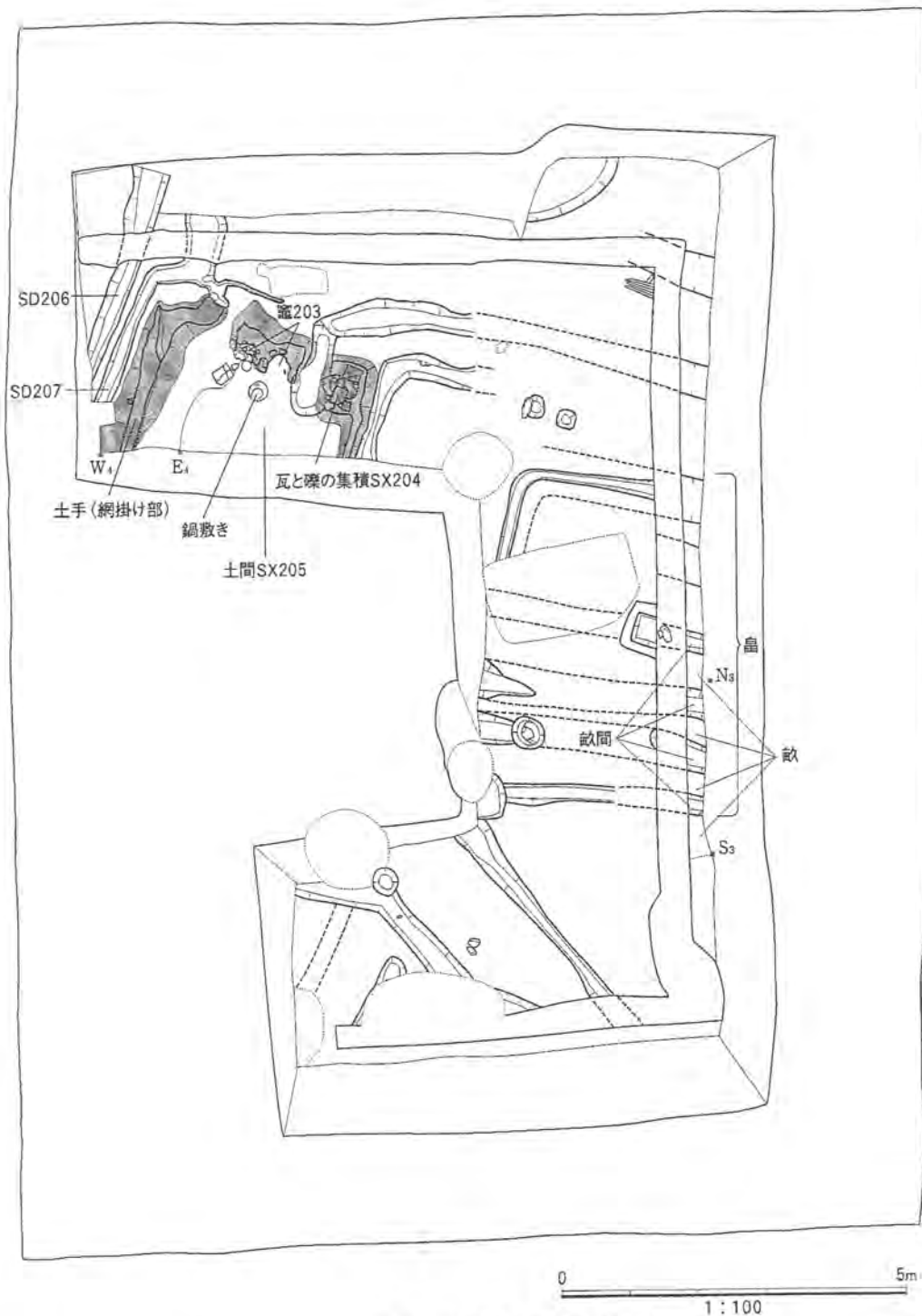


図8 第2a層上面遺構平面図

ていた。瓦には後期難波宮で使われたと思われる縄タタキメ・布目の残る平瓦2と近世の平瓦3がある。

土手と土間SX205 竈を囲むように、断続的に粗粒砂質シルトからなる土手が巡っている。西側の土手が最も幅広く約0.7m、北側の土手は幅約0.5m、東側の土手は幅0.3mで、いずれも0.2mに満たない高さであった。竈は北側の土手に掘込まれて作られており、瓦と礫の集積SX204は土手の北東コーナーに当る位置にあり、この部分の土手は周辺より幅広く約1.0mであった。土手に囲まれた中の第2b層上面はよく締まっており、土間とみられる。土間は第2a層の植物遺体を主体とする二次堆積層

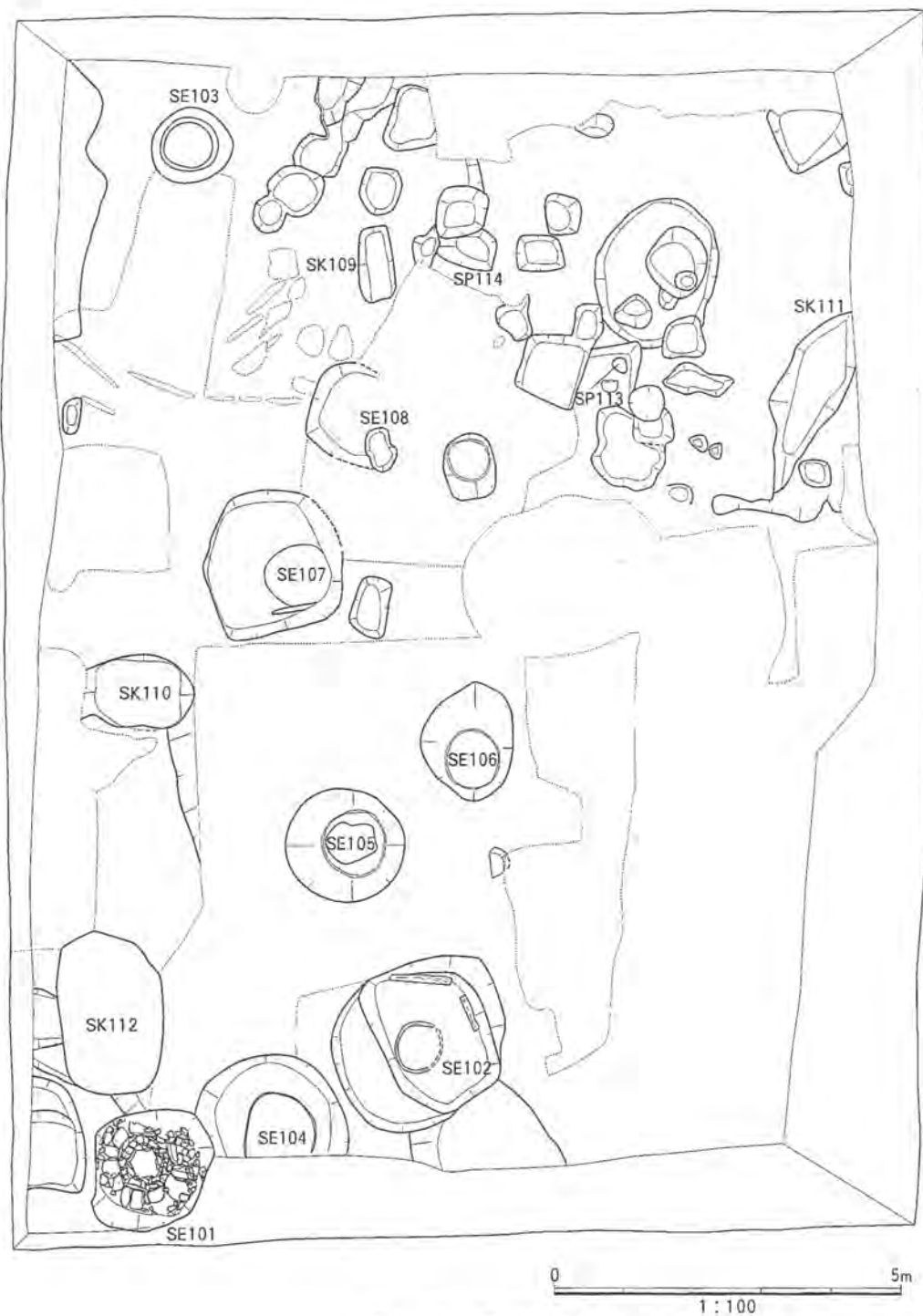


図9 第1b層上面遺構平面図

と、竈からかき出された炭が薄層をなして積み重なっていた。土間を何度か整地したのであろう。また、西の土手側には土間が崩れて堆積したと思われる粗粒砂質シルトの二次堆積層が覆っていた。竈203の西側および東側の瓦と礫の集積との間は、土手が途切れ、浅い溝が掘られて土手の外に続いていた。堆積物からの確証はないが、配置から見て排水施設の可能性がある。竈を囲む土手は東西約3.1m、南北2.2m以上の規模があり、建物の基礎であったと考えられる。瓦と礫の集積SX204は隅柱を支える根石に相当するのかもしれない。

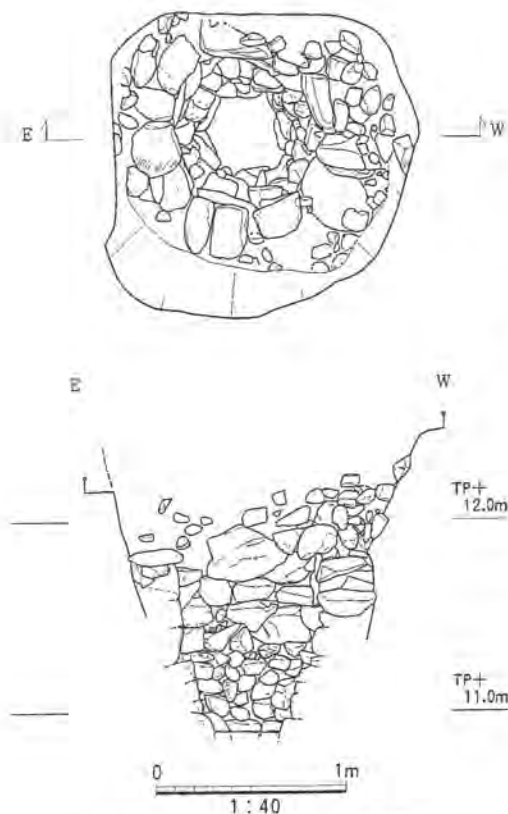


図10 SE101平面・立面図

溝SD206・207 西の土手の西側で、溝を2条検出した。古い西側の溝SD206は幅0.3m、深さ0.3mで、土手と同じ方向に直線的に延びている。溝SD206を埋めて東側横に並行して掘られた溝SD207もほぼ同様の規模で、土手の北西コーナー付近で屈曲して東へ延び、そこから北へと向きを変えている。これら2条の溝も、建物と関連があるものと思われる。

土手や溝の向きは、磁北から時計回りに40~45度振っている。前述の第2b層上面の遺構も同じである。江戸時代の地形が伝わっていると考えられる大阪実測図〔内務省1888〕によると、調査地の北側の東西道路は江戸期には通っておらず、調査地の南側の道が西350mにある越中井から東南東に延びていた道である。近世の建物構造からみて竈は敷地の奥にあったと推定されるので、おそらく、この竈のある建物がある屋敷は南側の道に開いた敷地であったと予想される。

畝 調査地の東部に南東-北西方向に掘下げられた4条の溝と、溝と溝の間に盛土された高まりを検出した。形状からこれらが畝の畝間と畝であろうと考えた。畝の幅は上端で0.6~0.8m、畝間の深さは0.1~0.2mであり、畝間の底には機能時堆積層と見られるシルト質細粒~中粒砂層が堆積していた。畝は北側にもう2条あったとみられ、その外側には西で南西に折れる溝がある。その溝の検出時の幅は0.2m内外であるが、本来は0.6m程の幅があったことが壁面に残された溝の断面から推測される。

その他、この面には、建物と同じ方向の屈曲する溝や、北北西-南南東方向の溝2条・礎石・土壌などが見つかっている。

b. 近世後期の遺構とその出土遺物(図9・10・12)

第1b層上面で土壌と井戸・ピットを検出した。出土した遺物からこれらの遺構は18~19世紀代の遺構である。井戸は8基検出した。井戸側は石組み(SE101)・井戸瓦(SE102・103)と桶(SE104~108)である。石組みの井戸は玉造小学校の調査(NW88-14次ほか)で検出例があるが、難波宮周辺より西側では使用例が認められない。

SE101(図10) 直径1.5~1.9mのほぼ円形の掘形で、石組みの井戸側の底の直径内寸は0.35m、深さは1.2mである。埋土は黒色砂である。石組みの上の方には一辺0.2~0.4mで、厚みが0.2~0.3mの花崗岩の自然石を横に積み、下の方は一辺0.1~0.15mの自然石を積んでいる。埋土の中からは18世紀代の陶磁器が出土した。

SK109 100cm×45cmの長方形の土壌で、6・7のような外底面に糸切り痕跡のある土師器皿が重なって多数出土した。これらはほとんど使用した痕跡が無く儀式用に使われて、すぐ破棄されたものの可

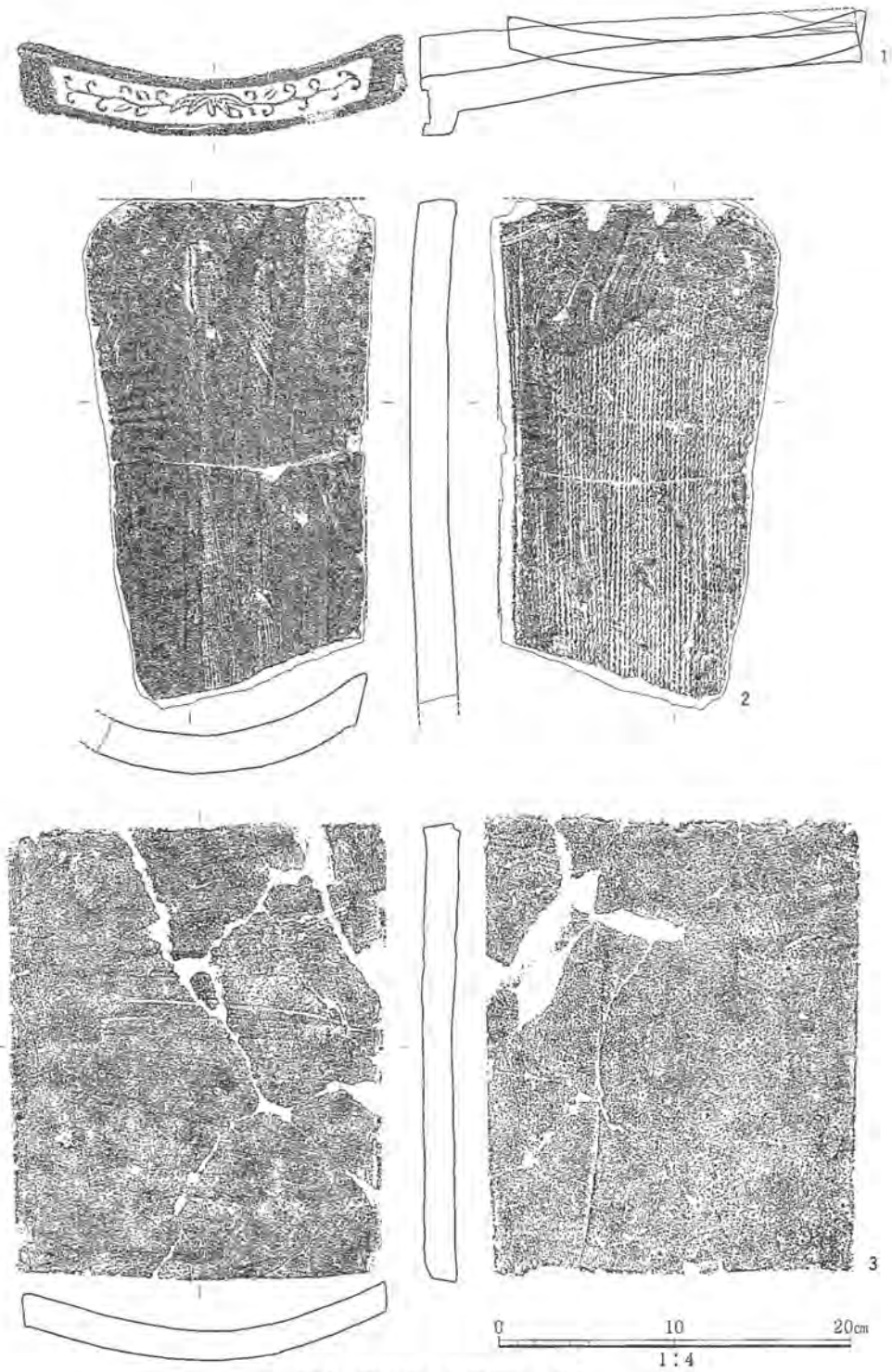


図11 第2a層上面遺構出土遺物
 竈203(1)・SX204(2・3)

能性がある。

SK110 160cm×100cmの土壇で、軍配形の硯9が出土している。中央の小判形の中に海と陸を削りだし、周囲の三方には細かい菱形状に地模様を彫り、その上に松と梅と思われる枝を彫っている。向って右下の部分は地模様もなく、小さい雲のような線刻が雑に彫られている。大阪府貝塚市の貝塚寺内町遺跡でも同様の硯の報告がある[貝塚市教育委員会1996]。ほかに肥前染付磁器の筒形碗10や瀬戸

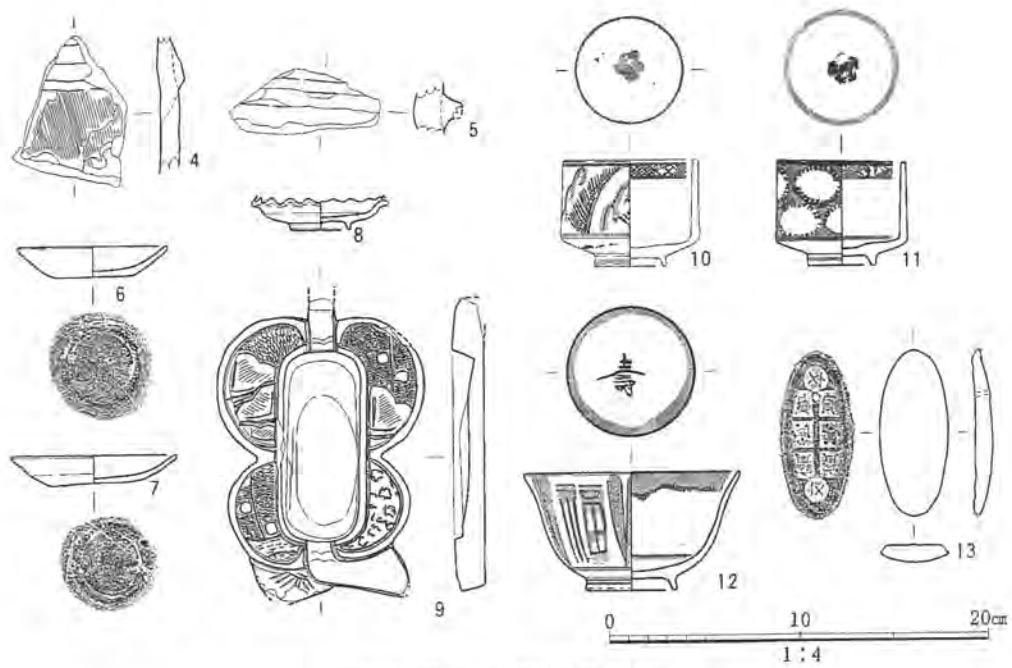


图12 第1層上面遺構出土遺物

SK109(6·7)、SK110(8~10)、SK111(4)、SK112(5)、SP113(11·12)、SP114(13)

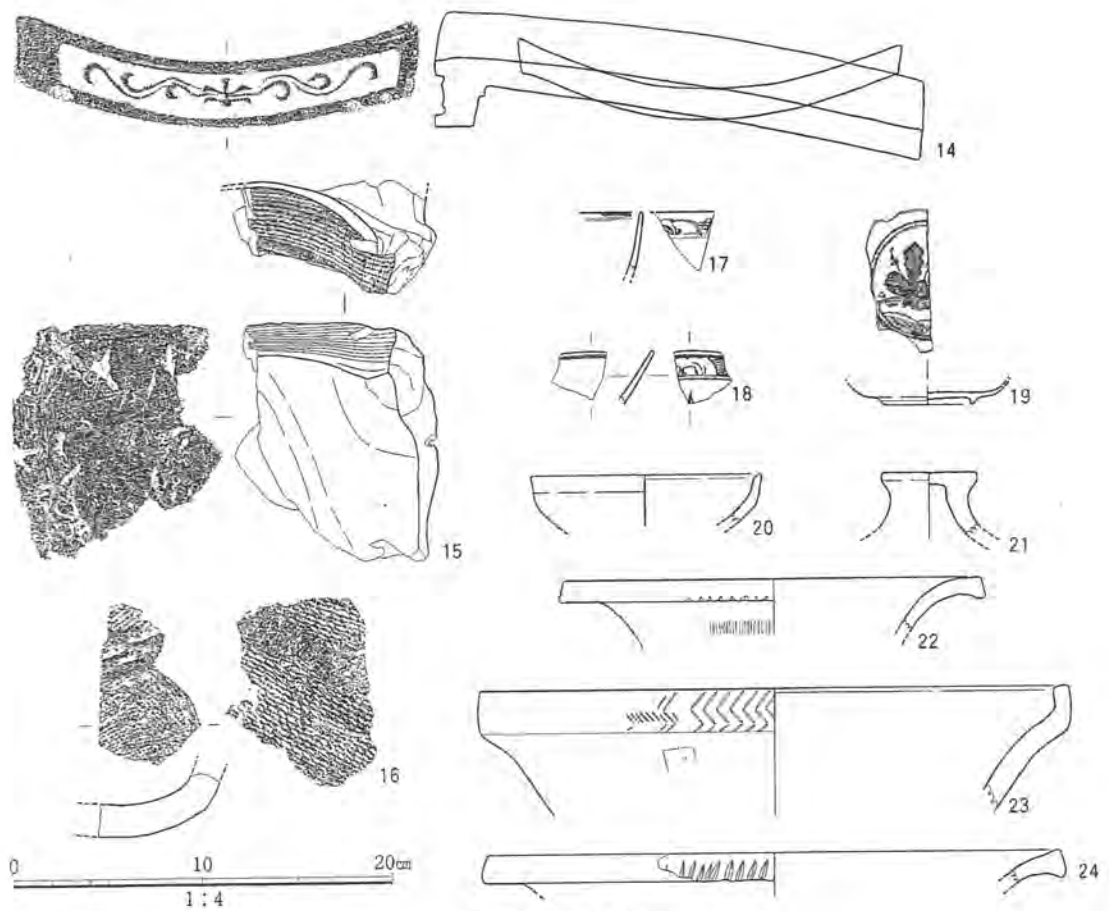


图13 各層出土遺物

第1b層(14)、第2b層(17~19)、第2a層(15·16)、第3a層(22·23)、第4層(20)、第6層(21·24)

美濃陶器ひだ皿8が相伴している。この土壙が埋まった時期は19世紀である。

ほかにSK111から埴輪4、SK112からも埴輪5が出土した。SP113からは肥前染付磁器筒形碗11・端反り碗12が、SP114からは丁銀型の土製ミニチュア13などが出土している。

c. 各層出土の遺物(図13)

第1b層から近世初頭頃の軒平瓦14、第2b層からは17～19の青花、第2a層から15・16の奈良時代の焼け歪んだ平瓦が出土した。第3a層からは弥生時代中期の壺22・23、第4層から土師器杯20、第6層から弥生時代の甕の蓋21と壺24が出土した。

3)まとめ

今回の調査地では近世の生活面の下に基盤層の北西斜面が見つかったが、この斜面は玉造小学校の調査で検出した谷の延長部であると推測できる。谷を埋めた地層の中から弥生土器や後期難波宮所用と考えられる瓦が焼け歪んだ状態で出土したことも周辺の調査結果と同じである。周辺に弥生時代の集落や、後期難波宮の瓦を焼いた瓦窯があった可能性をさらに補強するものであった。

近世、豊臣期には玉造一帯に多くの武家屋敷があったことが文献から明らかになっている[櫻井成廣1970]。本調査では台所があり、付近で畠が作られていたことが明らかになった。武家地であるか町家であるかは周辺の調査の成果を待つばかりである。

近世後半の石組み井戸は、調査地より西側付近での出土例がなく、石組み井戸の分布の範囲を考える上で新たな資料となってきた。また、軍配形の硯は特異な形から産地の特徴を示していると考えられる。大阪市内での出土例がなかったので、近世の硯の流通を考える上で新たな発見であった。

以上のように本調査では弥生時代から江戸時代の遺構や遺物を検出したが、これらは玉造周辺の歴史を明らかにする際の基礎的な資料といえる。今後、周辺部でのさらなる調査成果の蓄積を待って検討を加えたい。

参考文献

大阪市文化財協会1992、『難波宮址の研究』第九、図版137-3626・3627

2002、『大坂城跡』VI、pp.205-218

貝塚市教育委員会1996、『貝塚寺内町遺跡』：『貝塚市貝塚寺内町遺跡』第39集、p.81

櫻井成廣1970、『豊臣秀吉の居城』大坂城編 日本城郭資料館出版会、pp.311-316

内務省1888、『大阪実測図』

近世(第1b層上面)の
遺構検出状況
(北から)
背景は玉造小学校



豊臣期(第2a層上面)の
遺構検出状況
(調査地東部、南から)



地層断面
(調査地北西部、南から)
上半部の白っぽい砂質
の盛土は第1b層
下半部は第2a層以下の
地層



大坂城跡発掘調査(OS06-8)報告書

- ・調査箇所 大阪市中央区大阪城1
- ・調査面積 約50m²
- ・調査期間 平成19年2月5日～3月19日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、藤田幸夫

〈調査に至る経緯と経過〉

今回の調査は、天守台北側の北の手櫓に続く多聞塀の雁木修復に伴い実施した(図1・2)。

大坂城は豊臣秀吉が天正11(1583)年に大坂本願寺跡を利用して築城に取り掛かった。その第一期は本丸部分で、その後四期にわたる築城工事によって、慶長4(1599)年頃に、本丸・二ノ丸・三ノ丸・惣構を持つ城が完成した(豊臣氏大坂城)。豊臣氏大坂城は慶長19(1614)年の大坂冬ノ陣、慶長20(元和元)(1615)年の大坂夏ノ陣によって落城・焼亡し、豊臣氏は滅亡した。元和元年に大坂城主となった松平忠明は焼跡整理と市街地の復興に努めた。元和6(1620)年に二代将軍徳川秀忠は大坂城の再建工事(第一期)を開始し、寛永元(1624)年には第二期として本丸・山里曲輪の工事を行い、寛永5(1628)年の第三期工事を経て、寛永6(1625)年頃に大坂城再築が完了した(徳川氏大坂城)。その後幾多の変遷を経て、明治元(1868)年に幕府軍の立て籠る大坂城に長州藩兵が来襲、幕府軍は敗走し大坂城はほぼ全域を焼失した。

大坂城内の石垣修復に伴う発掘調査は、2005年度には山里出櫓形で実施した[大阪市文化財協会2006]。その結果、雁木および石垣の裏込の状況を確認するとともに、徳川氏大坂城期の旧地表面を確認し、会所・暗渠を検出した。本丸内では配水池の南側の調査(OS84-17次)で、豊臣氏大坂城の詰ノ丸の石垣が検出されている[大阪市文化財協会2002]。

調査は、まず南調査区の雁木石を取り外すことから開始した。人力による掘削で埋没していた雁木石を確認後に最下段を残して再度雁木石を取り外して、南調査区の掘下げを行った。また、後述するように雁木の築造時期を確認するために雁木上段の多聞塀部分に北調査区を設定して補足調査を行った。

3月10日には現地公開を行い、2000名以上の市民の参加を得た。3月19日には、記録作業・保護砂による埋戻し作業および撤収作業を完了した。

なお、本報告で使用した示北記号は一部を除き磁北で、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)を使用し、本文・挿図ではTP+〇mと記す。

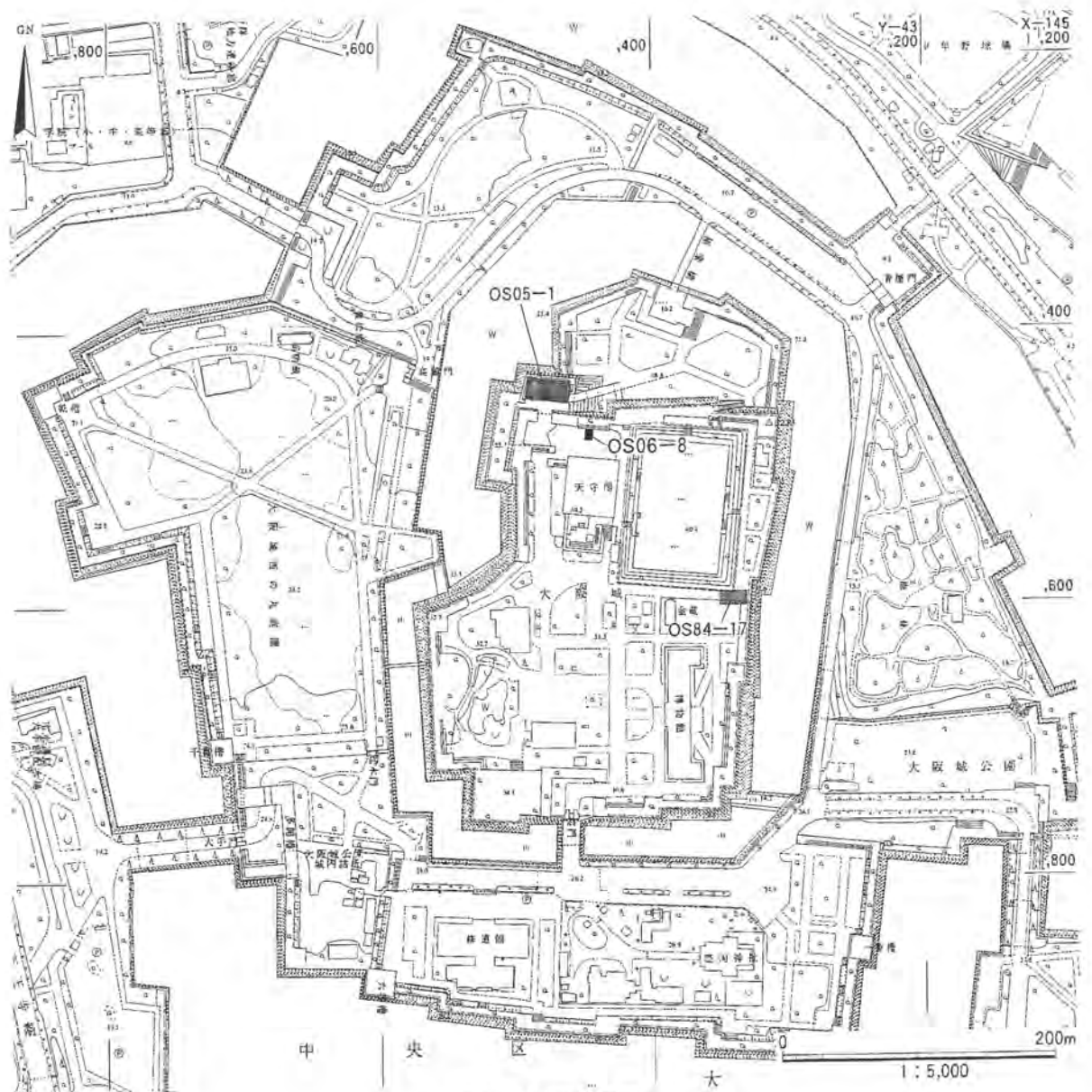


図1 調査地位位置図

〈調査の結果〉

1. 層序

a. 南調査区(図3・4)

第0層：明治以降の盛土層で、コンクリート・レンガを含む。石列1はこの層中から検出した。

第1層：褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト層で、層厚は35cm前後の盛土層である。上面は徳川氏大坂城本丸造営後の生活面である。

第2層：黄褐色(10YR5/8)シルト層で、層厚は30cm前後の盛土層である。上面からSK06と礎石2を検出した。層中には豊臣氏大坂城期の瓦が含まれている。

第3層：明黄褐色(2.5Y6/6)細粒砂質シルト層で、層厚は30~70cmの盛土層で北に厚く盛土している。上面からSK01~04を検出した。層中には金箔押し瓦などの多くの豊臣氏大坂城期の瓦が含ま

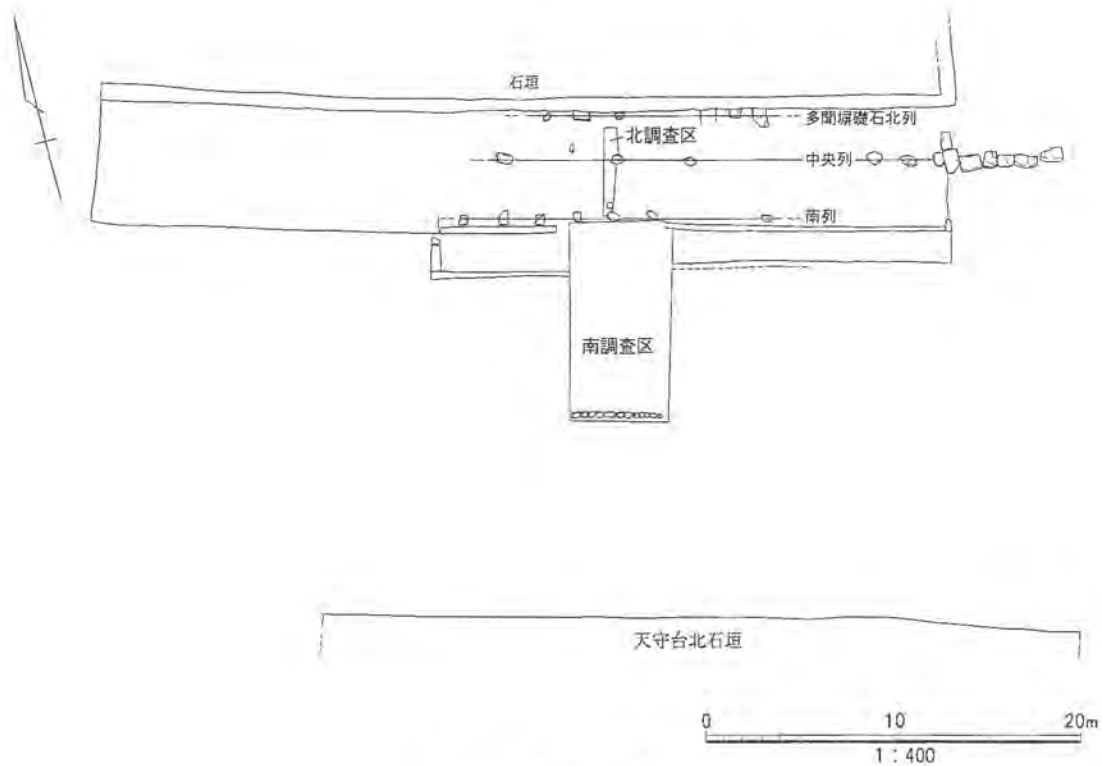


図2 調査区配置図

れている。

以上の第1～3層の上面はほぼ水平であり、層は固く締まっている。

第4層：オリブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂シルト層で焼土や焼壁の細片を顕著に含む盛土層である。層厚は35cm前後で、上面は北側が低くなっている。上層に比べてあまり固く締まっておらず、遺物も瓦を少量含む程度である。第4層に含まれる焼土は、大坂夏ノ陣の際のものであろう。上面で礎石1を検出した。

以上の第1～4層は寛永元(1624)年の徳川氏大坂城本丸構築に伴う盛土層である。

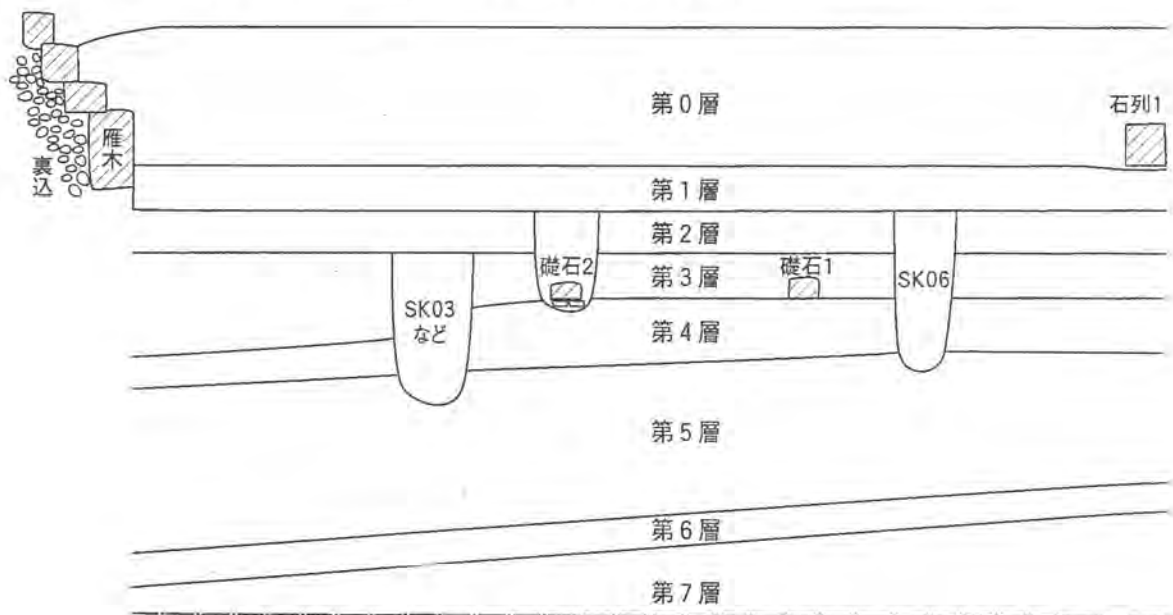


図3 地層と遺構の関係図

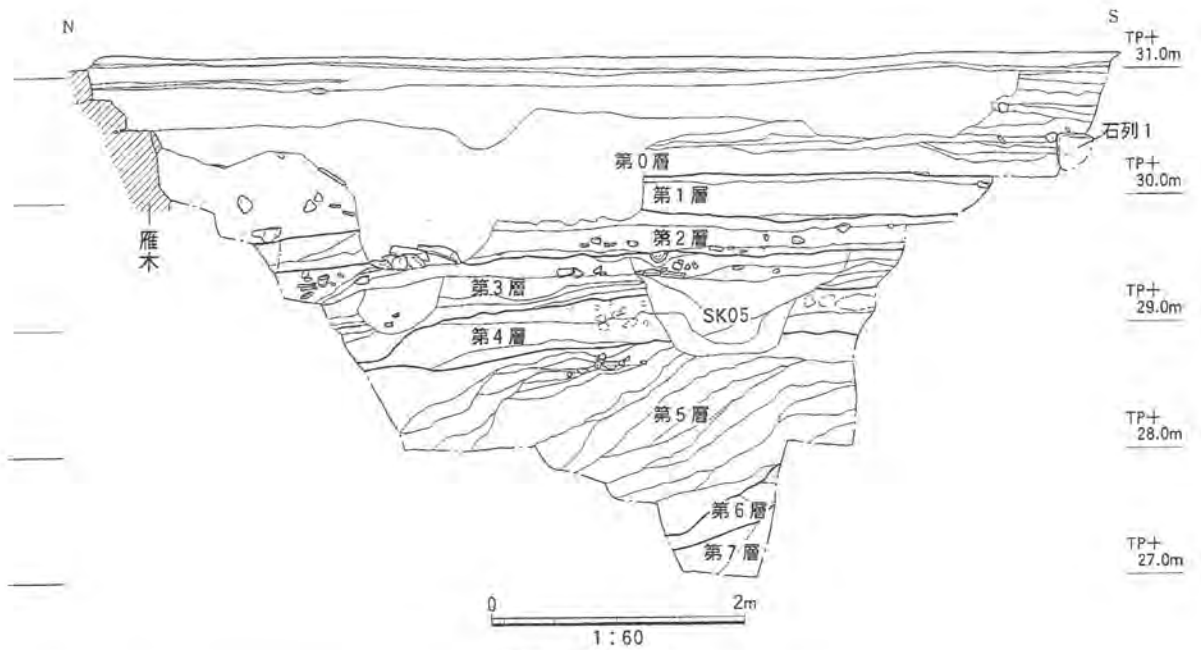


図4 東壁断面図

第5層：黄褐色(2.5Y4/3)シルト層で、黄橙色(10YR7/8)シルトの地山偽礫を多く含む層である。層厚は100~150cmの盛土層である。この層は、南から北へ傾斜して盛土されている。層内には瓦片が少量含まれる。

第6層：深掘り部分で一部確認した層で、暗褐色(10YR3/4)細粒砂質シルト層で焼土・焼壁を含む盛土層である。南西部では層厚25cmであるが、北および東方向へ行くに従い薄くなる。土師器の細片を含む。

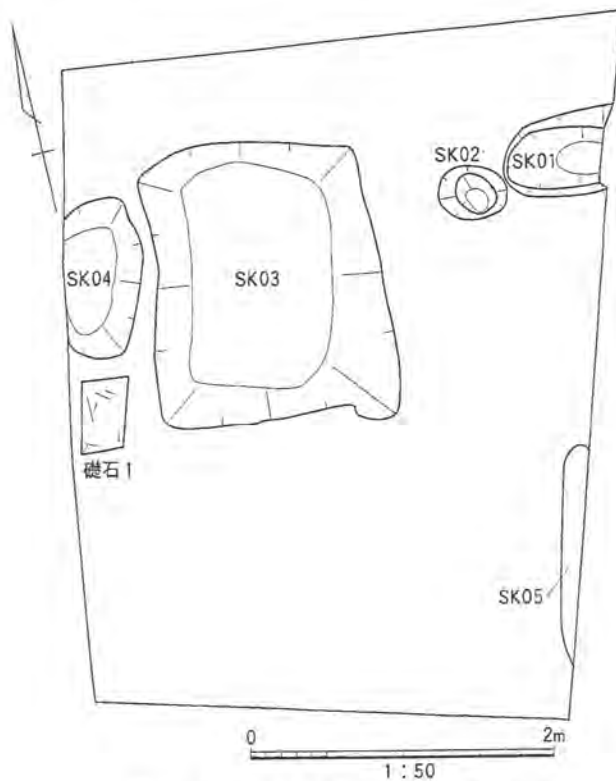


図5 第4層・第3層上面の遺構平面図

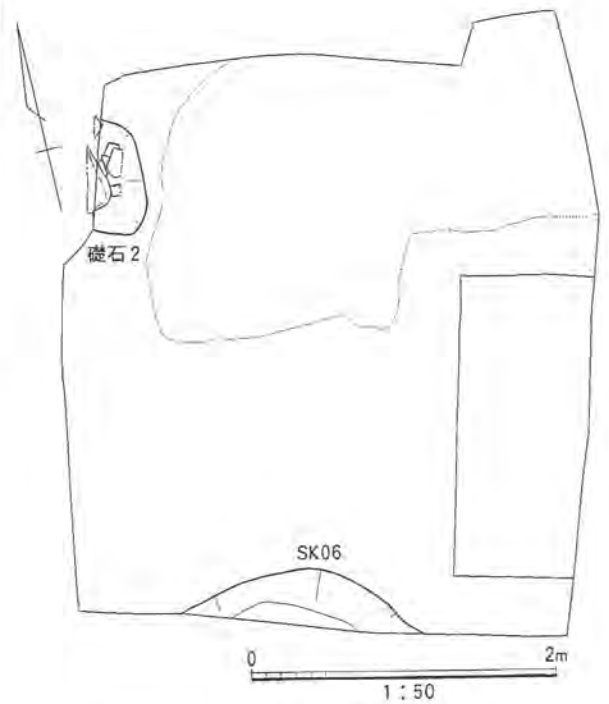


図6 第2層上面の遺構平面図

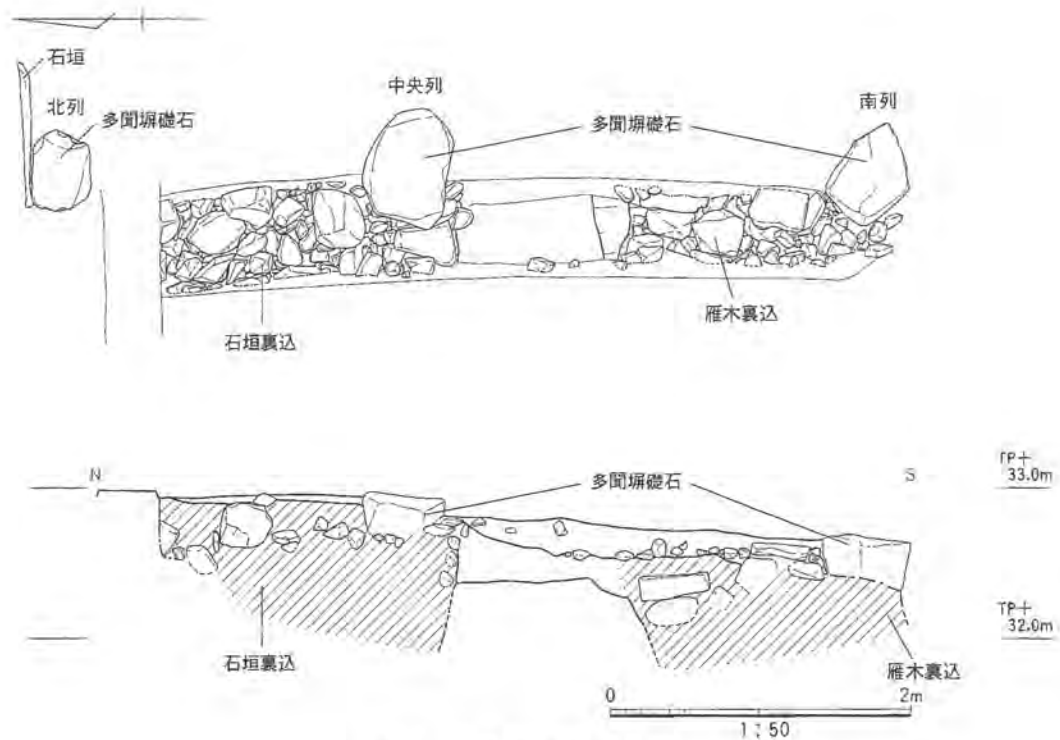


図7 北調査区平面・断面図

第7層：黄橙色(10YR5/6)細粒砂質シルト層で、層厚は不明である。この層も第5層と同様、南から北への傾斜をもって盛土されていると思われる。

以上の第5～7層は天正11(1583)年に開始される豊臣氏大坂城本丸構築に伴う盛土であろう。

b. 北調査区(図7)

第1層：赤褐色(5YR4/6)細粒砂層で焼瓦や焼壁を含む。南側では層厚25cmで、多間堀礎石を埋めている。明治元(1868)年の徳川氏大坂城焼失後の整地に伴うものである。

第2層：黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルト層で石垣、多間堀等を構築する際の盛土である。

2. 遺構と遺物

a. 江戸時代前期の遺構と遺物(図5～12)

第4層上面の遺構(図5)

礎石1 北西部で礎石を1基検出した。礎石は花崗岩で、30cm×50cmの平面長方形を呈し上面は平坦である。1基しか見つかっておらず、上部構造については不明である。

第3層上面の遺構と遺物(図5・13)

SK01 東西0.6m以上、南北0.5mの楕円形を呈する土壇で、深さは約0.3mを測る。埋土は黄褐色(10YR5/8)細粒砂質シルトで、瓦が多く出土した。

SK02 東西0.4m、南北0.3mの楕円形を呈する土壇で、深さは約1.0mを測る。埋土は黄褐色(10YR5/8)細粒砂質シルトで、瓦が少量出土した。

SK03 東西1.5m、南北1.8mの方形の土壇で、深さは約0.8mを測る。埋土は黄褐色(10YR5/8)細粒砂質シルトで、巴文軒丸瓦・桐文軒丸瓦などの豊臣氏大坂城に使われた瓦が多量出土した。

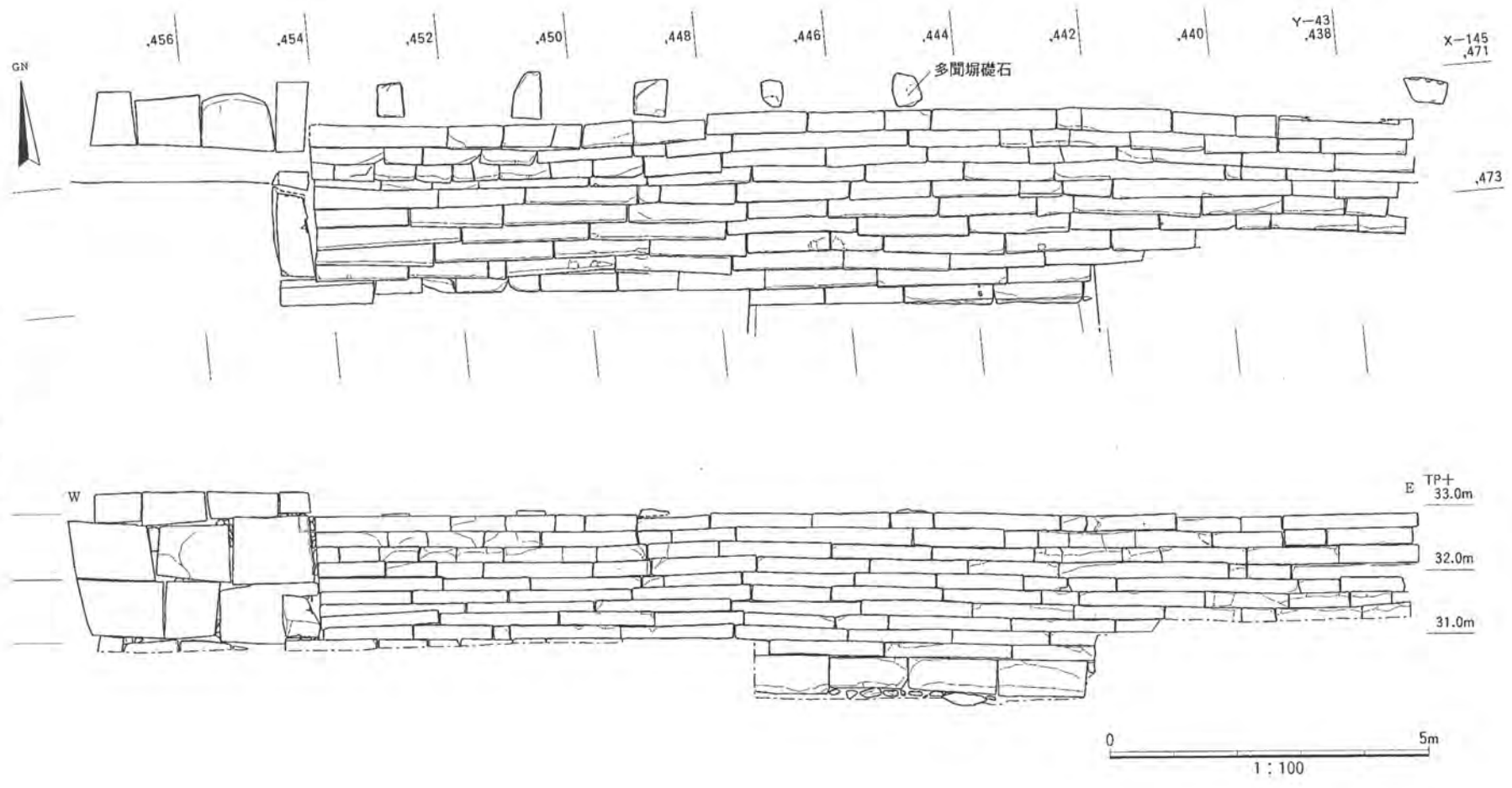


图 8 雁木平面・立面图

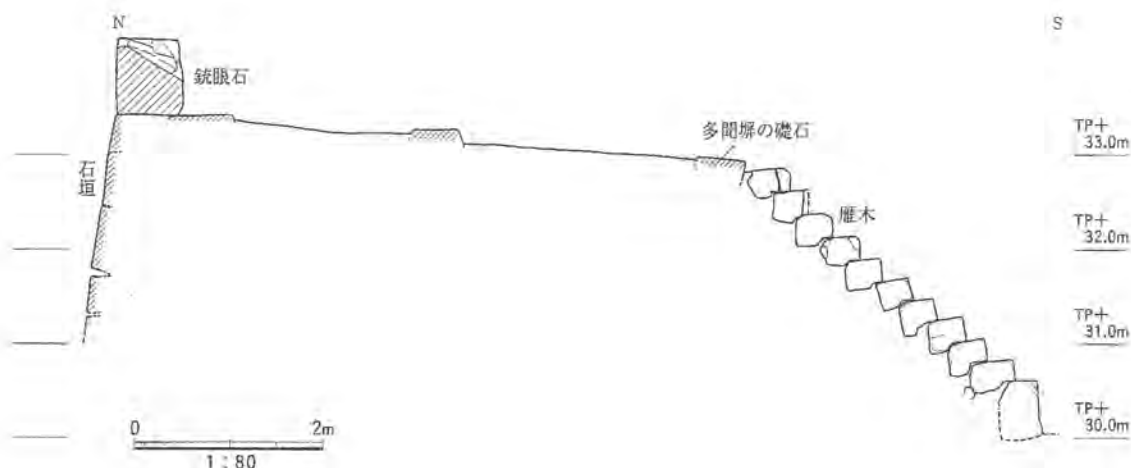


図9 多間塀礎石・雁木東側面図

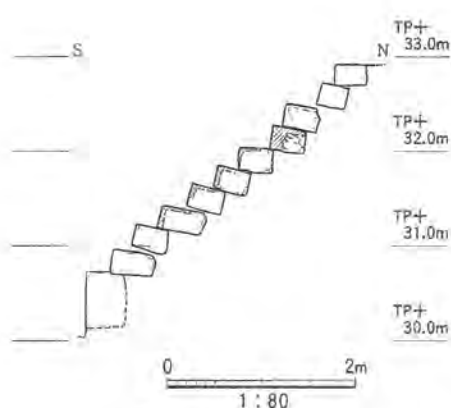


図10 雁木西側面図

1は五三の桐文軒丸瓦で瓦当の復元直径は19.6cmである。
 2・3は巴文軒丸瓦で、ともに丸瓦部内面はコビキAである。
 2は瓦当直径18.4cmで、珠文は30で、3は瓦当直径17.9cm、珠文は16で、全長34.7cmを測り、焼成前に穿たれた釘穴が1箇所ある。4～6は唐草文軒平瓦で、中心飾りは4が三葉で、5は菊花を横からみた形で、6が宝珠で姫路城出土瓦と同範である。7は平瓦で内外面ともにナデ調整をし、最大厚は2.6cmである。

SK04 東西0.5m以上、南北1.0mの楕円形を呈する土壌で、深さは約1.0mを測る。埋土は黄褐色(10YR5/8)細粒砂質シルトで、瓦が少量出土した。

SK05 東壁断面で確認したもので、埋土は黄褐色(10YR5/6)細粒砂質シルトで、南北1.4m前後の土壌であろう。

第2層上面の遺構と遺物(図6・13)

SK06 直径1.6m前後の円形と思われる土壌で、深さは約0.9mである。内部からは瓦が多量出土した。

8は唐草文軒平瓦で、中心飾りは萼のある五葉に点珠を配するもので、やや大振りな瓦である。

礎石2 上部が第0層によって、攪乱されているため正確な遺構の構築面は不明であるが、上述のSK04との重複関係から第2層上面から構築されたものと考えられる。穴の底部付近には礎板と思われる石が据えられており、石の下面には瓦が敷かれていた。

第1層上面遺構(図7～12)

第1層上面が徳川氏大坂城本丸構築時の生活面であるので、ここでは多間塀・雁木などについて述べる。なお、雁木裏込は外していないため、雁木内部の地層堆積状況については確認していない。

多間塀(図2・7～9) 雁木上面の平坦地には、礎石と思われる石が散在しているのが認められた(図2)。これらの石は北ノ手櫓に続く多間塀の礎石である。原位置を保っていないと思われる礎石もあるが、現状で3列の礎石列を確認した。南列の礎石は40～70cm大で、方形に近い形状のものが多

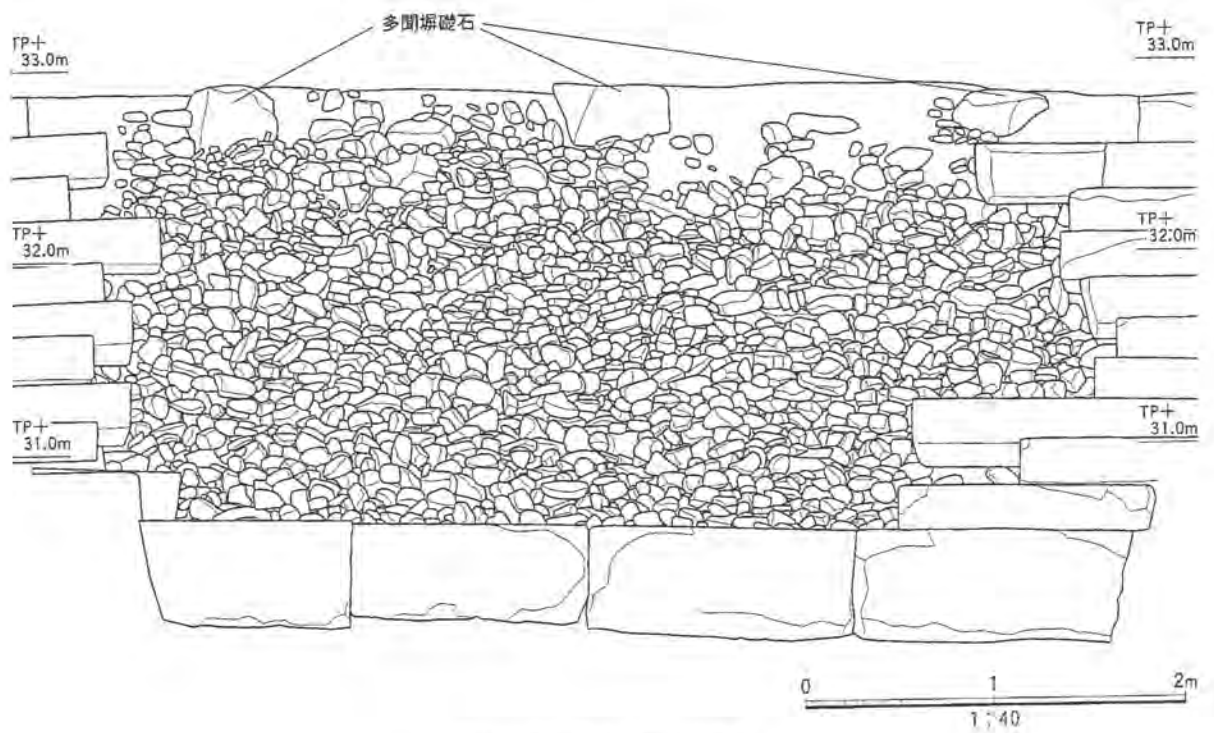
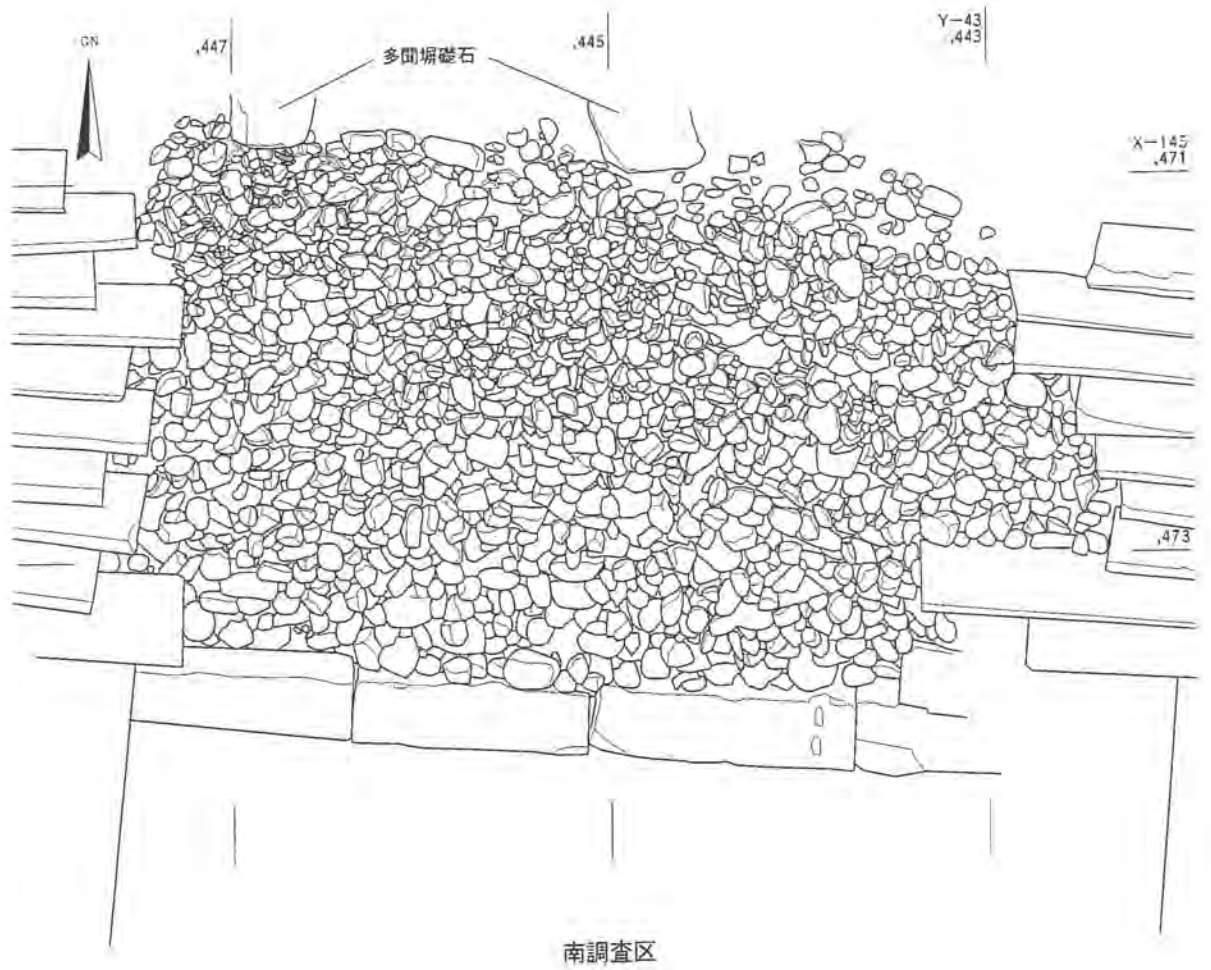


图11 雁木裏込平面・立面图

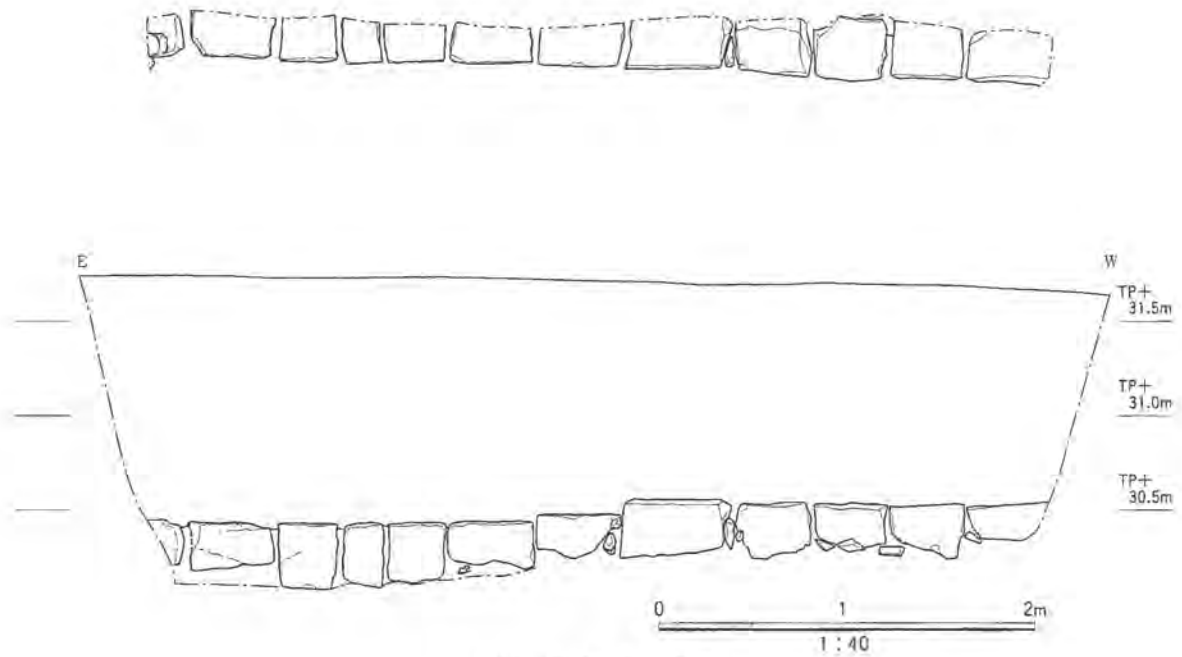


図12 石列平面・立面図

い。中央列の礎石は現状で確認できるものは少なく、また北列の礎石については後世に造られた柵が設けてあるために、ともに礎石の形状・規模等は確認できるものは少ない。南列の礎石は雁木最上段の石に近接する位置にあり、一方、北列の礎石は山里曲輪との境界にある石垣の銃眼石に接しており、一部は礎石の上に銃眼石が据えられている(図9)。各礎石間の距離は東西約2.1m、南北約2.4m前後と推定される。

北調査区での知見で、中央列の礎石は石垣の裏込石の上に、南列の礎石は雁木の裏込石の上に据えられていることが判明した(図7)。

以上のことから、石垣・多聞塀・雁木は同時に施工されたことが判明した。また、現状では南列礎石は北列礎石より約40cm低くなっているが、これは雁木が下方にずれていることに起因するものと思われる。

雁木(図8～10) 調査開始時には、東側で8段、西側では10段目までを確認できたが、調査によって11段目が最下段であることを確認した。雁木の1段目から10段目まではそれぞれ高さは24cmであるが、最下段の雁木は高さ63～50cmと、上段の雁木の約2倍の高さを有し、上端から約40cm以下は表面の加工が粗くなっている。この加工が粗くなっている部分は地表下になっていたと思われる。また、一部の雁木の下には石が詰められているが、これは高さを調節するためのものと思われ、胴木などは見られない。

雁木の踏幅については上面の加工から26cmであることがわかる。この踏幅は最下段の雁木も同様である。したがって、この雁木全体は高さ2.80m、奥行き2.86mで、その傾斜角度は約45度と急なものである。

今回、雁木を取り外して側面を観察したところ、調査区の東・西で雁木石の加工が異なることが判明した(図9・10)。東側の雁木石はずり落ちを防ぐために下面の前半分を削り込んでいた。一方、西

側の雁木石にはそのような加工はなく断面は長方形である。裏込石や雁木の噛合せから補修や造替えの可能性は考え難く、この違いは、石材を切り出した集団の違い等に起因するものとも想定できるが、調査例が少ないため確実でない。なお、昨年度に調査を行った山里出櫛形の雁木には、特別な加工は見られなかった。

雁木の裏込石(図7・11) 裏込は10~20cm大の扁平な石を主として用いているが、多聞塀南列礎石の北側には30~40cm大のものが見られる。このことから、背面には大きめの石を用い、雁木と接する部分にはやや小さい石を用いているものと思われる。

石垣の裏込石(図7) 今回は極く一部を確認しただけであるが、10~40cm大の石を使用している。その範囲は上面では銃眼石の南面から南へ約3mの範囲であり、多聞塀中央列礎石にほぼ重なる。

b. 明治以降の遺構(図12)

明治以降の盛土層を第0層と一括したが、その層中から石列1を検出した。石列1は調査区南端で検出したもので東西方向であり、南に面し、天守台や雁木に平行する位置になる。第1層直上にレンガを含む中粒砂層があり、その上に構築されている。恐らく明治以降に軍によって構築されたものであろうが詳細は不明である。

c. 各層出土瓦(図13)

各層からは多くの瓦が出土したが、今回は軒瓦を主として報告する。

第3層出土瓦(図13)

9は五三の桐文軒丸瓦で、瓦当復元直径は19.5cmである。10は金箔押しの巴文軒丸瓦で瓦当直径18.0cm前後でやや歪んでいる。火を受けているため、金箔の残存状況は良くない。11・12は金箔押しの唐草文軒平瓦である。13~15は鯨瓦である。13は尾鰭の端部で、14は右側面の胸鰭部付近で、15は左側面の胸鰭基部と差込み部分である。16は鬼瓦で、最大厚は3.1cmである。文様は判然としないが、釘穴が1箇所確認できる。

以上の瓦は、豊臣氏大坂城に使用されたものである。

第2層出土瓦(図13)

17は桐文鬼瓦で、最大厚は2.8cmである。

〈まとめ〉

今回の調査によって、現在見られる山里曲輪との境界の石垣、多聞塀、雁木が同時に造られたことが明らかになった。また、石垣に造替えの痕跡が見られないことや、造替えの記録がないことから、多聞塀・雁木は築造当初の状況を保っており、したがって、第1層の上面が寛永年間の本丸築城時の生活面であることが判明した。このことは、徳川氏大坂城築城時の状況を知る上での大きな知見と言えよう。

また、この地における徳川氏大坂城築城の際の盛土の厚さとその過程の一端が明らかになった。その過程は、大坂夏の陣の陣後、一旦焼土を含む層で整地し、その後水平に盛土していくものである。その過程において、2回の休止期がありその時期に礎石や土壌が構築されている。その実態について



图13 出土瓦实测图

SK03(1~7)、SK05(8)、第3層(9~16)、第2層(17)

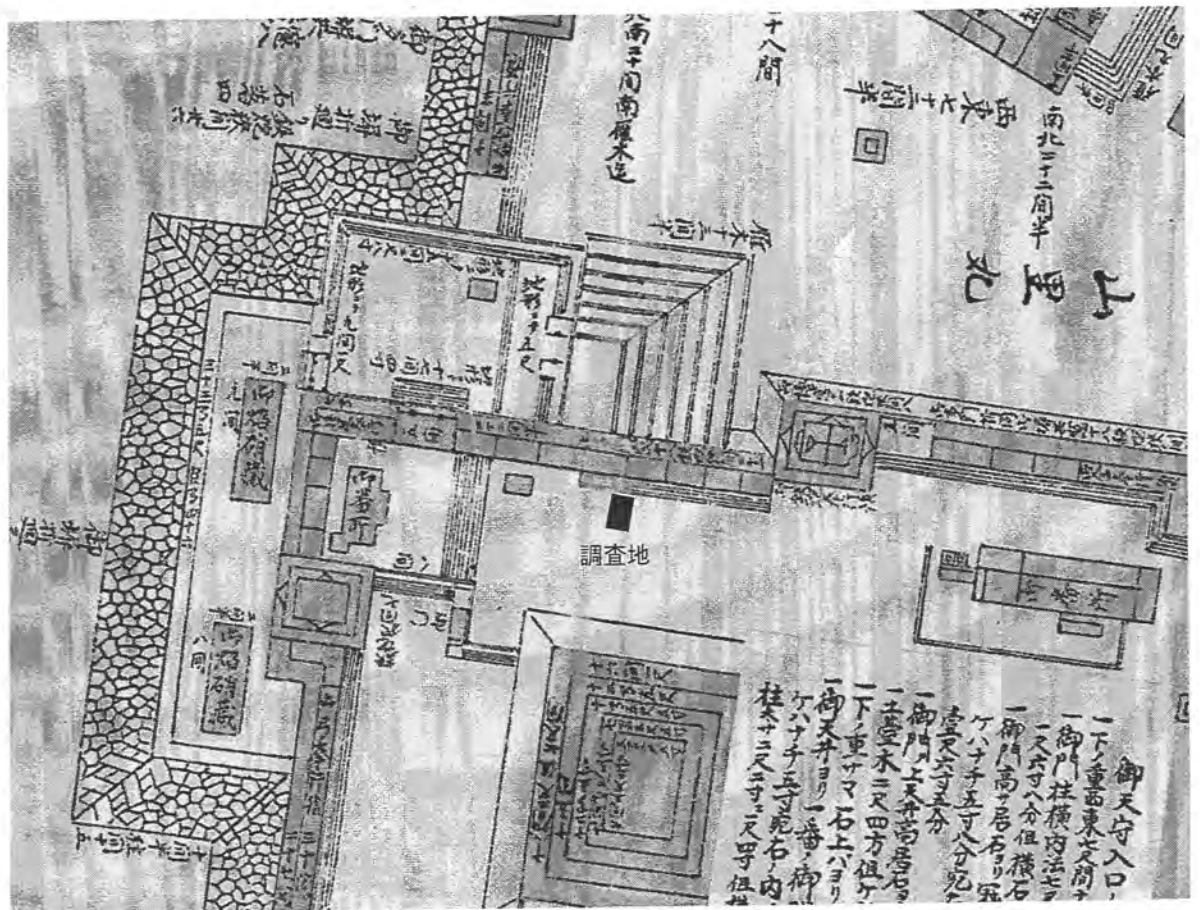


図14 大坂城絵図(原本は国立国会図書館蔵)

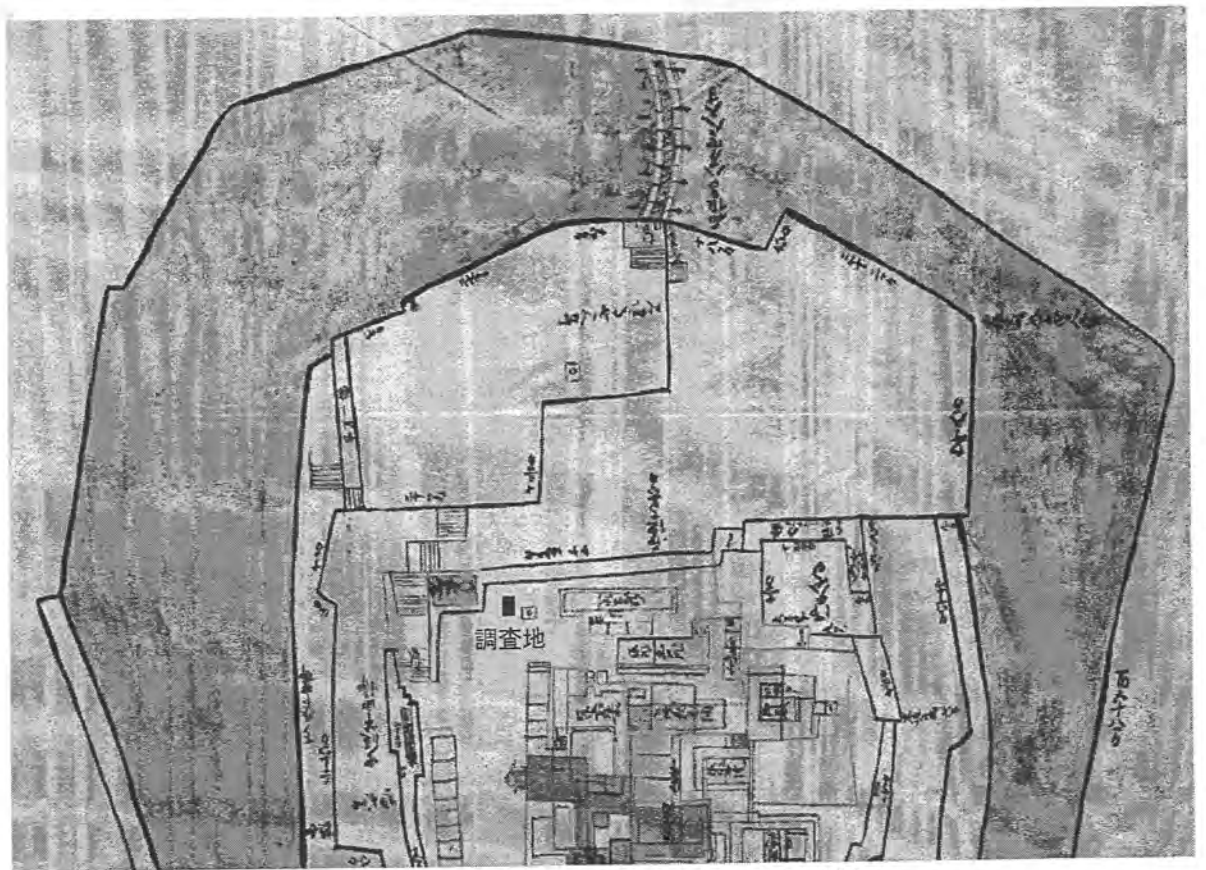


図15 豊臣氏大坂城本丸図(『図説再見大阪城』より)

は、今回の調査範囲内では明らかにならなかったが、今後の調査の中で解明されるであろう。

また、今回の調査では、徳川氏大坂城築城の際の盛土や遺構から、豊臣氏大坂城に使用された多量の瓦が出土した。本報告では、その代表的なものを示したが、鬼瓦・鯨瓦はこれまで出土例が少なく、本丸内での出土ということと合わせて注目される。軒丸瓦では五三の桐文軒丸瓦が10数点出土している。1調査での出土点数としては最多であり、唐草文軒平瓦の種類の高さも特徴的である。

今後の本丸内での調査によって、豊臣氏大坂城に使用された瓦の実態が明らかになることが期待される。

次に、豊臣氏大坂城の盛土を確認することができた。本調査地は豊臣氏大坂城の本丸に位置する(図15)。今回の調査では、豊臣氏大坂城の遺構は検出しなかったが、第5層の上面は、OS84-17次調査で検出した豊臣氏大坂城詰ノ丸の旧地表の高さとほぼ等しく、今後豊臣氏大坂城の本丸地域での遺構検出に新たな手掛かりが得られた。

以上のように、今回は小範囲の調査であったが、大坂城の歴史の解明に貴重な資料が得られた調査であった。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2002、『大坂城跡』VI

大阪市文化財協会2006、「大坂城石垣修復に伴う大坂城跡発掘調査(OS05-1)報告書」

渡辺武1983、『図説再見大坂城』 大阪都市協会

東壁地層堆積状況
(西から)



東壁際トレンチ
深掘部断面
(西から)



SK03・礎石1
(南から)



大坂城跡発掘調査(OS06-9)報告書

調査個所 大阪市中央区農人橋2丁目31-1・31-2・31-3・32
調査面積 100m²
調査期間 平成19年2月16日～2月24日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、趙哲済、宮本佐知子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は南北に通る松屋町筋と、東西に走る中央大通が交わる農人橋交差点の東南街区に当り、上町台地の西斜面が難波砂堆に移り変わる付近に位置する(図1)。[趙哲済2004]によれば、当該地の西約140mを南北に通る東横堀川は、古墳時代に台地と砂堆とに挟まれた沿岸トラフが古代～中世に淡水の湿地に移り変わっていった水域の名残を、1594年に開削された運河であり、大坂城内と城下町を分ける惣構堀である。1614年の大坂冬ノ陣で東横堀川の西側、難波砂堆につくられた豊臣期の城下町が焼失し、1615年の大坂夏ノ陣では東横堀川の東側、上町台地側の大坂城内が戦場となっている。当該地は惣構の西端に近く、かつての水域の東南縁辺部であったと推定される。

本調査地の周辺は、比較的調査例の希薄な地域であり、松屋町筋に近いOS88-73次調査地・OS90-109次調査地を除けば、他は台地斜面に位置し、豊臣期の溝や礎石などの遺構が検出されている。OS88-73次調査地は本調査地の南約100mにあり、TP+2.4mまで調査が行われている。TP+4.1m前後の第2層上面は江戸時代の遺構が検出され、3.6mより上位の第3層は豊臣期、3.6mより下位は豊臣期以前とみられている[大阪市文化財協会2003a]。また、OS90-109次調査地はOS88-73次調査地のさらに南約120mにあり、TP+3.3mまで調査が行われている。3.8mより上位は盛土層で、4.4mから上位は18世紀、3.8mより下位は時代未詳の湿地堆積層とみられる[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991]。

表題の建設工事に先立って、大阪市教育委員会により2度の試掘調査が行われ、地表下2m以深に近世以前の盛土層が多数あり、深さ274cm(TP+2.4m付近)で木質層が落ち込む溝状の遺構が検出され、さらにその下位層から豊臣期とみられる瓦が出土した。この結果や周辺地域の調査状況からみて、当



図1 調査地位置図

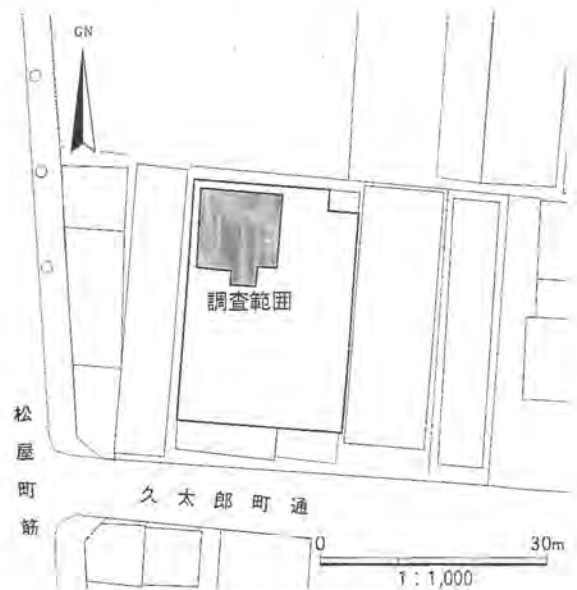


図2 調査範囲位置図

該地には豊臣期の遺構が分布すると推定されたので、本調査を実施することとなった。

調査範囲は久太郎町通に面する敷地の北奥に設定され、建設工事が進行する中、実働8日間の調査を実施した(図2)。本報告で用いる示北記号は図1・2が真北、それ以外の平面図は磁北を用い、水準は東京湾平均海面を基準として、標高をTP±〇mと表記する。

2) 調査の結果

i) 層序

本調査地の地盤高はTP+約5.5mである。現地盤からTP+約2.4mまで重機により掘削されていたが、北壁と西壁では3.2mから下位の地層をTP+1.0mまで観察することができた。TP+2.1~1.6mにある遺構面で2分し、上位の砂主体の盛土層を第1層、下位の砂質粘土層を第2層と呼んだ。第1層には、ほぼ重機掘削面に遺構面があり、この遺構面より上位を第1a層、遺構面の下位を第1b層、西壁付近のTP+2m付近で検出した畠作土層とその下位の砂主体盛土層を第1c層と呼びわけ、さらにそれぞれを細分した(図3・4)。

第1ao層は上部のオリーブ褐色粘土偽礫層と下部の大坂夏ノ陣の焼土層とみられる褐色礫・砂混り焼土層からなる。調査地西南部の2箇所の窪地埋土として分布した。層厚は最大で35cmであった。井戸SE09は本層より上位の遺構である。

第1ai層は粗粒砂からなる明黄褐色の客土層を主体とし、中位に砂質シルト薄層を挟む。焼土層の直下であり、土壌状の窪地を埋めて整地していた。層厚は最大で50cmであった。

第1aii層は灰オリーブ~暗灰黄色を基調とし、砂礫、シルト質砂礫、粘土偽礫などからなる客土層

の互層である。最大層厚部は西壁にあり35cmであった。SK02は本層上面の遺構である。

第1aiii層は灰色粗粒砂質シルト客土層からなる。層厚は15~30cmであった。

第1aiv層はオリーブ黄色を基調とする砂質シルト偽礫、礫、粗粒~細粒砂などからなる客土層の互層である。層厚は20~60cmで、最大層厚部のある東南部では下半部25cmがシルトから砂礫へ上方粗粒化する氾濫性堆積相を示す。

第1bi層は粗粒砂・シルト質粘土偽礫を主体とする灰オリーブ色の客土層である。層厚は15~50cm

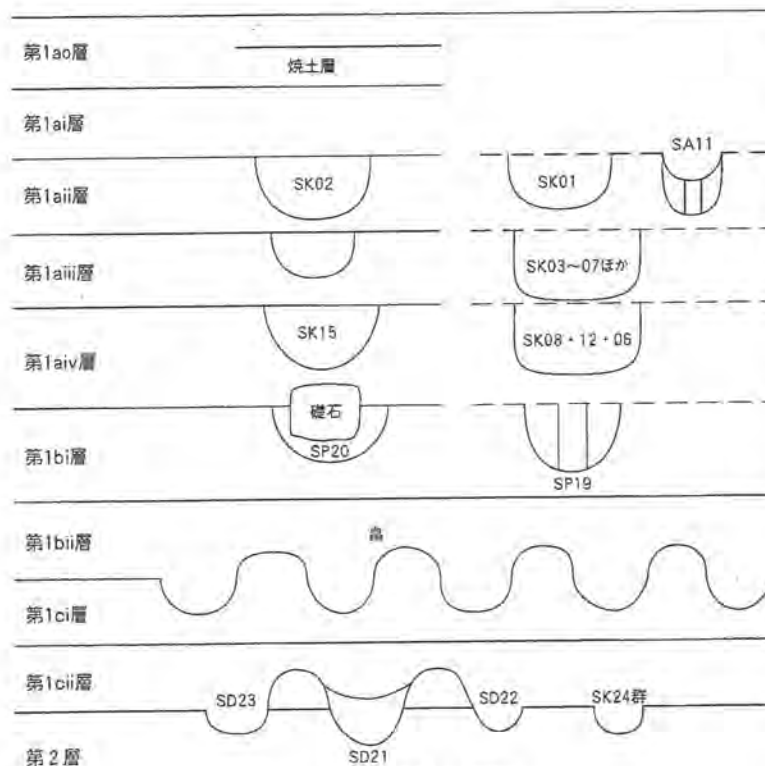


図3 地層と遺構の関係図

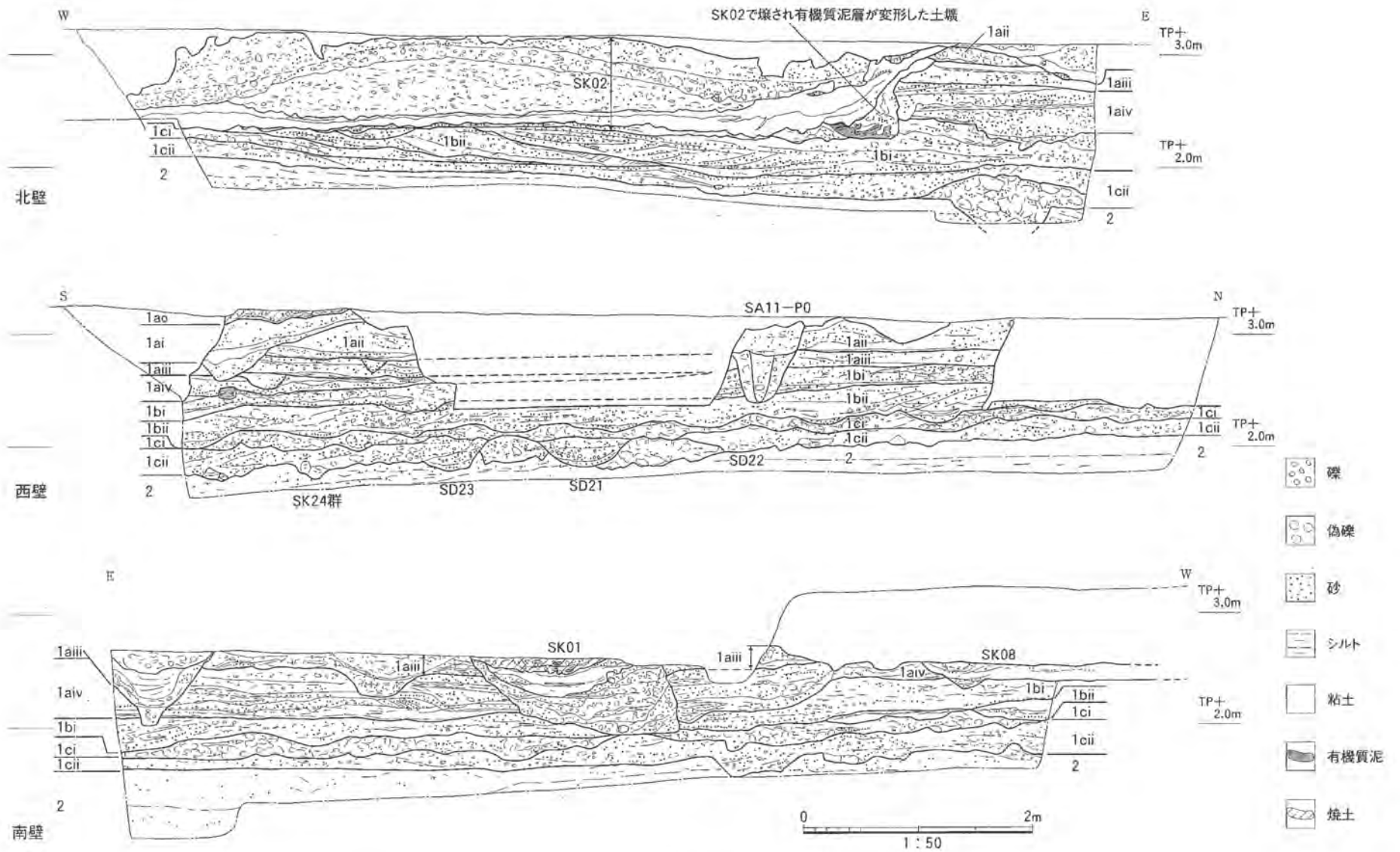


图4 地層断面図

であった。北壁中央～東壁南端にかけては、下部30cmがトラフ型斜交ラミナの発達する砂礫で、下位層の浅い窪地を埋めていた。本層の上面で礎石を据えたSP20や柱穴SP19などの遺構を検出した。

第1bii層は砂と砂質シルト偽礫からなる灰オリーブ色の客土層であり、層厚は30cm以下であった。調査地西半部に分布し、客土の向きは北北西からであった。北壁・南壁の斜面では上部数cmが暗色化していた。

第1ci層はシルト混り粗粒～細粒砂からなるオリーブ褐色の畠作土層であり、砂質シルトの偽礫を多数含んでいた。層厚は平均で15cmであった。

第1cii層は砂質シルト偽礫を多く含む砂礫層である。層厚は20cm前後であった。

第2層は礫・砂質オリーブ黒～黒褐色シルト～粘土層で、下半部に礫・砂が多い。擾乱を受け、堆積構造は残さない。層厚は45cm以上であった。上面でSD21ほかの溝や小土壙を検出した。

第1a・b・c層からは、豊臣期に属する青花、瓦、土師器など、多数の遺物が出土した。

ボーリング資料によれば、敷地西北部のSK13付近では、層厚50cmの第2層の下位には、自然堆積層とみられる層厚35cmの暗青灰色シルト混り砂層、260cmの暗灰色シルト質粘土層、95cmの暗灰色砂質粘土層、海成層とみられる170cmの暗灰色粘土質細粒砂層が続き、TP-4.15m付近で更新統である青灰色中粒砂層となる。敷地東南部では更新統は高く、TP+0.55m付近にあり、本調査地は南東から北西へ傾斜する更新統の斜面に当たっている。

ii) 遺構と遺物

a. 豊臣期の遺構1 (図5左)

SD21～23および小土壙群SK24は、第2層上面の遺構である。SD21は幅0.8m、深さ0.2～0.3mの東西方向の溝である。溝内は中粒砂、小礫～細礫、極粗粒砂が機能時の薄層を成して充填している。流下方向は西から東である。溝の両側は第2層堆積物により上端で幅0.5m程度の土手が作られている。土手のさらに外側には土手と並行してSD22・23が掘られている。これらは浅い溝状の形態をもつが、底は加工面で凸凹しており、機能時の充填堆積層を持たない。土手を盛る際に掘上げられた粘土取りの痕とみられる。

SK24群は長辺が0.2～0.9m、深さは0.1m未満の不揃いで不整形な土壙群である。第2層堆積物の偽礫ラグと第1cii層が埋めている。粘土取り穴とみられる。SD23の南側に多く、SD22の北側にも小規模のものが点在する。

これらの遺構が作られた第2層は、第1層が大規模な造成により形成されたのと比べて人為の程度は小さく、また、これらの遺構を覆う第1cii層からコビキAの丸瓦が出土していることから、これらの遺構が豊臣前期にさかのぼる可能性がある。

b. 豊臣期の遺構2 (図5右)

第1ci層上面で畝を検出した。畝幅は0.4～0.6m、畝高は最大で0.1m、畝間幅は0.4m～0.5mで、断面での確認も含めて、9条以上の畝と畝間が東西方向に延びる。畝の上面は緩傾斜しており、検出した約5.3mの距離で西が東より0.4m高い。また上面には種播き溝らしい浅い幅数cmの筋状の窪みが

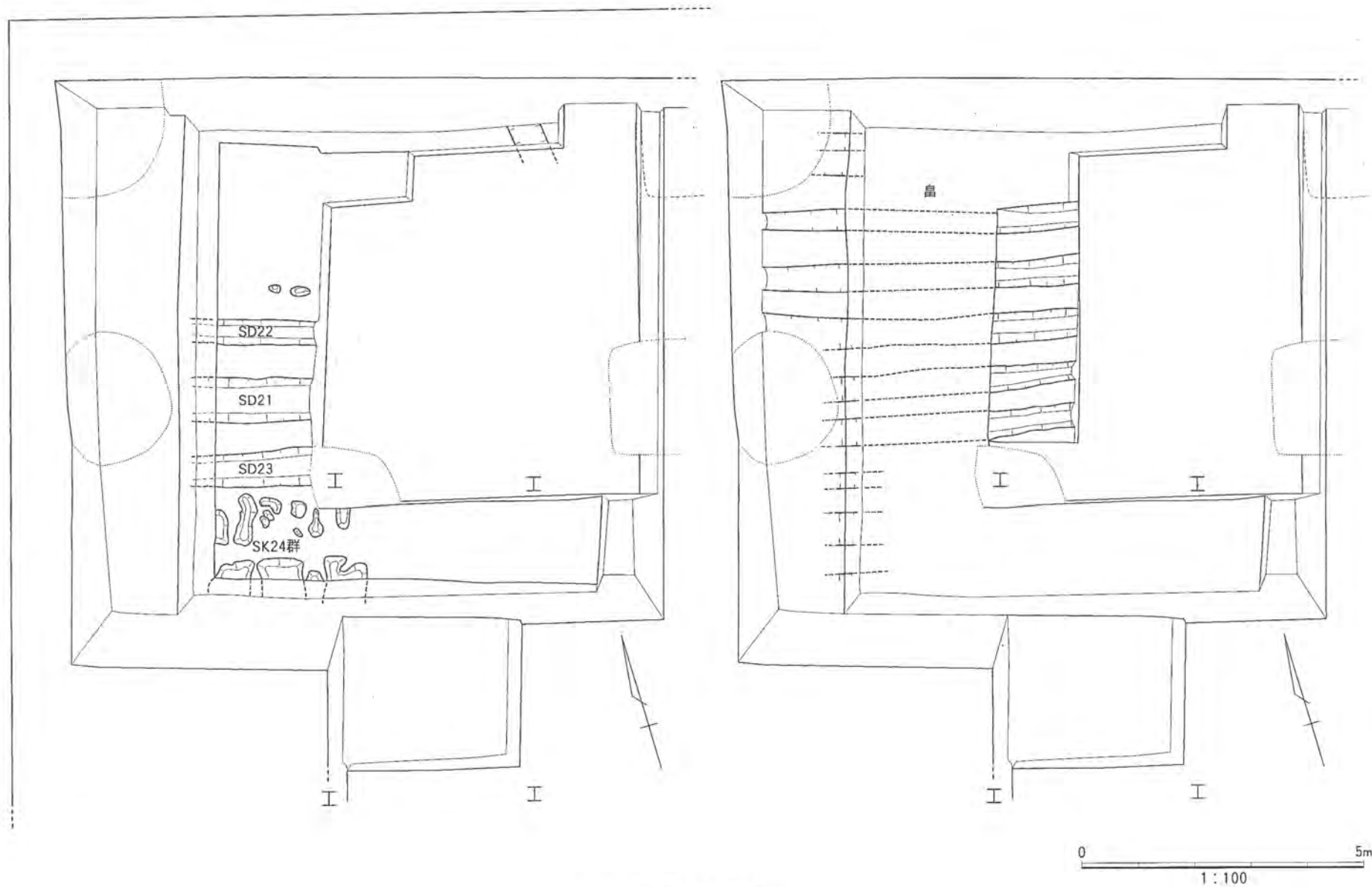


图5 遺構平面図1
左：第2層上面、右：第1c層上面

何筋か認められた。

c. 豊臣期の遺構3(図6左・7)

重機掘削によるTP+2.4m付近の検出面には、SK04をはじめとする多数の遺構が分布した。層序関係と遺構の重なり合いからは遺構面は1bi層上面から1aiii層上面までの複数層準にあるとみられる。

西南部のSP20は1bi層上面の礎石を据えるために掘られた穴である。径は0.3~0.4mで深さは0.1mに満たない浅さである。近くの礎石の下にも同様の穴が掘られているが、建物は復元できていない。礎石は大小あり、SP20に据えられたものは大きい方で長さ30cm・幅15cm・高さ9cmの垂角礎である。SK19はSP20の横にある柱穴であり、SP20と同様の平面形をもち、深さは0.2m、柱痕跡の径は11cmである。

SK03・04・05・06・07・10・13は、いずれも埋土下部が有機質泥層を挟む泥層~泥質砂層、埋土上部が偽礎を含む礫質砂層からなる土壌である。平面形は円形~隅丸の長方形で長辺は0.3~1.4mまで大小あり、深さも検出面から0.1mに満たないものから0.7mを越えるものまでである。遺構の層準は、後述するSK02により変形を受けた有機質泥層をもつ土壌の肩が、第1aiii層の上面から落込んでいるのが北壁で認められることから、有機質泥層を挟む土壌のあるものは、第1aiii層の上面から掘られたと推定できる。最深のSK06が第1aiii層上面の遺構ならば、深さは1.4m近くになる。なお、試掘調査では木質層(有機質泥層)を挟む遺構は第1bi層とみられる面で検出したと報告されているが、試掘位置からみて、SK02の基底面で検出したものであろう。これらの遺構の性格は良く分からないが、有機物が少なからず含まれることから、ごみ穴、トイレなどの可能性も考えられよう。

SK08・12・15・16・18などは有機質泥層を伴わない土壌である。南部のSK15は第1aiv層上面の土壌であり、長辺1.2m以上、短辺0.9m以上、深さが0.6m以上で、砂質偽礎で埋立てられている。相当大きく深い穴であることから井戸であったのかもしれない。他の遺構は長辺が1mに満たない小規模なもので浅く、埋土が砂質粘土や偽礎・泥質砂などであり、層序関係から、遺構面は第1bi層上面から第1aiv層上面のいずれかの層準と推定される。また、第1bi層上面では図6左に細線で示したように、堆積物境界がいくつか認められた。これらの多くは一連の客土作業の過程で搬入された堆積物の違いによる境界であり、少数は独立した遺構の外郭であった。

SK15からはほぼ完形の丸瓦4と石臼2が出土した。丸瓦4はコビキBである。2は緑色の凝灰岩で、豊臣期に越前地方で作られたバンドコと似た石材である。SK16から肥前陶器小杯5・碗6が、SK05から瀬戸美濃焼折縁皿7が出土した。これらの遺構は出土遺物から豊臣後期に属するものと考えられる(図8)。

d. 豊臣期の遺構4(図6右・図7)

SK02は北壁付近に分布した第1aii層上面の大型土壌である。重機掘削面では底面近くが検出できたのみだが、長さ8.0m以上、幅1.2m以上の規模があり、深さは0.9m以上あったことが北壁断面で確かめられた。埋土は3大別できる。下部は薄い泥質砂からなる加工時堆積層である。中部は層厚10~35cmの灰~黒色粘土の機能時堆積層である。上部は層厚70cm以上の暗オリーブ灰~緑灰色の粘土質シルト偽礎と極粗粒~中粒砂からなる廃棄時埋立層である。溜池であろう。機能時堆積層からは肥

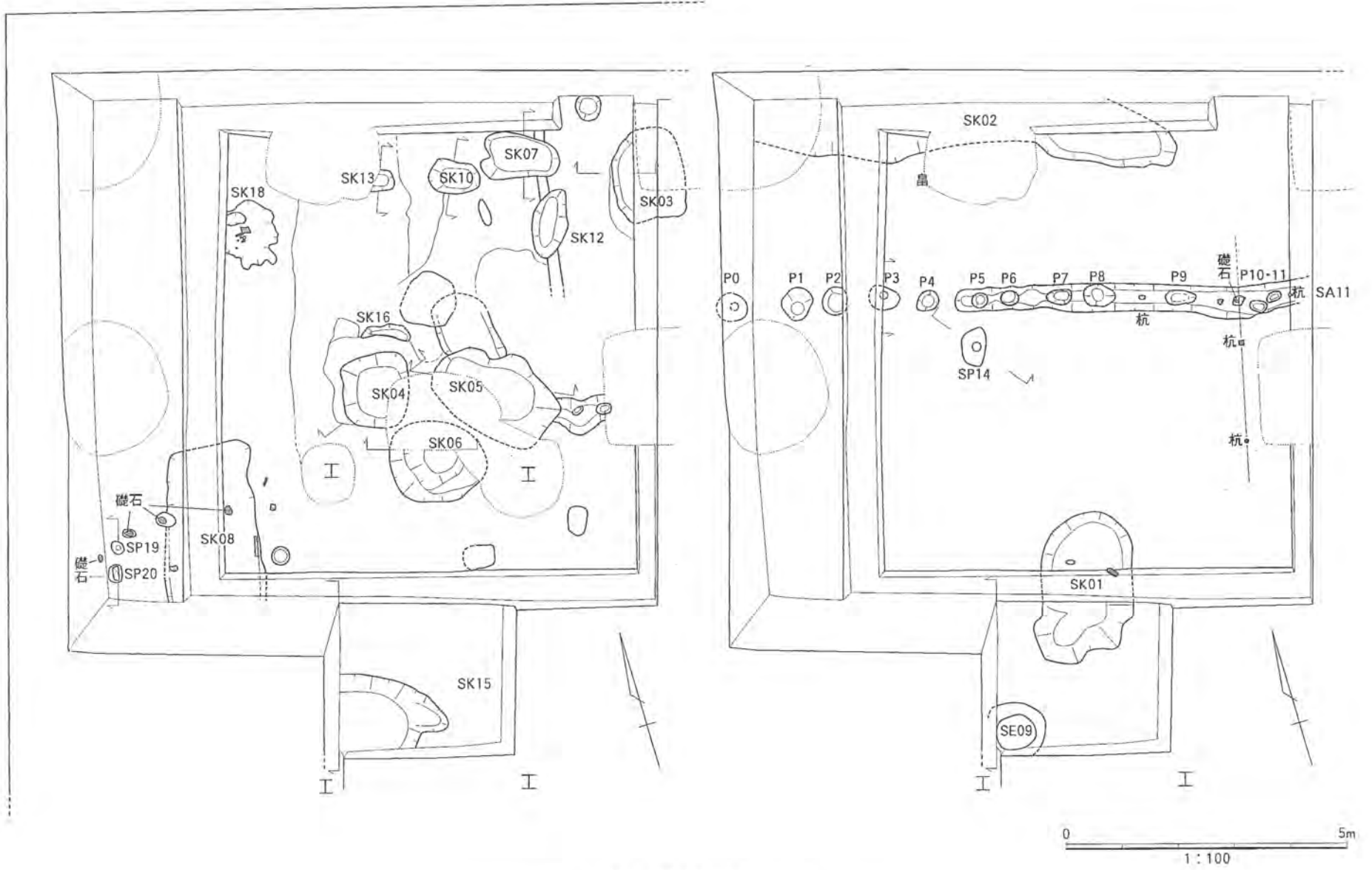


图6 遺構平面図2

左：第1bi層上面～第1aiii層上面、右：第1aii層上面以上

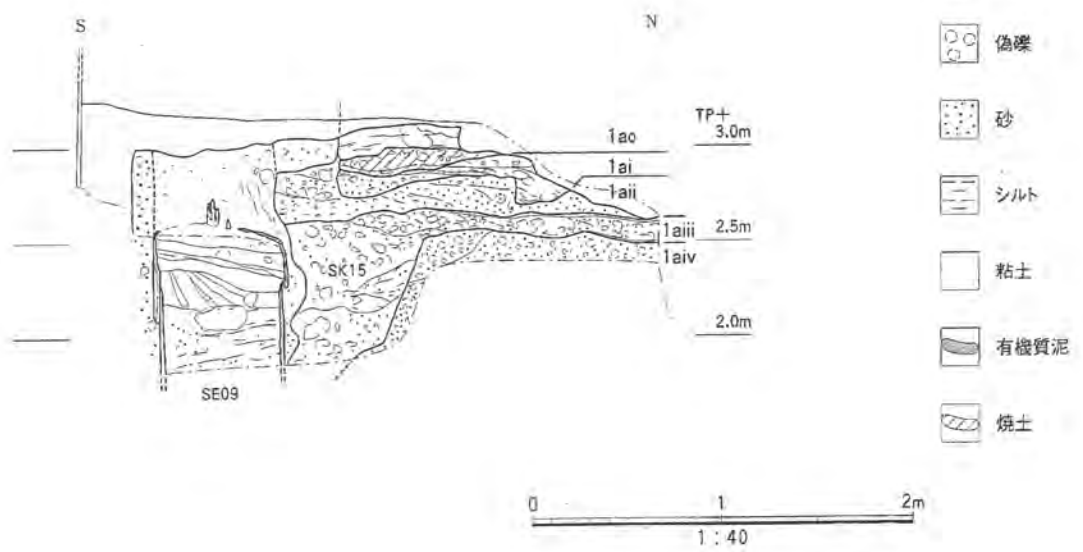
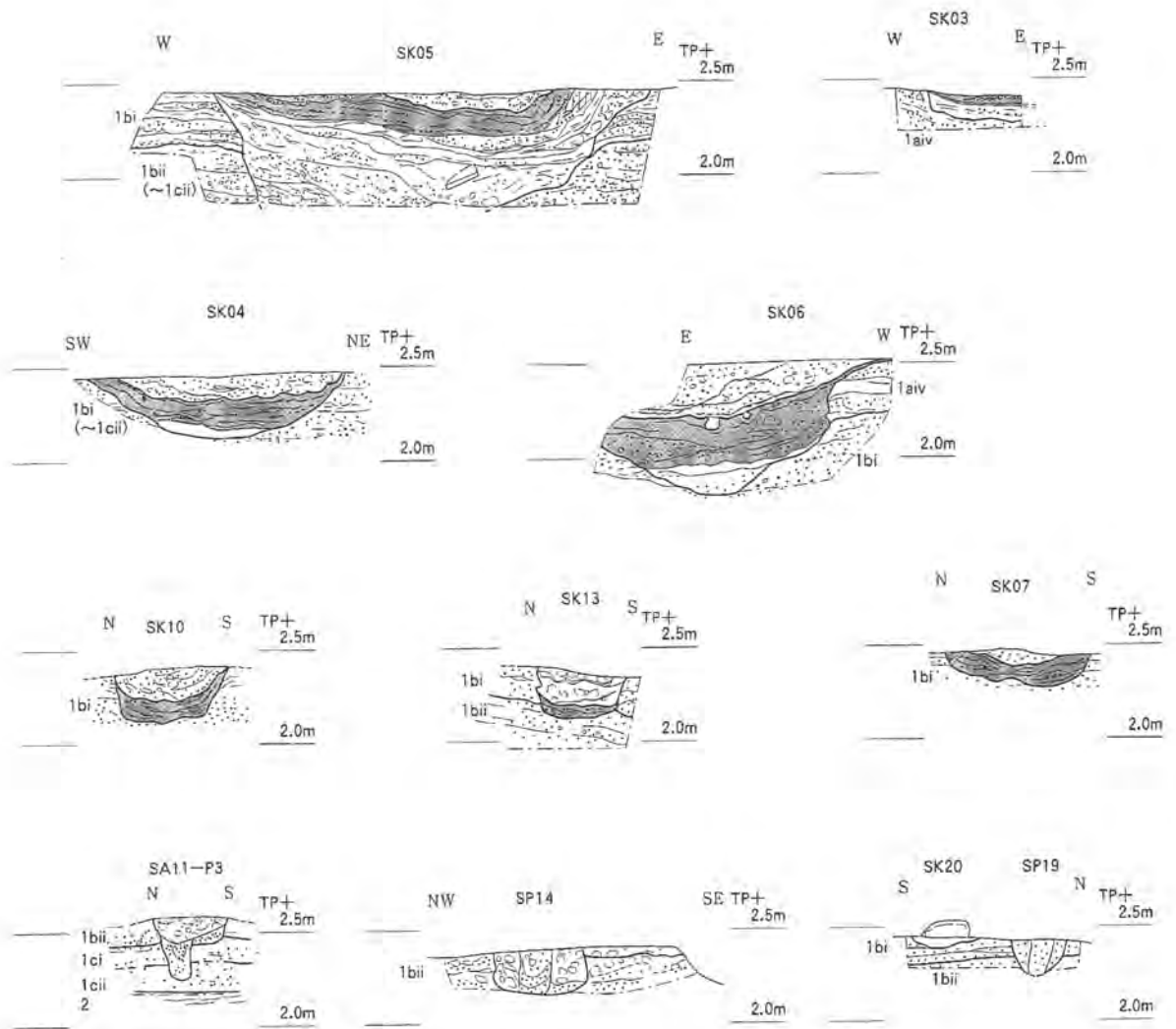


图7 遺構断面図

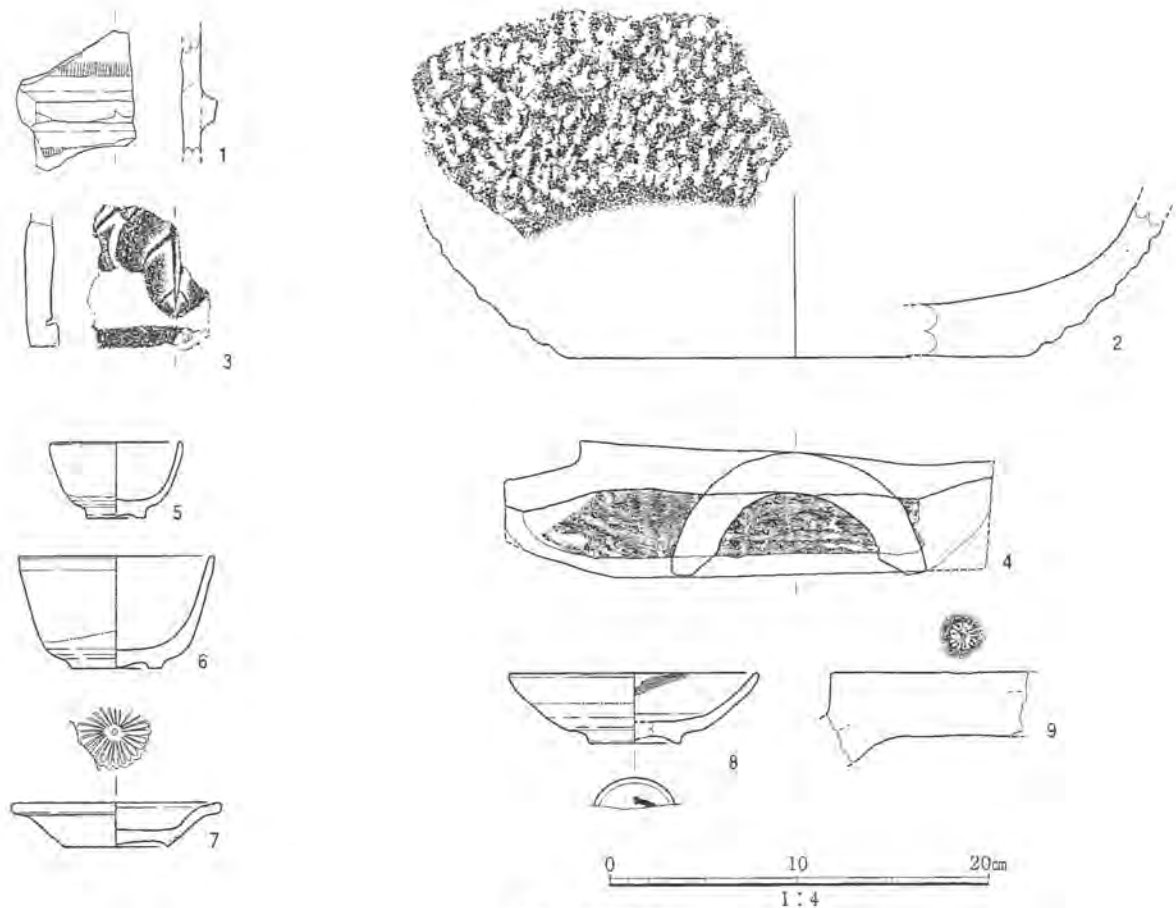


図8 遺物実測図

第1c層(1)、第1aiv~1b層(3)、SK15(2・4)、SK16(5・6)、SK05(7)、SK02(8・9)

前陶器皿8と、凸面に花形の刻印が打たれた厚みが3.5cmもある大型の丸瓦9が出土した(図8)。

SK01は南部で検出した土壌である。層序関係から、第1aii層上面の遺構とみられる。埋土は3大別できる。下部は砂質偽礫で遺構埋土の大部分を占める埋立層であり、これに漸移する中部は泥を主体とする水溜の堆積層である。上部は焼壁片を含み礫~シルトからなる層厚15cm程度の廃棄時埋立層であり、第1ao層の焼土層に当る。したがって下部・中部の埋土層を第1ai層に対比する。この遺構は井戸として掘られたものが、途中まで埋立てられ、水溜になったものかもしれない。

SA11は調査地の中央やや北寄りにある東西の柵である。布掘りの後、柱穴をさらに掘下げたり、根石を置いたりしている。杭も打たれている。柱穴とみられる穴は12箇所あり、西壁の壁面に掛かる穴から東へP0・P1・P2・・・と呼んだ。柱痕跡は2箇所を確認でき、ともに先細りで、P0が径25~15cm、P3が径16~10cmであった。また、ともに柱穴とはほぼ同じかやや大きい抜取り穴が掘られていた。礎石を含めた柱間隔は0.6~1.4mあり、何度かの柱の建替えや杭の打替えが行われていたと考えられる。布掘りはP4/5間から東で確認した。SA11は江戸期以来の現敷地境より約3.6m南に位置する。一方、P10の西横の布掘りの底には礎石が置かれ、この礎石から南側に布掘りと直行するように並んだ杭を2本検出した。この位置にも南北方向の何らかの区画があったと推定される。

e. 江戸期の遺構(図6右・図7)

SE09は径0.6~0.7mの側板で囲われた井戸であり、第1ao層より上から掘られている。掘形は径約

0.9mであった。裏込めからは17世紀前半の肥前染付磁器、瀬戸美濃焼などが出土した。

f. 出土遺物(図8)

第1c層中から円筒埴輪1が出土した。タガの突出は比較的高く、外面は1次調整がタテハケで、その後横方向のナデが加えられている。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。川西宏幸による円筒埴輪編年[川西宏幸1978]のⅣ期に相当しようか。

第1aiv~1b層を掘削中に方形桐文飾り瓦3が出土した。同じ文様の瓦は豊臣期大坂城跡の前期の地層から、金箔を押したものの出土例がある[大阪市文化財協会2003b]。

3)まとめ

本調査地では、最下位で調査した第2層上面の遺構は豊臣前期にさかのぼる可能性があるが、その上位の第1層中には豊臣後期の遺構面が5面以上重なっていることが明らかとなった。このことは、本調査地が豊臣後期に主たる開発が行われた地域であったことを示唆している。上町地域が豊臣前期から開発されたのとは対照的に、東横堀川の東にあるとは言え、本調査地が古墳時代の沿岸トラフの名残である湿地が遅くまで残った場所であったことが、開発が遅れたことと関係していると考えられる。

検出した遺構は溜池や水溜、井戸、性格未詳の土壌などであり、一定規模の礎石建物は見つからなかった。調査範囲が通りと反対側の敷地奥であったためであろう。当該地域の調査は緒についたばかりであり、江戸期以来の敷地境の位置とずれる柵をはじめとして、今後、周辺地域の調査が進めば、城下町形成における個々の遺構の位置づけや城下町形成過程も明らかになろう。

参考文献

川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64号、日本考古学会、pp.95-164.

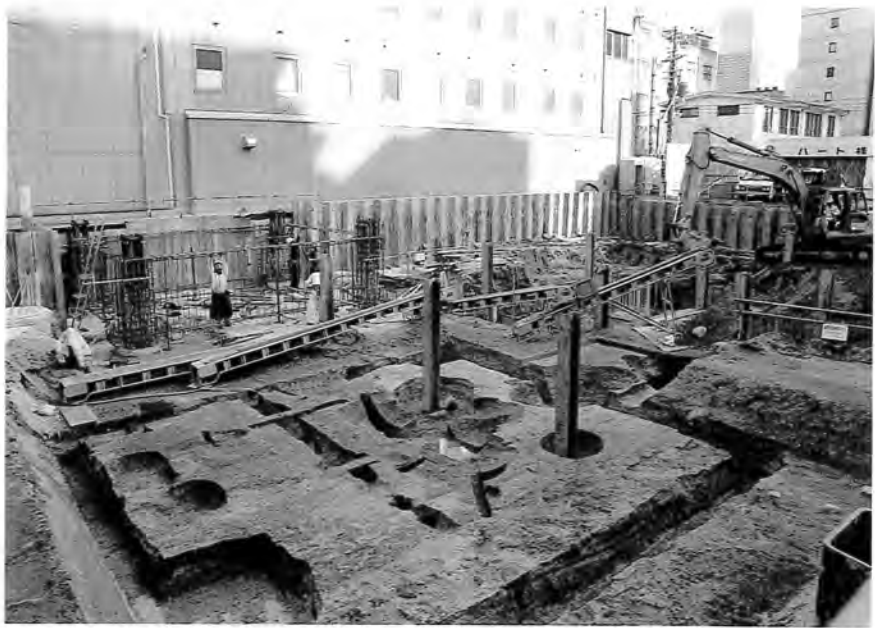
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、「佐々木久夫氏による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS90-109)略報」：『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.43-47.

大阪市文化財協会2003a、「F地区の調査」：『大坂城跡』Ⅶ、pp.321-324.

2003b、「大阪市内出土の金箔瓦」：『大坂城跡』Ⅶ、pp.223-242.

趙哲済2004、「大坂城下町跡の自然地理的背景について」：大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.347-350.

調査地近景
(北西から)
右奥ビルの手前が
久太郎町通



豊臣期の遺構 1
(北東から)
溝SD21~23(第2層上面)
畠(第1ci層上面)



豊臣期の遺構 2
(西から)
溝1bi層上面での
掘下げ後の状況



大坂城下町跡発掘調査(OJ06-1)報告書

調査個所 大阪市中央区淡路町2丁目1
調査面積 247m²
調査期間 平成18年4月6日～平成18年4月21日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、黒田慶一

1) 調査にいたる経緯と経過

調査箇所は豊臣氏大坂城惣構の西部に広がる大坂城下町跡に位置しており(図1)、周辺には古代・中世から近世にかけての遺構・遺物が検出された調査地(OJ92-33・00-13次)がある。

当敷地における建設工事が大規模であることから、大阪市教育委員会は3箇所を試掘調査を行ったが、敷地西半には旧建物の地下室があることから、東半の一部のみの調査となった。試掘調査では現地表面下3.0mで17世紀前半の生活面が、同4.0mの地山面で古代～中世の遺構が確認されたことから、豊臣時代の状況解

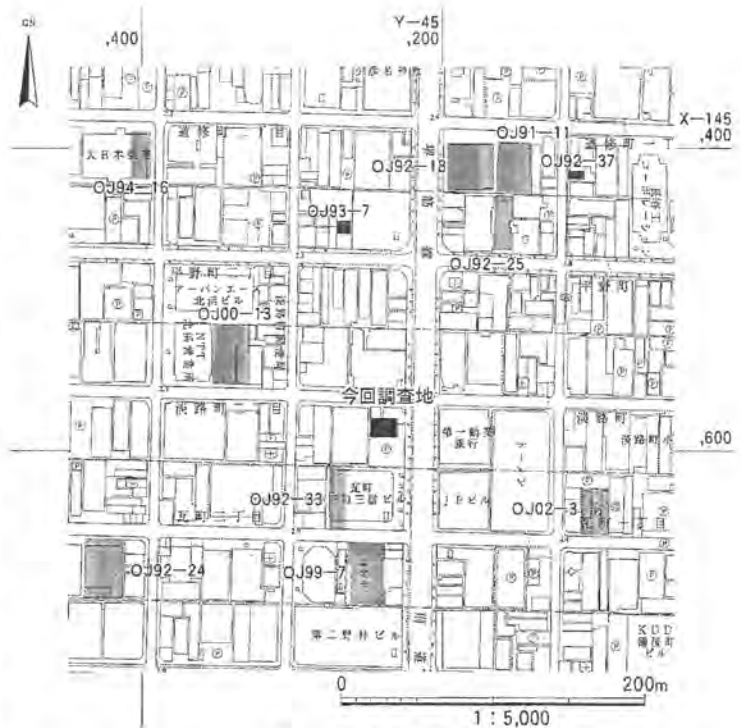


図1 調査地位置図

明と古代～中世遺構の検出を中心に調査することとなった。本調査は試掘調査に基づき、現地表面下3.0mまでを重機で掘削後、地山面までを人力掘削で調査した。調査区は両側町である淡路町の南側町で、現在の淡路町通の南側溝から遺構面北端までは12m強を測り、近代の都市計画による道路幅を考慮しても、道路表から背割下水にいたる南北に長い屋敷の中央部北寄りに位置する。

4月1日に重機掘削を実施し、付帯工事を経て、6日から調査にかかった。まず、調査区の四周に側溝を設定し壁面の分層を行うとともに、攪乱土を除去して精査した。以下、第6層上面から第10層上面までの各面について調査を行った。主要な遺構面は第6層・第10層上面である。また、第6層上面から地層観察用のアゼを調査区中央に十字形に残した。4月21日に現地におけるすべての調査を完了した。

なお、調査時には磁北を方位の基準とし、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いた。本報告では方位は偏差を修正して座標北とし、水準は本文・挿図中ではTP+〇mと記す。

2) 調査の結果

i) 層序と遺物(図2・5)

第0層：コンクリート片を多量に含む現代盛土層である。

第0.5層：にぶい黄褐色粗粒砂からなる江戸時代中期の整地層で、層厚30数cmを測る。

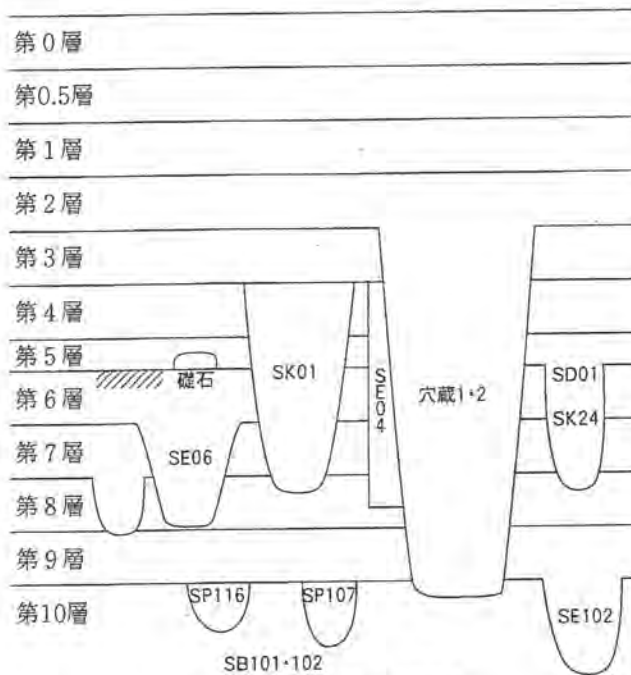


図2 地層と遺構の関係図

第1層：焼土を含む、層厚10～20cmの暗褐色シルト混り粗粒砂層からなる焼土層である。本層の起源は、宝永5(1708)年の道修町大火であると考えられる。

第2層：層厚50～70cmのにおい黄褐色中粒砂からなる整地層で、穴蔵1・2を埋める。

第3層：層厚5～45cmの褐～黒褐色粗粒砂を含むシルトからなる整地層である。SK01の埋土上は不等沈下によるものか、炭を含むにおい黄褐色中粒砂や焼土などの薄層によって平坦化されている。

第4層：層厚10～30cmのにおい黄褐色シルトを主体とする大坂冬ノ陣の焼土を用いた整地層である。初期伊万里を含むことから、17

世紀中葉に客土として搬入された可能性がある。肥前陶器皿34・鉢36、中国製赤絵皿35・青花碗39、丹波焼播鉢37・38が出土した。SE04は穴蔵1に切られることから本層上面からの掘込みと考えられる。

第5層：層厚10cm前後の暗オリーブ褐色を呈する、冬ノ陣の炭と焼土からなる層である。

第6層：豊臣後期のある時期に施された層厚5～10cmの褐色中粒砂からなる整地層である。上面が冬ノ陣で被災し焼けている。瀬戸美濃焼皿13・14、肥前陶器壺15、中国製青花皿16・白磁皿17が出土した。南北方向の礎石列1・2やSD01、調査区東北部に集中して見られるSK24をはじめとする土壙群が、本層上面からの掘込みと思われる。

第7層：層厚10～25cmの暗褐色中粒砂混りシルトからなる整地層で、土師器皿6・7、瀬戸美濃焼皿8～10、肥前陶器鉢11、備前焼播鉢12を含む。慶長3(1598)年の城下町建設時の施工と考えられる。

第8層：層厚10～20cmの暗褐色中粒砂混りシルト層で、断面観察から本層の上面に掘られた直径20～60cmのピット・土壙の存在が確認された。

第9層：層厚5～20cmの黒褐色中粒砂混りシルト層で、12世紀頃の瓦器碗を含む。

第10層：におい黄褐色中粒砂からなる当地の地山層であり、上限から約40cmで砂礫層に移化する。上面に古代～中世のピット・土壙・井戸が見られる。

ii) 遺構と遺物

a：第10層上面の遺構と遺物(図4・5)

SB101 SP107・116・122・123・124からなる2間×2間以上の掘立柱建物で、北で西に10°振る。妻側の芯々間は1.6m、桁側は1.9mである。SP125が床束であれば、床張りの建物になる。SP107がSK102とSP106を切り、両者から12世紀頃の瓦器碗が出土していることから、その頃の建物と思われる。

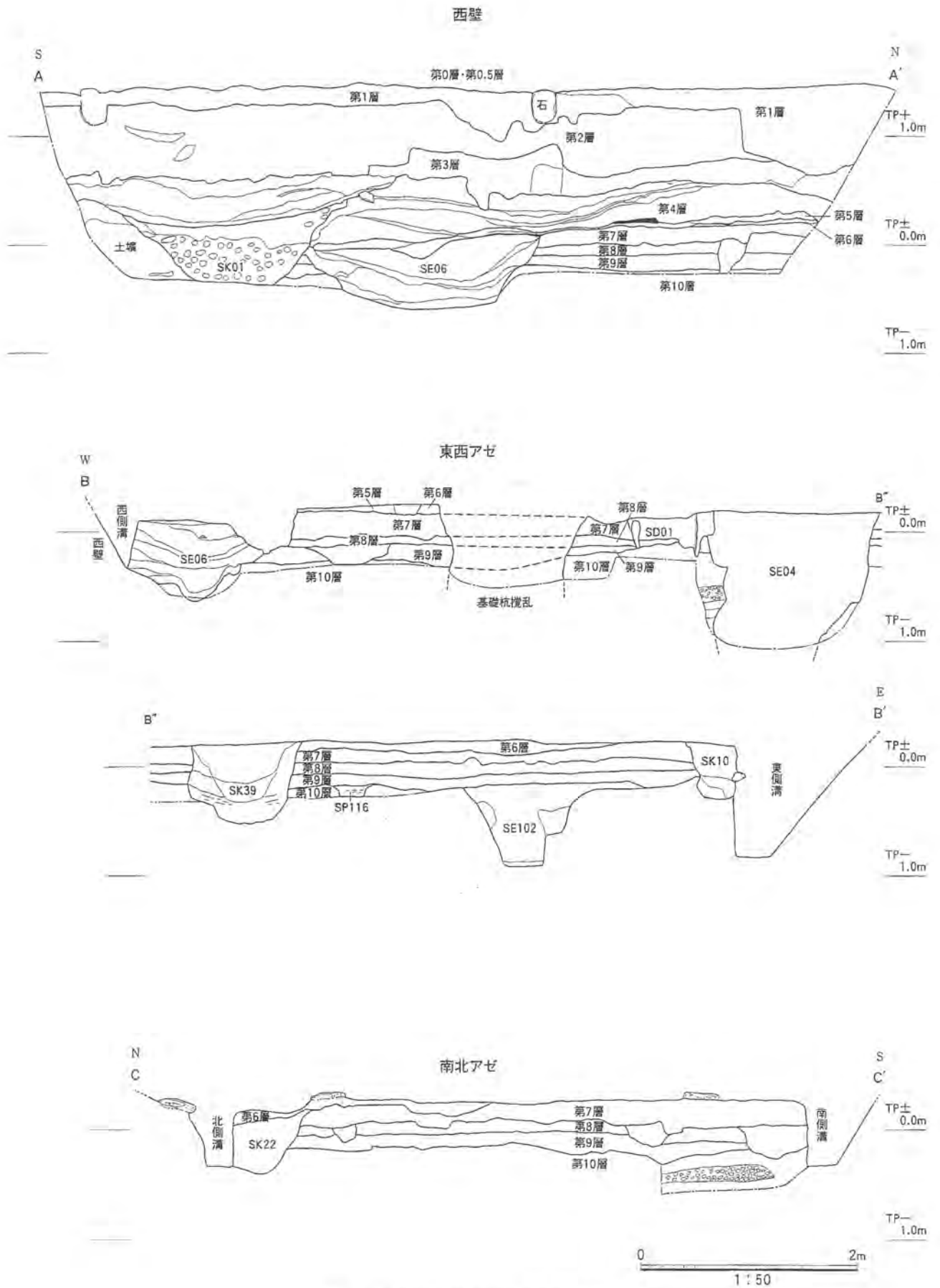
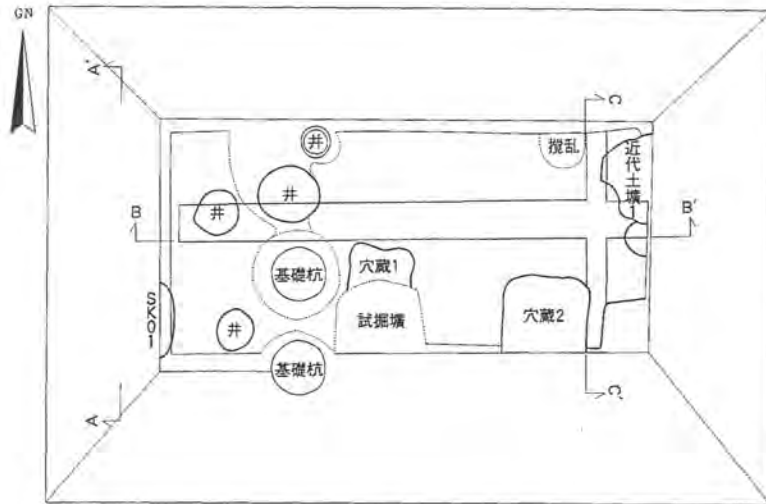
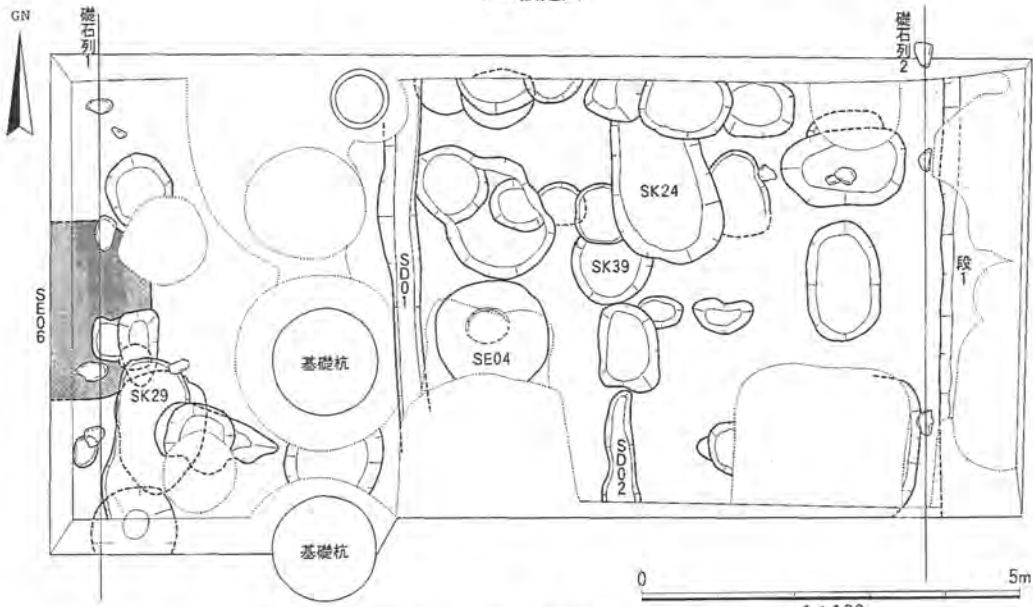


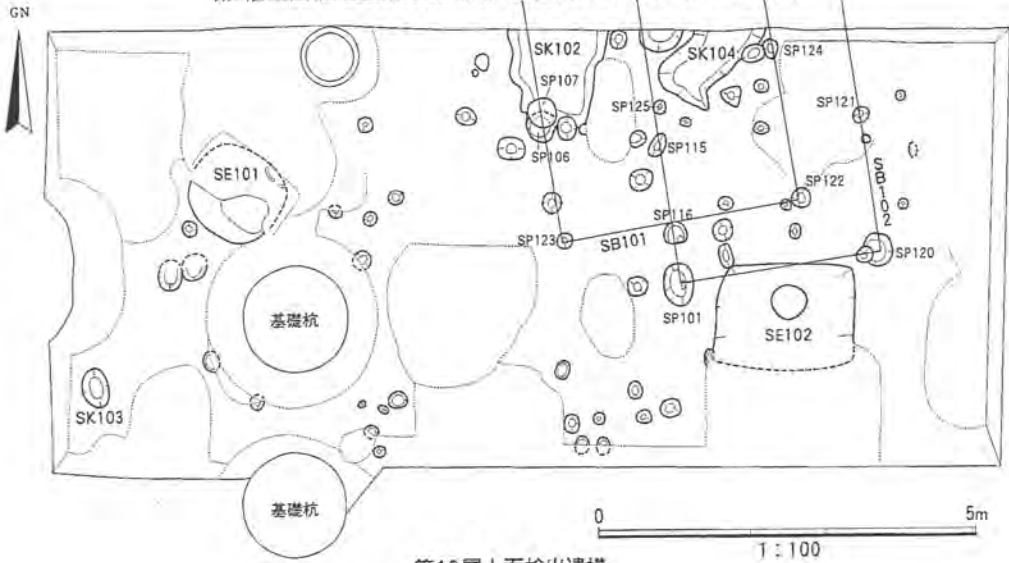
図3 断面実測図(断面位置は図4参照)



0 5 10m
1 : 200
アゼ設定図



第6層上面検出遺構 (SE04は第4層上面、SE06は第7層上面検出)



第10層上面検出遺構
図4 平面実測図

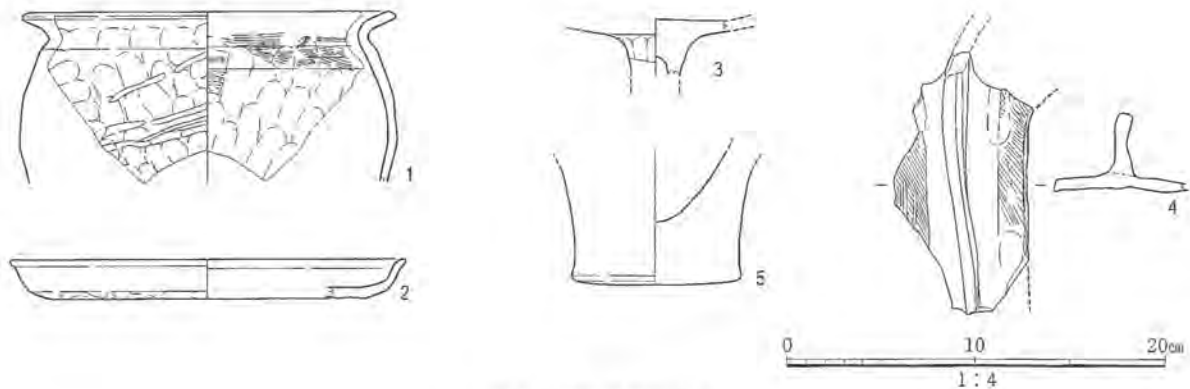


図5 遺物実測図(1)

SE102水溜外(1~4)、近代土塋1(5)

SB102 SP101・115・120・121からなる2間×2間以上の掘立柱建物と思われ、やはり北で西に10°振る。妻側の芯々間は1.3m、桁側は1.9mを測る。SP101から土師器片が出土しているが、SB101と方位や桁側芯々間距離が似ていることから、同じ頃の建物と考えられる。

SK102 調査区の中央北端にある、深さ0.2mの不定形な土塋で、第9層を埋土とする。SP106・107に切られており、瓦器椀と土師器が出土した。

SK103 調査区の南西隅にある、長さ0.5m、幅0.3m、深さ0.2mの楕円形を呈する土塋で、布目瓦片が多く出土した。

SK104 SK102の東側にある、深さ0.1mの不定形な土塋で、第9層を埋土とする。瓦器椀と土師器・須恵器が出土した。

SE101 直径1.3m、深さ0.8mの黒褐色粗粒砂混り細粒砂を埋土とする井戸である。

SE102 長さ1.8m、幅1.5m、深さ0.8mの長方形の井戸で、中央に直径0.4m、高さ0.5mの桶を据えて水溜としている。土師器甕1・皿2・高杯3・移動式竈4が水溜外から出土した。8世紀末の井戸と思われる。

また、台付き鉢5が調査区北東隅の近代土塋1から出土した。

b：第6層上面の遺構と遺物(図4・6)

礎石列1 調査区西端に位置する南北方向の礎石列で、芯々間は0.9mと1.8mを測る。3尺を基準にして礎石を配置したと考えられる。

礎石列2 調査区東部に位置する南北方向の礎石列で、芯々間は1.5mと3.3mを測る。5尺を基準にして礎石を配置した可能性がある。この礎石列の東側に接して高低差0.1mの段1があることから、敷地境の塀になると考えられる。礎石列1との距離は10.9mで、1間を6尺にした場合の6間の近似値である。

SD01 調査区を南北に縦断する上幅0.6m、下幅0.4m、深さ0.25mの溝で、側板を杭で留めている。礎石列1・2からの距離は、それぞれ4.1m・6.8mで、ほぼ14尺・23尺の間を取って施工されたようである。

SK24 SD01の東側に位置する切合い関係のある土塋(ゴミ穴)群の一つで、長さ2.0m、幅1.4m、深さ0.6mで、SK39を切る。土師器皿18~22、瀬戸美濃焼碗23が出土した。

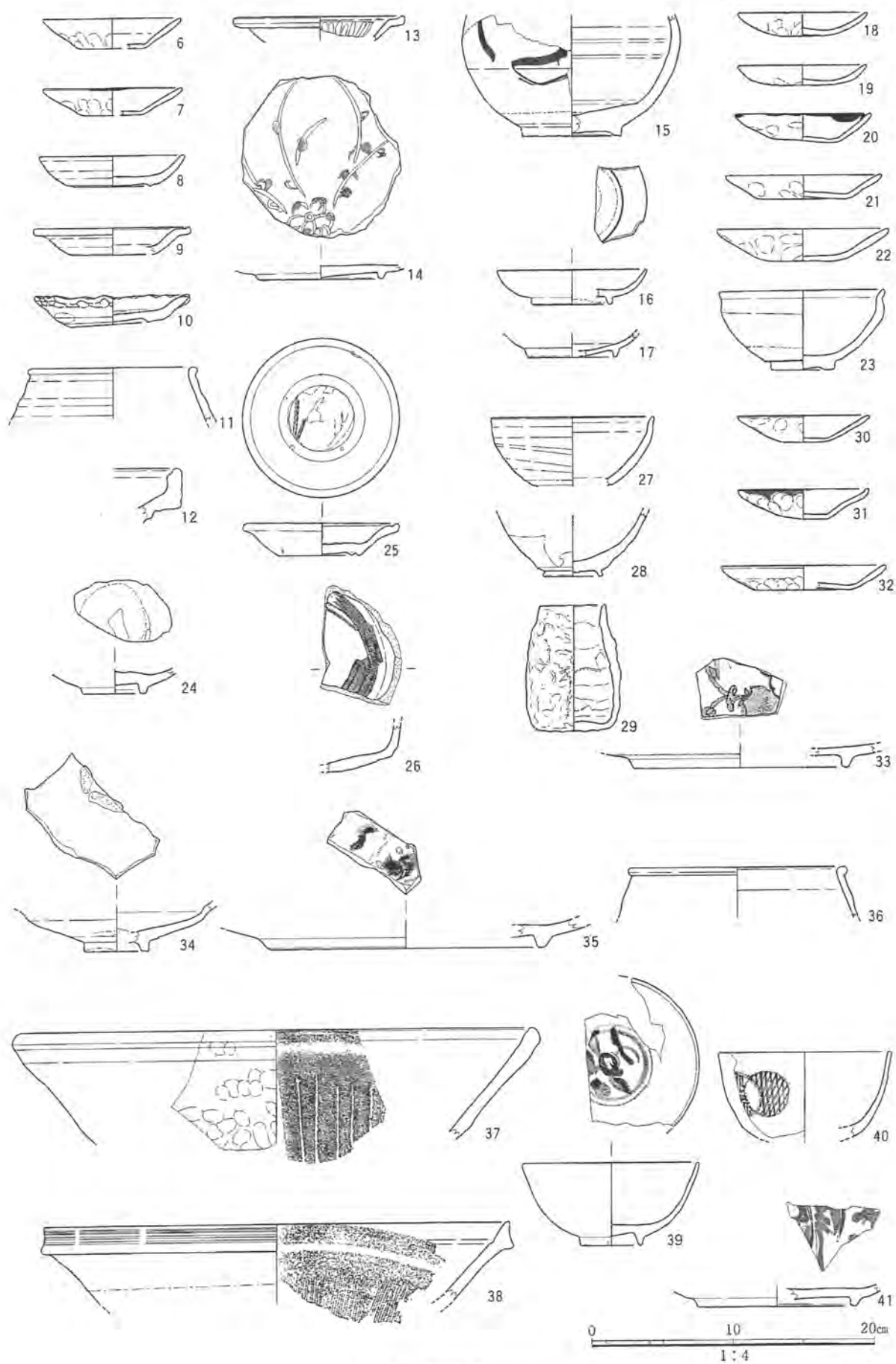


图6 遗物实测图(2)

第7層(6~12)、第6層(13~17)、SK24(18~23)、SK29(24)、SK39(25~33)、第4層(34~39)、SE04(40·41)

SK29 調査区南西部にある楕円形を呈する土壌で、見込みを釉ハギする中国製白磁皿24が出土した。

SK39 円形を呈する土壌で、瀬戸美濃焼皿25、瀬戸美濃焼志野鉢26、肥前陶器碗27・28、焼塩壺29、土師器皿30～32、中国製青花皿33が出土した。

c：第4層上面の遺構と遺物(図4・6)

SE04 直径1.5mの掘形の底に直径0.5mの桶を水溜として据えている。肥前磁器碗40、中国製色絵皿41が出土した。

3)まとめ

今回の調査は既設建物の攪乱もあって、遺跡全体の姿を完全な形で検出したわけではないが、以下の諸点を明らかにできた。

1. 奈良時代末の井戸が見つかったことで、この地域まで当該期の集落が広がっていることが明らかになった。

2. 平安時代末から鎌倉時代初頭の南北方向の掘立柱建物2棟を検出した。方位は北で西に10°振る。これによって奈良時代以降、中世前期まで集落が継続していることがわかる。

3. 大坂冬ノ陣で被災した豊臣後期の町割を明らかにできた。間口は6間と復元できる。

4. 豊臣後期の町割では、調査区は敷地の中央北寄りに当るが、当時、ここは内庭だったようで、切合い関係のあるゴミ穴が検出された。また、船場の開発から冬ノ陣で被災するまでに、最低1回の造替えがあった。

本調査区の南西60mの地点では平安時代のものと考えられる井戸が3基見つかっている(OJ92-33次)。豊臣秀吉による船場の開発の解明も重要だが、[大阪市文化財協会2004]でも考察されているように、この地域には古代以来、連続と集落が営まれている。その集落の実態を明らかにするために、今後の調査が待たれるところである。

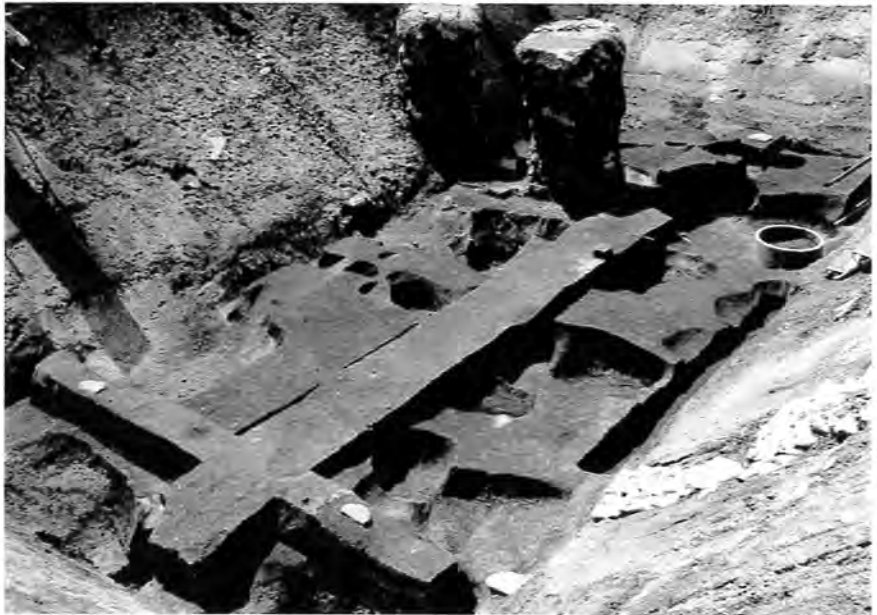
引用・参考文献

大阪市文化財協会2004、『大坂城下町跡』Ⅱ

第6層上面遺構検出状況
(北西から)



第7層上面の状況
(北東から)



調査区西壁断面
(SE06の埋土上
に礎石がのる)



第10層上面遺構検出状況
(南東から)



第10層上面遺構検出状況
(南から)



SK103
(南から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ06-2)報告書

調査個所 大阪市中央区道修町1丁目6
調査面積 75m²
調査期間 平成18年4月14日～平成18年4月25日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、小田木富慈美

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町跡の東北部に当り、敷地の南北は、道修町通と伏見町通にそれぞれ面している。また、敷地の東には八百屋町筋が通る(図1・2)。南側のOJ92-18次調査地では弥生時代中期にさかのぼる土器が出土している。付近では古墳～奈良時代にかけても遺物の出土が散見されるが、遺構が検出されるのは平安時代からである。平安時代の遺構分布は中央大通よりも北に限られ、中世の港湾都市「渡辺津」との関連が指摘されている。室町時代に入るとさらに遺構・遺物の量が増加し、大規模な溝で囲まれた集落が存在したと推測されている。船場地域が本格的に開発されるのは、慶長3(1598)年の豊臣秀吉による大坂城三の丸建設に連動したものであったという[内田九州男1989]。この開発後、慶長19(1614)年の大坂冬の陣の火災によって付近一帯は焼失するが、大坂夏の陣後すぐさま城下町の再開発が行われた。それ以降は町屋が立ち並び、商業都市大坂の中心として繁栄してきた。調査地の属する道修町は17世紀後半以降、多くの薬屋が立地し薬の町として栄えたことでもよく知られている。

調査地の周辺では、これまで南に位置するOJ91-11・92-18次調査、東北に位置するAZ87-5次調査をはじめ、数多くの調査が行われている(図2)[大阪市文化財協会2004]。OJ91-11・92-18次調査地では平安時代の井戸や溝、古代以前の自然流路が見つかったほか、豊臣～徳川期の屋敷地が検出され、陶磁器の優品が数多く出土している。なお、ここでは豊臣期に金属加工に関わる職人が居住したことが推定されている。また、AZ87-5次調査地では、豊臣～徳川初期の建物や土壌が検出された。土壌より出土した大量の木簡から、元和年間までこの地に魚市場が存在したことが判明している。さらに、安政3(1856)年の水帳によれば、調査地は道修町1丁目に当り、敷地内には「備前屋



図1 調査地の周辺図



図2 調査地の位置図



図3 水帳より見た調査地の位置図

[大阪市文化財協会2004]に加筆

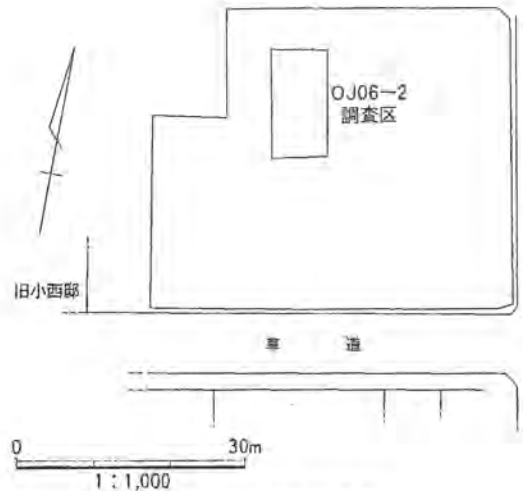


図4 調査区位置図

九郎兵衛」・「内田屋惣三郎」の名が見える(図3)
[矢内昭1982]。

調査地では平成18年3月に大阪市教育委員会が
試掘調査を行ったところ、近世以前と思われる遺構・遺物が確認されたため、本調査を行うことになった。調査では、周辺の調査で確認されたような中世～近世の遺構の拡がりを確認することが期待された。調査は平成18年4月14日から開始した。当初の予想以上に既設建物の基礎が広範囲に認められたため、調査区を北へずらして再設定した(図4)。その後、表土・現代盛土～江戸時代後半の盛土層を重機によって除去し、それ以下の海浜成層上面までを人力で掘削した。中世～近世にかけて複数の遺構面を検出し、適宜写真撮影と記録作業を行った。4月25日には埋戻しを行い、発掘調査に関する基本的な作業をすべて終了した。なお、本報告で使用した方位は磁北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値：TP±0mと略記する)である。

2) 調査の結果

i) 層序(図5・6)

調査区では古代以前と考えられる海浜成層の上面に、中世～近世の地層が良好な状態で残存していた。なお、第1・2層については重機で除去したため、断面観察のみを行った。ゆえに詳細については不明である。各層の上・下面では遺構が検出された。以下で各層の特徴について述べる。

第1層：大坂城下町跡基本層序の第1～2層に相当する近世～近代の盛土層である(以下、同様に基本層序城下町○層と略記)。層厚は約140cmで、2枚に細分される。第1a層は近代の盛土層と思われるにぶい灰黄色粗粒砂質シルト層である。第1b層はにぶい黄褐色中～粗粒砂層で、炭・漆喰を含む。江戸時代後半～幕末期の遺物が出土している。第1b層の上面では、東北隅で南北方向の石列を検出した。この石列は用水路の一部である可能性があり、最終的にコンクリートで埋められていた。

第2層：第2a～第2d層に細分される盛土層である。第2a・2c層はともに層厚約20cmの赤褐色粗粒砂～シルト層で、炭・焼土を多量に含み、火災後の整地に伴う焼土層である。第2b層はにぶい黄褐色

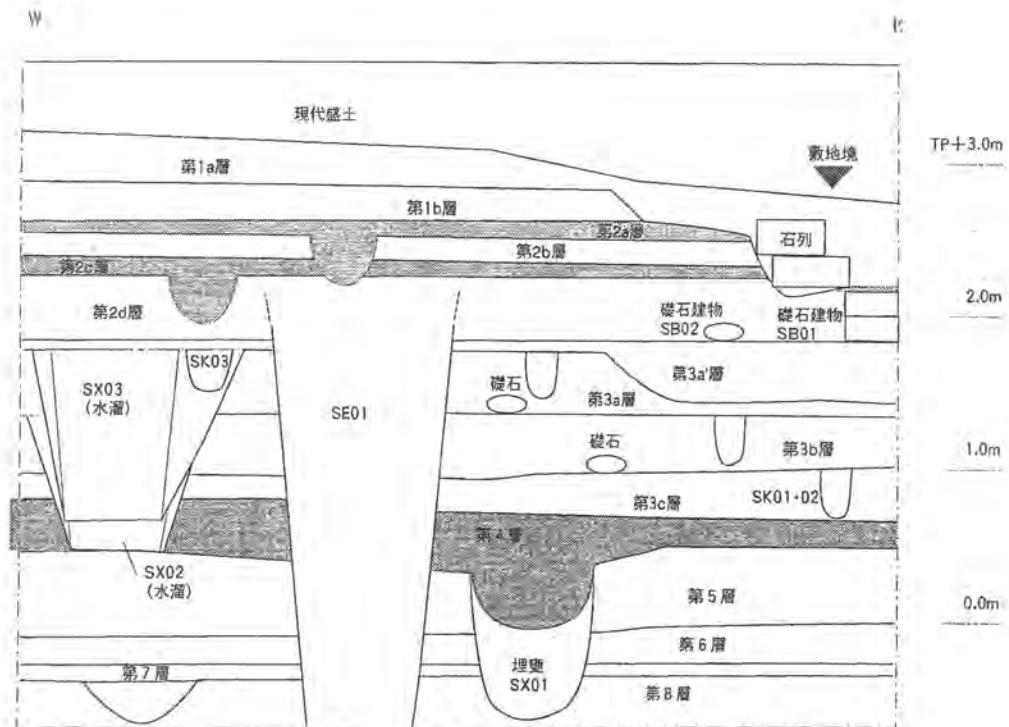


図5 地層断面模式図

細粒砂～シルト層、第2d層は褐～黄褐色中～極細粒砂層である。第2b・2d層はともに層厚約20cmの整地層で、上面が被熱している。第2b層からは18世紀前葉に属するコンニャク印判を施す肥前磁器染付碗が出土しており、下位の第3a層出土遺物が18世紀初頭以前の年代であることを示す。このことから、第2a～2d層の形成は18世紀前半に当たる。付近で記録に残る当該期の大規模な火災は、宝永5(1708)年の道修町大火と享保9(1724)年の妙知焼がある。このことから、第2層は城下町3層に相当し、第2a・2c層は妙知焼と道修町大火にそれぞれ伴う可能性がある。第2b・2d層の上面では断面観察で土壌が確認された。このほか、後述する礎石建物SB01の上を第2c層が覆っている。

第3層：城下町4層に相当し、3～4枚に細分される盛土層である。各層の上面では礎石・ピット・土壌などが検出された。第3a層は下部が層厚約40cmの黄褐色砂礫層、第3a'層とした上部が灰オリブ色粘土質シルト層からなる層厚約20cmの盛土層である。調査区の東北端ではとくに第3a'層が厚く堆積しており、この上面に礎石建物をはじめとする17世紀後半～18世紀初頭の遺構が検出された。第3a・3a'層からは17世紀後半～18世紀初頭の中国製青花、タイ・ベトナム産陶器、国産陶磁器および土器類、骨貝等の食物残渣、金属器、石製品、木製品など、多量の遺物が出土している。このほか、第3a'層からは墨作りに用いる油煙受皿が複数出土しており、注目される。第3b層は層厚約40cmのオリブ褐色粘土質中粒砂～シルト層で、少量の炭・焼土のほか、17世紀中葉～後半の中国製青花、タイ・ベトナム産陶器、国産陶磁器および土器類、石製硯、金属器を含んでいる。本層の上面では、調査区の北半部のほぼ全域で厚さ3cm程度の黄色粘土が認められた。第3c層はオリブ褐色粘土質シルト～灰白色砂礫層が互層となる整地層で、層厚は約40cmである。中国製青花、タイ・ベトナム産陶器、国産陶器が出土しており、大坂冬の陣直後から17世紀前半代の年代を示す。

第4層：層厚約60cmの赤褐色中粒砂～粗粒砂層で、炭・焼土を多量に含む。中国製青花、国産陶器・

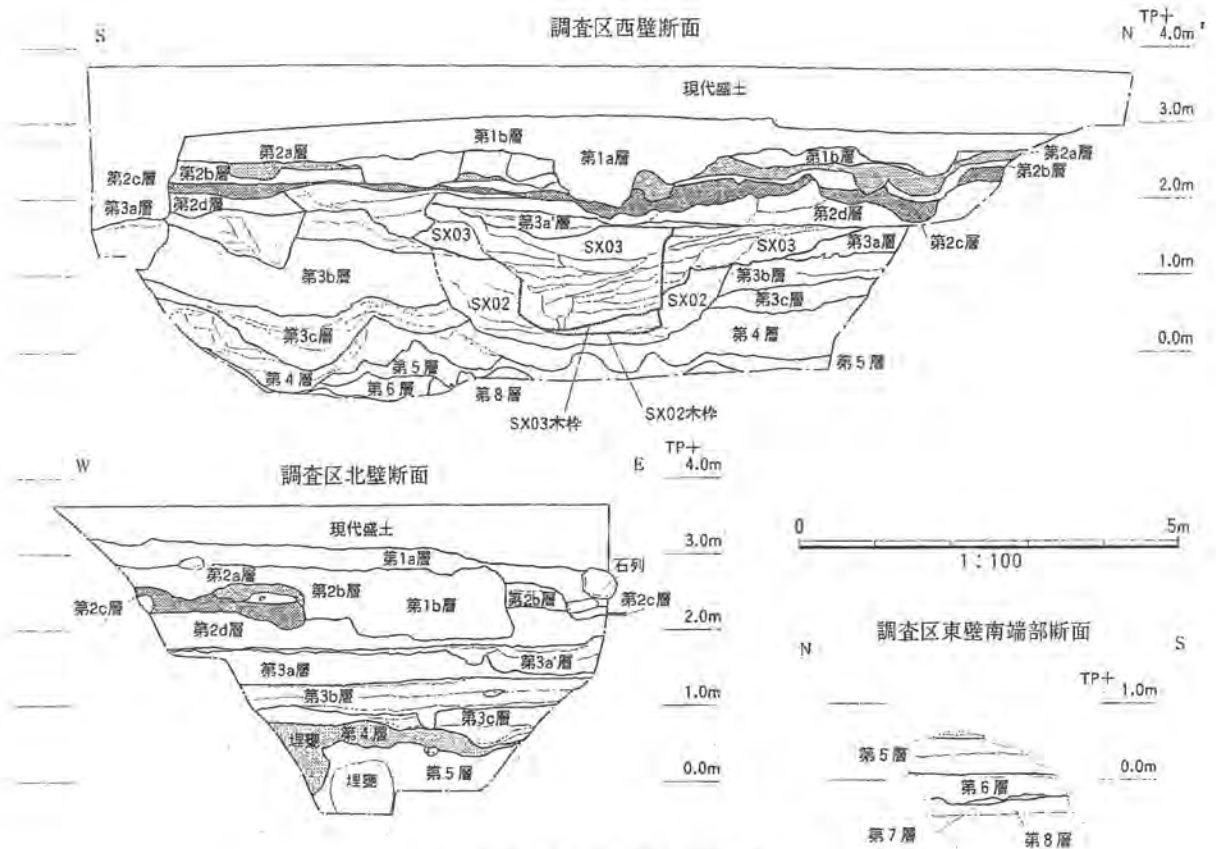


図6 調査区北壁・西壁地層断面図

土器類のほか、繭形分銅が出土している。城下町5層に相当する大坂冬の陣の焼土層である。

第5層：層厚約50cmのオリブ褐色中粒砂～粘土質シルト層で、中国製青花・李朝白磁・肥前陶器・瀬戸美濃焼・備前焼のほか土師器・須恵器を含む。調査区の全域に分布し、城下町6層に相当する豊臣後期の盛土層である。上面は大坂冬の陣の被災面であり、南北に並ぶ埋壙が検出された。

第6層：層厚約20cmの暗オリブ褐色中～粗粒砂質シルト層で、2枚に細分される作土層である。中国製青花・瀬戸美濃焼・丹波焼・軟質施釉陶器のほか、土師器・須恵器を含む。中世後半～豊臣前期に属し、城下町7～8層に相当する。調査区の東半に残存していた。

第7層：層厚約10cmの暗褐色中粒砂質シルト層で、古代～中世の古土壌である。調査区南東の壁面でのみ確認された。

第8層：層厚20cm以上の浅黄橙色中～粗粒砂層で、海浜成層である。本層の上面では、古代～中世と考えられるピットを検出した。上面の標高はTP-0.2m前後であった。

ii) 各層出土の遺物(図12～14)

図13-1～12は第3a'層出土遺物である。1～4は肥前磁器染付である。1・2は碗で、2の外面にはコンニャク印判を施し、高台内には「大明年製」の銘が見られる。3は青磁染付の小杯である。4は皿で、内面には墨弾き技法によって波の文様を描く。5～7・9・10は肥前陶器である。5・6は京焼風陶器で、高台内には刻印が認められる。7は内外面に波状の白刷毛目文を施す碗である。9・10は皿である。9は銅緑釉と透明釉とを掛け分けている。10は口縁部が屈曲し、銅緑釉を施釉している。両者とも見込み内を蛇の目状に釉剥ぎしており、10の内面には砂目跡が認められる。8は産地不明の蓋である。外

面には鉄釉を施している。11・12は土師質土器である。11は油煙受皿である。型を用いて製作されたものとみられ、把手を貼付けている。内面はていねいなミガキ調整で、ススが付着している。12は皿で、手づくねで整形されている。口縁部にはススが付着する。これらは17世紀後半から18世紀のごく初頭にかけてのものとみられる。

図14-13~18は第3b層出土遺物である。13は中国製青花碗で、高台内は露胎である。14・15は漳州窯産青花皿で、底部外面には砂が付着する。16は丹波焼大平鉢である。17は肥前磁器染付皿で、内面には菊花文を有す。18は肥前陶器皿で、内面には砂目跡が残る。以上、第3b層は出土遺物に17世紀前半のものを含むが、国産陶磁器の年代から17世紀中葉に形成されたと考えられる。

図14-19~23は第3b層下部~第3c層上部からの出土遺物である。19はベトナム産長胴甕である。20は漳州窯産青花碗である。21~23は肥前陶器で、21・23は碗、22は小杯である。これらは17世紀前~中葉のものであろう。

図14-24~26は第3c層から出土した肥前陶器である。24は碗、25・26は皿である。これらは17世紀前半のものであろう。25の底部外面には削痕が認められる。ほかに第3c層からは17世紀前半代の肥前磁器が出土しており、本層はこのころ形成されたとみられる。

図15-27~33・37は第4層出土遺物である。27~29は肥前陶器で、27は碗、28・29は皿である。28は内面に胎土目の痕跡が残る。29は絵唐津で、平面が長方形になるよう成形される。内面には鉄釉で植物の文様を描く。30は瀬戸美濃焼志野皿である。31~33は備前焼である。31は小壺である。体部下半は手持ちによるハラケズリを行う。32・33は大型の甕で、外面にはハラ記号が認められる。これらは本来、後述する埋甕遺構に伴っていたものと考えられる。37は三巴文の軒丸瓦である。内面はコビキBの痕跡が認められる。以上、第4層出土の遺物は17世紀初頭前後とみられ、大坂冬の陣直前の年代観を示す。

図15-38はタイ製の四耳壺である。肩部には沈線を巡らす。攪乱から出土した。

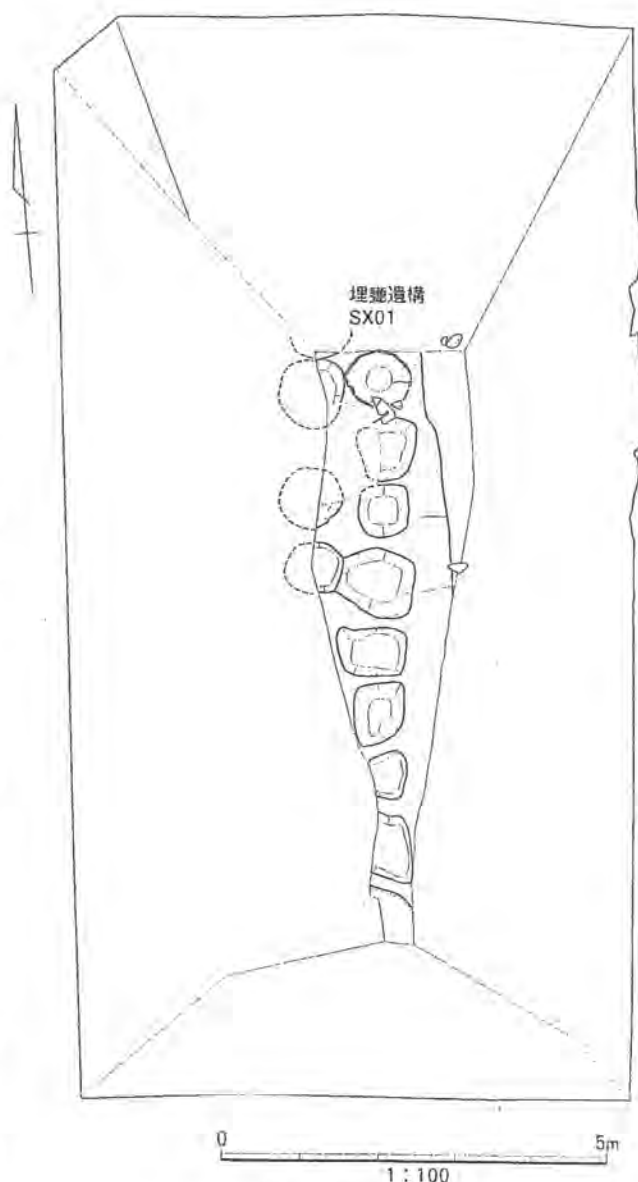


図7 豊臣後期の遺構実測図

iii) 遺構と遺物(図7~16)

a. 古代~中世

第8層の上面ではピットが確認されたが、出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。なお、調査地から道路を挟んで南西の敷地で行われたOJ92-18次調査では、平安時代の井戸や溝が確認されており、今回検出された遺構もこれらと同時期になる可能性がある。また、OJ91-11次調査では東から西へ流れる流路が見つかったが、今回の調査ではこれに相当する地層は確認されていない(図10)。このため流路の北肩は調査区より南に位置し、調査区内は比較的安定した立地であったことが推測される。

b. 豊臣後期(図7)

第5層の上面で南北に並ぶ埋甕遺構SX01を検出した。埋甕の東側は一段高くなっており、本来は蔵の中に土壇を設け、さらにその中に甕を埋めていたことが想定される。甕はすべて備前焼で、2列

以上あったと思われ、北端では肩部まで地中に埋った状態で確認された。甕の中には第4層の焼土が堆積していた。図15-34はSX01の北端に据えられていた大型の備前焼甕である。口縁部は失われていた。内外面はナデで調整している。

c. 徳川期(17世紀前半~後半、図8)

第3c層上面では礎石が確認されたが、建物として復元しうるものはなかった。また、調査区の東北では後世の敷地境に当る地点で拳大の大礫がまとまって見つかった。調査区の南半では礎石は認められず、土壇やピットが分布していた。

SK01は東西1.2m、南北1.2m以上、深さ0.3mの不整形な土壇で、埋土は暗褐色粘土質シルトである。肥前磁器・瀬戸美濃焼志野・備前焼・土師質土器が出土した。図15-35はSK01出土の肥前磁器染付皿である。17世紀前~中葉であろう。

SK02は直径0.6m、深さ0.3mの円形の土壇で、埋土は含礫暗褐色粘土質シルトである。中国産青花碗・肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼天目碗・丹波焼・備前焼・瓦質土器・土師質土器・軒丸瓦・基石が出土し

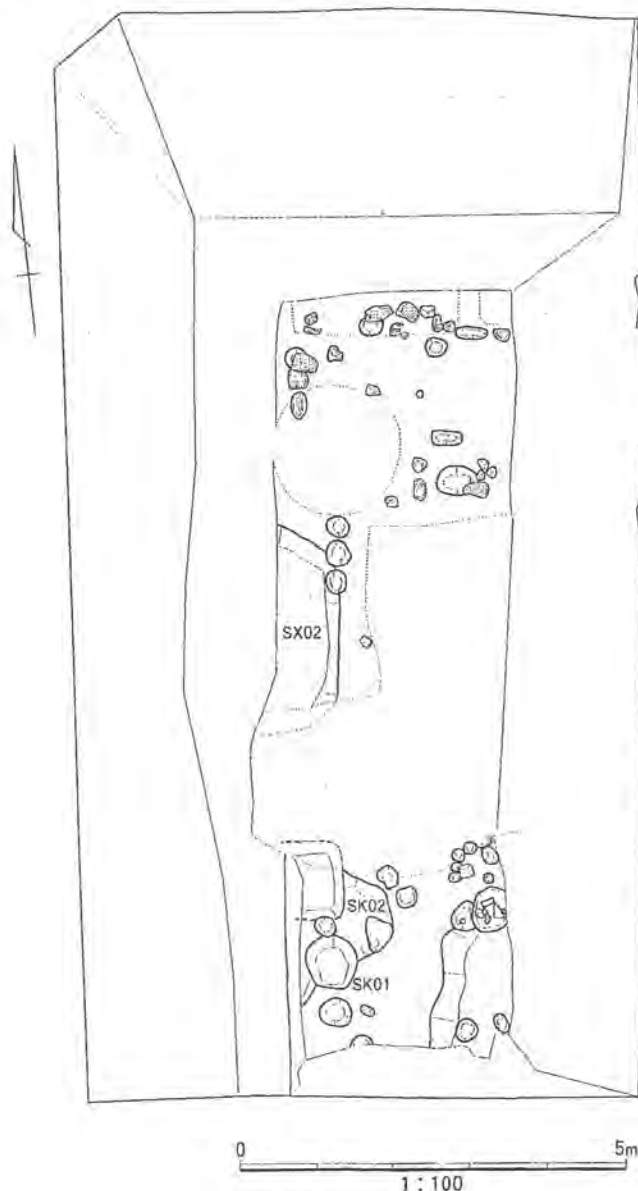
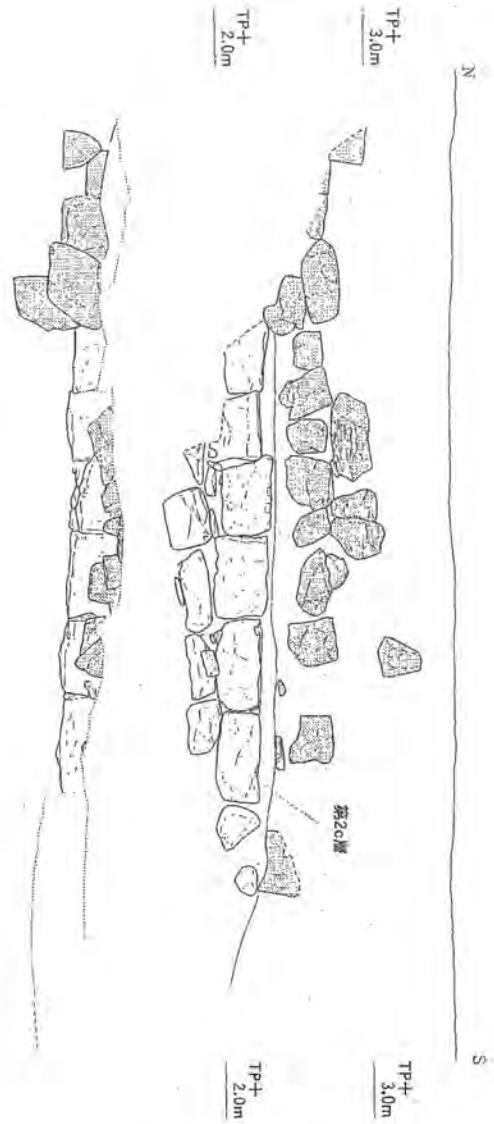
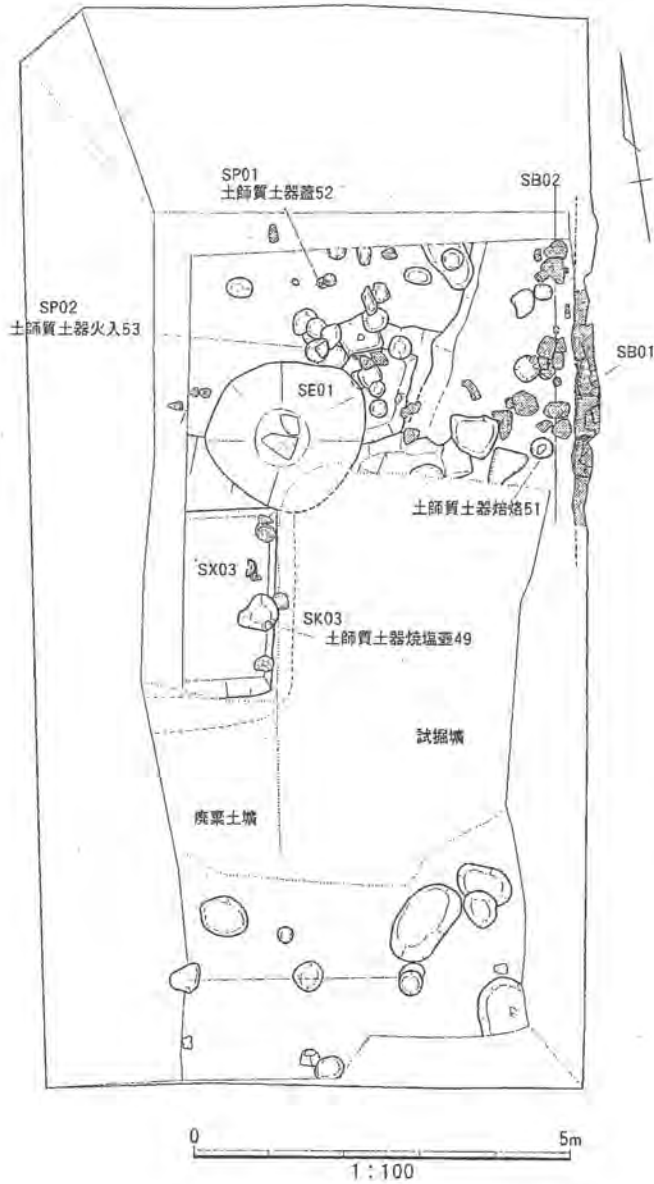

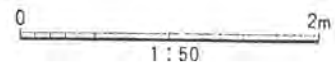


図8 徳川期の遺構実測図1

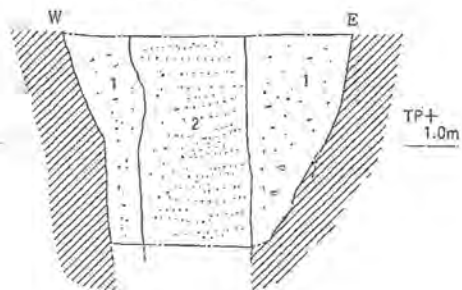


SB01平・立面図

 上層の石列 (水路)



SE01断面図



- 1 : 10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂質シルト(焼土・炭含む)
- 2 : 10YR4/3にぶい黄褐色中～細粒砂



図9 徳川期の遺構実測図2

た。図15-36はSK02から出土した肥前磁器色絵碗である。17世紀中葉と思われる。

第3b層上面では礎石と水溜遺構SX02が確認された。礎石と考えられる石の分布はまばらで、建物として復元することはできなかった。SX02は掘形の南北長3.9m、長東西1.2m以上の方形の遺構で、中には木枠を備えていた。また、木枠の外側には杭を打ち補強していた。埋土は最下層に粘土層が堆積しており、その上部は砂と粘土の互層で、水が溜ったことを示している。同じ位置に作られた水溜遺構SX03に切られており、木枠の規模は明らかにできなかった。SX02からは肥前磁器・瀬戸美濃焼のほか北宋銭の政和通宝(初鑄1111年)、皇宋通宝(初鑄1039年)が出土している。図16-39・40はSX02から出土した肥前磁器である。39は色絵碗で17世紀中葉に属する。40は染付皿で、内面には吹墨技法を組合わせた文様が認められる。17世紀前半であろう。

d. 徳川期(17世紀後半～18世紀初頭、図9)

第3a層上面では礎石建物、第3a層上面では水溜遺構・ピット・土壙・井戸が検出された。

水溜遺構SX03は第3b層上面で検出されたSX02と同じ位置に作られている。断面観察からはSX02と同様に木枠の外側に杭を打って補強していたことが確認された。埋土は水の溜まった状況を示す粘土と砂礫の互層からなり、最終的に人為的に埋戻されていた。埋戻し土上面での規模は、東西1.5m以上、南北4.5m以上で、枠の規模は南北2.4m、東西0.6m以上である。出土遺物は中国産青花・肥前磁器・肥前陶器・瀬戸美濃焼・ベトナム産陶器・丹波焼・備前焼・土師質土器・瓦・金属製品である。SX03が埋った後、砂で埋る土壙SK03が作られる。ここからは18世紀初頭の肥前磁器をはじめとする国産陶磁器のほか、焼塩壺が出土している。図16-41～44・48・50はSX03から出土した。41～44は肥前磁器染付である。41は碗で、外面にはコンニャク印判と手描き文様を組合わせた文様を描く。高台内には「大明年製」の銘が見られる。42は小杯である。43・44は皿である。いずれも内面には墨弾き技法を用いた波の文様を描く。44の高台内にはハリ支えの痕跡が残る。これらは17世紀後葉～18世紀初頭のものであろう。48は用途不明の金属製品で、材質は鉛である。形状は巻き貝に似る。底部は剥離している。50は堺産播鉢である。49はSX03が埋戻された後に掘削されたSK03から出土した土師質土器焼塩壺である。外面には「御壺塩師堺湊伊織」の刻印がある。

調査区の東北では礎石建物が2棟分検出された。東端では南北方向のSB01が認められた。西側の面がそろっていることと、調査区の南へは続かないことから、東へ延びる土蔵の礎石の可能性があると判断した。石は2段分検出されたが、上下で用いられた石の大きさや形が異なり、上段の石の方が大きく、角も明瞭である。このため、礎石は同じ位置で積み直されたか作替えられた可能性があるといえよう。なお、上段の石の上には第2c層と思われる焼土が堆積している。

SB01の西では南北方向の礎石を3間分確認しSB02とした。礎石の周囲には根固めと思われる複数の石が認められた。この建物は西に延びる可能性があるが、東のSB01と一連の建物の基礎となる可能性も否定できない。SB02の礎石付近では底部を欠いた土師質土器焙烙が正位置で出土した。図16-51はSB02の南西で出土した土師質土器焙烙である。口縁部外面には平行タタキを施す。17世紀後半(第3四半期)のものであろう。

また、建物の西では埋土に焼土を含むピットや土壙が数多く検出されている。これらの中でSP01

からは火消壺の蓋が出土し、SP02では火消壺の中に炭が入った状態で出土している。図16-52・53はSP01・02からそれぞれ出土した土師質土器火消壺の蓋と火消壺である。

SE01は掘形の直径2.0m、井戸側の直径0.7mで、枠内を砂で埋戻した後、被熱した凝灰岩の板石で蓋をしていた。井戸側としては一部に木質が残存していたが、形状は不明である。SE01の検出面からの深さは1.5m以上で、底は確認できなかった。また、第3層より上位は重機で掘削したため、

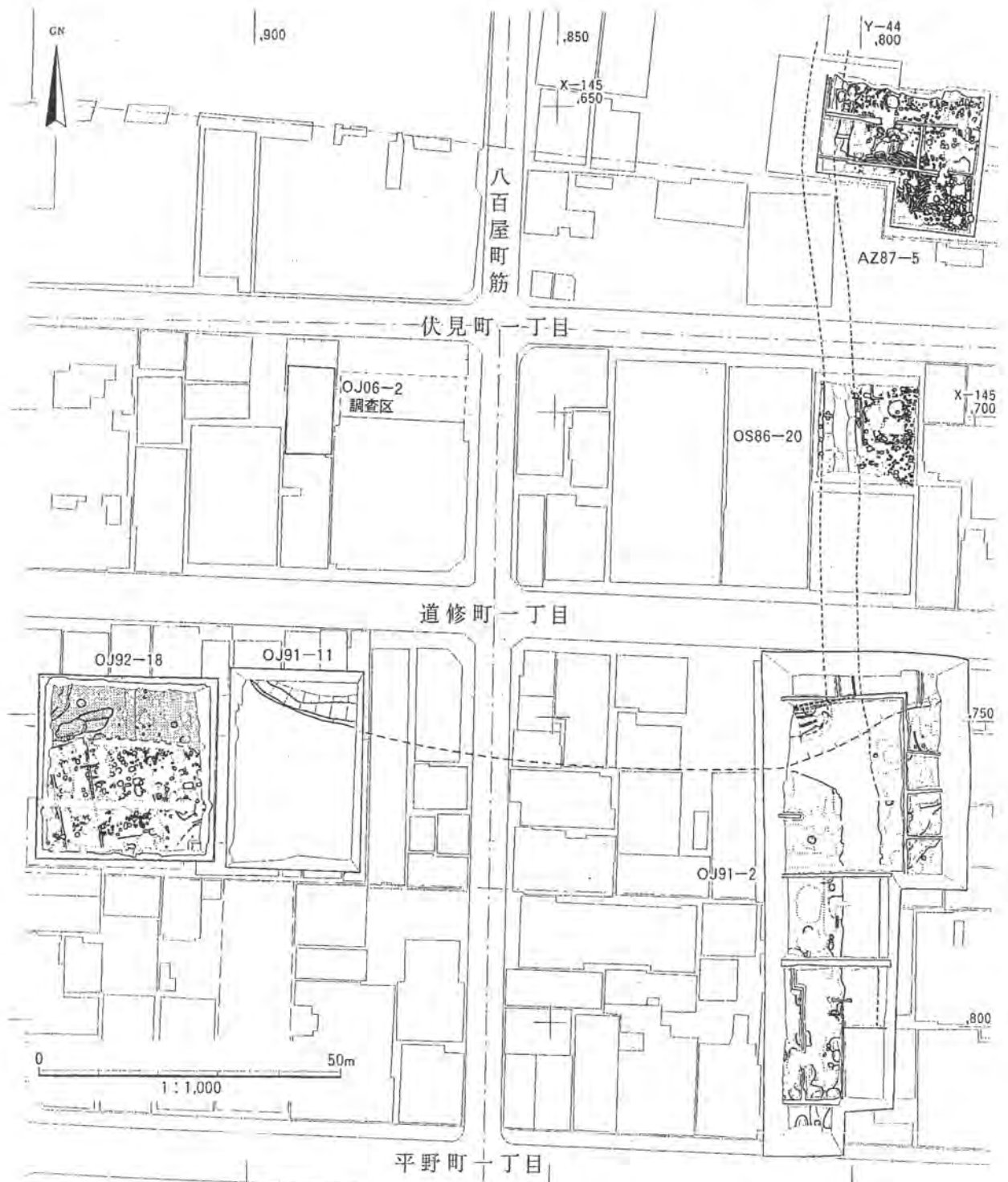


図10 調査地周辺の古代～中世の遺構分布図([大阪市文化財協会2004]に加筆)

SE01の掘込み面は確実に第3a層上面とはいえ、これより上位から掘削された可能性がある。掘形からは17世紀後半以前の国産陶磁器・土器類、埋戻しの砂礫層からは、18世紀前半以前の国産陶磁器・土器類が出土している。図16-45~47はSE01から出土した。45は掘形から出土した漳州窯産青花碗である。17世紀前半のものであろう。46・47は埋戻し層から出土した。46は肥前磁器染付碗で、18世紀前半のものであろう。47は肥前陶器皿で、見込みを蛇の目状に釉剥ぎし、砂目を置いている。内面の2箇所のみ銅緑色の釉を施す。17世紀後葉であらう。

以上、調査区の北側では遺構が多く検出されたが、調査区の中央は江戸時代後半の火災に伴う廃棄土壌で大きく失われていた。これより南では、ピットが東西方向に並び、建物の存在した可能性が高い。ただし、規模や方位は明らかにはできなかった。安政の水帳によれば、調査地の位置する敷地は南北に長く、南が正面になっている(図3)。このことから、調査区の南半に主となる建物があり、北半は庭地や蔵などが存在していたと思われる。

3)まとめ

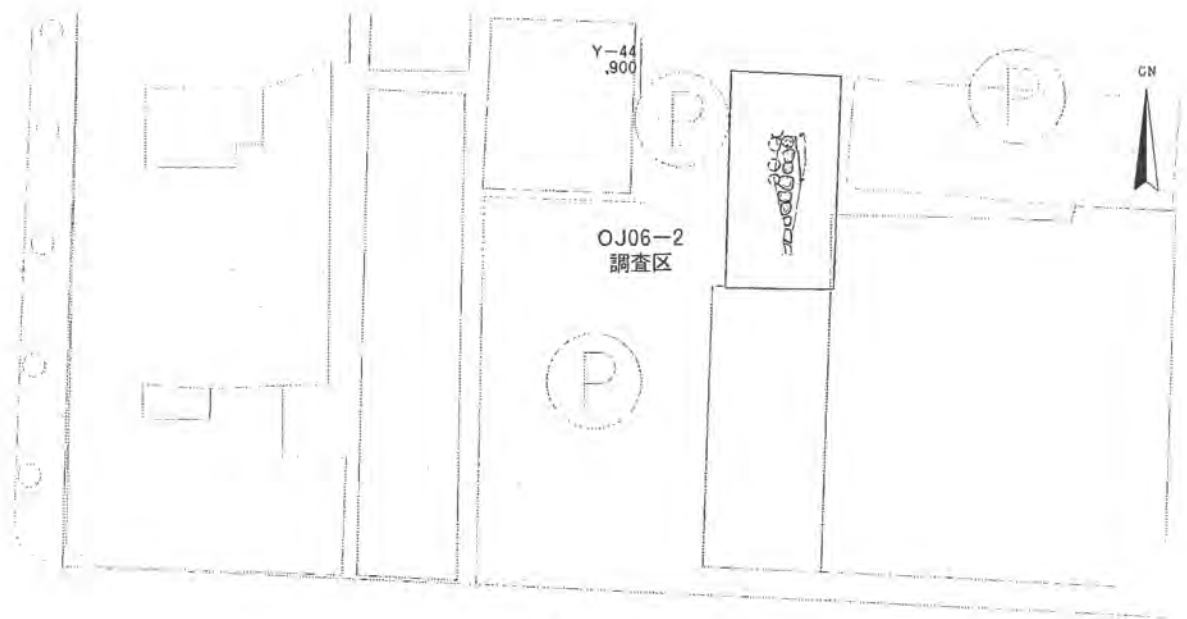
今回の調査では多くの遺構と遺物が検出された。周辺と合わせて調査結果についてまとめてみたい。

まず、古代~中世では時期不明のピットが検出された。これ以下のベースとなる地層は海浜成層であり、南側のOJ91-11調査地で検出された古代以前の河成層は確認されなかった(図10)。このため、川筋は調査区の南を東西方向に横切っており、調査区内にはOJ92-18次調査地で検出されたものと同様な遺構が存在したと推測される。これ以後、中世末~近世初頭までは当地は耕作地として利用されていたとみられる。

次に豊臣前期では、OJ92-18次調査地で建物が検出されているが、今回の調査では遺構を確認できなかった。豊臣後期には複数の整地層が認められた。調査区内では大坂冬の陣直前の埋甕遺構が検出されており、蔵などの施設の中に当たっていたと思われる。敷地の正面は南にあったと思われるが、建物遺構や敷地境は検出しえなかった。OJ92-18次調査地では建物や鍛冶遺構、上質の陶磁器などが検出されており(図11)、調査地内にも蔵を伴う屋敷が存在したとみられる。なお、この遺構面を覆う大坂冬の陣の焼土層は、調査区内では最大で厚さ60cmに及んでいる。

大坂冬の陣の直後から周辺と同様に当地の再開発が開始された。調査区内には水溜遺構や蔵とみられる建物が17世紀中葉から18世紀初頭にかけて存在しており、前段階と同じく敷地の裏手に当り、貯蔵施設が存在したと推定される。中でも、17世紀後葉と思われる油煙受皿の出土は、付近で墨作りが行われたことを示す資料として注目される。類例としてはOS91-64次調査で見つかった17世紀後半の墨屋の例が知られる[大阪市文化財協会2003]。今回の出土例はやや後出するものとなろう。なお、調査区の東北で検出された石列と礎石の中間を南北に通るラインは、現状の地図上でも建物の壁に沿っており(図12)、これより上位で検出された用水路の施設と考えられる石列も同じ位置に作られていることから、このラインが敷地境に当たるとと思われる。また、安政年間の水帳でもこの位置に敷地境が記されている(図3)。ただし、この位置がいつまでさかのぼるのかは明らかにしえなかった。

以上のように、各時代にわたってさまざまな調査成果が得られたが、調査面積が狭かったこともあつ



道修町一丁目

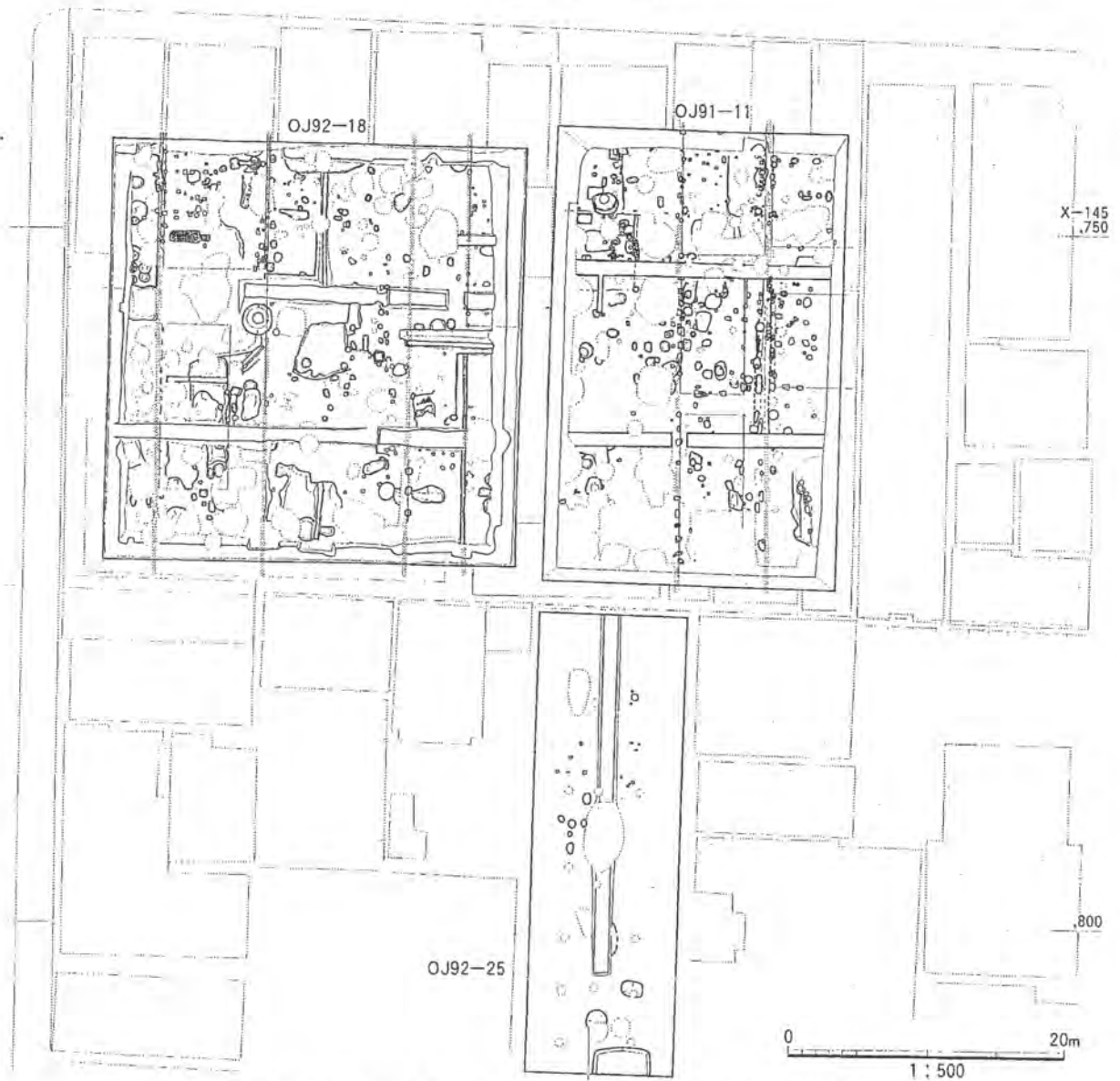


図11 調査地周辺の大坂冬の陣直前の遺構分布図([大阪市文化財協会2004]に加筆)

て、調査地内での遺構や遺物の全容が明らかになったとはいいがたい。今回得られた資料については今後、周辺で行われる調査の結果を合わせて総合的に検討する必要がある。

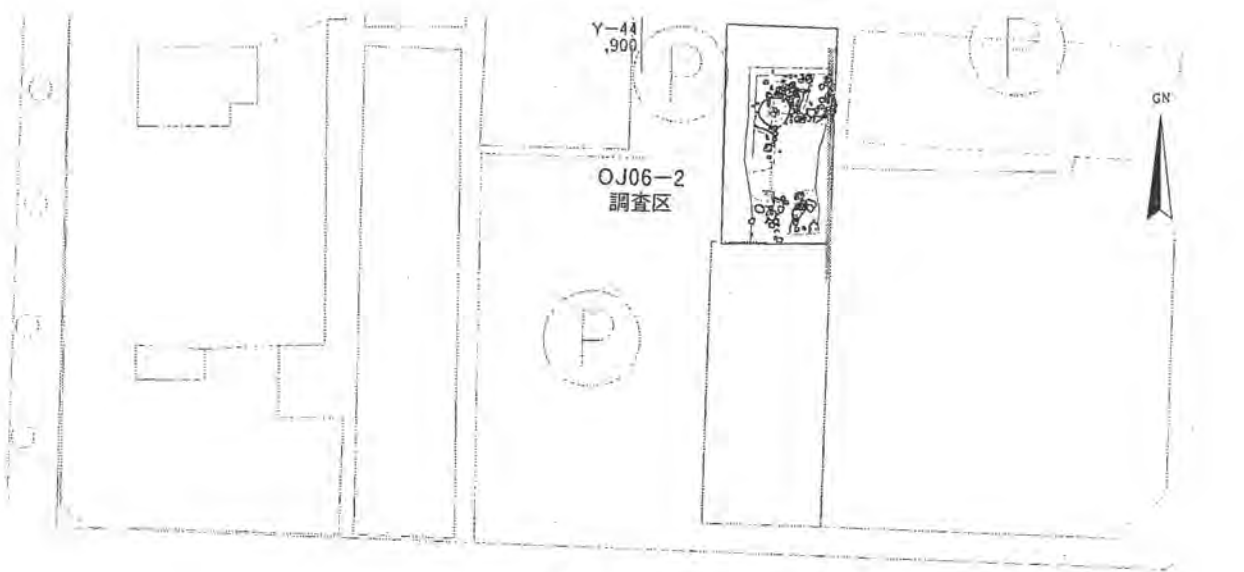
参考文献

内田九州男1989、「豊臣秀吉の大坂建設」：『よみがえる中世』2 平凡社、pp.34-55

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅱ

大阪市文化財協会2004、『大坂城下町跡』Ⅱ

矢内昭1982、「船場の町並みあちらこちら」：『大阪春秋』第31号



道修町一丁目

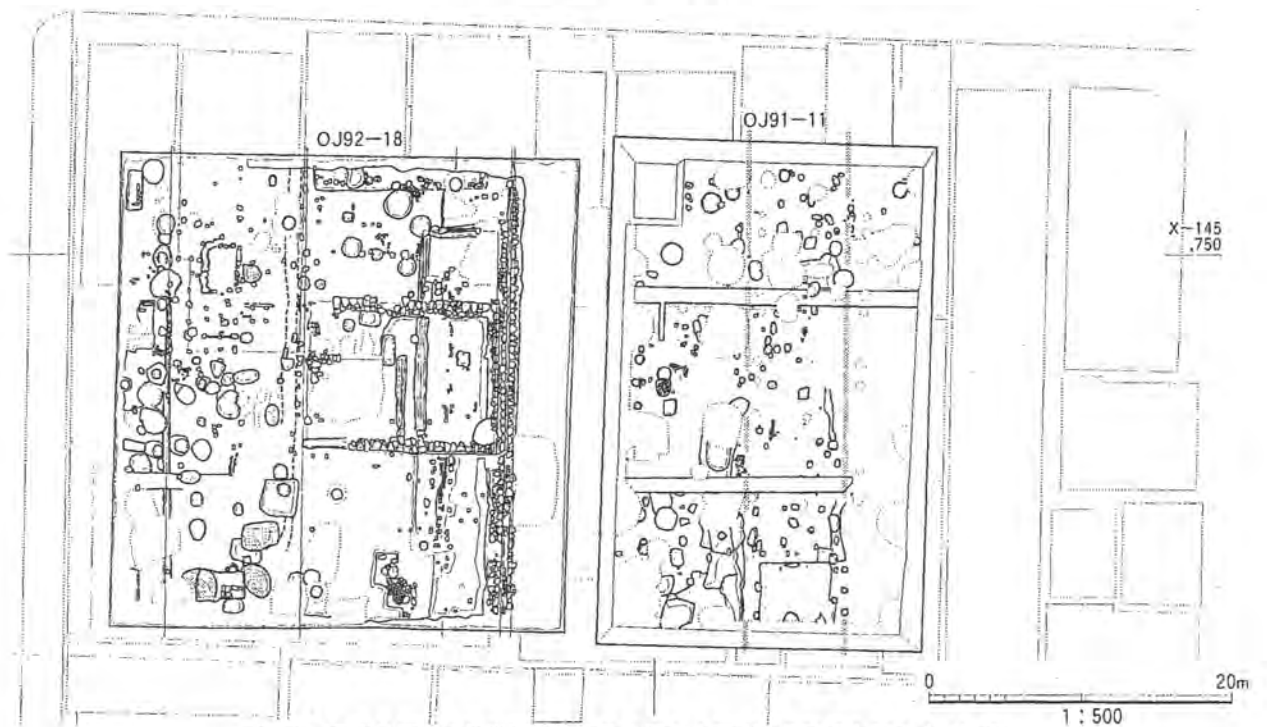


図12 調査地周辺の徳川期の遺構分布図([大阪市文化財協会2004]に加筆)

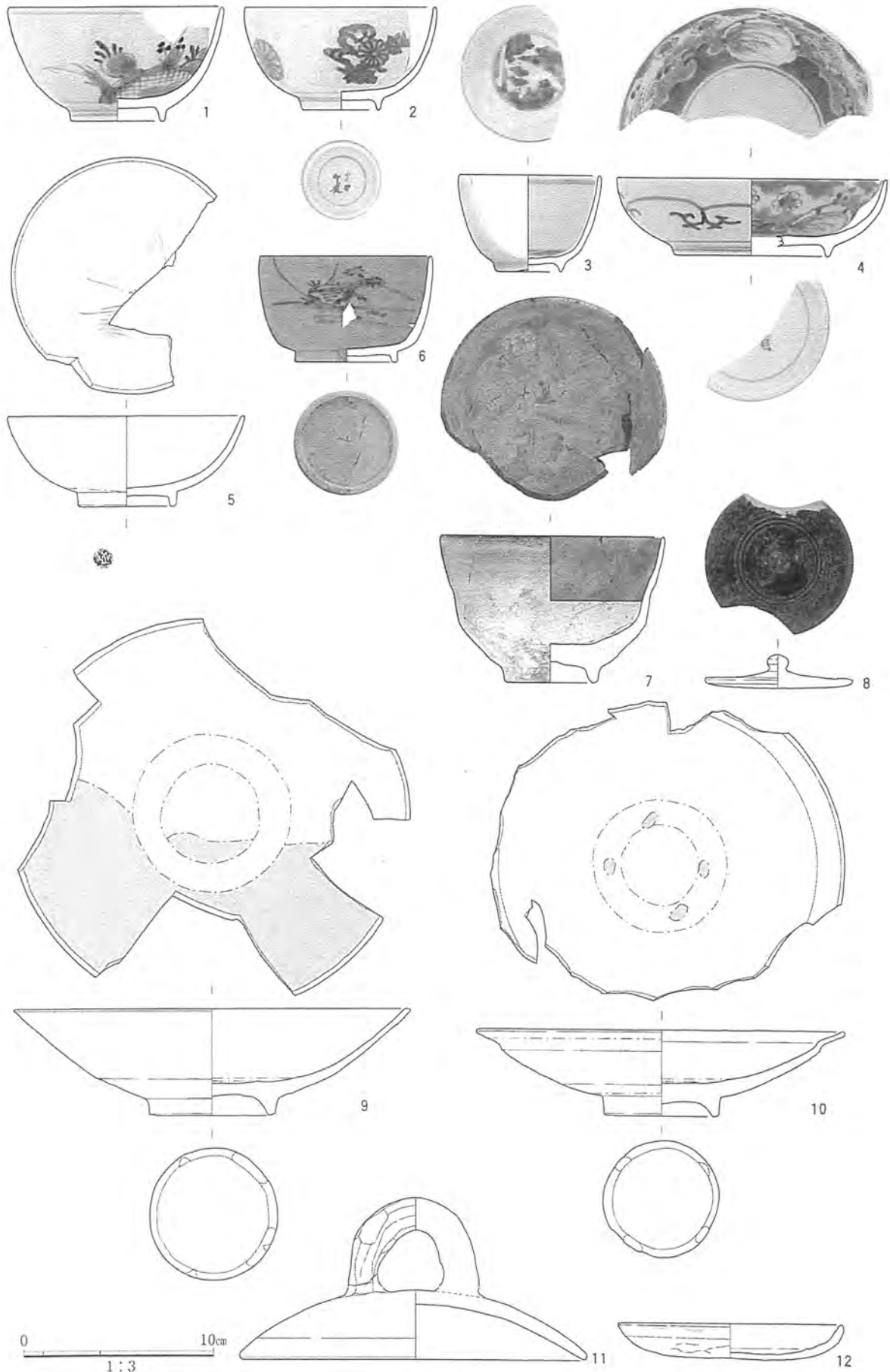


図13 各層出土の遺物実測図
第3a層(1~12)

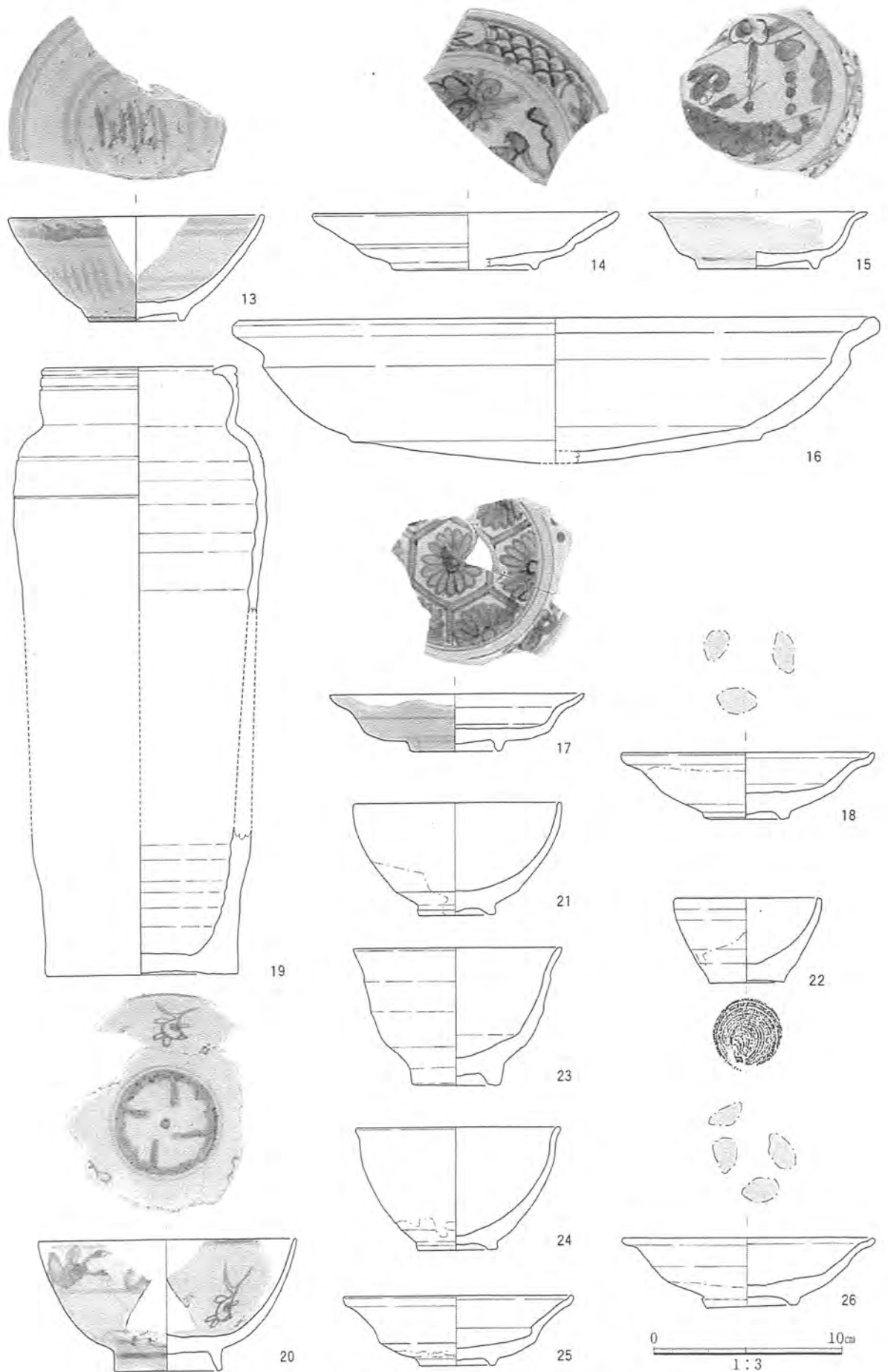


図14 各層出土の遺物実測図
 第3b層(13~18)、第3b層下部~第3c層(19~23)、第3c層(24~26)

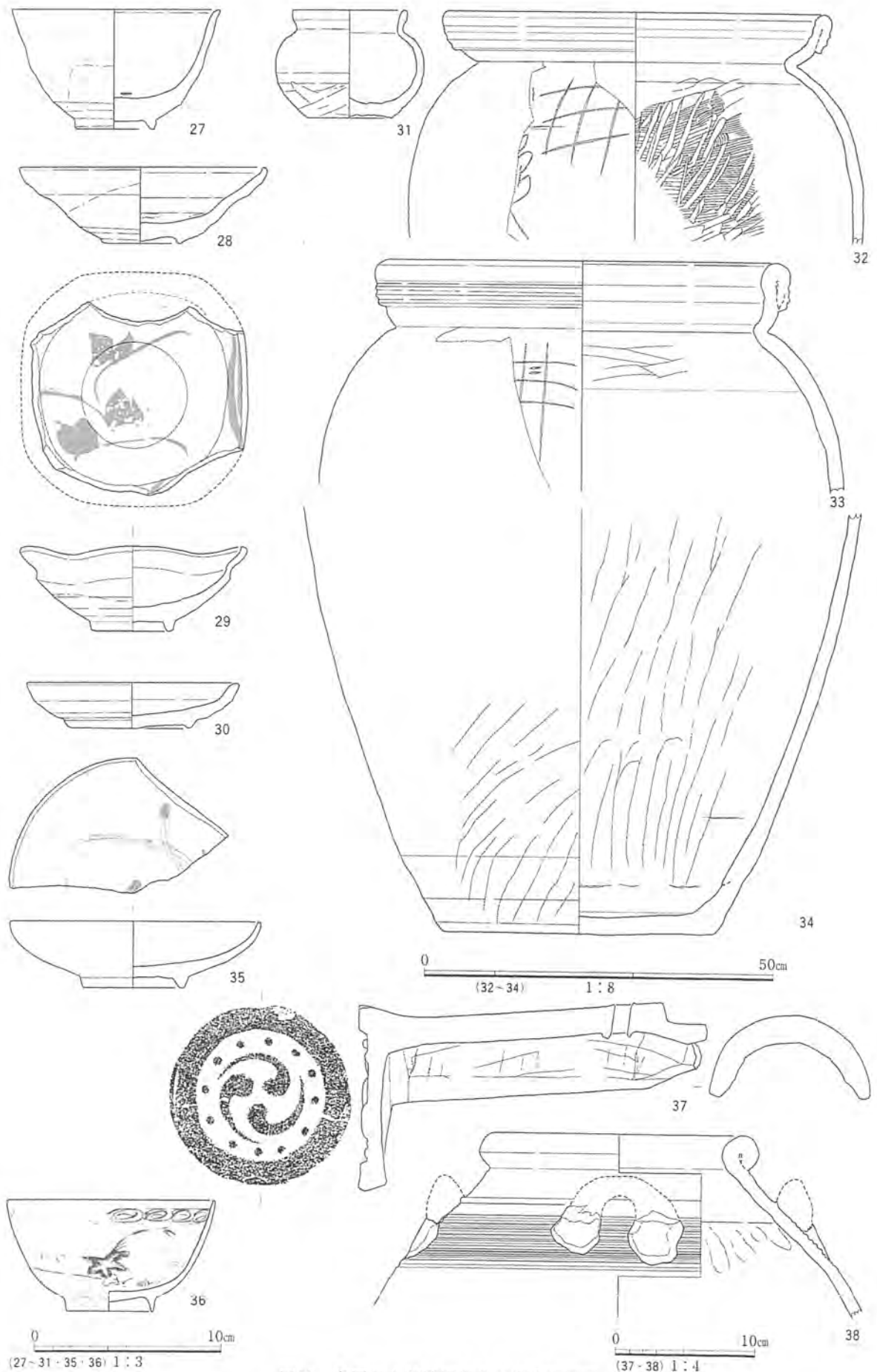


図15 各層および遺構出土の遺物実測図
 第4層(27~33・37)、SX01(34)、SK01(35)、SK02(36)、攪乱(38)

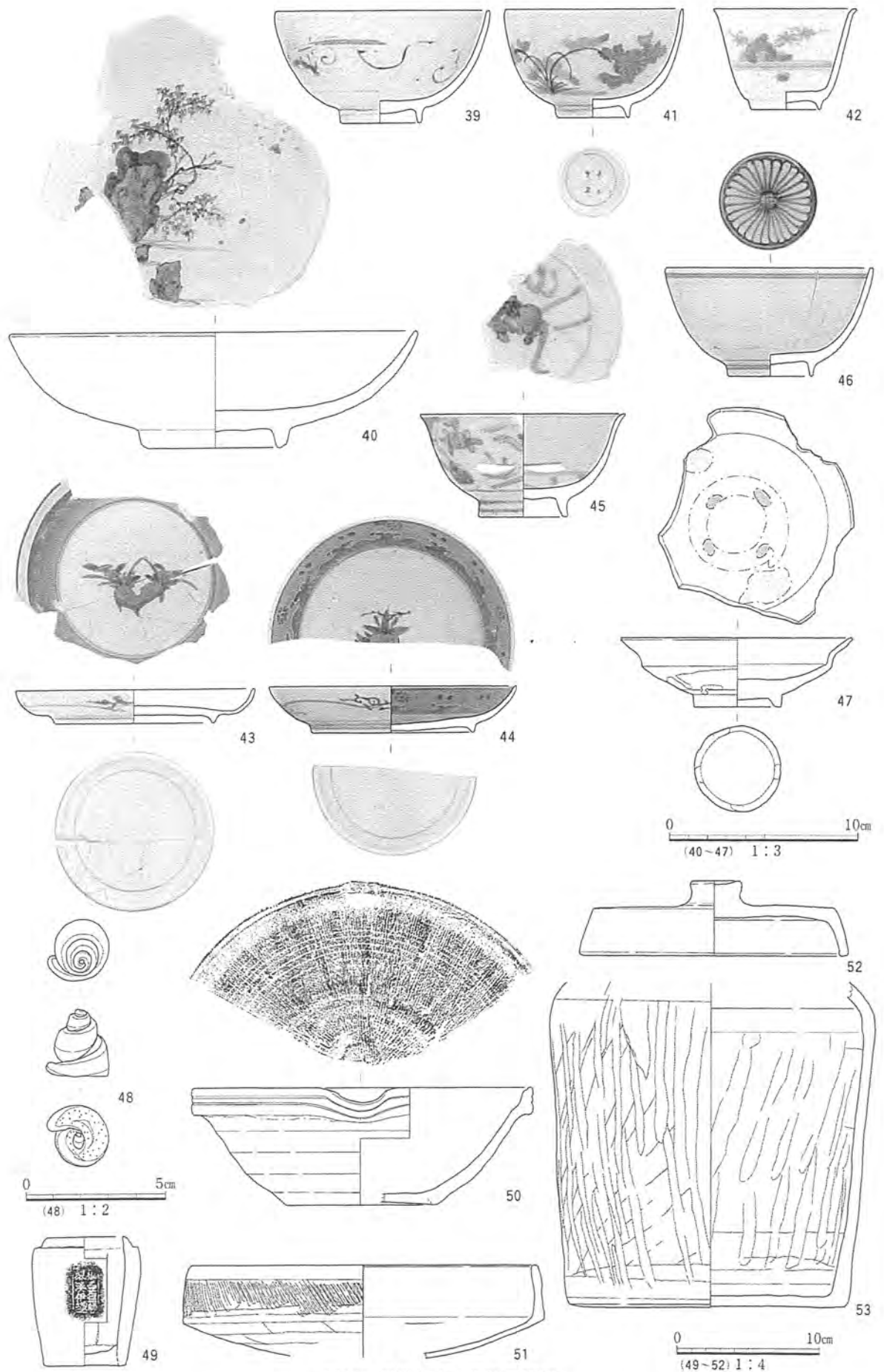


図16 遺構出土の遺物実測図
 SX02(39・40)、SX03(41~44・48・50)、SK03(49)、SE01(45~47)、
 SB02(51)、SP01(52)、SP02(53)

調査区西壁地層断面
(北東から)



北半部第3a層上面遺構検出状況
(西から)



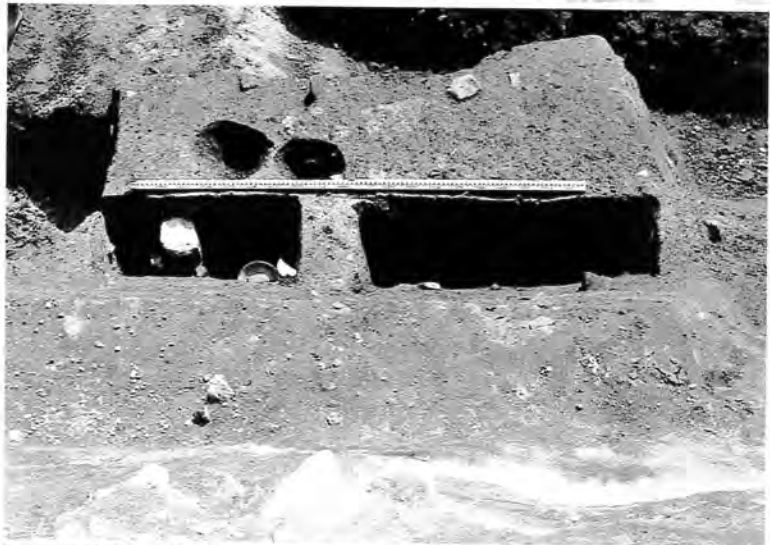
第3a層上面遺構検出状況
(南から)



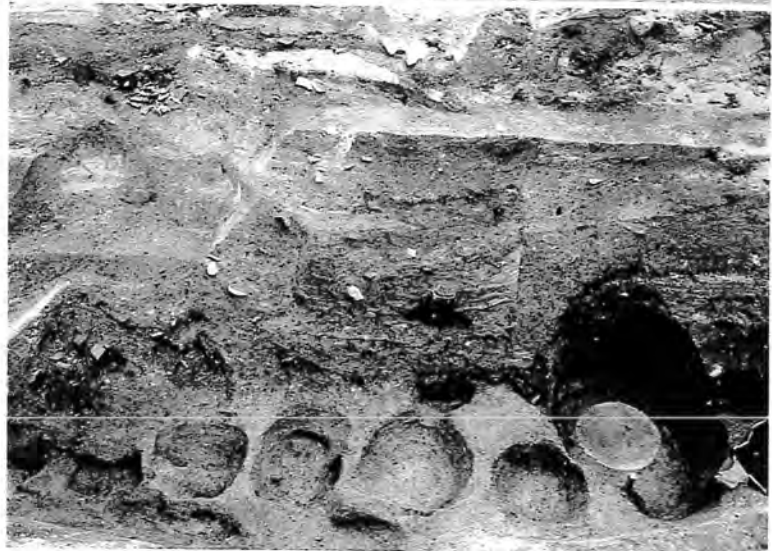
第5層上面遺構検出状況
(南から)



SX03遺物出土状況
(西から)



SX02・03断面
(東から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ06-3)報告書

調査個所 大阪市中央区伏見町1丁目63-1他
調査面積 600m²
調査期間 平成18年5月15日～平成18年6月28日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

調査箇所は東横堀川を西に渡った豊臣氏大坂城外の大坂城下町跡に位置し(図1)、周辺には古代から近世にかけての遺構・遺物を検出したOS86-20・AZ87-5次調査地等がある。また当敷地内では、大正13(1924)年に三越呉服店が新築された際、地下からさまざまな遺物が掘り出され、蛸壺と分銅形土製品が地下2m未満から、また四天王寺創建瓦と同範である無子葉単弁八弁蓮華文軒丸瓦の破片と蛸壺が地下6mほどのところから出土した[喜田貞吉1924]といわれる。



図1 調査地位置図

当敷地全体が建設予定地となったが、敷地の大半に旧建物の地下室があり、調査対象は地下室の存在しなかった南西部のみとなった。2005年12月に大阪市教育委員会が南西部の2箇所を試掘調査し、その結果、本調査を行うこととなった(図2)。調査地は現在、伏見町という町名だが、江戸時代は「本鞆町」と呼ばれ、豊臣後期から江戸初期にかけて魚市場が立地した場所である。

5月15日から5月23日まで重機掘削を実施し、以後は人力掘削による調査を行った。調査区東側3分の1と中央部北側は建物基礎が深くまで及んでおり、ほぼ最下面(第12層上面)のみを調査するに留まった。6月28日に現地における全ての調査を完了した。

なお、調査時には磁北を方位の基準とし、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いた。水準は本文・挿図中ではTP±〇mと記す。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第0層：コンクリート片を多量に含む現代整地層である。

第0.5層：宝永5(1708)年の道修町大火による焼土層である。

第1層：層厚10～40cmの明黄褐色中粒砂を用いた整地層である。上面でSK01などのゴミ穴を検出した。

第2層：層厚5～30cmの慶長19(1614)年の大坂冬ノ陣の焼土層である。下位層の南北石垣を境と



図2 調査区位置図

して敷地に高低があり、高い西敷地は層厚が薄く、低い東敷地は層厚が厚い。整地のため客土として搬入された焼土層もあると思われるが、細分層は不可能である。上面に礎石がある。

第3層：層厚10cmの黄灰色中粒砂の整地層で、塙列建物の中と周辺に施されている。

第4層：南北石垣を境にする西敷地を嵩上げするために施工された整地層で、層厚30~50cmを測

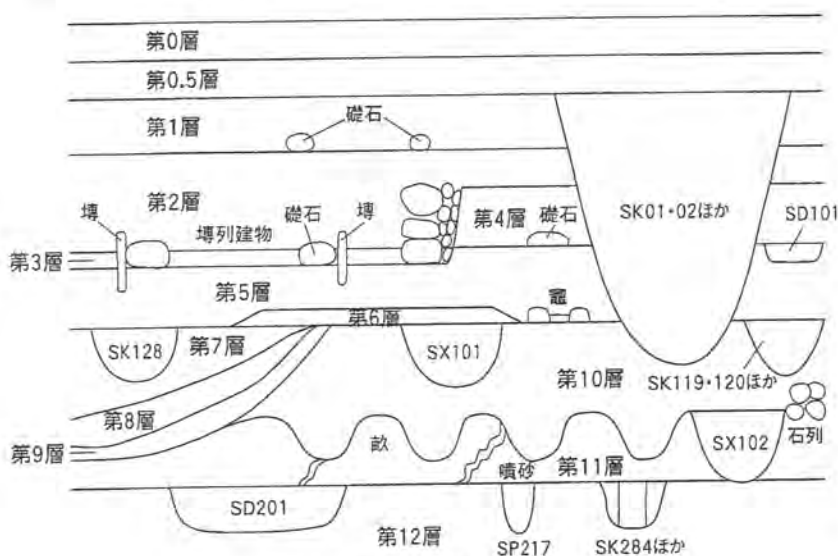


図3 地層と遺構の関係図

る。にぶい黄色シルト偽礫を含む粗粒砂を主とするが、層厚5cmほどの黄褐色シルト層や炭層等を挟在する。

第5層：東・西敷地にわたって見られ、東敷地では東にいくほど薄くなる。層厚10~40cmで、明黄褐色中粒砂を基本とし、層厚5cmほどの黄褐色シルト層を挟在する。

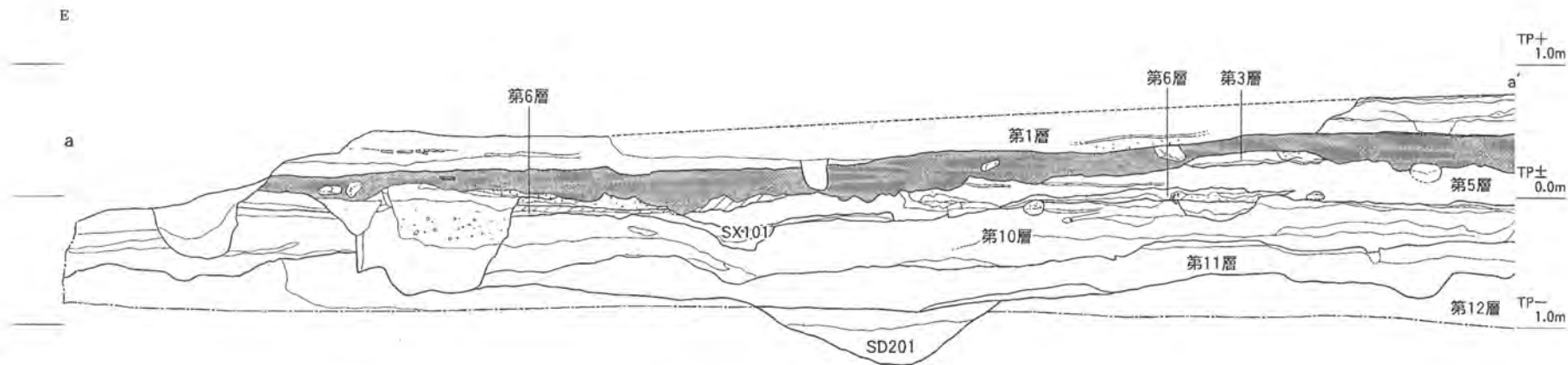
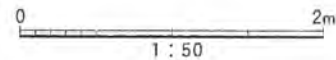
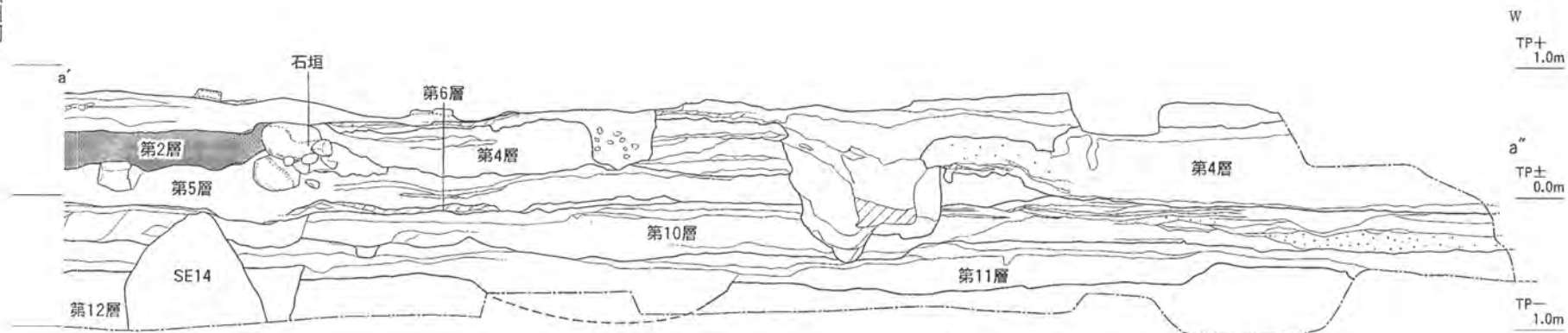


图4 南壁断面图



第6層：層厚5cmほどの炭層や焼土層、にぶい黄褐色中粒砂混り細粒砂の薄層が集って、層厚10cmほどになっている。炭層は炭の粉が雨水などで流れ、再堆積してラミナ状をなす。第10層上面と共に生活面であり、金属加工等、火を扱う作業が行われたことによって形成された。

第7層：以下の第8・9層と共に、図4の断面図には現れない調査区中央部の凹地(図8)に連続的に堆積した有機物からなる層である。層厚は5~20cmを測る。第7~9層は包含する遺物から見ても、ほとんど時期差がない。瀬戸美濃焼志野皿や肥前陶器を含むことから豊臣後期に属する。木簡・下駄・魚骨などが多く出土した。

第8層：層厚10~30cmのにぶい黄色の細粒砂~粗粒砂混りシルト層で、シイラ・サメ科・ハタ科・コチ科などの魚骨を含む。

第9層：層厚15~40cmの有機物からなる層である。自然木・木製品、マダイ・ヒラメなどの魚骨を含む。

第10層：層厚30~60cmの灰黄褐色細粒砂混り中粒砂~粗粒砂の整地層である。慶長3(1598)年の船場開発時のものである可能性が高い。上面に魚名付札木簡を含むゴミ穴やスラッグを含むSX101などがある。

第11層：層厚10~30cmのにぶい黄褐色細粒砂層で、調査区西半は本層による畑の東西畝群がある。本層上面まで達する噴砂がある。

第12層：灰黄褐色中粒砂混り細粒砂の水成層だが、5世紀頃の土器片を含む。調査区東部南端で深掘りしたところ、TP-1.05~-0.85mにかけて上方に向かって粗粒化する傾向が見え、河川の河口付近であったと推測される。また、TP-1.05m以下で甲殻類の巣穴の化石が見られ、汽水域であったことがわかる。

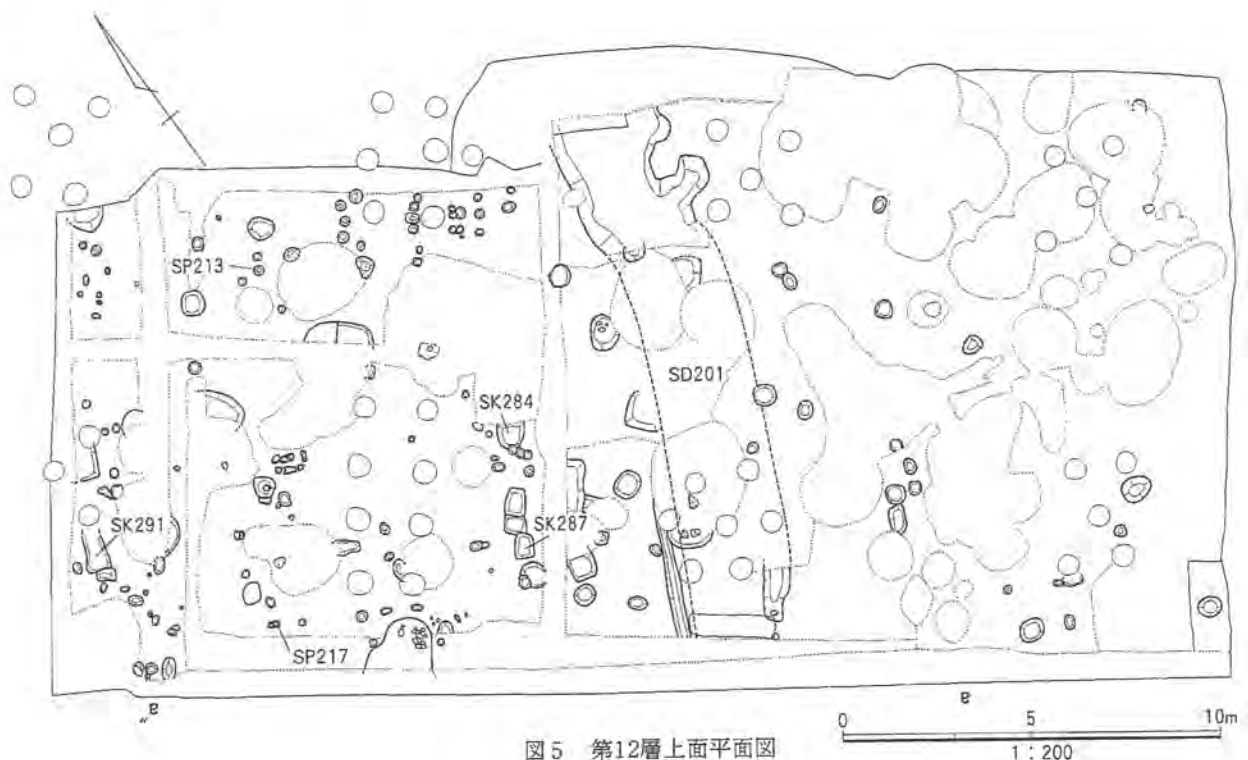


図5 第12層上面平面図

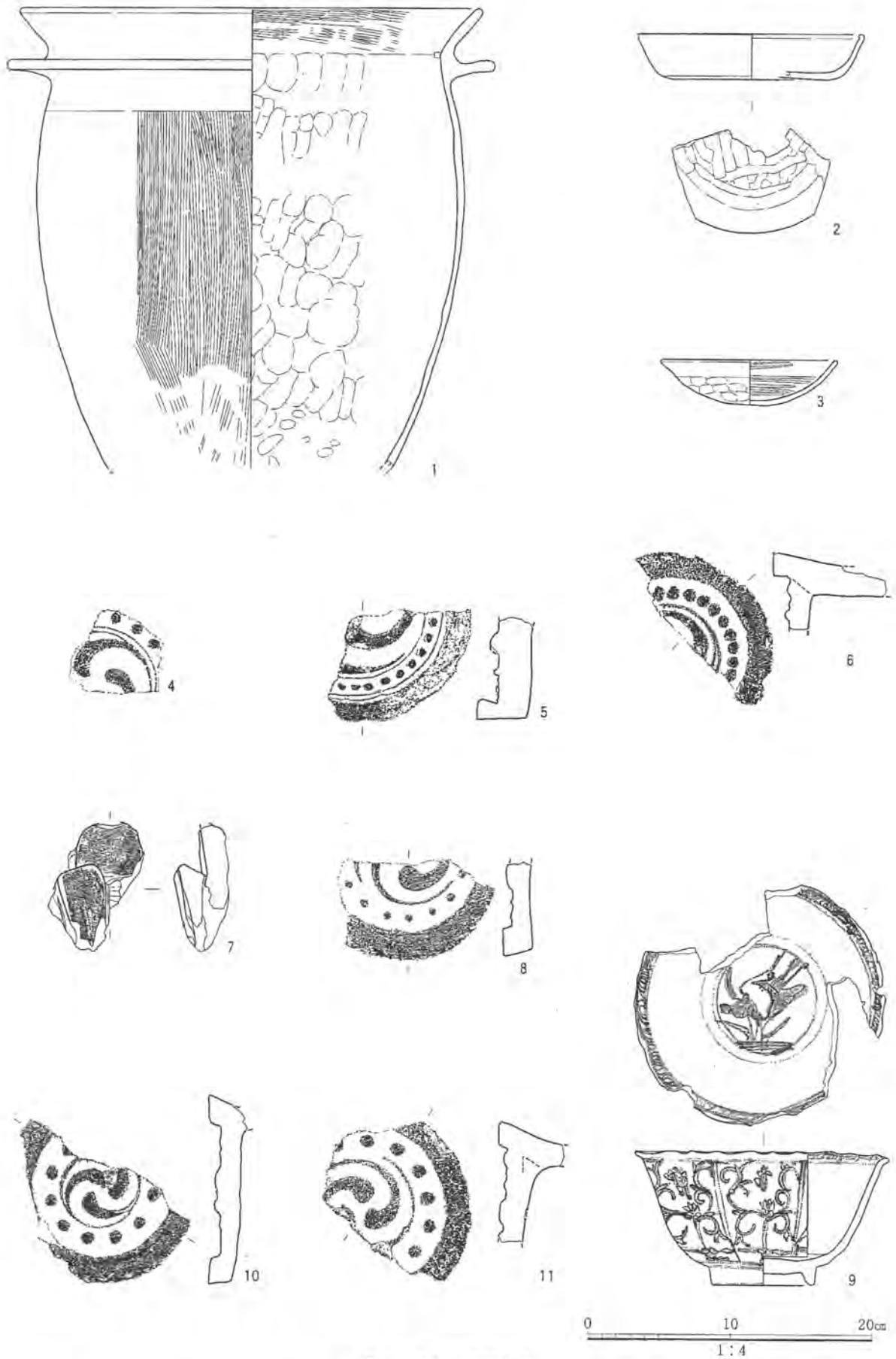


图6 遺物実測図(1)

第11層(1~3)、SD201(4)、石列(5)、SK156(6)、第10層(7)、第9層(8)、SK170(9)、第2層(10·11)

ii) 遺構と遺物

a. 第12層上面の遺構とその出土遺物(図5・6)

SD201 やや蛇行しながらも南北方向に流れる溝で、幅2～3m、深さ0.5mを測る。軒丸瓦4、瀬戸美濃焼碗・備前焼甕・瓦質土器などが出土した。

SP213 直径0.25m、深さ0.05mのピットで瓦質土器鉢が見つかった。

SP217 直径0.2m、深さ0.05mのピットで土師器片が出土した。

SK284 平面形が方形を呈する土壇で、一辺0.8m、深さ0.3mを測る。滑石製石鍋・土師皿・瓦質羽釜・平瓦等が出土した。

SK287 長さ0.7m、幅0.5m、深さ0.2mの平面が長方形の土壇で、土師皿や平瓦が見つかった。

SK291 長さ1m以上、幅0.7m、深さ0.1mの平面が長方形の土壇で、須恵器・土師器・瓦器椀が出土した。

b. 第11層上面の遺構とその出土遺物(図6・7)

畑の畝群 調査区西半で、上端幅0.2～0.5m、高さ0.2m、畝間溝幅0.4～0.7mを測る12条の東西畝を検出した。方位はほぼ真東西である。上面に噴砂が見られる。出土遺物の年代からみて、本層上面が慶長大地震(1596年)時の地表面であると考ええる。

石列 結晶片岩などの変成岩や鬼瓦、軒丸瓦5を用いて粗雑に積み上げた南北石列で、境界を示すものと考えられる。石垣のように石の後端を下げて据えたものではない。仮に石の最大面を正面と考えると、西から東へ低くなる傾斜面に貼り付けたことになり、東が外側、西が内側となる。畑等の所

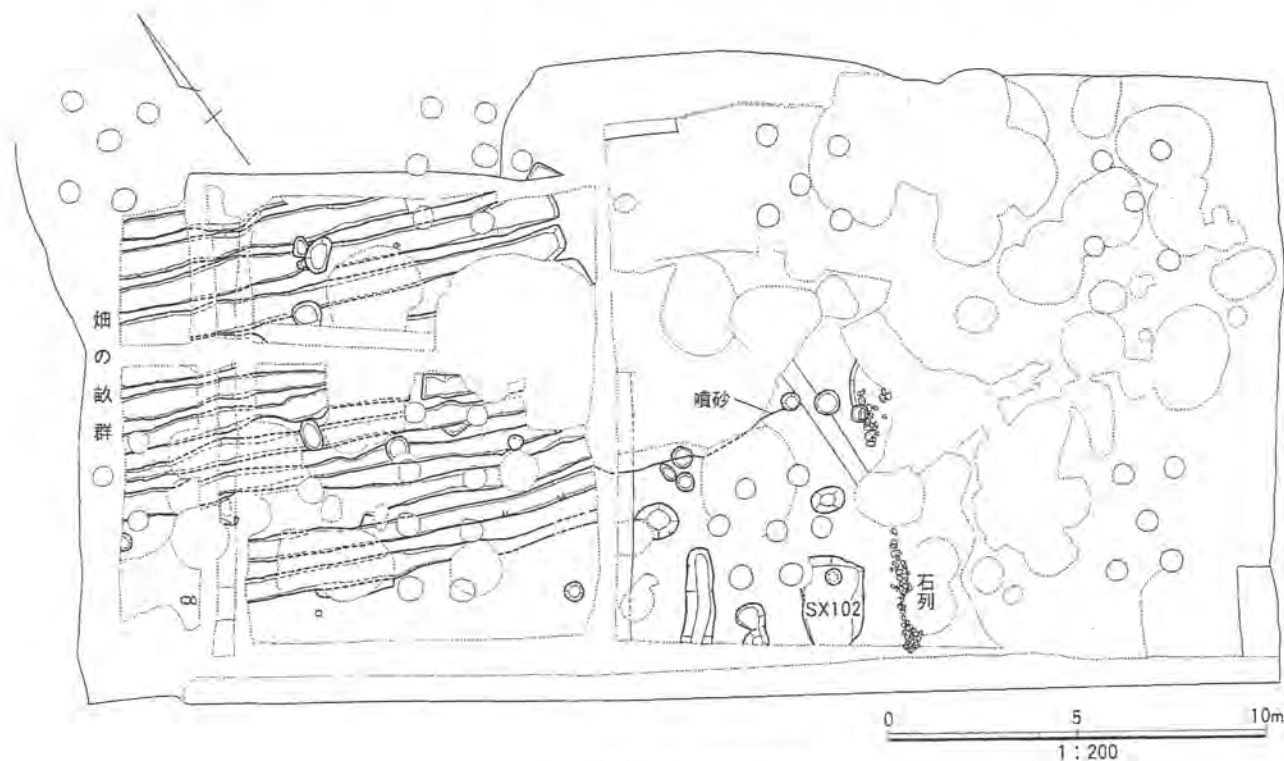


図7 第11層平面図

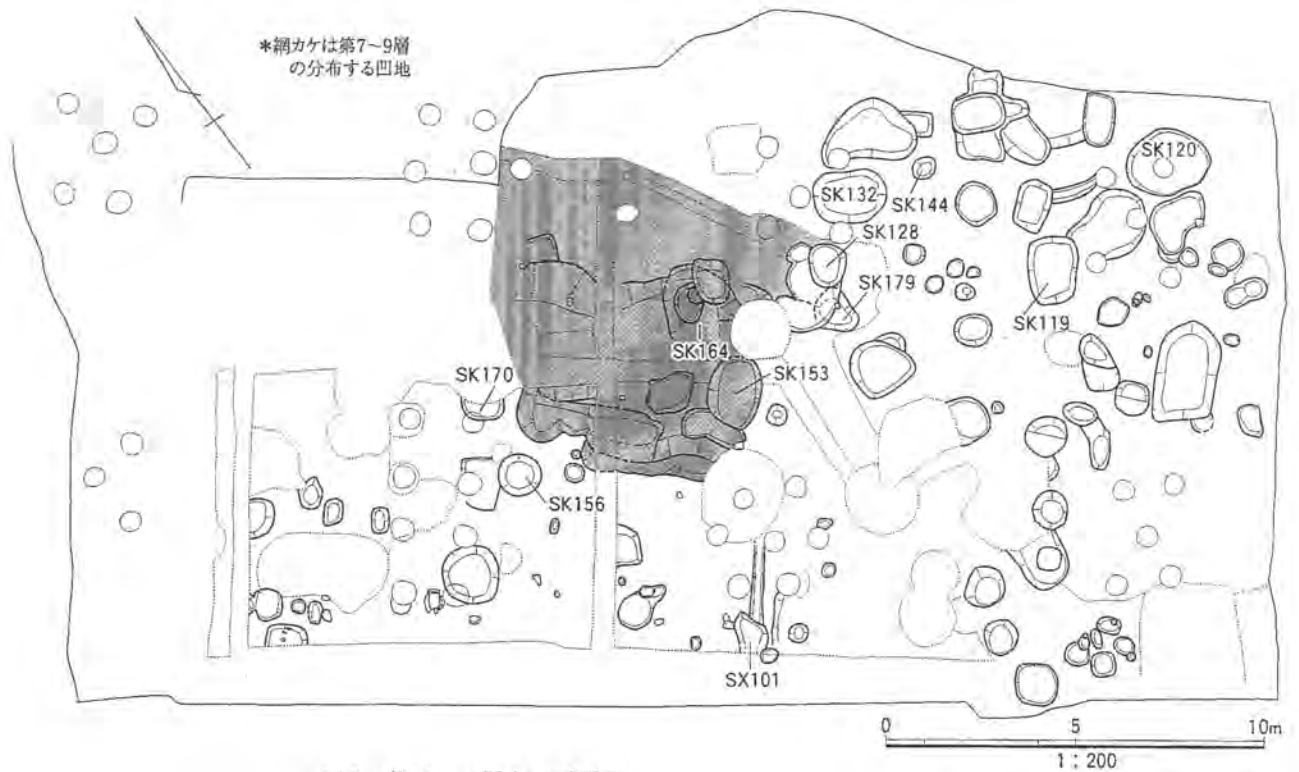


図8 第10・7層上面平面図

有地境に設けた可能性がある。軒丸瓦5は珠文帯を内・外2本の圈線で囲んだもので、OJ91-2次調査地出土の軒丸瓦[大阪市文化財協会2004、遺物番号203・204]と同範の可能性はある。

SX102 長さ2.4m以上、幅1.6m、深さ0.3mの平面が長方形の土壇底に、凝灰岩製の直径50cmの五輪塔空輪を据えたものである。瓦器碗・常滑焼甕・瓦質三足付羽釜などが出土した。

c. 第10層上面の遺構とその出土遺物(図6・8・9・17)

魚名付札木簡や魚骨等を出したゴミ穴として、SK119・120・132・144・153・156・164・170・179がある。いずれも長方形もしくは楕円形をしている。

SK119 長さ1.8m、幅1.3m、深さ0.4mの土壇で、一端を圭頭状にした木札に6つの花押を墨書した木簡が出土した。

(以下、[]内に木簡の法量を示す。単位はmm。長さ×幅×厚さ。イタリックは残存長。木簡の表記や型式名は[木簡学会2005]の凡例によった。)

・「 (花押)(花押)(花押) ・「○東□□□ [108×60×7.5] 022型式
 (花押)(花押)(花押)」

SK120 長径2.3m、短径1.7m、深さ0.5mの平面が楕円形の土壇で、直径30cmの曲物の中に子イルカの遺体を入れ蓋をしたものが出土した(図9)。

SK132 長径2.0m、短径1.3m、深さ0.5mの平面が楕円形の土壇で、漆碗70、下駄72、鑢座金具(写真)のほか、「 □屋久左衛門尉」の墨書をもつ桶蓋が見つかった。



図9 SK120出土曲物
内の子イルカの骨

SK144 直径0.6m、深さ0.3mの平面が円形に近い土壙で、漆碗69が出土した。

SK153 長径2.0m、短径1.5m、深さ0.9mの平面が楕円形を呈する土壙で、井桁の記号をもつ桶側板76のほか、以下の木簡が見つかった。

- ・「< はまち 卅五
□ふく九つ^{入合}」
- ・「< □□彦左衛門」 [133×28×9] 032型式
- ・「< 百入大た□」
- ・「< □ □」 [142×23×4.5] 033型式

SK156 直径1.1m、深さ0.3mの平面が円形の土壙で、軒丸瓦6(図6)が出土した。

SK164 長径2.3m以上、短径2.0m、深さ0.8mの平面が不整楕円形の土壙で、次の木簡が出土した。

- ・「< めちか五十入」
- ・「< 久右衛門」 [129×21×5] 032型式
- ・「< □□
二郎兵衛 五連四□[×]」
- ・「< □右衛門□ 善×」 [128×22×3.5] 033型式
- 「上百五十入」 [148×23×3.5] 051型式
- ・「< (屋号) 源次兵衛殿」 [203×18×1.5] 033型式
- ・「< 大かます□^(百カ)
小かます□[×]」
- ・「< □ □×」 [88×30×2] 033型式
- 「たい三十五□入」 [116×20×2] 051型式

SK170 長さ1.1m、幅0.6m以上、深さ0.5mの土壙で、青花鉢9が見つかった。

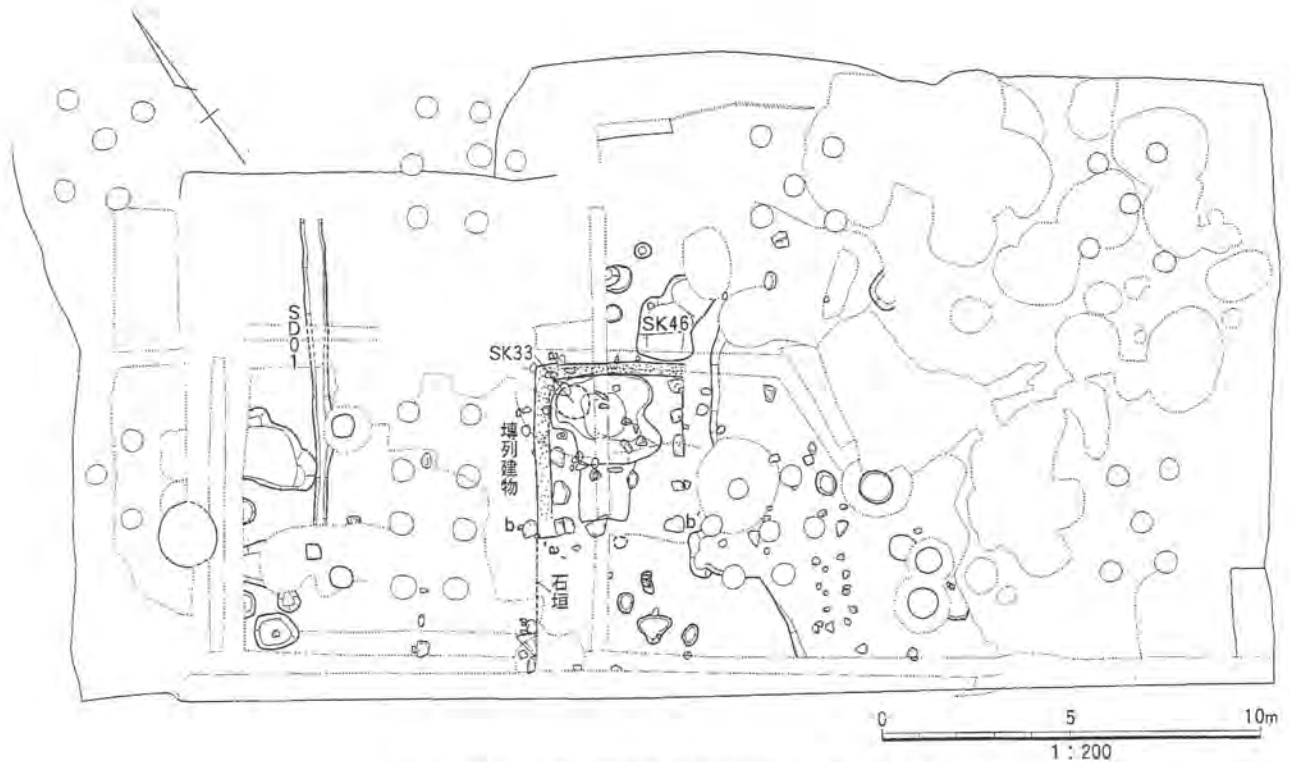


図10 第3・4層上面平面図(SK33のみは第2層上面遺構)

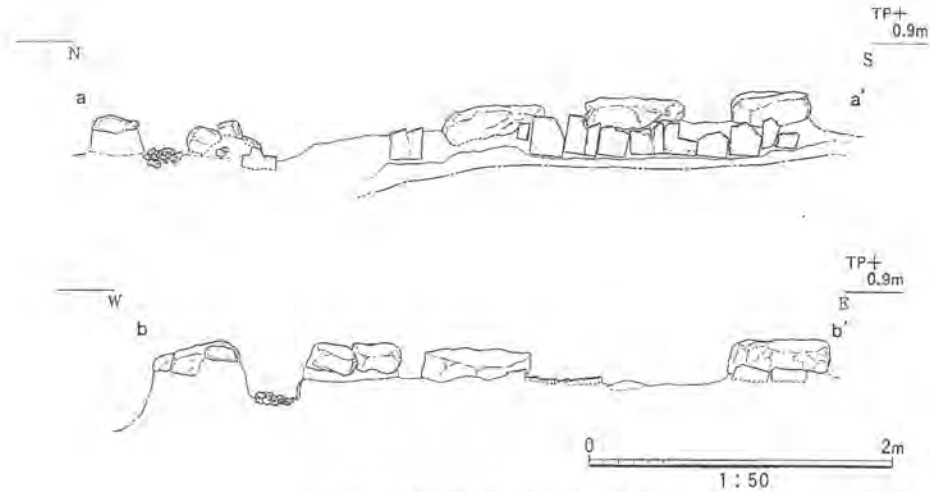


図11 樽列建物西・南面立面図

SK179 長さ1.3m、幅1.1m、深さ0.4mの平面が不整楕円形の土壙で、次の木簡が出土した。

「あち百五入」

[113×18×4.5] 051型式

d. 第7層上面の遺構とその出土遺物(図8・17)

ゴミ穴であるSK128などがある。

SK128 長さ1.5m、幅1.2m、深さ0.7mの平面が楕円形を呈する土壙で、下駄71・73と、以下の木簡が見つかった。

・「くえそ三十

・「 □ □
□ □」

[134×57×6] 033型式

□ □
□ □」

e. 第3・4層上面の遺構(図10・11)

樽列建物 南北4.2m、東西3.6mの範囲で重厚な礎石を並べて外郭を造り、礎石の外側に向いた面に埴を粘土で貼付けている。建物内側は後世に攪乱されたため、礎石配置等不明である。西と北側に幅0.4mの溝を掘り、玉石を詰め暗渠にしている。

石垣 東西の敷地を分ける段を形成した石垣で、裏込め石をもつ。最大3段あり、高さ0.5mを測る。

SD01 長さ8m以上、幅0.3～0.5mの南北溝で、敷地境をなすと思われる。

f. 第2層上面の遺構とその出土遺物(図10)

SK33などのゴミ穴があった。

SK33 直径0.9m、深さ0.5mの平面が円形を呈する土壙で、ニホンジカの椎骨が出土した。

g. 第1層上面の遺構とその出土遺物(図12～17)

SK01・02・07・14・18などのゴミ穴とSE14の井戸がある。

SK01 幾度も掘返され、底面は小さな土壙の集合体を呈するが、上面でいくつかの切合いを検出した以外は切合いは認められなかった。東西8.5m、南北4.2m、深さ1.3mを測る。軒丸瓦21(図12)、瀬戸美濃焼皿23・碗24・志野皿25、肥前磁器碗26・27・皿28、肥前陶器碗29～34・36・37・片口鉢

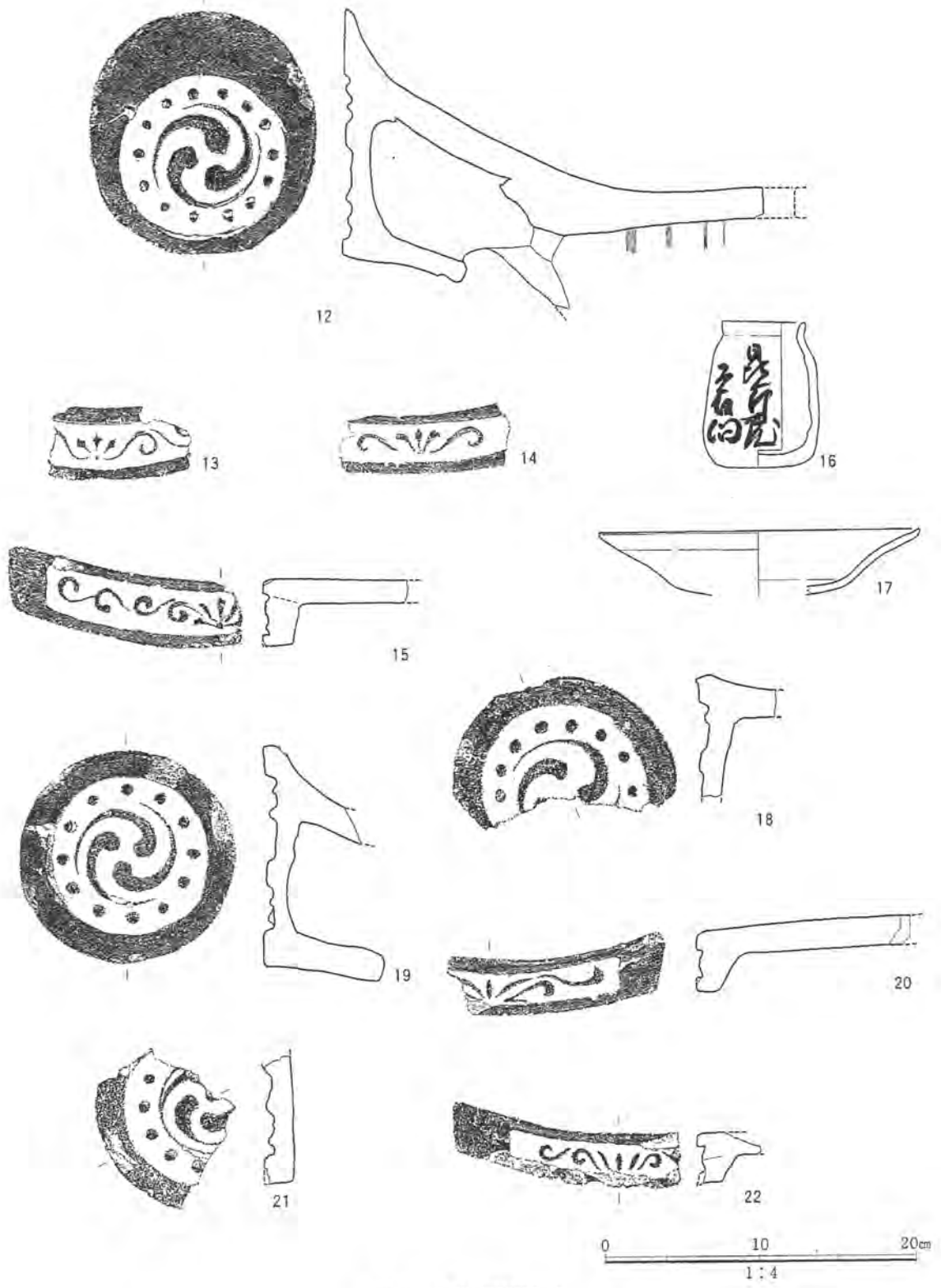


图12 遺物実測図(2)

第2層(12~15·17·18)、第4層(16)、第1層(19·20)、SK01(21)、SK18(22)

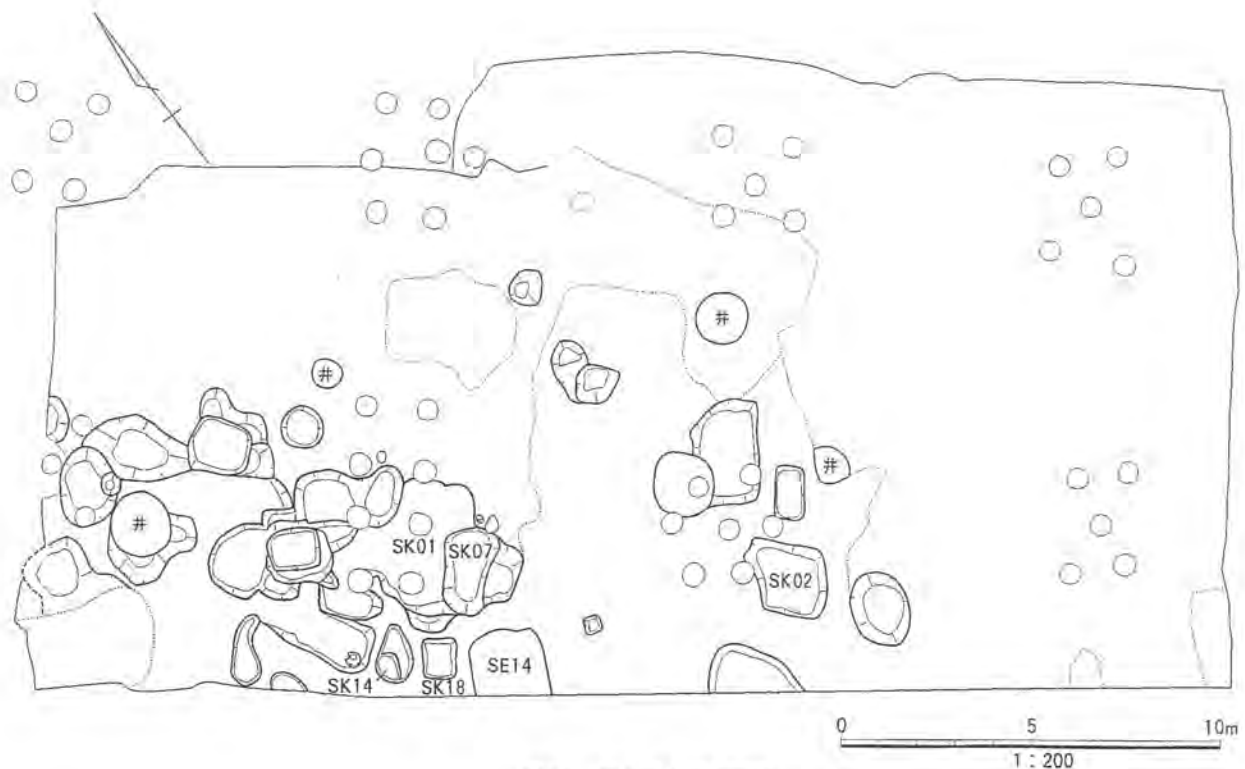


図13 第1層上面平面図

35・皿38～43(図14)・45～52・播鉢53・54(図15)、朝鮮白磁皿44(図14)、丹波焼播鉢55～57・大平鉢58、備前焼播鉢59、焼塩壺60、土師皿61～65、炮烙66、土師質十能67、瓦灯68(図16)が出土した。肥前陶器は全て砂目で、砂を削り落した痕跡がない。焼塩壺60は「天下一堺ミなど藤左衛門」の刻印をもつ。

SK02 一辺2m、深さ0.7mの平面が不整形の土壇で、道修町大火の火事場整理穴と思われ、ぎっしりと焼瓦類が入っていた。軒丸瓦78、縦棧をもつ軒平瓦79(図17)が出土した。

SK07 SK01の埋土を掘込む長さ1.8m、幅1.2m、深さ0.7mの土壇で、「天下一」と釘で落書された硯77(図17)が見つかった。

SK14 長さ1.5m、幅1.0m、深さ0.4mの土壇で、深掘り部分から、鳥の骨が見つかった。

SK18 一辺1m、深さ0.3mの平面が正方形に近い土壇で、軒平瓦22(図12)が出土した。

SE14 直径1.3m、深さ1.8m以上の井戸で、肥前磁器が出土した。

h. 第11層出土遺物(図6)

土師器甕1・杯2、瓦器椀3が調査区中央部南端の一個所に集って出土した。

i. 第10層出土遺物(図6)

金箔押し二重菊紋飾り瓦7が見つかった。

j. 第9層出土遺物(図6)

軒丸瓦8と以下の木簡が出土した。

- | | | |
|--------------------|----------|--------------------|
| ・「< 小たい廿□入
(貫カ) | ・「< 甚一□ | [132×21.5×6] 033型式 |
| ・「< いわし八□(花押)」 | ・「< □ □」 | [115×24×4] 033型式 |

「さは□百入」 [180×25×5] 051型式
 ・大むろ三百入」 ・「□ □」 [112×23×4.5] 059型式

k. 第8層出土遺物(図17)

桶側板75と以下の木簡が出土した。

・「< 大たこ□ □×」 ・「< 与右衛門尉×」 [106×27×4.5] 039型式

l. 第7層出土遺物(図17)

桶側板74、鐔形木製品のほか、以下の木簡が出土した。

・「< 百五十さし入」 ・「< □ □与四郎」 [168×20.5×6] 033型式

・「< さは九十三入」 ・「< □ □」 [105×25×4.5] 032型式

m. 第4層出土遺物(図12)

「昆布屋又右衛門尉」以下、右回りに「つほ」等の文字を墨書した焼塩壺16が見つかった。左手に焼塩壺をもち、左回りに回転させながら、右手に持った筆に墨を付け足すことをせず一気に書いたと思われる。徐々に墨は薄くなっている。釈文は以下のとおりである。

「昆布屋

又右衛門尉

つほ

しおつほ

(内カ)

□へ

式しかた

参り 』

n. 第2層出土遺物(図6・12)

軒丸瓦10・11(図6)、鳥衾12、軒平瓦13・14・15・18、土師皿17(図12)が出土した。

o. 第1層出土遺物(図12)

鳥衾19、軒平瓦20が見つかった。

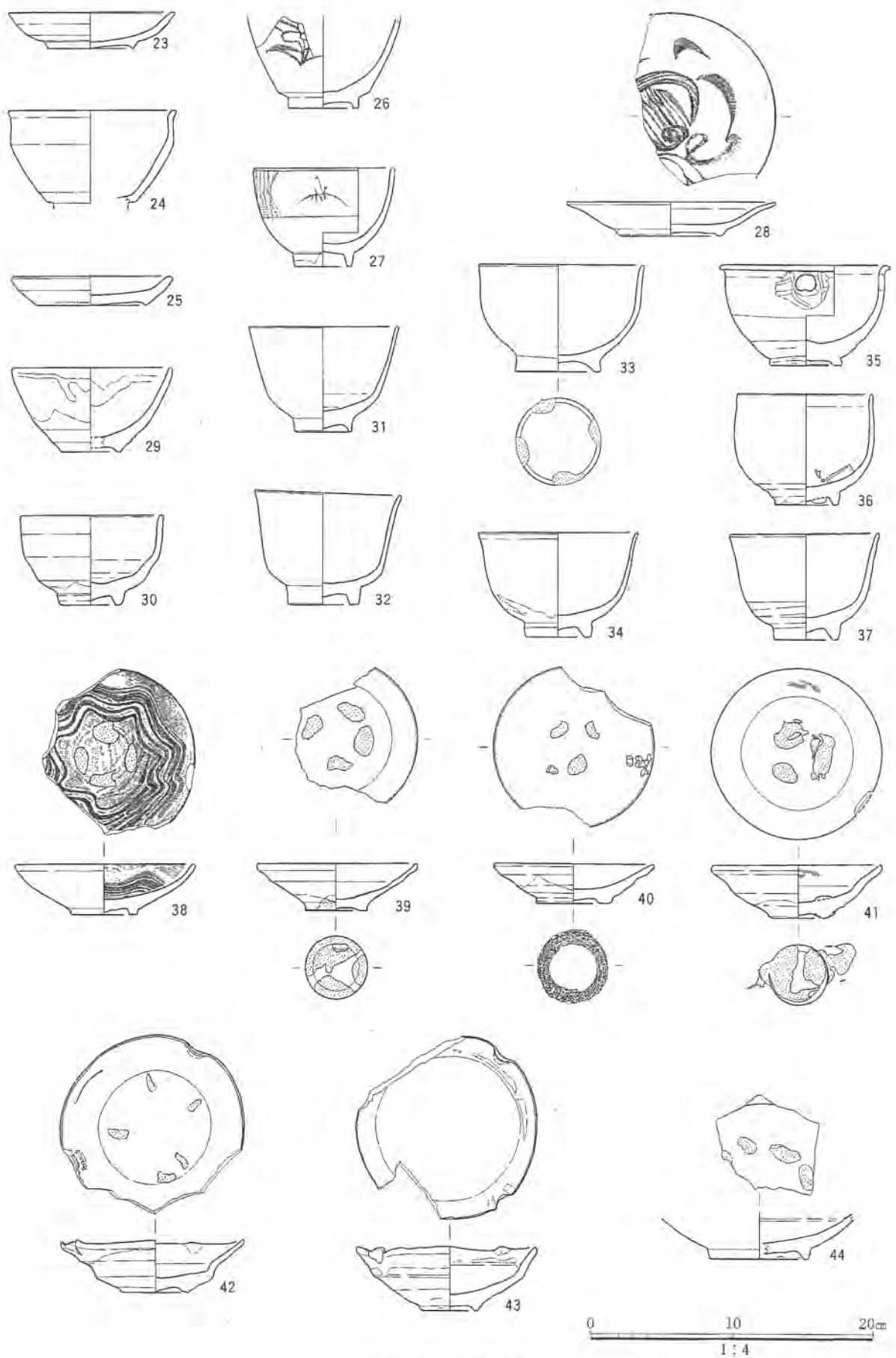


图14 遺物実測図(3)
SK01(23~44)

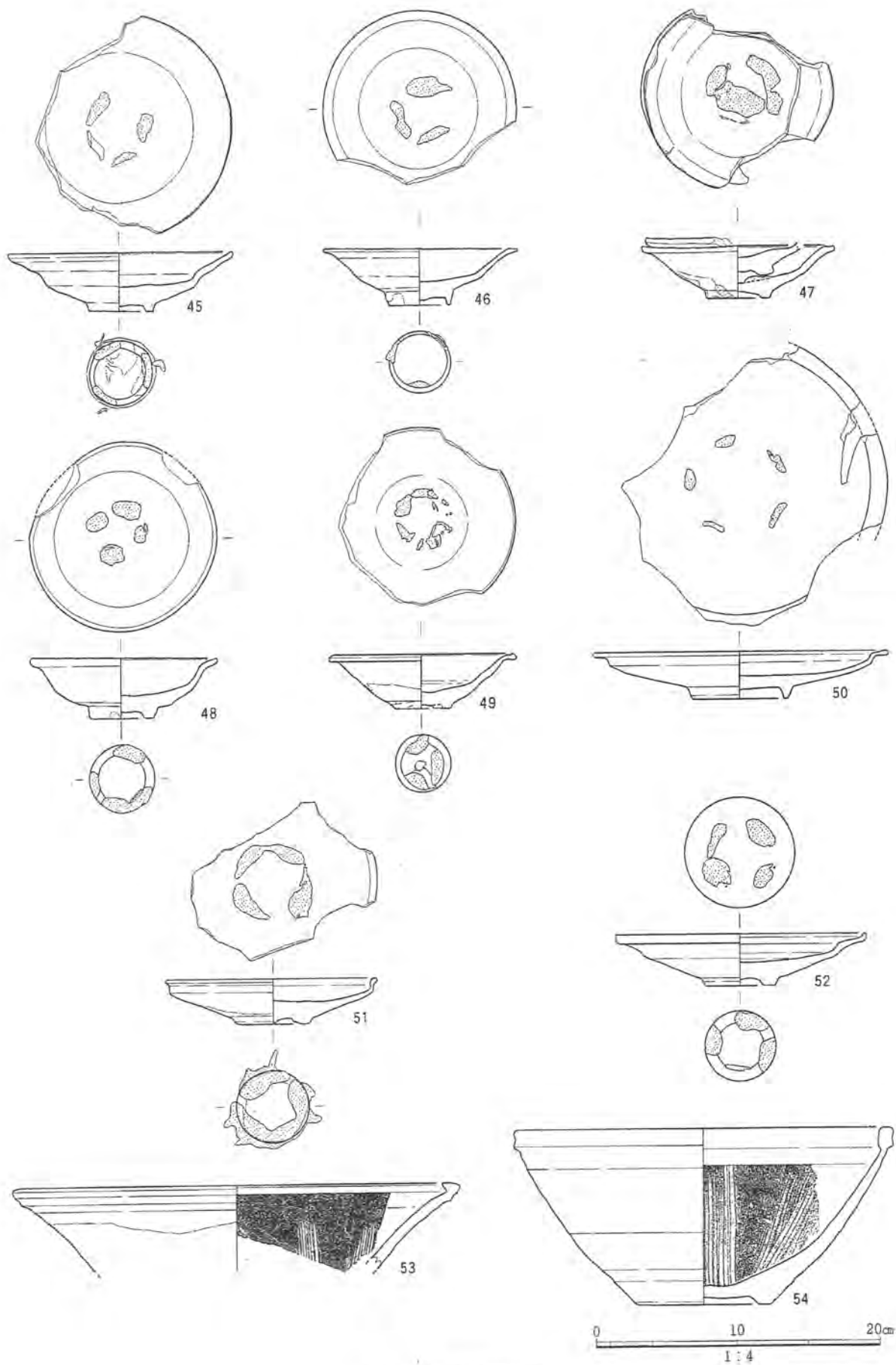


图15 遺物実測図(4)
SK01(45~54)

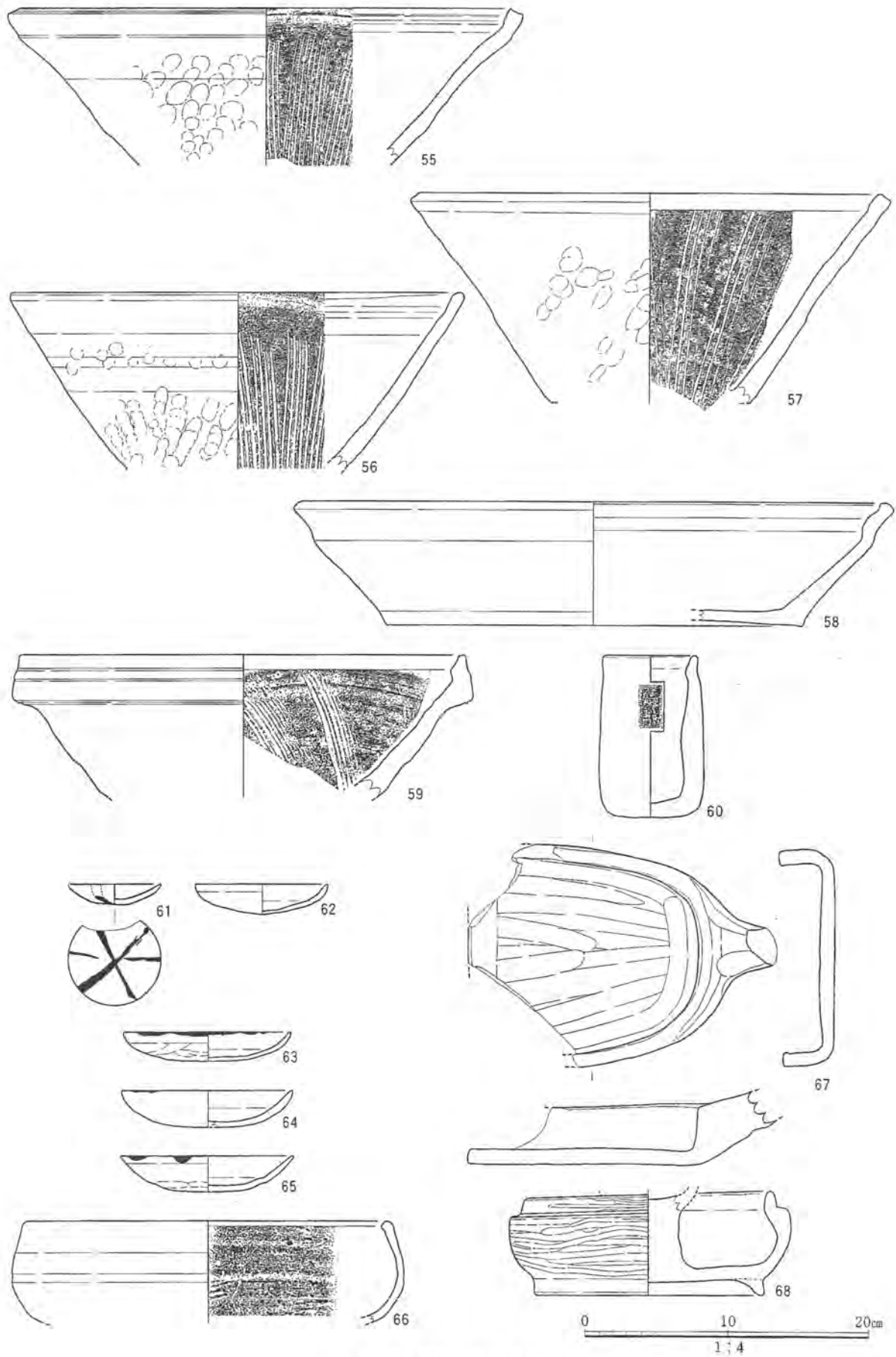


图16 遺物実測図(5)
SK01(55~68)

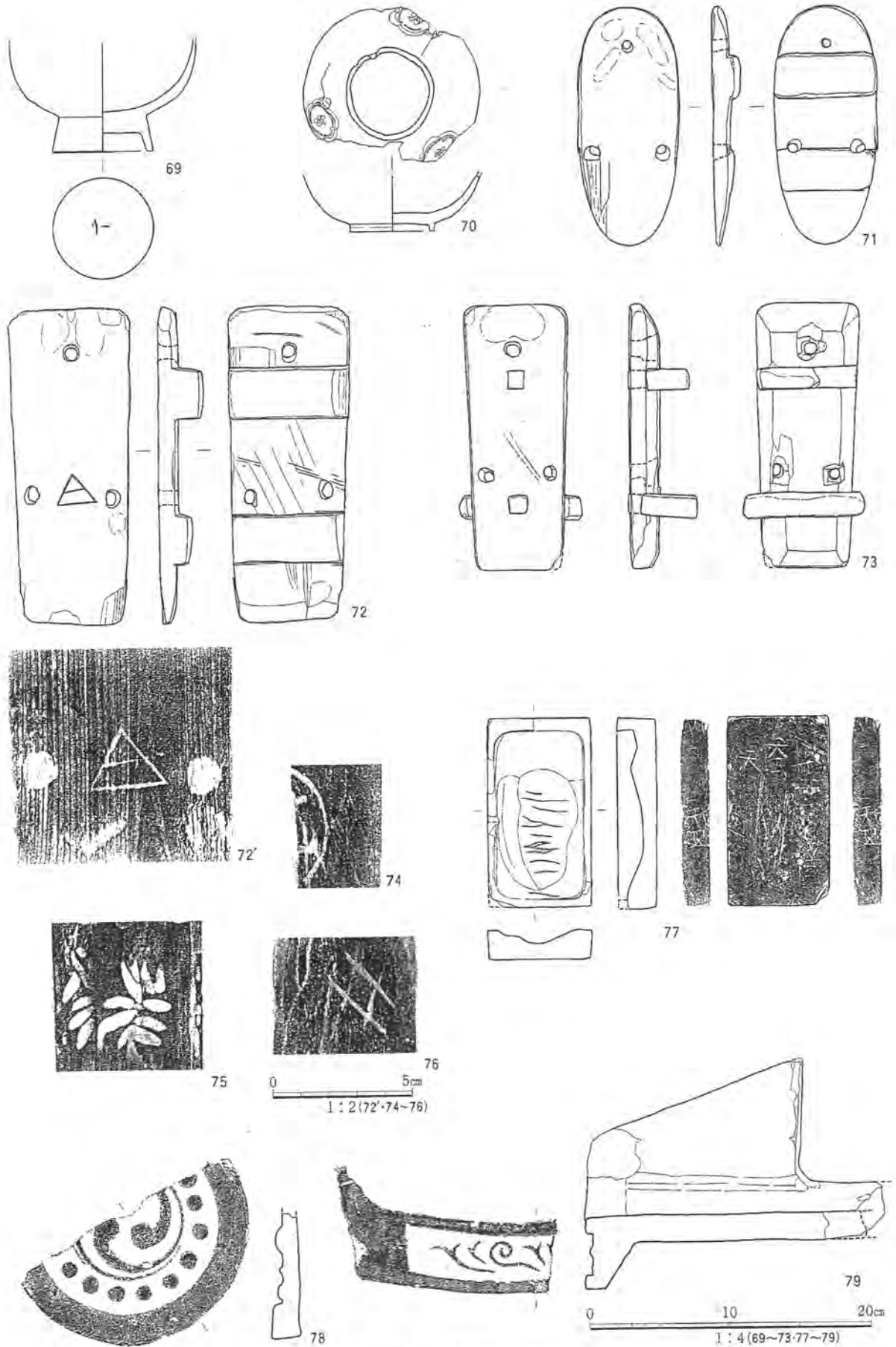


图17 遺物実測図(6)

SK144(69)、SK132(70·72)、SK128(71·73)、第7層(74)、第8層(75)、SK153(76)、SK07(77)、SK02(78·79)

3)大坂城下町跡(OJ06-3)から出土した動物遺存体

丸山真史(京都大学大学院人間・環境学研究科)

松井章(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)

i)概要

今回、報告する資料は、大阪市中央区道修町に隣接する伏見町の発掘調査によって出土した動物遺存体である。当地は、大坂城下町の中で江戸前半には本鞆町と呼ばれていた。付近の道修町などでは1986年から大阪市文化財協会によって発掘されており、魚名や水産物の名前が記された木簡と魚骨が多量に見つかり、魚市場跡と比定された[久保和士1997]。天正年間(1573~1592)に天満鳴尾町から伏見町に魚市場が移転し、その後の元和4(1618)年に生魚商の一部が上魚屋町(現安土町)へ、さらに延宝7(1679)年には鷺島に本店を移し、そこが雑魚場(現西区鞆本町付近)と呼ばれるようになった[酒井亮介1992]。本資料は、伏見町に市場が存在したとされる慶長3(1598)年からおよそ20年間のものである。本調査でも、実際に魚名の記載された木簡と多数の魚骨とが出土しており、その推定を裏付ける。総破片点数は739点であり、種類や部位を同定できたのは434点である。そのうち魚類が404点、爬虫類が1点、哺乳類が29点である。このほか鳥類の破片が1点出土している。

ii)魚類

マダイが136点と最も多く、全体の33%を占める。ついで、マダイやキダイなど種を判別できないタイ科が34点、サメ類・スズキがそれぞれ28点ずつ、ブリやカンパチなどを含むブリ属の21点、ハモ属20点、フグ科18点、マダラを主体とするタラ科14点と続く。瀬戸内の中近世遺跡ではハモ属が多く出土し、特に京都と大阪では顕著である。また、フグ科が多く出土したことは、現代もフグ料理を好む大阪の伝統的食文化の一つであろう。タラ科は大型のマダラが多いと考えられるが、瀬戸内や紀州灘では漁獲されず、日本海沿岸からもたらされたと考えられる。また、サケ属の歯が顎骨から遊離した状態で1点出土しており、タラ科同様に日本海沿岸から搬入されたと思われる。さらに瀬戸内海には生息しないシイラ・トビウオ科・カツオ・ソウダガツオ属などが出土していることから、紀州灘や日本海側との遠隔地流通の発達が見える。また、標準体長80cmを越える大型のブリ属やシイラが出土する一方で、体長20cmにも満たないイワシ類やフグ科も出土しており、大型魚から小型魚まで、魚市場には多様な魚種が揃っていたようである。ハモ属・アジ科・コチ科の中には、幼魚に相当する小型の個体も含まれており、雑魚として盛んに商われていたと考えられる。

こういった雑魚の流通は、近海の水産資源に対する需要の大きさをものごと、その需要に対する供給を漁村が担っていたことを示唆する。おそらく中世段階では漁獲の対象外とされた幼魚を含む雑魚が、近世になり漁網の目を小さくすることによって、魚群を一網打尽にする漁法が営まれるようになったと推測される。網の目を小さくするためには、増大する水の抵抗や漁獲物の重量に比例して、強力な沈子網とより重い漁網錘、巻き上げ動力などが必要であり、瀬戸内では平安時代末から鎌倉時代に土錘に変化が現れ、大型の底引き網や巻き網が成立したとされる[真鍋篤行1996]。本資料は近

表1 大坂城下町(OJ06-3)出土の動物遺存体

脊椎動物門 Vertebrata	シイラ科 Coryphaenidae
軟骨魚綱 Chondrichthyes	シイラ <i>Coyphaena hippurus</i>
エイ目 Rajiformes	イトヨリダイ科 Nemipteridae
トビエイ科 Myliobatidae	イトヨリダイ属の一種 <i>Nemipterus</i> sp.
トビエイ科の一種 Myliobatidae gen. et sp. indet.	タイ科 Sparidae
サメ類 Lamniformes fam., gen. et sp. indet.	マダイ <i>Pagrus major</i>
	キダイ <i>Dentex tumifrons</i>
	タイ科の一種 Sparidae, gen. et sp. indet.
硬骨魚綱 Osteichthyes	イサキ科 Haemulidae
ウナギ目 Anguilliformes	コショウダイ属の一種 <i>Plectorhinchus</i> sp.
ハモ科 Muraenesocidae	キス科 Sillaginidae
ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp.	キス属の一種 <i>Sillago</i> sp.
ニシン目 Cluperiformes	ベラ科 Labroide
ニシン科 Clupeidae	コブダイ <i>Semicossyphus reticulatus</i>
ニシン科の一種 Clupeidae gen. et sp. indet.	カマス科 Sphyraenidae
ナマズ目 Siluriformes	カマス科の一種 Sphyraenidae, gen. et sp. indet.
ナマズ科 Siluridae	サバ科 Scombridae
ナマズ属の一種 <i>Silurus</i> sp.	サバ属の一種 <i>Scomber</i> sp.
サケ目 Salmoniformes	カツオ <i>Katsuwonus pelamis</i>
サケ科 Salmonidae	サワラ <i>Scomberomorus niphonius</i>
サケ属の一種 <i>Oncorhynchus</i> sp.	ソウダガツオ属の一種 <i>Auxis</i> sp.
ヒメ目 Aulopiformes	カレイ目 Pleuronectiformes
エソ科 Synodontidae	ヒラメ科 Bothidae
エソ科の一種 Synodontidae, gen. et sp. indet.	ヒラメ <i>Paralichthys olivaceus</i>
タラ目 Gadiformes	カレイ科 Pleuronectidae
タラ科 Gadidae	カレイ科の一種 Pleuronectidae gen. et sp. Indet.
マダラ <i>Gadus macrocephalus</i>	ウシノシタ科 Cynoglossidae
タラ科の一種 Gadidae gen. et sp. indet.	ウシノシタ科の一種 Cynoglossidae, gen. et sp. indet.
メダカ目 Cyprinodontiformes	フグ目 Tetraodontiformes
トビウオ科 Exocoetidae	フグ科 Tetraodontidae
トビウオ科の一種 Exocoetidae gen. et sp. indet.	フグ科の一種 Tetraodontidae, gen. et sp. indet.
ボラ目 Mugiliformes	爬虫綱 Reptilia
ボラ科 Mugilidae	カメ目 Chlonia
ボラ科の一種 Mugilidae gen. et sp. indet.	スッポン科 Trionychidae
カサゴ目 Scorpaeniformes	スッポン <i>Trionyx sinensis</i>
フサカサゴ科 Scorpaenidae	
フサカサゴ科の一種 Scorpaenidae gen. et sp.	鳥綱 Aves
ホウボウ科 Triglidae	鳥綱の一種 Aves order, fam., gen. et sp. indet.
ホウボウ科の一種 Triglidae, gen. et sp. indet.	
コチ科 Platycephalidae	哺乳綱 Mammalia
コチ科の一種 Platycephalidae, gen. et sp. indet.	食肉目 Carnivora
スズキ目 Percidae	ネコ科 Felidae
スズキ科 Percichthyidae	ネコ <i>Felis catus</i>
スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i>	偶蹄目 Artiodactyla
ハタ科 Serranidae	シカ科 Cervidae
ハタ科の一種 Serranidae, gen. et sp. indet.	ニホンジカ <i>Cervus Nippon</i>
アマダイ科 Malacanthidae	齧歯目 Rodentia
アマダイ属の一種 <i>Branchiostegus</i> sp.	ネズミ科 Muridae
アジ科 Carangiae	ネズミ科の一種 Muridae gen. et sp. indet.
ブリ <i>Seriola quinqueradidata</i>	クジラ目 Cetacea
ブリ属の一種 <i>Seriola</i> sp.	イルカ科の一種 Delphinidae gen. et sp. inde
アジ科の一種 Carangiae, gen. et sp. indet.	

世初期に漁獲対象の小型化、魚種と総漁獲量の増大という大きな変化を示している。

マダイの前頭骨のほとんどは正中線で左右に「兜割り」され、それらは2分割あるいは3分割されている。こうして切り分けられた頭部は、青煮(かぶとに)やあら炊き、潮汁に調理されるのであろう。また、マダイの前頭骨1点には、先端の幅が約8mmの二股に分かれる鋭い道具で、背側面と腹側面の両側を少なくとも6回以上刺突した痕跡が見られる。ハモ属やブリ属の椎骨の中には、椎体が輪切り状に切断されているものがあり、胴部をおろさずにぶつ切りにして切り身としていたことを示す。

iii) 爬虫類

爬虫類はスッポンが1点のみ出土しているが、少数のため、付近に川魚を扱う魚屋があったかどうか定かではない。

iv) 鳥類

ウズラ級の小型の鳥類の椎骨が1点出土しているが、科や種の同定には至らなかった。

v) 哺乳類

ネズミ科の一種が20点出土している。骨端部が癒合していないにもかかわらず、大きな個体が多く、ドブネズミやクマネズミなどの可能性が考えられる。イルカの椎骨が2点出土しており、海生哺乳類も魚市場で商われていたのだろう。これらの棘突起や横突起には鋭い刃物傷が多数見られ、運搬に都合の良い大きさに切り分けられて搬入され、さらに販売用に適当な大きさに肉が切り分けられたと思われる。また、ニホンジカの椎骨3点、肩甲骨・手指骨がそれぞれ1点、計5点出土している。椎骨のうち2

表2 魚類遺存体

写真番号	遺構	層位	大分類	小分類	部位	L/R	加工痕
1		第9層	硬骨魚綱	マダイ	前頭骨	M	
2		第9層	硬骨魚綱	マダイ	主鰓蓋骨	L	
3		第9層	硬骨魚綱	マダイ	主鰓蓋骨	L	
4		第9層	硬骨魚綱	マダイ	角骨	R	
5		第9層	硬骨魚綱	マダイ	角骨	R	
6		第9層	硬骨魚綱	マダイ	前鰓蓋骨	L	
7		第9層	硬骨魚綱	マダイ	前鰓蓋骨	R	
8		第9層	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨	L	
9		第9層	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨	L	
10		第9層	硬骨魚綱	マダイ	椎骨	M	
11		第9層	硬骨魚綱	マダイ	椎骨	M	
12	SK128		硬骨魚綱	マダイ	主上顎骨	R	
13	SK128		硬骨魚綱	マダイ	主上顎骨	R	
14	SK128		硬骨魚綱	マダイ	歯骨	L	切傷
15	SK128		硬骨魚綱	マダイ	歯骨	R	
16		第9層	硬骨魚綱	マダイ	舌頭骨	L	
17	SK128		硬骨魚綱	マダイ	方骨	L	
18		第8層	硬骨魚綱	アマダイ属	歯骨	L	
19	SK128		硬骨魚綱	アマダイ属	椎骨	M	
20	SK128		硬骨魚綱	アマダイ属	椎骨	M	
21	SK128		硬骨魚綱	イトヨリダイ	椎骨	M	
22	SK128		硬骨魚綱	カツオ	椎骨	M	
23	SK128		硬骨魚綱	ボラ科	椎骨	M	
24		第9層	硬骨魚綱	マダラ	椎骨	M	切断?
25		第9層	硬骨魚綱	マダラ	椎骨	M	
26		第8層	硬骨魚綱	シイラ	椎骨	M	
27		第8層	硬骨魚綱	シイラ	椎骨	M	
28		第9層	硬骨魚綱	コショウダイ属	主上顎骨	L	
29	SK153		硬骨魚綱	キダイ	前頭骨	M	
30		第9層	硬骨魚綱	フグ科	方骨	R	
31	SK153		硬骨魚綱	フグ科	前鰓蓋骨	L	
32	SK153		硬骨魚綱	フグ科	椎骨	M	
33	SK128		硬骨魚綱	ハモ属	歯骨	R	
34	SK128		硬骨魚綱	ハモ属	角骨	R	
35	SK128		硬骨魚綱	ハモ属	椎骨	M	
36	SK128		硬骨魚綱	ハモ属	椎骨	M	切断
37		第9層	硬骨魚綱	スズキ	角骨	L	
38		第9層	硬骨魚綱	スズキ	主鰓蓋骨	L	切傷
39		第9層	硬骨魚綱	スズキ	主上顎骨	L	
40		第8層	硬骨魚綱	ブリ属	椎骨	M	
41	SK153		硬骨魚綱	ブリ	前上顎骨	L	
42		第8層	硬骨魚綱	ブリ属	椎骨	M	
43		第8層	軟骨魚綱	サメ類	椎骨	M	
44		第8層	軟骨魚綱	サメ類	椎骨	M	
45		第8層	軟骨魚綱	サメ類	椎骨	M	
46		第9層	硬骨魚綱	ヒラメ	擬鰓骨	R	
47		第9層	硬骨魚綱	ヒラメ	椎骨	M	
48		第9層	硬骨魚綱	ホウボウ	眼窩骨?	R	
49		第8層	硬骨魚綱	ハタ科	主鰓蓋骨	R	
50		第8層	硬骨魚綱	コチ科	主上顎骨	L	
51		第9層	硬骨魚綱	コチ科	前鰓蓋骨	R	

表3 哺乳類遺存体

写真番号	遺構	層位	大分類	小分類	部位	L/R	加工痕
1	SK132		哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	M	切傷
2	SK33		哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	M	切傷
3	SK120		哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	R	
4	SK153		哺乳綱	イルカ類	椎骨	M	
5	SK132		哺乳綱	イルカ類	椎骨	M	切傷

点は腹側に鋭い金属によるカットマークが多数見られる。これらは椎体の骨端部が癒合中の比較的若い同一個体のものと考えられる。この魚市場で流通したものかどうかは不明である。

4)まとめ

今回の調査でも古代から中世にかけての遺構・遺物は検出されたが、建物等を復元するには至らなかった。以下、時代ごとに見ていくと、第11層上面で、豊臣前期のほぼ正方位を示す東西畝群を検出し、この上面で噴砂が留まっていることから、この噴砂は慶長元(1596)年閏7月13日の慶長大地震による可能性が高く、したがってそれ以降に第10層の整地が行われ、第10層上面SX101の金属加工や炭層の分布も慶長元年以降となる。魚名が書かれた付札木簡や魚骨がゴミ穴や凹地から出土し、江戸前期に「本靱町」と呼ばれた魚市場に伴う遺構・遺物と考えられる。高級魚であるマダイの骨が136点と最も多く、全体の33%を占めたほか、曲物に入れて蓋をしてゴミ穴に捨てられてた子イルカの骨格も見つかった。また興味深いものに「昆布屋又右衛門尉」の墨書文字をもつ焼塩壺がある。普通使い捨てられたと思われる焼塩壺に名前を書き、私用に供していたようである。「昆布屋」は大坂では江戸時代にも見られる屋号である。豊臣時代は業種と屋号の乖離は激しくなかったので、やはり昆布を商っていたと思われる、昆布は北海道や東北地方太平洋岸を産地とするから、18世紀後半の北前船就航を待たずに、北の海産物が大坂に出回っていた可能性がある。東敷地の塙列建物は倉庫だが、く字形に溝を掘り玉石を充填して暗渠としている。冬ノ陣で被災した。

冬ノ陣焼土を均して整地(第2層)した上面にも礎石建物があるが、それを覆って明黄褐色中粒砂で整地(第1層)した上面に西敷地ではSK01などのゴミ穴が繰返し掘られ、多量の陶磁器が捨てられている。この陶磁器類は使用痕がないことから、西敷地は17世紀中葉、陶器商の町屋であった可能性が高い。

冬ノ陣焼土層からも多量の瓦が出土する等、船場は開発以後連綿と、町屋でありながら瓦葺建物が林立していたようで、第1層を覆う道修町大火の焼土層からも鬼瓦・軒瓦の出土が確認された。

参考文献

大阪市文化財協会2004:『大坂城下町跡』Ⅱ

喜田貞吉1924、「学窓日誌」:『社会史研究』9, pp.51-52

久保和士1997、「近世大坂における水産物の流通と消費に関する考古学的研究」:『助成研究の報告』7 味の素食の文化センター, pp.51-58

酒井亮介1992、「近世初期大坂の水産物市場に関する一考察」:『大阪の歴史』 大阪市史料編纂所, pp.62-87

真鍋篤行1996、「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題」:『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要Ⅹ』 瀬戸内海歴史民俗資料館 pp.55-163

木簡学会2005、『木簡研究』第27号

第12層上面検出状況
(北から)



第11層上面検出状況
(北から)



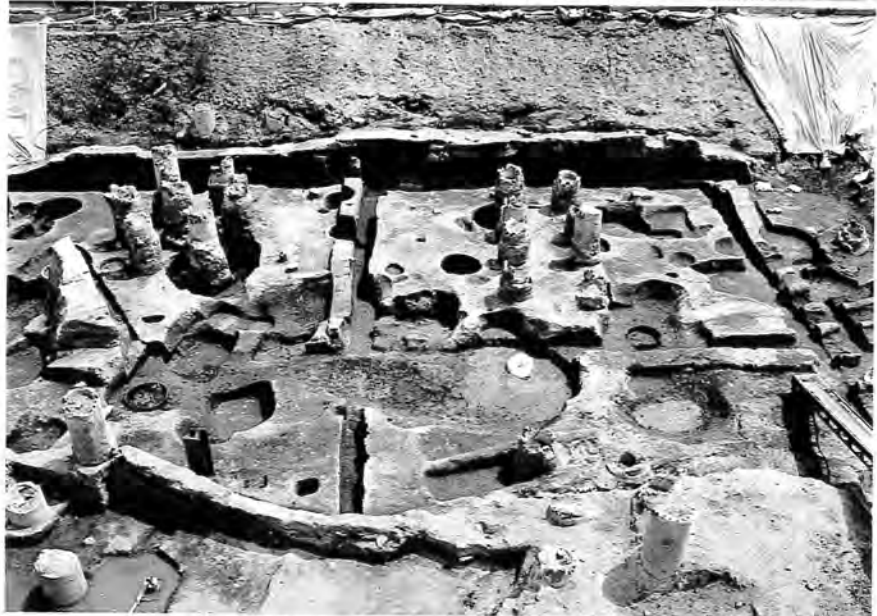
第11層上面の噴砂



第10層上面検出状況
(東から)



第10層上面検出状況
(北から)



第3層上面検出状況
(北から)



塙列建物検出状況
(南西から)



塙列建物南西角の施工状況



塙列建物北東角の施工状況



石垣を境にして
右側は第2層、
左側は第4層上面
(南から)



石垣による段の断面
(北から)



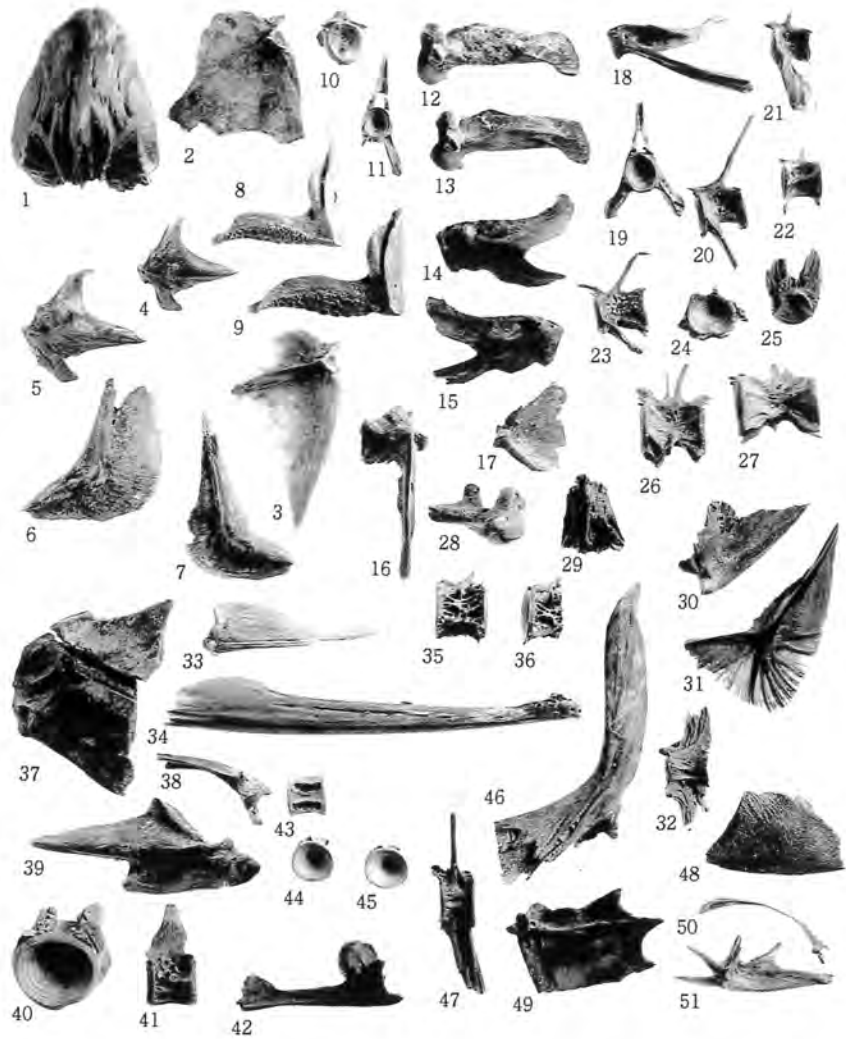
SK120の曲物に入った
子イルカの骨
(南から)



魚類遺存体

1~17: マダイ(1: 前頭骨、
2・3: 主鰓蓋骨、4・5:
角骨、6・7: 前鰓蓋骨、
8・9: 前上顎骨、10・11:
椎骨、12・13: 主上顎骨、
14・15: 歯骨、16: 舌顎骨、
17: 方骨)、18~20: アマダイ
属(18: 歯骨、19・20: 椎
骨)、21: イトヨリダイ属(椎
骨)、22: カツオ(椎骨)、
23: ボラ科(椎骨)、24・25:
マダラ(椎骨)、26・27: シイ
ラ(椎骨)、28: コショウゲイ
属(主上顎骨)、29: キダイ(前
頭骨)、30~32: フグ科(30:
方骨、31: 前鰓蓋骨、32: 椎
骨)、33~36: ハモ属(33: 角
骨、34: 歯骨、35・36: 椎
骨)、37~39: スズキ(37: 主
鰓蓋骨、38: 主上顎骨、39:
角骨)、40~42: プリ属(40・
41: 椎骨、42: 主上顎骨)、
43~45: サメ類(椎骨)、46・
47: ヒラメ(46: 擬鰓骨、
47: 椎骨)、48: ホウボウ科
(眼下骨)、49: ハタ科(主鰓蓋
骨)、50・51: コチ科(50: 主
上顎骨、51: 前鰓蓋骨)

第9層(1~11・16・24・
25・28・30・37~39・46~
48・51)、第8層(18・26・
27・40・42~45・49・50)、
SK128(12~15・17・19~
23・33~36)、SK153(29・
31・32・41)



哺乳類遺存体

1~3: ニホンジカ(1・2:
椎骨、3: 肩甲骨)、4・5:
イルカ類椎骨

SK132(1・5)、SK33(2)、
SK120(3)、SK153(4)

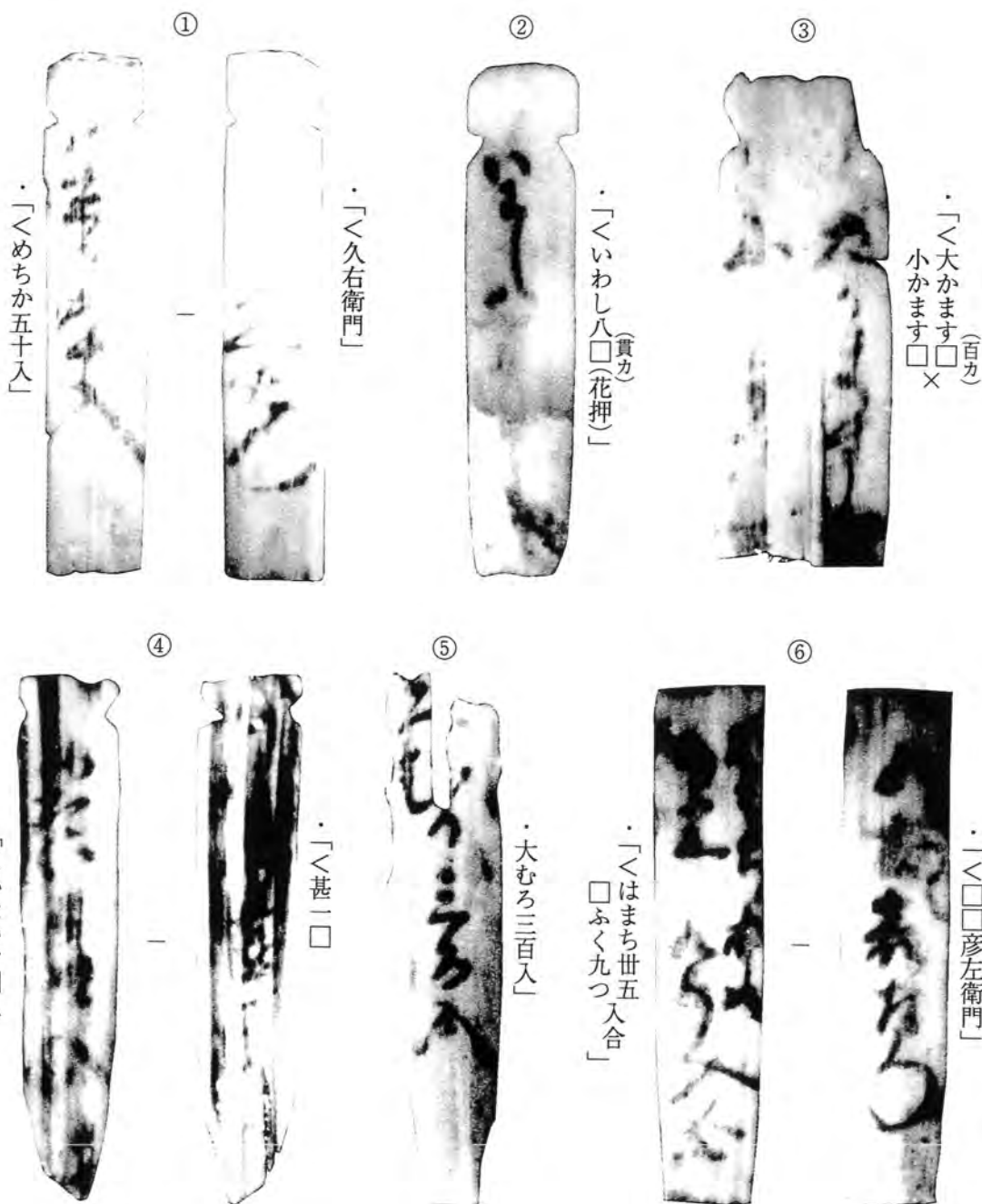




墨書焼塩壺16(第4層出土) 展開写真



鑲座金具(SK132出土)



主要木簡 SK164(①・③)、第9層(②・④・⑤)、SK153(⑥)出土

大坂城下町跡発掘調査(OJ06-4)報告書

調査個所 大阪市中央区伏見町1丁目1
調査面積 132m²
調査期間 平成18年8月17日～平成18年8月25日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

調査箇所は東横堀川を西に渡った豊臣氏大坂城外の大坂城下町跡に位置し(図1)、調査地は古代から近世にかけての遺構・遺物を検出したOS86-20・AZ87-5次調査地と隣接する。

当敷地は東西に旧建物の地下室があり遺構の残存が考えられないことから、中央部で大阪市教育委員会が2箇所の試掘調査を行った。その結果、中央部で本調査を行うこととなった。ただし建設予定建物の基礎が浅いことに鑑み、現地表下1.4mまで機械掘削を行い、以下50cm深までの人力掘削による調査に留めることになった。主として17世紀中葉の生活面の調査であったが、試掘場内ではそれ以下の地層も確認できた。

調査地は現在、伏見町という町名だが、江戸時代は「本鞆町」と呼ばれ、豊臣後期から徳川初期にかけて魚市場が立地していた場所である。

2006年8月17日に重機掘削を実施し、翌日から人力掘削による調査に移行した。調査区の東側2mは旧建物の基礎に当たっており、その部分は調査を行わなかった。8月25日に現地における全ての調査を完了した。

なお、調査時には磁北を方位の基準とし、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いた。水準は本文・挿図中ではTP±〇mと記す。

2) 調査の結果

i) 層序(図2・3)

第1層：宝永5(1708)年の道修町大火による焼土層である。

第2層：南北石列の東側にのみ分布する小礫を含むオリーブ褐色粗粒砂層で、層厚25cmを測る。

第3層：層厚5～15cmのにぶい黄色中粒砂層である。

第4層：主にSK01内に分布するにぶい黄褐色細粒砂層である。

第5層：層厚5～15cmの灰黄褐色中粒砂層で、本層上面で今回調査の主要遺構を検出した。

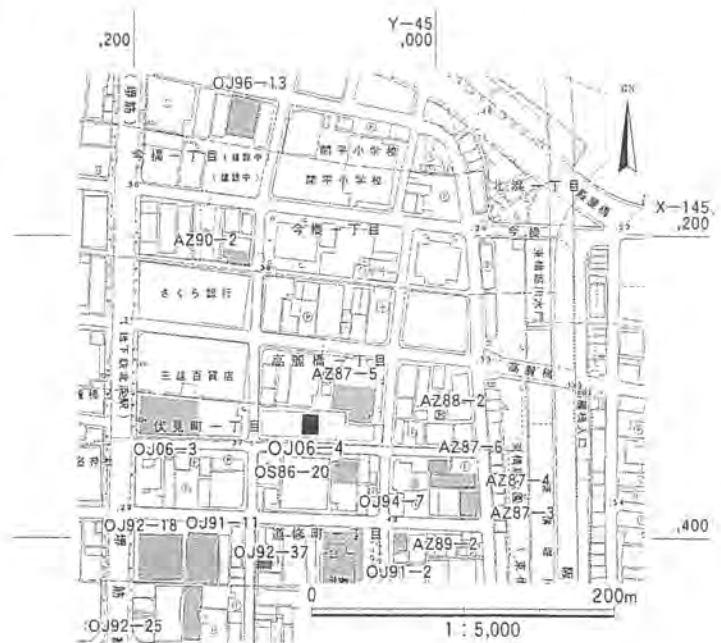


図1 調査地位置図

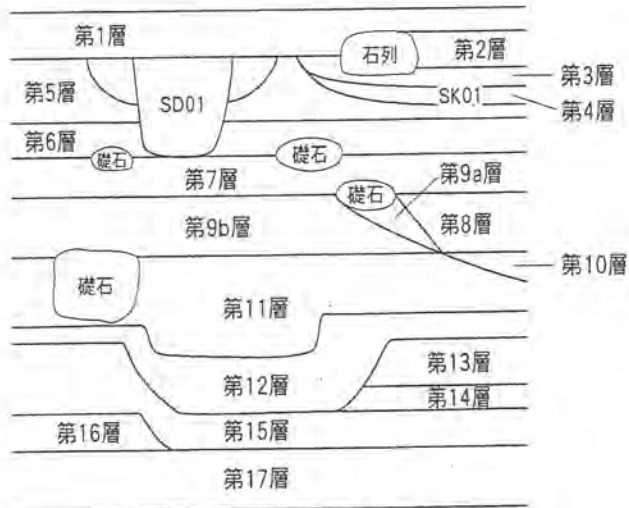


図2 地層と遺構の関係図

第6層：層厚10cmのにおい褐色シルト層である。

第7層：層厚10～15cmのにおい黄褐色粗粒砂含む細粒砂層で、上面に礎石を据えている。

第8層：最大層厚25cmを測るにおい黄褐色中粒砂混り細粒砂層である。

第9a層：層厚5cmの暗褐色小礫層で、礎石を固定するために施されたと見られる。

第9b層：層厚15～30cmの炭を含むにおい黄褐色シルト混り中粒砂層で、上面に礎石が据えられている。

えられている。

第10層：層厚20cmの明黄褐色中粒砂混りシルト層で、重厚な礎石をもつ建物の床に貼られた化粧土である。

第11層：層厚10～50cmのにおい黄褐色中粒砂混り粗粒砂層で、上面に倉庫建物の重厚な礎石が据えられている。

第12層：層厚10～45cmの明褐色シルト層で、元和・寛永の城下町再建時に施工された。

第13層：焼土を多量に含むにおい黄褐色中粒砂層で、層厚は20cmである。城下町再建時の施工である。

第14層：におい黄色粘土偽礫からなる客土層である。層厚は10cmである。

第15層：層厚10～40cmの焼土を多量に含む中粒砂層で、冬ノ陣の焼土層による整地層である。

第16層：層厚25cmの冬ノ陣の焼土層で、最下部に2cmの炭層がある。

第17層：シルト偽礫を含むにおい黄褐色中粒砂で、層厚80cm以上を測る整地層である。

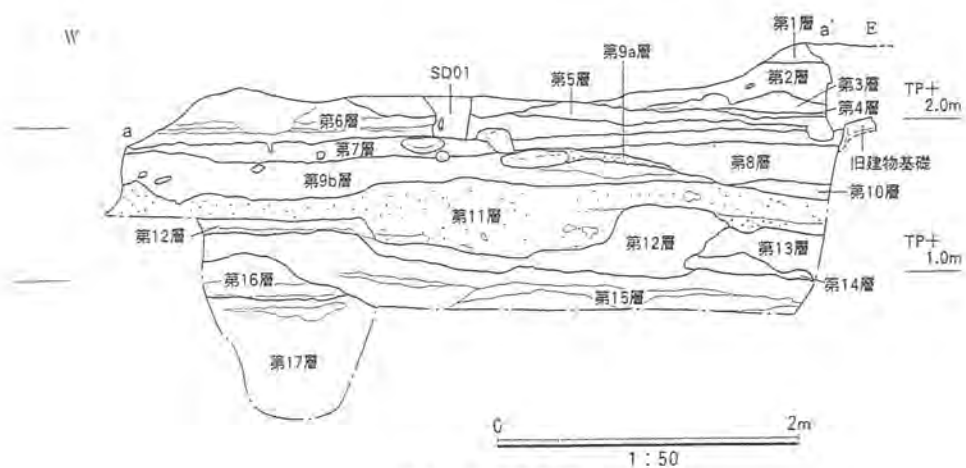


図3 断面実測図

ii) 遺構と遺物(図4・5)

a. 第5層上面の遺構とその出土遺物

SK01 調査地北東部の南北5m以上、東西3.5m以上、深さ0.8mのゴミ穴で、西側でやや浅くなり、第4層を埋土とする。土師皿10~12、炮烙13・14、肥前陶器15~17、棒状の木製人形頭部18、馬脚と思われる木製操り人形19、ミニチュアの土釜20、荷札木簡21、軒丸瓦22・23、軒平瓦24・25が出土した。土師皿12は回転糸切り底をもち、木製操り人形19は股の付根の片面が動き易いように削られている。木簡21は表に「< 仁わ寺甚左衛門」、裏に「< 二月□□□」の墨書をもつ。この遺構からは多数の魚類遺存体が出土した。その詳細については次項に記した。

SD01 敷地境の溝と考えられる。当初、幅1.4m、深さ0.2mであったのが、粗粒砂で埋没した後、幅0.3m、深さ0.3mに掘直されている。写真に見られるように掘直した後、溝東肩を割れた備前焼甕口縁片を用いて補強している。

b. その他の遺構とその出土遺物

SE01 調査区中央西寄りの井戸で直径0.8mを測る。上部が攪乱されていたことから掘込み面は不明である。江戸時代前半までの遺物しか出土していない。井戸瓦28が出土した。

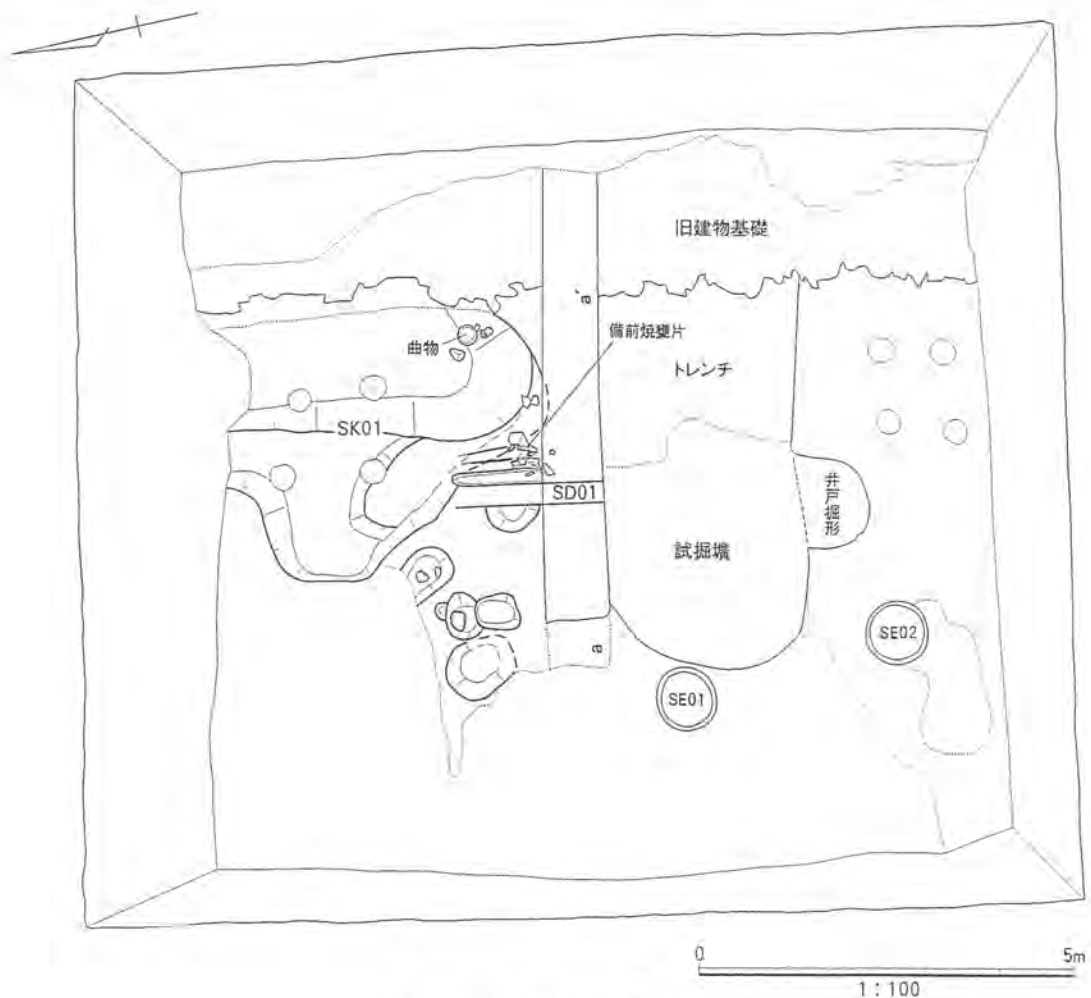


図4 遺構配置図(第5層上面)

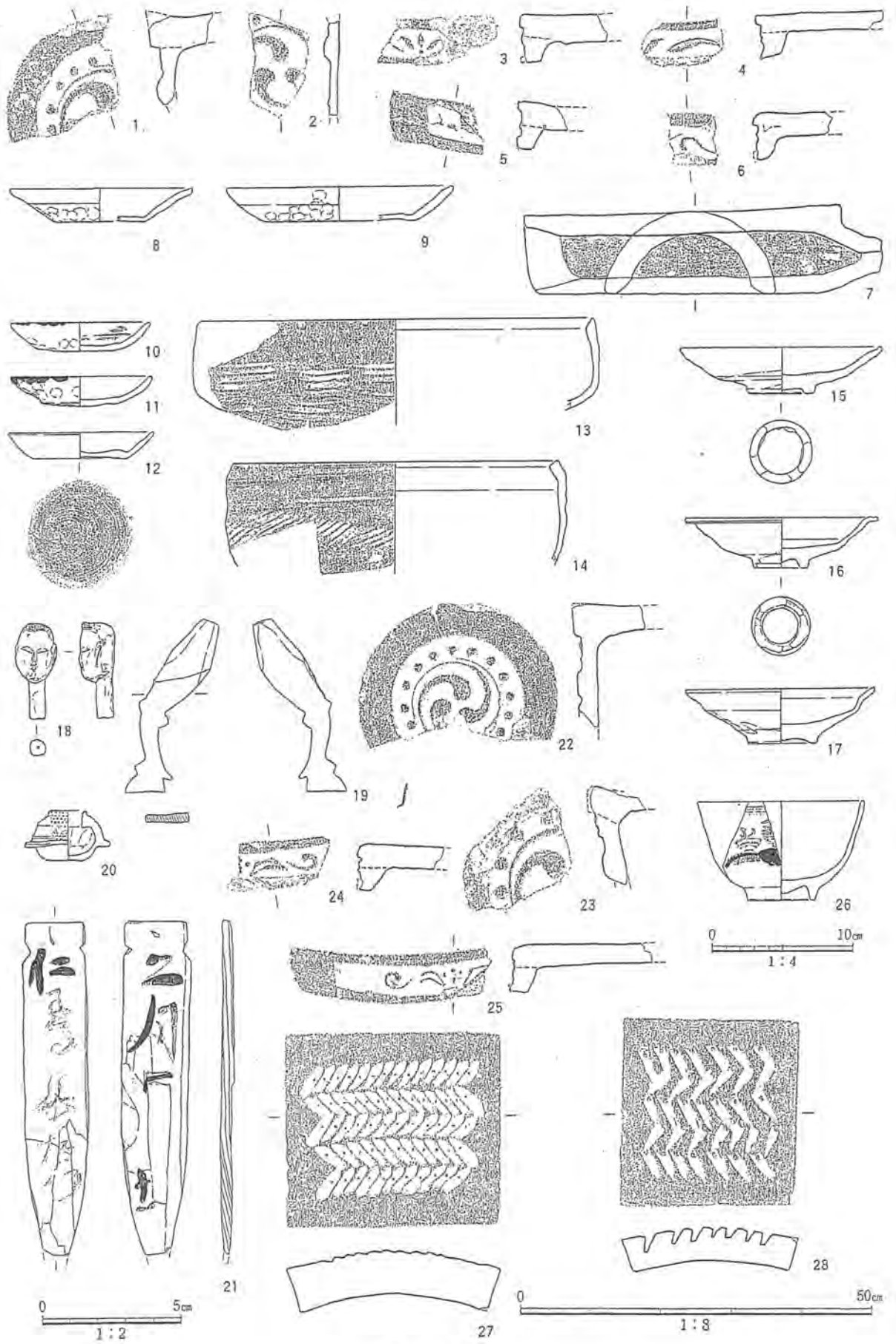


图5 遺物実測図

第13層(1~9)、SK01(10~25)、第1層(26)、SE02(27)、SE01(28)

SE02 調査区南西部の井戸で直径0.8mを測り、やはり上部が攪乱されていたことから掘込み面は不明である。江戸時代前半の遺物を含む。井戸瓦27が出土した。

c. 第13層出土遺物

冬ノ陣によると思われる焼土を含んだ整地層だが、軒丸瓦1・2、軒平瓦3～6、土師皿8・9が出土した。

d. 第1層出土遺物

道修町大火によると思われる焼土層で、肥前磁器26が見つかった。

3)大坂城下町(OJ06-4)から出土した動物遺存体

丸山真史(京都大学大学院人間・環境学研究科)

松井章(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)

今回、報告する資料は、大阪府中央区道修町に隣接する伏見町の発掘調査によって出土した動物遺存体である。当地は、大坂城下町の中で江戸前半には本鞆町と呼ばれていた。付近の道修町などでは1986年から大阪市文化財協会によって発掘されており、魚名や水産物の名前が記された木簡と魚骨が多量に見つかり、魚市場跡と比定された[久保和士1997]。同地点のOJ06-3次調査においても魚名の記された木簡や多様な魚骨が出土している。天正年間(1573～1592)に天満鳴尾町から伏見町に魚市場が移転し、その後の元和4(1618)年に生魚商の一部が上魚屋町(現安土町)へ、さらに延宝7(1679)年には鷺島に本店を移し、そこが雑魚場(西区靱本町付近)と呼ばれるようになった[酒井亮介1992]。本資料は、伏見町に市場が存在したとされる慶長3(1598)年からおよそ20年間のものである。破片点数にして魚類11点、爬虫類1点、計12点が出土している。

魚類は全てSK01から出土している。マダイの前頭骨2点、上後頭骨、歯骨(右)、舌顎骨(左)がそれぞれ1点ずつ、計5点が出土している。前頭骨は両者とも正中線で左右に「兜割り」されており、歯骨は前位端内側が切断されている。このようにマダイの頭部を切り分け、胃煮やあら炊き、潮汁などに調理されたのであろう。ハタ科の一種の主鰓蓋骨(右)と下鰓蓋骨(右)1点が出土しており、両者とも標準体長1mを越えるような大型の個体である。主鰓蓋骨は、正中方向に切断されている。これら

表1 大坂城下町(OJ06-4)出土の魚類遺存体

脊椎動物門 Vertebrata
 硬骨魚綱 Osteichthyes
 スズキ目 Percidae
 ハタ科 Serranidae
 ハタ科の一種 Serranidae, gen. et sp. indet.
 アジ科 Carangiae
 ブリ属の一種 *Seriola* sp.
 タイ科 Sparidae
 マダイ *Pagrus major*
 サバ科 Scombridae
 サワラ *Scomberomorus niphonius*
 マグロ属の一種 *Thunnus* sp.

表2 魚類遺存体資料

通番	遺構	大分類	小分類	部位	L/R
1	SK01	硬骨魚綱	サワラ	椎骨	M
2	SK01	硬骨魚綱	ブリ属	椎骨	M
4	SK01	硬骨魚綱	ハタ科	主鰓蓋骨	R
5	SK01	硬骨魚綱	マダイ	舌顎骨	L
6	SK01	硬骨魚綱	マダイ	前頭骨	M
7	SK01	硬骨魚綱	マダイ	前頭骨	M
8	SK01	硬骨魚綱	マダイ	上後頭骨	M
9	SK01	硬骨魚綱	マダイ	歯骨	R
10	SK01	硬骨魚綱	マグロ属	椎骨	M
11	SK01	硬骨魚綱	ブリ属	椎骨	M
12	SK01	硬骨魚綱	ハタ科	下鰓蓋骨	R

のほかブリやカンパチなどのブリ属の一種、サワラ、クロマグロやキハダなどのマグロ属の一種の椎骨が1点ずつ出土しており、いずれも体長70cmを上回る個体と推定される。近畿地方ではマグロ属の出土が低調であったが、道修町の発掘で出土しているほか[久保1997]、大阪湾沿岸などの中近世遺跡からの出土例が増加しつつある。このように近畿地方では、中世以降にマグロ属の流通が盛んになったと考えられる。

4)まとめ

今回の調査は調査範囲が狭い上に掘削深度が限定されたため、17世紀中葉の遺構を検出するに留まったが、木製人形や木簡が出土するなど、多大な成果を挙げた。荷札木簡表の「仁わ寺甚左衛門」は河内国茨田郡(現、寝屋川市)の「仁和寺」在住の甚左衛門が送った品物に付いて来た荷札と思われる。

今回の第13層出土の軒瓦もそうだが、秀吉晩年の船場開発の当初から、町屋でありながら瓦葺き建物を多用していたことには驚かされる。そしてSK01出土の軒瓦から、豊臣期以降、徳川期を通じて、連綿と瓦葺き建物が建築されていたことが裏付けられるものと思う。

また西隣で行ったOJ06-3次調査地と比較して、道修町大火(1708年)の被災面で1.8m高く(TP+2.4m)、冬ノ陣被災面で0.9m高い(TP+0.9m)ことは、この地が東横堀川に近いことから防災の面などの理由から地上げされた可能性が考えられる。

参考文献

久保和士1997、「近世大坂における水産物の流通と消費に関する考古学的研究」：『助成研究の報告』7 味の素食の文化センター、pp.51-58

酒井亮介1992、「近世初期大坂の水産物市場に関する一考察」：『大阪の歴史』 大阪市史料編纂所、pp.62-87

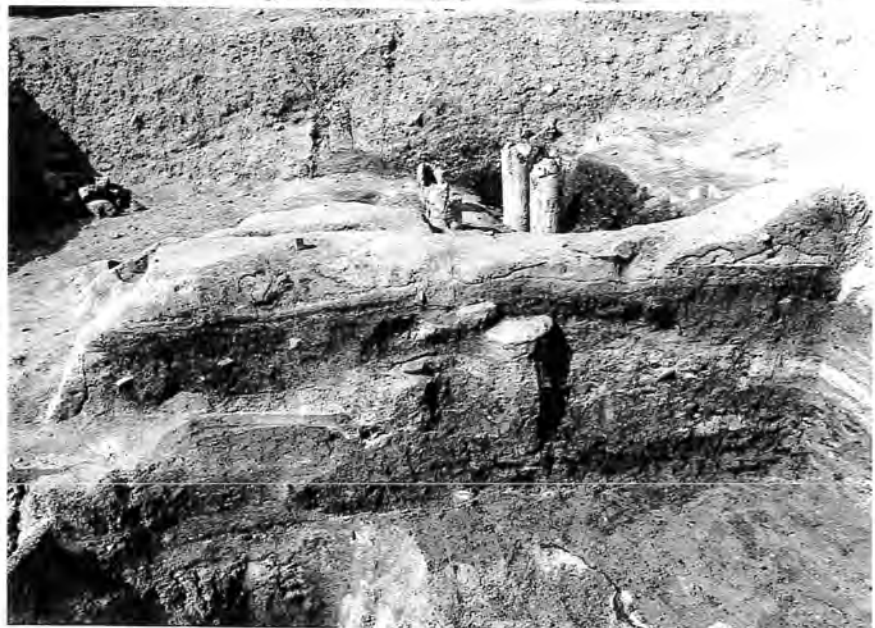
第5層上面検出SD01東肩
(東から)



第5層上面検出SK01
(北から)



中央セクション断面
(南から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ06-5)報告書

調査個所 大阪市中央区今橋3丁目16
調査面積 約190m²
調査期間 平成19年1月9日～1月24日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、宮本佐知子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大川の左岸で、淀屋橋の南東に位置する(図1)。周辺の発掘調査では古代～中世の遺構・遺物の存在が確認され、中世に遡る集落の存在も想定される。御堂筋を隔てた西側のビル建設の際には古代の祭祀に用いられたとされる人面墨画土器なども採集されている[戸田秀典1988]。近世は町場として栄えた地域である。現在の地形は土佐堀川の左岸から調査地南の浮世小路までの東西方向が、南側よりも約1mほど高くなっている[大阪市文化財協会2004]。

2006年11月20日に大阪市教育委員会が敷地内で試掘調査を実施したところ、GL-4.0mまで現代に攪乱されていたが、以下に中世～古代の地層が残存していることが確認されたので、本調査を実施することとなった。調査区は敷地の西側に設定し(図2)、2007年1月9日から調査を開始した。表土層および現代攪乱層は事前に重機で掘削されており、それ以下を人力により掘下げ、遺構の検出と遺物の採集に努めた。1月24日には現地におけるすべての作業を終了した。

本報告で用いる標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP+○mと記した。なお、図1・2は座標北、それ以外の平面図は磁北を方位の基準とした。

2) 調査の結果

i) 層序

調査区では現代攪乱層を除いた下位に、旧建物の基礎の松杭が全面に打たれていた。以下には近世～古代に至る地層が分布した(図3・5)。

第1層：層厚約20cmの灰黄褐色砂質シルト層である。本層上面で中世～近代の遺構を検出した。

第2層：淡灰褐色中粒砂を主体とする河成層で、調査区の中央と南東に分布した。層厚は3～4cm



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

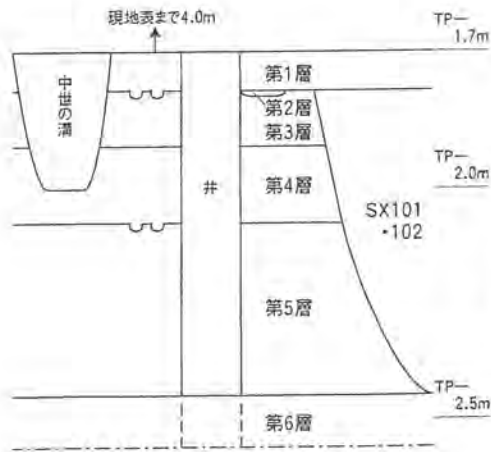


図3 地層と遺構の関係図

である。

第3層：オリブ褐色シルト質中粒砂層で、層厚は10～30cmであった。河成層である。フォアセットラミナの傾斜方向から推測される流下方向はS35°～37°Wである。大川の氾濫によってこの地に堆積したと考えられる。東南部の本層上面で偶蹄類の足跡と、人間の可能性の高い足跡を検出した。土壙状の窪地を2基検出した。

第4層：灰黄褐～黄褐色を基本の色調とする細粒～中粒砂層で、植物の根の痕跡が多い。層厚は約40cmであった。

第5層：調査区西北部と南半部を除く限られた範囲に分布する泥層で、最大層厚部は中央部にあって40cm、北部と南部では薄く堆積している。場所によっては数層に分かれ、暗灰褐～黒褐色シルト～中粒砂層で構成されている。上面には鹿と思われる偶蹄類の足跡が広範囲に検出された。

第6層：生物擾乱を受けた黄褐色極粗粒砂層で、西南部は砂質である。この層が今回確認した最下層である。川の氾濫によって運ばれたものと考えられる。層中から黒色土器が出土した。

ii) 遺構と遺物

平面的に調査を行ったのは第1層上面と第5層上面で、第4層上面は部分的に調査した。

a. 第5層上面の偶蹄類の足跡(図4)

第5層の上面では偶蹄類の足跡を検出した。大きさは一辺約7cm、深さ約1.5cmで、大きさから鹿であろうと考えられる。足跡の方向は東西方向のものが多く、北東～南西方向のものもある。

b. 第3層上面の遺構(図4・6)

調査地南東部の南北1.6m、東西4.4mの範囲で、2種類の足跡を検出した。第5層上面と同じような大きさの偶蹄類の足跡と、人間の足跡である可能性の高い窪み列を検出した。窪みは6基あり、最大長さ24cm、最大幅14cm、深さ1.5～1.8cmである。東北東に歩いたと推測できる。

調査区の北東部には、第2層の砂が壁面に沿って分布する土壙状の窪地が2基あり、遺物が出土している。

SX101 調査地北東隅で検出した窪地で、東西3.3m以上、南北3.2m以上、深さは0.39m以上である。弥生土器1・土師器皿2・須恵器甕3・瓦器椀4・瓦質火鉢5・播鉢6・輸入青磁碗7・土錘8などが出土した。弥生土器1は緩やかに外反する口縁で、ハケの後、ナデ・ミガキを施し、胎土に角閃石を含む畿内第Ⅱ様式の甕である。土師器皿2は「て」の字口縁の系譜を引く器形で12世紀頃のものである。瓦質火鉢5は奈良火鉢、播鉢6は14～15世紀頃のものである。青磁碗7は龍泉窯系のもので、出土した遺物から、この遺構は14～15世紀頃に埋まったものと思われる。

SX102 SX101と同様に調査地の北東部に拡がっている土壙状の窪地で、壁面に沿って第2層の砂が入り、その上を灰色粗粒砂が埋めている。東西5.7m以上、南北7.5m以上、深さは0.66m以上であ



図4 第5層上面・第3層上面遺構等平面図

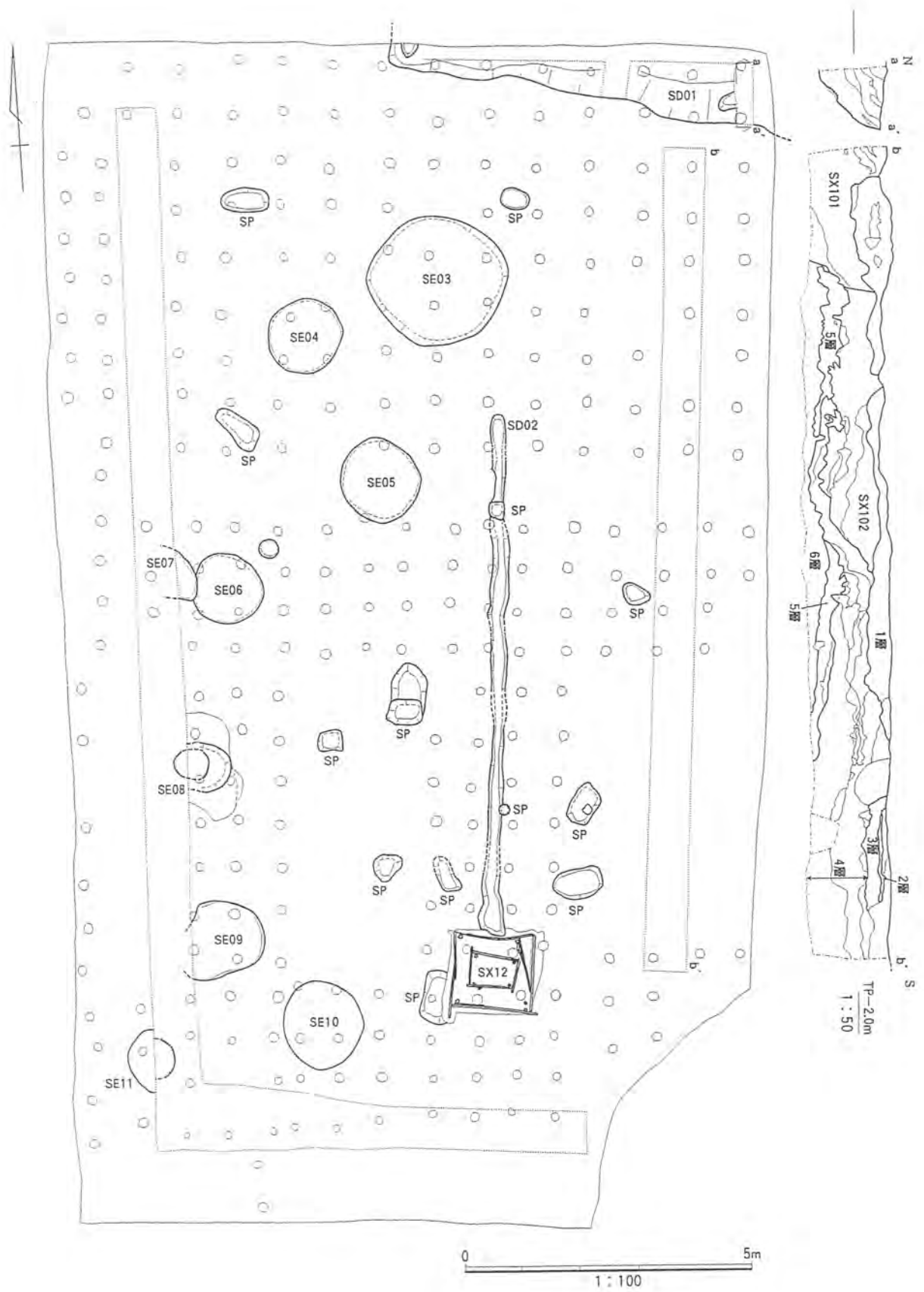


図5 地層断面図及び第1層上面の遺構平面図

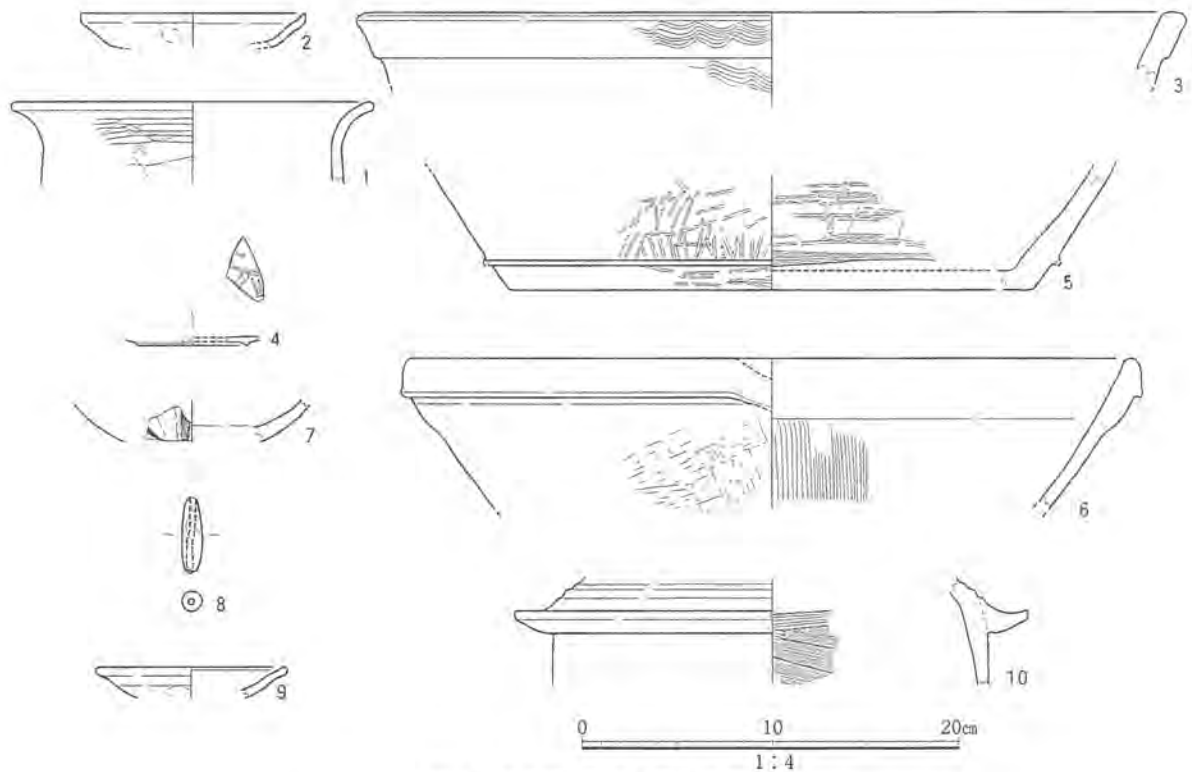


図6 第3層上面の遺構出土遺物
SX101(1~8)、SX102(9・10)

る。埋土から土師器皿9・瓦質羽釜10などが出土した。この遺構もSX101同様14~15世紀頃のものであろう。

c. 第1層上面の遺構と遺物(図5~9)

中世の溝SD01と、近世の井戸9基とピットを検出した。ピットはまとまりがなく、組み合うものが不明である。確認できた井戸側は桶側(SE08・10・11)と、瓦塼を使ったと思われるSE06で、他は不明である。ほかに溝1条と板囲いの遺構を検出したが、これらは近代に属するものと考えられる。

SD01 両端が調査地外になるので幅も長さも明らかでないが、北から東の方向に折れ曲がり、幅1m以上、深さ1.1m以上の素掘りのV字状の溝である。瓦質土器羽釜11・瓦質土器甕・常滑焼甕の細片が出土した。これらの遺物からこの溝が埋まったのは15世紀後半と考えられる。

SE06(図5) 掘形の直径は約0.6mである。水が湧いて不明であるが、井戸専用の瓦塼12が出土したので、瓦塼積みの井戸であろう。この瓦塼12の凸面は平坦で刻み目はない。相伴している肥前磁器染付蓋13はコンニャク印判の押された18世紀のものである。この頃には井戸専用瓦塼の凸面にまだ刻み目が付けられていなかったことがわかる。

SE08(図5) 掘形の直径は約0.8m、井戸側の桶の直径は約0.5mである。掘形内からは近世初頭の備前焼甕・播鉢14などが、中からは土師器や近世平瓦などが出土した。

SE09(図5・7) 掘形の直径は約0.7mで、肥前磁器色絵碗15・皿16が、埋土からは軒丸瓦17が出土した。15・16は火を受けており、文様から18世紀前半頃のものと思われるので、当地も類焼したという妙地焼(1724年)時の被災の可能性はある。

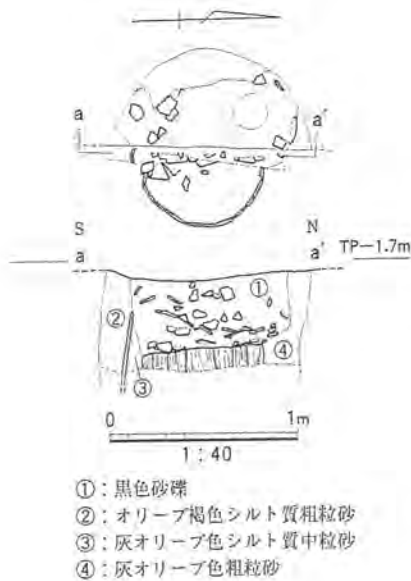


図7 SE09平面図・断面図

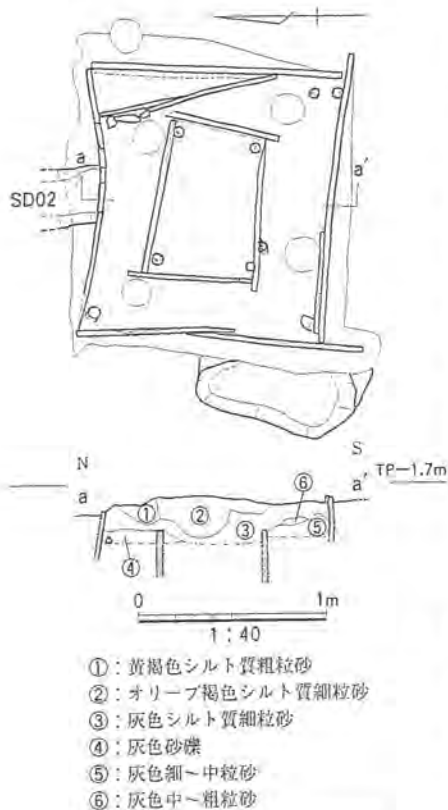


図8 SX12平面図・断面図

SE11(図5) 掘形の直径は約1.1m、井戸側の桶の直径は約0.7mである。18世紀前半頃の陶磁器が出土した。

SD02(図5) 調査地の中央から南のSX12の間の長さ約8.8mを検出した南北方向の溝である。幅は0.35m、深さは0.15mである。中からは近世以降と思われる瓦片が出土した。北端は浅くなって終わり、南はSX12の側板に切込みを入れてつなげている。

SX12(図8) 一辺約1.5mの方形の板囲いの遺構で、内側にも一辺0.53~0.8mの歪んだ方形の板囲いがある。2重に板で囲う例は井戸があるが[清水和明1989]、井戸なら上部が壊されて1段分だけが残ったのか、SD02との関係など不明な点が多い。内側の板囲いの中から鏝が3点出土した。板囲いに使われていた釘は丸釘であるので、SD02とSX12は近代に入るものと思われる。

d. 各層の遺物

今回の調査で確認した最下層の第6層からは、土師器皿18のほか、11世紀頃の黒色土器碗A類19が出土した。第4層からは「て」の字口縁の流れを汲む土師器皿20が出土した。11~12世紀のものである。また第1~4層の中からは土師器皿21・羽釜22・瓦器碗23などが出土しており、13~14世紀の時期のものである。

3)まとめ

今回の調査地は大川左岸の微高地上に位置し[趙哲済2005]、第2~第4の各層は大川によって堆積した砂である。第5層は泥層で、上面で動物の足跡などを検出した。調査を開始した第1層上面では15世紀頃になってこの地で人間が生活したことを示す溝を検出した。第2層から出土した遺物の中には弥生土器を含むほか、中世の遺物が豊富であることから、調査地周辺の大川に面した微高地上には弥生時代や中世の集落があった可能性がある。近世は町屋として栄えた地域であったことが多くの井戸から推測できる。

本調査で検出した遺構は多くはないが、各層の状況や遺物から中世~近世の当地区の状況が一部ではあれ明らかになったのではないと思われる。

今後、周辺部でのさらなる調査成果の蓄積をまって検討を加えたい。

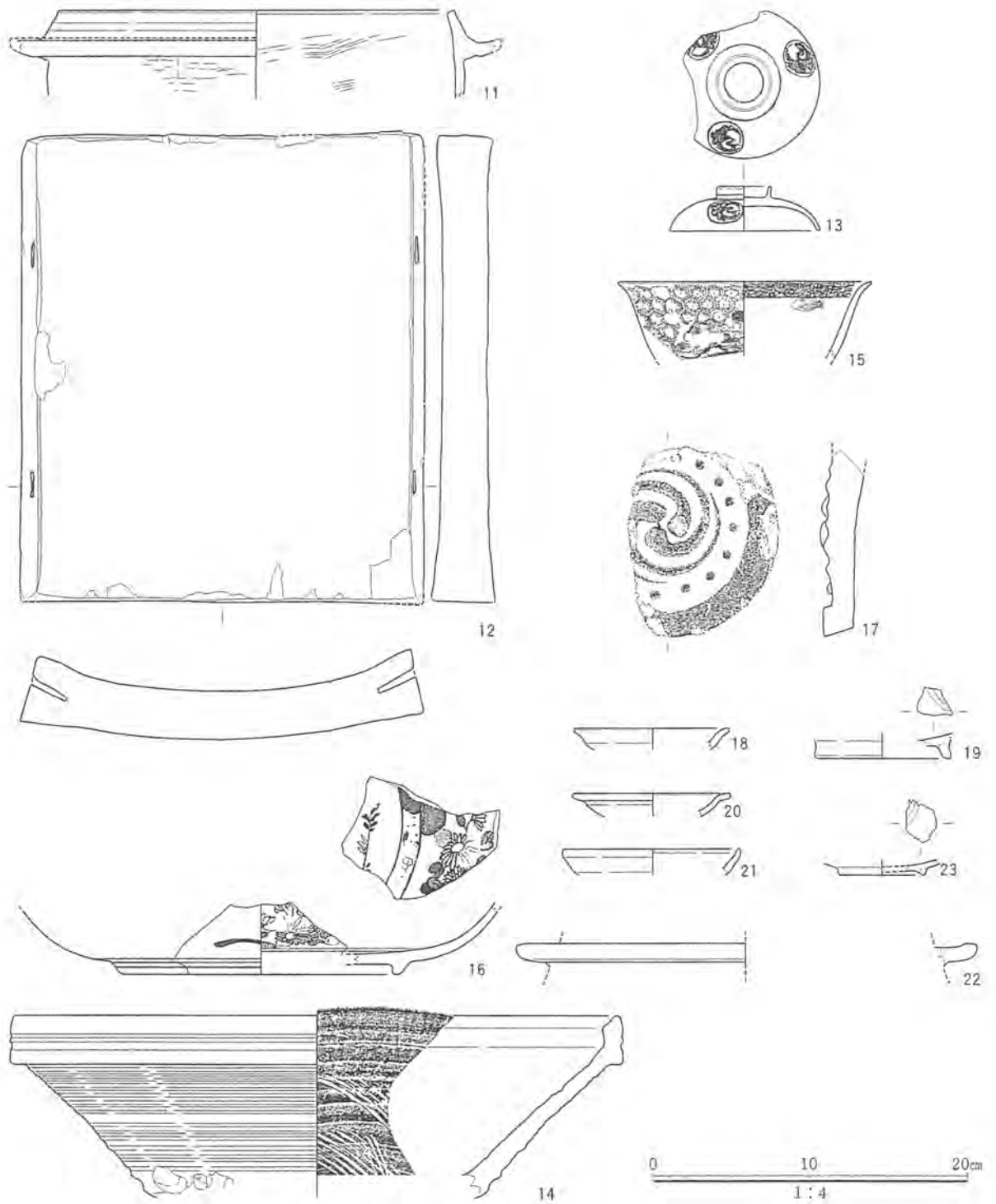


図9 第1層上面検出遺構と各層出土遺物

SD01(11)、SE06(12・13)、SE08(14)、SE09(15～17)、第6層(18・19)、第4層(20)、第1～4層(21～23)

参考文献

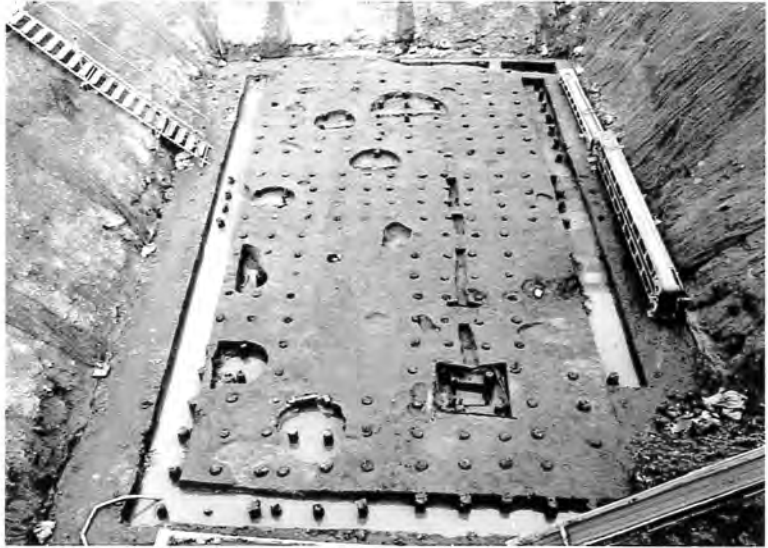
大阪市文化財協会2004、『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.1-7

清水和明1989、「遠里小野の玉手箱」：大阪市文化財協会編『葦火』20号

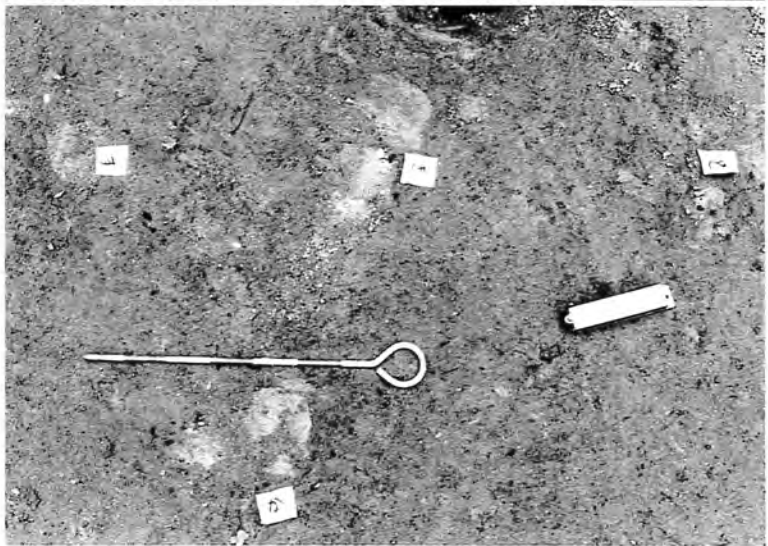
趙哲済2005、「船場・道修町、その土地の成り立ちに迫る」：『第13回道修町文化講演会』道修町資料保存会、pp.9-42

戸田秀典1988、「古代の難波」：『奈良平安時代の宮都と文化』、pp.39-68

第1層上面検出状況
(南から)



第5層上面の足跡
(東から)



第3層上面の足跡
(東から)



SD01
(西から)



SX12
(東から)



南東部断面
(西から)
大川の氾濫によって
堆積した層(第3層)



大坂城下町跡発掘調査(OJ06-6)報告書

調査個所 大阪市中央区備後町2丁目39
調査面積 44m²
調査期間 平成19年2月20日～2月28日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は堺筋と御堂筋に挟まれた街区の堺筋側で、本町通から北に2本目の備後町通(図1)に位置し、近隣には17世紀第2四半期頃の骨加工職人の町屋が検出されたOJ92-24次調査地がある。当地は大坂城下町跡では西部中央に当り、弥生時代後期から近世にかけての遺構・遺物が出土している。

大阪市教育委員会が敷地中央で試掘調査を行った結果、現地表下2.8~3.0mで中世の包含層が確認されたことから、本調査を行うこととなった(図2)。現地表下2.6mまで事業者側が機械掘削を行い、地山層が検出される現地表下3.0mまで、人力掘削により遺構検出しながら、写真撮影・実測などの調査を行うこととした。

2月20日から人力掘削による調査に入り、2月28日に現地におけるすべての調査を完了した。

なお、調査では磁北を方位の基準とし、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±〇mと記す。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第0層：現代盛土層と江戸時代中期以降の地層からなる。

第1層：層厚5~40cmの焼土混り中粒砂層とにおい褐色の灰層からなる。

第2層：層厚20~70cmの整地層で、層厚5~15cmほどの暗灰黄色の薄い灰層や黄褐色中粒砂の薄層が集積して形成されている。SE03、SK15は本層上面から掘込まれている。

第3層：層厚15~40cmのオリーブ褐色中粒砂

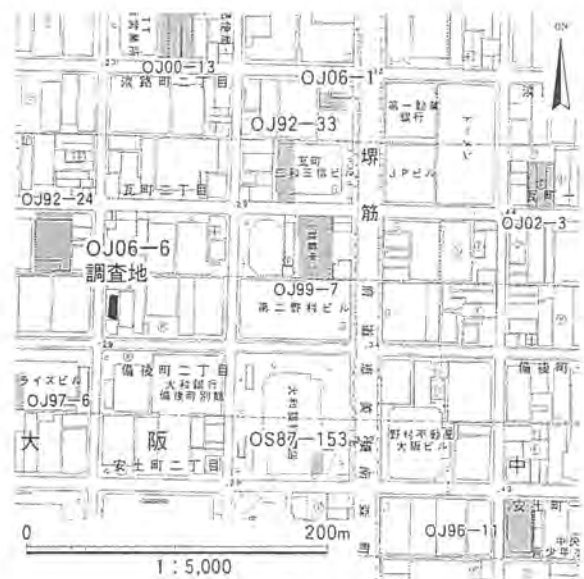


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

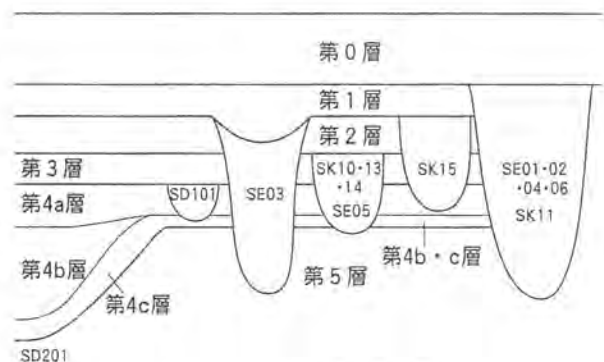
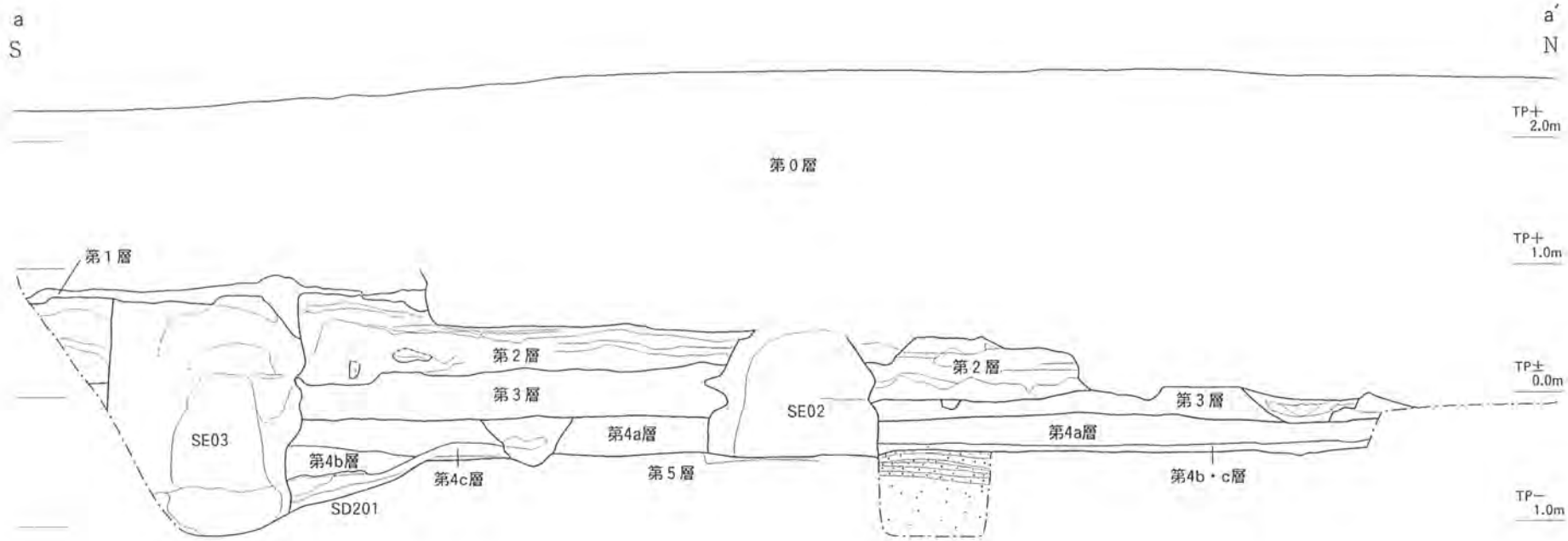
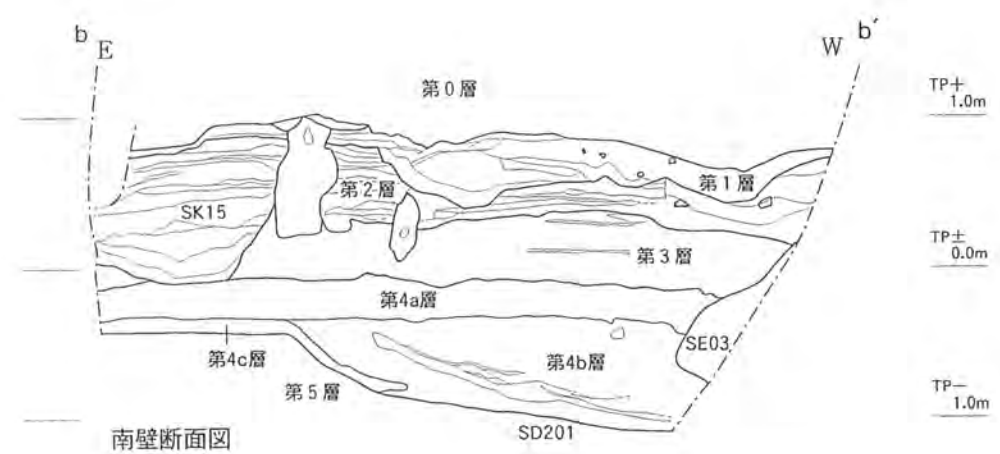


図3 地層と遺構の関係図



西壁断面图



南壁断面图

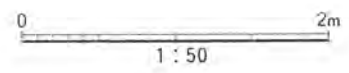


图4 断面图

質シルトからなる整地層で、豊臣後期に施工されたもので、肥前陶器皿10が出土した。SE05、SK10・13・14ほかは本層上面から掘込まれている。

第4a層；層厚20～40cmのオリーブ褐色シルト質中粒砂層で、SD201から溢れ出た氾濫堆積層である。古代の須恵器杯4・壺5・甕6・7、土錘8や、中世の瓦質土器甕9が出土し、上面にSD101、SK102がある。

第4b層；主にSD201内とその周辺に堆積する水成層で、最大層厚70cmを測り、黄褐色粗粒砂からなる。瓦器椀や中国龍泉窯の青磁碗が出土した。

第4c層；やはり主にSD201内とその周辺に堆積する水成層で、層厚10～15cmを測り、暗灰黄色細粒砂からなる。

第5層；上部30cmは層厚5～10cmの褐色小礫と黒褐色粗粒砂の薄層が互層し、それより下位では、黄褐色中粒砂になる地山層である。

ii) 遺構と遺物

a. 第5層上面の遺構と遺物(図5・7)

SD201 調査区の南西隅で見つかった幅3m以上、深さ0.7mで、磁北に対して西に40度振る流路で、瓦器椀1、龍泉窯青磁碗2、平瓦3が出土した。

b. 第4a層上面の遺構(図6)

SD101 長さ2.4m、幅0.5m、深さ0.4mの磁石の東に対して北に15度振る溝である。埋土はオリーブ褐色細粒砂である。

SK102 長径0.8m、短径0.6m、深さ0.45mの平面が楕円形を呈する土坑で、瓦質土器火鉢片が出土している。

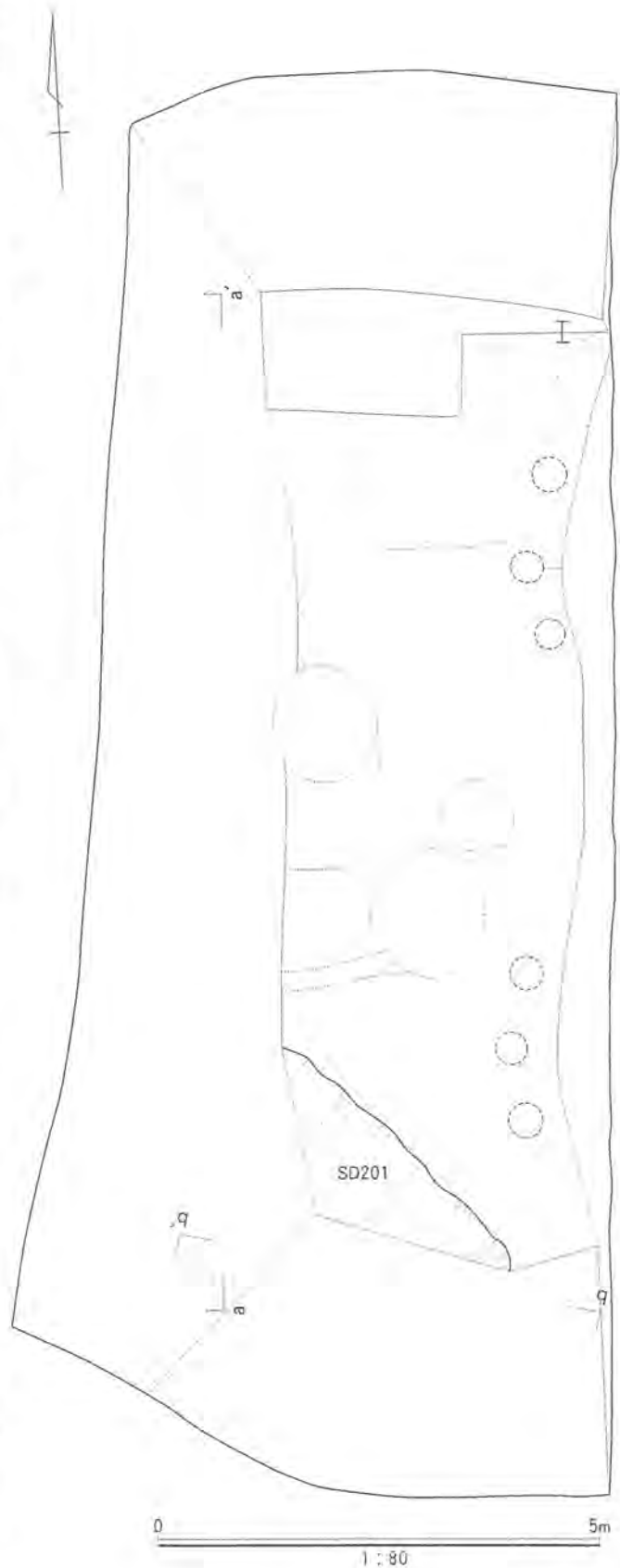


図5 第5層上面遺構平面図

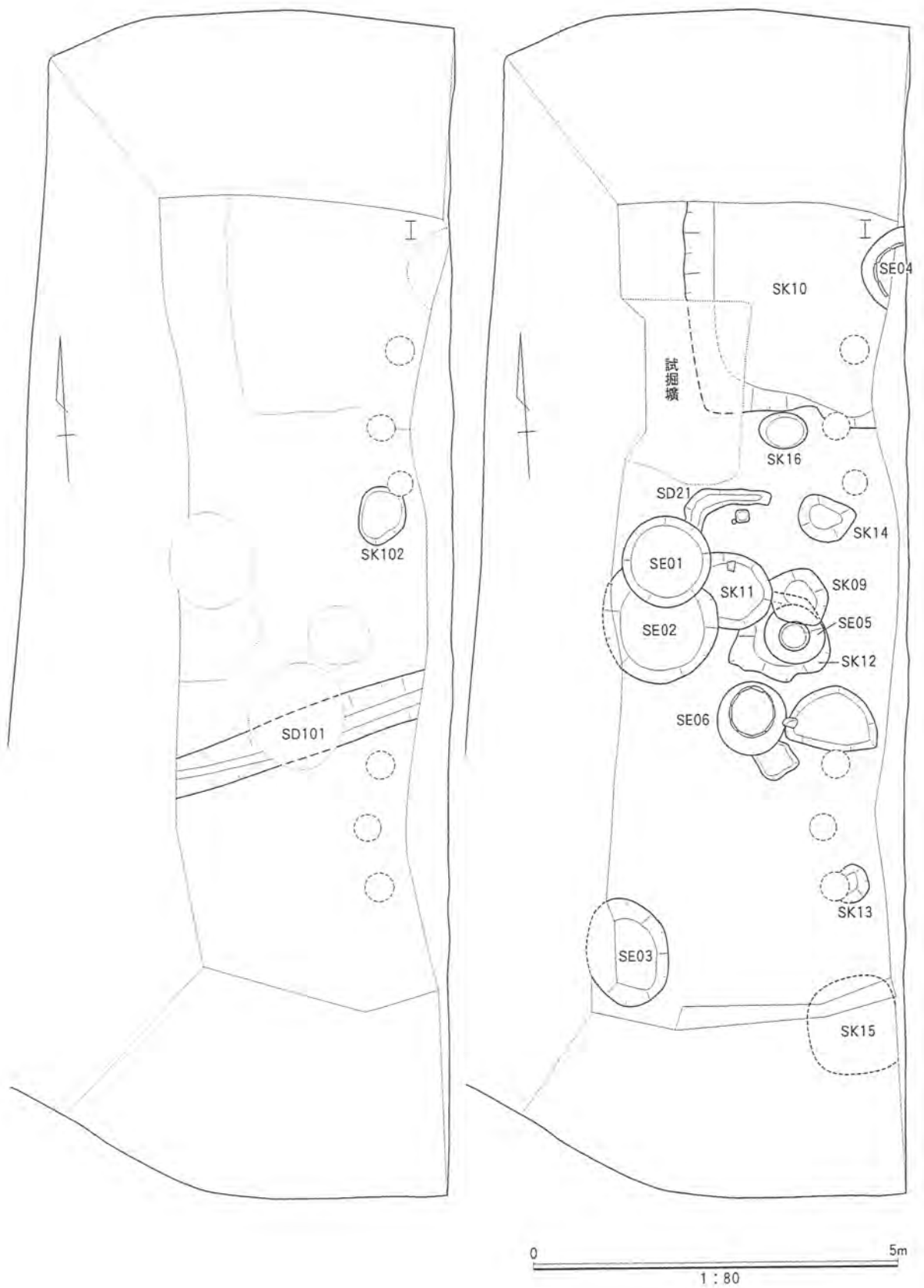


図6 第4a層上面遺構平面図(左)と第3層上面遺構平面図(右)

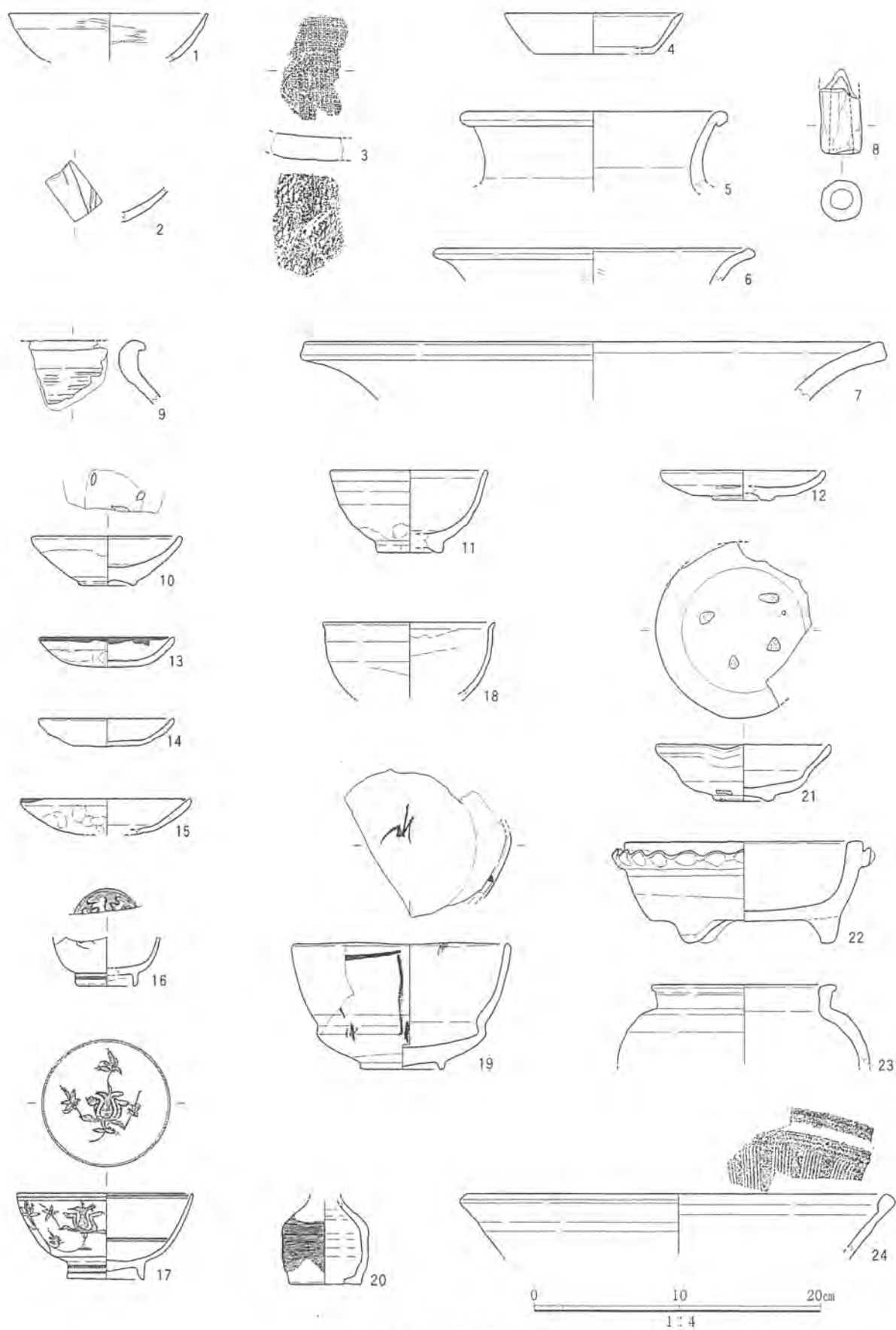


图7 出土遺物実測図

SD201(1~3)、第4a層(4~9)、第3層(10)、SK12(11·12)、SK10(13~24)

c. 第3層上面の遺構と遺物(図6・7)

SE05 調査区中央のSK12の下層で検出された井戸で、直径0.8mの掘形の中央に、直径0.4mの板を用いた水溜を設けている。SK12は本遺構の掘形の可能性もある。

SD21 調査区中央の「く」の字形に曲る幅0.3mの溝で、青花皿片や丹波焼鉢片が出土した。

SK09 調査区中央の直径0.8mの土壌で、瀬戸美濃焼片や肥前陶器片、ヤマトシジミの貝殻が出土した。SK12を切る。

SK10 調査区北部の南北2.9m以上、東西3.1m以上の方形の土壌で、土師器皿13・14・15、青花碗16・17、肥前陶器碗18・鉢19・瓶20・皿21、瓦質土器火鉢22、備前焼壺23、丹波焼播鉢24、ハマグリ・アカガイ・アカニシ・アワビ類・サザエなどの貝殻が出土した。20は藁灰釉で、21は砂目跡で、24は櫛を用いてすり目を施している。17世紀第2四半期の遺構と考えられ、写真図版に示した加工痕のあるウシ・ウマの骨、鯨の椎骨、炉壁、スラッグ、砥石などが見つかった。前者は骨細工職人の、後者は金属加工職人の活動を示すものである。加工痕のある骨については久保和士が骨細工工程を、①骨端除去→②挽割り→③粗材整形→④細部加工→⑤仕上げの各工程に分けている[久保1999]が、①～③の遺物がすべて見られる。ただし、④・⑤は工程上、ほとんど遺物を残さないから、①～⑤のすべての工程がここで行われた可能性を残す。

SK12 調査区中央の直径1.2mの不整形の土壌で、肥前陶器碗11・皿12、ハマグリ・アワビ類の貝殻が出土した。

SK13 調査区南東部の直径0.5mの小土壌で、肥前陶器片が出土した。

SK14 調査区中央の長径0.8m、短径0.6mの土壌である。

d. 第2層上面の遺構と遺物(図6)

SE03 調査区南西隅の掘形の直径1.5mの井戸で、青花碗・皿片、中国製赤絵皿片およびハマグリ・アカガイの貝殻が出土した。

SK15 調査区南端の長さ1.3m以上、深さ0.9mの土壌で、薄い灰層で埋っている。

表 OJ06-6次調査出土貝類一覧

地層・遺構名	ハマグリ	チョウセンハマグリ	アカガイ	サルボウ	イタヤガイ	ヤマトシジミ	アカニシ	アワビ類	サザエ
SE03	1		●						
SK09						1			1
SK10	32	1	4	1	2		2	2	殻7 蓋3
SK11	17							●	
SK12	48							1	
第2・3層ほか	6		●	1			●	1	殻5 蓋1

表註1. 同定は現生標本と図鑑[吉良哲明1954・波部忠重1961]を基に、池田研が行った。個体数に関して腹足網は殻口数を、二枚貝網は左右殻数の多数の方を原則として採用している。

- は殻頂・殻口が出土しておらず個体数は不明であるが、破片から存在が確認されたもの
- イタヤガイはいずれも欠損しているため貝杓子か否か不明
- SK10、第2・3層他のサザエは有棘型各1個体を含む

e. 第1層上面の遺構と遺物(図6)

SE01 調査区中央の直径1.2mの井戸でSE02を切る。

SE02 調査区中央の直径1.7mの井戸でSK11を切る。

SE04 調査区北東隅の掘形直径1.2m、井戸瓦組みの井戸側が直径0.8mの近代の井戸である。

SE06 調査区中央の掘形直径1.0m、井戸瓦組みの井戸側が直径0.7mの近代の井戸である。

SK11 調査区中央の長径1.2m以上、短径1.0mの楕円形を呈する土壌である。ハマグリ・アワビ類の貝殻が出土した。

3)まとめ

今回の調査地はOJ92-24次調査地の南東30mに位置し、17世紀中葉においても町場の縁辺部と考えられる場所の発掘調査であった。17世紀中葉のゴミ穴からは骨細工の各工程の加工痕のあるウシ・ウマの骨やスラッグが出土したほか、薄い灰層の堆積を確認した。また、15世紀を下限とする流路を検出したことは中世の当地の土地利用を知る上で、特筆に値する。大坂城下町跡北部の高麗橋から平野町一带に水域が推定されており[趙2004]、大きな中世の南北流路(OJ91-2、OS86-20)も検出されていたが、室町時代においてその南西部に流路が存在したことがわかった。

また、江戸時代の遺構・地層から出土した貝類は、ハマグリを主体とし、チョウセンハマグリや有棘型のサザエなど遠隔地で採取されたとみられるものが含まれていた。

今回、大坂冬ノ陣に伴う焼土層は検出されなかったが、今後の周辺部の調査で、豊臣時代の城下町の様相が一層鮮明になるものと思う。

参考文献

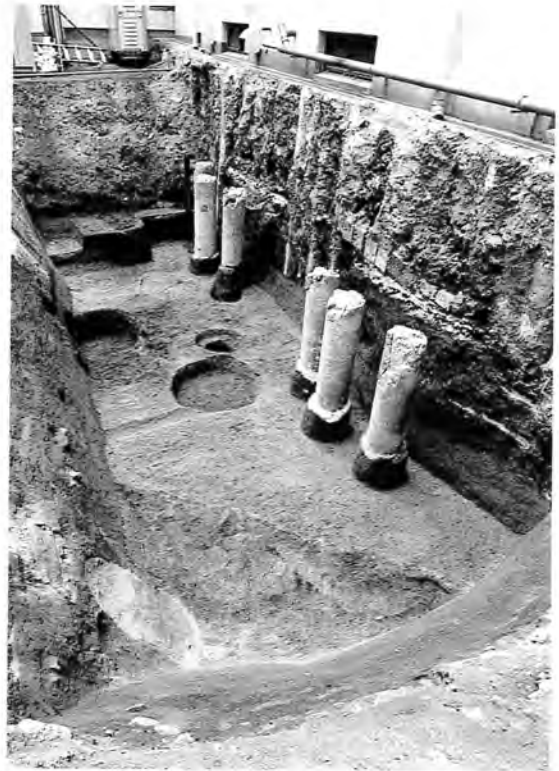
吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』 保育社

久保和士1999、「動物遺体からみた町場縁辺の開発」：『動物と人間の考古学』、pp.193-240

趙哲済2004、「第1節 地形と地質」：大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.1-7

波部忠重1961、『続原色日本貝類図鑑』 保育社

第5層上面 全景
(南から)



第5層上面 SD201
(北から)



SK10 出土加工痕のある骨
上左端：ウシ脛骨(左)遠位端
上左から2番目：ウシ脛骨(左)遠位端



III 天王寺区

上本町南遺跡発掘調査(US06-1)報告書

調査個所 大阪市天王寺区上汐4丁目4-2・11
調査面積 120m²
調査期間 平成18年6月5日～平成18年6月16日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、高橋工

1) 調査にいたる経緯と経過

上本町南遺跡は、市内を南北に延びる上町台地上に位置し、南の四天王寺にほど近い。近隣における既往の調査件数はあまり多くないが、主要な調査としては、北約100mで奈良時代の溝や柱穴が検出されたUS04-2次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005a]、南約400mで四天王寺外郭の区画施設とみられる室町時代の溝が発見されたUS04-1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005b]などが行われている(図1)。また、US04-1次調査の北東では、「米家」と記した奈良時代の土器が出土したNW81-4次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983]が行われている。

大阪市教育委員会による当地の試掘調査では、現地表下0.7mで地山層と柱穴が確認されたため、教育委員会と事業主とが協議を行い、本調査を行うことになった。調査区は敷地東南部に設定した(図2)。現代の盛土と近世の地層を重機で除去し、それ以下を人力で掘削した。必要に応じて、実測図・写真による記録を作成し、調査終了後は埋戻しを行った。調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、挿図中では「TP+〇m」と記した。本報告では磁北と座標北、2種類の指北記号を用いている。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第0層：近現代の盛土層で、層厚は30~140cmである。

第1層：褐色中粒砂やにぶい黄褐色粗粒砂などからなる盛土層である。層厚は最大60cmで、3層



図1 調査地位置図

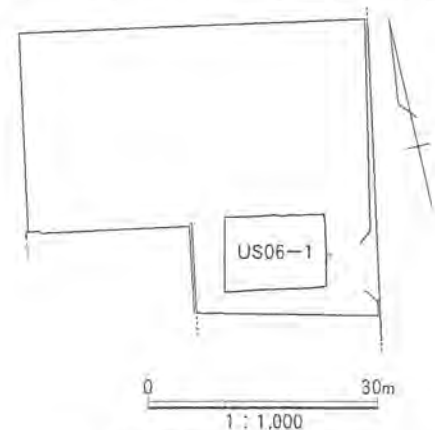


図2 調査区配置図

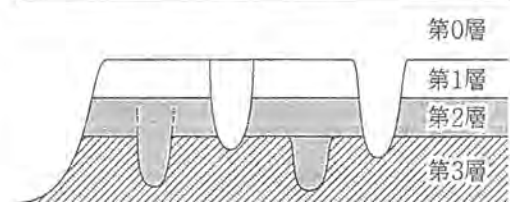


図3 層序模式図

に細分される。肥前陶器などを含み、近世の地層である。

第2層：暗褐色シルト～極細粒砂からなり、層厚は最大20cmである。本層上面で井戸や土壇などの遺構を検出した。また、本層内で古代の建物跡などを検出した。土師器・須恵器が出土し、その形態から判断して奈良～平安時代の地層である。

第3層：にぶい黄褐色粘土質シルト～極細粒砂からなる地山層である。

ii) 遺構と遺物

a. 古代の遺構(図5～9)

第3層上面で、掘立柱建物・井戸・落込み・小穴群を検出した(図4)。

掘立柱建物

SB301(図5) 調査区の東側で検出された。梁行2間、桁行2間以上の側柱建物である。柱間の寸法は、梁行で2.39m、桁行で2.43mである(平均値；以下同)。柱穴の平面形はおおむね隅丸方形を呈し、一辺0.8mほどである。掘形の深さは0.4mほどであるが、妻柱はほかよりも0.25mほど浅い。柱の痕跡は直径0.25mほどであった。図化できるものはなかったが、掘形から奈良時代の土師器杯Aの破片が出土した柱穴があり、本建物は同時代に属する。

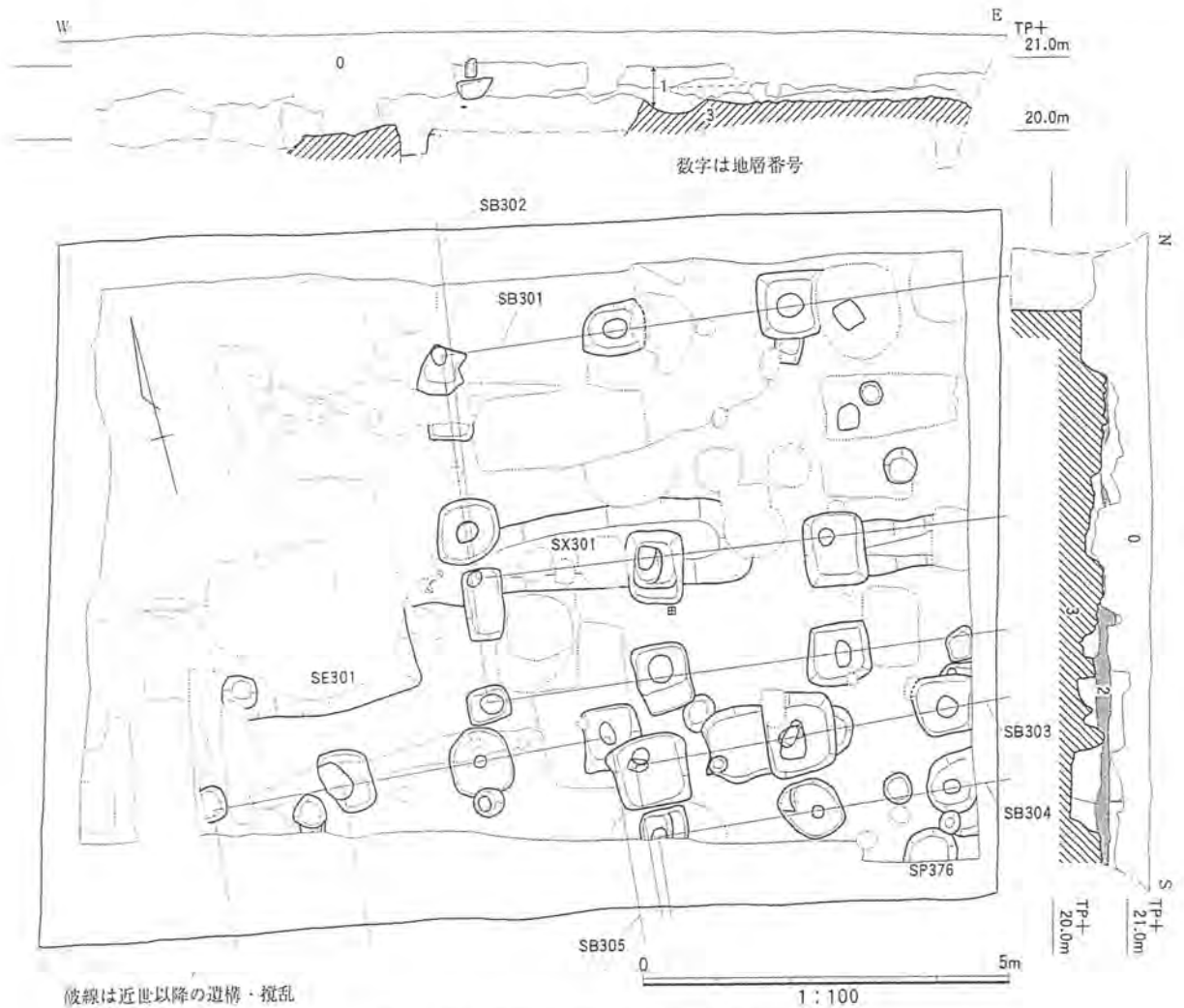


図4 第2層内検出遺構平面図・地層断面図

SB302(図6) 調査区の北東側で検出された。梁行2間以上、桁行2間以上の側柱建物として復元した。柱間の寸法は、梁行で約2.4m、桁行で2.44mである。柱穴は、平面形がおおむね隅丸方形を呈し、長辺は1mほどである。掘形の深さは0.4mほどで、柱の痕跡は直径約0.25mであった。SP324から須恵器小皿13が出土したほか、図化できるものはなかったが、土師器杯Aの破片が出土した柱穴があり、本建物は奈良時代に属する。規模や位置からみて、本建物はSB301と建替えられた可能性があるが、先後関係は不明である。

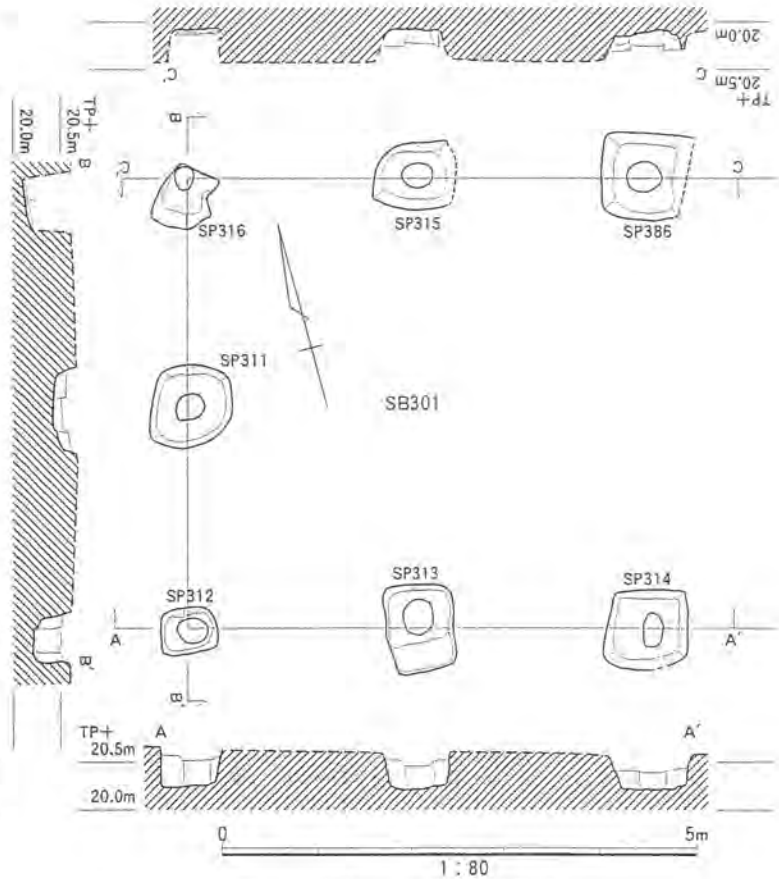


図5 SB301 平面図・断面図

SB303(図7) 柱穴3基のみを調査区の東南隅で検出した。柱間の寸法は2.15mである。柱穴は、平面形がおおむね隅丸方形を呈し、一辺約1mである。柱の痕跡は直径0.2mほどであった。SP331・332では柱痕跡のほぼ直下に根石とみられる石が置かれていた。SP332の掘形は深さがほかの2基より0.1mほど浅い。このことから、

この柱穴を妻柱とみて南北に長い側柱建物である可能性もあるが、確定できない。SP332からは土師器杯A8が出土しており、本建物は奈良時代に属する。

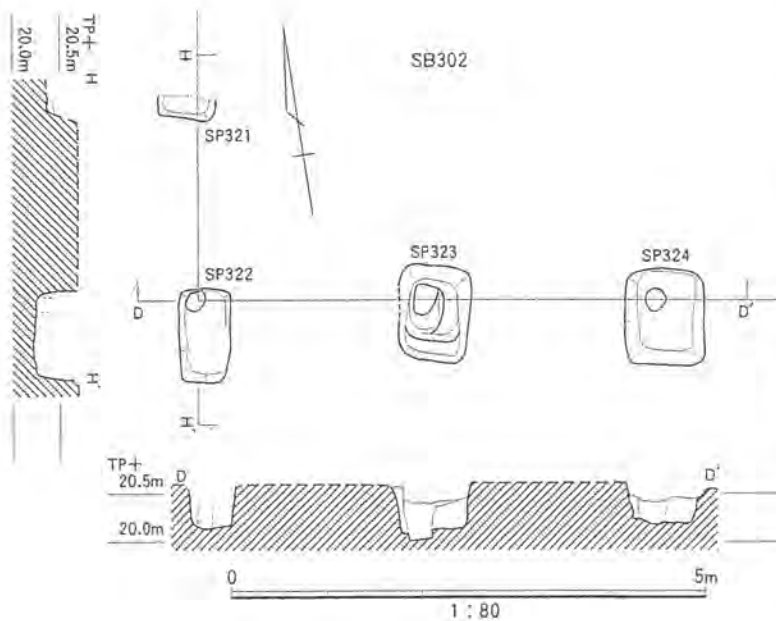


図6 SB302 平面図・断面図

SB304(図7) 柱穴3基のみを調査区の南東で検出した。柱間の寸法は2.03mである。柱穴は、平面形が不整な楕円形を呈し、長径で0.8mほどである。SP342からは緑釉陶器杯15が出土しており、本建物は平安時代(9世紀前半)に属する。位置関係や柱掘形の深さの特徴からSB303が建替

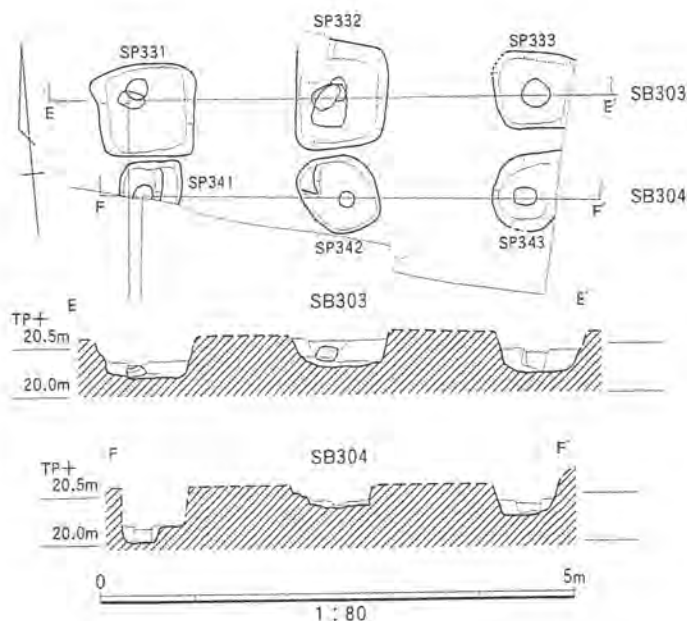


図7 SB303・304 平面図・断面図

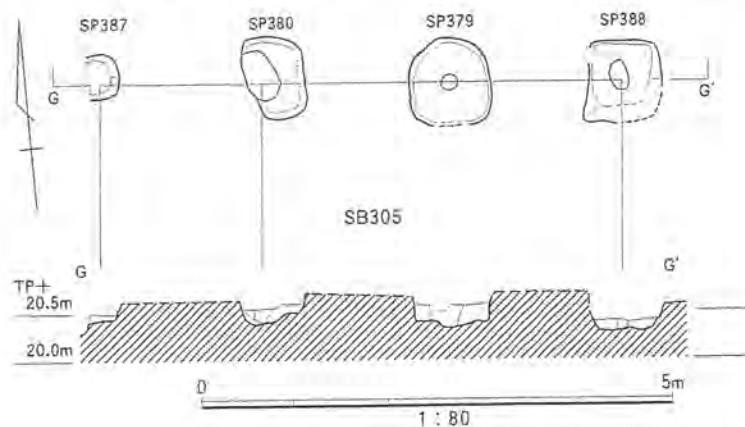


図8 SB305 平面図・断面図

えられたものと考えられる。

SB305(図8) 柱穴4基を調査区の南で検出した。柱間の寸法は1.89mである。東側の柱穴3基に比べて、西側のSP387はひと回り小型である。このことから、SP387を庇の柱穴とし、西面に庇をもつ南北に長い側柱建物の一部と考えた。SB303に切られている。図化できるものはなかったが、土師器杯Aの破片が出土した柱穴があり、本建物は奈良時代に属する。

以上の掘立柱建物は、すべて同時に存在したとは考えられない。切合い・位置関係と出土遺物を参考にすれば、SB305→SB302・303→SB301・304の順が想定されるが、各期の中の並存関係については判断材料がなく、決定できない。いずれにしても3時期以上にわたって、建物群が継続したことは確かである。方位は、建物間で微妙に差があるものの、磁北から数度東に振っており、おおむね正方位に合わせて建てられていると考えてよい。

その他の遺構(図4・9)

SE301 中心部を近世の井戸に攪乱されており、東西2.5m、南北1.1mが遺存していた。本来、平面形は方形であったと考えられる。地山や黄褐色細～中粒砂の偽礫で埋められており、深さ約1.3mまでが遺存していた。平面形態や深さから井戸と考えた。埋土から土師器鉢12・須恵器杯A10が出土した。また、近世の井戸からは須恵器杯B11が出土しており、本遺構を破壊した際に混入したものとみられた。これらの遺物からみて、本遺構は奈良時代に属する。

SX301 調査区中央で検出された。東西両端を攪乱されて平面形態・規模は不明であるが、東西4.5m以上、南北1.2mである。深さは約0.3mで、断面形はほぼ半円形を呈する。埋土は大きく2層に分かれ、下層は人為的に埋戻し、上層は自然に埋没した痕跡がみられた。SB301・302に切られる。上層から、土師器杯A1～7、同甕16～18、製塩土器14など、多くの遺物が出土し、ごみ穴として利用されていた可能性がある。

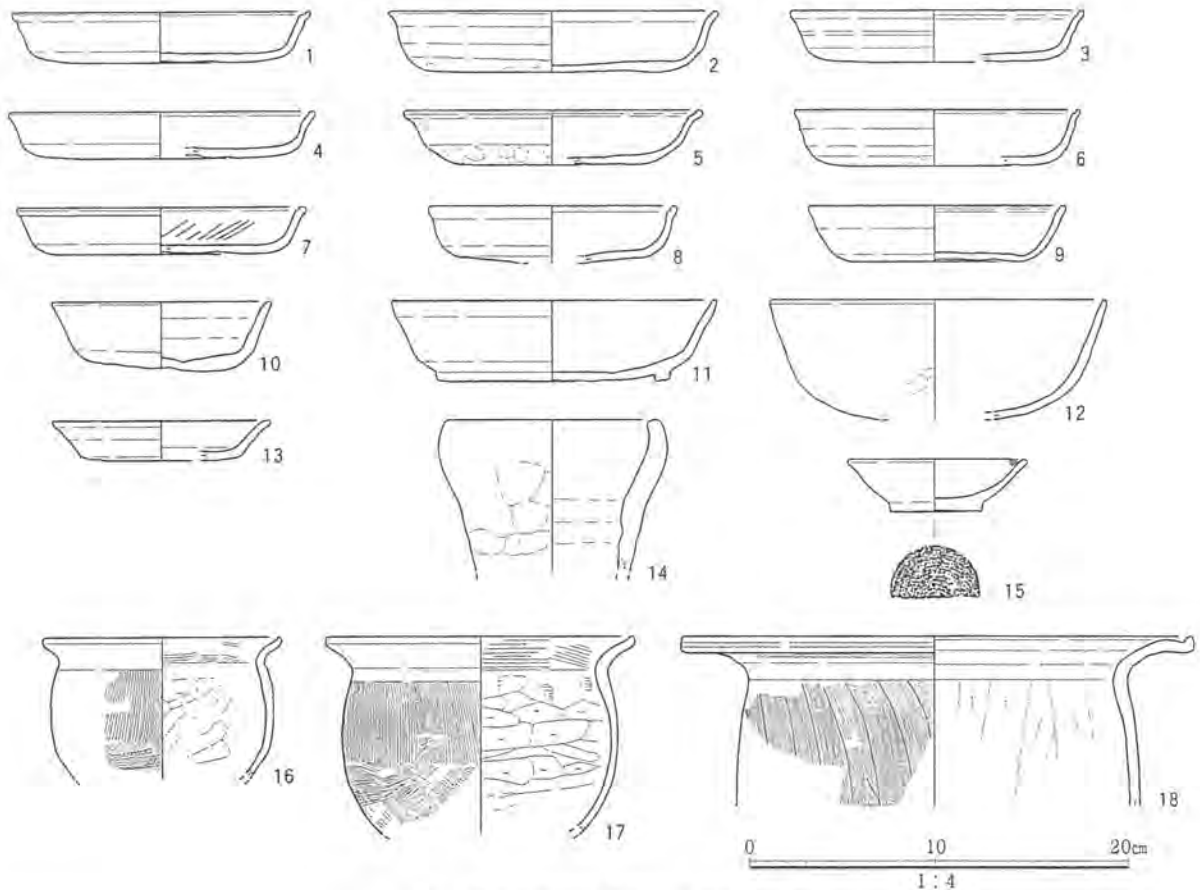


図9 第2層内検出遺構出土遺物実測図

SX301(1~7・14・16~18)、SB303(8)、SP376(9)、SE301(10・12)、SE301上の攪乱(11)、SB302(13)、SB304(15)

小穴群(図4・9)

建物を構成する柱穴以外にも小穴群が検出された。SP376のように奈良時代の土師器杯A9が出土し、前述の建物群に含まれるべきものもあるが、その他の多くは直径0.3mほどの小さなもので、埋土も建物群とは異なり、別の遺構群を成すものとみられた。SB301との切合い関係から、建物群に先行することは確実であるが、時期を決定できる遺物がなく、詳細は不明である。

以上、古代の遺構群の年代については、出土した土師器杯など多くのものの形態が平城宮Ⅳ・Ⅴ[奈良国立文化財研究所1976]に併行し、8世紀の後半以後のものと思われる。また、緑釉陶器が出土したことから、下限は平安時代、9世紀中頃に求められる。

b. 近世の遺構

第1層の基底面で、井戸・土壇・溝・小穴・落込みを検出した。まとめて遺物が出土した代表的なもののみを報告する(図10・11)。

SE101 直径1.0m、深さ1.2m以上の井戸で、明褐色中粒砂で埋戻してあった。青花碗22・瀬戸美濃焼灰釉皿20・21・同鉄釉杯19(図11)などが出土し、豊臣期に属する。

SX102 長径1.6m、深さ約0.3m土壇状の遺構である。底部内面に砂目をもつ肥前陶器碗23・同鉢24が出土し、豊臣期に属する。

その他の遺構で、時期が知れるものは、細片ながら国産陶磁器や関西系陶器などを含み、徳川期以

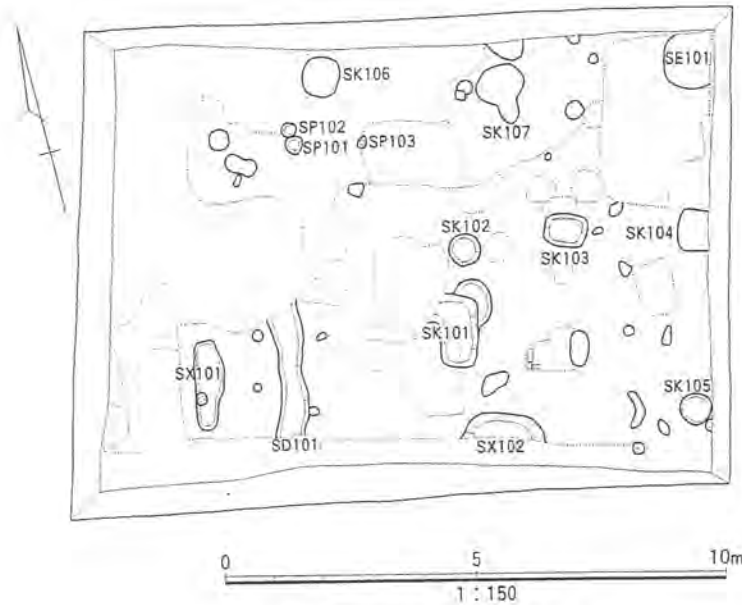


図10 第2層上面検出遺構平面図

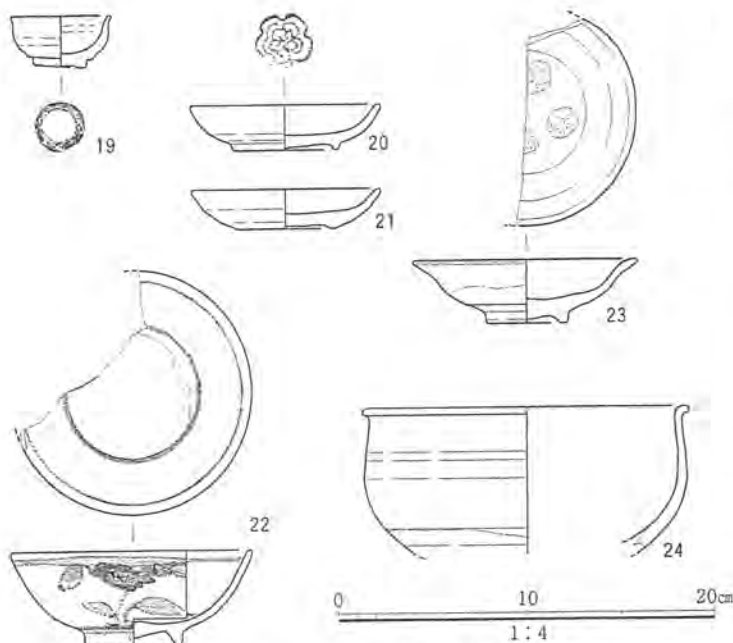


図11 第2層上面検出遺構出土遺物実測図

SE101(19~22)、SX102(23・24)

れたとされてきた。しかし、今回発見の建物群の一部は平安時代初頭にまで継続し、緑釉陶器なども出土した。京の衰退については、難波宮以後に発展した四天王寺近辺や、伶人町遺跡の様相などと併せて、今後、資料の増加を待ちながら検討を続けるべき課題である。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、「難波宮跡(NW81-4次)発掘調査概報」『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

2005a、「上本町南遺跡(US04-2次)発掘調査報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵

降に下るものが多い。

3)まとめ

今回の調査地は、奈良時代難波京の京域内に当る。今回発見の正方位をもって建てられた奈良時代後半から平安時代初頭の建物群が、難波京を構成する一つの要素であることは間違いなからう。井戸を備え、大型の柱穴をもち、3時期以上にわたって維持された建物群が一般庶民の住居跡でないことは明白ではあるが、その性格について述べるには今回の成果からは材料不足である。

前述したように、周辺での調査件数は少なく、発掘調査からみた難波京の具体相は明らかでない。しかし、文献史料によれば、難波市の存在を示す記載や、官人に宅地を与えたという記述もあり、今回の成果を含む既存の考古資料が、これらと何らかの係わりをもつ可能性は高いといえるであろう。

また、今回の調査成果は、奈良時代難波京終末の様相についても重要な資料となった。従来、長岡京への遷都に伴い、難波の町は急速にさび

地発掘調査報告書(2002・03・04)】

2005b、「上本町南遺跡(US04-1次)発掘調査報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵

地発掘調査報告書(2002・03・04)】

奈良国立文化財研究所1976、『平城宮発掘調査報告書』VII 奈良国立文化財研究所学報第31冊

第3層上面検出遺構
(東から)



第3層上面検出遺構
(北から)



第3層上面検出遺構
完掘状況
(東から)



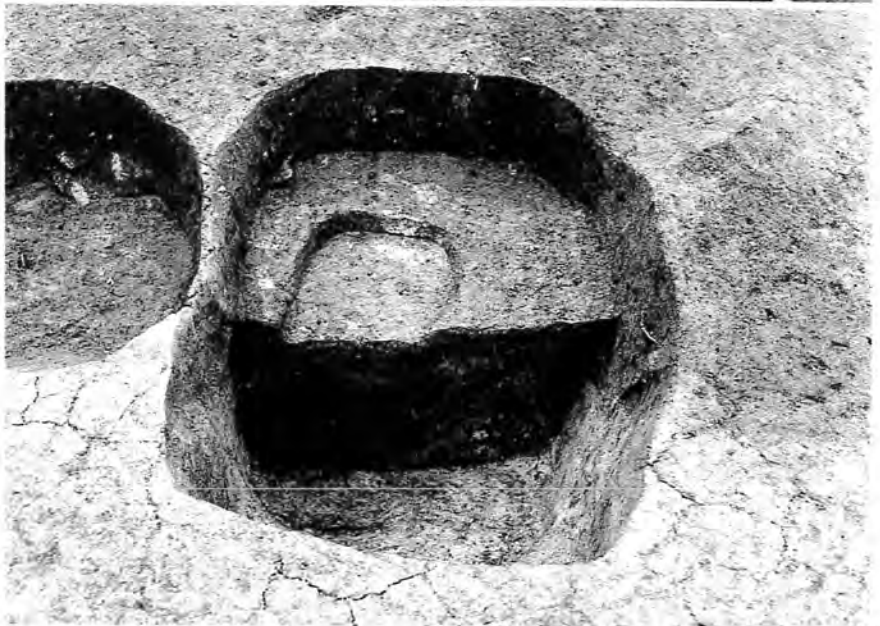
SX301
(東から)



SB303柱穴
(南から)



SB302柱穴
(南から)



上本町南遺跡発掘調査（US06-3）報告書

調査個所 大阪市天王寺区小宮町2・4・5・7
調査面積 5㎡
調査期間 平成19年2月22日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、松尾信裕

1) 調査に至る経緯と経過

上本町南遺跡は大阪市天王寺区のはほぼ中央部一帯に広がる遺跡で、地形的には大阪市内を南北に延びる上町台地の中央部に位置している（図1）。この地域は北部に飛鳥・奈良時代の宮殿遺跡である難波宮跡があり、南には同じく飛鳥時代以来、法灯を守る四天王寺旧境内遺跡が広がっており、それらを包括する推定難波京域内に当る。遺跡の東には推定難波京の朱雀大路跡が南北に延びており、古代の大阪の歴史を考える上で重要な地域といえる。

これまで周辺ではいくつかの調査を行っている。本遺跡の北部では「百済尼」等の墨書土器や和同開珎の枝銭が出土した細工谷遺跡があり、北西部では奈良時代から平安時代の掘立柱建物群を検出したUS06-1次調査地やUS04-2次調査地がある。南西部では「米家」と記した墨書土器が出土したNW81-4次調査地があるなど、奈良時代から平安時代の遺跡が点在していることがわかっている。また、すぐ東には大阪市教育委員会による立会調査が行われた民間マンション敷地がある。この敷地

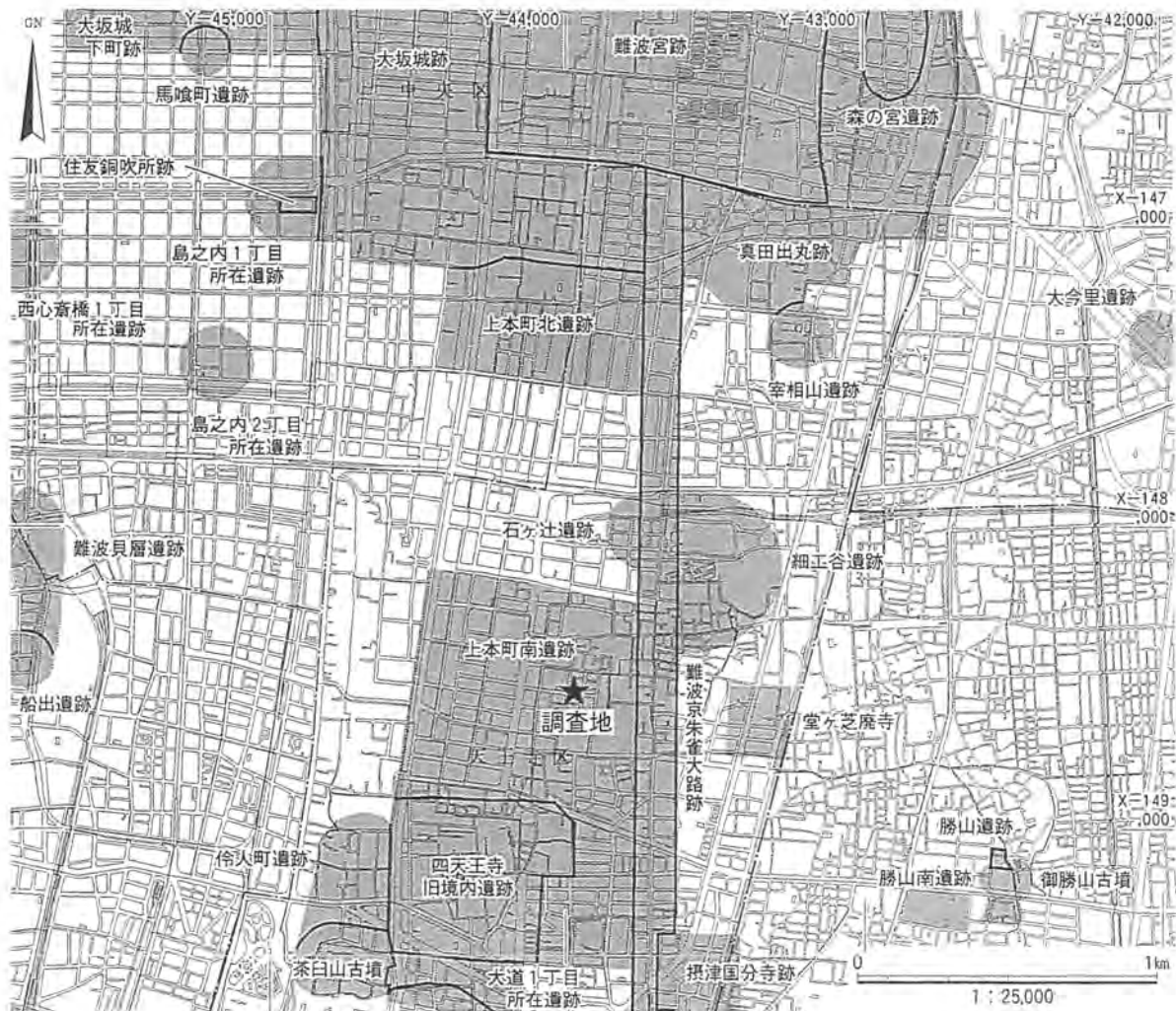


図1 上本町南遺跡の位置

では奈良時代の遺物を含む井戸が見つかった [宮本佐知子・佐藤隆1996]。こうした遺構の分布から、当地には古代の遺跡が存在していることが予想された (図2)。

今回、こうした歴史環境に囲まれた当地において小宮町市営住宅の再建工事が計画されたため、大阪市教育委員会は事前の試掘調査を行うことになり、その調査を大阪市文化財協会へ委託した。

調査は平成19年2月22日に、5箇所の試掘調査トレンチを設定し (図3)、それぞれの壁面の地層堆積状況を確認し、写真による記録を行い、同日すべてのトレンチを埋戻し、作業を終了した。

2) 調査の結果

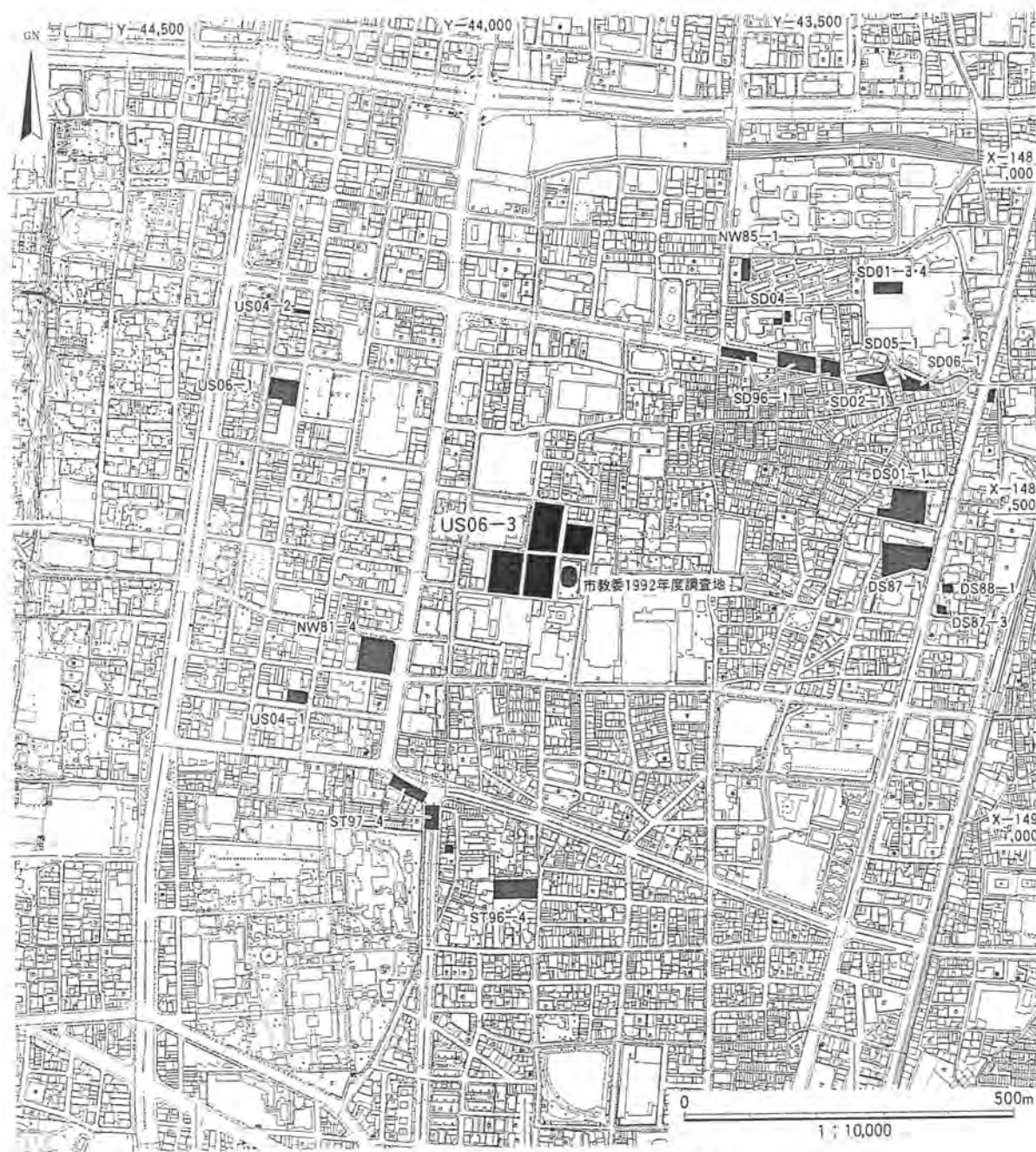


図2 調査地の位置および周辺の主要調査地

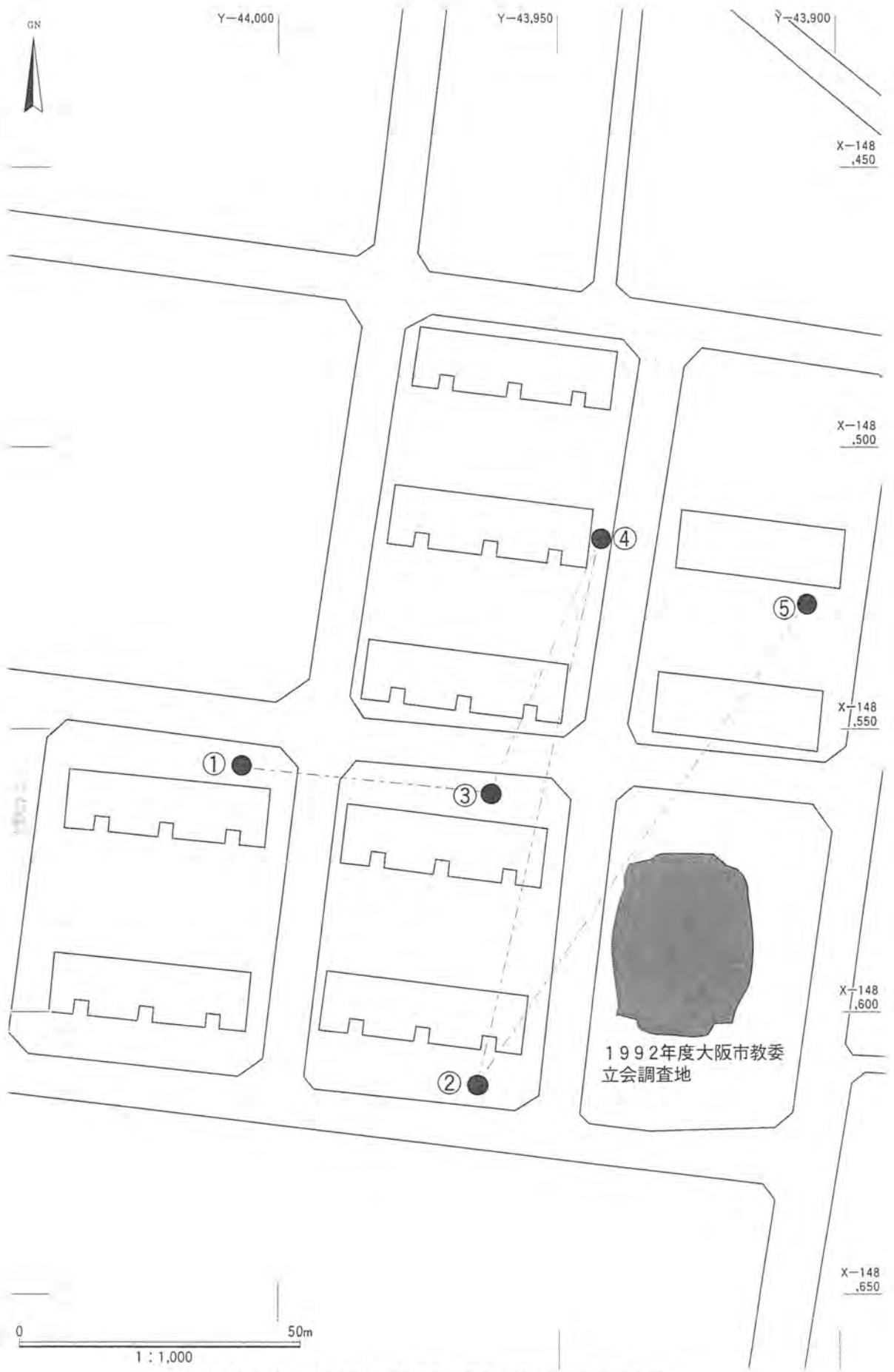


図3 敷地と試掘調査地点の位置ならびに図4地層図の位置

i) 層序

5箇所の試掘トレンチで地層を確認した(図4)。

西部の①トレンチではGL-0.8mまでは近現代の盛土であったが、その直下に洪積層の黄色極細粒砂層を検出した。

その東に位置する③トレンチでは、GL-0.5mまで近現代の盛土で、その下位に近世の暗黄灰色シルト質中粒砂層、中世の包含層と推定する灰黄色シルト質中～粗粒砂層が堆積し、GL-0.8mで洪積層の灰白色細礫混りシルト質細～中粒砂層が検出できた。

これより北北東に位置する④トレンチでは、③トレンチと同様の深さまで近現代の盛土があり、その下位に近世と推定する灰色砂質シルト層・灰白色細礫混りシルト質中～粗粒砂の盛土層、中世と推定する灰色シルト質細～中粒砂層が堆積し、GL-1.0mで洪積層の黄白色細礫混りシルト質細～中粒砂層が確認できた。このトレンチではこの洪積層の上面で奈良時代の遺物を多量に含む落込みを検出した。平面の形状が直径1mを越える円形になることや、落込みの壁面がほぼ垂直になっていることから、井戸と考えられる。

敷地南端部の②トレンチではGL-1.1mまでが近現代の盛土で、その下位に近世と推定する灰黄色シルト質中粒砂層・灰白色シルト質中粒砂の盛土層が堆積していた。この下位に中世と推定する黄灰色シルト質中粒砂層・灰色砂質シルト層・暗灰色砂質シルト層が堆積し、GL-2.6mで洪積層と推定する灰黄色シルト質中粒砂層が確認できた。

最も東に位置する⑤トレンチではGL-1.8mまでは住宅施設の工事で攪乱されており、その下位に灰褐色シルト質細～中粒砂層が確認できた。しかし、その下位を掘削している際に住宅施設の直下から噴出してきた溜まり水でトレンチ内の地層を確認できなくなった。ここで確認した灰褐色シルト質細～中粒砂層は、その色調などから中世の包含層である可能性がある。

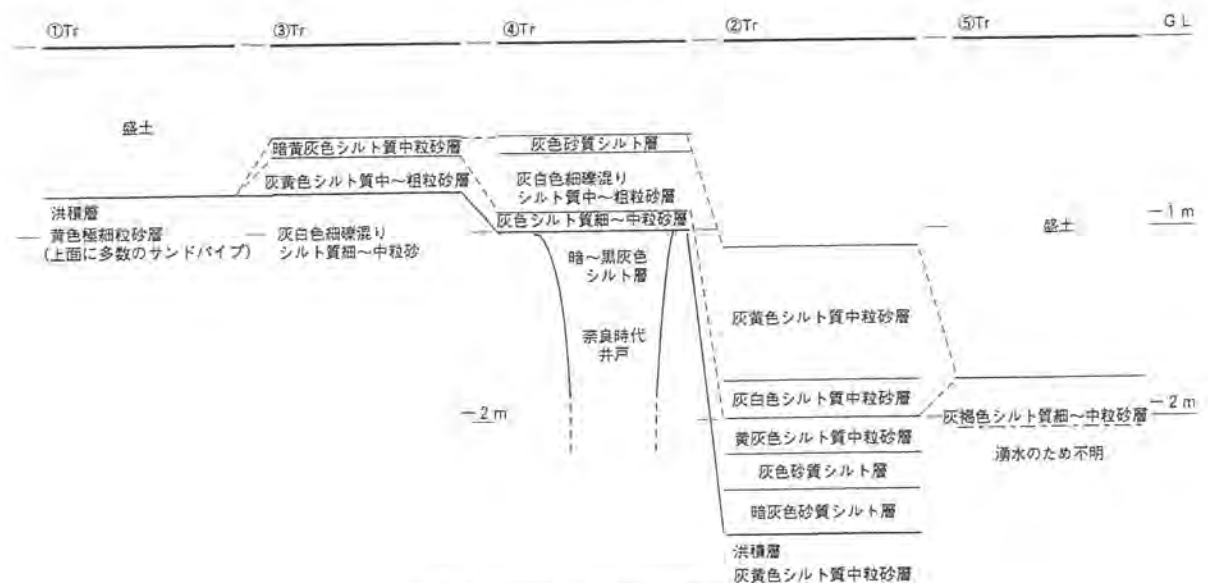


図4 調査トレンチの地層堆積状況

ii) 遺構と遺物

敷地中央北部に位置する④トレンチで、井戸と考えられる落込みを検出した(写真1)。

落込みは試掘トレンチの西側に中心があり、トレンチの東端には洪積層の地山が確認できる。その地山を円形に掘込んでいる。トレンチの南壁に落込みの埋土がわずかに遺存しており、このトレンチでは落込みの南東部を検出している。そのほ



写真1 ④試掘トレンチ検出の井戸

とんどがトレンチの外に拡がっているため詳細は不明であるが、規模は1m以上になると想定できる。また、形状は円形を呈する。確認できる落込みの壁は、検出面より0.9mほど掘削したが、ほぼ垂直になっている。こうした形態から井戸と判断した。

埋土は暗～黒灰色シルトで、その中に奈良時代の土器を大量に含んでいた。

出土した土器には、土師器・須恵器がある。

土師器には杯・杯蓋・皿・鉢などの供膳具のほか、羽釜・甕・鍋などがある。土師器杯・杯蓋・皿には放射状暗文やラセン状暗文が施されている。

須恵器には鉢・甕などがあるが、杯類は出土していない。

土師器の口縁端部の特徴から考えて、奈良時代中頃の平城宮土器Ⅲに属するものである。

iii) 考察

小宮町ではこれまでも、本敷地の南東に接して立つ民間マンションの建設に先立って行われた立会調査でも、同じ時期の井戸が発見されており、さほど距離を置かずに井戸が2基も存在していることが判明する。また、南西方向に約300mの位置にあるNW81-4次調査地でも同様の時期の井戸が見つかっている。この地域には奈良時代の井戸が集中していることがわかる。

これまでも、四天王寺北方のこの地域は、難波京内に存在していた「難波市」の推定地であろうと想定されていたが、この敷地内を詳細に調査することで、「難波市」の位置比定に対する推定の域を脱して、存在そのものを実証できると考える。さらに、この敷地の中央付近は推定難波朱雀大路跡から西へ105m前後の位置に当り、推定の西一坊大路が南北に延びていることになる(図5)。今回の調査地は「難波市」さらには「難波京の条坊」など、難波京に関するこれまで推定の域を脱しえなかった多くの点を明らかにできる地域といえよう。

また、②試掘調査トレンチの地層堆積状況を考えると、本敷地の中央から東部にかけては上町台地を刻む谷が存在しているようである。現状でも本敷地の南にある天王寺区役所から東にある大阪警察病院付近までの地形を見ると、その中間付近が低くなっており、地下に谷が埋没していることが予想される。この埋没谷の北延長部が今回の敷地まで延びている可能性は高い。

『大阪実測図』（図5）を読むと、上町台地東端を刻む「字細工谷」の東にある「字下ノ大道」から南西方向の「毘沙門池」の堤の下まで細長く水田域となっており、周囲が畠となっているのは土地利用が異なっている。「字下ノ大道」から四天王寺東門の東「字下大道口」を通り、北西にある「毘沙門池」へと方向を変えている谷筋が読み取れる。「毘沙門池」はこの谷に面する南東部に堤が築かれており、南東に低くなる谷を塞ぎ止めていることがわかる。「毘沙門池」の北側では、谷筋は読み取れないが、現状の地形から判断すると、今回の調査地へとこの谷が延びているものと推測できる。

先の推定難波京の条坊や「難波市」の存在などにも、この谷は大きく影響を与えているものと考えられる。この谷を越え地形を克服して、条坊が施工されているのか、井戸を囲む建物などの方位は谷の方向の影響を受けていないのか、難波京に係わる長年の課題を解き明かす調査地点といえる。

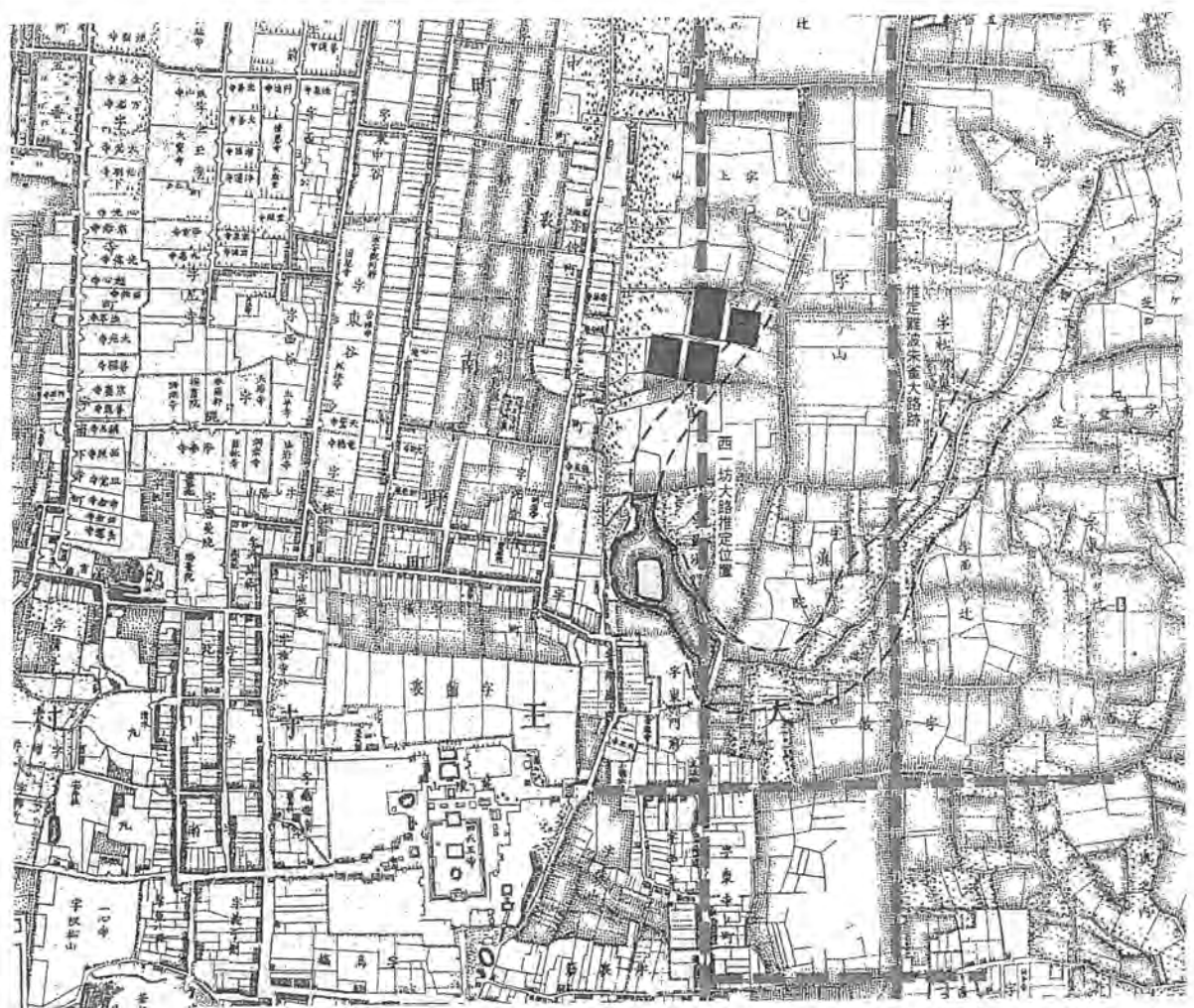


図5 明治時代の地形から推定する上町台地を刻む谷(下図は『大阪実測図』)

3)まとめ

今回の試掘調査の最も重要な成果は、奈良時代の井戸の発見であろう。この敷地にはこの井戸以外にも古代の遺構が広く展開していると考えられる。

また、奈良時代の遺構面を想定すると、本敷地の西部ではGL-0.8~1.0m付近に洪積層が広がっており、そこに奈良時代を中心とする古代の遺構が展開しているものと想定できる。また、敷地中央付近は②トレンチで確認したように、上町台地を刻む谷があり、それを埋めるようにGL-2.0~2.6mもの深さに中世の包含層が堆積し、その下位に洪積層が確認できた。

この敷地が古代から中世へと継続して利用されていることがわかる。

引用・参考文献

宮本佐知子・佐藤隆1996、「四天王寺とその周辺出土の古代瓦」：大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ、pp93-119

④トレンチ試掘風景
左のビルは
1992年度立会調査地
(北から)



④トレンチ
井戸検出状況
(北から)



井戸から出土した土器



大道1丁目所在遺跡発掘調査(DA06-1)報告書

調査個所 大阪市天王寺区大道1丁目13-2
調査面積 21m²
調査期間 平成19年1月23日～1月30日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、京嶋寛

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は天王寺公園内にある茶臼山の東100m、谷町筋を挟んで堀越神社の東向いで、四天王寺の南西150mの地点に位置する。四天王寺の南には、河堀町から茶臼山河底池に続く河内川堀江跡と推定されている谷があり、調査地はまさにその谷際に位置している(図1)。

茶臼山は、かつて埴輪が採集されたことから、日本書紀などで「荒墓」と記された古墳であると推定されていた。その後、1986年に茶臼山の整備に伴うCU86-1次調査でトレンチが入れられたが、古墳であるとする手掛かりはまったく確認することができず、現在は古墳説は疑問視されている[趙哲済1986]。

一方、茶臼山北側のCU94-2次調査や東側公園内のCU98-1次調査では、平安時代から室町時代に至る中世の井戸や柱穴などが密集して発見され、近世まで続いていることが明らかになっている。また、調査地の北100mのST90-2、92-7・10次調査地でも中世の柱穴・井戸・溝などが調査されている。このことから、四天王寺西門前に広がる伶人町遺跡で確認されつつある「四天王寺門前町」が、本調査地近くまで及んでいるとみられる。

このように本調査地は、古墳時代や四天王寺を巡る古代～中世の多様な遺構・遺物が出土する可能性がある地点であるといえる。

2006年11月8日に行われた大阪市教育委員会による試掘調査で、敷地西側で谷状の地形が確認され、瓦や土器片が出土したため、7m×3mの範囲を発掘調査することとなった(図2)。重機による掘削は現地表面から1.5mまで行い、それ以下を人力で掘削し、調査を進めていった。後述のとおり、調査地南端に瓦窯の痕跡と考えられる遺構が確認されたため、最終的に一部拡張して遺構の全体を確認した。

1月30日に埋戻し作業および機材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を完了した。

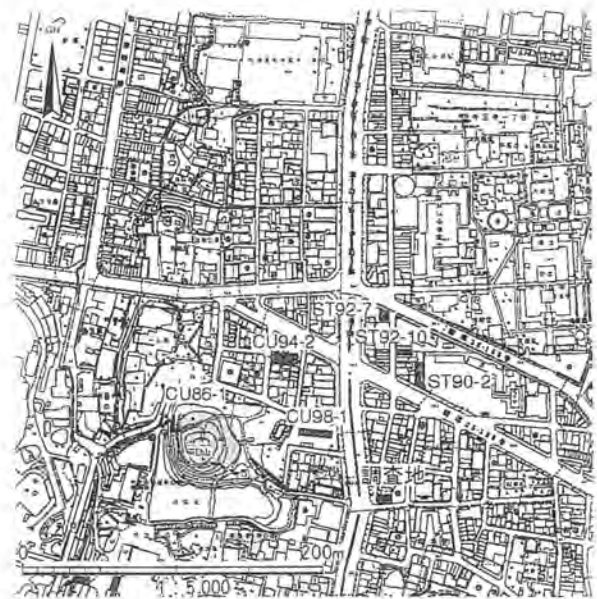


図1 調査地位置図

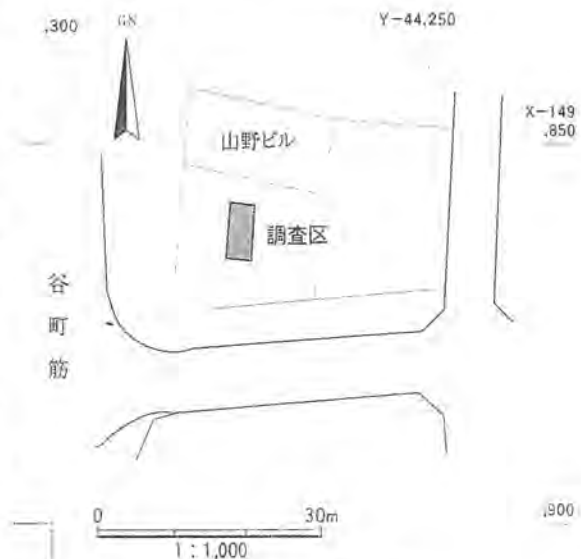


図2 調査区位置図

この調査の水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+〇mとしている。また、挿図中の座標値は500分の1大阪市道路現況平面図と照合して求めた旧公共座標の概数を使用した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第1層：近現代の整地層および攪乱で、層厚は約150cmである。

第2層：灰黄褐～暗褐色砂質シルトの整地層で、層厚10～20cmである。上面でSK01を検出した。

第3層：灰黄褐～にぶい黄褐色砂質シルトの整地層で、上面で江戸時代後期の土壘や小穴が検出された。後述する瓦窯16に近い部分では焼土や炭が比較的多く含まれるが、窯壁や瓦などはほとんど出土しなかった。したがって、本層の整地は窯上部が底面を含めて完全に破壊・除去された後に行われたと判断される。

出土遺物には肥前陶磁器が少なく、下位層に由来する瓦質土器・土師器が多い。上面の遺構の時期から考えて、江戸時代後期を下限とするが、時期は確定しがたい。

第4層：黄褐～褐色シルト質細～粗粒砂ないし砂質シルトの整地層である。層厚は15～20cmである。調査地のほぼ全域に分布し、南部の本層上部は熱により暗褐色に変色していた。この整地は窯を構築する際になされた地業と思われ、瓦質土器羽釜・甕・火入、備前焼播鉢、中国製青磁碗・皿、土師器小皿、唐草文軒



図3 地層と遺構の模式図

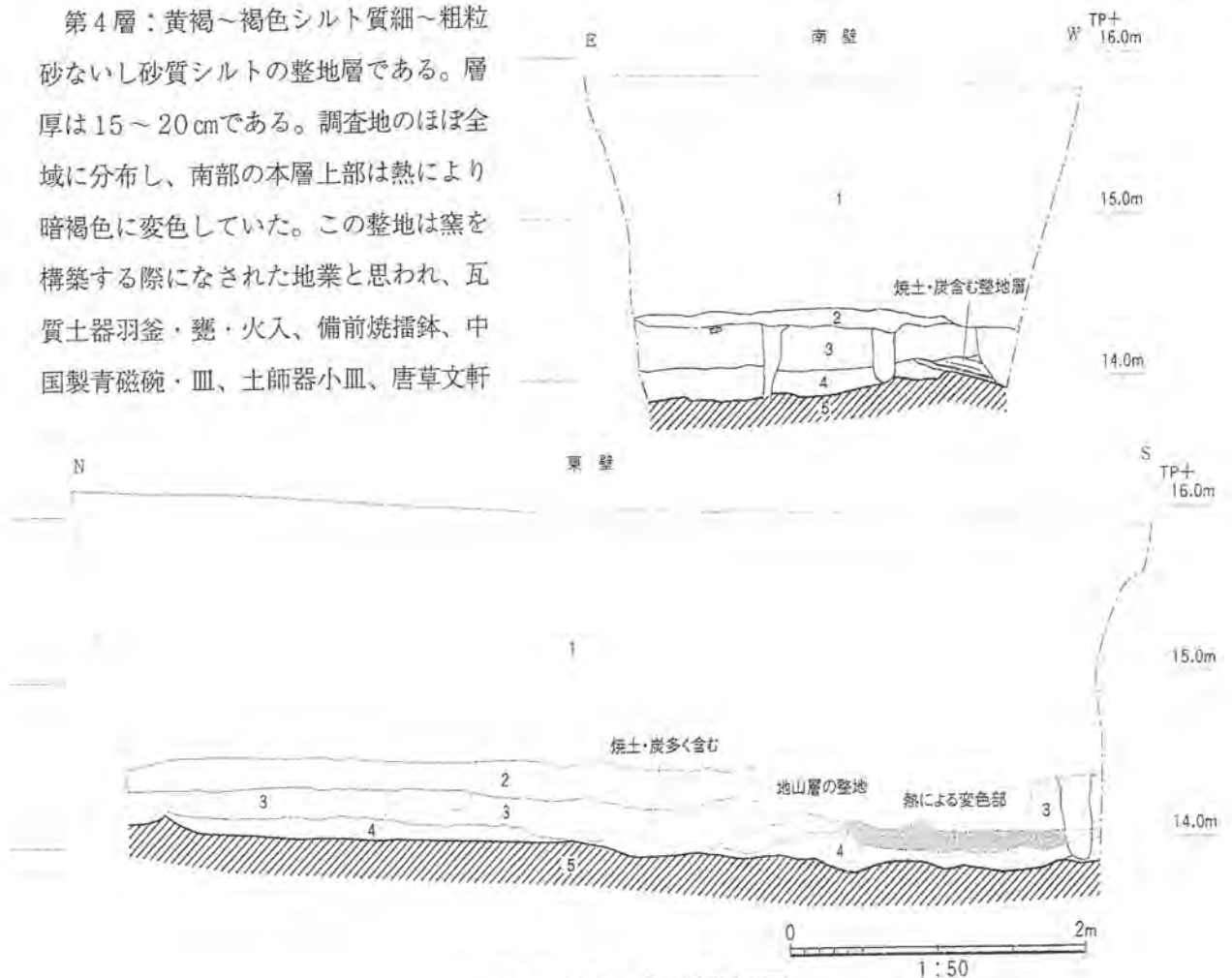


図4 東壁・南壁断面実測図

平瓦、巴文軒丸瓦、フイゴ羽口、鉄滓が出土した。これらについては達磨窯関連の遺物として後述する。井戸SE17は第5層上面で検出された。

第5層：黄褐色細～粗粒砂の地山層である。

ii) 遺構と遺物

a. 第5層上面(図5・6・9・10)

井戸SE17 後述する瓦窯16の西焚口部分の下、第5層上面で検出した井戸である。掘形は直径1.1mの円形で、直径0.56m、高さ0.57mの瓦質土製品の井戸側を上下3段分確認した。最下段より下は湧水が著しく掘削できなかったが、これ以下には

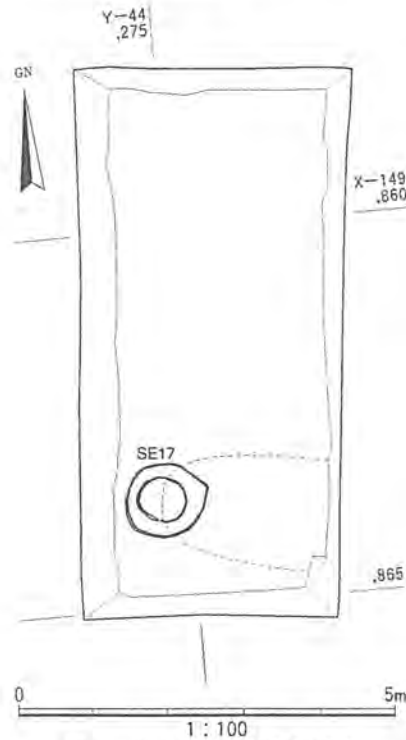


図5 第5層上面遺構配置図
(波線部は瓦窯16の範囲)

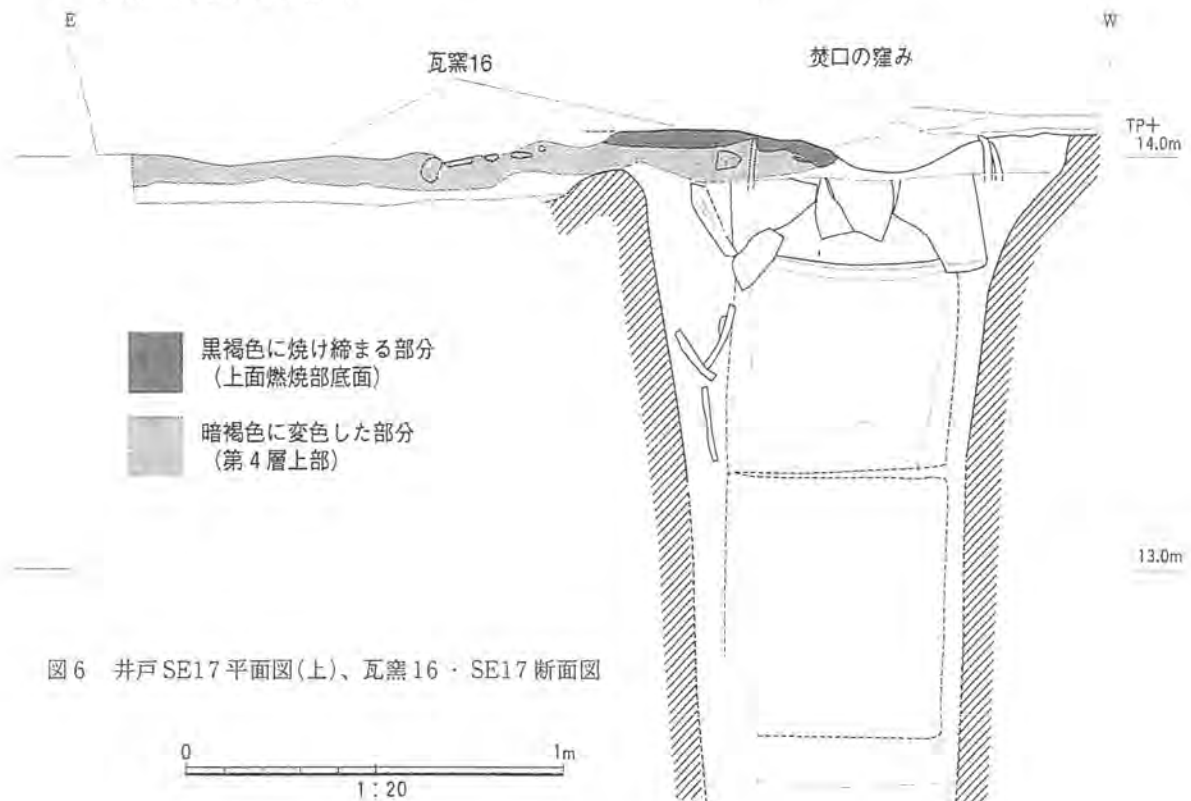
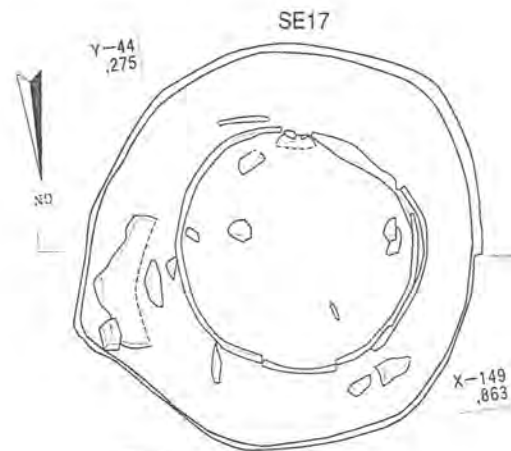


図6 井戸SE17平面図(上)、瓦窯16・SE17断面図

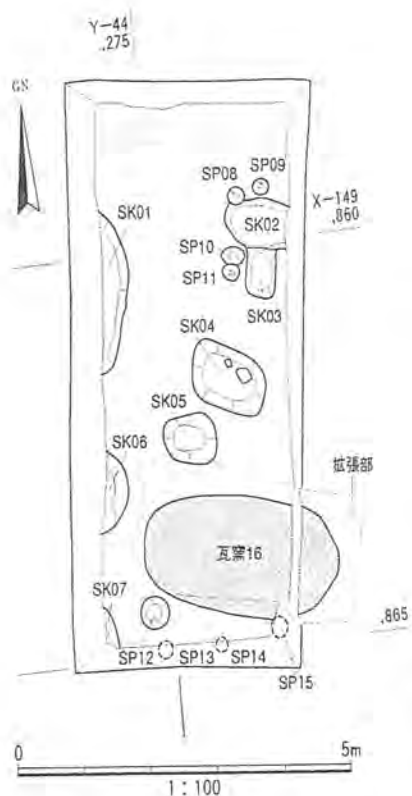


図7 第3層上面・基底面検出遺構

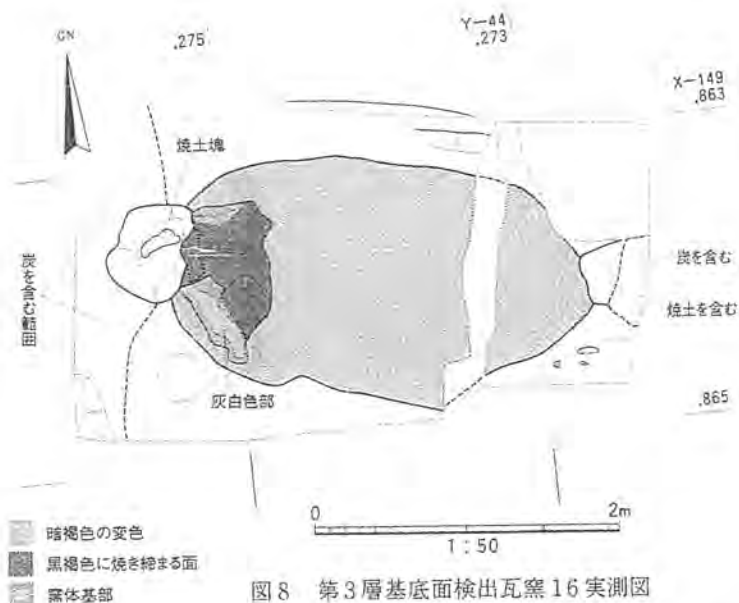


図8 第3層基底面検出瓦窯16実測図

井筒はないと思われる。最上段は上半部が窯構築のための第4層の整地時に破壊されている。掘形の埋土は赤褐～暗褐色砂質シルトで焼土塊を含む。井戸側内は黒褐色砂質シルトで埋まっていた。

井戸側内からは多くの遺物が出土した。土師器小皿は完形に近いもので50点以上出土した。1～10は、いずれも内面はナデにより平滑に仕上げるが、外面はユビオサエまたはナデにより凹凸が著しい。口縁部も歪んだものが多い。1・2は小型のヘソ皿である。瓦質土器には羽釜13・甕14・播鉢・鍋・火入15がある。備前焼播鉢11は口縁部が短く立上る。常滑焼甕12は口縁部が短く外反する。16は滑石製石鍋の下半部で最大胴径34.8 cm以上である。

瓦には連珠文軒平瓦28、唐草文軒平瓦29・30、巴文軒丸瓦31などがあり、31の凹面にはコビキAの切離し痕が残る。また、椀形滓も出土している。34はSE17に使用されていた瓦質井戸側である。上下端が厚くなり面をつくる。内外面ともナデにより仕上げしており、上端外面はヨコナデを施す。

b. 第3層基底面(図6～10)

瓦窯16 調査区南部の第3層基底面で、下位の第4層上部が変色している部分の確認された。変色している範囲は東西2.8 m、南北は1.5 mの楕円形である。西端部はやや遺存状況が良好で、固く焼き締まり黒褐～橙色を呈する細粒砂～シルトの面が残存していた。変色部の外縁には中心部が灰白色をなす帯状の部分があり、窯壁体の基部と推定される。その西には直径0.5 m、深さ0.1 mほどの焼土が詰まった窪みがあり、さらにその外側に2・3回、薄く整地した部分が拡がり、炭層がごく薄く介在していた。また、調査範囲を拡張して確認した東端部でも焼土が入る窪みと炭を含む範囲が確認できた。

これらの特徴から、中央に焼成室があり、その両側に燃焼室が配置され2つの焚口がある、いわゆる達磨窯といわれる瓦焼成窯の痕跡であると判断される。東西両端の焼土の入る窪みは焚口部に伴うものと思われる。焼成室は完全に削平されているため、畦の痕跡は確認できず、この窯に確実に伴う

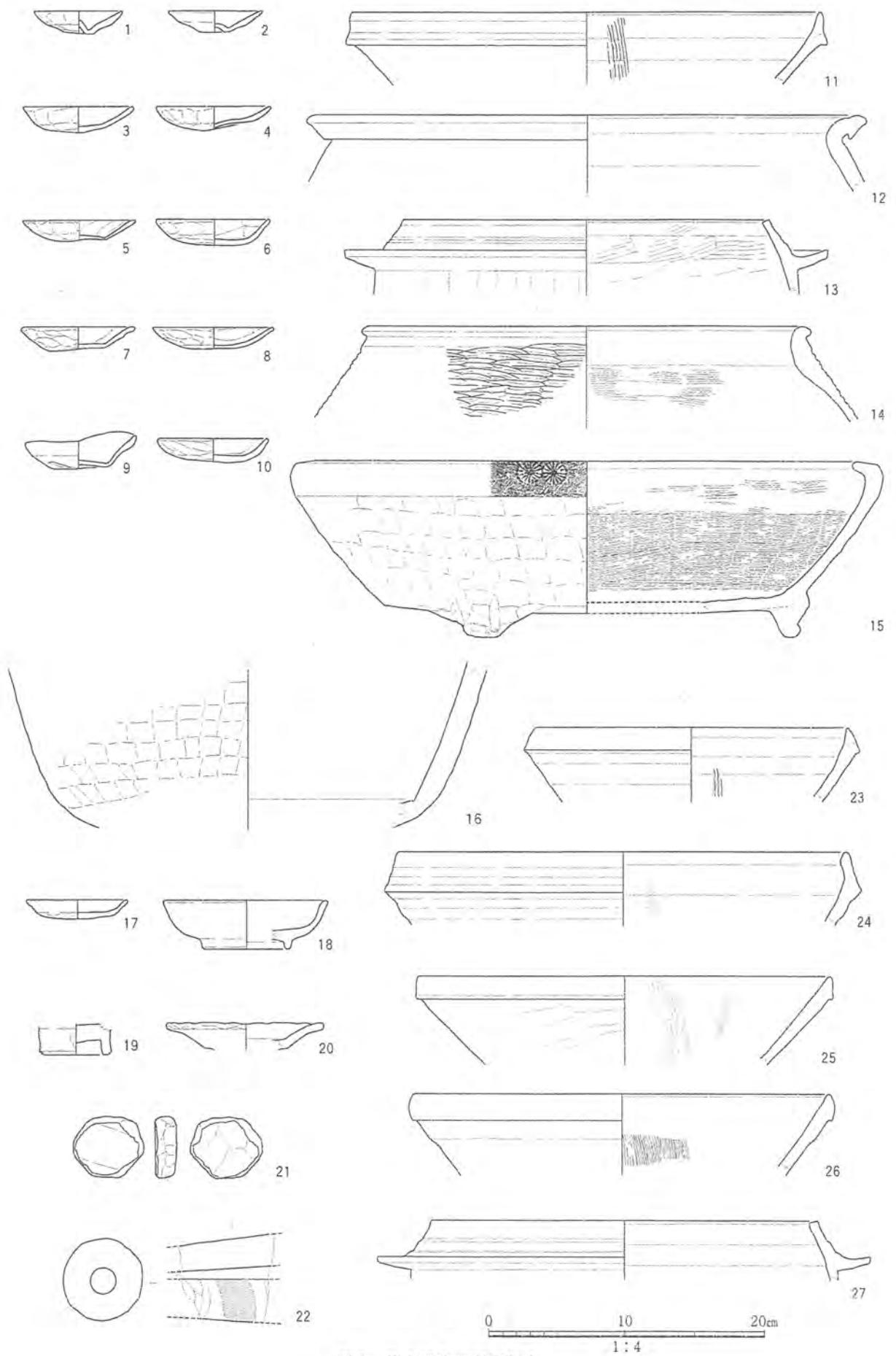


图9 出土遺物実測図(1)
SE17(1~16)、第4層(17~27)

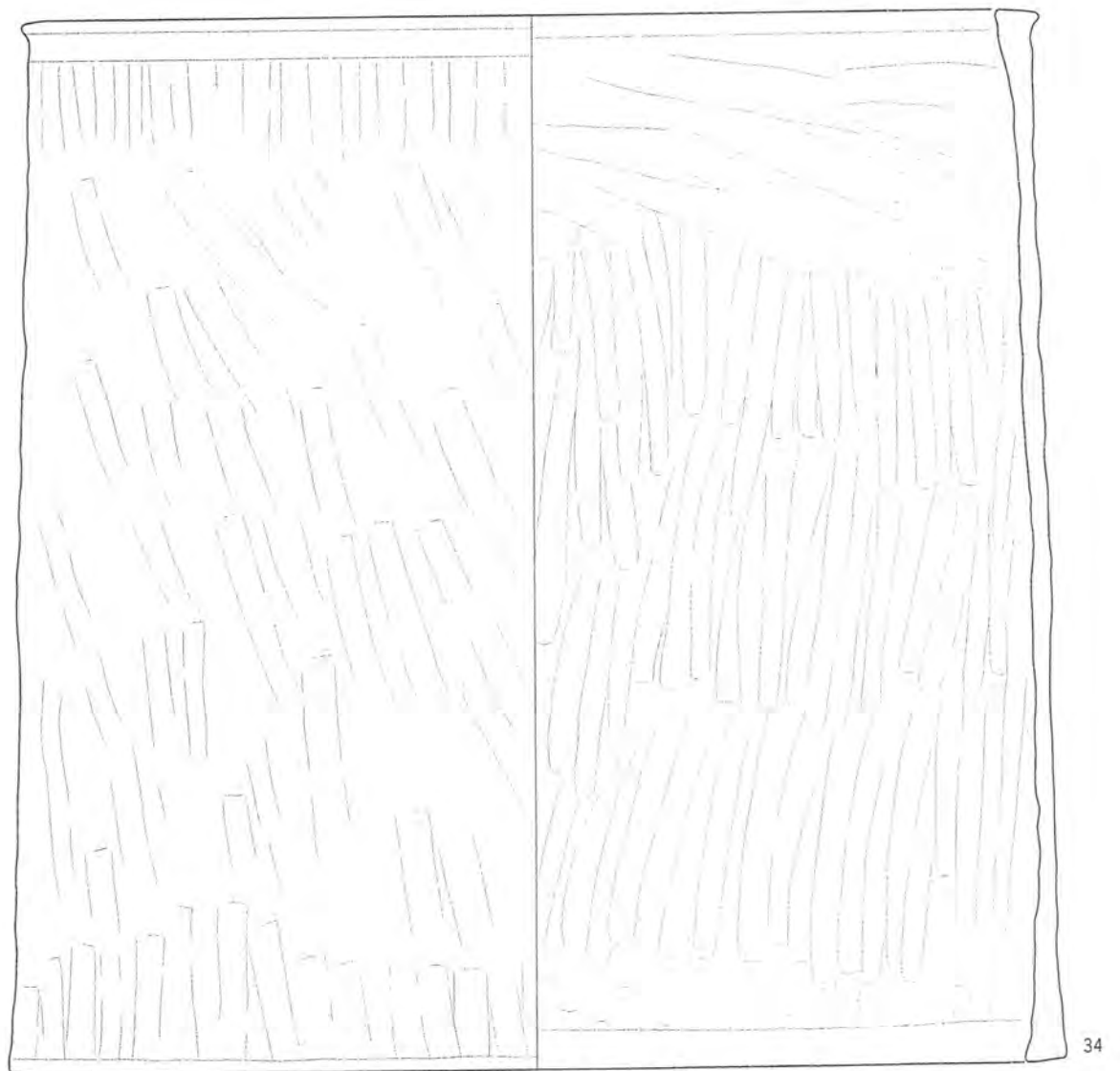
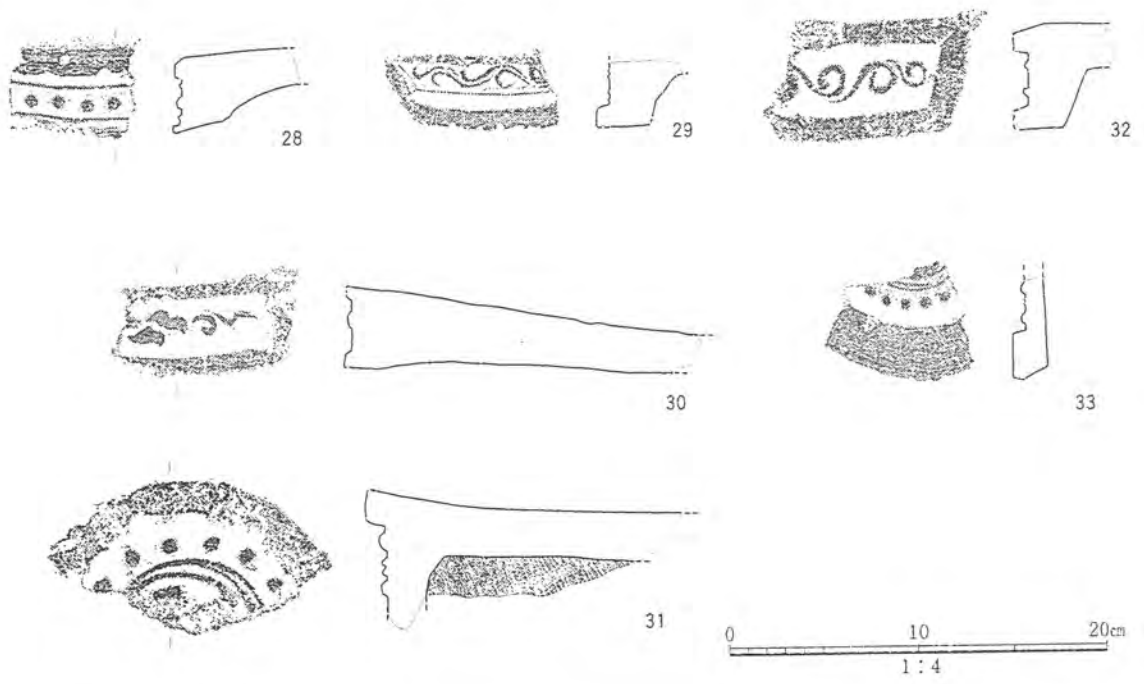


图10 出土遺物実測図(2)
SE17(28~31・34)、第4層(32・33)

遺物もない。窯の時期の手掛かりとして窯構築の際の地業による整地層(第4層)からの遺物を窯関連遺物として記述する。

17は土師器小皿で、ヨコナデによる丁寧なつくりである。18~20は中国製青磁で、18は黄緑色の厚い釉が高台を含めて施されている。19は高台外面のヘラケズリ痕が顕著に残り、雑に釉が掛かる。20は青磁皿と思われる。口縁端部に浅い抉りがあり輪花風に仕上げている。赤味を帯びた磁胎で灰緑褐色の釉が厚く掛かる。内面は熱により器面が溶解しており、窯内の熱によるものと推察される。23・24は備前焼播鉢で、24がやや新しい様相を呈するが、概ね15世紀に取まるものであろう。25・26は瓦質土器播鉢である。27は瓦質土器羽釜である。21は瓦片を加工した土製円板である。22はフイゴ羽口で外面に2~3cmほどの幅で黄灰~赤灰色部分がある。この他、唐草文軒平瓦32、巴文軒丸瓦33がある。

第3層からの出土遺物は下位層に由来する遺物以外は少なく、後述する上面検出の土壌SK04などから、18世紀後半~19世紀の遺物が出土しているため、これを下限とする。一方、第4層は西端焚口の下位で検出された井戸SE17が廃棄された後に、井戸上部を削平して行われた地業によるものであるため、15世紀より新しいといえるが、それほど新しい遺物は含まれない。

市内では中央区和泉町1丁目で豊臣期の9基の達磨窯が調査されているが、そこでは平面形がひょうたん形と小判形があり、切合い関係から小判形が新しいとされる[大阪市文化財協会2003]。今回の達磨窯は遺存状況が悪く、熱変色の部分の形状からではあるが、小判形と判断されるため、和泉町の瓦窯群では新しく位置づけられる。

しかし、断面観察によれば、熱変色している部分は主軸方向にほぼ水平に見られることから、焼成室と燃焼室の底面の高低差はあまりなかったと推測される。さらに西焚口付近に残存する底面は、焚口から奥に向ってわずかに高くなっている。このような特徴は、近世達磨窯に一般的な焚口から燃焼室が低く窪む形態と異なっており、発掘された最古(桃山期)の資料といわれる兵庫県宝塚市の旧清澄寺瓦窯跡で発掘されている達磨窯に類似している。また、形状と規模も主軸全長3.14m、最大幅1.6mの小判形で本資料に近い。中世の平窯が小型化した段階に2口焚きの達磨窯が登場し、その後、しだいに大型化していったとする見解[藤原学2001]に従えば、本資料の規模も達磨窯の初現期であることを示唆する特徴といえよう。

c. 第3層上面(図7)

土壌SK02~07、小穴SP08~15を検出した。

SK02 東西1.0m、南北0.6m、深さ0.18mの土壌で、黒褐色細礫混りシルト質細粒砂である。肥前陶器・瓦質土器・土師器の細片が出土した。

SK03 東西0.4m、南北0.6m、深さ0.15mで、埋土は灰黄褐色砂質シルトである。丸瓦の細片が出土した。

SK04 東西1.1m、南北0.7m、深さ0.3mで、埋土は褐~黒褐色の砂礫を含むシルトである。中央部で検出された。肥前陶磁器・関西系陶器・瓦質土器、堺焼播鉢、巴文軒丸瓦をはじめとする瓦のほか、牛・鳥・人面の土人形が出土した。これらは18世紀後半から19世紀代であろう。

SK05 東西0.8m、南北0.6m、深さ0.3mの楕円形の土壌である。埋土は明黄褐色～黒褐色砂質シルトで、肥前陶器、ミニチュアの播鉢・壺、瓦片が出土した。

SK06 西壁で検出された南北0.9m、深さ0.3mの円形と推定される土壌である。埋土は暗褐色細礫混り砂質シルトである。瓦片が少量出土した。

SK07 南東隅で検出された南北0.5m以上、深さ0.3mの土壌で、埋土は灰黄褐色細礫混り砂質シルトである。瓦・土師器の細片が出土した。

SP08～15 北部および南壁付近で検出した8基は、直径0.1～0.2m、深さ0.05～0.5mであるが、規則的な配置は認められなかった。埋土は灰黄褐色砂質シルトあるいはシルト質細～中粒砂で、遺物は瓦質土器・土師器・瓦の細片が出土した。

d. 第2層上面(図7)

土壌SK01 西壁際の第3層上面で検出したが、第2層上面から掘られている。南北2.5m以上、深さ0.6mの土壌である。埋土は黄褐色細礫混りシルト質細～中粒砂である。出土遺物はなかった。

3)まとめ

四天王寺南方の谷際ないし谷斜面に位置する今回の調査地点では、茶臼山東側や伶人町遺跡でみられた平安時代から室町時代に至る寺内町とは様相が異なり、室町時代以後、鍛冶や鑄造による鉄器生産や瓦生産などの各種工房が設けられていたことが明らかになった。

特に、今回の最大の成果は、時期は厳密に特定できなかったものの、1基の達磨窯を検出したことである。規模や形状からみて初期のものであると思われる、和泉町の瓦窯群と同時期、あるいはそれを遡る可能性もある。京都市妙法院大書院の鬼瓦銘文などに記されるように、中世の四天王寺周辺に「瓦大工」(瓦工人集団)が存在したことが判っており、今回の瓦窯の発見により当地周辺がその工房の有力な比定地とみなすことができるようになった。しかし、瓦工房の規模や操業期間、生産された瓦の特徴や供給先など不明な点がほとんどであり、解明すべき多くの課題が今後の調査研究に残されている。

引用・参考文献

大阪市文化財協会 2003、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－2001・2002年度－』

趙哲済 1986、『「茶臼山古墳」の発掘調査』：大阪市文化財協会編『葦火』4号、pp.1－6

藤原 学 2001、『達磨窯の研究』学生社

全景
(北から)



瓦窯16全景
(東から)



瓦窯16焚口
(西から)



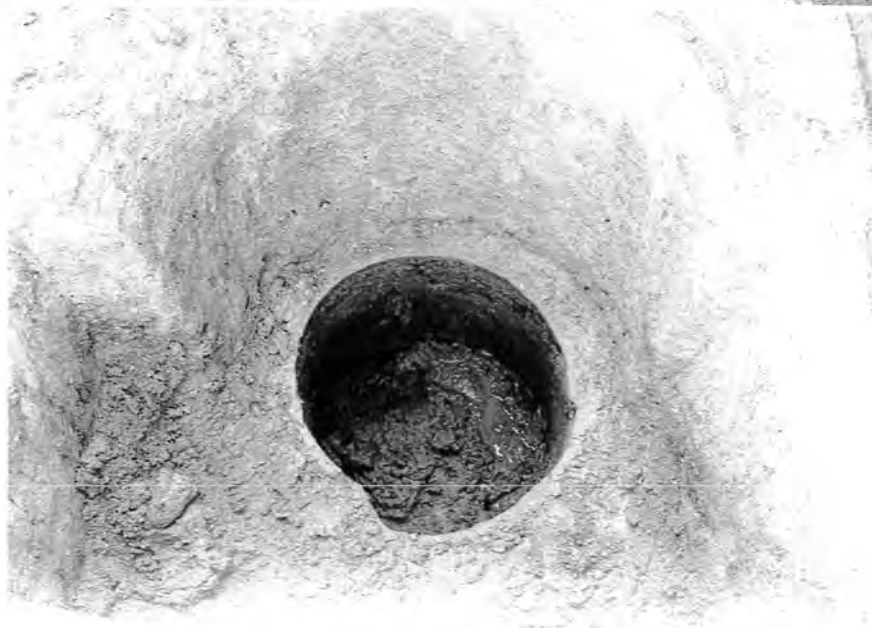
瓦窯16下の井戸SE17
検出状況
(北から)



井戸SE17全景
(北から)



井戸SE17掘削後
(北から)



IV 浪 速 区

敷津遺跡発掘調査(SX06-1)報告書

調査個所 大阪市浪速区敷津東2丁目2-3・5・8
調査面積 130m²
調査期間 平成19年3月19日～3月28日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、黒田慶一

調査では平面図は磁北を基準に図化し、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+〇m」と記した。

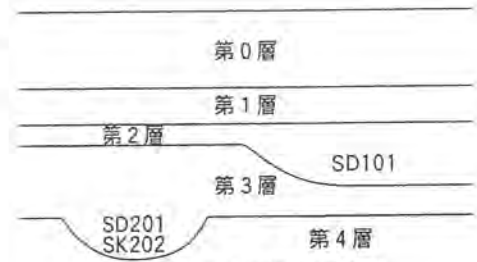


図4 地層と遺構の関係図

2) 調査の結果

i) 層序

本調査地の基本的な層序は以下のとおりである(図4・5・8)。

第0層：層厚40～120cmの近・現代盛土層である。近代の東洋紡績今宮工場跡、戦災に遭った大阪中央市場配給所跡と今回の解体作業時の整地層で形成されていた。

第1層：黒褐色シルト混り粗粒砂の近代作土層で、層厚20～30cmを測る。

第2層：層厚5～25cmのオリーブ褐色礫混り粗粒砂の水成層で、おもに13世紀前半の遺物を含む。SD101の埋土でもある。

第3層：層厚10～60cmの黄褐色粗粒砂混りシルト～礫混り粗粒砂の水成層で、SD201、SK202の埋土でもある。円筒埴輪1、須恵器杯蓋2・杯身3・壺5、土師器椀6・皿7・8・甕9、平瓦10、青磁皿11など、古代～中世の遺物を含む。また、ウシ・ウマの臼歯も出土した。

第4層：灰オリーブ色中粒砂層と褐色礫混り粗粒砂層の互層からなる水成の地山層である。

ii) 遺構と遺物

a. 第4層上面の遺構と遺物(図5・6)

13世紀前半以前の遺構SD201とSK202がある。

SD201 長さ12.5m以上、幅1.5～2.5m、深さ0.25mの南北溝で、北から南に流れる。第3層で埋没する。

SK202 直径約1.3m、深さ0.15mの土坑で、第3層で埋まる。

b. 第3層上面の遺構と遺物(図5・7)

SD101 長さ12.5m以上、幅3.0m以上、深さ0.25mのやや蛇行する南北溝で、北から南に流れる。第2層で埋没する。瓦器椀12・東播系須恵器播鉢13(図8)など13世紀前半までの遺物が出土した。また、自然遺物として魚類・両生類の骨と貝殻を検出した。

3) 敷津遺跡から出土した脊椎動物遺存体

丸山真史(京都大学大学院人間・環境学研究科)

松井章(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)

報告するのは、大阪市西成区に所在する敷津遺跡から出土した脊椎動物遺存体である。資料は13世紀前半以前の第3層と13世紀前半のSD101から出土しており、遺構の埋土を1mm目のフルイを用いて水洗選別によって採集したものである。SD101から魚類11点、両生類10点、第3層から哺乳類3点、計24点が出土している(表1・2)。これらのうち、種類と部位を同定できたものは18点を数える。

魚類は、フグ科の前上顎骨あるいは歯骨4点、椎骨1点、計5点が出土している。現生骨格標本との比較から標準体長15cm以下の小さな個体である。アジ科と思われる椎骨1点が出土しているが、断定することは困難である。このほかに種類を判別できなかった椎骨が5点出土している。これらも標準体長15cm以下の小さな個体ばかりである。両生類は、カエルの椎骨2点、上腕骨(左)、尺骨(左)、脛骨(右)が各1点、このほか左右不明の脛骨1点、指骨4点、計10点が出土している。哺乳類は、ウマの上顎白歯が2点、ウシの上顎白歯が1点、計3点が出土している。ウマの白歯1点は第二後臼歯(右)であり、歯冠高44.7mmを測り、8歳から9歳と推測される(註1)。もう1点は左白歯であり、咬耗の進行状況から壮齢の個体と推測される。ウシの白歯は、第三後臼歯(右)であり、咬耗の進行状況から若齢の個体と推測される。

当遺跡の西方は今宮供御人の本拠地と考えられている。今宮供御人は、朝廷に魚介類を貢進するかわりに、京都などで魚介類を販売する特権が付与された漁民集団である。脊椎動物以外に貝類が出土しており、今宮供御人との関連が想定される。し

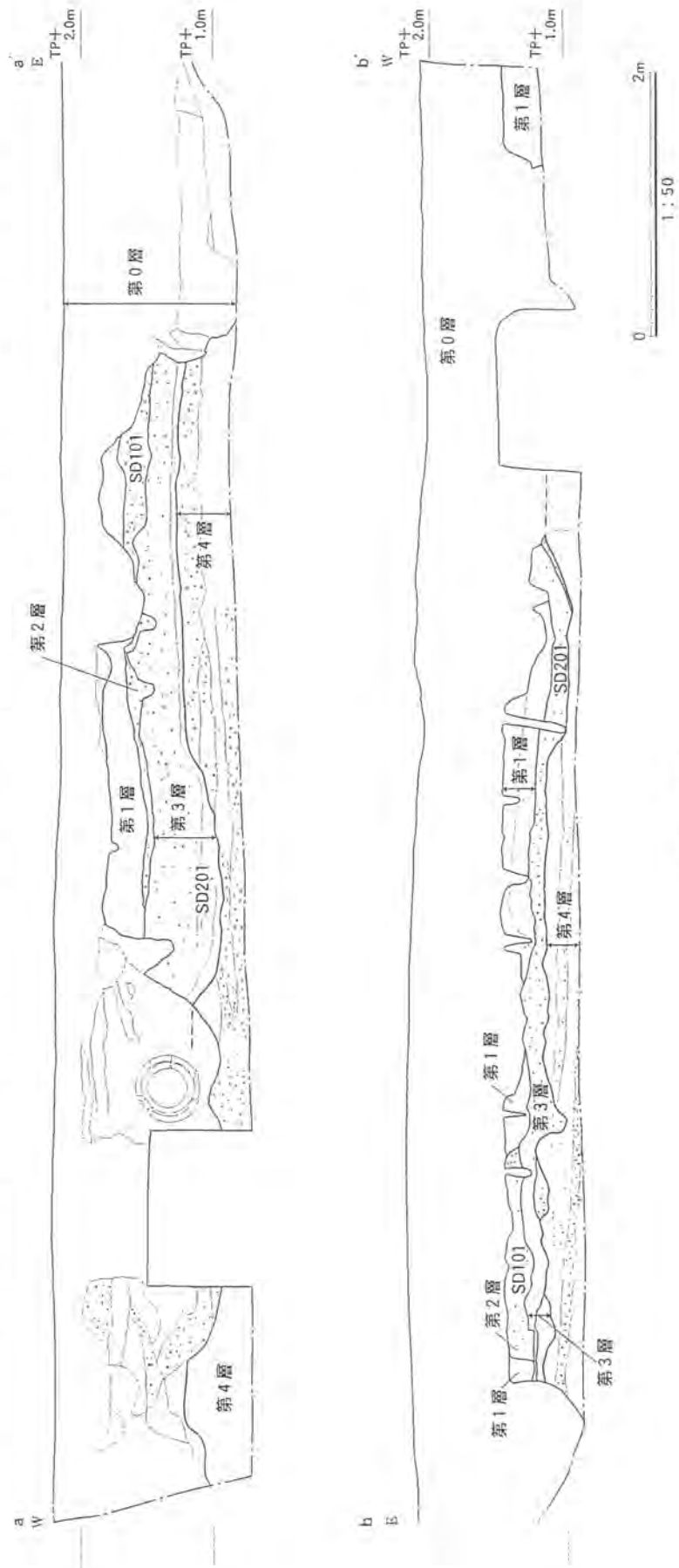


図5 断面図

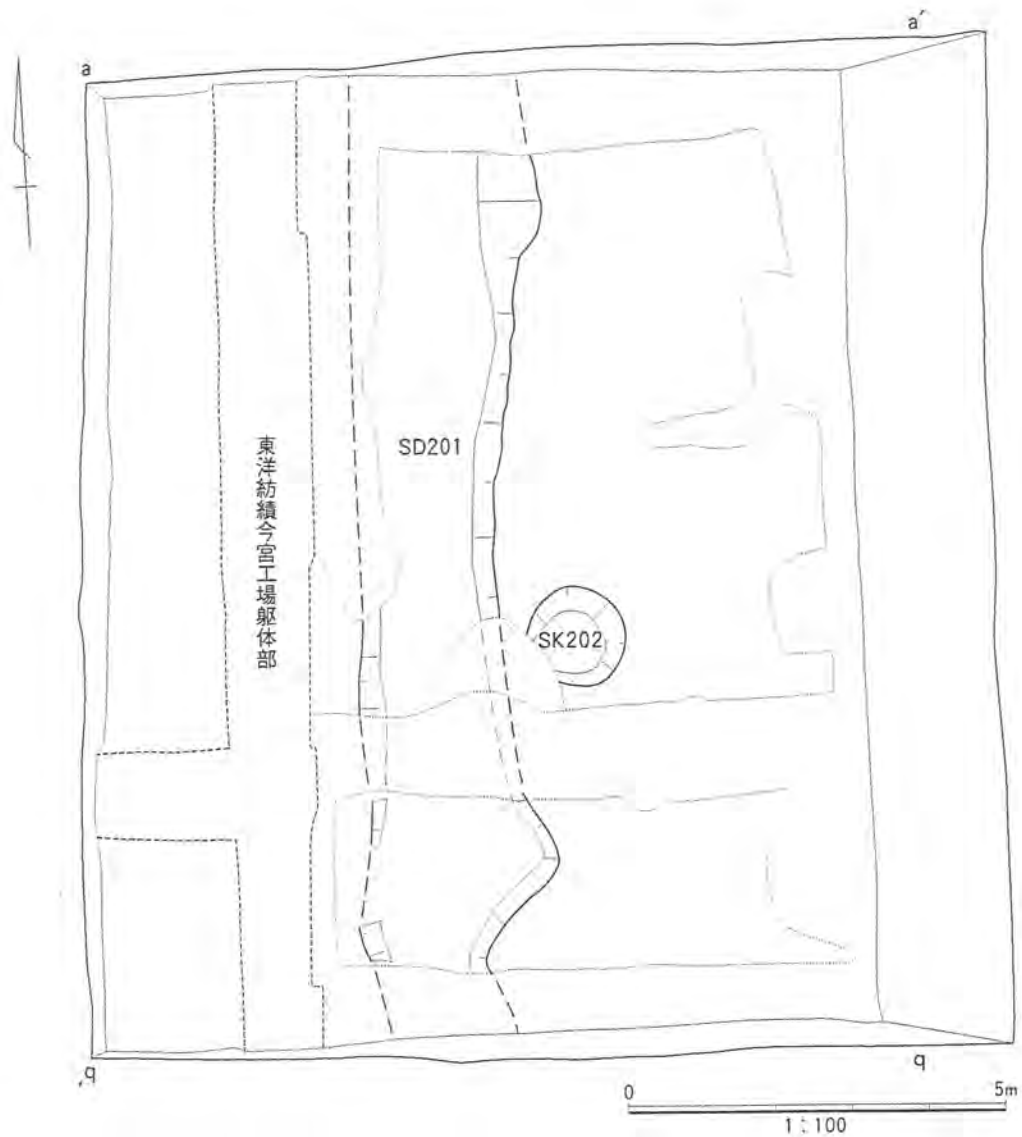


図6 第4層上面遺構平面図

かし、資料数が少なく、漁撈とは無関係のカエル類やウシ、ウマの臼歯が出土していることから、今宮供御人の活動を反映する資料であるか定かではない。また、出土したフグ科はいずれも体長15cm以下の小さな個体ばかりであり、種類を判別できなかったものも本来大きく成長する種類の稚魚か若魚と推測される。仮に、今宮供御人と関連する廃棄物であるならば、貢進や販売することのない、雑魚が廃棄されたと考えられる。貝類と比較して魚類の出土量は非常に少ない。このような廃棄状況は、貝の捕採が主体であり、漁撈が低調と捉えるよりも、貝類と魚類の廃棄場所が異なっていた可能性が指摘される。

今後、周辺地域における調査の進展と資料の蓄積を待ち、今宮供御人との関連について、改めて検討する必要がある。



図7 第3層上面遺構平面図

表1 種名表

硬骨魚綱 Osteichthyes

フグ目 Tetraodonitiformes

フグ科 Tetraodonitidae

フグ科の一種 Tetraodonitidae, gen. et sp. indet.

両生綱 Urodela

無尾目 Anura

カエル類 Anura, gen. et sp. indet.

哺乳綱 Mammalia

奇蹄目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus*

偶蹄目 Artiodactyla

ウシ科 Bovidae

ウシ *Bos taurus*

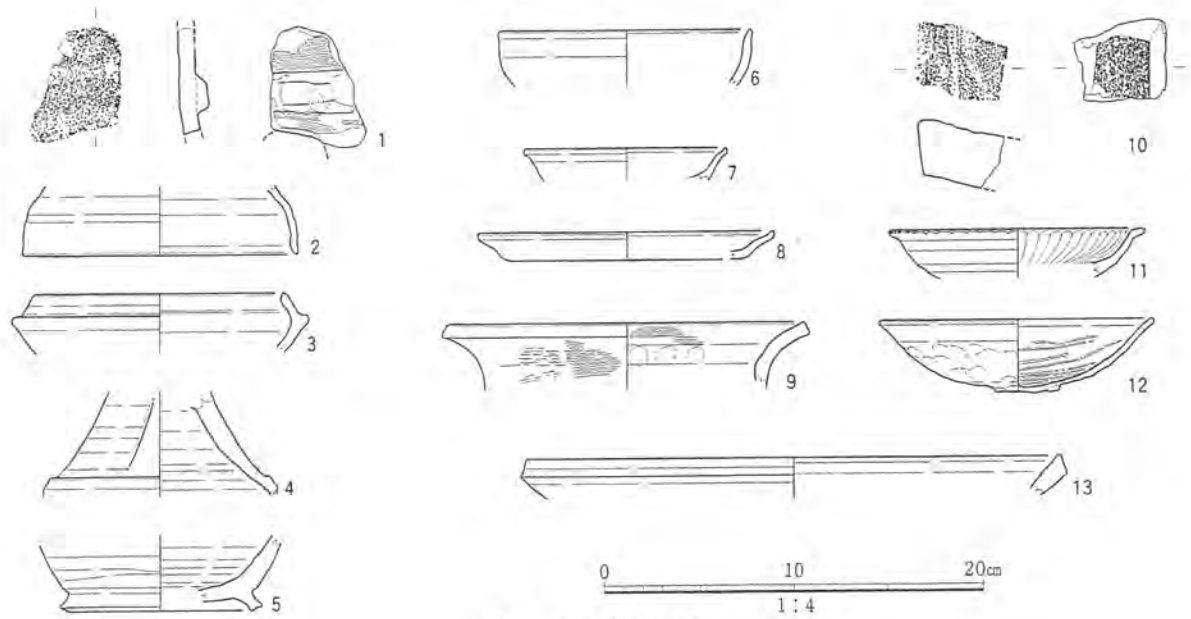


図8 出土遺物実測図

第3層(1~3、5~11)、SD101(12・13)、試掘坑(4)

表2 脊椎動物遺存体集計表

遺構	時期	大分類	小分類	部位	部分1	左/右
SD101	13C前半	硬骨魚綱	フグ科	椎骨	腹椎?	—
SD101	13C前半	硬骨魚綱	フグ科	前上顎骨/歯骨		—
SD101	13C前半	硬骨魚綱	フグ科	前上顎骨/歯骨		—
SD101	13C前半	硬骨魚綱	フグ科	前上顎骨/歯骨		—
SD101	13C前半	硬骨魚綱	フグ科	前上顎骨/歯骨		—
SD101	13C前半	硬骨魚綱	アジ科?	椎骨	尾椎	—
SD101	13C前半	硬骨魚綱	不明	椎骨	尾椎	—
SD101	13C前半	硬骨魚綱	不明	椎骨	尾椎	—
SD101	13C前半	硬骨魚綱	不明	椎骨	尾椎	—
SD101	13C前半	硬骨魚綱	不明	椎骨	尾椎	—
SD101	13C前半	硬骨魚綱	不明	椎骨	尾椎	—
SD101	13C前半	両生類	カエル類	上腕骨	骨幹-遠位端	左
SD101	13C前半	両生類	カエル類	尺骨	近位端-骨幹	左
SD101	13C前半	両生類	カエル類	脛骨	骨幹部	右
SD101	13C前半	両生類	カエル類	脛骨	骨幹部	—
SD101	13C前半	両生類	カエル類	指骨		—
SD101	13C前半	両生類	カエル類	指骨		—
SD101	13C前半	両生類	カエル類	指骨		—
SD101	13C前半	両生類	カエル類	指骨		—
SD101	13C前半	両生類	カエル類	指骨		—
SD101	13C前半	両生類	カエル類	椎骨		—
SD101	13C前半	両生類	カエル類	椎骨		—
第3層	13C前半以前	哺乳類	ウシ	上顎第三後臼歯		右
第3層	13C前半以前	哺乳類	ウマ	上顎臼歯		左
第3層	13C前半以前	哺乳類	ウマ	上顎第二後臼歯		右

4) 敷津遺跡出土の貝類について

池田研(当協会文化財研究部)

ここでは本調査で出土した貝類について報告する。同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954・波部忠重1961]を利用している。個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻数の多数の方を原則として採用している。

本調査では5種、269個体の貝類が出土した(表3・4)。そのうち13世紀前半の溝であるSD101から出土したものが267個体と大半を占めるため、以下では同遺構出土の資料について述べる。

SD101出土資料の貝種構成はハマグリが73%、シオフキが24%を占め、カガミガイ・タニシ科・アカニシはごく少量が含まれるのみである。タニシ科は淡水性種、ほかはおもに内湾の砂泥底域に棲息する鹹水性種で、いずれも調査地周辺の河口部から内湾にかけて採取可能なものである。個別の貝種を見ると、ハマグリは破損率が高く、計測可能な資料は35個体にとどまるが、殻高計測値は22.6mmから52.0mmまで大小の個体を含み、平均値は35.6mmであった。

続いて中世における当遺跡の周辺の出土貝類資料を見てみると、当遺跡の東南東約1.2kmにある大阪市天王寺区茶臼山古墳と、その北約0.4kmにある伶人町遺跡で、廃棄された井戸に大規模な貝塚が形成されている。茶臼山古墳(CU98-1次)調査では、14世紀代の井戸SE11から約1万個体が出土した。主要な貝種はハマグリ(46.7%)とシオフキ(39.5%)で、オオタニシ・ヤマトシジミ・カガミガイ・サルボウ他が少量含まれる[池田2005]。また、ハマグリは殻高平均値は50.6mmで、破損率の高さが目立つ。

一方、伶人町遺跡では井戸が崩壊した後にできた、14世紀代の大型土坑SQ103から約63万個体が出土した。サンプルの分析結果によれば、主要な貝種はハマグリ(68.2%)とシオフキ(29.6%)で、アカニシ・サルボウ・カガミガイ・バイ・カキ・タニシなどが少量含まれる[西近畿文化財調査研究所2006]。

表3 出土貝類種名一覧

腹足綱 *Gastropoda*
 アカニシ *Rapana thomasi* (Crosse)
 タニシ科 *Viviparidae* gen. et sp. indet.

二枚貝綱 *Bivalvia*
 ハマグリ *Meretrix lusoria* (Roeding)
 カガミガイ *Dosinia (Phacosoma) japonica* (Reeve)
 シオフキ *Mactra veneriformis* Reeve

表4 出土貝類一覧

遺構・層名	時期	ハマグリ	カガミガイ	シオフキ	アカニシ	タニシ科
SD101	13C前半	195	5	64	1	2
第3層	13C以前	1		1		

茶臼山古墳と伶人町遺跡の資料は検出した遺構の構造、貝種構成、貝塚の時期などで多くの共通点がみられる。さらに、自家消費用としては量が多いことから、遺跡の西方に本拠地をもち、「蛤売」として名高い中世の「今宮商人」との関係が想定されている。

当遺跡出土資料をそれら両遺跡の資料と比較すると、主要貝種のみならず、そのほか少量含まれる貝種までその構成が近似していることがわかる。時代は異なるが、近世料理書等におけるシオフキ・カガミガイ・サルボウなどの格付けが決して高くないことを考慮すると、共通する貝種構成は捕獲時の選択の結果ではなく、調査地近海に棲息する貝相そのものを表していると考えられるべきであろう。また、茶臼山古墳と伶人町遺跡に比べれば、当遺跡は「今宮商人」の本拠地により近接して立地しているが、今回出土した資料は少量で、その活動を反映したものか否かと判断するのは難しい。今後、当遺跡と周辺地域における調査成果の蓄積に努めつつ、引き続き本資料の性格について検討していくこととしたい。

5) 中世における当該地の性格

当地は図9に見られるように明治時代前半には今宮村の農耕地の「字高岸」である。この地が中世においてどういう性格をもつ地であったと推定されるかを、以下で考えたい。

図9では西隣の木津村が大きな町を形成しているのに対して、今宮村は街道沿いに町屋が並ぶ以外は農耕地が広がる景観である。「今宮」の初見は、鎌倉時代の『源平盛衰記』(鶺鴒尼御前事)の「今宮の前木津と云所より海人を語ひて」であるといわれている[藤田明良1997]。木津は『西成郡史』[西成郡役所1914]によると、四天王寺創建の時、木材の到着する港(津)であったから木津と称した、という伝承をもつように海上交通の要衝として発達したが、中世においては『源平盛衰記』から窺えるように、今宮がメインで木津は今宮の浜に属するという位置付けであった。

旧摂津国西成郡今宮村(現、大阪市浪速区)には、『今宮村文庫文書』が共有文書として伝来してきたが、所収中世文書7通の内5通までが、商業上の特権を保証した内容となっている。『今宮村文庫文書』のうち最古の年紀をもつものは、1274(文永11)年正月25日の「蔵人所牒写」で、それによると諸方甲乙人による「生魚交易」の妨害や諸国市津関渡浦泊での煩いを停止させ、摂津国津江御厨と同国武庫郡の供御人の交易活動を保証することが、蔵人所によって保証されている。この津江御厨こそ今宮を中心とする地域に設定された御厨であり、文書には延喜年間(901~923年)に設置されたことが謳われている。また同文書の1557(弘治3)年4月10日の「後奈良天皇綸旨」にも、今宮商人は、朝廷に日々の海産物を進上し、京都祇園社の駕輿丁を勤めるという負担を引き受けたからこそ、昔から五畿七道で商売をする際、自由に交易往反する特権を与えられていた。したがって諸役を免除し、公役を専らにすべきであると命じており、今宮商人の活動の原点としての諸役免除特権が、天皇家から保証されている[春田直紀1997]。今宮商人は中世を通じて供御(天皇家の飲食物)を進上する「供御人」、あるいは神社に奉仕する「神人」と称され、商売にさまざまな便宜を与えられていた。

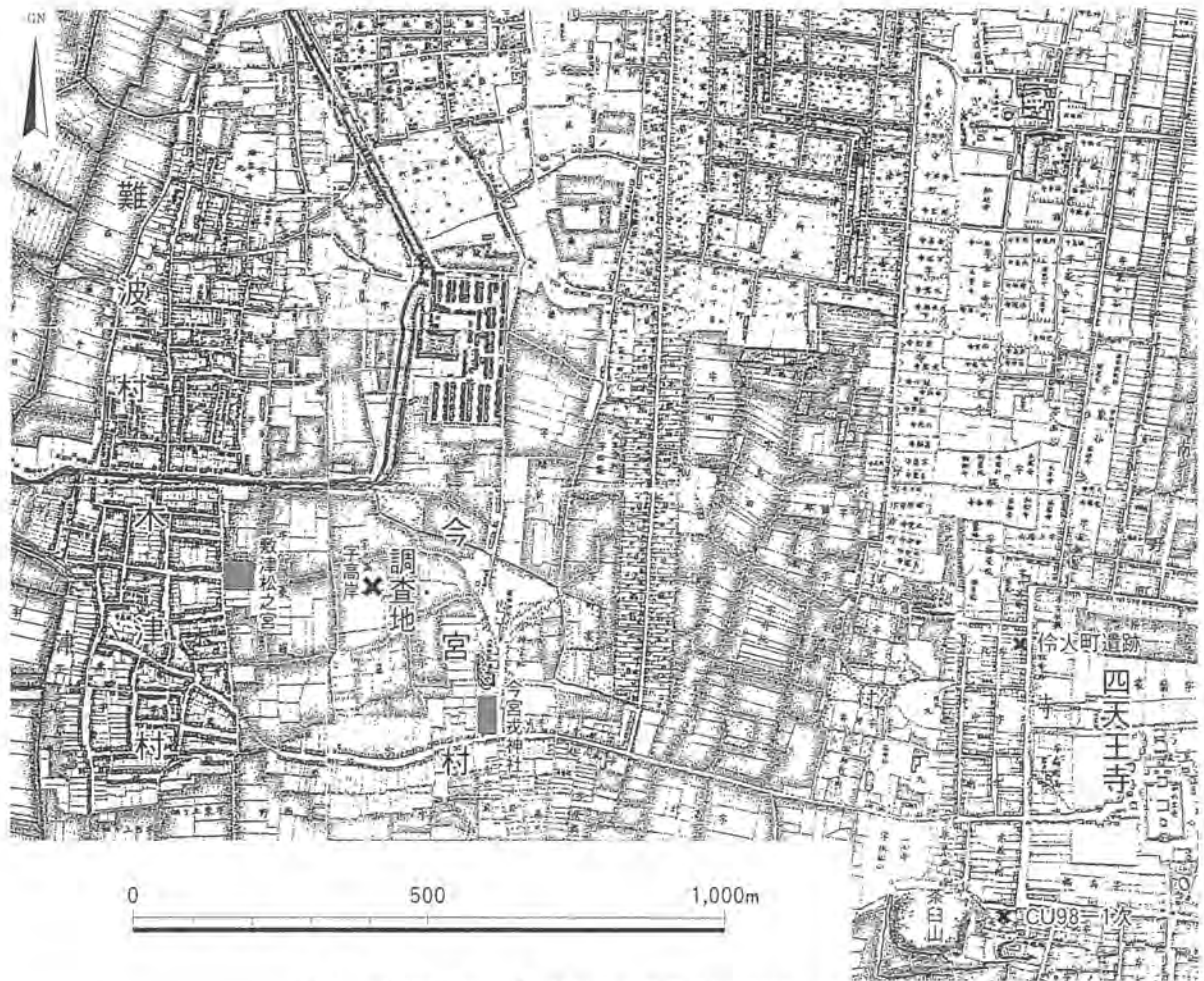


図9 調査地周辺図(『内務省大阪実測図』1886年に加筆)

6)まとめ

今回の調査では、上下2層で南北溝を検出した。上層のSD101は13世紀前半と時期を限定でき、貝殻や魚骨など漁業に関わる自然遺物を出土し、「蛤売」として中世京都に商業圏を拡げていた今宮商人の存在を想起させた。SD101からは、魚類としてはフグ科やアジ科の雑魚、貝類はハマグリのほかはシオフキ・カガミガイなど近世において格付けが高くない貝類が出土したが、圧倒的にハマグリが多い。また遺構は13世紀前半と、13世紀後半の「蔵人所牒写」より以前とはいえ、御厨の建立が10世紀前半まで遡ることが予想されるから、中世今宮商人の根拠地の遺構であった可能性がある。

今回調査地の大阪木津地方卸売市場は、東洋紡績今宮工場跡地に移ってきたものだが、もとは北西約400mの現鷗町公園一帯を市場地とし、1809(文化6)年以來、天下の台所たる大坂の食を担ってきた、400年近い伝統を有する。当地は地勢的に商業・漁業に適した地であったといえる。

註)

(1)年齢査定は、[西中川1991]に準じた。

参考文献

- 池田研2005、「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」；大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集 一都出比呂志先生退任記念一』、pp.859-886
- 吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』保育社
- 西近畿文化財調査研究所2006、『俗人町遺跡発掘調査概要報告書』
- 西成郡役所1914、『西成郡史』
- 西中川駿編1991、『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告
- 波部忠重1961、『続原色日本貝類図鑑』保育社
- 春田直紀1997、「漁業と水運の地域的展開」大阪府漁業史編さん協議会編『大阪府漁業史』、pp.97-109
- 藤田明良1997、「中世社会の成立と漁民・漁業」大阪府漁業史編さん協議会編『大阪府漁業史』、pp.81-96

第4層上面遺構
(南から)



北壁断面



第3層上面、SD101
(南から)



V 淀川区

宮原遺跡における発掘調査(MH06-2)報告書

調査個所 大阪市東淀川区宮原1丁目13-5
調査面積 78m²
調査期間 平成19年2月5日～2月14日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、岡村勝行

1) 調査に至る経緯と経過

宮原遺跡は天満砂堆に立地する古代～室町時代の遺跡である。調査地は新大阪駅の北約300mにあり(図1)、周辺道路の標高はTP+1.6m前後である。既往の調査では、東50mに位置するMH99-3次調査で室町時代の溝や、古代の遺物、南西150mに位置するMH06-1次調査で墨書土器を含む中世の遺物、南西300mに位置するMH94-2次調査で鎌倉・室町時代の建物群・井戸などが確認されている。

調査に先立ち2006年12月11日に敷地北西隅で行われた試掘調査で、現地表下45cmに中世遺物を含む地層と落込みが確認された。このため、大阪市教育委員会と事業者との協議の結果、本調査を行うことになった。調査区は敷地南東部に東西7.5m、南北10.5mに設定した(図2)。地表下約1.2mまでの近現代の地層を重機掘削し、それ以下を人力で掘進め、随時、図面・写真による記録に努めた。なお、本報告で示す水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP±〇m」と記した。方位は座標北である。

2) 調査の結果

i) 層序

層厚1.2mの現代盛土層以下、地表下2.8mまでの地層を第1～5層に区分した(図3)。

第1層：現代盛土層である。

第2層：緑灰色(7.5GY3/1)中粒砂質シルト層で、現代の盛土直前まで耕されていた旧作土層である。層厚は約20cmである。

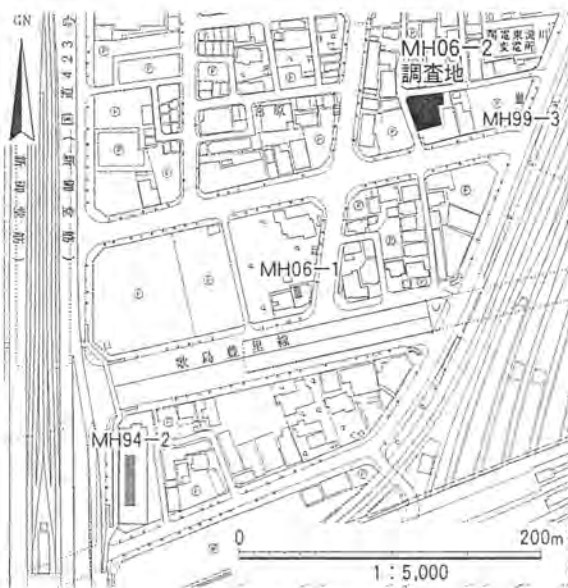


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

第3層：この地層より下位では、南東に向けて下がる旧地形に影響され、北西から南東に向って徐々に厚く堆積する。第3層は第3-1層と第3-2層に分れる。前者は暗緑灰色(5G4/1)中粒砂質シルト層で、層厚は約10~40cmである。層厚を増すにつれて、粗粒砂が多く含まれるようになる。第3-2層は、第4層上面にできた窪みSX02の埋土層である。暗緑灰色(7.5GY4/1)中粒砂質シルトの水成層であり、下部に粗粒砂を比較的多く含む。層厚は約25cmである。

第4層：灰色(5Y4/1)中粒砂質シルトの堆積層で層厚は約20~60cmである。調査区北部では下面に踏み跡が著しい。調査区南部では本層下部は、水成層である黒色(10YR2/1)粘土質シルト層と灰白色(10Y7/1)中粒砂層が交互に2回堆積し、縞状をなす(写真1)。完形に近い瓦器碗9(写真6)のほか、土師器、須恵器、白磁碗、灰釉陶器などが出土した。

第5層：黒色(10YR2/1)粘土質シルトの泥炭層である。遺物は確認できなかった。

ii) 遺構と遺物

a. 中世の遺構と遺物(図4・5、写真2~5)

中世の遺構は第4層上面で確認できたのみである。SX01は調査区南部で検出された南方向への落込みであり、東西方向の溝状遺構の北肩に当るものと思われる。緩かな傾斜から急に落込み、最深部の深さは1.2mである。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルトに粗粒砂層が挟在する水成層である(写真3)。第5層上面の地形から、調査区の南には中世以前に遡る北東-南西方向の流路が想定されるが、SX01はそれを踏襲し、掘削された人工流路の可能性が高い。遺物は土師器皿、須恵器甕、瓦器碗、三足釜、白磁碗、平瓦、砥石のほか、農具の可能性のある木製品が底面近くから2つ重なって見つかった(写真4)。1は土師器皿で口径9.4cmである。2は白磁碗で玉縁状の口縁端部をもち、11世紀後半~12世紀前半に位置づけられる。3は長さ28.7cm、幅11.5~13.6cmで、一端がやや幅広な矩形の木製品である。端近くに5.0cm×3.0cmの孔を穿つ。最大厚は2.3cmであり、片面は縦方向に面取りされ、緩やかな凸面であるが、もう一方は平坦である。隅の2箇所を欠失するが、ほぼ最終的に利用された形態が想定できる。木製品4は半分近くが、鋸状のもので切取られており、全形が明らかでないが、最大長19.0cm、最大幅14.1cm、最大厚は1.9cmで、一側面を先細りに加工しており、鋤先を連想させるが、柄に当る部分はきれいにカットされている。木製品3同様、片面は縦方向に面取りされ、緩やかな凸面であるが、もう一方は平坦である。2つの木製品は大きさ、加工状況など共通点が多く、一連のもので、農具の可能性がある。SX01は出土遺物が第4層のものと類似し、第4層の堆積からそれほど時間が経過せずに、掘削され、機能したものである。

SX02は調査区南東部で見つかった第4層上面の窪みであり、長辺5.5m以上で、南東方向に1.5m

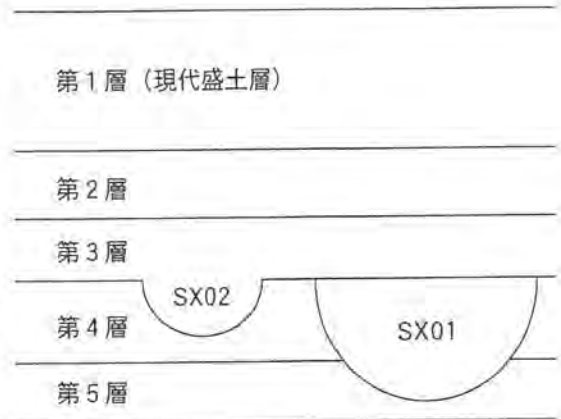
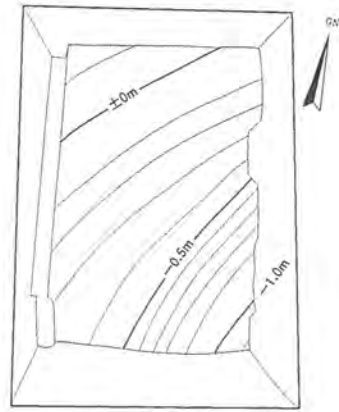
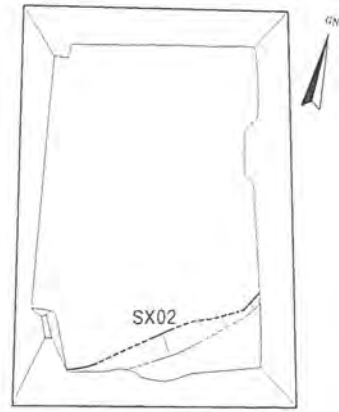


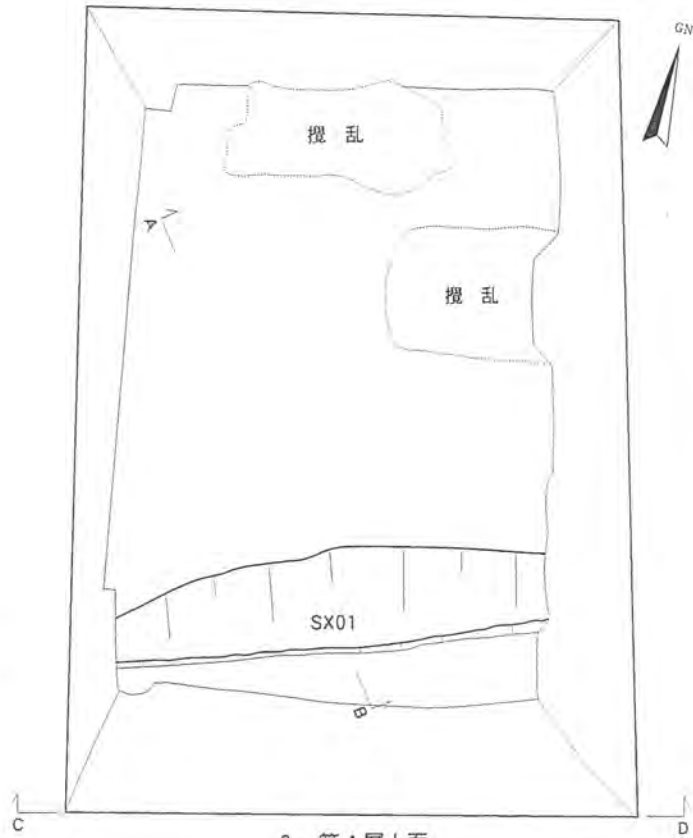
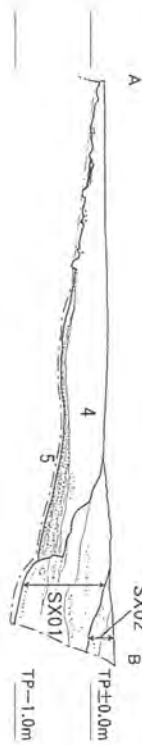
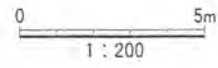
図3 地層と遺構の関係図



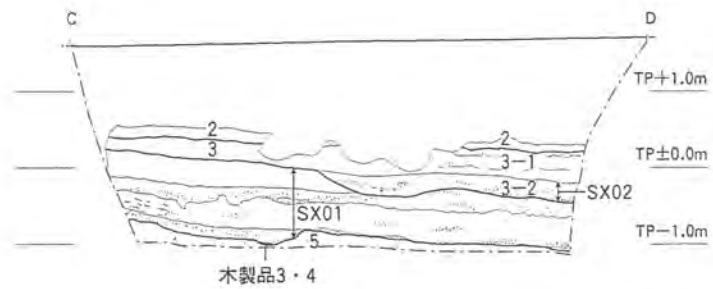
1. 第5層上面



3. 第3層下面



2. 第4層上面



1:100

図4 遺構平面図・地層断面図

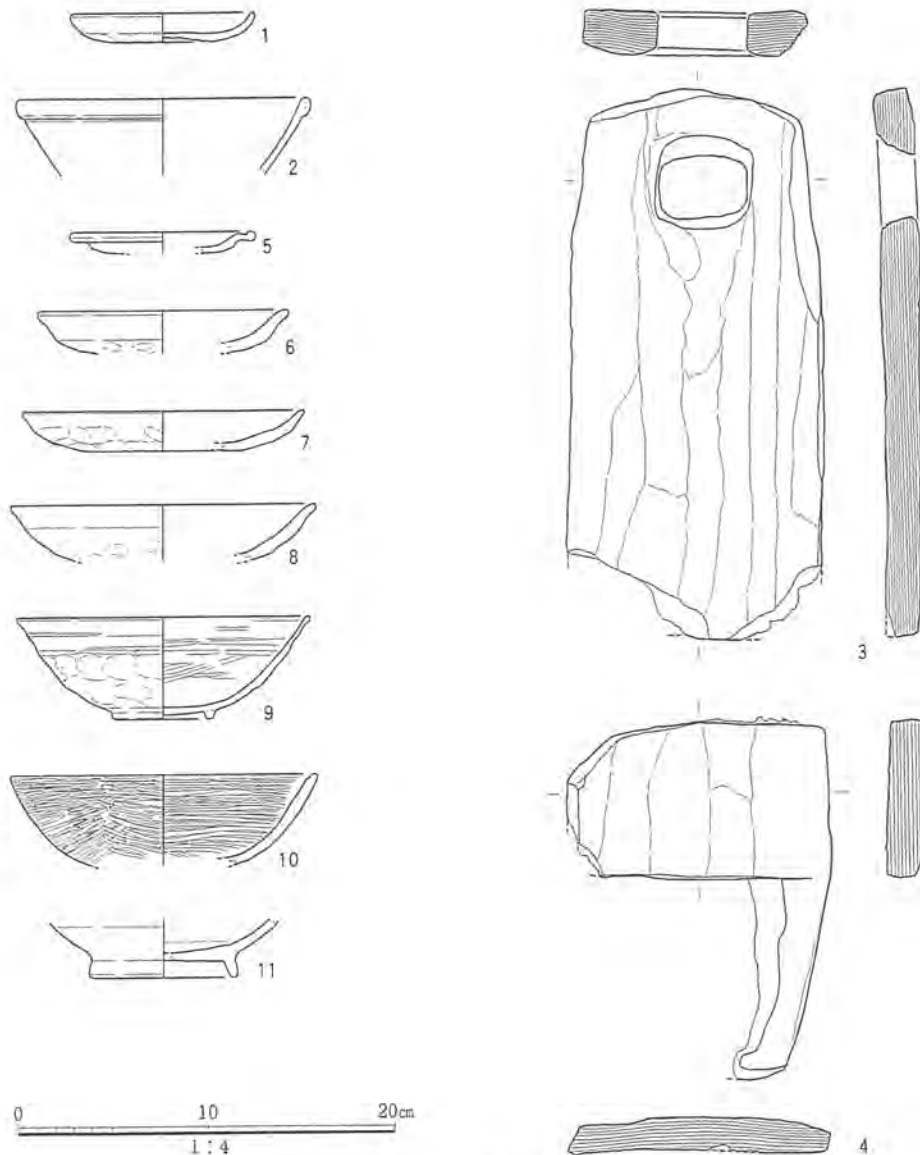


図5 遺物実測図
SX01(1~4)、第4層(5~11)

以上あり、調査区外に延びる。土師器、瓦器など中世遺物のほか、杭と思われる木製品が出土した(写真5)。

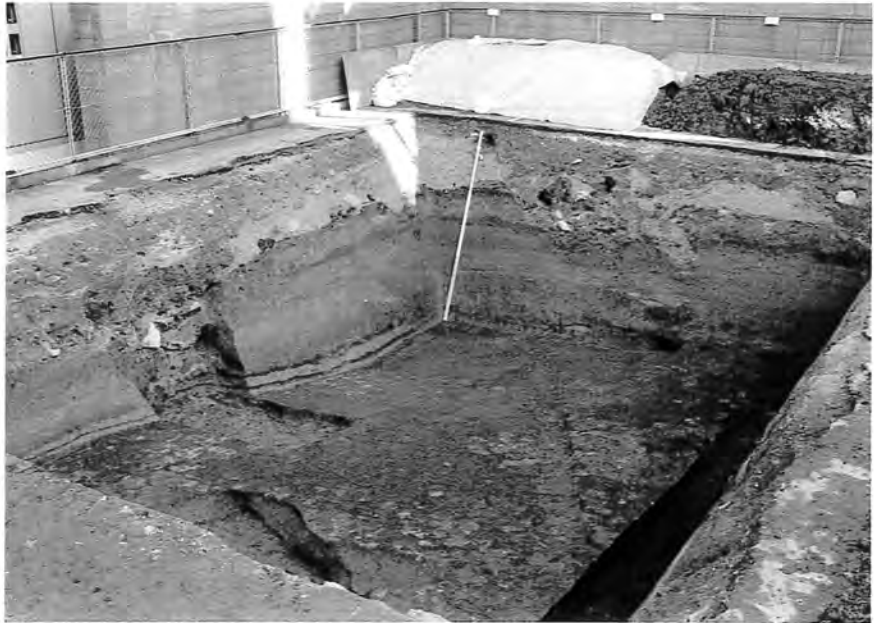
b. 包含層出土の遺物(図5、写真6)

第4層からはコンテナ半箱の中世遺物が出土した。5はいわゆる「ての字口縁」の土師器皿である。器壁が厚いタイプで、口径9.3cmである。11~12世紀のものと思われる。6~8は土師器皿で、形態の特徴から、12世紀代を中心とする時期に位置づけられる。9は和泉型の瓦器椀である。体部の内外面ともまばらな水平方向のヘラミガキを施し、外面下半は指頭圧痕が顕著であり、概ね12世紀後半に位置づけられる。10は楠葉型の瓦器椀である。器壁が厚く、体部内外面にていねいなヘラミガキを施し、12世紀前半を中心とする時期のものである。11は灰釉陶器椀の高台部である。以上、第4層は灰釉陶器など古い遺物を含むものの、瓦器椀9から12世紀後半以降の時期と考えられる。

3)まとめ

今回の調査では、農具の一部と想定される木製品のほか、12世紀を中心とした中世前期の多様な遺物が出土するとともに、集落を区画する可能性のある溝の一部を発見した。完形に近い瓦器椀が出土していることから、ごく近隣に居住域が拡がっていることが推測できる。これまで近隣で実施されたMH99-3次調査や、MH06-1次調査では、中世後半期の遺構・遺物が多く発見されていることから、時期的な違いが認められるが、これは遺跡内での中世集落のあり方を反映しているのかも知れない。今後さらに調査成果を蓄積することにより、宮原遺跡の実態がより詳細に解明されるであろう。

1. 第5層上面の状況
(北西から)



2. 第4層上面の状況
(南から)



3. SX01堆積状況
(東から)



4. SX01内木製品
出土状況
(北東から)



5. SX02掘下げ後の状況
(北西から)



6. 第4層からの瓦器碗
出土状況
(南から)



VI 東 淀 川 区

西淡路 1 丁目所在遺跡発掘調査(WA06-1)報告書

調査個所 大阪市東淀川区西淡路1丁目10
調査面積 90m²
調査期間 平成18年7月28日～平成18年8月5日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、趙哲済

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は新大阪駅の北西約400mにあり、周辺道路の標高はTP+2.3m前後である。[建設省国土地理院1965]の天満砂堆に立地する東淀川区の弥生～鎌倉・室町時代頃の遺跡であり、弥生時代末から古墳時代前期が特に注目される崇禪寺遺跡と、淀川区の中世集落遺跡である宮原遺跡との中間に位置する(図1)。崇禪寺遺跡の鉄製素環頭をはじめとして、これまで行われた両遺跡の調査で、各時代の重要な成果が得られている。

表題の建設工事に伴って、2006年2月24日に当該地で行われた大阪市教育委員会の試掘調査では、中世と考えられる遺構や遺物包含層が検出され、宮原遺跡と同様に調査地周辺にも中世の集落が存在した可能性が高くなった。そこで、当該地における遺構と遺物の状況を明らかにし、調査地周辺における地域の歴史像を復元する基礎資料とすることを目的として、本調査を実施することになった。

当初計画では南北30m、東西3mの範囲で、地表下約1mまでの現代～近世の地層を重機掘削し、それより1.6mまでは人力による掘削を行い効率的に調査を実施する予定であった。しかし、調査開始時に試掘時より0.4m前後高上げされていたことや、調査開始前に施工された建物の基礎杭をはじめとする攪乱が甚だしかったことなどにより、安全な法面を確保し、かつ攪乱を可能な範囲で避ける



図1 調査地の位置と周辺の遺跡

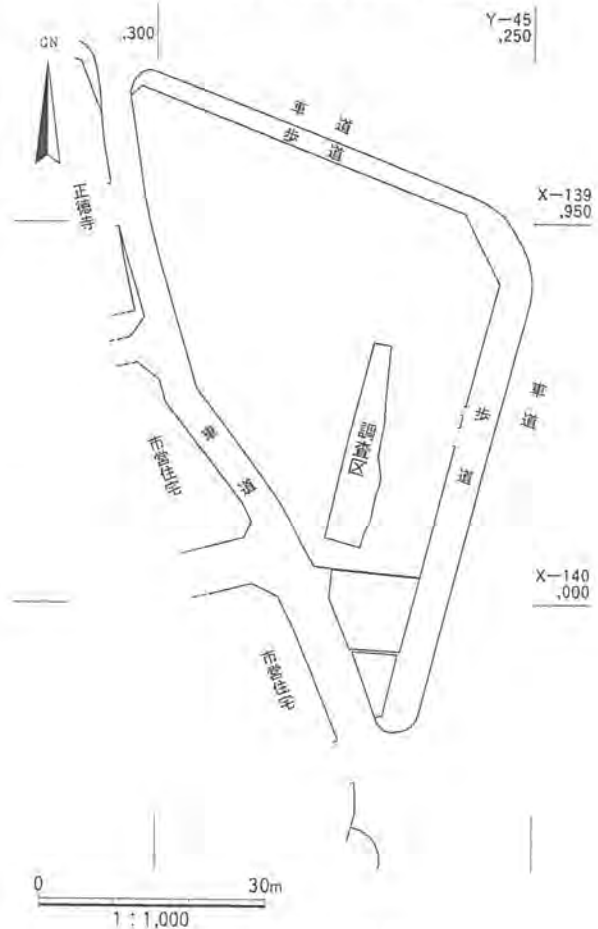


図2 調査区位置図

ため、重機による掘削範囲を状況に即して適宜変更して実施した。また、重機の移動路を確保するために、調査初日に北端部約5mを先行して掘削し、地表下1.8mまで攪乱であることを確かめた後、直ちに埋戻しを行った(図2)。人力掘削は中世の遺物包含層から開始し、平面調査では地表下1.5～1.6mまで、確認トレンチでは地表下約2.8mまで行った。梅雨明け直後の蒸し暑い炎天下での調査ではあったが、中世の遺構・遺物のほか、古墳時代前期から古代の遺構や遺物も見つかり、実働8日間で調査を終了した(図版①)。

本報告で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では「TP±〇m」と記した。基準点の数値は世界測地系を用い、挿図中の方位は座標北を示す。

2) 調査の結果

i) 層序

層厚1.3mの現代盛土層(第0層)の下位にある地表下2.8mまでの地層を、第1層～第4層に区分した(図3・4)。

第1層：黒褐色10YR3/1を基本の色調とする砂質シルト層で、層厚は15～20cmであった。現代盛土直前まで耕されていた旧作土層である。

第1.5層：にぶい黄褐色10YR5/3～灰黄褐色10YR4/2の砂質シルト層で、細礫が少量混った。旧作土層である。

第2層は溜池かとみられる大きな土塊状の凹地SX02の埋土層であり、第2-①～⑤層に区分した。

第2-①～③層：SX02の上半部を占める粗粒砂質シルトからなり、中礫～大礫サイズのシルト質粘土偽礫、細礫～小礫を含む人為的な埋立て層である。最大層厚は60cmであった。第2-①層はにぶい黄褐色10YR4/3を基本の色調とし、細礫～小礫が比較的多く、第2-②層は暗褐色～黒褐色10YR2.5/3を基本の色調とし、偽礫が多く、第2-③層は暗褐色10YR3/3を基本の色調とし、大礫サイズの偽礫が多く含まれた。

第2-④・⑤層：SX02の下半部を占める砂質泥からなり、粗粒砂のレンズを不規則に多数挟んだ池底堆積層である。最大層厚は60cmであった。第2-④層は黒褐色10YR3/2を基本の色調とし、縁辺部で褐色を交えた。第2-⑤層はにぶい黄褐色を基本の色調とし、泥質偽礫を含んだ。

第2層には瓦器、土師器、須恵器などが含まれた。

第3層は調査地北半部で黒褐色10YR3/2のシルト質粗粒砂～細礫からなる古土壤である。層厚は約10cmであった。

調査地の南半部では、第3層は作土層であったとみられ、層厚を増し、第3-①～⑤層に区分できた(図版④)。

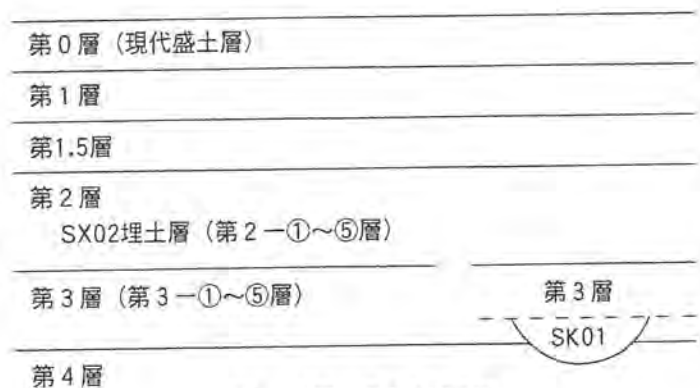


図3 地層と遺構の関係図

第3-①~③層：第3層の上部を占める砂質シルトからなり、粗粒砂・礫を比較的多く含んでいた。両層厚は30~50cmであった。第3-①・②層は、ともににぶい黄褐色10YR4/3を基本の色調としたが、第3-②層は特に礫・砂が多く含まれた。図4の断面図に見られる両層の変形構造は、基礎杭の施工時の乱れである。第3-③層は、にぶい黄褐~褐色10YR4/3.5を呈した。

第3-④・⑤層：第3層の下部を占める泥からなり、粗粒砂・礫が少し含まれた。両層厚は15~30cmであった。第3-④層はにぶい黄褐~黒褐色10YR3.5/2.5を呈し、かなり泥質であった。第3-⑤層は10YR4/2を基本の色調とし、相対的に礫・砂が多く、また、下面には耕作痕跡とみられる顕著な凹凸が認められた。

第3層には、土師器、須恵器などの古代~中世初頭の遺物が含まれた。

第4層：褐灰色10YR5/1を基本の色調とし、急傾斜の斜交ラミナが発達する小礫~細礫と粗粒~極粗粒砂からなる上部の互層と、灰白色10YR8/1を基本の色調とするトラフ型斜交ラミナが発達する下部の極粗粒~粗粒砂層とからなる。全層厚は130cm以上で、下限は不明である。上部のラミナの

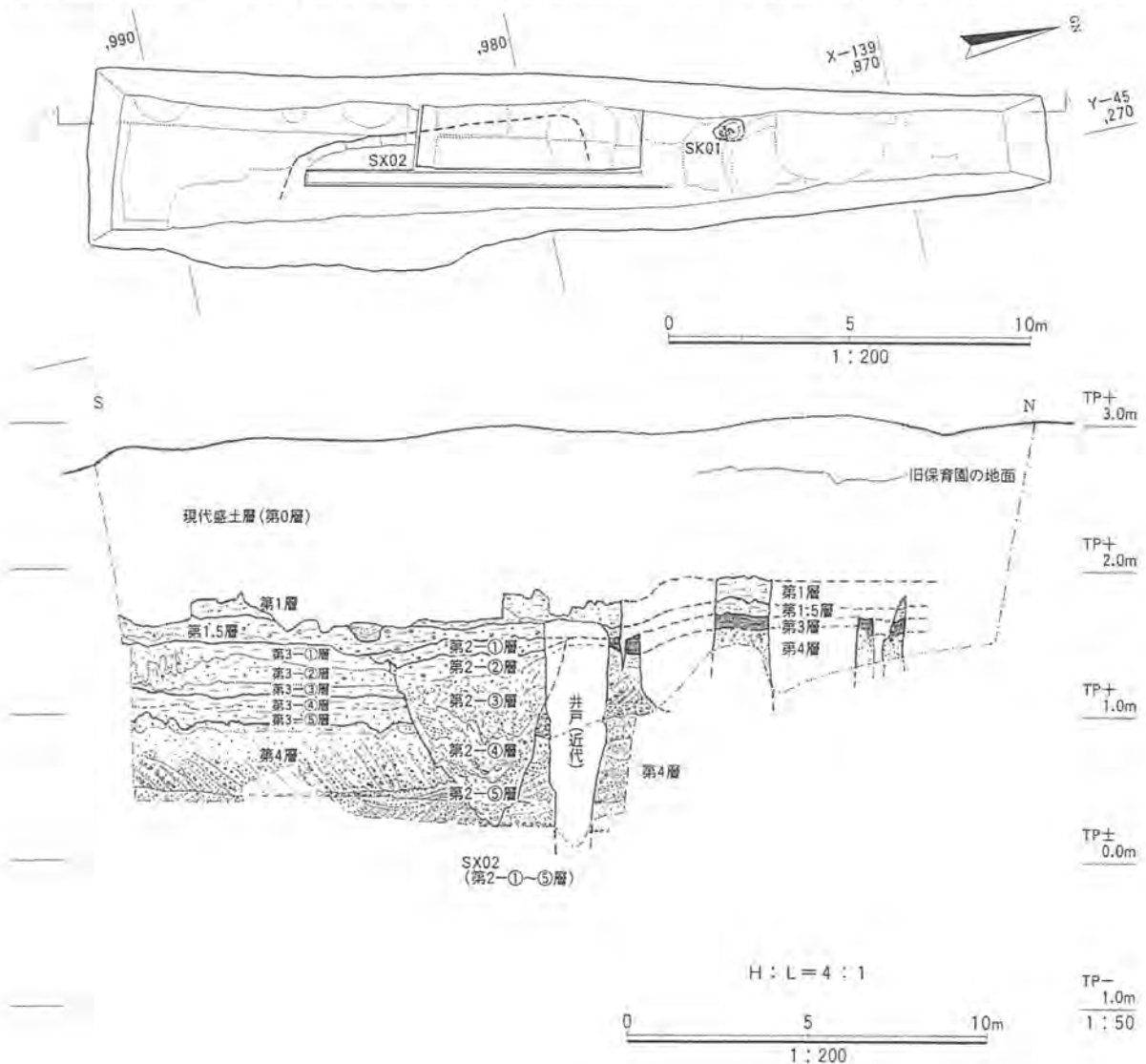


図4 遺構平面図(上)・地層断面図(下)

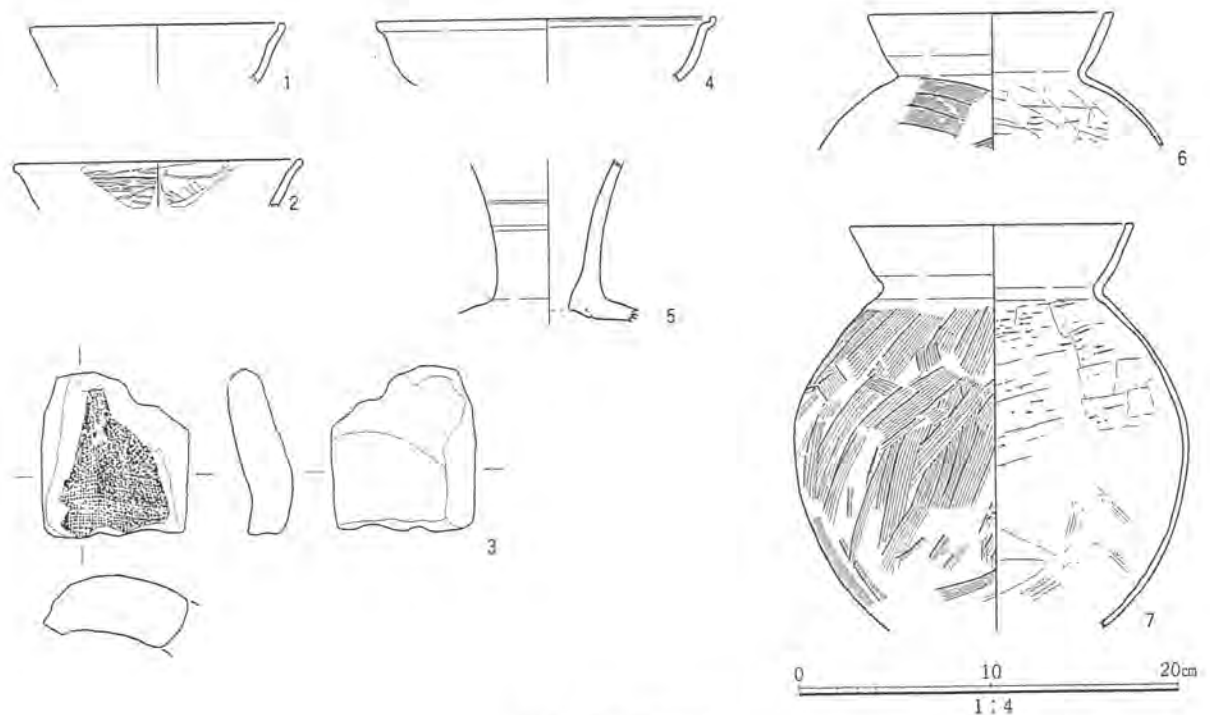


図5 遺物実測図

SK01(4)、SX02(1)、第4層(6・7)、第3層(2・3・5)

傾斜方向と傾斜角はS45~50°E・40°Sが優勢で、上部の下底はうねりを伴う2Dリップルを構成した。下部のトラフ型斜交層理は南南西を向き、そのフォアセットラミナが示す傾斜方向と傾斜角はS70°W・32°Sであった。第4層には古墳時代前期前葉の土師器が含まれた。

ii) 遺構と遺物

a. 古代の遺構とその出土遺物(図4・5、図版②)

SK01は調査地北半部で見つかった第3層内の土壌である。平面の長軸0.9m、短軸0.6mの南北にやや長い円形の土壌であり、検出時の深さは0.2mである。この土壌からは土師器・須恵器のほか、焼土塊や礫が出土している。土師器4は口径18.0cmの杯である。奈良時代、8世紀中頃~後半のものかと推定される。

b. 中世の遺構とその遺物(図4・5、図版③・④)

SX02は調査地南半部で見つかった第3層上面の溜池かとみられる遺構であり、隅丸方形の大きな窪みの約8mある西壁とみられる部分を検出した。深さは最深部で1.3mであった。壁際は約45度の傾斜があり、かなり急である。上述のごとく、埋土層は2大別され、第2-④・⑤層は機能時の水漬き堆積層で泥質偽礫が加工時のラグを示すものと見られる。また、第2-①~③層は偽礫が多く分級が悪い特徴から埋立て層と考えられる。機能時堆積層と埋立て層には、ともに土師器・須恵器・瓦器が含まれるが、土師器の杯1のように、第3層から二次的に混入したと思われる古代にさかのぼるものが相当量含まれている。

c. 包含層出土遺物(図5、図版⑤)

第4層から出土した土師器の甕7は、器壁が薄くタテハケが残る布留式古相の特徴を持ち、[杉本厚典

2006]の28期に相当する。3世紀末～4世紀初頭の古墳時代前期前葉のものとみられる。同じく第4層から出土した甕6も類似した型式であろう。

第3層下部からは、土師器の杯2や須恵器の長頸壺5、布目痕のある丸瓦3のほか、土師器や須恵器・緑釉陶器が出土し、これらは奈良時代から平安時代後期(古代～中世初頭)までの年代を示している。

iii) 堆積相からみた古環境

第4層の上部はフォアセットラミナが南東に傾斜し、また、粗粒な碎屑物がリズミカルに互層している。このことは、第4層上部の堆積物が淀川からではなく、大阪湾側から供給されたと推定され、例えば台風時の高潮のように、繰り返し働く強力な営力によって堆積したことを示唆する。また、第4層下部のトラフ型斜交層理の向きとそのフォアセットラミナが南南西に傾斜することから、第4層下部が淀川方向から供給されたと推定される。この方向は、弥生～古墳時代の崇禪寺遺跡、同心町遺跡、国分寺跡、豊崎遺跡などで推定した古流向と同じであり、淀川河口付近に堆積したのであろう(図4、図版⑥)。

3) まとめ

この調査では、次の諸点が明らかとなった。

- ・崇禪寺遺跡と宮原遺跡に挟まれた当該地が、古墳時代前期～鎌倉・室町時代頃の遺構・遺物の包蔵地であることが明らかとなった。
- ・古墳時代前期前葉に、南西にある崇禪寺遺跡は陸地であったが、当該地は河川の営力が働く水域であった。
- ・堆積層の古流向からは、その当時の当該地が、弥生～古墳時代の崇禪寺遺跡ほかの周辺遺跡と同じく、主として淀川の堆積作用によって形成された淀川の河口付近の三角州や濆であったと推定される。
- ・古墳時代前期のある時、当該地は嵐に見舞われた。台風による高潮が原因したのかもしれない。
- ・古代～中世にかけて、当該地は陸地となり、調査地の北半部では古土壌が発達し、南半部では水田が耕されていたと推定される。
- ・中世以降、現在近く、日之出保育園が建設された時まで、当該地は水田地帯であった。

今後さらに調査成果を蓄積することにより、周辺遺跡を含めた淀川北岸地域の変遷史が、より詳細に解明されるであろう。

引用文献

建設省国土地理院1965、『土地条件調査報告書(大阪平野)』、179ps.

杉本厚典2006、『河内地域』：『古式土師器の年代学』、pp.123-143、大阪府文化財センター。

①現場作業風景
(南から)



②SK01土器出土状況
(南東から)



③SX02掘下げ状況
(北東から)



④SX02北端部の地層断面
(南東から)

右側がSX02埋土層、左側が第3層～第4層、壁面
中位の遺物(瓦3)は第3-
④層に包含される。



⑤甕7の第4層出土状況
(東から)



⑥第4層の堆積状況
(東から)

上部の砂礫層には西から東へ重なる顕著な斜交層理の互層が見られる(南壁)。下部の砂には流れと直交する西北西-東南東方向の漣痕が見られる(トレンチ平面)。



VII 阿 部 野 区

阿倍野筋 2 丁目における
埋蔵文化財発掘調査(AB06-1)報告書

調査個所	大阪市阿倍野区阿倍野筋 2 丁目 17-2
調査面積	360m ²
調査期間	平成18年 7月11日～8月11日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当	文化財研究部次長 南 秀雄・櫻井久之

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は阿倍寺跡推定域の北西辺に位置する(図1)。阿倍寺は、戦前に松長大明神の境内から塔心礎が見つかり、その北側にあった金堂跡と推定される方形の土壇と合わせて、四天王寺式伽藍配置をとる古代寺院と考えられている[明山大華1933]。また、出土する重圈縁複弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦から、7世紀後半に創建されたとされる。さらに、AB98-6次調査では14~16世紀前半の大溝が見つかり、寺域の北辺を画し、防御機能を備えた溝を巡らしていたとも考えられている[大阪市文化財協会1989]。

今回の調査地では、大阪市教育委員会の行った試掘調査により、地表下50~70cmに布目瓦を含む古代~中世の遺物包含層が確認されたことにより、本調査を実施することになった。

調査区は地層の残存状況がよいと判断された敷地の南東隅に平面台形に設けられた(図2)。7月11日の午後より重機掘削を開始したが、既存の建物の基礎などによる攪乱が著しく、また雨天が続いたため、26日に重機掘削を終えた。調査を進める中で、江戸時代の土採り穴群や室町時代の溝が確認され、それらから古代の土器・瓦が出土した。8月11日に、完掘状況の全景写真を撮影し、遺構に残っていたセクションを外して、現場作業を終了した。

なお、この調査での水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+〇mとしている。また、挿図中の座標値は世界測地系による。

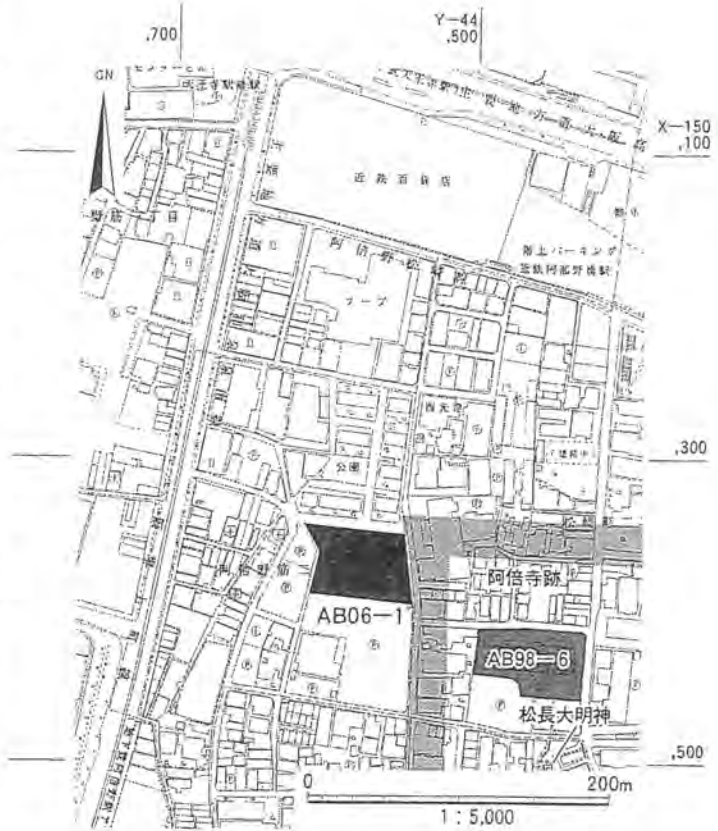


図1 調査地位置図(1)

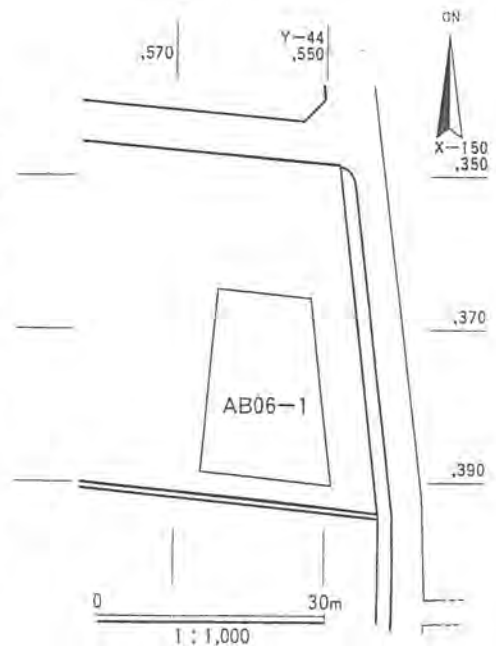


図2 調査区位置図(2)

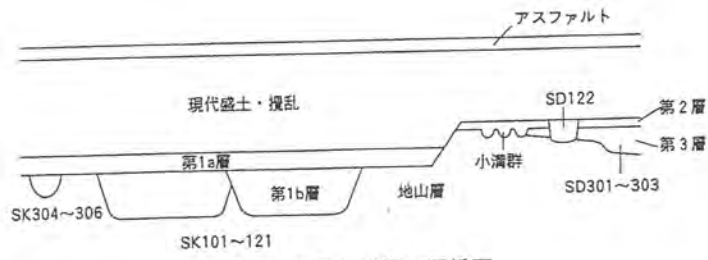


図3 地層と遺構の関係図

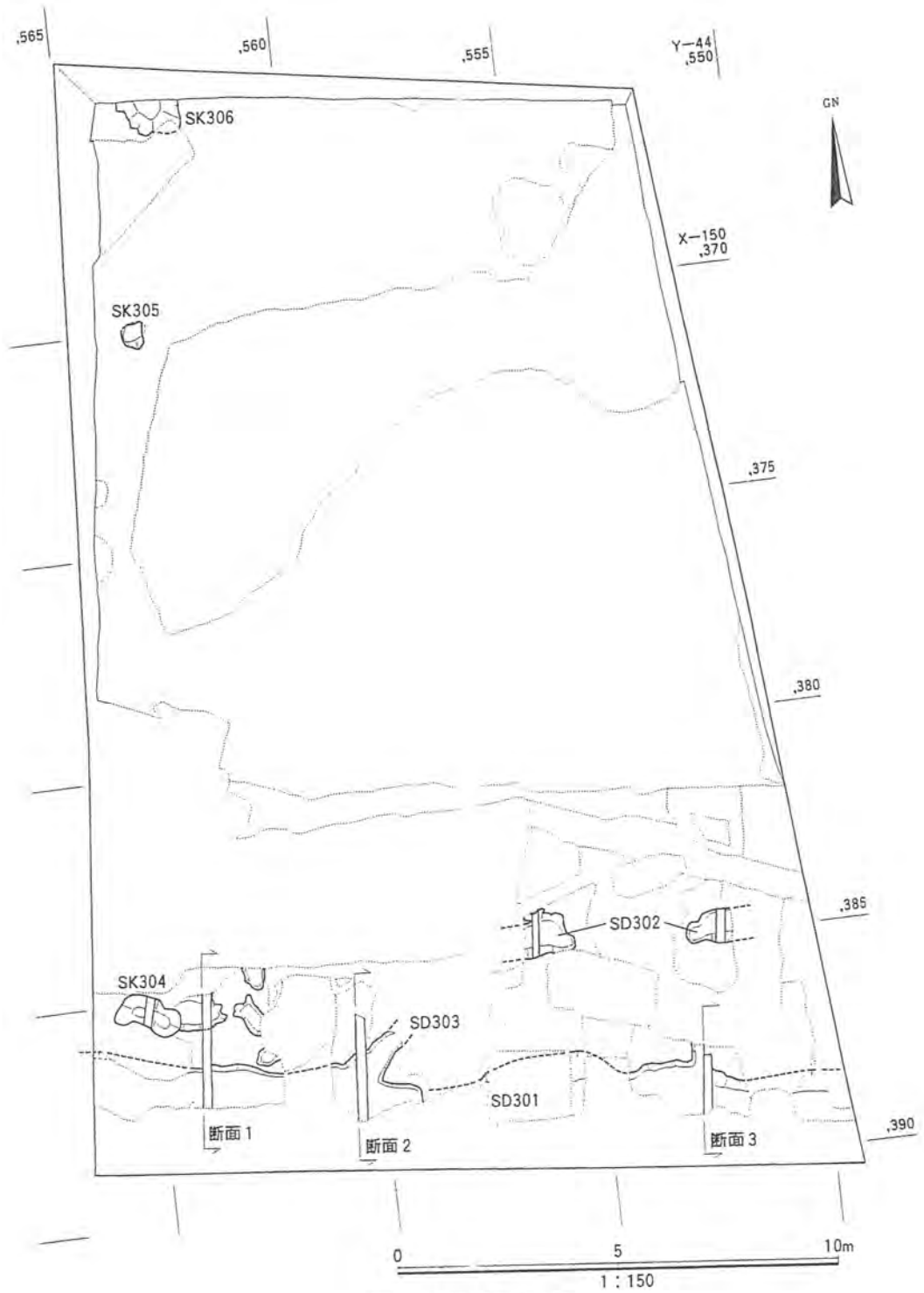


図4 第3層下面遺構

2) 調査の結果

i) 層序(図3・5)

この調査区では、現代の盛土および攪乱を除去すると地山層の上に大半の遺構が現れる。調査区の北側3分2では江戸時代の土採り穴が殆ど隙間なく存在し、その埋土(第1b層)を覆う作土層(第1a層)が一部に見られた。調査区南部は、第2層・第3層が部分的に残り、地山層が最も高いところでTP+15.7mで検出された。

第1a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)粗粒砂混り砂質シルト層である。主として土採り穴群の上位に見られる江戸時代後期の作土層で、層厚は約20cmである。

第1b層：にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト・粗粒砂混り細粒砂を主体とする。作土層を起源とする土採り穴SK101～121の埋土で、地山層の偽礫も多く含まれる。

第2層：褐色(7.5YR4/4)粗粒砂混り砂質シルト層である。第3層と色調が似通っているが、砂質で明瞭に識別される。調査区南部で小溝群の埋土として見られ、層厚は5cm前後である。瓦器を含む。

第3層：褐色(10YR4/6)粘土質シルト層で固く締まる。層厚は10～20cmあり、本層の下面に溝SD301～303、土壙SK304～306がある。古代の土器・瓦のほか13世紀代の瓦器碗が出土している。

地山層：上部の20～30cmは明褐色(7.5YR5/8)粘土混り極細粒砂層で、上方で細粒化して砂質粘土を主体とする。下部は橙色(7.5YR6/8)極細粒砂となる。

ii) 遺構と遺物(図4・6～9)

今回の調査では第1b・第2・第3の各層下面において江戸～鎌倉時代の遺構を検出している。

a. 鎌倉時代(第3層下面)の遺構

SD301～303 いずれも調査区南部の溝であり、SD301は調査区南壁に沿って東西方向をとっている。この溝は北肩が検出されたのみで、規模は明らかでない。調査範囲内では幅1.1m以上、深さ0.26mあった。図6の須恵器壺の高台部1、重弧文軒平瓦2、平瓦3といった古代の資料のほか、瓦器碗4・5の13世紀代の土器が出土している。凹面に布目痕のある瓦が小片ながら9点採集され、酸化炎焼成のもの、還元炎焼成のものが共に認められた。SD302・303は幅0.5～1.0m、深さ0.12mある。攪乱のため分断されているが、SD302は西で南に折れて、SD303と一連の溝であった可能性がある。

SK304～306 調査区の西壁寄りに3基の土壙がある。遺物はSK305より風化の進んだサヌカイト剥片が1点出土したのみである。SK306は深さ0.82mと深いが、SK304・305は深さ0.4m程度である。

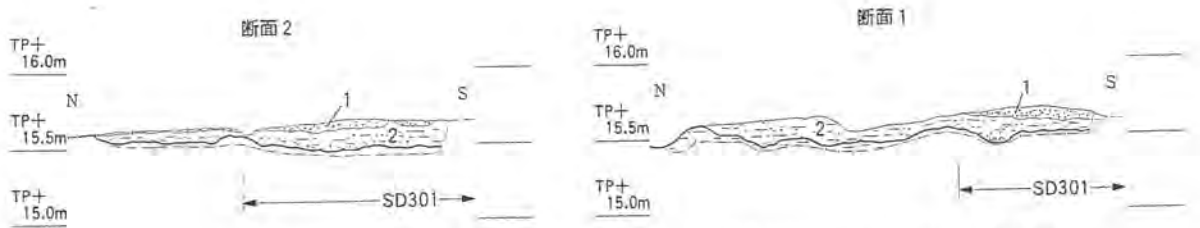
b. 室町時代(第2層下面)の遺構

調査区の南部に褐色(7.5YR4/4)粗粒砂混り砂質シルトを埋土とする小溝群がある。各溝は近接し、1条ごとの単位は明確には捉えられない。瓦器・土師器が出土しているが、国産磁器は認められなかった。室町時代に収まる時期の遺構であろう。

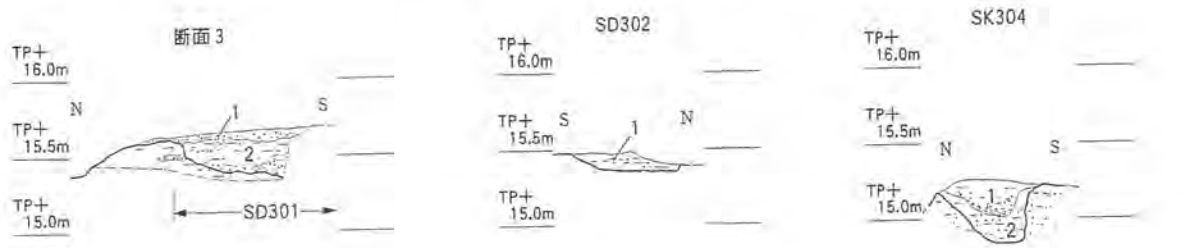
c. 江戸時代後半(第1b層下面)の遺構

SD122 調査区南部の中央にある、幅0.68m、深さ0.08mの東西方向の溝である。

SK101～121 調査区の北側3分の2には、方形を呈する21基の土採り穴群があった。これらは東



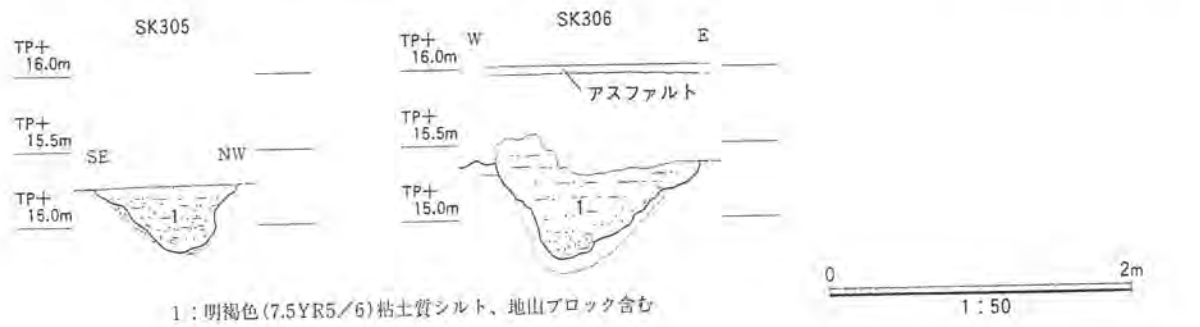
1 : 褐色(7.5YR4/4)粗粒砂混り砂質シルト(第2層) 2 : 褐色(10YR4/6)粘土質シルト(第3層)



1 : 褐色(7.5YR4/4)粗粒砂混り砂質シルト(第2層)
 2 : 褐色(10YR4/6)粘土質シルト(第3層)

1 : 明黄褐色(10YR6/6)粗粒砂混りシルト

1 : 明褐色(7.5YR5/6)粘土質シルト、地山ブロック含む
 2 : 明黄褐色(10YR6/6)シルト質粘土



1 : 明褐色(7.5YR5/6)粘土質シルト、地山ブロック含む

図5 遺構断面実測図

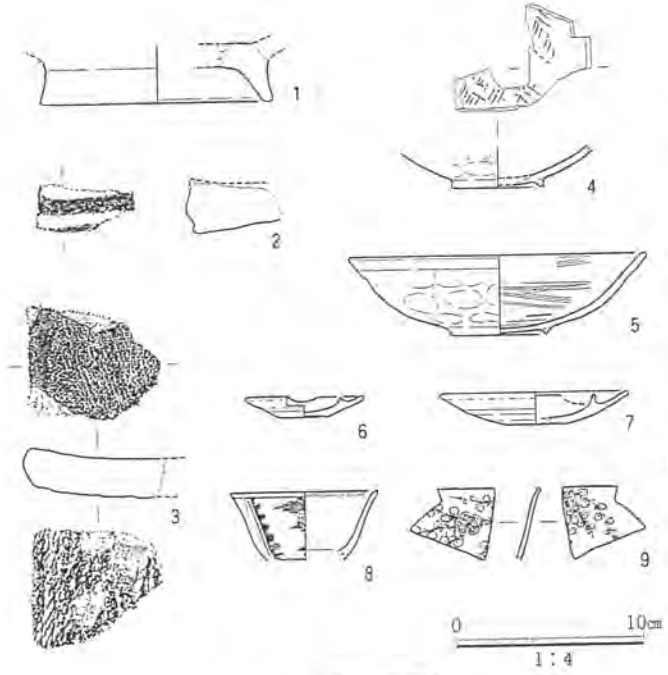


図6 遺物実測図

SD301(1~5)、SK115(9)、SK118(8)、SK119(6・7)

西方向に整然と列を成しており、SK101・120が北から1列目、SK102~106が2列目、SK107~110・116・117が3列目、SK111~115・118・119が4列目となる。ただしSK121については、SK101の北側にあつてその北肩を大きく切り込んで掘られており、他の土採り穴とは掘削の方向を異にするものと考えられる。掘削の順序は遺構番号の順にSK101→SK119となる。基本的には北から南へ、東から西へという順序であるが、SK110の掘削・埋戻し後、その西側の区域に手を付けずに、南側列の掘削に入り、SK115を埋戻した後にSK110

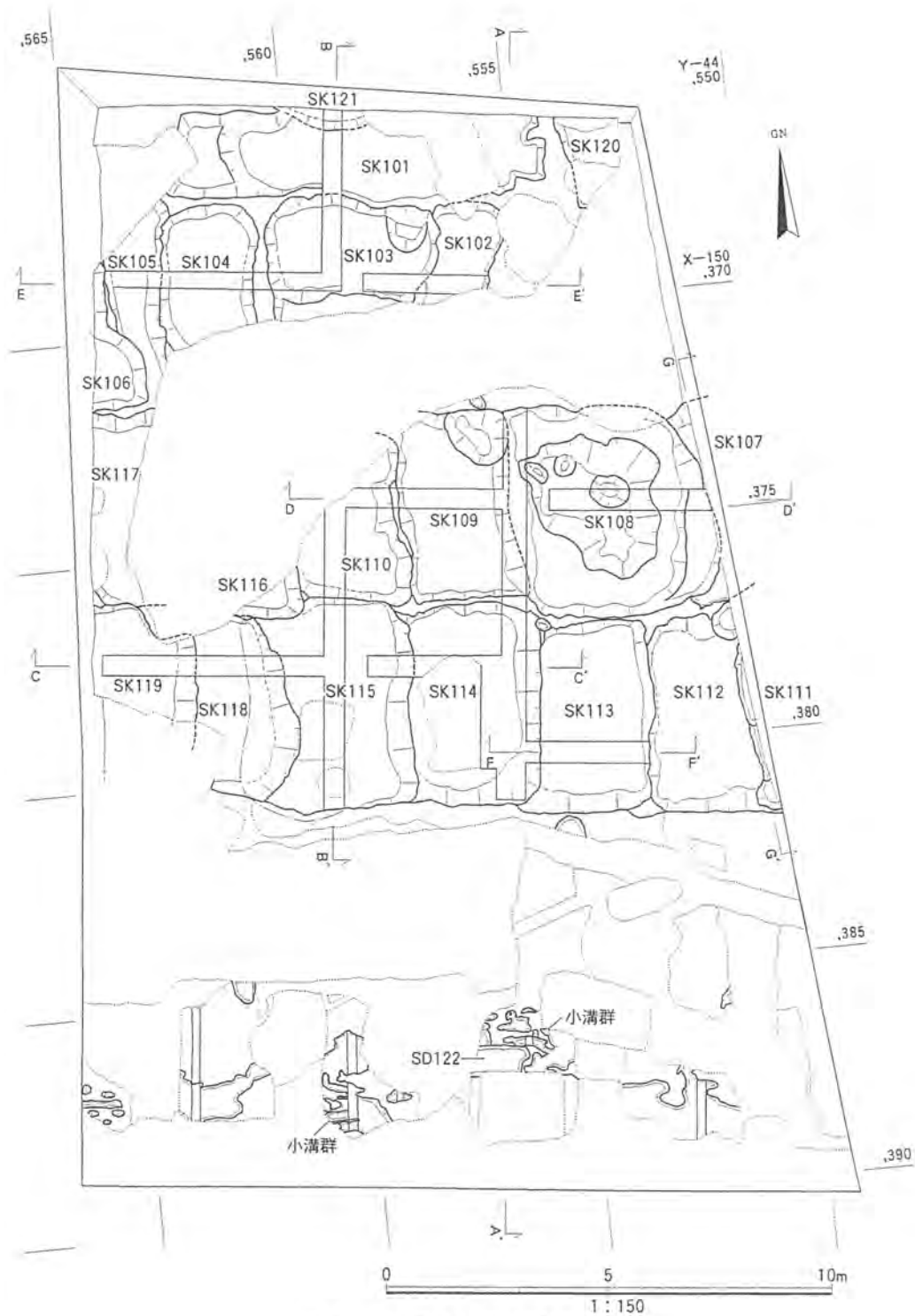


図7 第1層および第2層下面遺構

の西側にSK116を掘削している。

掘削作業の特徴として、地山層の粘土質の強い部分だけでなく、極細粒砂にまで掘り進んでいること、土採りの最前線となる各区画の西端の壁が垂直に近くなるまで掘込まれていることが挙げられる(図10)。これは掘削域内の地山土を可能な限り採取しようとしたためと思われる。そうした部分の地山面には、掘削具の先が突き刺った時の痕跡が明瞭に残っていた。

土採り穴は1区画を掘っては、それを完全に埋戻し、その後に隣を掘るという作業が繰り返されて

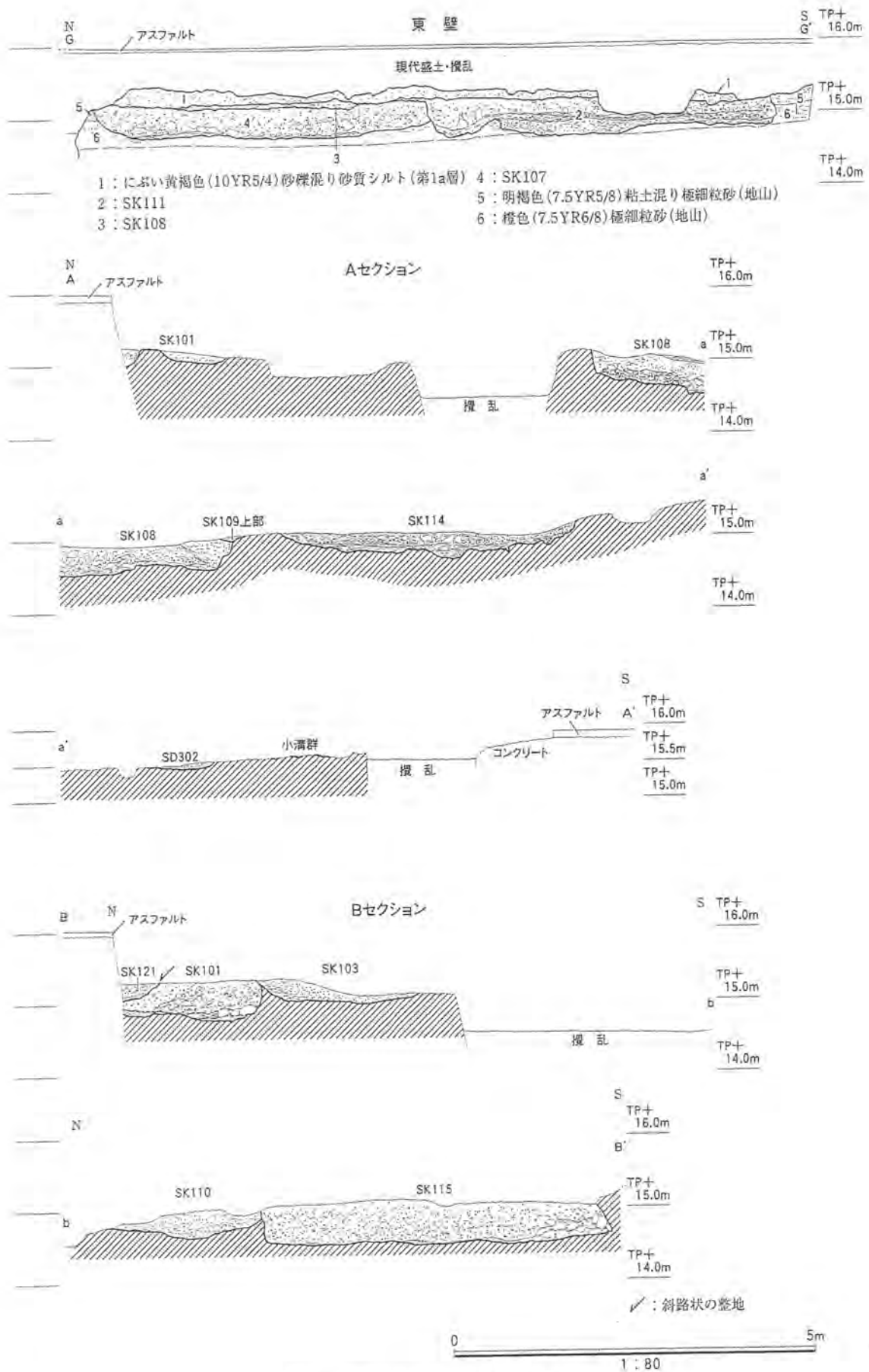


図8 東壁およびA・Bセクション断面

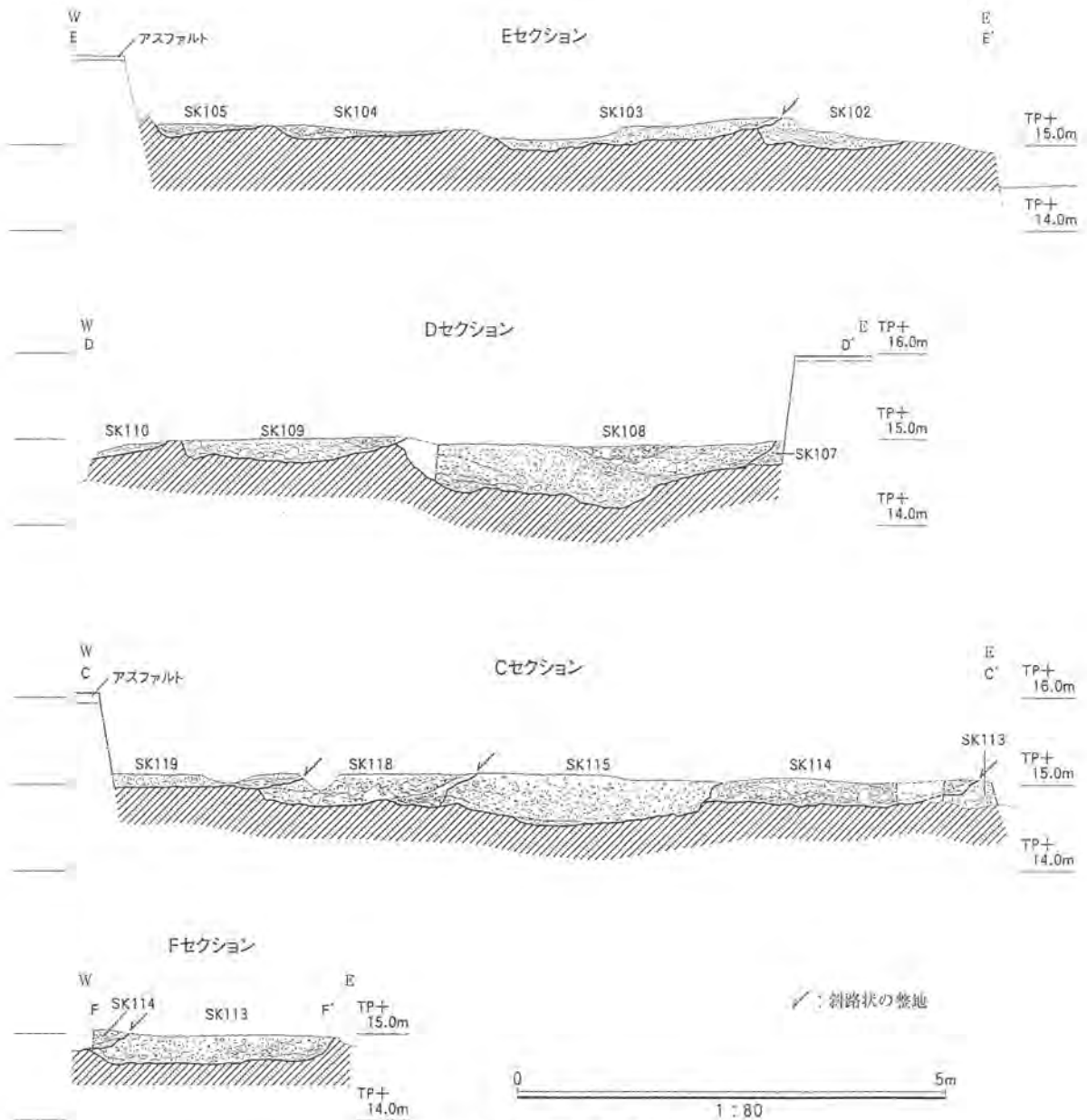


図9 C～Fセクション断面

いた。その埋戻しに際しては、先行する土採り穴のある側から土の搬入が行われたようである。それを示す斜路状の整地が多くの穴で認められた。凹凸をなくし、なだらかなスロープを作って埋戻し土を運び込みやすくしたものだろう。

土採り穴の埋戻し土からは、図6の信楽焼灯明皿6・7、瀬戸焼染付碗8・9や写真の土人形(猿・瓢箪・面子)などが出土しており、19世紀前半の時期が考えられる。

3) まとめ

今回の調査成果としては、第3層下面で鎌倉時代の溝が確認されたこと、またその溝から阿倍寺に関連する古代瓦が出土したことが挙げられる。さらに、第2層下面の小溝群から、室町時代には耕作地となっていたことが推定された。棚橋利光氏による「天王寺金堂舍利講記録」の検討[棚橋1995]に



図10 土採り穴加工時形成層下面の状況

より、今回の調査地の小字名である「北苗代田」は四天王寺に寄進された「野畠庄」の一部で、畠地であったことがわかる。同記録の奥書が応永31(1424)年であり、室町時代に当ると考えられた第2層下面の段階の状況と一致する点は注意される。

江戸時代後半の多数の土採り穴群が形成されていたことも注目される。この調査地ではそれが比較的良好な状況で残り、掘削の順序、埋戻し手順などを知ることができた。土採り穴群を整然と配列させるのは、掘削した穴を一旦完全に埋戻し、その後次穴を掘削するという作業を行う際に、無駄なく次の区画を掘るための工夫であったと考えられる。

参考文献

大阪市文化財協会1989、『日新建物株式会社による建設工事に伴う阿倍寺跡発掘調査(AB98-6)報告書』
 棚橋利光1995、「中世四天王寺周辺の村と庄—金堂舍利講記録から—」：大阪市史編纂所編『大阪の歴史』第45号、
 pp.1-29

明山大華1933、「阿部寺塔心礎に就て」：『考古学雑誌』第23巻第1号、pp.51-52

調査区東壁断面



調査区南部第3層下面
遺構完掘状況
(東から)



調査区南部第1～3層
下面検出状況
(東から)



阿倍野筋北遺跡発掘調査(AS06-3)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区阿倍野筋2丁目1-38~40
調査面積 2213m²
調査期間 平成18年9月4日~10月31日
平成19年1月9日~2月16日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、黒田慶一、趙哲済

1) 調査に至る経緯と経過

今回調査地は、AB06-1次調査地と道路を隔てた北の区画に位置する(図1)。阿倍寺跡推定地でもある南東100mのAB98-6次調査では、16世紀前半までの遺物を含む大溝が見つかり、寺域の北辺を画する境界の溝と考えられている[大阪市文化財協会2001]。今回調査地の旧字名は「辻堂前」「梨垣」である。

今回調査地で大阪市教育委員会が8箇所の試掘調査を行ったところ、地表下60~170cmで中世の遺物を含む遺構が確認されたことにより、本調査を実施することになった。

調査は事業者側の都合で、期間を前後2回に分けて行ったが、1回目は東区、2回目は西区で実施した。1回目の東区も期間を前後に分け、まず北半(I区)を、ついで南半(II区)を調査した。2回目は、旧建物基礎が深く、遺構の存在しない部分を除いて北区(III区)と南区(IV区)を同時に調査した。

1回目は9月4日に機械掘削をI区北端から開始し、順次人力掘削による調査に移行、10月7日にI区を終了し、引き続いてII区の機械掘削に南端からかかった。II区は10月31日に調査を終了し、一旦撤収した。

2回目は2007年1月9日にIV区南端から機械掘削を開始し、III区も引き続いて機械掘削した。人力掘削による調査は機械掘削の終了したところより順次開始し、2月16日に両区での調査をすべて終了し、撤収した。

なお、この調査での水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+〇mとしている。また、



図1 調査地位置図

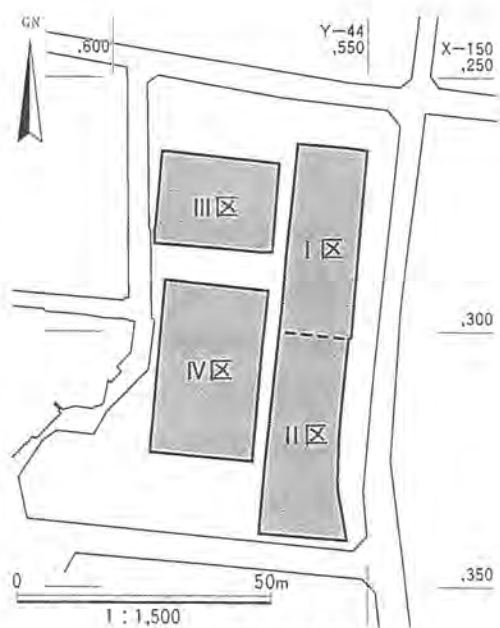


図2 調査区位置図

挿图中的の座標値は世界測地系による。

2) 調査の結果

i) 層序(図3～5)

I区の一部を除いたすべての地区で、現代の盛土および攪乱を除去すると地山層、もしくは地山層に掘込まれた土壌の埋土上に大半の遺構が現れる。I・Ⅲ・Ⅳ区で、南東-北西方向に幅10mの流路が検出されるが、それ以外は江戸時代末期(19世紀前半)の土採り穴が隙間なく分布する。

第1層：暗褐色(10YR3/3)粗粒砂混り砂質シルト層である。おもにI区の流路上に分布し、SD01・02など本層を切る溝もあるが、流路の水成堆積層を耕起した作土層である。I区では土採り穴の範囲まで分布する。19世紀までの遺物を包含し、層厚は約20cmである。

以下の第2～4層はI区流路南肩に存在する幅3～4mの段上に分布する。

第2層：にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂からなる偽礫を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)小礫混り粗砂層である。層厚は5～20cmで、肥前磁器を含む。

第3層：にぶい黄褐色(10YR5/4)小礫混り中粒砂層で、層厚は10～25cmある。

第4層：黄褐色(10YR5/8)粘土混り粗粒砂層で、層厚は10～20cmを測る。I区流路の南肩では本層下面で犁溝や農耕具によると思われる小ピット群、SK108を検出した。

第5層：地山層である。上部の20～30cmは明黄褐色(10YR6/8)中粒砂層で、洪積層が風化により粘質感がある。本層を土採りしている。

ii) 遺構と遺物

a. 中世(第4層下面)の遺構(図6・7・10・14)

SK108 I区北東部に位置する短辺0.8m、長辺1.3m以上、深さ0.25mの平面が長方形の土壌で、にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂混り粘土質シルトで埋る。図14の山田寺式単弁八弁蓮華文軒丸瓦1が出土した。

b. 江戸時代の遺構と遺物(図6～15)

I・Ⅲ・Ⅳ区で検出された南東-北西方向の幅10mの流路群は、現在も調査地周辺部に展開する、区画整理以前の特異な地割と同じ方向である。遺構はI区にSD01～06、Ⅱ区にSD07～08、Ⅳ区にSD09～10が位置するが、SD03はSD02に切られ、SD06はSD05に切られ、さらにSD05はSD01に切られるなど、新旧関係がある。またSD04はSD07やSD09と同一の溝、あるいは流域を踏襲した溝である可能性が高い。幅の数値は溝の(復元)上端幅を示す。

SD01 幅2.5m、深さ0.8mで、埋土はにぶい黄褐色(10YR5/8)シルト質粗粒砂質偽礫で、関西系陶器鉢21が出土した。

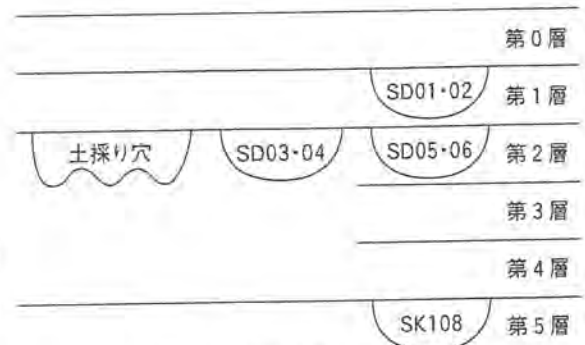


図3 地層と遺構の関係図

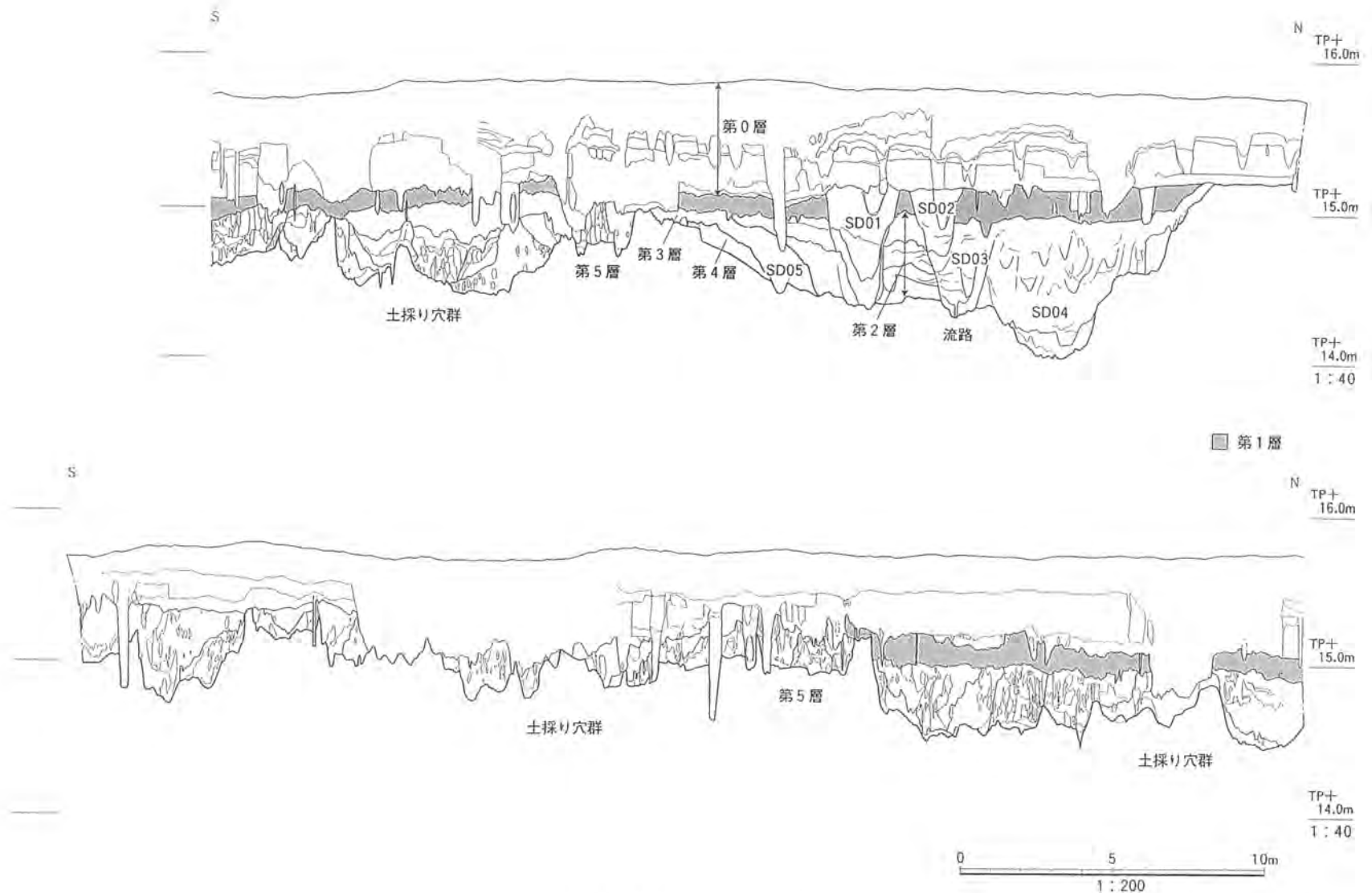


图4 I·II区西壁断面图

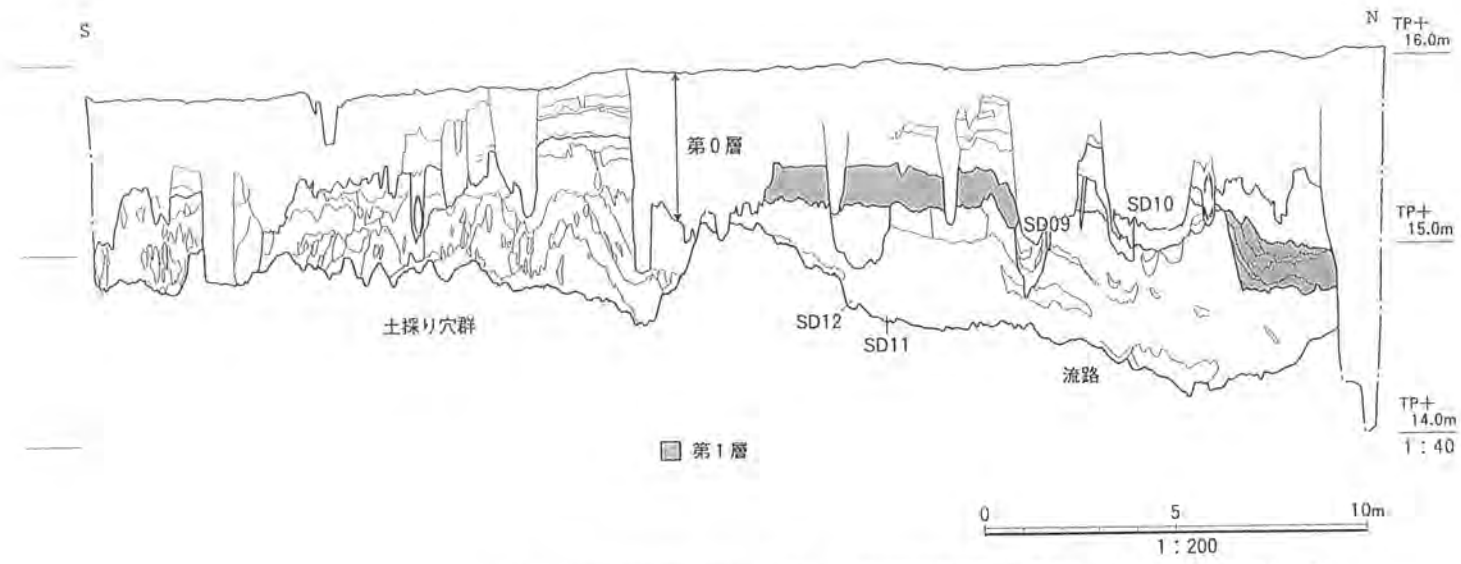
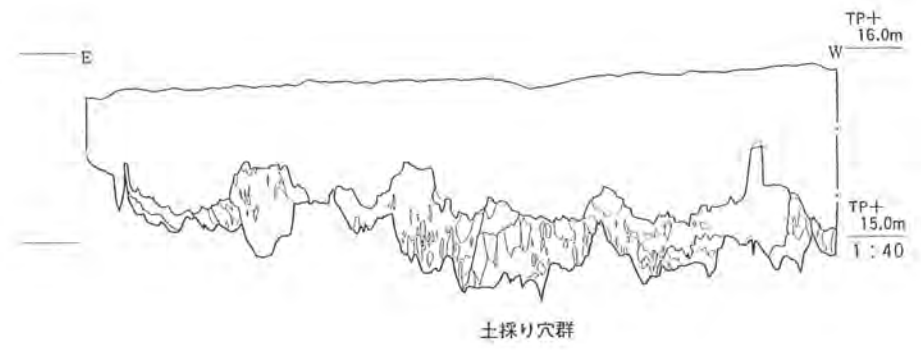
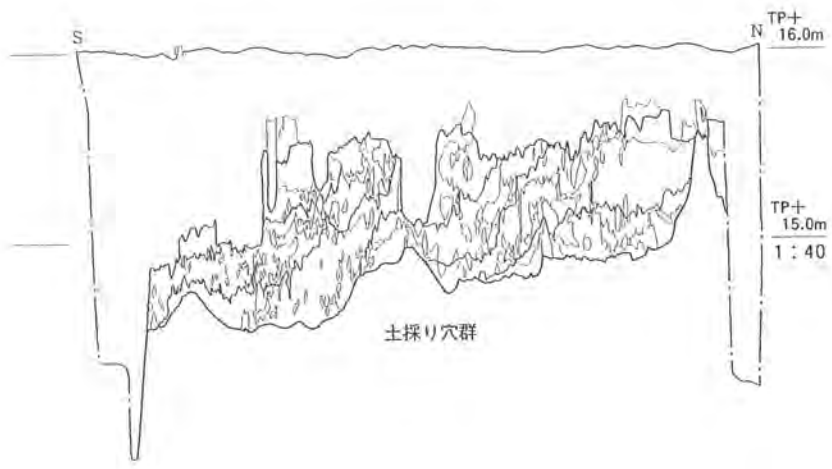


图5 III区西壁断面图(上图左)·IV区南壁断面图(上图右)·IV区西壁断面图(下图)

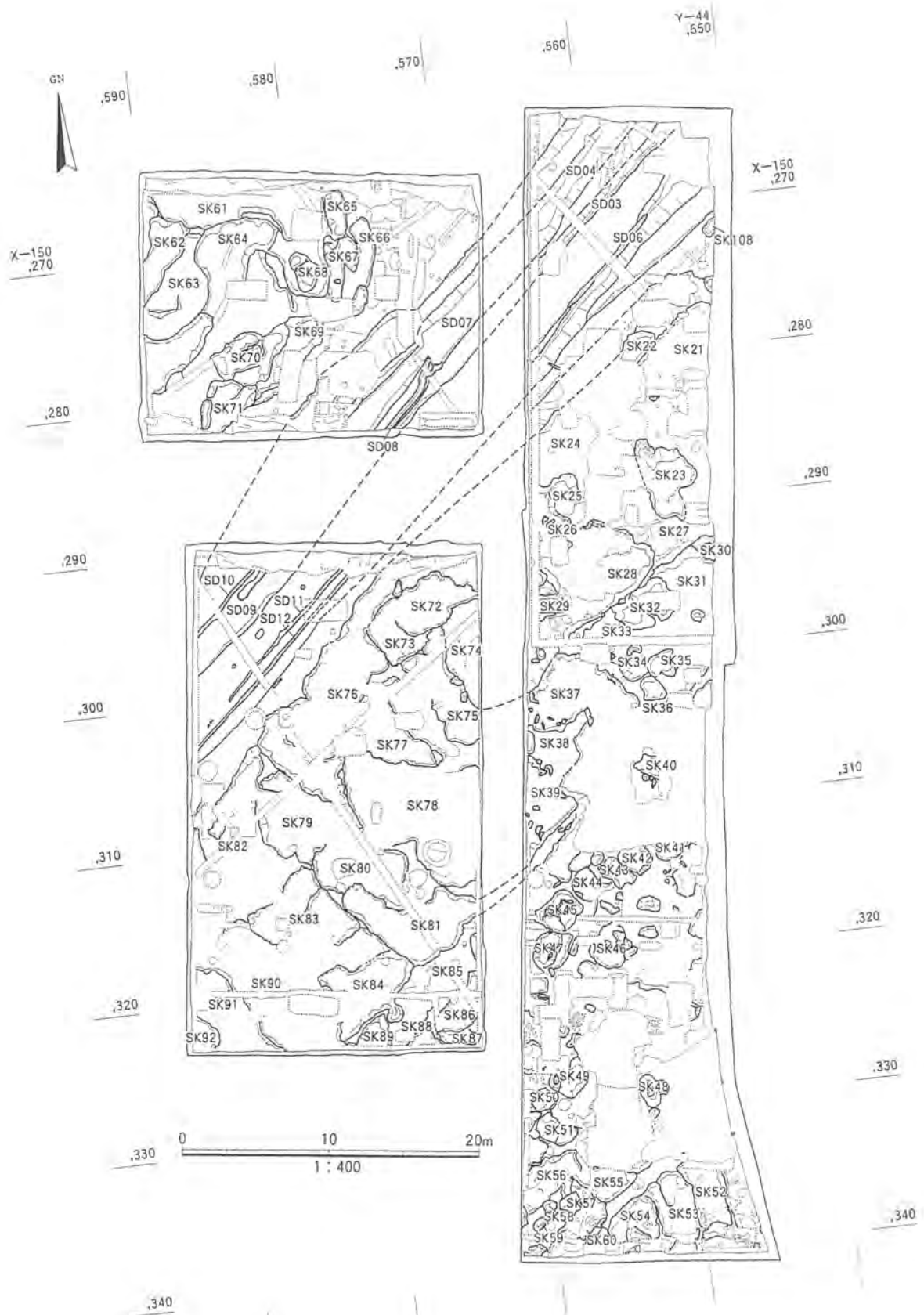


图6 I~IV区第5层上面遺構平面图

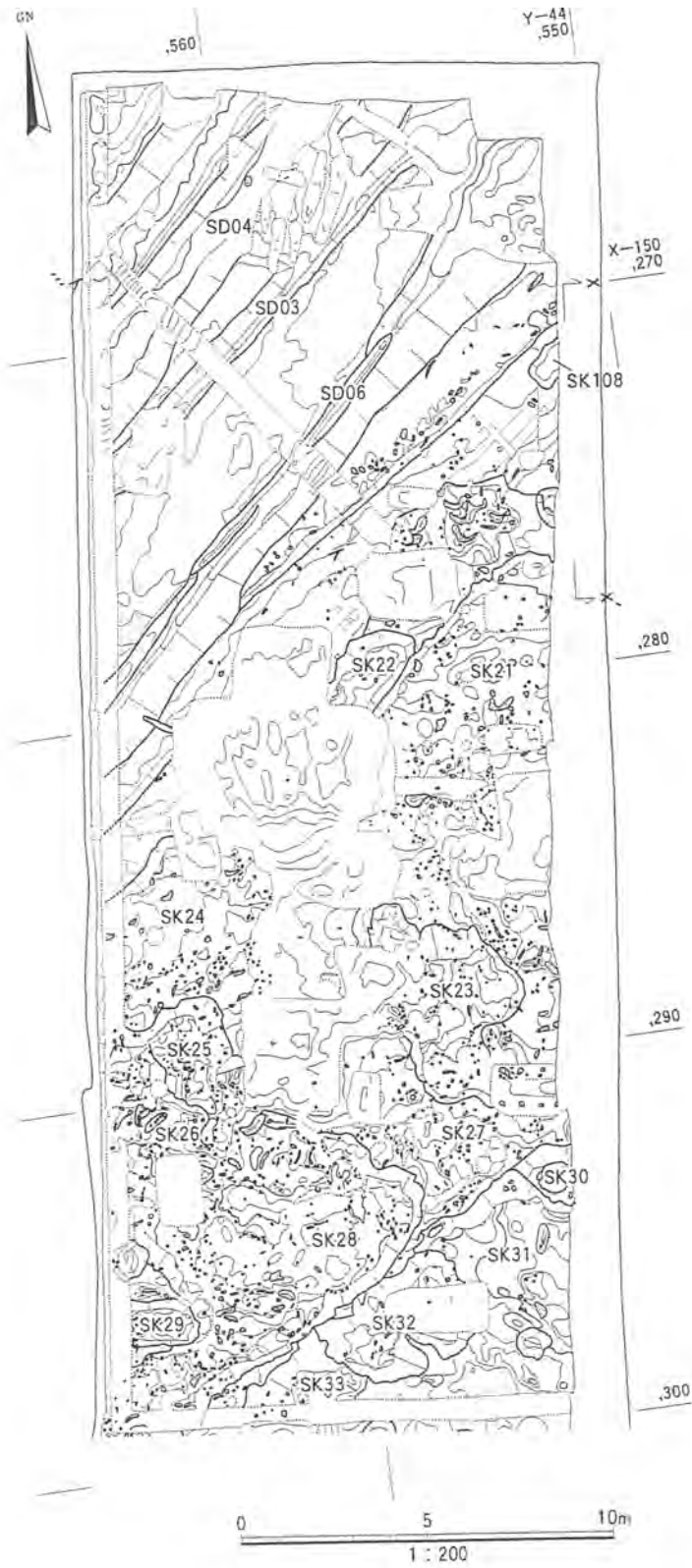


图7 I区第5层上面遗构平面图

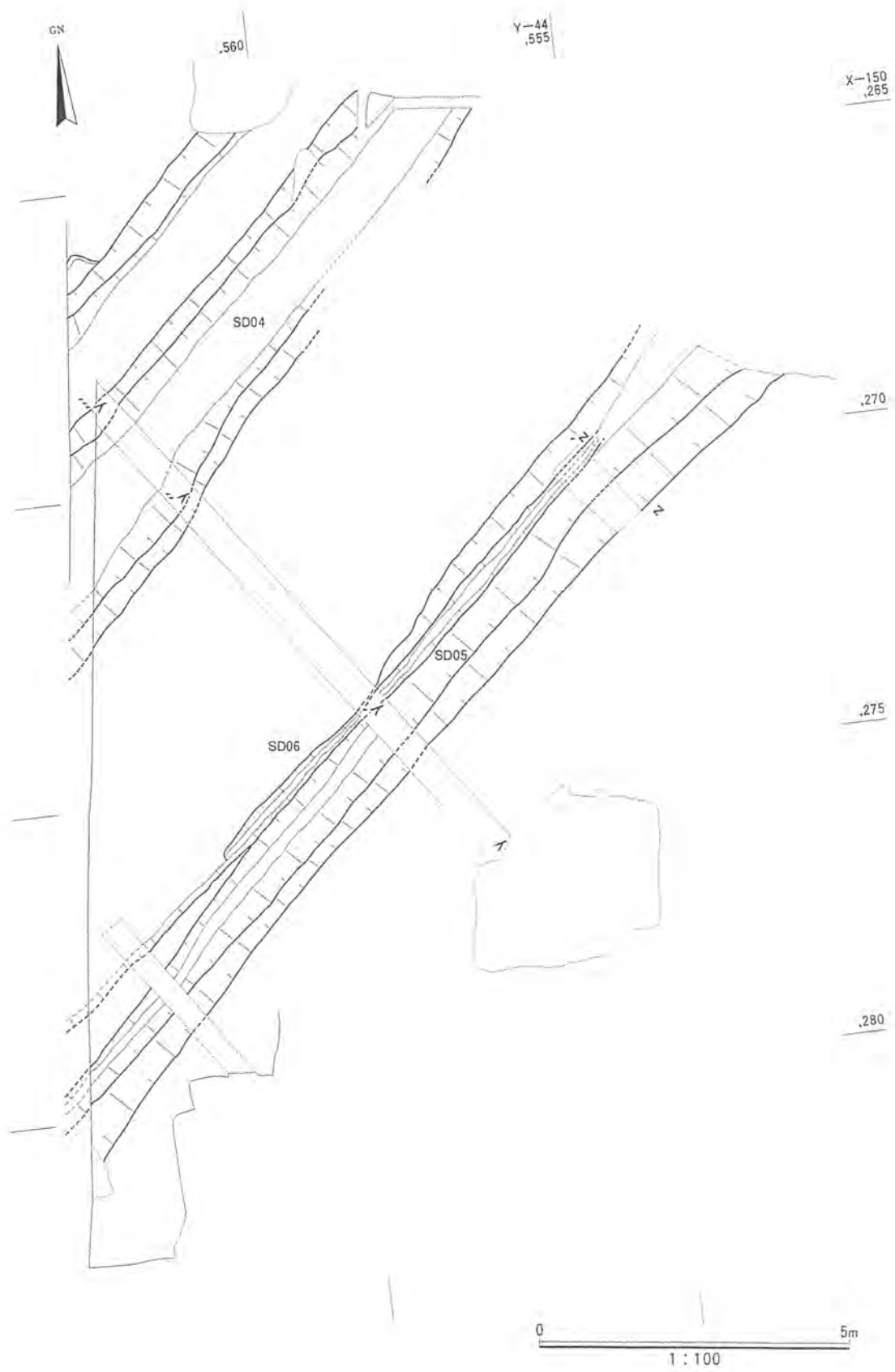


图8 SD04~06平面图(I区)

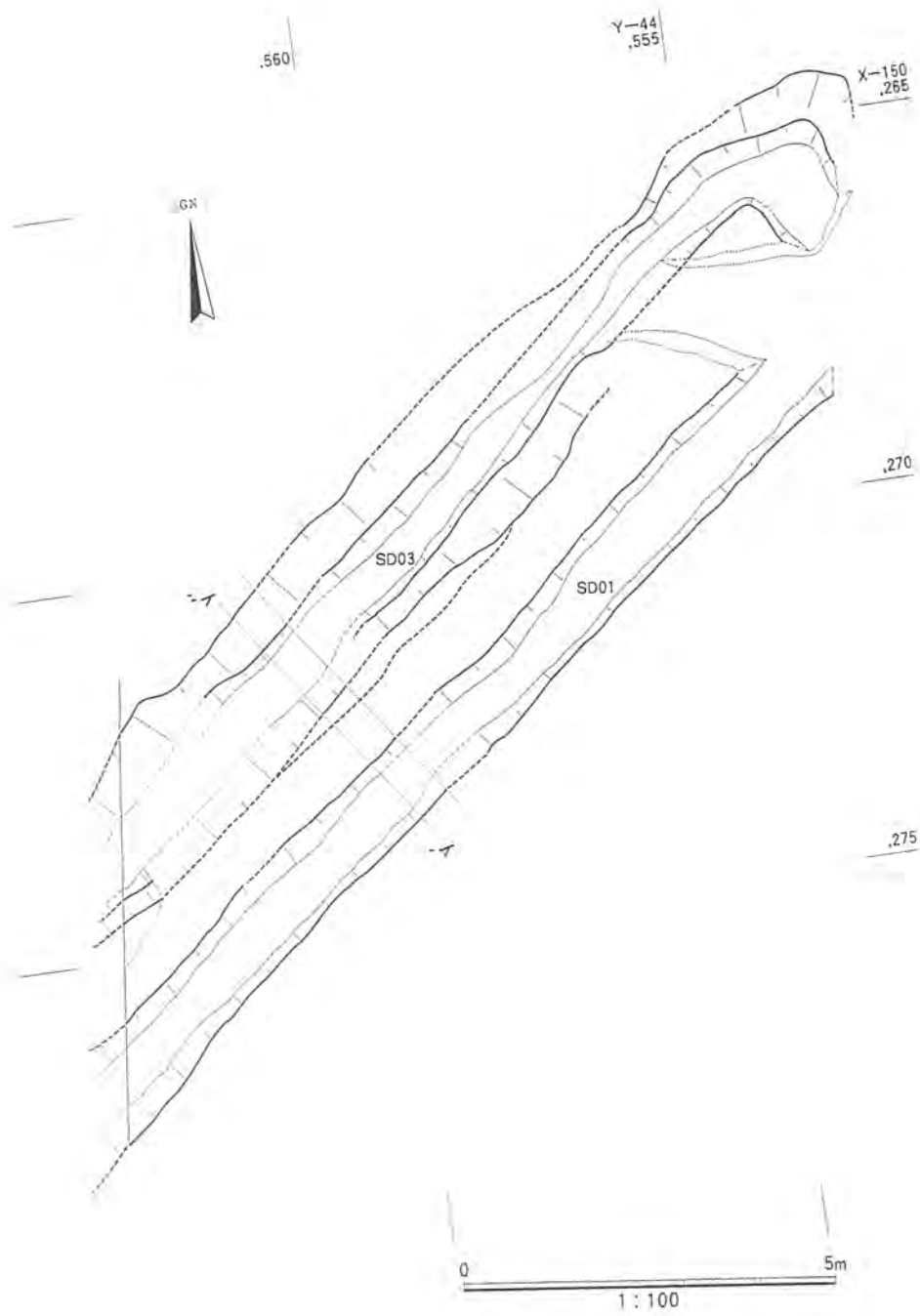


图9 SD01·03平面图(I区)

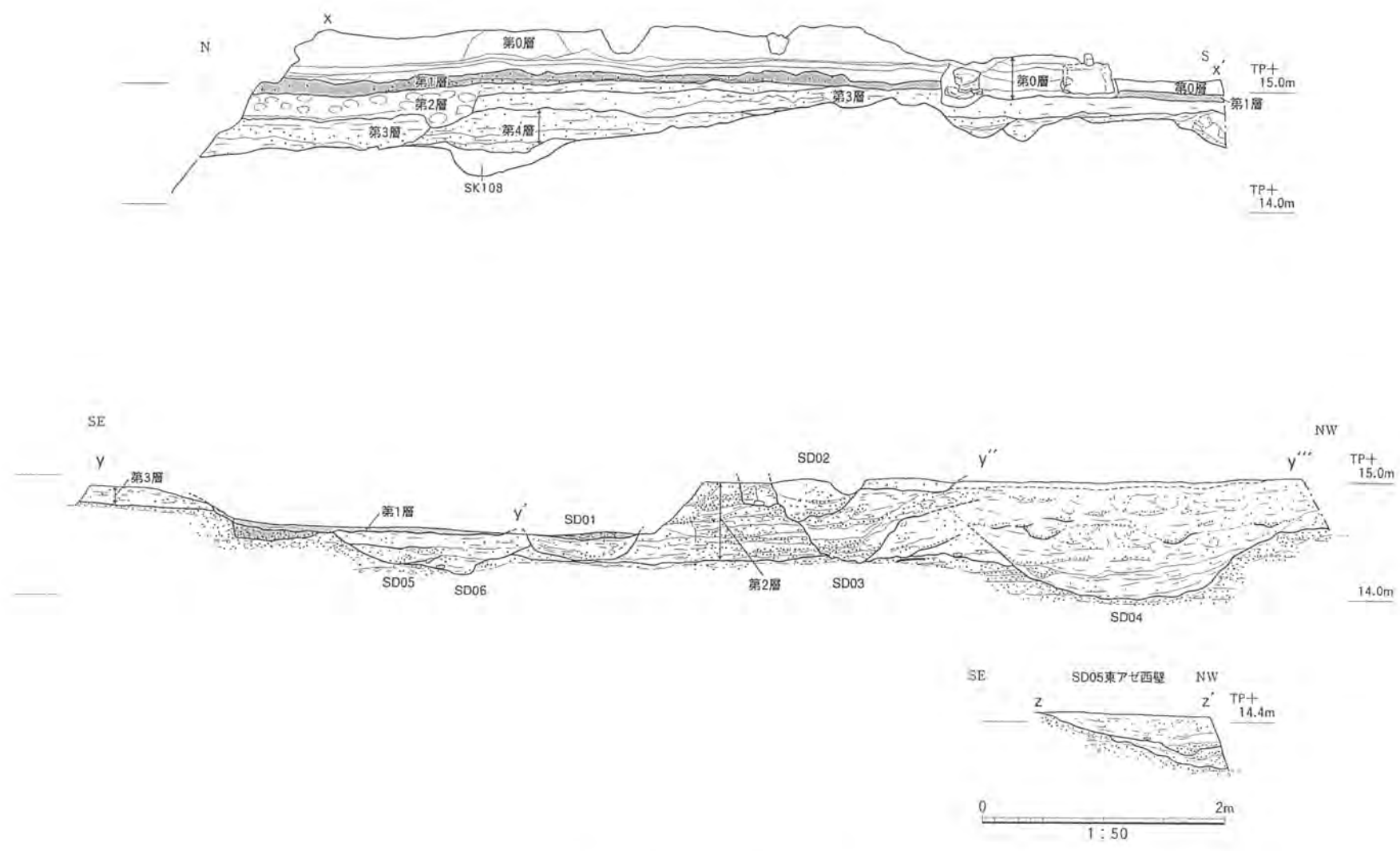


图10 I区遺構断面图·西壁断面图

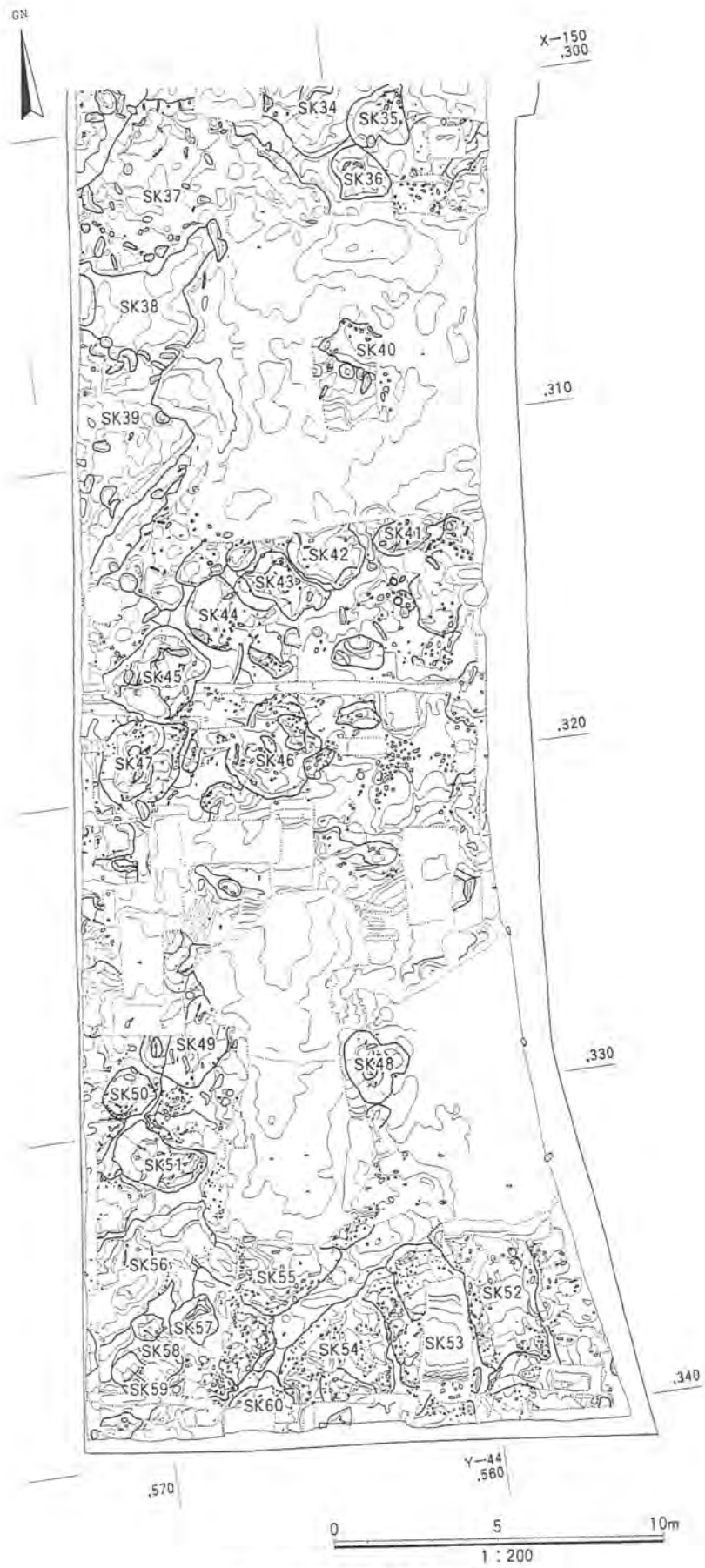


图11 II区第5层上面遗构平面图

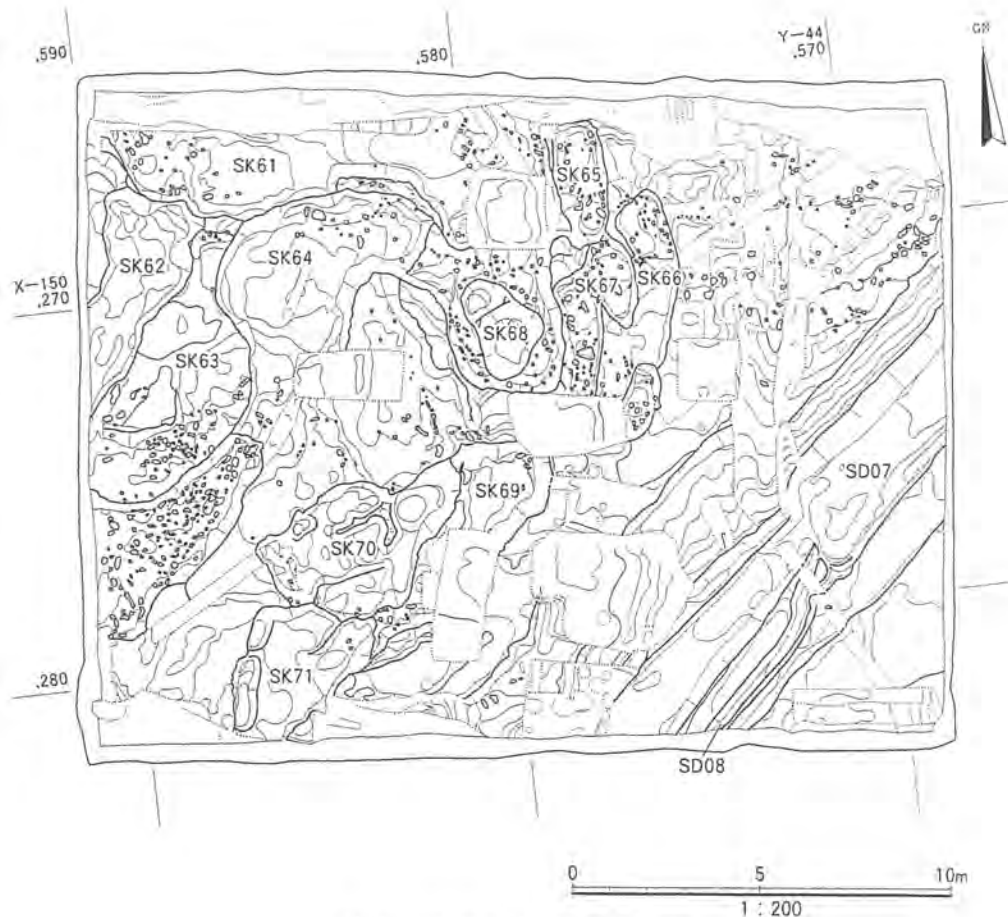


図12 III区第5層上面遺構平面図

- SD02 幅0.8m、深さ0.4mで、埋土は褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトである。
- SD03 幅1.0m、深さ0.4mで、埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂である。
- SD04 幅2.8m、深さ0.8mで、埋土は黄褐色(10YR5/6)粗粒砂質シルトである。
- SD05 幅2.5m、深さ0.5mで、埋土はにぶい黄褐色(10YR6/4)粗粒砂質シルトである。
- SD06 上部をSD05に切られ規模は不詳だが、幅1.5m以上で、埋土は黄褐色(10YR5/6)砂質シルトで、備前焼播鉢24が見つかった。
- SD07 幅3.0m、深さ0.8mで、埋土は黄褐色(10YR5/6)中粒砂質シルトで、縄目タタキ痕の平瓦6が出土した。
- SD08 SD07から派生する、幅1.0m、深さ0.4mで、埋土はにぶい黄褐色(10YR6/4)中粒砂質シルトである。
- SD09 幅0.8m、深さ0.4mで、埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂質シルトで、唐草文軒平瓦2、格子文タタキ痕の平瓦5、円筒埴輪8・9、石鏃11、青磁碗13、朝鮮陶器皿14、肥前磁器碗17が出土した。
- SD10 幅1.2m、深さ0.5mで、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトで、焙烙26を含む。
- またIV区の流路南肩の堆積層から、唐花文軒平瓦3、縄目タタキ痕をすり消す平瓦7が見つかったが、第5層上面に2条の犁溝が平行にはしり、SD11・SD12とも幅0.3m、深さ0.1mを測る。

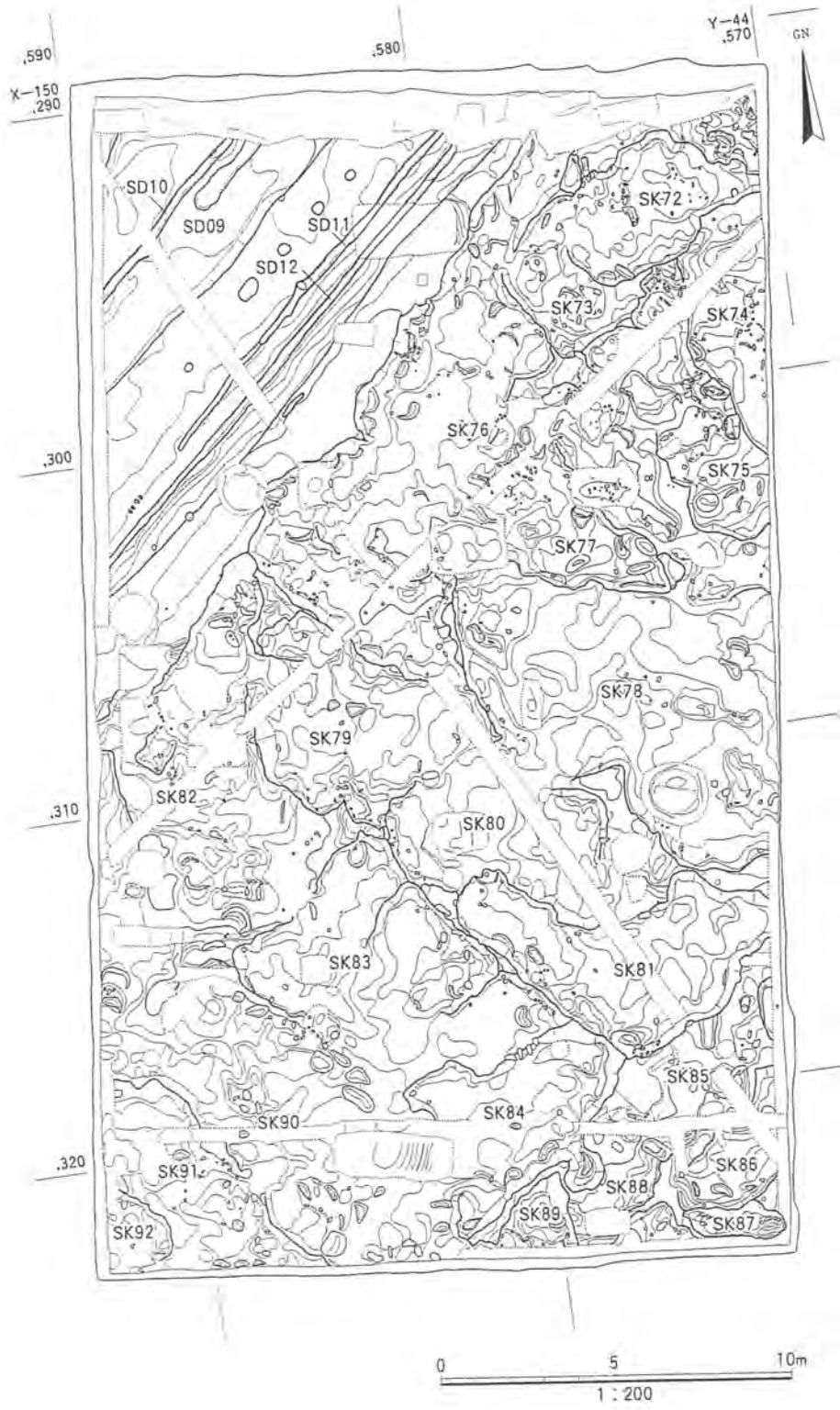


图13 IV区第5層上面遺構平面图

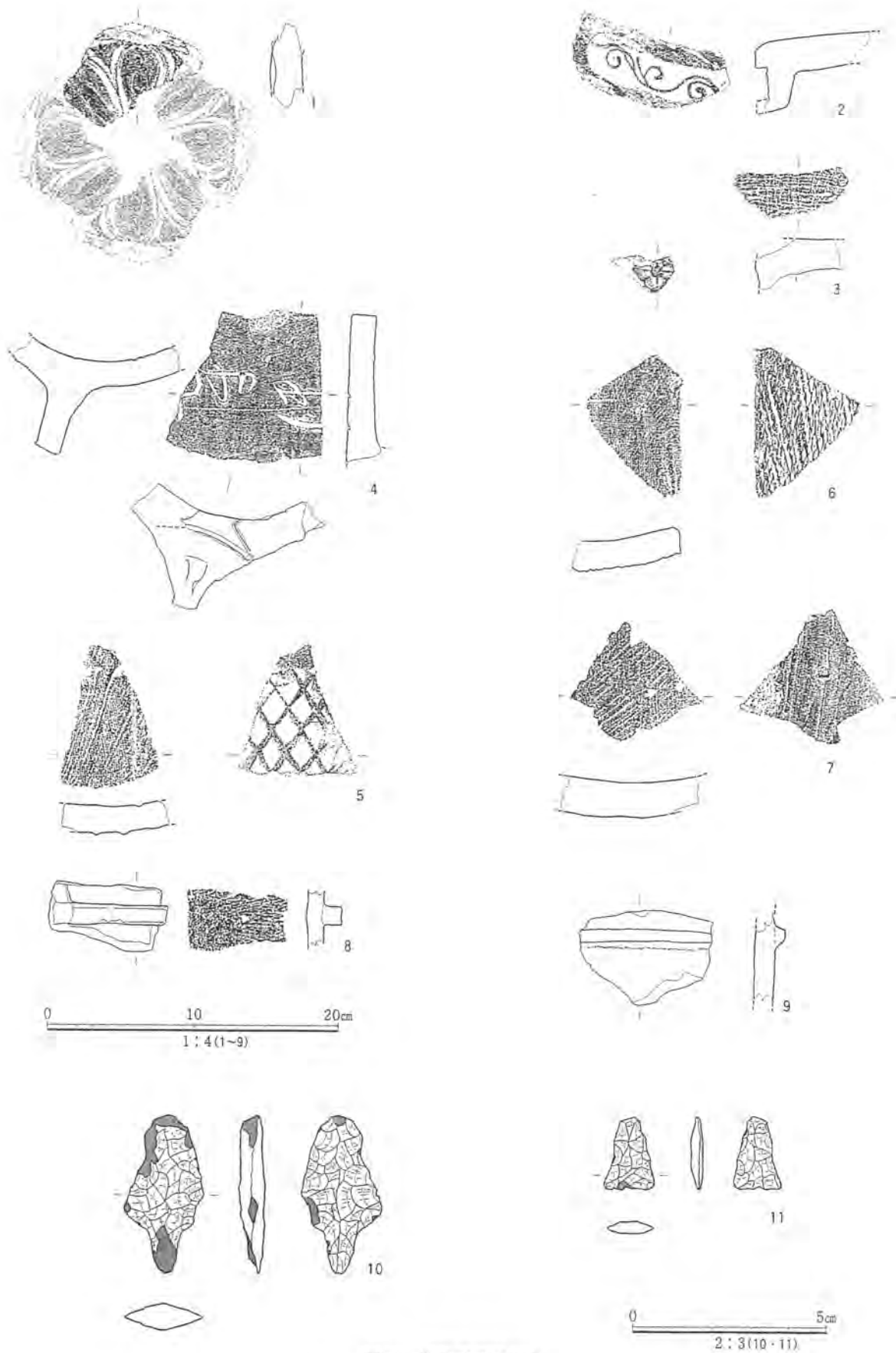


图14 遺物実測図(1)

SK108(1)、SD09(2·5·8·9·11)、4区流路南肩(3·7)、SK70(4)、SD07(6)、SK24(10)

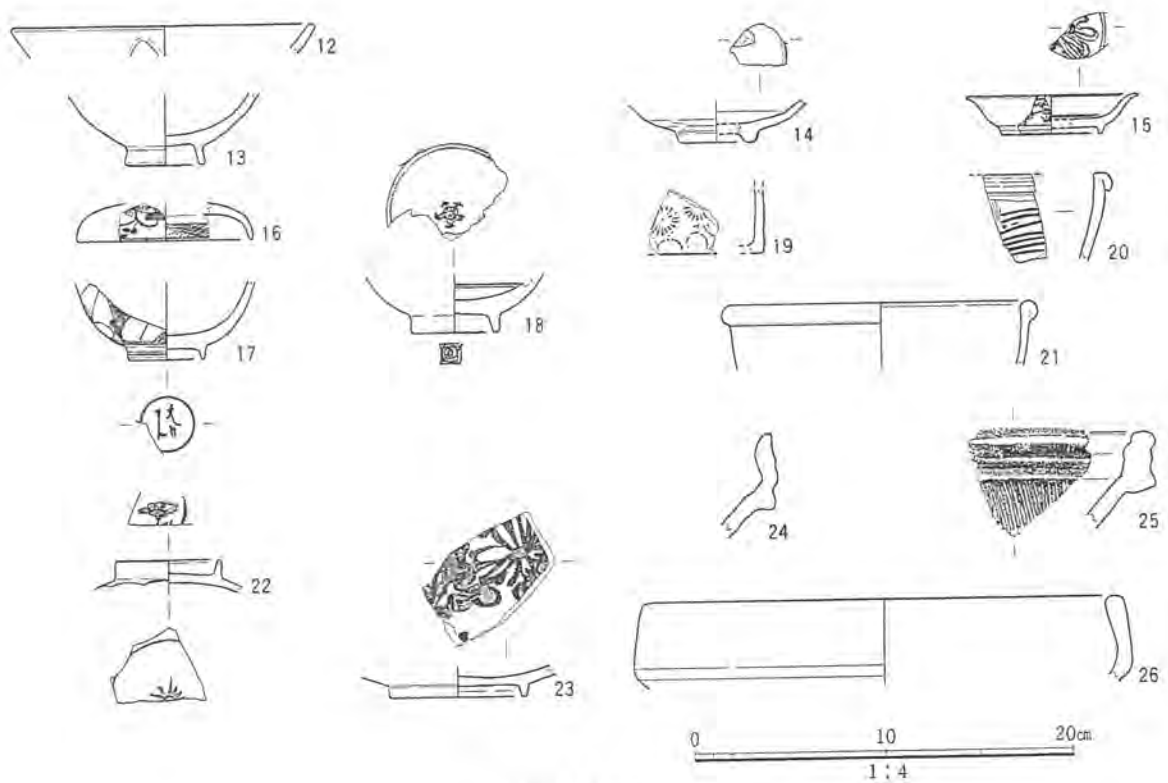


図15 遺物実測図(2)

SK78(12・16・20・25)、SD09(13・14・17)、SK77(15・18・22)、SK76(19)、SD01(21)、
SK61(23)、SD06(24)、SD10(26)

c. 江戸時代末期の遺構(図6～15)

I～IV区の流路群を除く地域に、流路に平行するようにSK21～92が拡がる。これらはすべて土採り穴である。II区では一辺2～3mの小規模のものがめだつが、IV区では一辺4～5mの規模がめだつ。土採り穴の埋戻し土は北あるいは北東から投入されるものが多い。埋土には、図14・15のように肥前磁器や弥生時代～中世の遺物も含むが、関西系の陶磁器を含むことから19世紀前半の時期が考えられる。

出土遺物として、SK24は石鏝10、SK61は内面を白化粧し花卉を描いた関西系陶器皿23、SK70は獅子口4、SK76は瀬戸美濃焼鬚盥19、SK77は青花皿15、肥前磁器碗18・蓋22、SK78は青磁碗12、肥前磁器蓋16、肥前陶器鉢20、堺播鉢25が挙げられる。獅子口4は経の巻部分の破片で、背にヘラ書きで「 \square 寸 \square 」と記す、この瓦の寸法を記した可能性がある。

d. 流路群と土採り穴の時期と目的について

流路群SD01～10はその特異な方向をもち、周辺部の現状地割に影響を残しているが、南西から北東に流れていた。すでにみたとおりこの帯状の内で上幅1～2m、深さ0.3～0.5mの溝を何回も掘直して水を流していた。その掘削された時期は、流路の真ん中に堤状に掘り残された水成層(第2層)に瀬戸美濃焼、肥前陶器、中国製青花が含まれることから、豊臣時代後期の可能性が高い。この第2層は流路群の中で最古の流路とみられるが、より新しい溝で壊されたために、形状は不明である。

流路は近代になっても利用されていたようだが、流路をよけるように掘削された土採り穴の意義を

考えたい。同じ性格のものは南のAB98-6次調査地でも検出され[大阪市文化財協会2006]、また阿倍野筋を西に渡ったAS06-4次調査地でも見ついているから、南北150m以上×東西200m以上に及ぶ土採り跡の可能性はある。仮に150m×200mの範囲で深さ0.5m土砂採取すると15,000m³である。今回調査地で採取されたのはやや粘土質の中粒砂で、焼物用の粘土ではない。しかも土採り穴の底部に、水成堆積層は薄層の類を含めても、ほとんど観察されなかったから、集中的な掘削後に急速に埋めたと考えられる。その土採りの意味を推測すると、壁材の採取が考えられる。一口に壁土といっても、荒壁材・中塗り材・上塗り材に必要な粒度や粘性も異なるだろうが、山田幸一氏によると、京都の地誌『雍州府誌』(1684年刊行)は「大坂産に及ばず」と大坂土を賞賛しているという。京都では現在でも赤色系の土物砂壁の上塗り土を大阪土または錆土と呼び、大阪左官関係者の伝えでも、かつて四天王寺近辺から赤色の特に優れた土が採掘され、「天王寺なしめ」の名で呼ばれていたらしい[山田幸一1981]。しかし「大坂土」にしても「天王寺なしめ」にしても上塗り材である。遠隔地に販売するとなると、15,000m³はあまりに膨大な量である。やはり大量の需要のあるのは災害後の荒壁材・中塗り材であろう。

そこで19世紀前半の大坂の災害、とりわけ火災が問題になるが、挙げられるのは1837(天保8)年2月の「大塩焼け」であろう。大坂東町奉行所の元与力 大塩平八郎が、幕政の刷新を期し約300人を率いて決起した事件は、天満の自宅から大坂城をめざし、わずか半日で鎮圧されたが、乱による火災は市中の5分の1を焼いたという。

19世紀中頃まで視野に入れるなら、「新町焼け」(五幸町の大火)が挙げられる。1863(文久3)年11月21日夜、新町橋東詰五幸町(現、中央区南船場)より出火し、東に燃え拡がり、船場・上町を中心に約150町が焼失したという。

このいずれかの火災後、大坂再建時の壁材採取に、土採り穴の広域発生の原因を求めたい。明治時代初めでも、現、阿倍野区は、米・麦をはじめ、カブラ・ダイコン・カボチャ・ナタネ・綿など栽培する農村であった[川端直正1956]。その農作業を一時中断しての広域土採りであったろう。

なお中世の当地について一言すると、AB06-1次調査地は字「北苗代田」で、四天王寺の『金堂舍利講記録』(1424年の奥書)に、「野畠庄字苗代田西縁、野畠庄下司名字苗代田西端」がみえ[棚橋利光1995]、四天王寺の領有地が存在した可能性を有するが、今回調査地には文献史料は皆無である。

e. 山田寺式単弁八弁蓮華文軒丸瓦の検討

図14の1の軒丸瓦は、四天王寺第Ⅱ期(7世紀第2四半期末から7世紀後半)例と同範の可能性はある。もしそうであれば、舒明天皇建立の百濟大寺の可能性の高い吉備池廃寺(奈良県桜井市)例とも同範となる。

四天王寺例は先学によってNMⅡa1とNMⅡa2の2種に分けられている[奈良文化財研究所2003]。そのいずれと同範の可能性があるのかは、今後の検討課題だが、四天王寺NMⅡa1が吉備池廃寺軒丸瓦ⅠAと、四天王寺NMⅡa2が吉備池廃寺軒丸瓦ⅡBと同範であることが確認されている。またほかに同範瓦を出土する遺跡として、木之本廃寺(奈良県橿原市木之本町)、楠葉平野山瓦窯(京都府八幡市・枚方市)、海会寺(泉南市)などがある。特にNMⅡa2は吉備池廃寺→四天王寺→海会寺の順に瓦

范が動いたことまでわかっている。

大化改新時、左大臣であった阿倍倉梯麻呂(『公卿補任』では右大臣と記す。また名は内麻呂とも記す)は、『日本書紀』大化4年2月己未条に、「阿倍大臣、四衆を四天王寺に請じ、仏像4軀を迎えて塔内に坐せしめ、靈鷲山像を造る」とあることから、四天王寺と倉梯麻呂の深い関係が窺える。また倉梯麻呂は、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に百濟大寺造寺司任命の記録が残っているから、舒明天皇のころからの実力者で、大和にも阿倍氏の氏寺として安倍寺(奈良県桜井市)を創建していた。難波遷都に際して、難波にも氏寺を創建した可能性が出てきた。

この大和の安倍寺と摂津難波の阿倍寺との考古資料による比較検討は、これからの課題だが、阿倍倉梯麻呂は、649(大化5)年3月、大臣職にあること5年で薨去し、「孝徳天皇は難波宮朱雀門に幸して拳哀し、皇祖母尊(皇極)、皇太子(中大兄)および諸卿も悉く従って哀哭した」(『日本書紀』)という難波朝廷の実力者で、倉梯麻呂と阿倍野の地に再照明を与える資料であることは間違いない。

3) まとめ

今回の調査成果としては、遺構としては北で東に50度振った江戸時代前半に掘られた幅10mの流路群のほか、流路と同じ方向で掘り進められた土採り穴が挙げられる。土採り穴は19世紀前半に生産が始まる関西系陶磁器を含む土で埋められているので、その頃の土採り穴である。土採り穴群については、広域に拡がることから、「大塩焼け(1837年)」か「新町焼け(1863年)」後の壁土の多量需要から、壁材としての採取を推測した。

また、遺物として山田寺式単弁八弁蓮華文軒丸瓦が出土し、四天王寺第Ⅱ期(7世紀第2四半期末から7世紀後半)の軒丸瓦と同范の可能性がある。すでに記したように調査地の南東方向では、戦前、塔心礎が見つかり、その北側に金堂跡と推定される方形基壇があったから、四天王寺式伽藍配置をもつ阿倍(阿部)寺跡[明山大華1933]とし、発掘調査でも、AB98-6次調査地で寺域の北辺を画する溝が検出されている[大阪市文化財協会1989]。この単弁八弁蓮華文軒丸瓦は阿倍寺跡の遺物である可能性が高いとともに、大化改新の難波遷都に伴って、阿倍倉梯麻呂が大和のみならず、難波にも氏寺を置いた可能性が出てきた。

参考文献

- 大阪市文化財協会2001、「AB98-5・6次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1998年度-』、pp.51-60
大阪市文化財協会2006、『阿倍野筋2丁目における埋蔵文化財発掘調査(AB06-1)報告書』
川端直正1956、『阿倍野区史』
四天王寺文化財管理室1986、『四天王寺古瓦聚成』
棚橋利光1995、「中世四天王寺周辺の村と庄一金堂舍利講記録から」：大阪市史編纂所編『大阪の歴史』第45号、pp.1-29
奈良文化財研究所2003、『大和吉備池廃寺-百濟大寺跡-』
明山大華1933、「阿部寺塔心礎に就て」：『考古学雑誌』第23巻第1号、pp.51-52
山田幸一1981、『壁』ものと人間の文化史45

I区SD01~05
(北東から)



II区地山上面全景
(北から)



II区SK51
(南東から)



山田寺式蓮華文軒丸瓦
(SK108出土)



唐草文軒平瓦
(SD09出土)



獅子口の経の巻の背部分
(SK70出土)



「
×
□
寸
□
×
」
(七五)

VIII 住 吉 区

南住吉遺跡(MN06-1)発掘調査

調査個所 大阪市住吉区長居西3丁目41番
調査面積 72m²
調査期間 平成18年6月23日～平成18年6月30日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、趙哲済

1) 調査にいたる経緯と経過

調査地は、南住吉遺跡のほぼ中央部に位置し、長居西市営住宅の建設に伴うMN86-48次調査地に接している(図1)。今回、MN86-48次調査後に建設された市営住宅の住棟にエレベーターを設置することになり、2006年6月2日に試掘調査を行なったところ、MN86-48次調査と同様に中世などの地層が良好な状態で残存していることが確認できたため本調査を実施することとなった。

MN86-48次調査では、南北区で14~15世紀の井戸や溝が見つかっており(図2)、東西区の西側では東南東から西北西に流れる大きな流路があって、近世の細江川の河道の可能性が指摘されている。弥生時代から飛鳥時代の遺物も少量出土しており、東側街区のMN95-20次調査では弥生時代中期の井戸や古代の遺構が、西南約100mのMN93-7次調査では弥生時代畿内第Ⅲ様式の時期と推定される竪穴住居5棟が見つかった。また、MN86-48次調査では地表面より約1.3m下の更新世の暗色化した地層から化石林が検出されており、長原遺跡や山之内遺跡で化石林やナウマンゾウの足跡化石が存在する層準に相当すると推定されている[大阪市文化財協会1998]。

本調査では、エレベーター設置予定の3個所にそれぞれ6m×4mの調査区を設定し、北から1~3区と呼称した。6月23日より1日半をかけて埋設管に注意しつつ約0.7mの第3層上

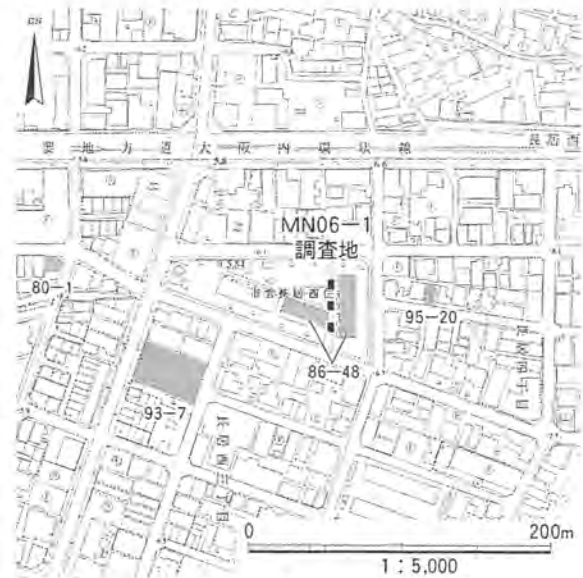


図1 調査地位置図

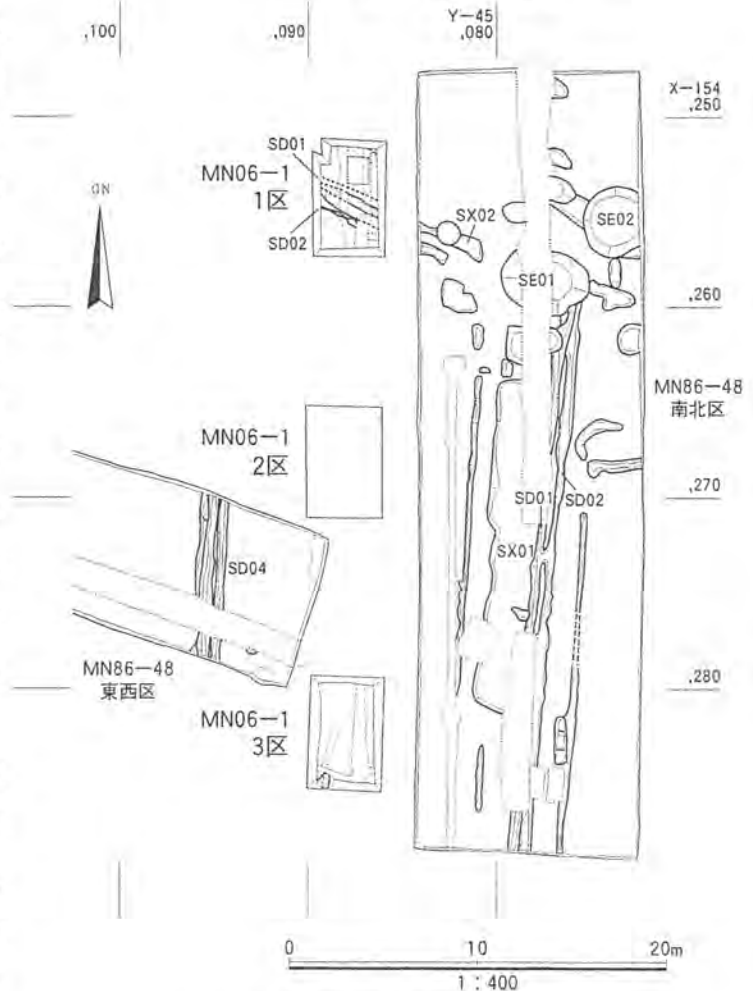


図2 調査区的位置関係

面まで重機で慎重に掘削し、遺構検出と掘上げ、実測・写真撮影などを行なった。最後に1区で先述の化石林との層序の対比などのため、1.2m×1.4m、深さ約0.9mのトレンチにより下層の確認調査を行い、6月30日に埋戻して調査を完了した。

図4に使用した方位は、MN86-48次調査の遺構平面図との合成から復元した座標北で(図2は調査時の国土座標を世界測地系の座標に変換)、標高水準はT.P.値(東京湾平均海面値)である。

2) 調査の結果

i) 層序

厚さ40cmの現代の盛土の下の第1～3層は、1・2・3区とも基本的に同じである(図3)。

第1層：黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトで層厚20cmである。礫を含む第1a層、第1a層よりは礫が少ない第1b層、鉄やマンガンが溶脱した第1c層からなる。近世の作土で、MN86-48次調査の南住吉2層に相当する。

第2層：暗褐色(10YR3/4)粗粒砂質シルトの第2a層と、褐色(10YR3/4)粗粒砂質シルトの第2b層からなる。層厚は10～15cmである。第2a層には鉄が、第2b層にはマンガンが沈殿している。いずれも作土で、第2b層からは中世前期の瓦器皿2(図5)が出土した。MN86-48次調査の南住吉3層に相当する。

第3層：褐色(10YR4/6)粗粒砂質シルトで、層厚は5～10cmである。図4の1区東壁にはないが、部分的に分布していた。

第4層以下は更新世の地層である。

第4層：褐色(10YR4/6)砂礫とこれを覆う黄褐色(10YR5/6)砂質シルトからなる。最大層厚部は砂礫の分布域にあって30cmである。砂礫は1区東北部分にあって、側方で急激に層厚を減じて1cm以下となり、これを層厚10cm以上の砂質シルトが覆う。

1区第4層に相当する3区の灰白色砂質シルト層には、多量の火山ガラスや鉱物が含まれている。火山ガラスは無色透明・褐色透明扁平型、鉱物は緑色角閃石のほか、少量の褐色角閃石、高温型石英が含まれる。これらの特徴は、山之内遺跡における山之内9B層中に挟まれる北花田火山灰層(約9.1万年前；鬼界鳶原火山灰)～吾彦火山灰層(約8.6万年前；阿蘇4火山灰)の鉱物組成の特徴と類似している。

第5層：上部で黄褐色(10YR5/6)、下部で明黄褐色(10YR6/6)の粘土層で、層厚は約20cmである。上部でやや粗粒化して極細粒砂質粘土層となり、極細粒砂のラミナを挟む。

第6層：にぶい黄橙色(10YR6/4)の極粗粒砂～粗粒砂と小礫～細礫からなる砂礫層で、層厚は20～55cmである。幅数10cm、深さ10cm前後のトラフ型斜交ラミナが発達し、斜交ラミナの走行傾斜から推定される古流向はN7°Wである。

第7層：下部で灰黄色(2.5Y6/2)、上部で黄褐色(10YR5/6)の極細粒砂質シルト層である。層

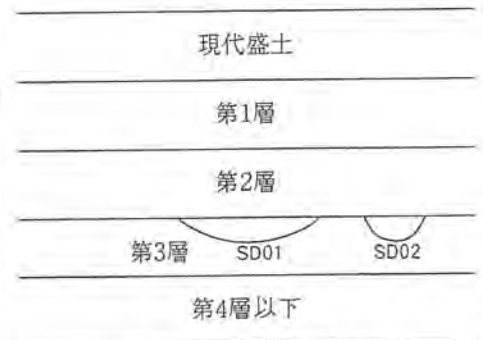


図3 地層と遺構の関係図

厚は約50cmである。中に極細粒砂ラミナとシルトラミナの互層を挟む。また、最下部に層厚2～4cmの黒褐色シルト質粘土薄層を伴う。

第4層～第7層はMN86-48次調査の南住吉9層上部に当る。

第8層：黒褐色(7.5YR3/1)泥炭質シルト層で、層厚は25cmである。

1区第8層には、碎屑性の風化した長石や石英に混じって、少量の他形の角閃石のほか、自形の斜方輝石、極少量が含まれている。この特徴は、山之内13層中に挟まれる浅香火山灰層(約11万年前)の鉱物組成の特徴と類似している。

第9層：灰褐色(7.5YR4/2)粗砂質シルト層で、層厚は7cmである。

第8層と第9層はMN86-48次調査の南住吉9層中部に当り、9層中ほどから多量の材化石とともに株が根を張ったいわゆる化石林の状況で見つっている。

第10層：暗灰色礫質砂層で、層厚は2cm以上であり、下限は不明である。

第10層はMN86-48次調査の南住吉9層下部に当る。

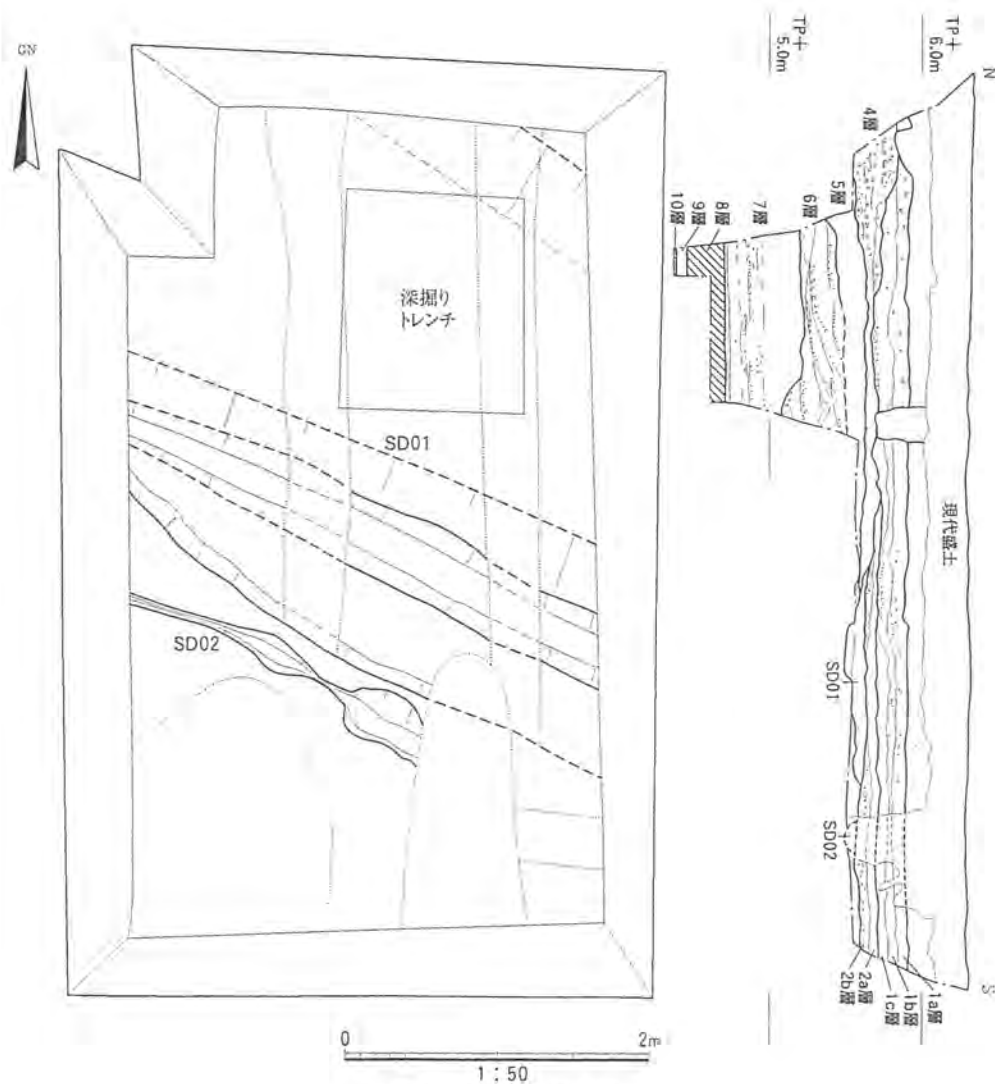


図4 1区平・断面図

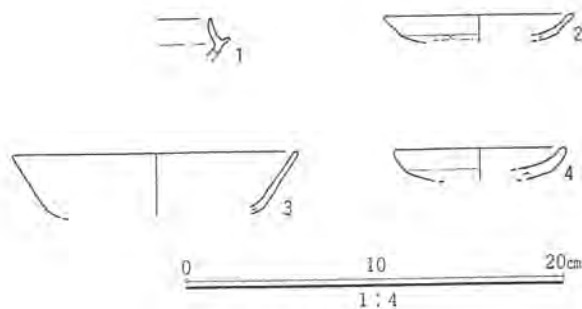


図5 遺物実測図

第2a層(1)、第2b層(2)、第3層(3)、SD01(4)

ii) 遺構と遺物

検出した遺構の主なものは、1区の第3層上面で検出したSD01とSD02である(図4、図版1の上・中段)。SD01は幅0.85~1.35m、深さ0.15mの西北西-東南東の方向(西で26°北に振る)の溝で、中央部が幅約0.2mで1段深くなっている。SD01に平行してSD02がある。SD02は幅0.08~0.35m、深さ0.05mの浅い溝である。SD01と

SD02の埋土からは水が流れていた痕跡は観察できない。SD01からは中世前期と推定される土師器皿4が出土している(図5)。

隣接のMN86-48次調査地の遺構との関係では、SD01はMN86-48次調査地のSX02とつながり、SD02は同調査地のSX02の南にある遺構とつながる可能性が高い(図2)。この溝と同方向と推定されるものとしては、MN06-1次調査地東北隅の第4層(地山)の段がある。1区東北隅では第4層が南・西側より約15cm高くなっており、この方向はSD01やSD02と類似する(図4の復元破線)。したがって、1区やMN86-48次調査地北部周辺には、SD01やSD02と同方向を向くような小道や耕地の区画などがあつたのではないかと考えられる(また、明治19年と昭和4年国土地理院発行の地図にある細江川の流向に近い)。但し、MN86-48次調査地南半部の溝群とは方向が違っているが、検出面の違いや出土遺物による時期差などは確認できていない。

ところで、SD01の底には凹凸が無数に残っていた(図版1下段)。直線的なものは鍬・鋤の類の加工痕、丸いものは動物の足跡などの可能性を考慮して部分的に発掘したが、何の痕跡か明確に判別することはできなかった。

その他、2区と3区でも中世後半の遺物包含層である第2b層が良好に残存したが、明確な遺構はなかった(図版2上・中段)。遺物の包含状況などは1区と変わらず、調査区の近接地に中世の遺構が存在する可能性は高い。3区の南端では第4層上部の層中を検出面として、暗褐色極細粒砂質シルトを埋土とする南北0.8m以上、東西0.7mの浅い窪みがあつたが、何かよくわからなかった。

本調査では、少量であるが、古墳時代から飛鳥時代の土器も出土しており、第2a層出土に6世紀の須恵器杯身1があつた。また、第3層からは平安時代前半(佐藤隆編年の平安時代Ⅱ期[佐藤1992])の土師器椀3(図5)が出土した。

3) まとめ

本調査の成果の第1は、隣接のMN86-48次調査地と連続する可能性の高い中世前期の溝を検出したことである。第4層の高まりとともに、周辺に西で25°前後北に振る、一定の方向性をもつた遺構が広がる可能性が高いことがわかつた。1~3区とも、中世前期の遺物包含層である第2b層が連続して残存しており、周辺では当該期の遺構が良好な状態で残っていると考えられる。

2番目に、MN86-48次調査地で見つかつていた、化石林を含む更新世の暗色化した地層に相当す

る第8・9層を確認し、その前後の層序に対する資料を補強できたことである。この地層は、先述のように、長原遺跡や山之内遺跡で化石林やナウマンゾウの足跡化石が存在する層準に相当すると推定されており、このような古い時期の地層が比較的浅い所に位置することは重要で、今後、旧石器時代調査の良好なフィールドになる条件を備えている。

これ以外でも弥生時代の遺構が既往の調査で見ついているなど、本調査地周辺は中世以前の遺構が分布し、今後の地道な埋蔵文化財調査で確実に成果が上がる場所である。

参考文献

大阪市文化財協会1998、『南住吉遺跡発掘調査報告』

佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：『長原遺跡発掘調査報告』V、pp.102-114

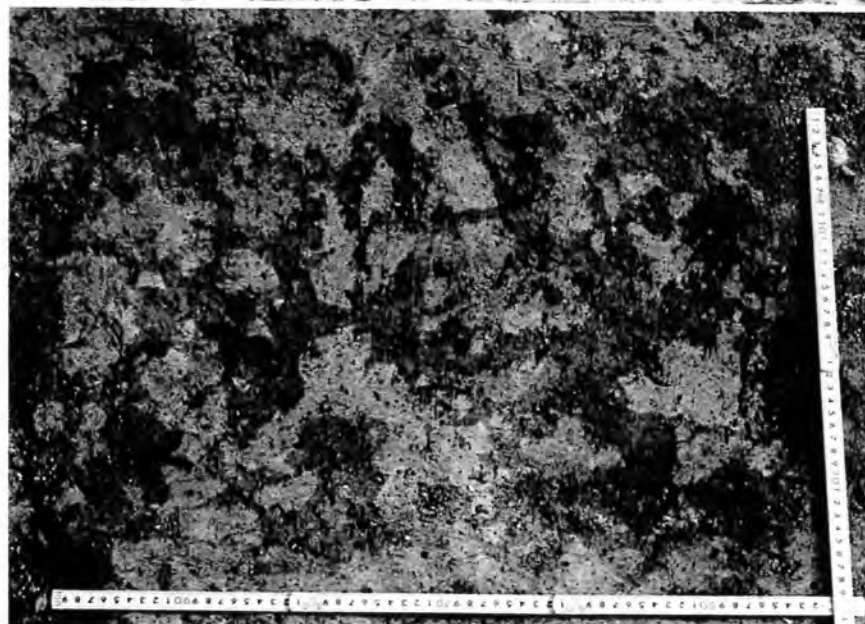
1区第3層上面遺構
検出状況
(南より)



1区SD01・02
(東より)



1区SD01加工面の状況



南住吉遺跡発掘調査 (MN06-2) 報告書

- ・調査箇所 大阪市住吉区我孫子西1丁目3
- ・調査面積 約20m²
- ・調査期間 平成18年11月13日～11月14日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、小田木富慈美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は南住吉遺跡の南端部にあり、JR阪和線我孫子町駅の北約50mに位置する(図1)。付近では北西へ約200mの地点でMN85-19次調査が行われ、近世の流路とこれより古い時期の落込みが検出され、弥生時代～近世の遺物が出土している[大阪市文化財協会1998]。他にも付近の数箇所です立会調査が行われている(図2)。

〈調査の結果〉

試掘城No.1～No.5を設定して調査を行った(図3・4)。

まず層序の概要について述べる。現代盛土および表土は、厚さが60～210cmであった。この下位には、厚さ約10cmの第1層が認められた。第1層は黒褐色砂質シルト層で、現代作土層である。第2層は灰オリーブ～灰褐色粘土と段丘構成層である第3層の偽礫からなる人為的な埋戻し土で、厚さは10～80cm以上になる。第3層は灰白色中～粗粒砂層で、段丘構成層である。厚さは60cm以上である。

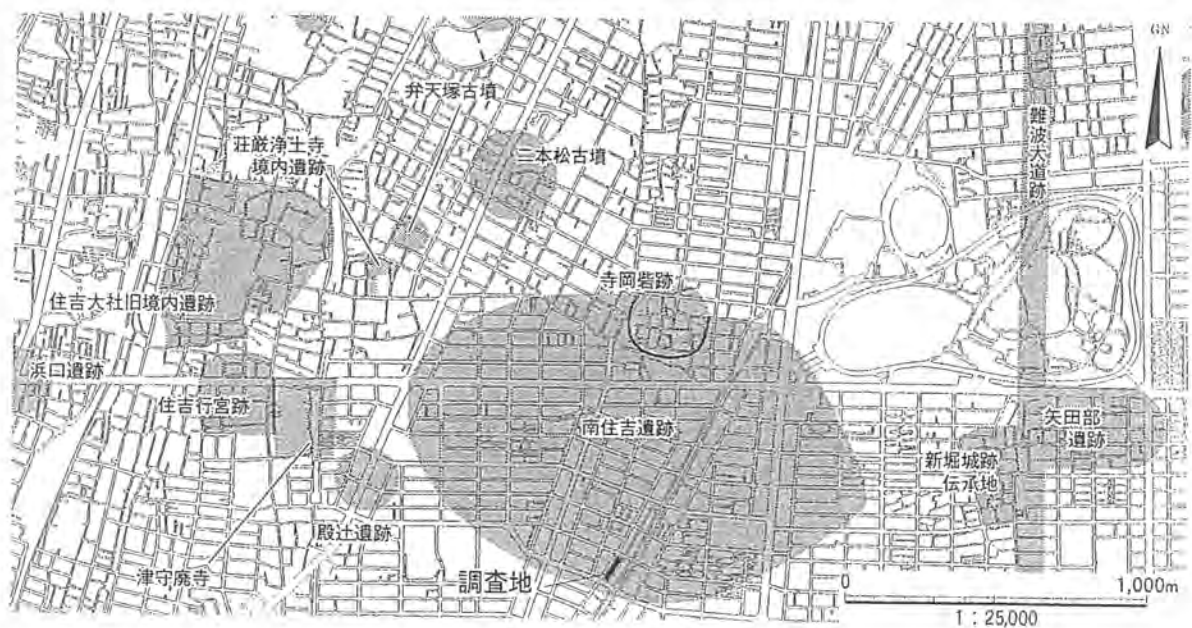


図1 調査地位置図

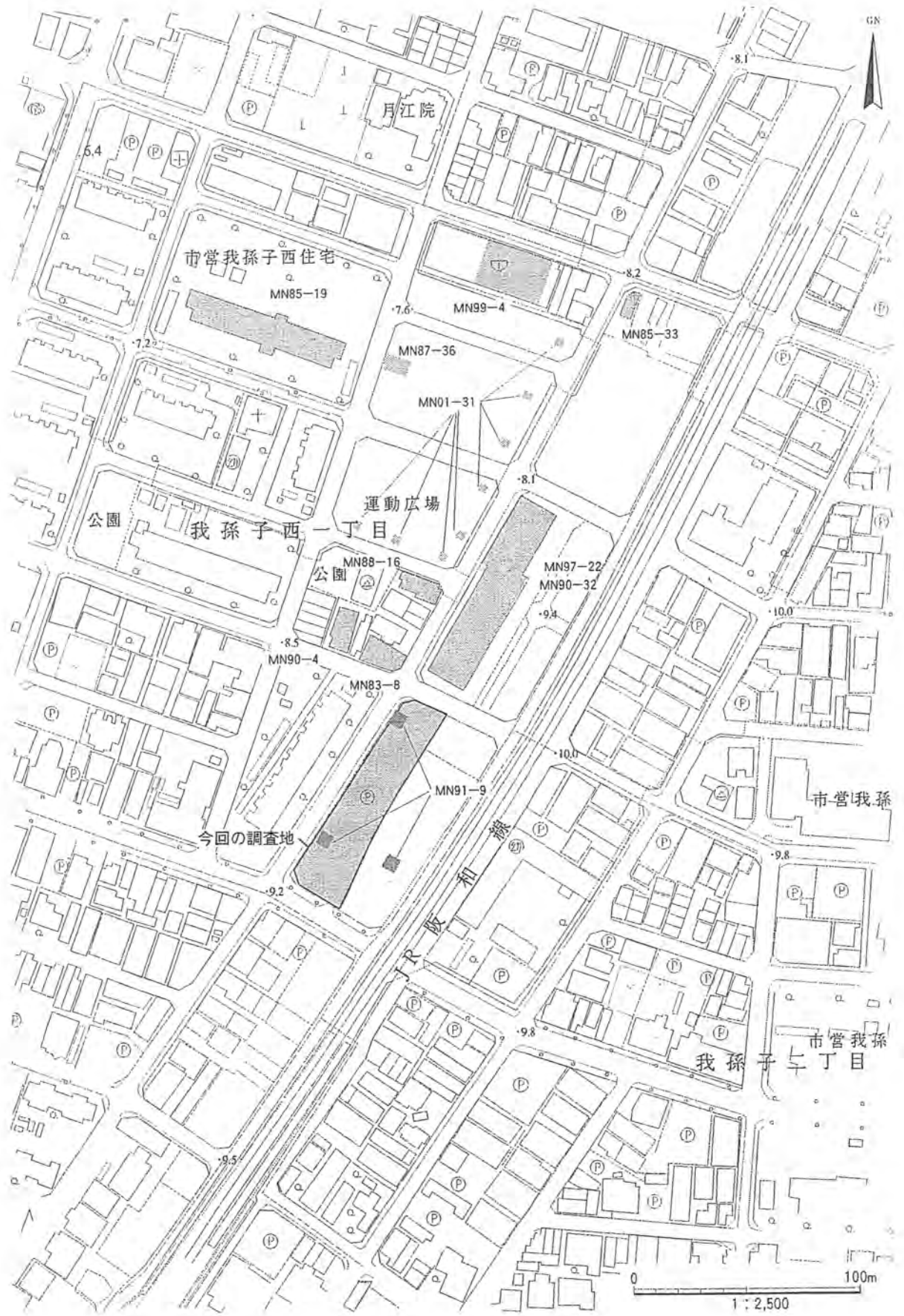


図2 周辺の調査位置図

次に遺構の概要について述べる。試掘坑No.1～No.4では、第1層を除去すると、第3層とした地山層である灰白色中～粗粒砂層が現地表下70～120cmで検出された。この上面で、第2層で人為的に埋戻した、時期・性格ともに不明の遺構を検出した。試掘坑No.4で判明した遺構の規模は、直径が50～60cmの円形で、深さは60cm以上あると推測される。このほかの試掘坑では遺構の平面形状までは確認できなかった。なお、今回の調査での出土遺物はない。試掘坑No.5は現地表下210cmまですべて現代盛土であった。

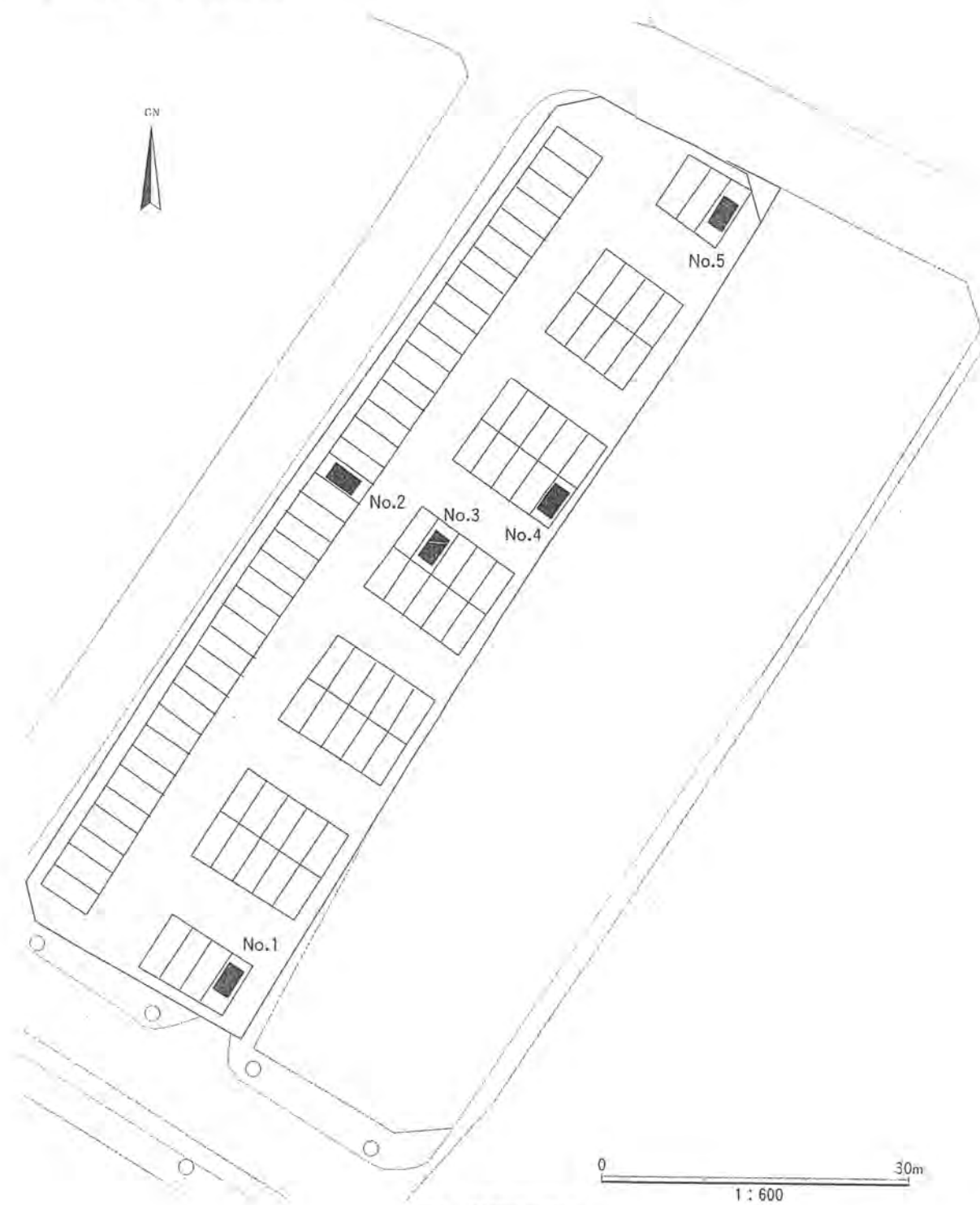


図3 試掘坑配置図

先に述べたMN85-19次調査地では、江戸時代後半以降と考えられる土取り穴が多数検出されており、今回の調査で検出された遺構もこれに類するものかも知れない。

参考文献

大阪市文化財協会1998、『南住吉遺跡発掘調査報告』

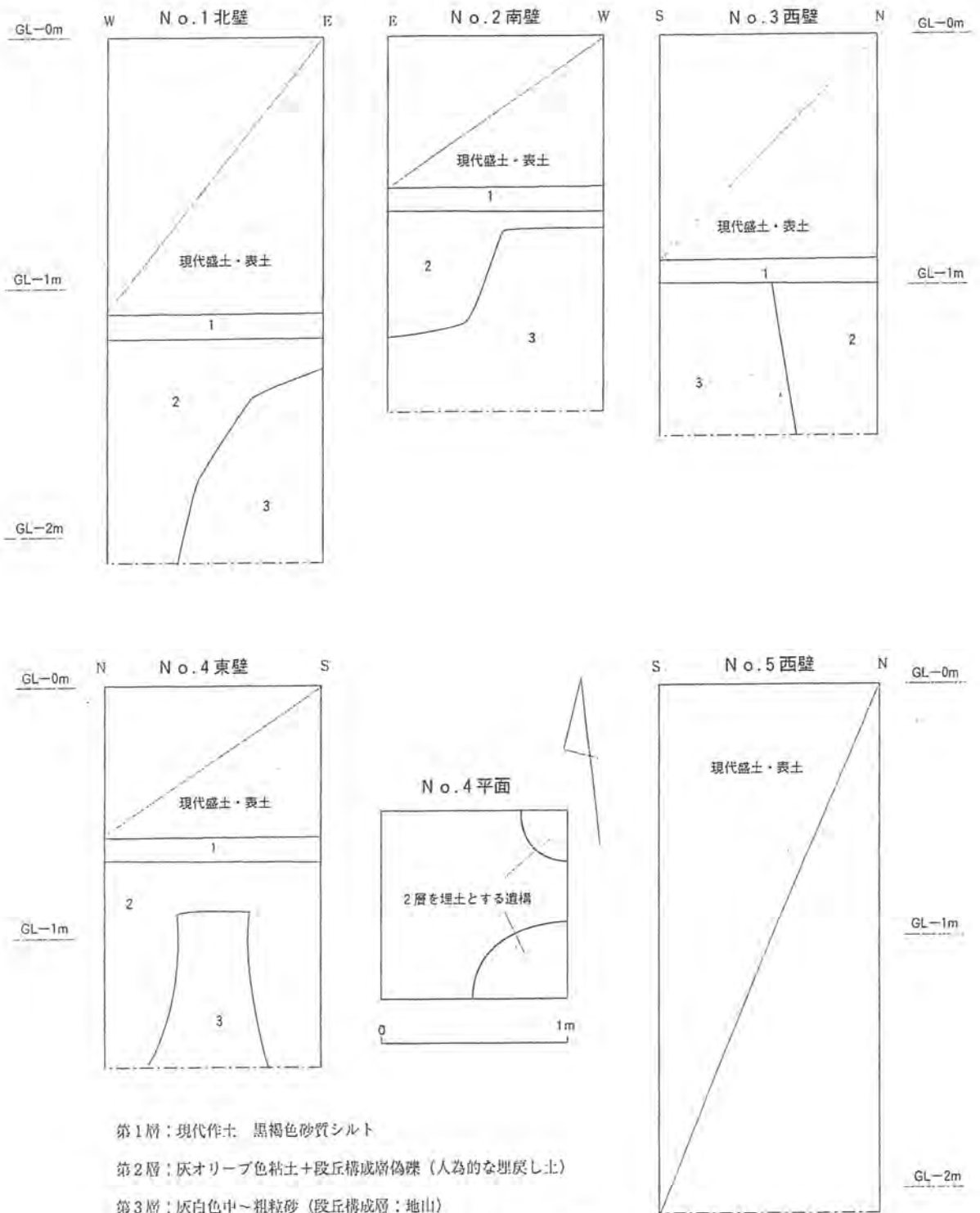


図4 模式断面・平面図

調査地全景
(南から)



作業風景
(南から)



試掘坑No.1 北壁断面
(南から)



山之内遺跡(YM06-1次)発掘調査

調査個所 大阪市住吉区杉本町1丁目10
調査面積 64m²
調査期間 平成18年4月17日～平成18年4月21日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、松本啓子

1) 調査にいたる経緯と経過

調査地は大阪市住吉区杉本町1丁目10に所在し、JR阪和線の東側、あびこ筋の西側、依羅小学校の約50m南にあって、山之内遺跡の北東部に当たる(図1)。

山之内遺跡は、弥生時代、飛鳥・奈良時代を中心とし、近世まで続く複合遺跡である。

このうち、弥生時代、飛鳥・奈良時代の遺構・遺物は、おもに遺跡の南部・西部に分布している[大阪市文化財協会1998]。

また、北東部では、本調査地西側に隣接する山之内元町・杉本2丁目を中心に阪和線までの間で、14世紀から17世紀にかけての鑄造関連の遺構や遺物が見つかっており(YM87-31・90-27・91-8・91-11次調査)、この時代に活躍した「河内鑄物師」の本拠地のひとつである可能性が指摘されている[大阪市文化財協会2004、松本啓子1991・1992]。

工事に先立ち行った大阪市教育委員会による試掘調査で、地表下約20cmで近世以前とみられる落込みが確認された。しかも周辺に見られる遺跡の地盤となる粘土層が比較的好く残っていることから、これらの遺構の時期や性格を明らかにし、この地域の歴史像を復元する基礎資料を得ることを目的に、平成18年4月17日より本調査を行うことになった。

調査は、図2のように敷地の東南部に調査区を設定した。大阪市教育委員会の指示に基づき、標高9.9~10.2mの深さまで堆積している近世以降の盛土を重機で除去した後、地山とみられる自然堆積層の上面まで人力によって調査した。平成18年4月21日に埋戻し、調査を完了した。

なお、今回使用した方位は磁北を示し、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文の挿図ではTP+〇mと記した。

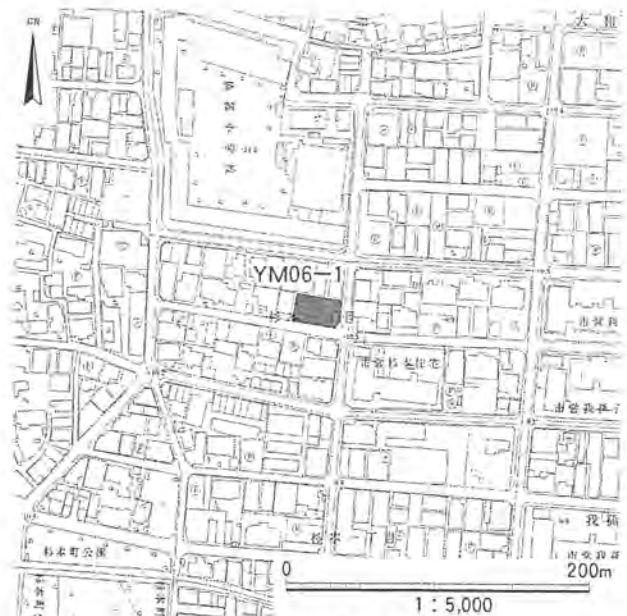


図1 調査地の位置(1:5,000)

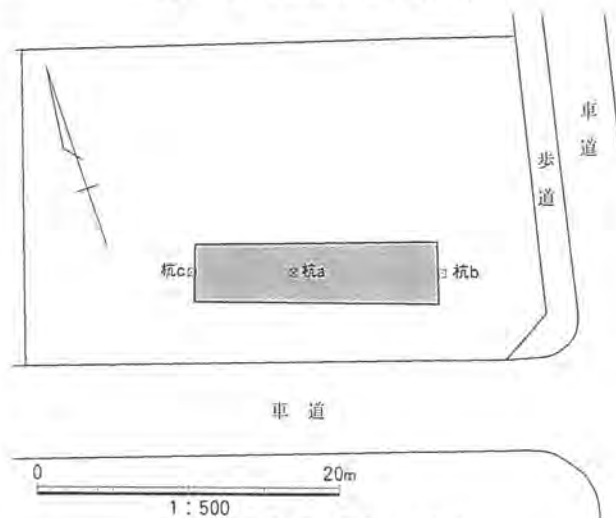


図2 調査区の位置(1:500)

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

本調査地の基本層序を図3・4に示した。

第0・1層：重機によって除去した近世後半から現代までの地層で、第0層は現代盛土層である。また、第1層は灰色砂礫混りシルト層で、18世紀後半の遺物を含む近世耕土層である。第1層は調査区の西端を除くほぼ全域で見られた。もっとも厚いところで層厚約40cmである。調査区東部で本層下面のSD23・24、SK29、SP33などの耕作溝や土壙・ピットが検出された。

第2層：黄褐色細粒砂混りシルト質粘土層である。地山が再堆積したもので、炭を含む。本層は調査区の西端では比較的よく残っているが、北半や東半は薄く、部分的にしか残っていない。層厚はもっとも厚いところで20cmほどである。本層上面の遺構SD105・106、SP101やSP135などが、また、本層を除去後、本層基底面の遺構SP217・236などが、調査区西端で見つかった。これらの遺構や本層の出土遺物から、本層は10世紀～11世紀初頭頃の遺物包含層であると考えられる。

第3層：本層以下が自然堆積層で、地山と考えられる。本層上面の標高は調査区東端でTP+9.8m、西端でTP+10.2mで、西側が高くなっている。本層の上部は、東部では灰色極細粒砂混りシルト質粘土層(第3-1層)、西部では明黄褐色砂・礫混りシルト質粘土層(第3-2層)が堆積し、これらの下に灰黄褐色砂礫層(第3-3層)がある。第3-1層と第3-2層は本調査では直接接しているところがないため、地層の上下関係があるのか、あるいは同じ地層の部分的な差異なのかは判然としない。層厚は第3-1層が約35cm、第3-2層は10cm以上、第3-3層は40cm以上である。これらのうち、第3-1層は本調査地西側の室町時代の鑄造関連の遺構が検出された地域の、当時の地面であった地山の粘土とよく似ている。

ii) 遺構と遺物(図5～7)

a. 平安時代前半の遺構と遺物(図5～7)

調査区西端の第3層上面で、第2層基底面の柱穴、土壙とピットを検出した。第2層基底面の遺構は200番代の番号を付している。各遺構の調査区内での位置を図5に、また調査区西端の遺構の拡大図を図6に示した。また、主な遺構の断面図を図5と図6に掲載した。

SK204は東西0.4m、南北0.5m、深さ0.1mの規模の隅丸長方形の土壙で、埋土は暗灰黄色粘土質シルトである。出土遺物はない。

SK218は東西の最大幅が0.5m、南北0.8m、深さ0.1mの卵形の土壙で、埋土はにぶい黄褐色砂礫混り粘土質シルトである。出土遺物はない。

SP217は東西幅が約0.4m、南北幅が約0.3mの楕円形の柱穴で、深さは0.35mである。柱抜き取り穴の直径は、検出面で約0.2m、底面で0.12mほどである。柱穴の掘形埋土は褐色細粒砂混りシルト質粘土、柱抜き取り穴の埋土はにぶい黄褐色砂混りシルト質粘土で、柱穴掘形から土師器の破片が出土した。

SP236は一辺約0.4mの隅丸方形の柱穴で、深さは0.35mある。柱穴掘形の埋土は褐色細粒砂混りシルト質粘土、柱抜き取り穴の埋土はにぶい黄褐色砂混りシルト質粘土で、柱抜き取り穴は底面で直径0.10mほどである。遺物は、柱穴掘形から土師器碗1と須恵器、内黒の黒色土器の破片が出土し、柱の抜

地層区分	主たる岩相・特徴	おもな遺構	おもな遺物	時期
第0層	現代表土層			現代
第1層	近世耕土層 (灰色砂礫混りシルト)	SK29・SP33 SD23・24など	肥前磁器 備前焼など	18世紀後半
第2層	古代包含層 (黄褐色細粒砂混りシルト質粘土)		黒色土器 土師器 須恵器	10世紀～ 11世紀初頭
第3層 (地山)	第3-1層 灰色極細砂混りシルト質粘土 第3-2層 明黄褐色砂礫混りシルト質粘土 第3-3層 灰黄褐色砂礫			

図3 地層と遺構の関係

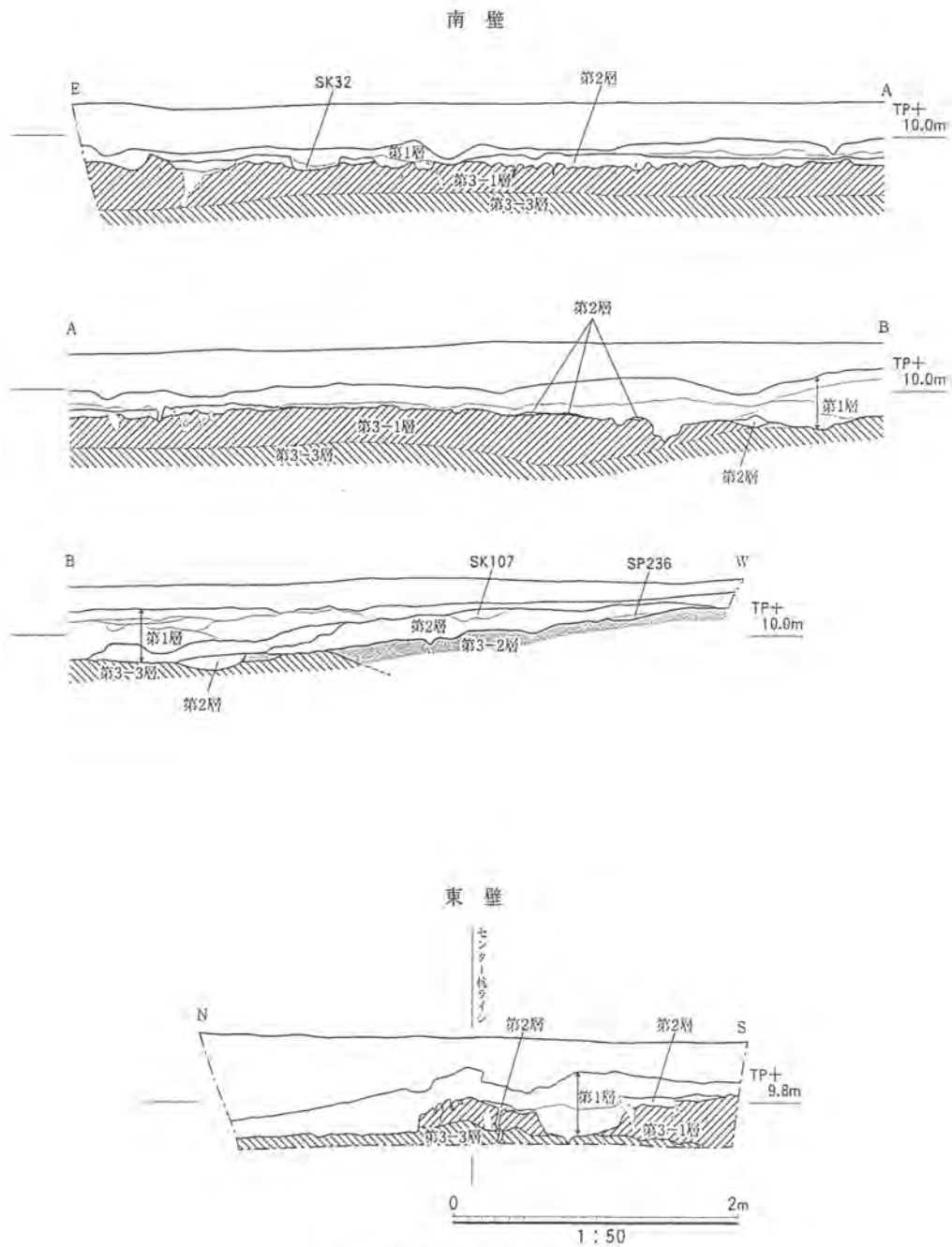


図4 東壁・南壁地層断面図

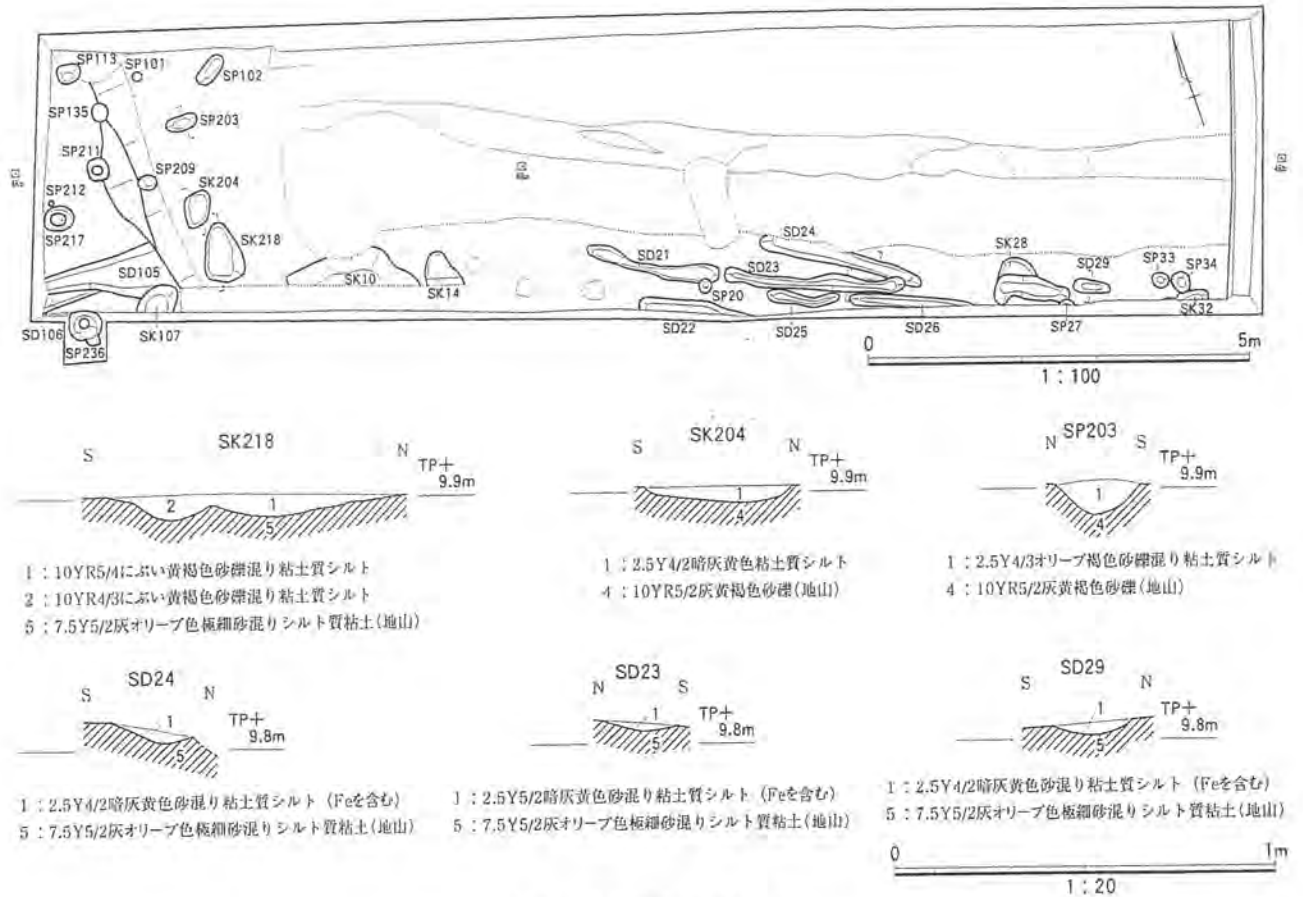


図5 出土遺構平・断面図

取り穴から土師器椀2と須恵器、内黒の黒色土器の破片が出土した。

SP217とSP236は埋土や深さなどがよく似ており、西側に展開する建物の柱穴と考えられる。両者の距離は約1.4mである。

SP211も柱穴であるが組み合うものはない。一辺約0.3mの隅丸方形で、深さは約0.2mである。柱抜き穴は底面で直径0.10mほどである。柱穴の掘形埋土は褐色砂混りシルト質粘土、柱抜き穴の埋土はにぶい黄褐色細粒砂混りシルト質粘土である。遺物は柱穴掘形から土師器が出土し、柱の抜き穴から両黒の黒色土器が出土した。いずれも細片のため、図化していない。

SP203は東西約0.4m、南北約0.2mの楕円形のピットで、深さは約0.1m、埋土はオリーブ褐色砂礫混り粘土質シルトで、鉄分を多く含んでいる。出土遺物はない。

SP209は直径約0.2mの円形のピットで、深さは0.06m、埋土は暗黄灰色細粒砂混り粘土質シルトで、鉄分を多く含んでいる。出土遺物はない。

SP212は直径0.08mの円形のピットで、深さは約0.1m、埋土は灰褐色細粒砂混りシルト質粘土である。出土遺物はない。

これら第2層基底面の遺構は、10世紀～11世紀初頭頃のものである。

調査区西端の第2層上面で溝・土塹・ピットを検出した。これらの遺構には100番代の番号を付している。

SD105は東西方向の溝で、東端で約0.7m、西端で約0.2mの幅があり、深さは約0.05m、長さは1.7

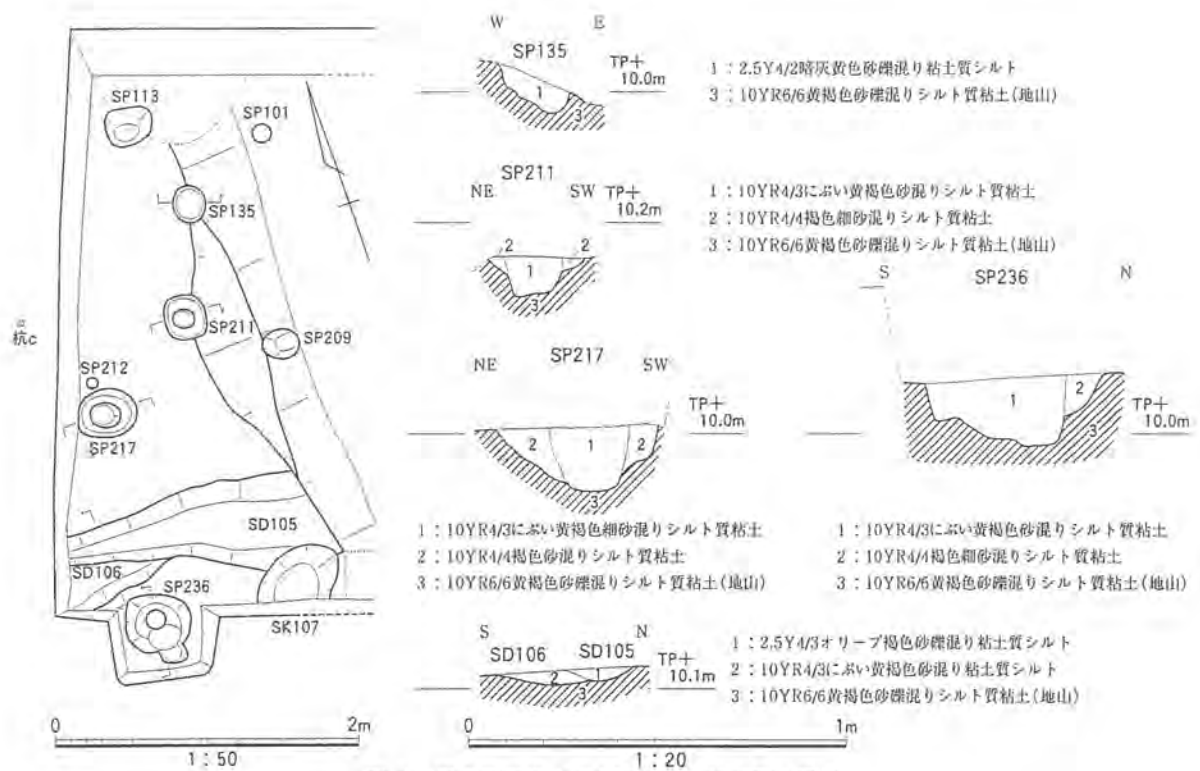


図6 調査区西端の第2層上面・基底面の遺構

m以上ある。埋土はオリブ褐色砂礫混り粘土質シルトで、土師器の細片が出土した。SD105は土塙SK107に切られ、SD106を切っている。

SD106も東西方向の溝であるが、SD105に切られているため、全体の規模はわからない。幅0.3m以上、長さ0.8m以上で、深さは約0.05mである。埋土はにぶい黄褐色砂混り粘土質シルトで、土師器の細片が出土した。

SK107は南壁にかかる楕円形の土塙で、東西0.5m、南北0.3m以上、深さは約0.1mである。埋土は暗黄褐色砂混りシルト質粘土である。遺物は出土していない。

SP135は直径約0.2mの円形のピットで、深さは約0.3m、埋土は暗黄灰色砂礫混り粘土質シルトである。遺物は出土していない。

SP101は直径0.12mの円形のピットで、深さは約0.1m、埋土は暗黄褐色粘土混り砂礫である。出土遺物はない。

SP102は東西約0.5m、南北約0.2mの楕円形のピットで、深さは0.06m、埋土は暗黄褐色砂礫混り粘土である。出土遺物はない。

SP113は一辺0.3mほどの隅丸方形のピットで、深さは約0.3mある。埋土は黄褐色砂礫混りシルト質粘土で、土師器の細片が出土した。

これら第2層上面の遺構の時期は、遺物がほとんどないため判然としないが、

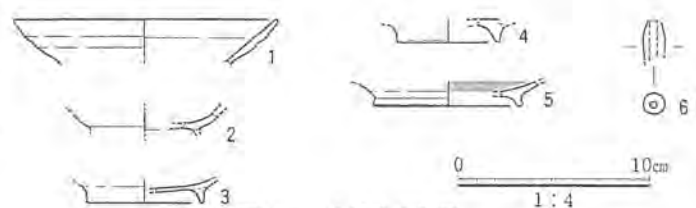


図7 出土遺物実測図

SP236(1・2)、SD26(3・5)、第2層(4)、第1層(6)
1～3：土師器碗、4・5：黒色土器碗、6：土錘

それぞれの遺構の埋土が第2層に由来するとみられることから、第2層上面の遺構も第2層の時期とあまり隔たらない10世紀～11世紀初頭のもので推定される。

b. 江戸時代後半の遺構と遺物(図5・7)

調査区南半の中央部から東端までの間の、第2層上面で検出した検出した遺構は、すべて第1層下面の18世紀後半のもので、これらの遺構には2桁の番号を付している。

溝や土壇・ピットなどがあるが、いずれも耕作痕跡であるとみられる。主な遺構について述べる。

溝はいずれも東西方向で、幅約0.2m、深さ約0.05mである。埋土は暗灰黄色砂混り粘土質シルトで、鉄分を含む。長さは長いもので約2.5mある。溝SD23・24・29の断面を図5に示した。遺物はSD23から土師器の破片が、また、SD26から土師器・須恵器・黒色土器が出土した。このうち、SD26出土の土師器椀3と内黒の黒色土器椀5を図示した。これらは本来この付近にあった平安時代の遺構や遺物包含層に由来するものであると考えられる。

土壇は調査区中央西寄りでSK10が検出された。南壁にかかり、東西1.8m、南北0.5m以上の不整形の土壇で、深さは約0.1mである。埋土は灰黄褐色砂礫混り粘土質シルトでマンガンを含む。近世瓦の破片が出土した。

c. 包含層出土の遺物(図7)

第1層からは土師器・須恵器・土錘6などの下位層に由来する遺物とともに、瀬戸美濃焼・肥前陶器・備前焼など、近世の国産の陶器や、肥前磁器の破片が出土した。肥前磁器は18世紀後半のいわゆる「くらわんか茶碗」と呼ばれるもので、第1層の時期もこの頃と考えられる。

第2層から土師器・須恵器・黒色土器の破片が出土した。このうち、内黒の黒色土器椀の高台4を図示した。10世紀～11世紀初頭頃のもので、第2層の時期を示す。

3)まとめ

今回の調査の最大の成果は、山之内遺跡東部で初めて平安時代前半の遺構と遺物が見つかったことである。この時期の遺構・遺物は、周辺の遺跡を含め、山之内遺跡西部のYM89-15次調査で見つかったもののほかにはなく、今回の成果はわずかな資料ではあるが、このあたりのようすを窺うことのできる良好な資料であり、この地域の歴史を考える上での重要な手がかりとなる。今後の調査成果と合わせてさらに検討を加えたい。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1998、『山之内遺跡発掘調査報告』

2004、『大阪市住吉区苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』

松本啓子1991、「宮口邸新築に伴う山之内遺跡発掘調査(YM90-27)略報」：『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.127-138

1992、「西口末吉氏による建設工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM91-8)略報」：『平成3年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.71-78

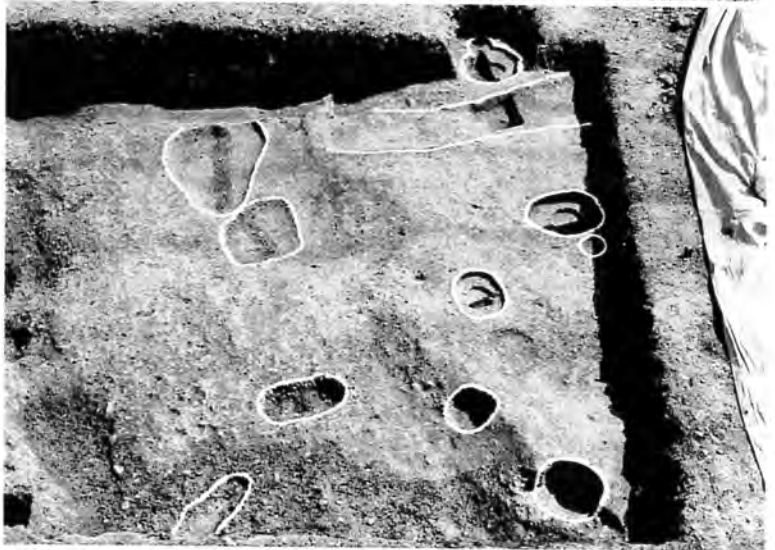
調査地全景
(東から)



調査地東部の状況
(北から)



調査地西部の遺構
(北から)



IX 東 住 吉 区

桑津遺跡発掘調査(KW06-1)報告書

調査個所 大阪市東住吉区桑津3丁目21
調査面積 51m²
調査期間 平成18年9月12日～9月21日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、田中清美

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は弥生時代中期の環濠を伴う拠点集落として知られる桑津遺跡の西北部に位置している(図1)。また、周辺には弥生時代中期から江戸時代の遺構・遺物が検出された調査区が点在しているほか、調査地の西南部に隣接するKW95-5次調査では弥生時代中期中葉の土器やガラス小玉が出土した井戸状の遺構をはじめ、飛鳥時代の掘立柱建物などが検出されている[大阪市文化財協会1998]。

大阪市教育委員会が実施した試掘調査でも、地表面下20~60cmで弥生土器や須恵器を含む遺物包含層や落込みが確認されたため、本調査を実施することになった。

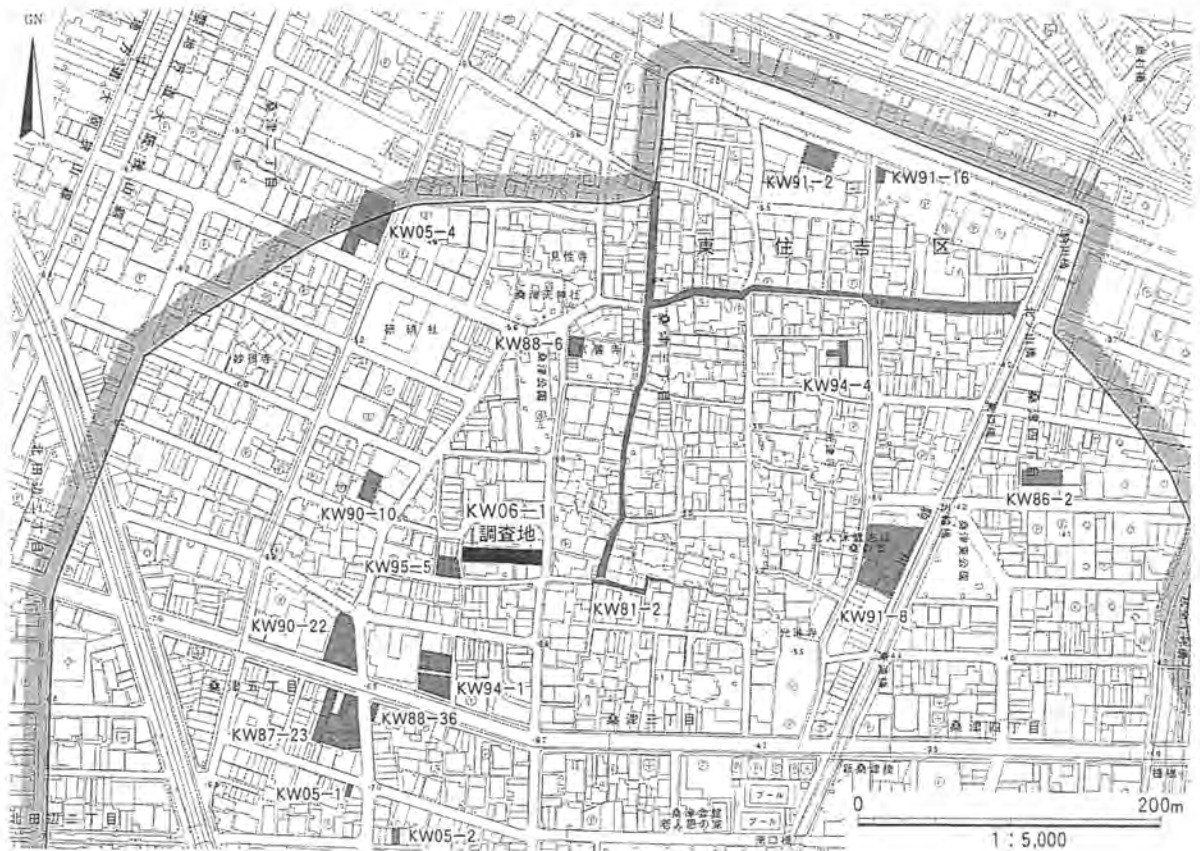


図1 調査地位置図

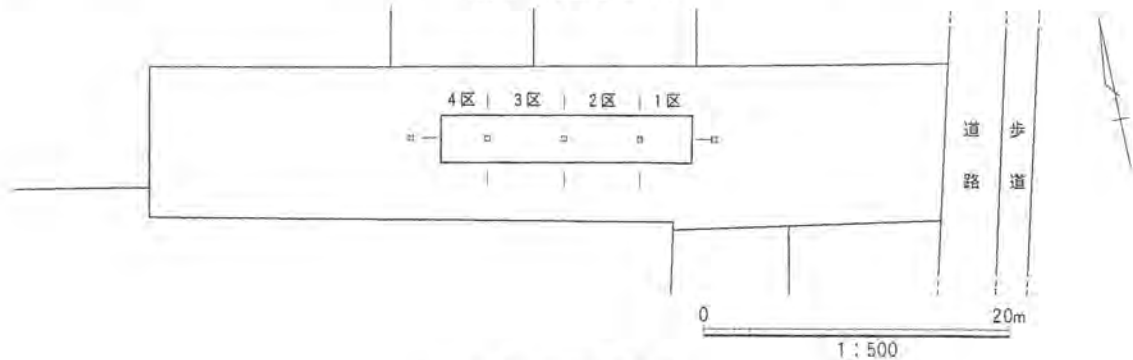


図2 調査区位置図

調査はまず、整地層および近・現代の作土層を重機で掘削した後、当地域の地山層である第5層の上面まで人力で掘下げて、遺構・遺物の検出を行った。

9月14日に調査区の西部から順次第5層の上面で遺構検出を行い、9月19日には主要な遺構の埋土を掘下げた。9月20日から翌日まで、地層断面図および遺構の実測・写真撮影などの記録を行い、9月21日には機材の撤収作業を含めてすべての調査を終えた。なお、本調査では図2に示したように調査区を東側から1～4区に区画して遺物取上げや遺構実測の際の基準にした。

調査で用いた水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文の挿図中ではTP+〇mと記した。図2の方位は座標北、図5・6の方位は磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

調査区の東西および南壁で地層の観察を行って、現代の整地層である第0層下に第1層から第5層の各層を確認した。

第1層：暗褐色(10YR3/1)細粒砂～砂礫混りシルト層で、層厚は35～40cmある。本層は下層の第3層の偽礫を含むほか、基底面で多数の乾痕が確認された。奈良時代の須恵器・土師器をはじめ、鎌倉時代の瓦器椀や土師器、江戸時代から現代にかけての陶磁器・瓦の細片が出土した。作土層である。

第2層：褐色(10YR4/4)シルト混り細粒砂層で、層厚は5～10cmある。4区に分布していた。

第3層：暗褐色(10YR3/4)細粒砂混りシルト～暗褐色(10YR3/3)細粒砂混りシルト質粘土層で、層厚は5～40cmある。本層は2区の中ほどから3区にかけて位置する落込みSX48内では上下2層に区分されたが、1区では第1層の耕作に伴って削剥されており厚さは5cm以下であった。

本層では弥生時代中期の土器片や古墳時代中期の韓式系土器の細片をはじめ、飛鳥時代後葉から奈良時代後葉の須恵器・土師器が出土した(図7)。

第4層：黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト～細粒砂混り粘土質シルト層で、層厚は10cm以上ある。

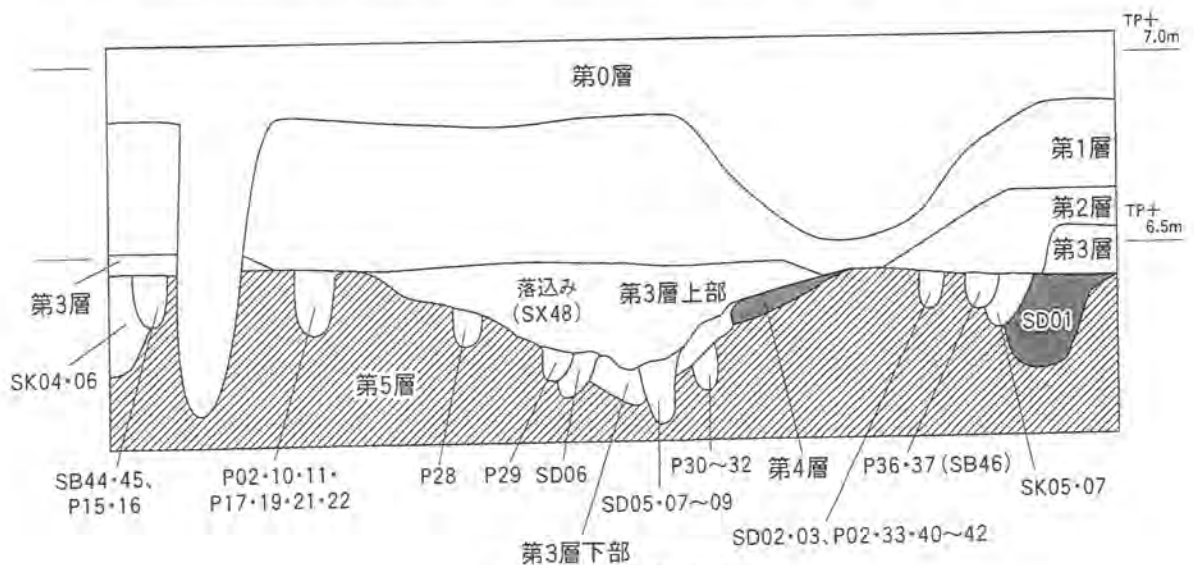
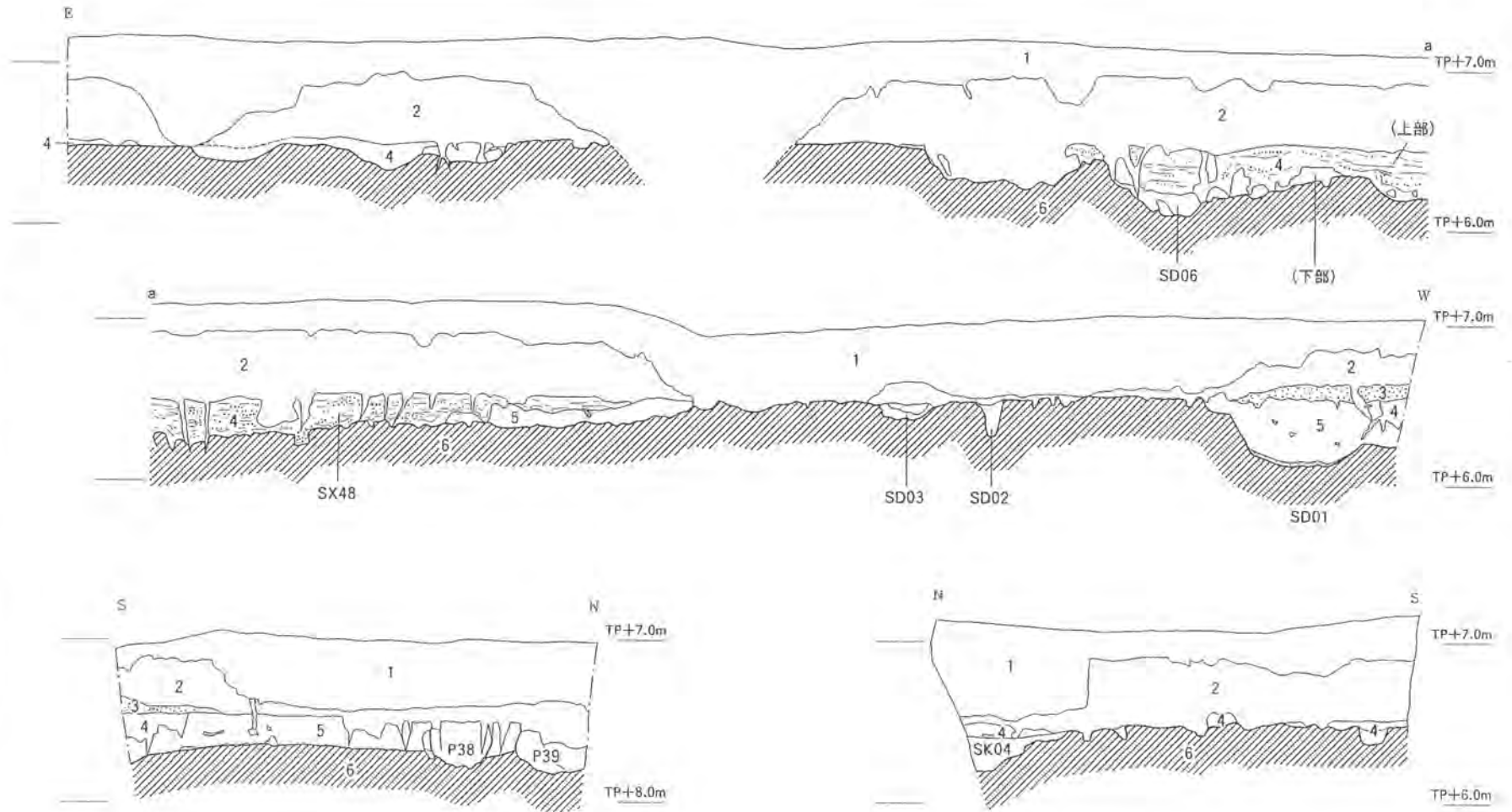
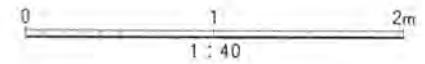


図3 地層と遺構の関係

図4 南壁断面(上・中図)および東・西壁断面(下図)実測図



- 1 : 第0層 現代整地層
- 2 : 第1層 暗褐色(10YR3/1)細粒砂～砂・礫混りシルト層
- 3 : 第2層 褐色(10YR4/4)シルト混り細粒砂層
- 4 : 第3層 暗褐色(10YR3/4)細粒砂混りシルト～暗褐色(10YR3/3)細粒砂混りシルト質粘土層
- 5 : 第4層 黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト～細粒砂混り粘土質シルト層
- 6 : 第5層 明褐色(7.5Y4/6)～褐色(7.5Y5/6)粘土質シルト～細粒砂混り粘土質シルト層



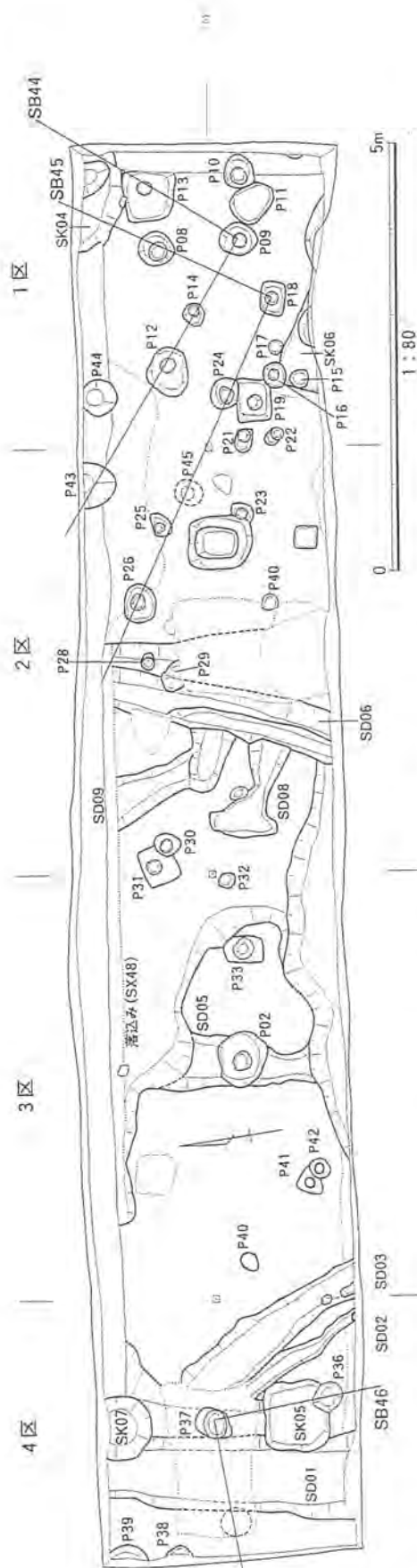


図5 第3層中および
第5層上面検出遺構配置図

本層は4区に位置する溝SD01内および2区のSX48の西部でのみ確認された。弥生時代中期後葉の土器・石器をはじめ、古墳時代中期後葉の須恵器・土師器が出土した。

第5層；明褐色(7.5Y4/6)～褐色(7.5Y5/6)粘土質シルト～細粒砂混り粘土質シルト層で、当地域の地山層である。本層上面の標高はTP+6.2～6.5mあり、ほぼ平坦な面をなす。

ii) 遺構と遺物

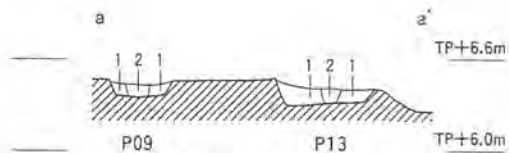
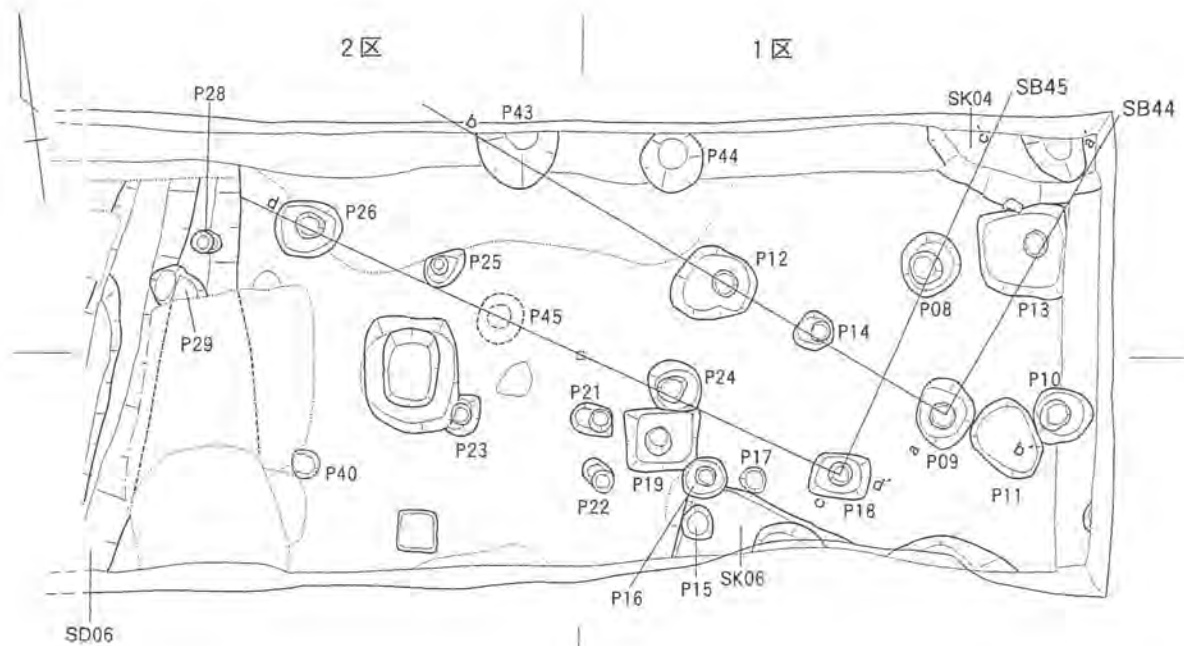
本調査では第5層の上面で遺構の検出を行った。その結果、溝・掘立柱建物・土塋をはじめ、多数の柱穴や小穴などの遺構を確認したが、それらの多くは調査範囲外に拡がっていることから、ここでは主な遺構についてのみ、時期を追って報告する。

SD01 4区に位置する幅0.8～1.0m、深さ0.4m前後の南北方向の溝である(図4・5)。溝内には機能時堆積層である第5層の偽礫を含む第4層の黒褐色粘土質シルト～細粒砂混り粘土質シルトおよび、最下層に粘土質極細粒砂層の薄層が見られた。

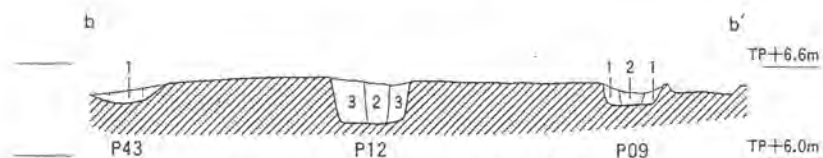
出土遺物は混入品とみられる弥生時代中期後葉の土器や石器28～32(図8)、奈良時代の須恵器10に混って古墳時代中期後葉の須恵器1～9・土師器11・製塩土器12などが出土した(図7)。

1・2は須恵器杯蓋で、口縁部と天井部の境の稜線は前者が鋭く、後者はやや鈍い。3は丸い天井部の中央に中くほみのつまみがつく須恵器有蓋高杯の蓋で、口縁部を欠損している。4は口頸部を欠損した須恵器甕で、体部の上半に櫛描列点文が巡る。5・6は須恵器杯身で、ともに立上がりはわずかに内傾している。7～9は須恵器甕の口頸部である。7は頸部の外面をにぶい突帯で上下に区分して、2帯の櫛描波状文を施している。8は口縁部の下端を肥厚させており、これの下方に1条の突帯が巡る。9の口縁端部は肥厚している。以上の須恵器は器形や口縁端部の特徴からみて、TK23～TK47型式に属するものであろう。

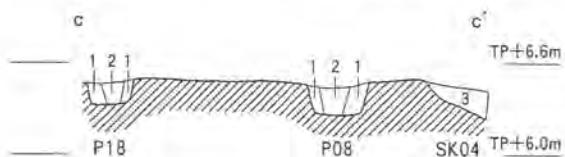
11は甑か鍋の把手である。12は器壁の厚さが約3mmの製



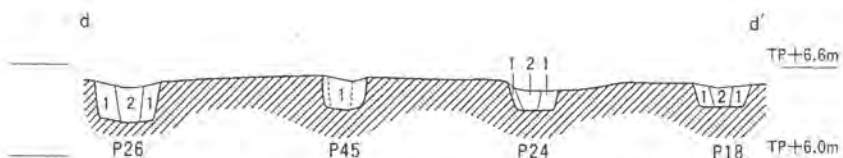
- 1: 暗褐色(10YR3/4)細粒砂混りシルト(第5層の偽礫を含む)
- 2: 黒褐色(10YR3/2)砂礫混りシルト



- 1: 暗褐色(10YR3/4)細粒砂混りシルト(第5層の偽礫を含む)
- 2: 黒褐色(10YR3/2)細粒砂混りシルト
- 3: におい黄褐色(10YR4/3)細粒砂混りシルト(第5層の偽礫を含む)



- 1: 明褐色(7.5YR5/6)細粒砂混りシルト(第5層の偽礫を含む)
- 2: 黒褐色(10YR3/2)細粒砂混りシルト
- 3: 褐色(7.5YR4/3)細粒砂混り粘土質シルト



- 1: 明褐色(7.5YR5/6)細粒砂混りシルト(第5層の偽礫を含む)
- 2: 黒褐色(10YR3/2)細粒砂混りシルト



図6 掘立柱建物SB44・45平面・断面実測図

塩土器の破片で、器表面を細筋の平行タタキで整形している。これらは前述した須恵器に共伴するものであろう。

次に遊離資料であるが、サヌカイト製の石器遺物について記述する(図8)。28は最大長4.4cm、最大幅3.1cm、最大厚0.85cmの剥片石器で、三側縁を細部調整している。29は最大長4.2cm、最大幅2.8cm、最大厚1.35cmで、一側縁を細部調整している石器の未製品である。下端が折れている。30は最大長5.5cm、最大幅4.65cm、最大厚0.95cmの剥片石器で、一側縁を細部調整している。31は最大長7.8cm、最大幅4.4cm、最大厚2.1cmの剥片で、裏面に原面が残る。32は最大長5.8cm、最大幅7.0cm、最大厚4.4cmのクサビとみられるもので、上下端に剥片の剥離痕がある。2面に原面が残る。以上の石器遺物は共伴した土器からみて、弥生時代中期後葉に属するものであろう。

SD02 4区に位置する幅深さともに0.2m前後の溝である(図4・5)。溝内には褐色(10YR4/4)細粒砂混り粘土質シルトが堆積しており、弥生時代中期後葉の土器片14・15が出土した(図7)。溝の北部を後述するSD03に切られていたが、両者の埋土はさほど変わらなかった。

14は壺の底部で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面をケズリ状のナデで調整している。15は口縁部が水平近くに開く甕で、口縁端部がわずかに肥厚している。器体の調整は、器面の風化が進んでいて明らかでない。

SD03 SD02の東側に位置する幅0.4～0.6m、深さ約0.1mの溝である(図4・5)。溝内には下から暗褐色(10YR3/4)細粒砂混り粘土質シルト・褐色(10YR3/4)粘土質シルトが堆積しており、弥生時代中期後葉の土器が出土した。SD02・03の時期はともに出土遺物からは断定しがたいが、埋土からみて、SD01よりは若干古いものと考えられる。

SK04 1区の北東部に位置する深さ約0.2mの不整形な土壌である。遺構の大半が調査範囲外であるため、形態や規模については明らかでない。埋土は褐色(7.5YR4/4)細粒砂混り粘土質シルトで、弥生時代中期後葉の土器片や磨製石斧20のほか、古代とみられる土師器の細片が出土した。

20は最大長12.0cm、最大幅6.6cm、最大厚4.6cmを測る磨製石斧である。蛤刃であろう刃部の大半を欠損しているが、側面図からみて、一度折れた石斧を再研磨して刃付けを行った可能性がある。石材は和泉砂岩であろう。

SK05 4区に位置する東西0.85m、南北0.80m、深さ0.57mの方形土壌である。埋土は下から第5層の偽礫を多く含む褐色(7.5YR4/3)細粒砂混りシルト・灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂混りシルト・黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂混りシルトで、混入品とみられる弥生時代中期後葉の土器片をはじめ、古墳時代中期後葉の須恵器19や土師器の細片が出土した。

19は杯部の大半を欠損した高杯の脚部である。脚端部は内側におさめており、柱状部の外面にはカキメの後、四方に長方形スカシ孔を穿つ。TK23型式に属する有蓋高杯であろう。土壌の時期は5世紀後葉のSD01および、古代の可能性のある柱穴P36との切合い関係などから、ここでは古墳時代中期後葉以降、古代以前の遺構とみておきたい。

SB44 1区から2区に位置する梁行2間以上、桁行2間以上の掘立柱建物である。各柱の掘形は方形に近いP13以外はやや不整形であった。柱間の距離は梁行が1.30m、桁行はそれぞれ1.70mを測

り、柱痕跡が確認されたものは直径約0.15mあった(図5・6)。

SB45 1区から2区に位置し、SB44に重複するような状態で検出された梁行1間以上、桁行3間以上の掘立柱建物である(図5・6)。各柱間の距離は梁行が1.50m、桁行はP18からP24が1.25m、P24からP45が1.25m、P45からP26が1.40mとやや不揃いである。なお、P45周辺では、現代の油によるシミ状の変色部が広がっていたため、本調査では柱穴の輪郭の確認にとどめた。掘形は方形のP18以外は、径0.3~0.4mのやや不整形な円形を呈しており、深さは検出面から0.15~0.25m、柱痕跡は直径約0.15~0.20mあった。

掘立柱建物SB44・45の時期は、一部の柱痕や掘形から奈良時代とみられる須恵器や土師器の細片が出土したこと、掘形の埋土に第4層の偽礫が混ることなどから古代以降と推定される。以上のほかにも第5層上面では4区で掘立柱建物SB46の可能性のある柱穴列P36・37を確認したほか、多くの柱穴を検出したが、調査地内では一棟の建物としてまとまるものはなかった。これらの中には柱穴の大きさや掘形の埋土からみて、中世以降の可能性のあるものも含まれているものと思われる。

SX48およびSD05・06・08・09 SX48は2区から3区にかけて位置する落込みで、底には凹凸が見られた。第3層準の埋土は上部と下部に二分される。下部層の暗褐色(10YR3/3)細粒砂混りシルト質粘土層から紡錘車をはじめ、奈良時代の須恵器や土師器が出土した。上部層では極細粒砂のラミナが観察されたが、下部層の上面で幅0.2~0.5m、深さ0.2m前後の溝状の遺構SD05・06・08・09を確認した。これらの溝の埋土は、第4・5層の偽礫を多く含むことから畝間と考えられたが本調査では明らかにできなかった。ここでは以下にSX48の下部層から出土した土器21~27(図7)、次いでSD05・06・08・09の出土遺物13・16~18・33(図7・8)について述べておく。

21・22は須恵器蓋で、前者の口縁部には小さなかえりがあり、後者は口縁端部を下方におさめている。23は土師器皿、24は土師器杯で、後者は前者に比べて器体が深い。ともに口縁端部を丸くおさめているが、後者の口縁部は前者に比べて大きく開き、体部下半を横方向にヘラケズリしている。内面はともにヨコナデで、見込は無文である。25は口縁部が大きく開いた土師器甕で、体部はさほど張りが無い。器面調整は外面が細かいハケで、内面は板状工具によるナデである。26は弥生時代中期後葉の土器片を加工した直径約4.5cmの紡錘車で、混入品であろう。27は韓式系土器の細片で、器表面を細筋のタタキで整形している。色調はにぶい褐色を呈しており、軟質焼成されている。13・16はSD05から出土したもので、前者は凹面に布目、凸面に縄タタキを施した平瓦である。後者は弥生土器鉢の底部で、器体の内外面をユビナデ調整している。17はSD06から出土した広口壺で、垂下させた口縁部の端面には円形浮文を施している。器表面は風化しており薄い。弥生時代中期後葉に属するものであろう。33はSD08から出土した最大長4.2cm、最大幅5.6cm、最大厚1.0cmの剥片石器で、二側縁を細部調整しており、2面に原面が残る。18はSD09出土の須恵器壺で、体部の内外面をヨコナデ調整している。

以上がSX48および関連溝から出土した遺物である。このうち、遺構の時期を示すものは須恵器18・22・土師器23~25であり、器形や口縁端部の特徴からみて、8世紀前半頃に属するものであろう。このようにみると、落込みSX48および関連溝の時期は奈良時代頃の可能性がある。

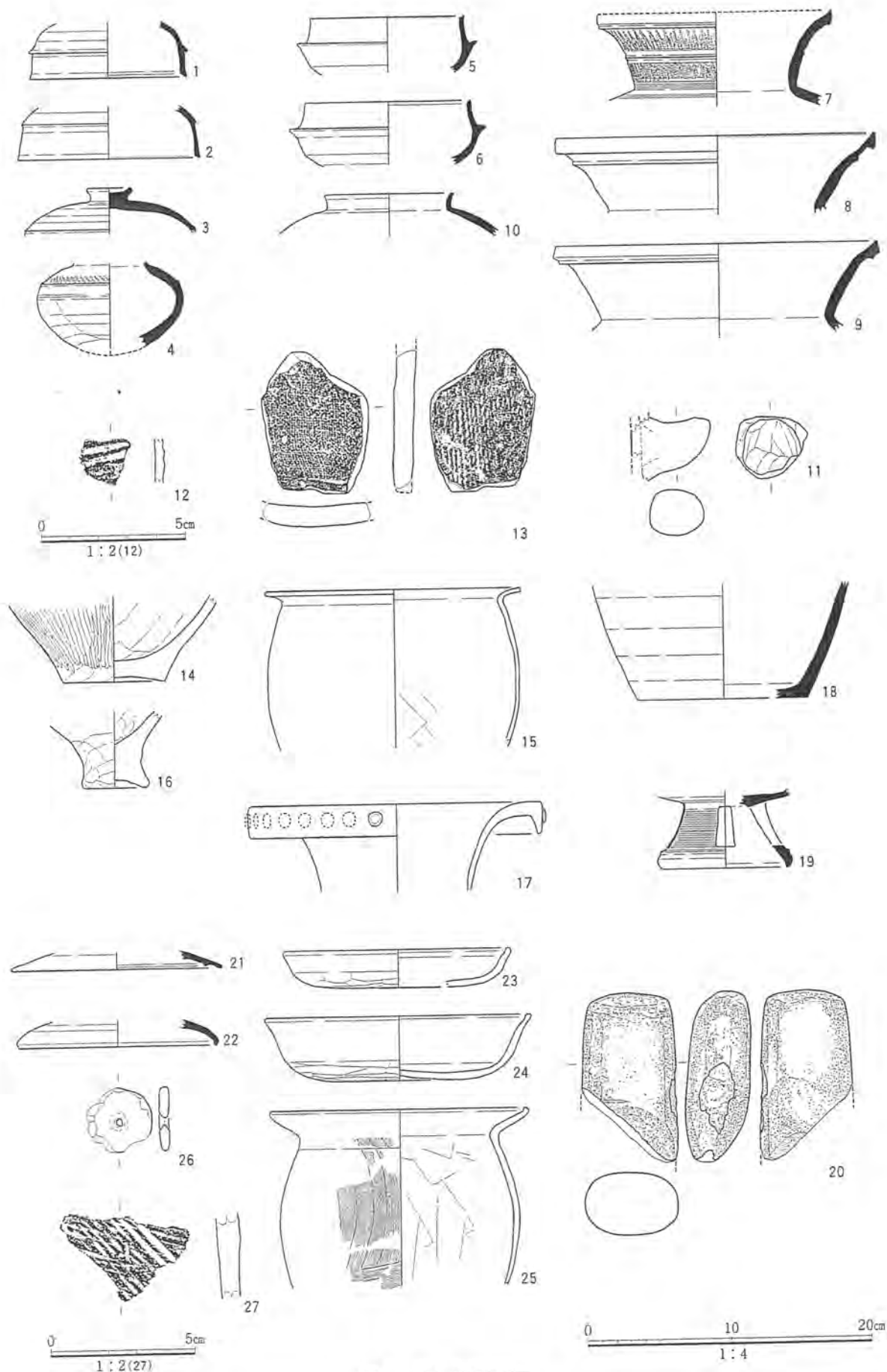


图7 出土遺物実測図

SD01(1~12)、SD02(14·15)、SD05(13·16)、SD06(17)、SD09(18)、SK04(20)、SK05(19)、落込みSX48(21~27)

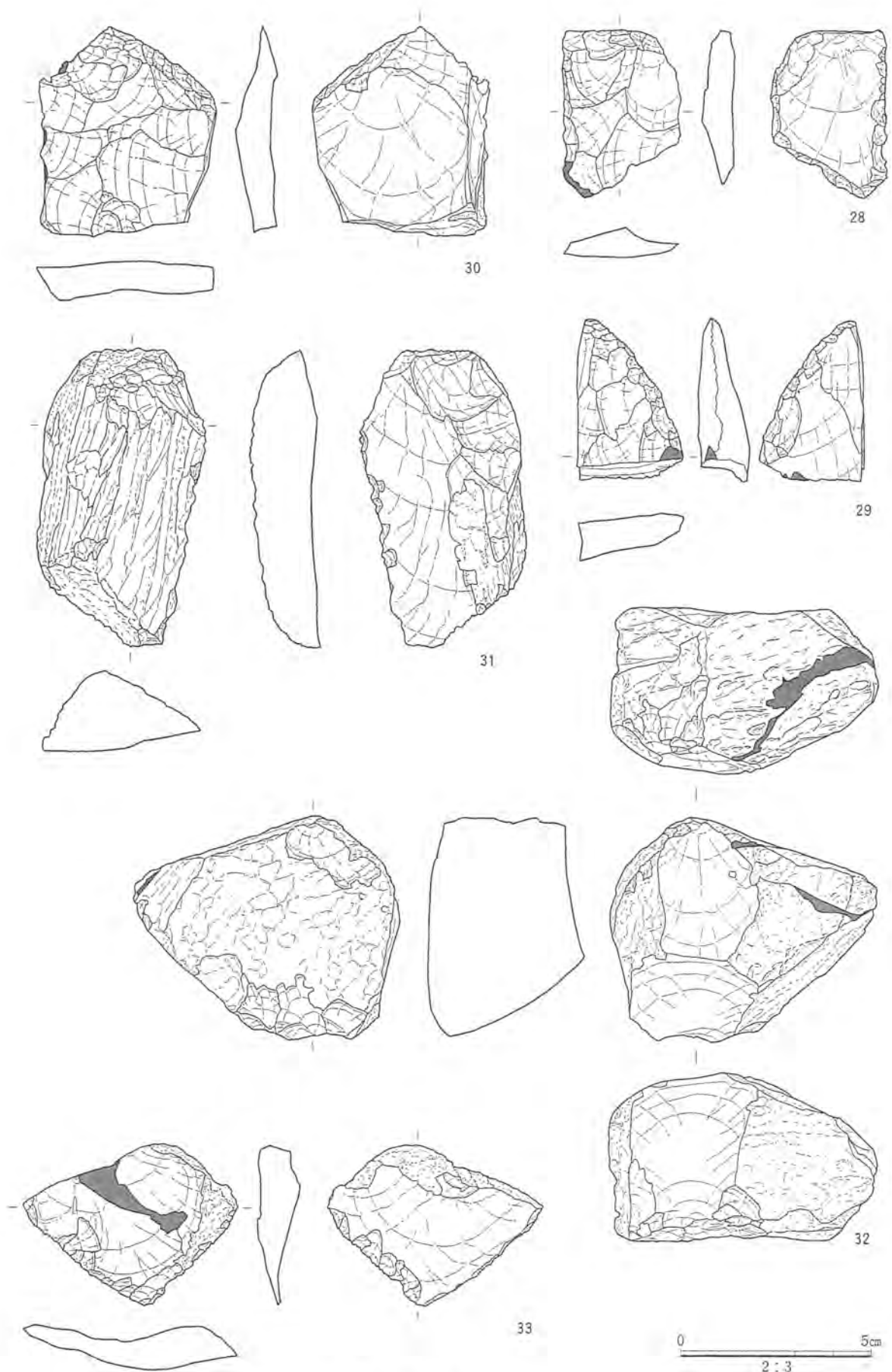


图8 出土遺物実測図
SD01(28~32)、SD08(33)

3)まとめ

今回の調査は狭小なトレンチ調査ではあったが、既述したような調査成果を得ることができた。以下にまとめておきたい。

調査地の近隣に分布しているような弥生時代中期の集落や墓地に関わる遺構は確認できなかったものの、遊離資料ではあるが、弥生時代中期後葉の多くの土器片をはじめ、磨製石斧やサヌカイト製の石器遺物が出土した。これらの遺物は調査地が桑津遺跡の弥生時代中期の集落の居住域内に位置していることを示す資料となった。また、再加工した和泉砂岩製とみられる磨製石斧は、一般に石斧の素材が泉南地域から搬入されたものと想定されていることを重視するならば、桑津遺跡の集団は石材や製品を入手するために、泉南地域の集団とも交易を行っていたことのみならず、当時の人々が道具に抱いた思いを今に伝えている。

一方、調査地のほぼ全域で確認された掘立柱建物の柱穴群は時期を確定しえたものは少なかったが、SB44・45をはじめ、古墳時代中期後葉の溝SD01を掘込むSB46などの掘立柱建物は、調査地が奈良時代以降の集落の範囲内に当ることを示すとともに、複数の建物が重複することから集落の存続期間が長かったことを示している。また、畝間状の溝SD05・06・08・09や作土を伴う落込みSX48など、奈良時代以降の耕作に関係したとみられる遺構も確認されたが、遺構の大半が調査範囲外のため、性格や規模については明らかにできなかった。これらについては、今後の調査の課題となったが、資料の蓄積を待って再検討を加えたい。

参考文献

大阪市文化財協会1998、『桑津遺跡発掘調査報告』



第5層上面の遺構全景(東から)



第5層上面の遺構全景(西から)

桑津遺跡発掘調査（KW06-3）報告書

調査個所 大阪市区西今川1丁目28-7
調査面積 158m²
調査期間 平成18年11月28日～12月7日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は桑津遺跡の東部に位置している。周辺ではこれまで多くの調査がなされ、弥生時代中期前葉から後葉をはじめ、古墳時代中期から江戸時代にかけての遺構や遺物が検出されている[大阪市文化財協会1998]。特に調査地北方に位置する東住吉中学構内の調査(KW82-7・83-8・93-2次)では弥生時代の方形周溝墓が19基検出されており、桑津遺跡の主要な墓域であったと推定される(図1)。2006年9月7日に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、古代～中世の遺構・遺物が確認されたため、発掘調査を実施することになった(図2)。

11月28日、調査担当者立会いの下、現代盛土と現代作土を重機掘削し、以後、人力掘削で層理面ごとに遺構・遺物の検出作業を行った。この間、遺構の実測図の作成、写真撮影を適時行い、12月7日には埋戻し、現地におけるすべての作業を完了した。

調査では平面図は磁北を基準に図化し、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+〇m」と記した。

2) 調査の結果

i) 層序

本調査地の基本的な層序は以下のとおりである(図3・4)。

第0層：層厚80cmの現代盛土層で、本層上面はTP+4.7m前後である。この盛土は1931(昭和6)年に施工された区画整理時のもので、西側から東方向に土砂が投入されている。桑津0層[大阪市文化財協会1998](以下、桑津〇層は同書による)である。

第1層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト混り粗粒砂の現代作土層で、層厚10～15cmを測る。桑津1層である。下面でSD01、SK02を検出した。

第2層：灰オリーブ色(7.5Y5/2)中粒砂混りシルト層で層厚20cmを測り、古墳時代から中世の遺物を含む。桑津3層である。上面でSK03～14が、基底面でSE101・102、SD103・104などが見つかった。

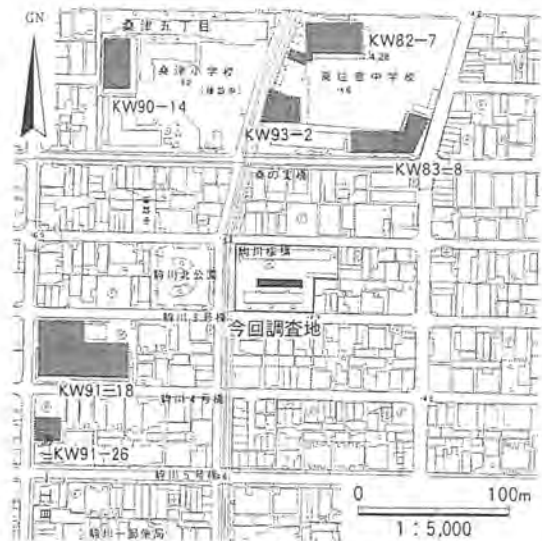


図1 調査地位置図

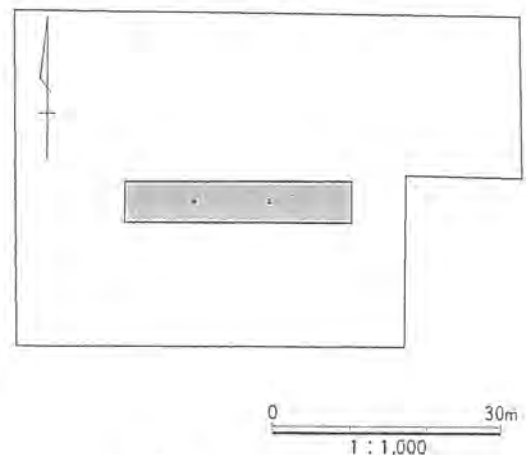


図2 調査区位置図

第3a層：調査区東端のみに分布する層厚5cmのオリブ褐色(2.5Y4/6)シルト層である。

第3b層：調査区東部に分布する層厚5～10cmの褐色(10YR4/4)シルト層である。古墳時代から平安時代の遺物を含む。桑津4層である。

第4層：調査区東部のみに分布する灰黄褐色(10YR4/2・5/2～7.5YR4/2)シルト層で、桑津6層である。

第5層：黄褐色(10YR5/6)シルトの地山層で、本層上面で弥生時代と思われるSK201～210、SP211～213が検出された。

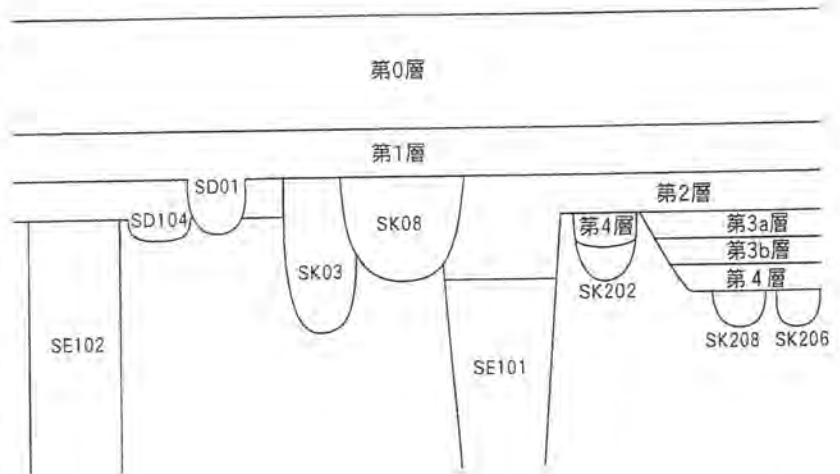


図3 地層と遺構の関係図

ii) 遺構と遺物

a. 第5層上面の遺構と遺物(図4～6・8)

調査区東部で弥生時代と思われる遺構SK201～209、SP211～213が検出されたが、弥生時代の遺物が出土したのは、SK201・204のみである。西部北端のSK210も同時期の可能性がある。

SK201 長さ1.7m、幅0.9m、深さ0.25mの土壇で、SK202に切られる。図8の6の弥生土器底部が出土した。

SK202 東西1.2m、深さ0.2mの土壇で、上部は第4層で埋まる。

SK203 直径1.2mの平面が不整形で、深さ0.2mの土壇で、上部は第4層で埋没する。

SK204 長さ0.7m、幅0.5m、深さ0.25mの南で二股に分れる土壇で、上部は第4層で埋まる。弥生土器の小片が出土した。

SK205 長径1.2m、短径0.9mの平面がやや楕円形を呈する土壇で、中央部が深くなり、深さ0.4mを測る。上部は第4層で埋没する。

SK206 直径0.5m、深さ0.25mの小土壇で、上部は第4層で埋まる。

SK207 直径0.7m、深さ0.15mの土壇で、上部は第4層で埋まる。

SK208 長さ0.9m、深さ0.15mの土壇で、上部は第4層で埋まる。

SK209 直径1.2m、深さ0.4mの土壇で、上部が暗褐色(10YR3/3)シルト、下部が黄褐色(10YR5/6)シルトで埋まる。

SK210 長さ1.0m、深さ0.3mの土壇で、灰黄褐色(10YR4/2)シルトで埋まる。

SP211 一辺0.35m、深さ0.3mの平面が円形のピットである。

SP212 長径0.4m、短径0.2m、深さ0.05mのピットである。

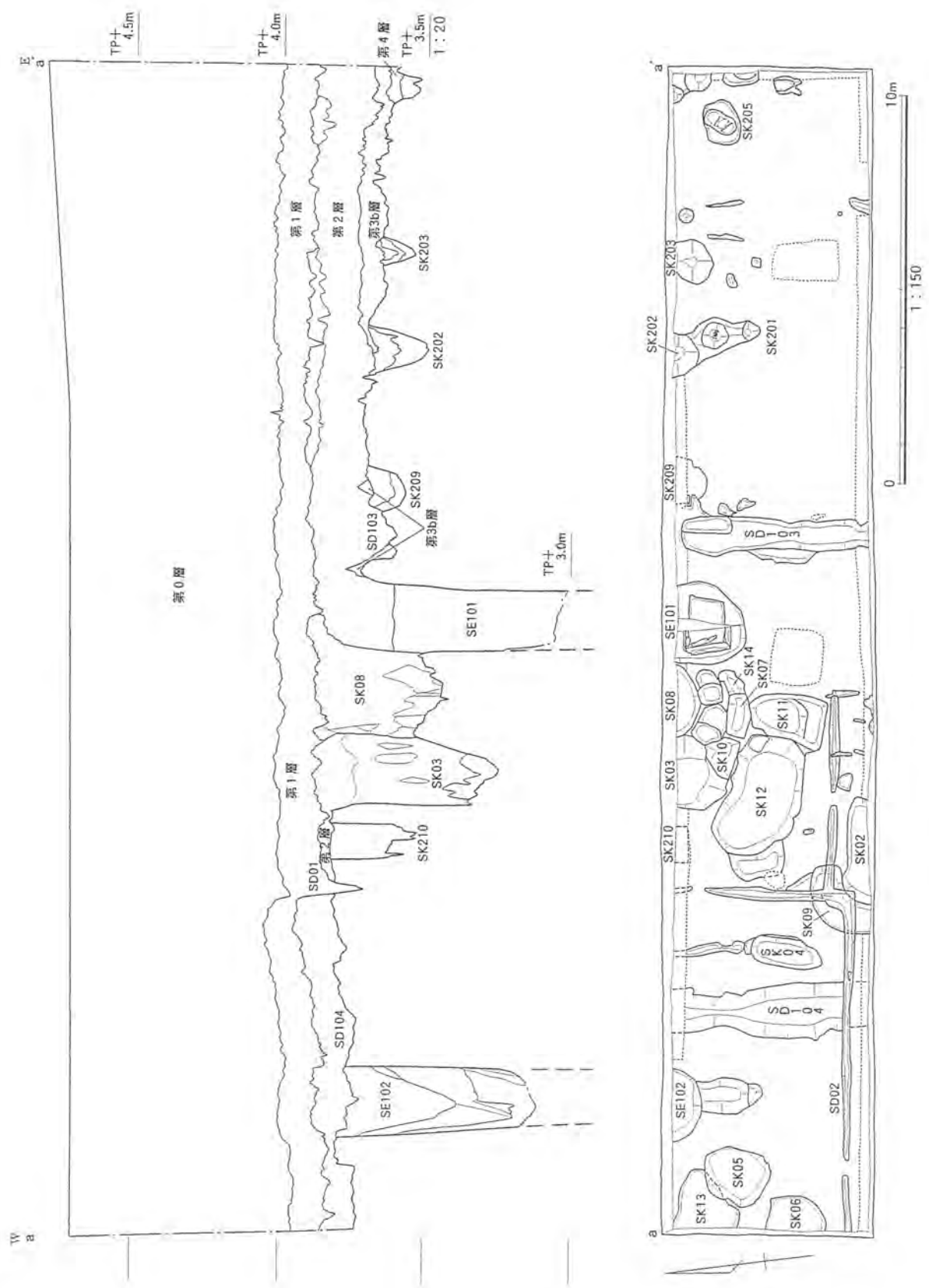


図4 遺構配置図と断面模式図

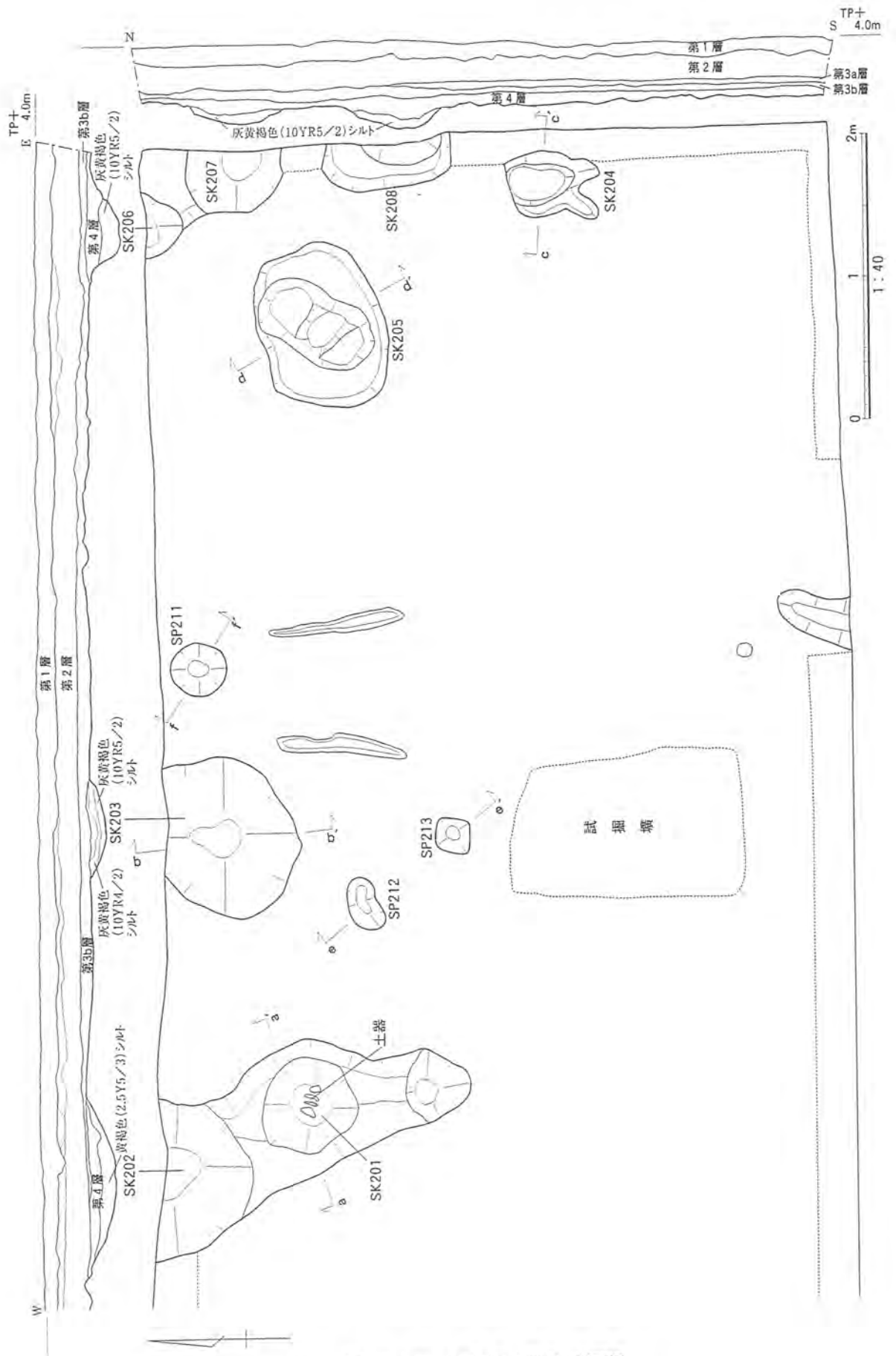


図5 地山(第5層)上面遺構の平面・断面図

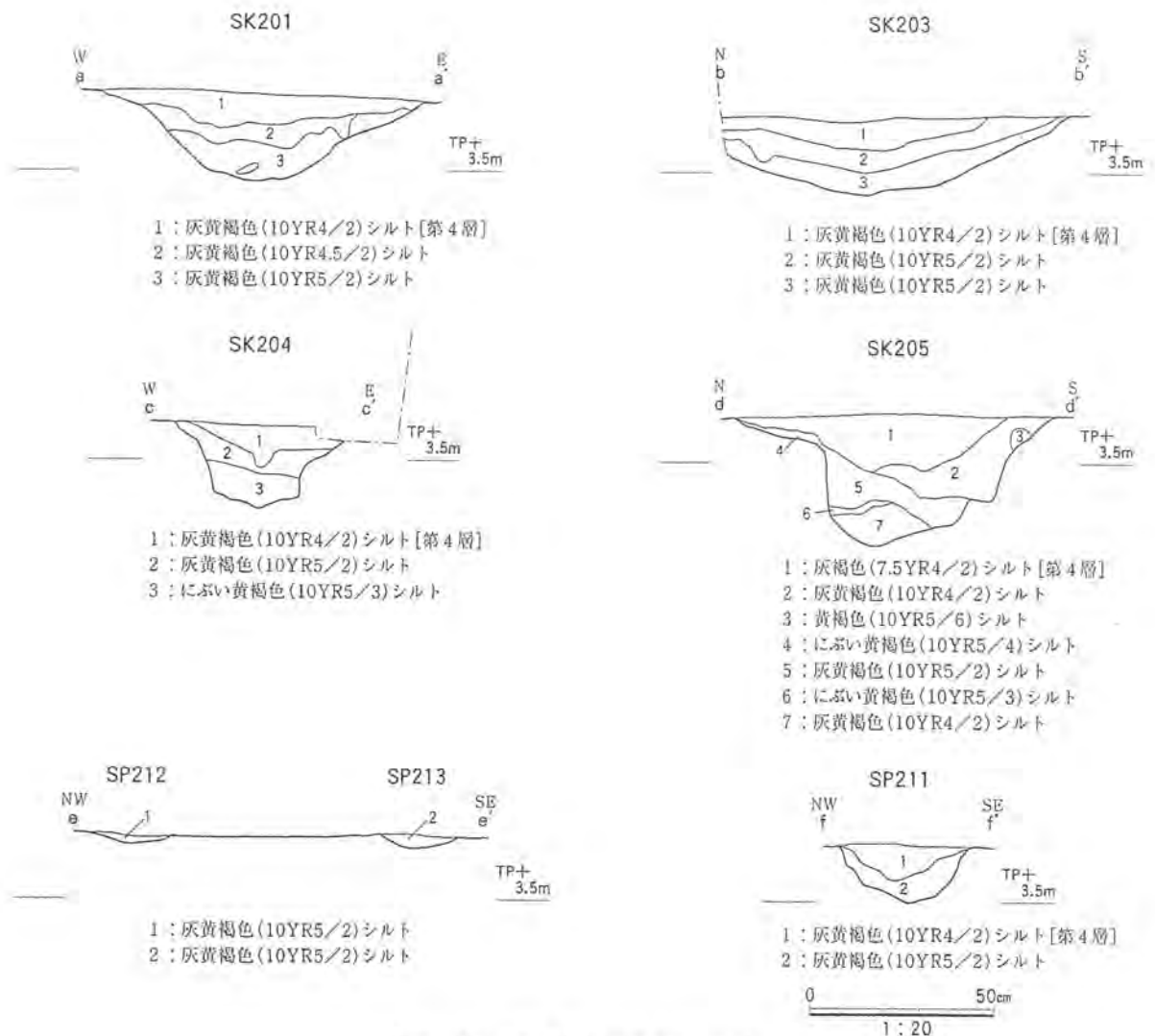


図6 地山(第5層)上面遺構の断面図

SP213 一辺0.25m、深さ0.05mの平面が隅丸方形のピットである。

b. 第3b層の遺物(図8)

円筒埴輪1、黒色土器B類皿3が出土した。1は外面がタテ方向のハケメ調整である。

c. 第2層基底面の遺構(図4・7・8)

SE101・102、SD103・104が検出された。

SE101 調査区中央部に位置し、直径2.1mの平面が不整円形の掘形内に、柱と横木で一辺1.2mの平面が正方形の木組の枠を作り、外側に幅25cm、厚さ5cmほどの横矢板を積んで、裏を粘土混りシルトで埋めている。横矢板には転用材も見られる。図8の肥前磁器碗7が出土したことから、17世紀中葉のものと考えられる。

SE102 調査区西部に位置する素掘りの井戸で、直径2.1mで粗粒砂混り細礫で埋設する。

SD103 幅1.0~1.5m、深さ0.2mの南北溝で、第2層で埋設する。

SD104 幅0.8~1.0m、深さ0.15mの南北溝で、第2層で埋設する。

d. 第2層の遺物(図8)

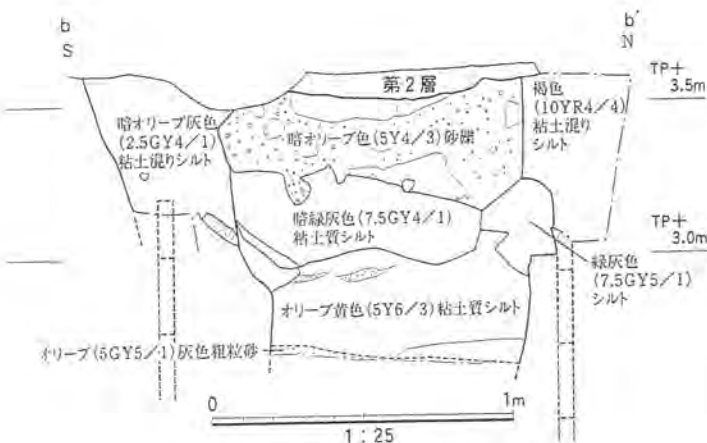
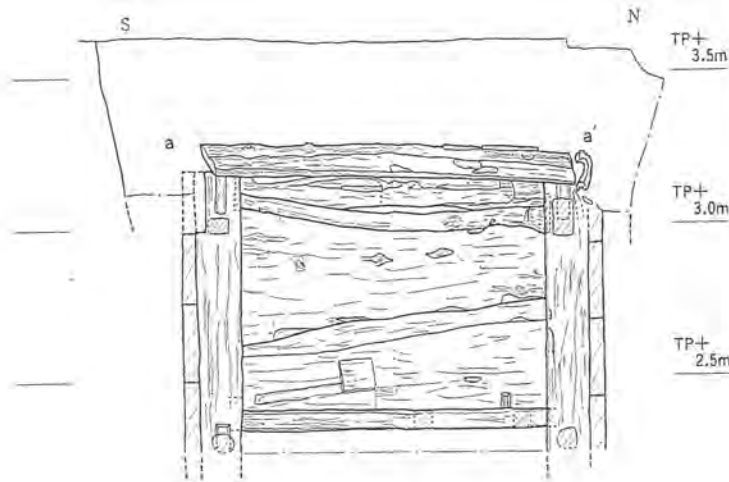
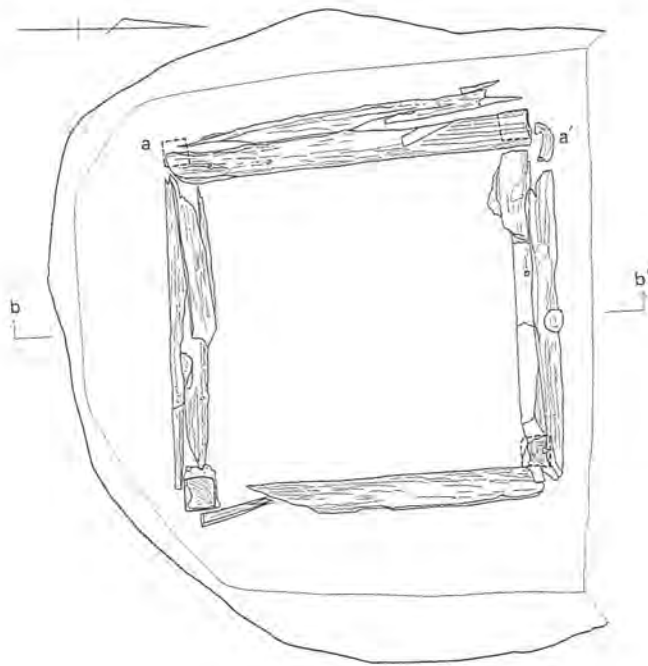


図7 SE101平面・立面・断面図

円筒埴輪のタガ2、土師質土器鉢4、瓦質羽釜5が出土した。4は外面をヨコ方向のハケメ調整を行っている。

e. 第2層上面の遺構と遺物(図4・8)

SK03~14が該当する。

SK08を中心として同心円を描くように、SK10やSK14などの小土壇群、その外側にSK11・12が掘られている。いずれも土取り跡と思われる。西端のSK05・06・13も土取り跡の可能性が高い。SK09から青磁(龍泉窯系)輪花皿9、SK14から肥前陶器鉢8が見つかった。8は透明性の高い黄白釉を施し、17世紀中葉と考えられる。

f. 第1層下面の遺構と遺物(図4・8)

SD01とSK02がある。

SD01 幅0.2mで東西に9.0m延びて直角に北に曲がり、4.5mはしる溝と、東西溝からクランク状に曲がり5.0m東に延びた後、南に直角に曲がる溝からなる。第1層上面はこの溝の西で畦状に盛上がっており、旧水田の境界と考えられることから、東側水田の給排水用の溝と思われる。

SK02 長さ4.5m、幅0.8m以上の土壇で、図8の10のプリント施文の磁製の筒形碗が出土した。

3)まとめ

調査区東部で弥生時代のものと思われる土壇・ピットが検出されたが、遺物が少なく断定できない。北方の東住

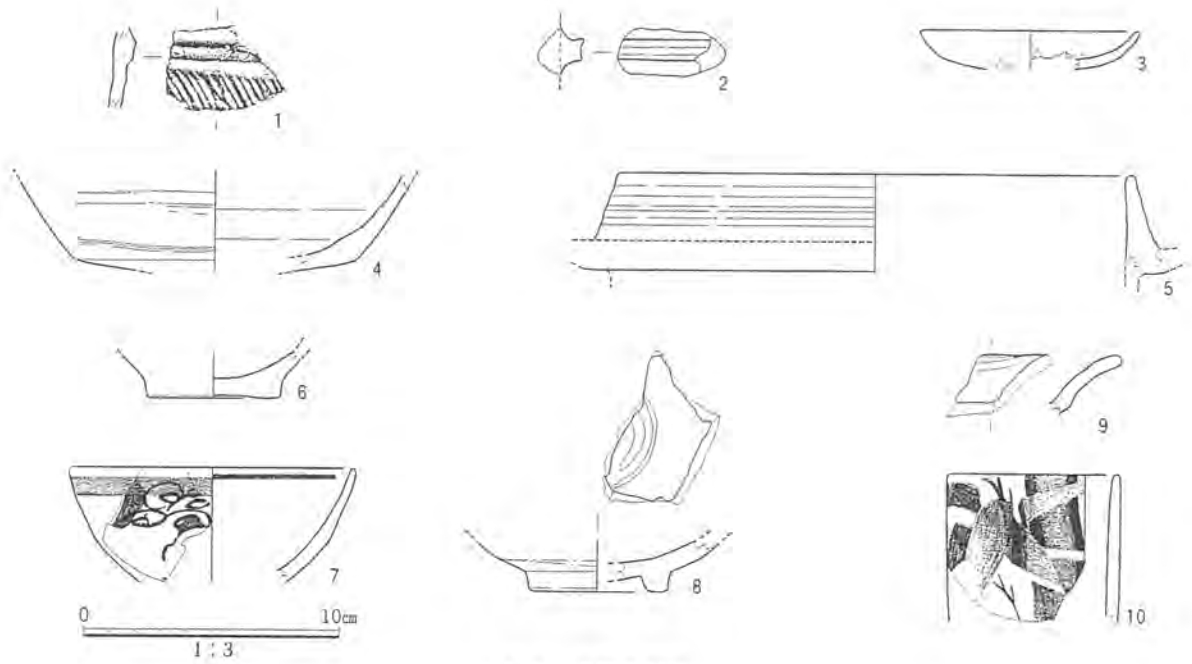


図8 遺物実測図

第3層(1・3)、第2層(2・4・5)、SK201(6)、SE101(7)、SK14(8)、SK09(9)、SK02(10)

吉中学構内で19基もの方形周溝墓が見つかったが、今回調査地では発見できなかった。

中世の2条の南北溝も当時の地割を考える上で重要な発見である。また江戸時代前期の可能性の高い木組み井戸は、近世の桑津村復元の確かな資料になる。

以上、断片的ながら弥生時代と中・近世の資料を得ることができた。今後の周辺部の調査成果をまっ
て、桑津遺跡の実相に迫りたい。

参考文献

大阪市文化財協会1998、『桑津遺跡発掘調査報告』

調査地全景
(西から)



地山(第5層)上面の遺構
(南から)



SK201土器出土状況
(南東から)



SE101
(東から)



SE101南西隅木組み



SE101北西隅木組み



難波大道跡発掘調査(ND06-1次)報告書

調査個所 大阪市東住吉区山坂1丁目39-1
調査面積 約220m²
調査期間 平成18年6月27日～平成18年7月11日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、松本啓子

1) 調査にいたる経緯と経過

調査地はJR阪和線の東側に隣接する大阪市住吉区山坂1丁目39-1に所在し、推定「難波大道」の中軸線から約50m西の地点に当る(図1)。

周辺の調査はあまり行われていないが、本調査地の北西約400mの桃ヶ池遺跡の調査(ND93-32次)では、12~13世紀の耕作溝が見つかり、無子葉弁十二葉蓮華文軒丸瓦や青磁蓮弁文碗や白磁玉緑碗などの遺物が出土している[松本啓子1996]。また、本調査地から南約100mの難波大道跡(ND94-13次)の調査では、14世紀の包含層と溝・小穴などが検出されている[積山洋1996a]。本調査地から南約400mの地点では2回の調査が行われ(ND90-10・94-15次調査)、古墳時代後期の遺構や遺物が見つかった[積山洋1991・1996b、高橋工1995]。

平成18年5月9日に行った大阪市教育委員会による試掘調査で、地表下約60cmで近世以前とみられる地層と上町台地とその周辺に見られる遺跡の地盤となる粘土層がよく残っていることが判明し、調査地が推定「難波大道」の中軸線からも近いことから、本調査を行うことになった。

調査は、図2のように敷地の南部に調査区を設定した。大阪市教育委員会の指示に基づき、近世以降の盛土を重機で除去した後、平成18年6月27日より地山とみられる自然堆積層の上面までの間を人力によって調査した。平成18年7月11日に発掘調査にかかわるすべての作業を完了した。

なお、今回挿図に使用した方位は座標北を示し、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+〇mと記した。



図1 調査地の位置



図2 調査区の位置

2) 調査の結果

i) 層序

本調査地の基本層序を図3・4に示した。

第0層：重機によって除去した近世後半から現代までの地層である。

第1層：10YR3/4暗褐色砂礫混りシルト層で、18世紀後半～19世紀前半の遺物を含む近世耕土層である。第1層は調査区の西端を除くほぼ全域に堆積していた。もっとも厚いところで層厚12cmである。本層下面でSD01、SK02、SP08といった耕作溝や土壌・小穴が検出された。遺構は調査区全域で見られた。

第2層：10YR4/6褐色砂混りシルト～粘土質シルトの、地山が再堆積した地層で、人為的な整地層である。粒径2mmほどの礫を含む。本層は調査区の東半部のみで見られた。本層を掘込んで南北方向の段SX208があるため、西半部では本層は見られない。層厚はもっとも厚いところで20cmほどである。本層上面で、畝地の境界とみられる段SX208、耕作溝SD105・107・109、土壌SK116などの遺構が見つかった(図5下段)。また西半部では、SX208掘削後、第3層上面でSX208によく似た段SX209や、SD203、SK204、SP205などの耕作溝や土壌・小穴が見つかった(図5上段)。これらの遺構や出土遺物から、本層は14世紀頃の整地層であると考えられる。

第3層：7.5YR5/6明褐色粘土質シルト～シルト質粘土の自然堆積層で、層厚70cm分を確認したが、以下も同様の地層が続く。周辺の調査地で見られる地山とよく似ており、本層以下が地山と考えられる。本層上面の標高は、調査区東端でTP+8.0m、中央部にある南北方向の段SX208の肩部まで

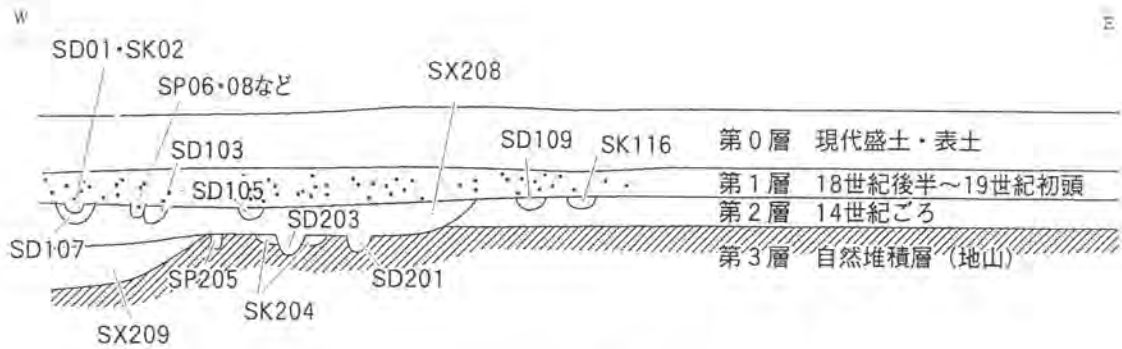


図3 地層と遺構の関係

はほぼ平坦で、SX208の底面がTP+7.8m、西端にある南北方向の段SX209の掘形の上部まで平坦である。本層は東が高く西が低くなっているが、南北方向は調査区内ではほとんど高低差はない。調査地全体では、現地表でも調査区の辺りは平坦であるが、北西方向に低くなり、約0.6m下がる。北西方向には桃ヶ池が現在でも水を湛えており(図1)、この方向に向って本層の上面高度は下がっていくものと考えられる。

ii) 遺構と遺物

a. 室町時代の遺構と遺物(図5・6)

第2層上面で、耕作溝・土壇・小穴を検出した。図5下段の遺構記号の後に100番代の番号を付したものがこれに当る。また、畠地の境界とみられる段SX208が第2層上面で検出され、このSX208底面でも遺構が検出されたため、これらの遺構には200番代の番号を付しているが(図5の上段)、出土遺物からみて、100番代、200番代の遺構とほとんど時期差はないと思われる。以下におもな遺構について述べる。

SX209は東西2m以上、南北8m以上、深さ0.01mほどの浅い掘込みで、北東部は円弧状に検出されたが、北部に向って浅くなるため、南端ほど上端は明瞭ではない。埋土は10YR5/6黄褐色砂礫混りシルト質粘土～シルト質粘土で、第3層によく似た堆積物である。出土遺物はない。以下に述べるSX208と同様の畠地の境界とみられるが、調査範囲内では底面に耕作溝などの痕跡は見られなかった。

SX208は南北方向の畠地の境界とみられる段で、南北とも調査区外へと延びる。深さ約0.2mである。埋土は10YR4/4褐色砂混り粘土質シルト～シルトである。須恵器・土師器・黒色土器・瓦器などの破片が出土した。図6の土師器羽釜1は14世紀のもので、SX208の時期を示すものと考えられる。

SX208の底面で見つかった溝は、幅0.2～0.5mであり、いずれも南北方向のSX208に平行して掘られたもので、埋土はマンガンや鉄分を含む10YR4/6褐色砂混りシルト質粘土である。深さは0.05m以下である。SD201から土師器と須恵器の細片が、SD202から土師器の細片が出土した。SX208の畠地の中の耕作溝の痕跡と考えられる。

SK207は南壁にかかる東西の幅約0.5m、南北の長さ0.8m以上の不整形な土壇で、深さは0.10mである。埋土は10YR4/6褐色砂混りシルト質粘土で、マンガンや鉄分を多く含む。遺物は出土していない。

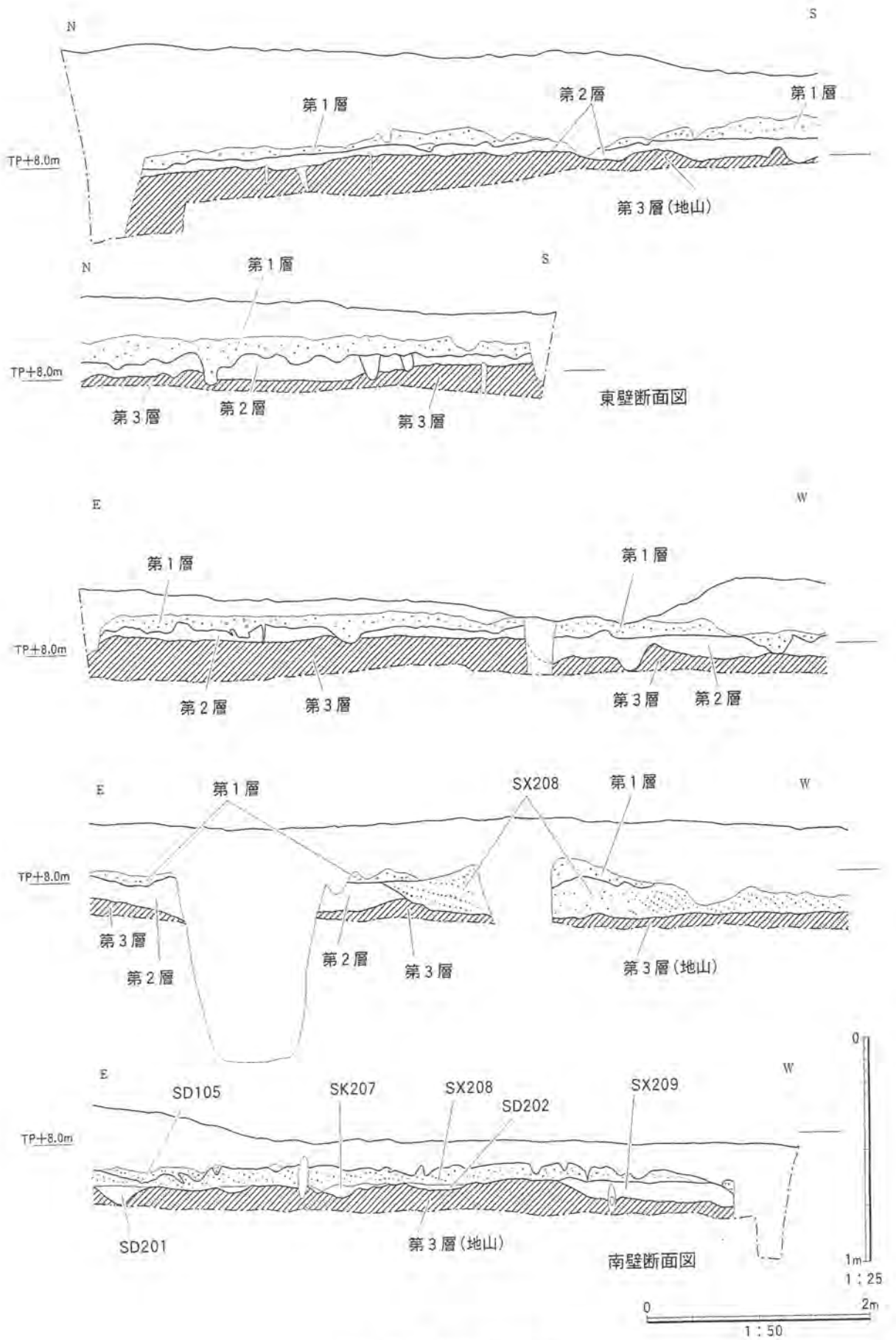


图4 东壁·南壁地层断面图

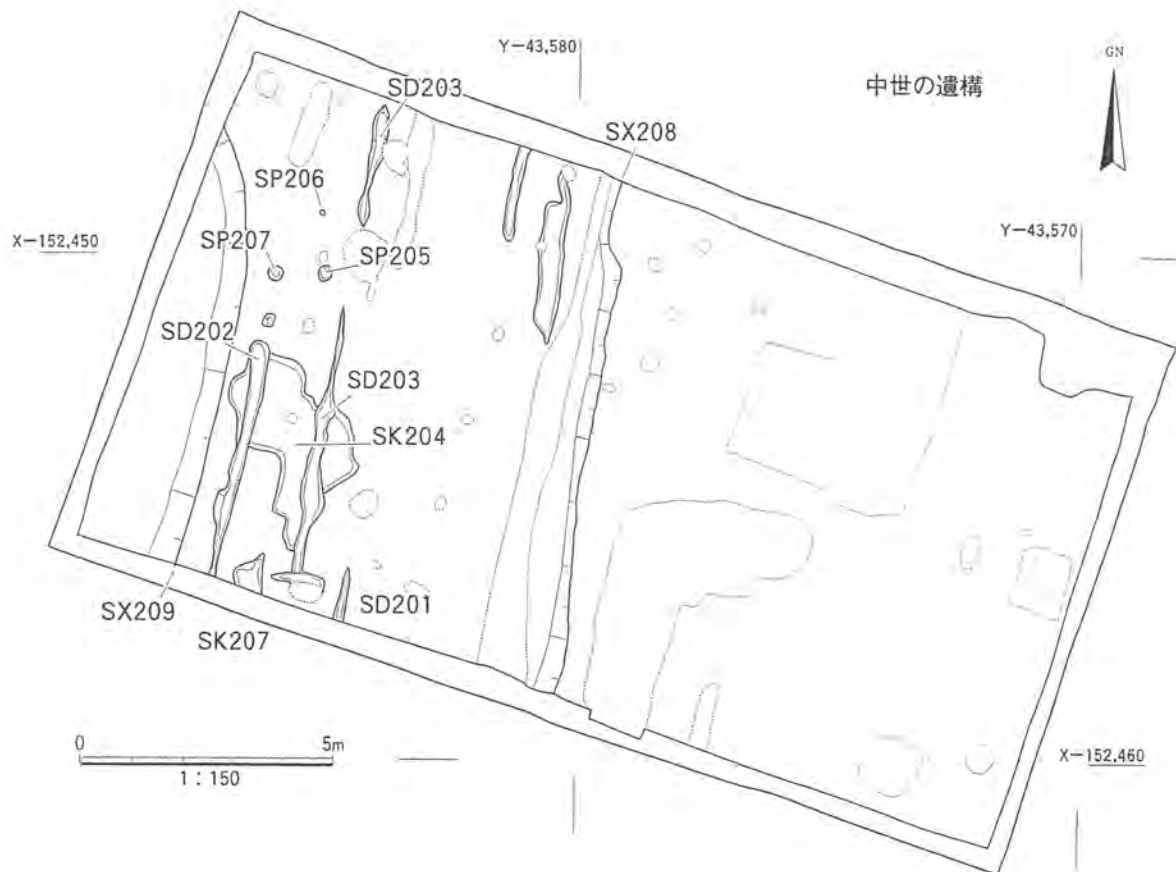


図5 検出遺構平面図

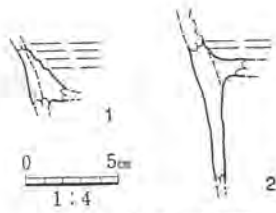


図6 出土遺物実測図
SX208(1)、第1層(2)

SK204は東西約3m、南北約4.5m、深さ0.05mほどの不整形の浅い土壌である。埋土は10YR4/6褐色砂混りシルト質粘土で、マンガンや鉄分を多く含む。遺物は出土していない。

これら2基の土壌も耕作溝の痕跡の可能性がある。

また、直径0.25~0.10mの平面円形の小穴を3基検出した(SP205~207)。いずれも深さは0.05mほどで、埋土はSK207やSK204とよく

似た10YR4/6褐色砂混りシルト質粘土である。出土遺物はない。

SX208が第2層上面まで埋った後、第2層上面の100番台の遺構は、調査区全域で検出されており、この時点で畠地は東側に拡張されたことがわかる(図5下段)。

第2層上面で検出した遺構には溝・土壌があるが、機能時の上端はすでに失われたものとみられ、もとはすべて南北方向の耕作溝であったと考えられる。方向はSX208の段にほぼ平行する。これらの溝の幅は0.2m~1.5m、深さは0.05~0.15mである。埋土は10YR4/3に黄褐色砂礫混りシルトである。これらの溝から遺物はほとんど出土せず、SD103から土師器・須恵器・瓦器の破片が、SD105から土師器・須恵器・瓦器・白磁の破片、SD107から須恵器と瓦器の破片が出土した。中世の遺構と考えられ、SX208や第2層とあまり隔たらない時期のものとして推測される。

b. 江戸時代後半の遺構と遺物(図5下段)

第2層上面で検出した遺構のうち、遺構記号の後に2桁の番号を付しているものは、すべて第1層の時期と同じ18世紀後半~19世紀前半の遺構である。溝と土壌・小穴であるが、いずれも耕作にかかわる痕跡と考えられる。

SD01は西壁にかかる南北方向の溝で、幅約0.4m、長さ1.5m以上、深さ約0.2mである。埋土は暗褐色砂礫混りシルトで、肥前磁器染付の破片などが出土した。

土壌は直径が0.3~0.7m程度の円形または楕円形で、深さは0.1mほどである。埋土は灰色粘土・シルト混り砂礫で、炭や焼土を含む。SK02から肥前磁器と近世の土師器、SK04から肥前磁器、SK06から関西系陶器などの18世紀後半~19世紀前半の遺物が出土した。

小穴は調査区全域で検出されたが、円形または楕円形で、直径が0.1~0.3m、深いものでも0.15m程度である。いずれの埋土も上記の土壌とよく似ており、灰色粘土・シルト混り砂礫で炭や焼土を含む。SP08から肥前磁器の細片が出土したのみである。

c. 包含層出土の遺物(図6)

第1層からは土師器・須恵器・瓦器などの下位層に由来する遺物とともに、瀬戸焼・肥前陶器・肥前磁器などの破片が出土した。これらは18世紀後半~19世紀前半のもので、第1層の時期もこの頃と考えられる。図6に示した土師器羽釜2は14世紀頃とみられ、下位にある第2層またはSX208に由来するものである。第2層から土師器・須恵器・瓦器・湊焼などの破片が出土したが、細片のため、図化しえたものはない。

3)まとめ

今回の調査では、「難波大道」に関連する遺構を見つけることはできなかった。しかし、検出した中世の畠地境界の段がやや北で東に振るものの、ほぼ南北方向を指し、もとの自然地形の傾斜とは異なっていることから、少なくとも中世のある段階には、自然の地形とは異なる地割があつて、段差はこの地割に沿って造られたものと考えられる。

この地割が古代までさかのぼるかどうかは現時点では不明であるが、本調査地が推定「難波大道」の中軸線から50mほどしか離れておらず、「難波大道」が推定のとおり幅のであるなら、西端がこの付近を通る可能性が高い。また、「難波大道」がより狭かったとすると、西側に平行して造られた道路などの区画に該当する可能性もあり、この段が推定「難波大道」に伴う地割を踏襲して造られたことも考えられる。

今回の調査はこの辺りの古代・中世の歴史的景観を考える上での重要な手がかりとなる可能性のあるもので、今後の調査成果と合わせてさらに検討を加えたい。

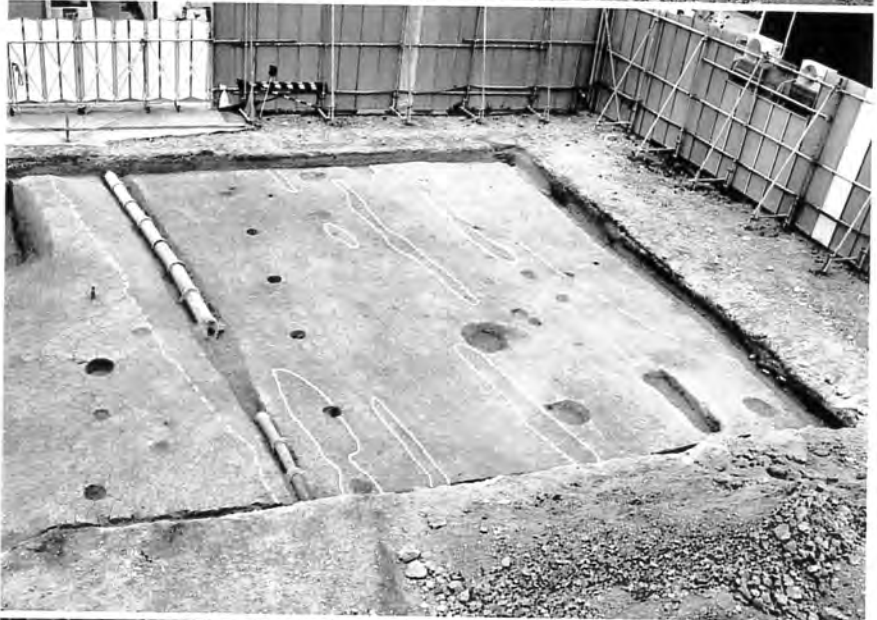
引用・参考文献

- 積山洋1991、「扶蘇邸の建設に伴う発掘調査(ND90-10)」：大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.177-183
- 1996a、「大野邸建築に伴う発掘調査(ND94-13)」：大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.107-112
- 1996b、「東住吉区で見つかった古墳時代の集落跡」：大阪市文化財協会『葦火』62号
- 高橋工1996、「宮崎邸建築に伴う発掘調査(ND94-15)」：大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.113-124
- 松本啓子1995、「伊藤忠商事(株)による建設工事に伴う発掘調査(ND93-32)」：大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.143-149

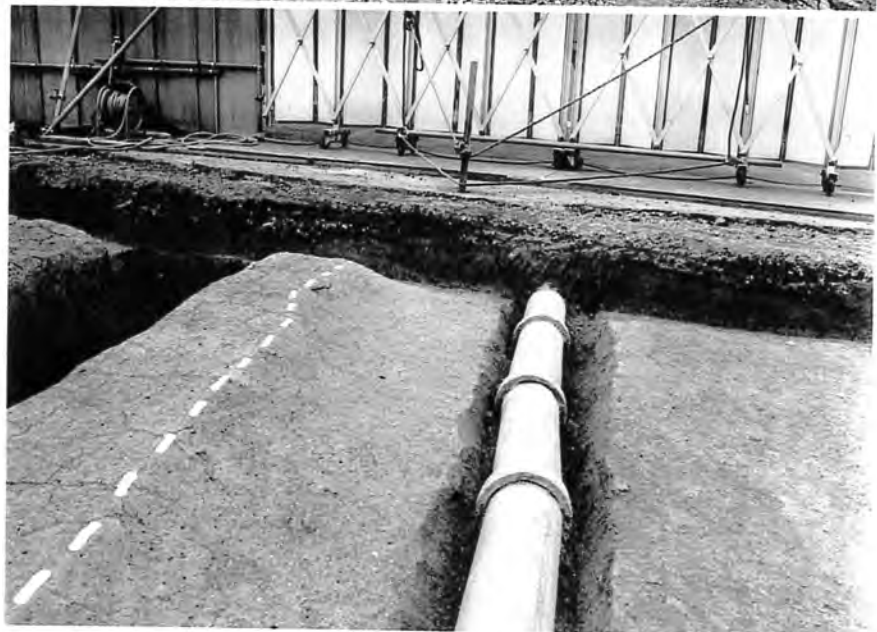
調査地全景
(北から)



西半部の遺構
(地山上面、北東から)



SX208の段
(北から)



大 阪 市 内 埋 蔵 文 化 財
包 蔵 地 発 掘 調 査 報 告 書

発行日 平成20年 3月31日

発行 大 阪 市 教 育 委 員 会
(財)大 阪 市 文 化 財 協 会

編 集 大 阪 市 教 育 委 員 会 文 化 財 保 護 課
(大 阪 市 北 区 中 之 島 1-3-20)

印 刷 和 泉 出 版 印 刷 株 式 会 社
